

仙台市文化財調査報告書第 402 集

仙 台 城 跡ほか

– 仙台市高速鉄道東西線関係遺跡発掘調査報告書Ⅷ –

2012 年 3 月

仙 台 市 教 育 委 員 会

仙台市文化財調査報告書第 402 集

仙 台 城 跡ほか

– 仙台市高速鉄道東西線関係遺跡発掘調査報告書Ⅷ –

2012 年 3 月

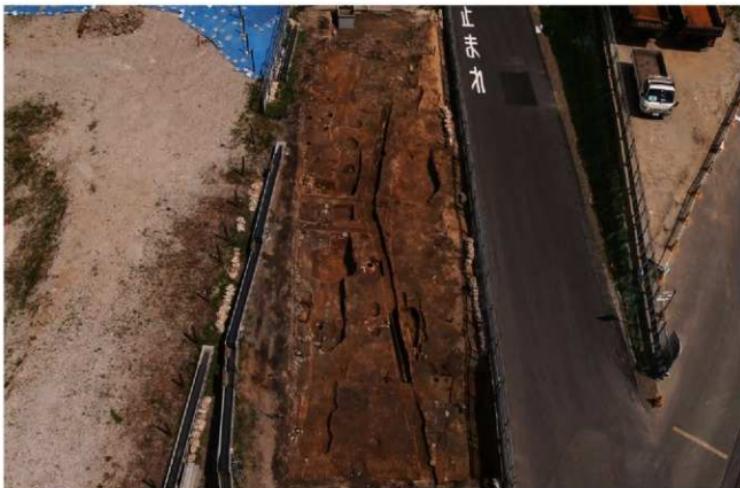
仙 台 市 教 育 委 員 会



亀岡トンネル進入路部南半IV層上面全景（南から）



亀岡トンネル進入路部南半V層上面全景（南から）



亀岡トンネル進入路部北半III層上面全景（西から）



亀岡トンネル進入路部南半IV層上面全景（西から）



扇坂トンネル部1区全景（東から）



扇坂トンネル部2区2号石垣（北東から）



扇坂トンネル部2区2号石垣（南東から）



扇坂トンネル部2区全景（西から）



扇坂トンネル部2区全景（南東から）



桜の小径 2 区全景（北西から）



桜の小径 1 区壁面（北から）



桜の小径 2 区壁面（西から）

序 文

仙台市の文化財保護につきまして、日頃から多大なご協力を賜り、まことに感謝にたえません。

さて、当市では、高速鉄道東西線事業を推進し、高速鉄道南北線や、ＪＲ、バスと連携した公共交通ネットワークを形成することにより、暮らしやすく環境にやさしい新しい都市づくりを進めております。

高速鉄道東西線の計画路線内には仙台城跡や関連した遺跡があり、さらに新しい遺跡が発見されることも予測されたことから、仙台市教育委員会では事業主体者の仙台市交通局と協議を重ね、平成 16～18 年度に試掘確認調査を実施し、その結果に基づき本発掘調査を行つてまいりました。

ここに報告いたします仙台城跡は、調査区が仙台城二の丸跡の北方に位置し、近世絵図によると伊達家家臣の屋敷地に相当します。本報告書は平成 20・21 年度の本発掘調査の成果をまとめたもので、高速鉄道東西線関係の本報告書としては 8 冊目となります。

これまで、先人たちが残してきた貴重な文化遺産を保護し、活用しながら市民の宝として、次の世代に引き継いでいくことは、これからの方々の「まちづくり」に欠かせない大切なことであると考えております。ここに報告する調査成果が地域の歴史を解き明かしていくための貴重な資料となり、広く活用され、文化財に対するご理解と保護の一助になれば幸いです。

最後になりましたが、昨年 3 月 11 日の東日本大震災では、仙台市内も大きな被害を受けました。震災から 1 年を経て、仙台市では震災からの復興に向か、「ともに、前へ仙台～3・11からの再生～」を掲げて、復興計画を進めているところです。そうした中、発掘調査及び調査報告書の刊行に際しまして、多くの方々のご協力、ご助言をいただきましたことを深く感謝申し上げ、刊行の序といたします。

平成 24 年 3 月

仙台市教育委員会

教育長 青沼 一民

例 言

1. 本書は高速鉄道東西線建設事業に伴い実施された、仙台城跡・川内 A 遺跡の発掘調査報告書である。
 2. 発掘調査は、仙台市教育委員会が国際文化財株式会社へ委託して実施した。
 3. 本書の作成は、仙台市教育委員会生涯学習部文化財課 渡部紀・工藤信一郎・水野一夫の監理のもとに、国際文化財株式会社 水上匡彦・横井奏が担当した。
 4. 本書の第 3・4・5 図の絵図の掲載にあたっては、所蔵機関の許可を得ている。
 5. 本調査の実施及び報告書の作成に際し、次の諸氏・機関よりご指導、ご教示、さまざまご協力を賜った。記して謝意を表す次第である（敬称略順不同）。
- 藤沢 敦・高木暢亮・柴田恵子（東北大大学蔵文化財調査室） 松本秀明（東北学院大学） 仙台市交通局
仙台市建設局 仙台市博物館 仙台市歴史民俗資料館 東北大大学 岩沼市教育委員会（財）齊藤報恩会
6. 発掘調査に関わる一切の資料は、仙台市教育委員会が保管している。
 7. 報告書掲載陶磁器の年代等の確認は佐藤洋（仙台市教育委員会文化財課）の協力を得た。

凡 例

1. 調査時は、調査区名称として工事工区名を使用していたが、報告書作成にあたり以下のとおりに略称した。

平成 20 年度調査

仙台城跡

扇坂トンネル部（石垣の上段）その 1 → 扇坂トンネル部 1 区

川内 A 遺跡

広瀬川橋梁右岸側橋台部（桜の小径） → 桜の小径 1 区

平成 21 年度調査

仙台城跡

扇坂トンネル部（石垣の上段）その 2 → 扇坂トンネル部 2 区

亀岡トンネル開削部（進入路部） → 亀岡トンネル進入路部

川内 A 遺跡

広瀬川橋梁右岸側橋台部（桜の小径） → 桜の小径 2 区

2. 本書の土色は、新版標準土色帖（農林水産省農林水産技術会議事務局 1998 年版）に準拠している。

3. 本書中の第 1 図は国土地理院発行の 5 万分の 1 地形図「仙台」と 1 万分の 1 地形図「青葉山」「仙台駅」を合成した。

4. 図中の座標値は日本測地系座標を使用した。座標値は 2011 年 3 月 11 日の東日本大震災前のものを使用している。

5. 本文図版等で使用した方位は真北を基準としている。

6. 標高値は、海拔高度(T.P)を示している。標高値は 2011 年 3 月 11 日の東日本大震災前のものを使用している。

7. 遺構図は 1/40 縮尺を基本とした。その他については各図のスケールを参照されたい。

8. 基本層の表記は、表土層からローマ数字を用い、遺構堆積土はアラビア数字で表記した。

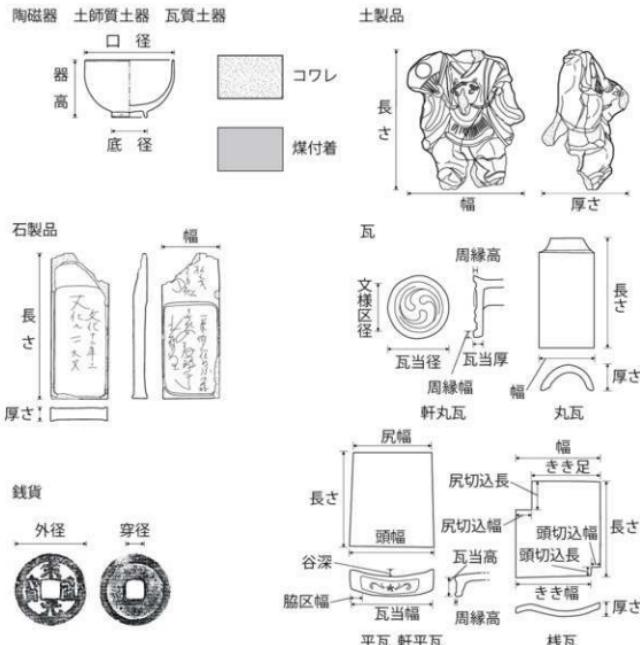
9. 遺構平面図において、■(トーン)は機能時において元位置を保っている縛を示し、裏込め、根固め石はトーンを使用していない。また、遺構断面図においては断面にかかる全ての縛をトーンで示している。これ以外のトーンが示す内容は以下の通りである。

▲▲▲▲▲ 木質残存範囲 ■■■■■ 被熱範囲 ■■■■■ 柱痕跡 ■■■■■ 地山

また、これら以外のトーンに関してはその都度文中においてその内容を記載した。

10. 遺構・遺物の登録・整理及び報告書での表示には、以下の分類と略号を使用した。

- SA：柱列跡、SB：建物跡、SD：溝跡、SE：戸戸跡、SK：土坑、SR：沢跡、P：ピット、SX：性格不明遺構
 A：縄文土器、D：土師器、F：丸瓦・軒丸瓦、G：平瓦・軒平瓦、H：その他の瓦、I：陶器・瓦質土器・土師質土器、J：磁器、K：石器・石製品、L：木製品、N：金属製品、P：土製品、X：その他の遺物
 なお、石敷遺構、橋状遺構、埋葬遺構、石垣等には略号は用いていない。
11. 遺物実測図は原則として縮尺1/3としたが、瓦は1/4、土製品は1/2、銭貨は原寸で表示した。
12. 遺物実測図において、外形線・中心線・稜線は実線、推定線は破線で、施釉範囲は一点鎖線で表した。
 中心線が一点鎖線のものは、展開し図上復元したものである。
13. 遺物観察表で陶磁器類の成形技法は、大部分がロクロ成形であるために、他の技法を記載した。法量の記載で○
 書きの数字は残存値を示している。
14. 報告書内で使用している尺・寸の長さは「1尺 = 30.3cm」、「1 寸 = 3.03cm」とした。



本文目次

第1部 はじめに

第1章 調査概要	1
第1節 調査に至る経緯	1
第2節 調査要項	1
第3節 調査概要	3
第2章 位置と環境	6
第1節 地理的環境	6
第2節 歴史的環境	7
第3章 調査方法	14
第1節 調査方法	14
1 現地調査	14
2 整理作業	14
3 遺構名称について	14
第2節 調査区グリッドの設定	15

第2部 仙台城跡

第1章 基本層序	16
第1節 亀岡トンネル進入路部	17
第2節 扇坂トンネル部	20
第2章 検出遺構と遺物	26
第1節 亀岡トンネル進入路部	26
1 V層上面検出遺構	26
2 IV層上面検出遺構と出土遺物	38
3 III層上面検出遺構と出土遺物	60
4 II層出土遺物	75
第2節 扇坂トンネル部	76
1 V層上面検出遺構と出土遺物	76
2 IV層上面検出遺構と出土遺物	119
3 III層上面検出遺構と出土遺物	162
4 II層出土遺物	193
第3章 自然科学分析	194
第1節 平成20年度自然科学分析	194
第2節 平成21年度自然科学分析	204
第4章 出土遺物と検出遺構について	217
第1節 亀岡トンネル進入路部-出土遺物について	217
第2節 亀岡トンネル進入路部-検出遺構について	223
第3節 扇坂トンネル部-出土遺物について	225
第4節 扇坂トンネル部-検出遺構と調査区東端部斜面地について	229

第5章	まとめ	238
第3部	川内A遺跡	
第1章	基本層序	239
第2章	検出遺構と遺物	241
第1節	検出遺構と遺物について	241
第2節	Ⅲ層・Ⅱ層出土遺物	244
第3章	出土遺物と検出遺構について	245
第1節	出土遺物について	245
第2節	検出した沢跡について	246
第4章	まとめ	247
第4部	過年度調査区の概要	248
参考文献		251
写真図版		253

挿 図 目 次

第 1 図	調査区位置図	3	第 33 図	SB1 建物跡平面図	39
第 2 図	河岸段丘分布図	6	第 34 図	SB1 建物跡断面図	40
第 3 図	絵図(1)	10	第 35 図	SB2 建物跡平面図	41
第 4 図	絵図(2)	11	第 36 図	SB2 建物跡断面図	42
第 5 図	安政3~6年(1856~1859) 「安政補正改革仙崎鉄道」に見られる通と名称	12	第 37 図	SD1 石組溝跡平面図・断面図	43
第 6 図	周辺道路分布図	13	第 38 図	SD2 石組溝跡平面図・断面図	44
第 7 図	グリッド設定図	15	第 39 図	SD3 石組溝跡平面図・断面図	45
第 8 図	柱状図	16	第 40 図	SD3 石組溝跡出土遺物	46
第 9 図	模式図	16	第 41 図	SD4 溝跡平面図・断面図	46
第 10 図	亀岡トンネル進入路部横断面図(1)	18	第 42 図	SD4 溝跡出土遺物	47
第 11 図	亀岡トンネル進入路部横断面図(2)	19	第 43 図	SD5 溝跡平面図・断面図	47
第 12 図	扉坂トンネル部横断面図(1)	22	第 44 図	SD7 溝跡平面図	47
第 13 図	扉坂トンネル部横断面図(2)	23	第 45 図	SD7 溝跡断面図	48
第 14 図	扉坂トンネル部横断面図(3)	24	第 46 図	SD9 布振り平面図・断面図	48
第 15 図	扉坂トンネル部横断面図(4)	25	第 47 図	SD11 溝跡平面図・断面図	49
第 16 図	V面上部遺構配置図	26	第 48 図	SD12 布振り平面図・断面図	49
第 17 図	建物跡平面図・断面図	27	第 49 図	SD12 布振り断面図・出土遺物	50
第 18 図	SD6 石組溝跡平面図	28	第 50 図	SD14 溝跡平面図・断面図・出土遺物	50
第 19 図	SD6 石組溝跡断面図・立面図	29	第 51 国	SD15 溝跡平面図・断面図	51
第 20 図	SD6 石組溝跡出土遺物	30	第 52 国	SD19 溝跡平面図・断面図	51
第 21 図	SD8 溝跡平面図・断面図	31	第 53 国	SE2 井戸跡平面図・断面図	52
第 22 国	SD10 清路平面図・断面図	31	第 54 国	SK2 土坑平面図・断面図・出土遺物	52
第 23 国	SD16 清路平面図・断面図	32	第 55 国	SK11 土坑平面図・断面図	53
第 24 国	SK6 土坑平面図・断面図	32	第 56 国	SK14 土坑平面図・断面図	53
第 25 国	SK7 土坑平面図・断面図	32	第 57 国	SK16 土坑平面図・断面図	53
第 26 国	SX6 性格不明遺構平面図・断面図	33	第 58 国	SX1 性格不明遺構平面図・断面図	54
第 27 国	SX9 性格不明遺構平面図・断面図	34	第 59 国	SX4 性格不明遺構平面図・断面図・出土遺物	54
第 28 国	SX10 性格不明遺構平面図・断面図	34	第 60 国	SX5 性格不明遺構平面図	55
第 29 国	SX11 性格不明遺構平面図・断面図	35	第 61 国	SX7 性格不明遺構平面図・断面図	55
第 30 国	1号石敷遺構平面図・断面図・出土遺物	36	第 62 国	SX7 性格不明遺構出土遺物	56
第 31 国	1号橋状遺構平面図・断面図	37	第 63 国	SX8 性格不明遺構平面図・断面図	56
第 32 国	IV層上面部遺構配置図	38	第 64 国	SX13 性格不明遺構平面図・断面図	57
			第 65 国	2・4号石列平面図・断面図	57

第 66 図 3号石列平面図・断面図	58
第 67 図 5号石列平面図	58
第 68 図 6号石列平面図	58
第 69 図 7号石列平面図・断面図	59
第 70 図 IV層出土遺物	59
第 71 図 III層上面遺構配置図	60
第 72 図 SD13 溝跡平面図・断面図	61
第 73 図 SD17 石組溝跡平面図・断面図・出土遺物	61
第 74 図 SD18 石組溝跡平面図・断面図	62
第 75 図 SD20 溝跡平面図・断面図	62
第 76 図 SD21 溝跡平面図・断面図	63
第 77 図 SE1 井戸跡平面図・断面図	63
第 78 図 SE1 井戸跡断面図	64
第 79 図 SK1 土坑平面図・断面図・出土遺物	64
第 80 図 SK3 土坑平面図・断面図	65
第 81 図 SK4 土坑平面図・断面図	65
第 82 図 SK5 土坑平面図・断面図・出土遺物	66
第 83 図 SK8 土坑平面図・断面図	66
第 84 図 SK9 土坑平面図・断面図	66
第 85 図 SK12 土坑平面図・断面図	67
第 86 図 SK13 土坑平面図・断面図	67
第 87 図 SK15 土坑平面図・断面図	67
第 88 図 SX2 性格不明遺構平面図・断面図	68
第 89 図 SX2 性格不明遺構出土遺物	69
第 90 国 SX12 性格不明遺構平面図・断面図・出土遺物	70
第 91 国 1号埋設遺構平面図・断面図・出土遺物	71
第 92 国 1号竹籠平面図・断面図・出土遺物	72
第 93 国 1号木桶跡平面図	72
第 94 国 1号木桶跡断面図	73
第 95 国 1号木箱状遺構平面図・断面図	73
第 96 国 III層出土遺物	74
第 97 国 II層出土遺物	75
第 98 国 SA4 柱跡平面図・断面図	76
第 99 国 扇坂トンネル部 I区 V層上面遺構配置図	77
第 100 国 扇坂トンネル部 II区 V層上面遺構配置図	79
第 101 国 SD3 溝跡平面図・断面図・出土遺物	81
第 102 国 SD6 布掘り平面図・断面図	82
第 103 国 SD7 溝跡平面図・断面図	83
第 104 国 SD11 溝跡平面図・断面図	83
第 105 国 SD14 溝跡平面図・断面図	84
第 106 国 SD16 溝跡平面図・断面図	84
第 107 国 SD17 溝跡平面図・断面図・出土遺物	85
第 108 国 SE1 井戸跡平面図・断面図	86
第 109 国 SK1 土坑平面図・断面図・出土遺物	86
第 110 国 SK2 土坑平面図・断面図	87
第 111 国 SK2 土坑断面図・出土遺物	88
第 112 国 SK5 土坑平面図・断面図・出土遺物	89
第 113 国 SK6 土坑平面図・断面図・出土遺物	89
第 114 国 SK10 土坑平面図・断面図	90
第 115 国 SK10 土坑出土遺物	91
第 116 国 SK12 土坑平面図・断面図	91
第 117 国 SK14 土坑平面図・断面図	92
第 118 国 SK15 土坑平面図・断面図	92
第 119 国 SK16 土坑平面図・断面図	93
第 120 国 SK19 土坑平面図・断面図	93
第 121 国 SK20 土坑平面図・断面図	94
第 122 国 SK26 土坑平面図・断面図	94
第 123 国 SK28 土坑平面図・断面図	95
第 124 国 SK33 土坑平面図・断面図	95
第 125 国 SK35 土坑平面図・断面図	96
第 126 国 SK39 土坑平面図・断面図	96
第 127 国 SK40 土坑平面図・断面図・出土遺物	97
第 128 国 SK45 土坑平面図・断面図	98
第 129 国 SK46 土坑平面図・断面図	98
第 130 国 SX4 性格不明遺構平面図・断面図	99
第 131 国 SX4 性格不明遺構出土遺物	100
第 132 国 SX5 性格不明遺構平面図・断面図	100
第 133 国 SX6 性格不明遺構平面図・断面図	100
第 134 国 SX8 性格不明遺構平面図・断面図	101
第 135 国 SX9 性格不明遺構平面図・断面図	101
第 136 国 SX10 性格不明遺構平面図・断面図・出土遺物	102
第 137 国 SX11 性格不明遺構平面図・断面図	102
第 138 国 SX18 性格不明遺構平面図・断面図	103
第 139 国 SX21 性格不明遺構平面図・断面図	103
第 140 国 SX25 性格不明遺構平面図・断面図	104
第 141 国 SX26 性格不明遺構平面図・断面図	104
第 142 国 SX27 性格不明遺構平面図・断面図	105
第 143 国 SX28 性格不明遺構平面図・断面図・出土遺物	106
第 144 国 SX29 性格不明遺構平面図・断面図	107
第 145 国 SX30 性格不明遺構平面図・断面図・出土遺物	107
第 146 国 SX32 性格不明遺構平面図・断面図・出土遺物	108
第 147 国 SX35 性格不明遺構平面図・断面図	108
第 148 国 SX36 性格不明遺構平面図	108
第 149 国 SX36 性格不明遺構断面図	109
第 150 国 SX37 性格不明遺構平面図・断面図	109
第 151 国 SX38 性格不明遺構平面図・断面図	109
第 152 国 SX43 性格不明遺構平面図・断面図	109
第 153 国 SX44 性格不明遺構平面図・断面図	110
第 154 国 SX45 性格不明遺構平面図・断面図	110
第 155 国 SX46 性格不明遺構平面図・断面図	111
第 156 国 SX47 性格不明遺構平面図・断面図	111
第 157 国 SX48 性格不明遺構平面図・断面図	111
第 158 国 SX52 性格不明遺構平面図・断面図・出土遺物	112
第 159 国 SX53 性格不明遺構平面図・断面図	112
第 160 国 SX53 性格不明遺構断面図・出土遺物	113
第 161 国 SX58 性格不明遺構平面図・断面図	113
第 162 国 SX59 性格不明遺構平面図	113
第 163 国 SX59 性格不明遺構断面図	114
第 164 国 V層出土遺物	114
第 165 国 扇坂トンネル部 I区 IV層上面遺構配置図	115
第 166 国 扇坂トンネル部 II区 V層上面遺構配置図	117
第 167 国 SA1 柱跡平面図・断面図	119
第 168 国 SB2 建物跡平面図・断面図	120
第 169 国 SD2 溝跡平面図・断面図	121
第 170 国 SD4 溝跡平面図・断面図・出土遺物	122
第 171 国 SD10 溝跡平面図・断面図	123
第 172 国 SD13 溝跡平面図・断面図	123
第 173 国 SD15 溝跡平面図・断面図	124
第 174 国 SD18 溝跡平面図	124
第 175 国 SD18 溝跡断面図・出土遺物	125
第 176 国 SE2 井戸跡平面図・断面図・出土遺物	125
第 177 国 SE6 井戸跡平面図・断面図・出土遺物	126

第 178 図 SK3 土坑平面図・断面図	127
第 179 図 SK4 土坑平面図	127
第 180 図 SK4 土坑断面図・出土遺物（1）	128
第 181 図 SK4 土坑断面図（2）	129
第 182 図 SK7 土坑平面図・断面図	129
第 183 図 SK8 土坑平面図・断面図	129
第 184 図 SK9 土坑平面図・断面図	130
第 185 図 SK11 土坑平面図・断面図	130
第 186 図 SK13 土坑平面図・断面図	131
第 187 図 SK17 土坑平面図・断面図	131
第 188 図 SK18 土坑平面図・断面図	131
第 189 図 SK21 土坑平面図・断面図	132
第 190 図 SK22 土坑平面図・断面図	132
第 191 図 SK23 土坑平面図・断面図	133
第 192 図 SK24 土坑平面図・断面図・出土遺物	133
第 193 図 SK27 土坑平面図・断面図	133
第 194 図 SK29 土坑平面図・断面図	134
第 195 図 SK30 土坑平面図・断面図	134
第 196 図 SK31 土坑平面図・断面図	134
第 197 図 SK32 土坑平面図・断面図・出土遺物	135
第 198 図 SK38 土坑平面図・断面図	136
第 199 図 SK41 土坑平面図・断面図・出土遺物	137
第 200 図 SK42 土坑平面図・断面図	138
第 201 国 SK43 土坑平面図・断面図	138
第 202 国 SX1 性格不明遺構平面図・断面図	139
第 203 国 SX1 性格不明遺構出土遺物	140
第 204 国 SX7 性格不明遺構平面図・断面図	141
第 205 国 SX12 性格不明遺構平面図・断面図	141
第 206 国 SX19 性格不明遺構平面図	141
第 207 国 SX19 性格不明遺構断面図	142
第 208 国 SX20 性格不明遺構平面図・断面図・出土遺物	142
第 209 国 SX22 性格不明遺構平面図・断面図	143
第 210 国 SX23 性格不明遺構平面図・断面図	143
第 211 国 SX31 性格不明遺構平面図・断面図	144
第 212 国 SX35 性格不明遺構平面図・断面図	144
第 213 国 SX34 性格不明遺構平面図・断面図・出土遺物	145
第 214 国 SX39 性格不明遺構平面図・断面図	146
第 215 国 SX41 性格不明遺構平面図・断面図	146
第 216 国 SX42 性格不明遺構平面図・断面図	146
第 217 国 SX49 性格不明遺構平面図・断面図・出土遺物	147
第 218 国 SX50 性格不明遺構平面図・断面図	148
第 219 国 SX50 性格不明遺構出土遺物（1）	149
第 220 国 SX50 性格不明遺構出土遺物（2）	150
第 221 国 SX50 性格不明遺構出土遺物（3）	151
第 222 国 SX51 性格不明遺構平面図・断面図	152
第 223 国 SX51 性格不明遺構出土遺物	153
第 224 国 SX54 性格不明遺構平面図・断面図	154
第 225 国 SX55 性格不明遺構平面図	154
第 226 国 SX55 性格不明遺構断面図・立面図・出土遺物	155
第 227 国 SX56 性格不明遺構平面図・断面図	155
第 228 国 SX57 性格不明遺構平面図・断面図	156
第 229 国 IV層ヒッコリ土遺物	156
第 230 国 IV層出土遺物（1）	157
第 231 国 IV層出土遺物（2）	158
第 232 国 IV層出土遺物（3）	159
第 233 国 IV層出土遺物（4）	160
第 234 国 IV層出土遺物（5）	161
第 235 国 SA2・3 杭跡部分平面図・断面図	162
第 236 国 扇坂トンネル部 1 区Ⅲ層上面遺構配置図	163
第 237 国 亂坂トンネル部 2 区Ⅲ層上面遺構配置図	165
第 238 国 SB1 建物跡平面図・断面図	167
第 239 国 SB1 建物跡断面図	168
第 240 国 SB3 建物跡平面図	168
第 241 国 SB3 建物跡断面図	169
第 242 国 SD1 溝跡平面図・断面図	169
第 243 国 SD5 溝跡平面図・断面図	170
第 244 国 SD8 溝跡平面図	170
第 245 国 SD8 溝跡断面図	171
第 246 国 SD9 溝跡平面図・断面図	171
第 247 国 SD12 溝跡平面図	171
第 248 国 SD12 溝跡断面図	172
第 249 国 SD19 石組擋壁平面図	172
第 250 国 SD19 石組擋壁断面図・立面図	173
第 251 国 SE3 井戸跡平面図・断面図	173
第 252 国 SE4 井戸跡平面図・断面図・出土遺物	174
第 253 国 SE5 井戸跡平面図・断面図・立面図	175
第 254 国 SE5 井戸跡出土遺物	176
第 255 国 SK34 土坑平面図・断面図	176
第 256 国 SK36 土坑平面図・断面図	176
第 257 国 SK37 土坑平面図・断面図	177
第 258 国 SK37 土坑出土遺物	178
第 259 国 SK44 土坑平面図・断面図	178
第 260 国 SX2 性格不明遺構平面図・断面図	179
第 261 国 SX2 性格不明遺構出土遺物（1）	180
第 262 国 SX2 性格不明遺構出土遺物（2）	181
第 263 国 SX2 性格不明遺構出土遺物（3）	182
第 264 国 SX2 性格不明遺構出土遺物（4）	183
第 265 国 SX2 性格不明遺構出土遺物（5）	184
第 266 国 SX2 性格不明遺構出土遺物（6）	185
第 267 国 SX2 性格不明遺構出土遺物（7）	186
第 268 国 SX3 性格不明遺構平面図・断面図	186
第 269 国 SX13 性格不明遺構平面図・断面図	187
第 270 国 SX14 性格不明遺構平面図・断面図	187
第 271 国 SX15 性格不明遺構平面図・断面図	187
第 272 国 SX16 性格不明遺構平面図・断面図	188
第 273 国 SX17 性格不明遺構平面図・断面図	188
第 274 国 I号石垣平面図・断面図・立面図	189
第 275 国 III層ヒッコリ土遺物	190
第 276 国 Ⅲ層出土遺物（1）	190
第 277 国 Ⅲ層出土遺物（2）	191
第 278 国 Ⅲ層出土遺物（3）	192
第 279 国 II層出土遺物	193
第 280 国 扇坂トンネル部 1 区の分析試料採取位置	194
第 281 国 扇坂トンネル部 1 区の主要花粉分布図	196
第 282 国 扇坂トンネル部 1 区の主要珪藻分布図	199
第 283 国 SK32 遺構の植物珪藻体分布図	200
第 284 国 扇坂トンネル部 1 区 No.15 蔡内出土 大型植物化石写真	200
第 285 国 扇坂トンネル部 1 区より産出した植物化石	202
第 286 国 扇坂トンネル部 1 区より産出した珪藻化石 植物珪藻体	203

第 287 図	亀岡トンネル進入路部・届坂トンネル 2 区の 試料採取地点	204
第 288 図	届坂トンネル部 2 区と亀岡トンネル進入路部の 主要花粉分佈図	207
第 289 図	届坂トンネル部 2 区と亀岡トンネル進入路部 より出現したパリノモルフと珪藻化石	213
第 290 図	届坂トンネル部 2 区から出土した種粒	214
第 291 図	届坂トンネル部 2 区・亀岡トンネル進入路部 出土木材の断面鏡写真 (1)	215
第 292 図	届坂トンネル部 2 区・亀岡トンネル進入路部 出土木材の断面鏡写真 (2)	216
第 293 図	基本層出土陶磁器産地別比率	219
第 294 図	基本層上面道構出土陶磁器産地別比率	219
第 295 図	基本層出土陶器産地別比率	220
第 296 図	基本層上面道構出土陶器産地別比率	220
第 297 図	SD3 出土軽文鏡	221
第 298 図	新宿区市谷榮王寺出土軽文鏡	221
第 299 図	主要道構変遷図	224
第 300 図	基本層出土陶磁器産地別比率	224
第 301 図	基本層上面道構出土陶磁器産地別比率	227
第 302 図	基本層出土陶器産地別比率	227
第 303 図	基本層上面道構出土陶器産地別比率	228
第 304 図	皿削出土鏡鏡	228
第 305 図	道構変遷図	231
第 306 図	道構変遷模式図	233
第 307 図	2 号石垣立面圖	235
第 308 図	地形の変遷	237
第 309 図	柱状図	239
第 310 図	桜の小径埋面圖	240
第 311 図	桜の小径道構配置図	241
第 312 図	SRI 泉跡平面圖・断面圖	242
第 313 図	SRI 泉跡出土遺物	243
第 314 図	皿削出土遺物	244
第 315 図	II 層出土遺物	244
第 316 図	近世・近代出土陶磁器種別比率	245
第 317 図	桜の小径出土遺物	246
第 318 図	川内 A 道跡汎跡変遷図	246
第 319 図	過年度調査区位置図	250

表 目 次

第 1 表	調査概要・調査成果表	1
第 2 表	屋敷洋領者一覧表	12
第 3 表	仙台藩の家格	12
第 4 表	遺跡地名表	13
第 5 表	亀岡トンネル進入路部土解観察表	17
第 6 表	届坂トンネル土解観察表	21
第 7 表	SAX 柱列跡土解観察表	81
第 8 表	SX11 性格不明道構土解観察表	103
第 9 表	SX2 建物跡土解観察表	121
第 10 表	SK8 土坑土解観察表	130
第 11 表	SK18 土坑土解観察表	132
第 12 表	届坂トンネル部 1 区区分試料のリストと項目	194
第 13 表	届坂トンネル部 1 区の花粉分析試料の 堆積物の特性 (重量%)	195
第 14 表	届坂トンネル上段より産出した花粉化石の一覧表	197
第 15 表	届坂トンネル部 1 区の珪藻分析結果一覧表	198
第 16 表	SK32 道構の植物学的分析結果一覧表	199
第 17 表	届坂トンネル部 1 区基礎 (No.15) の掘削面 堆積物出土大型鉱物化石	200
第 18 表	届坂トンネル部 2 区と亀岡トンネル進入路部に おける分析試料の堆積物の特性 (重量%)	205
第 19 表	届坂トンネル部 2 区と亀岡トンネル進入路部 より出現した花粉化石の一覧表	206
第 20 表	1 号理鏡より産出した珪藻分析結果一覧表	208
第 21 表	届坂トンネル部 2 区出土種類	208
第 22 表	届坂トンネル部 2 区出土木材の樹種	209
第 23 表	亀岡トンネル進入路部出土木材の樹種	210
第 24 表	届坂トンネル部 2 区の木製品と加工材の利用樹種	210
第 25 表	亀岡トンネル进入路部の木製品と加工材の利用樹種	210
第 26 表	亀岡トンネル进入路部遺物数量一覧表	216
第 27 表	基本層上面道構出土陶磁器産地別数量表	219
第 28 表	基本層上面道構出土陶器産地別数量表	219
第 29 表	基本層上面道構出土陶器産地別数量表	219
第 30 表	基本層上面道構出土陶磁器地別数量表	220
第 31 表	SD3 出土軽文鏡の群	221
第 32 表	新宿区市谷榮王寺出土軽文鏡の群	221
第 33 表	延享元年群表	222
第 34 表	届坂トンネル部出土遺物数量一覧表	225
第 35 表	基本層出土陶磁器地別数量表	226
第 36 表	基本層上面道構出土陶磁器地別数量表	227
第 37 表	基本層出土陶器地別数量表	227
第 38 表	基本層上面道構出土陶器地別数量表	228
第 39 表	桜の小径 2 区土解観察表 (A・B・C 断面)	240
第 40 表	桜の小径 1 区土解観察表 (D 断面)	240
第 41 表	SRI 泉跡土解観察表	243
第 42 表	桜の小径出土遺物一覧表	245
第 43 表	近世・近代出土陶磁器種別数量表	245
第 44 表	過年度調査構一覧表	250

写 真 目 次

写 真 1	岩沼市西須賀原遺跡出土眼鏡	228
写 真 2	桜の小径出土遺物	246

写 真 図 版 目 次

図 版 1	亀岡トンネル進入路部壁面 (1).....	255
図 版 2	亀岡トンネル進入路部壁面 (2).....	256
図 版 3	亀岡トンネル進入路部壁面 (3) ・V層上面遺構 (1).....	257
図 版 4	亀岡トンネル進入路部V層上面遺構 (2).....	258
図 版 5	亀岡トンネル進入路部V層上面遺構 (3).....	259
図 版 6	亀岡トンネル進入路部V層上面遺構 (4) ・IV層上面遺構 (1).....	260
図 版 7	亀岡トンネル進入路部IV層上面遺構 (2).....	261
図 版 8	亀岡トンネル進入路部IV層上面遺構 (3).....	262
図 版 9	亀岡トンネル進入路部IV層上面遺構 (4).....	263
図 版 10	亀岡トンネル進入路部IV層上面遺構 (5).....	264
図 版 11	亀岡トンネル進入路部IV層上面遺構 (6).....	265
図 版 12	亀岡トンネル進入路部IV層上面遺構 (7).....	266
図 版 13	亀岡トンネル進入路部IV層上面遺構 (8) ・III層上面遺構 (1).....	267
図 版 14	亀岡トンネル進入路部III層上面遺構 (2).....	268
図 版 15	亀岡トンネル進入路部III層上面遺構 (3).....	269
図 版 16	亀岡トンネル進入路部III層上面遺構 (4).....	270
図 版 17	亀岡トンネル進入路部IV層上面遺構 (5).....	271
図 版 18	亀岡トンネル進入路部IV層上面遺構 (6).....	272
図 版 19	亀岡トンネル進入路部IV層上面遺構 (7).....	273
図 版 20	亀岡トンネル進入路部IV層上面遺構出土遺物.....	274
図 版 21	亀岡トンネル進入路部IV層上面遺構出土遺物 (1).....	275
図 版 22	亀岡トンネル進入路部IV層上面遺構出土遺物 (2) ・遺構外出土遺物 (1).....	276
図 版 23	亀岡トンネル進入路部IV層遺構外出土遺物 (2) ・III層上面遺構出土遺物 (1).....	277
図 版 24	亀岡トンネル進入路部III層上面遺構出土遺物 (2) ・遺構外出土遺物 (1).....	278
図 版 25	亀岡トンネル進入路部III層遺構外出土遺物 (2).....	279
図 版 26	亀岡トンネル進入路部III層出土遺物 (1).....	280
図 版 27	亀岡トンネル進入路部II層土木製品 (1).....	281
図 版 28	亀岡トンネル進入路部II層出土木製品 (2).....	282
図 版 29	亀岡トンネル進入路部II層土木製品 (3).....	283
図 版 30	届坂トンネル部壁面 (1).....	284
図 版 31	届坂トンネル部壁面 (2).....	285
図 版 32	届坂トンネル部壁面 (3).....	286
図 版 33	届坂トンネル部壁面 (4).....	287
図 版 34	届坂トンネル部壁面 (5).....	288
図 版 35	届坂トンネル部壁面 (6).....	289
図 版 36	届坂トンネル部壁面 (7).....	290
図 版 37	届坂トンネル部壁面 (8).....	291
図 版 38	届坂トンネル部壁面 (9)	
	届坂トンネル部V層上面遺構 (1).....	292
図 版 39	届坂トンネル部V層上面遺構 (2).....	293
図 版 40	届坂トンネル部V層上面遺構 (3).....	294
図 版 41	届坂トンネル部V層上面遺構 (4).....	295
図 版 42	届坂トンネル部V層上面遺構 (5).....	296
図 版 43	届坂トンネル部V層上面遺構 (6).....	297
図 版 44	届坂トンネル部V層上面遺構 (7).....	298
図 版 45	届坂トンネル部V層上面遺構 (8).....	299
図 版 46	届坂トンネル部V層上面遺構 (9).....	300
図 版 47	届坂トンネル部V層上面遺構 (10).....	301
図 版 48	届坂トンネル部V層上面遺構 (11).....	302
図 版 49	届坂トンネル部V層上面遺構 (12).....	303
図 版 50	届坂トンネル部V層上面遺構 (13).....	304
図 版 51	届坂トンネル部V層上面遺構 (14).....	305
図 版 52	届坂トンネル部V層上面遺構 (15).....	306
図 版 53	届坂トンネル部V層上面遺構 (16).....	307
図 版 54	届坂トンネル部V層上面遺構 (17).....	308
図 版 55	届坂トンネル部V層上面遺構 (18).....	309
図 版 56	届坂トンネル部V層上面遺構 (19) ・IV層上面遺構 (1).....	310
図 版 57	届坂トンネル部IV層上面遺構 (2).....	311
図 版 58	届坂トンネル部IV層上面遺構 (3).....	312
図 版 59	届坂トンネル部IV層上面遺構 (4).....	313
図 版 60	届坂トンネル部IV層上面遺構 (5).....	314
図 版 61	届坂トンネル部IV層上面遺構 (6).....	315
図 版 62	届坂トンネル部IV層上面遺構 (7).....	316
図 版 63	届坂トンネル部IV層上面遺構 (8).....	317
図 版 64	届坂トンネル部IV層上面遺構 (9).....	318
図 版 65	届坂トンネル部IV層上面遺構 (10).....	319
図 版 66	届坂トンネル部IV層上面遺構 (11).....	320
図 版 67	届坂トンネル部IV層上面遺構 (12).....	321
図 版 68	届坂トンネル部IV層上面遺構 (13).....	322
図 版 69	届坂トンネル部IV層上面遺構 (14).....	323
図 版 70	届坂トンネル部IV層上面遺構 (15).....	324
図 版 71	届坂トンネル部IV層上面遺構 (16).....	325
図 版 72	届坂トンネル部IV層上面遺構 (17).....	326
図 版 73	届坂トンネル部IV層上面遺構 (18) ・III層上面遺構 (1).....	327
図 版 74	届坂トンネル部III層上面遺構 (2).....	328
図 版 75	届坂トンネル部III層上面遺構 (3).....	329
図 版 76	届坂トンネル部III層上面遺構 (4).....	330
図 版 77	届坂トンネル部III層上面遺構 (5).....	331
図 版 78	届坂トンネル部III層上面遺構 (6).....	332
図 版 79	届坂トンネル部III層上面遺構 (7).....	333
図 版 80	届坂トンネル部III層上面遺構 (8).....	334
図 版 81	届坂トンネル部III層上面遺構 (9).....	335
図 版 82	届坂トンネル部V層上面遺構出土遺物 (1).....	336
図 版 83	届坂トンネル部V層上面遺構出土遺物 (2) ・遺構外出土遺物 (1).....	337
図 版 84	届坂トンネル部V層遺構外出土遺物 (2) ・IV層上面遺構出土遺物 (1).....	338
図 版 85	届坂トンネル部IV層上面遺構出土遺物 (2).....	339
図 版 86	届坂トンネル部IV層上面遺構出土遺物 (3).....	340
図 版 87	届坂トンネル部IV層上面遺構出土遺物 (4).....	341
図 版 88	届坂トンネル部IV層上面遺構出土遺物 (5).....	342
図 版 89	届坂トンネル部IV層上面遺構出土遺物 (6)..... ・遺構外出土遺物 (1).....	343
図 版 90	届坂トンネル部IV層遺構外出土遺物 (2).....	344
図 版 91	届坂トンネル部IV層遺構外出土遺物 (3).....	345
図 版 92	届坂トンネル部IV層遺構外出土遺物 (4).....	346
図 版 93	届坂トンネル部IV層遺構外出土遺物 (5) ・III層上面遺構出土遺物 (1).....	347

図 版 94	扇坂トンネル部Ⅲ層上面遺構出土遺物 (2).....	348	図 版 103	扇坂トンネル部Ⅱ層遺構外出土遺物 (2).....	357
図 版 95	扇坂トンネル部Ⅲ層上面遺構出土遺物 (3).....	349	図 版 104	扇坂トンネル部出土木製品 (1).....	358
図 版 96	扇坂トンネル部Ⅲ層上面遺構出土遺物 (4).....	350	図 版 105	扇坂トンネル部出土木製品 (2).....	359
図 版 97	扇坂トンネル部Ⅲ層上面遺構出土遺物 (5).....	351	図 版 106	扇坂トンネル部出土木製品 (3).....	360
図 版 98	扇坂トンネル部Ⅲ層上面遺構出土遺物 (6).....	352	図 版 107	扇坂トンネル部出土木製品 (4).....	361
図 版 99	扇坂トンネル部Ⅲ層上面遺構出土遺物 (7) 遺構外出土遺物 (1).....	353	図 版 108	桜の小洋沢跡・遺物出土状況.....	362
図 版 100	扇坂トンネル部Ⅲ層遺構外出土遺物 (2).....	354	図 版 109	桜の小洋出土遺物 (1).....	363
図 版 101	扇坂トンネル部Ⅲ層遺構外出土遺物 (3).....	355	図 版 110	桜の小洋出土遺物 (2).....	364
図 版 102	扇坂トンネル部Ⅱ層遺構外出土遺物 (1).....	356	図 版 111	桜の小洋出土遺物 (3).....	365

第1部 はじめに

第1章 調査概要

第1節 調査に至る経緯

平成11年5月、仙台市教育委員会と当事業主管局であった仙台市都市整備局との間で、高速鉄道東西線建設事業に伴う遺跡の取り扱いについて、第1回目の協議が持たれた。その後、事業主管局が仙台市交通局に移され、平成15年度より仙台市教育委員会との本格的な協議が行なわれた。その結果、高速鉄道東西線事業計画予定路線内における周知の遺跡及び遺跡範囲外の状況把握のため、先ず確認調査及び試掘調査を実施し、その結果を踏まえで本調査を実施する箇所を決定し、これを基に発掘調査を順次、事業計画に沿いながら進めていくことが両者間で確認された。

以上の協議事業に基づき、平成16年度より確認調査及び試掘調査を開始した。平成16年度の対象地域は、高速鉄道東西線西部の川内地区、青葉山地区、西公園地区で、18箇所の調査区を設定し、総面積448m²の調査を実施した。平成17年度の調査対象地域は仙台城跡及びその周辺地区、川内A遺跡隣接地区、西公園地区で、22箇所の調査区を設定し、総面積421m²の調査を実施した。これを受け、仙台市教育委員会は仙台市交通局と協議を行い、仙台城跡については平成20・21年度に扇坂トンネル部（石垣の上段）、平成21年度に亀岡トンネル開削部（進入路部）を、川内A遺跡については、平成20・21年度に広瀬川橋梁右岸側橋台部（桜の小径）の発掘調査を実施した。各年度の調査成果については下表のとおりである（第1表）。

仙台城跡	調査年度	調査区名	調査面積	検出遺構	出土遺物	シリーズ番号	報告書名
平成18年度調査 (2006)	亀岡トンネル開削部		2000m ²	柱列跡・溝跡・井戸跡・土坑・道路状遺構・土手状遺構・埋物・ピット	磁器土器・石器・陶磁器・瓦・瓦質土器・木製品・土製品	342集	仙台城跡・仙台市高速鉄道東西線開削遺跡発掘調査報告書Ⅲ
平成19年度調査 (2007)	川内駅東 亀岡トンネル立坑部		3800m ²	柱列跡・溝跡・井戸跡・土坑・性格不明遺構・地盤・側状遺構・柱	陶磁器・土師質土器・瓦質土器・瓦・木製品・土製品	386集	仙台城跡・仙台市高速鉄道東西線開削遺跡発掘調査報告書Ⅴ
平成20年度調査 (2008)	扇坂トンネル部 (石垣の上段)その1		2574m ²	柱列跡・建物跡・溝跡・井戸跡・土坑・性格不明遺構・ピット	陶磁器・土師質土器・瓦質土器・瓦・金属製品・木製品・土製品	402集	仙台城跡付近・仙台市高速鉄道東西線延長部発掘調査報告書Ⅲ
平成21年度調査 (2009)	扇坂トンネル部 (石垣の上段)その2 亀岡トンネル開削部 (進入路部)		2578m ²	柱列跡・建物跡・溝跡・井戸跡・土坑・性格不明遺構・池跡・石垣・修理遺構・石敷遺構・柱状遺構・柱	陶磁器・土師質土器・瓦質土器・瓦・金属製品・木製品・土製品・土瓶器	402集	仙台城跡付近・仙台市高速鉄道東西線延長部発掘調査報告書Ⅳ
平成21年度調査 (2009)	-	-	155m ²	柱列跡・溝跡・井戸跡・土坑・ピット	磁器土器・非クロコ土器・陶磁器・土瓶器・土器・瓦・金属製品・瓦質・瓦質土器・石製品	356集	仙台城跡・北方武家屋敷第2次発掘調査報告書
川内A遺跡	調査年次	調査区名	調査面積	検出遺構	出土遺物	シリーズ番号	報告書名
平成17年度調査 (2005)	-	-	1973m ²	建物跡・井戸跡・溝跡・瓦跡・土手状遺構・ピット	磁器土器・陶磁器・瓦・土製品・木製品	312集	川内A遺跡・仙台市高速鉄道東西線延長部発掘調査報告書Ⅰ
平成20年度調査 広瀬川橋梁右岸側橋台部 (桜の小径)		145m ²	-	-	磁器土器・陶磁器	402集	仙台城跡付近・仙台市高速鉄道東西線延長部発掘調査報告書Ⅱ
平成21年度調査 広瀬川橋梁右岸側橋台部 (桜の小径)	(2009)	391m ²	瓦跡	磁器土器・陶磁器・ガラス製品	402集	仙台城跡付近・仙台市高速鉄道東西線延長部発掘調査報告書Ⅲ	

第1表 調査概要・調査成果表

第2節 調査要項

調査要項

遺跡名：仙台城跡（宮城県遺跡番号01033）

川内A遺跡（宮城県遺跡番号01558）

第2節 調査要項

所 在 地：仙台市青葉区川内地内（仙台城跡）

仙台市青葉区青葉山地内（川内A遺跡）

調査原因：高速鉄道東西線及び都市計画道路川内旗立線建設工事に伴う事前調査

調査主体：仙台市教育委員会（生涯学習部文化財課）

調査担当：文化財課調査係主任 原河英二 文化財教諭 志賀雄一（平成20年度）

文化財課調査係主任 渡部 紀 主事 加藤隆則 文化財教諭 志賀雄一（平成21年度）

調査組織：国際文化財株式会社

主任調査員 川又理枝（平成20年6月10日～平成21年3月23日・

平成21年4月9日～平成22年3月15日）

調査員 長林 大（平成20年6月10日～平成21年3月23日）

調査員 関 美男（平成21年5月18日～平成21年9月30日）

調査員 田中美穂（平成21年4月23日～平成21年7月14日）

調査員 水上匡彦（平成20年8月7日～平成21年3月23日・

平成21年4月9日～平成21年10月16日）

調査補助員 福原千恵（平成20年6月10日～平成21年2月19日）

調査補助員 横井 奏（平成21年4月9日～平成22年3月15日）

調査期間：平成20年6月10日～平成21年2月4日（平成20年度現地調査）

平成21年4月9日～平成21年11月2日（平成21年度現地調査）

平成21年2月1日～平成21年3月23日（平成20年度整理作業）

平成21年10月21日～平成22年3月15日（平成21年度整理作業）

調査面積：仙台城跡（平成20年度）扇坂トンネル部（石垣の上段）その1 （扇坂トンネル部1区） 2574m²

川内A遺跡（平成20年度）広瀬川橋梁右岸側橋台部（桜の小径） （桜の小径1区） 145m²

仙台城跡（平成21年度）扇坂トンネル部（石垣の上段）その2 （扇坂トンネル部2区） 2008m²

亀岡トンネル開削部（進入路部） （亀岡トンネル進入路部） 570m²

川内A遺跡（平成21年度）広瀬川橋梁右岸側橋台部（桜の小径） （桜の小径2区） 391m²

報告書作成要項

調査主体：仙台市教育委員会

調査担当：文化財課調査指導係主任 渡部 紀 文化財教諭 菊地貴博（平成22年度）

文化財課調査指導係主任 工藤信一郎 主事 水野一夫（平成23年度）

調査組織：国際文化財株式会社

調査員 水上匡彦（平成22年5月10日～平成23年3月11日・

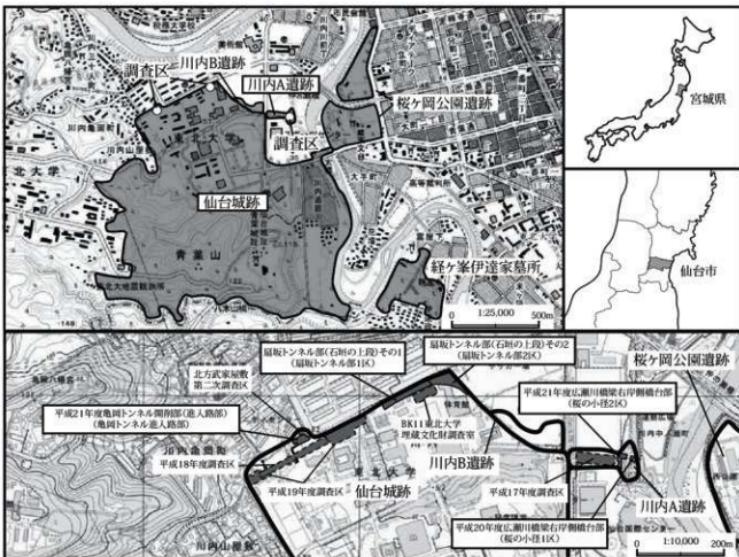
平成23年6月13日～平成23年3月9日）

調査補助員 横井 奏（平成22年5月10日～平成23年3月11日・

平成23年6月13日～平成23年3月9日）

作成期間：平成22年5月10日～平成23年3月11日

平成23年6月13日～平成24年3月9日



第1図 調査区位置図

第3節 調査概要

1 現地調査

仙台城跡

扇坂トンネル部1区は、西側に平成19年度調査の川内駅部II区が位置し、南東側に平成18・19年度東北大学埋蔵文化財調査室が行なったBK11（東北大学埋蔵文化財調査室2011）が位置する（第1図）。本調査区は東北大学の武道場や第二食堂解体に伴う機能補修のために新設されるサブアリーナ棟の工事、前述の第二食堂の解体工事の範囲・工期が共に調査範囲・工程と大幅に重複されることと、東北大学より道路と構内をつなぐ通路を常時2本確保して欲しいとの要望があり、本調査区を4つに分割して実施された。調査区周辺の環境整備および調査事務所設置後、6月17日より調査区北側から重機による表土除去を開始した。近代の堆積層最下層付近で、周辺に自然堆積層が見られたためここから人力による掘削作業に切り替えた。9月1日からは、調査区南側の表土除去を開始した。近代の便所跡や石組溝跡また井戸跡が検出されたが、近世遺構においても、溝跡や大型の遺構、ピット群を検出した。10月15日までに調査区の北・南側の調査が終了し、埋め戻しを実施した。翌10月16日から調査区西側の表土除去に着手、自然堆積層直上まで近代の整地上が確認されたため、自然堆積層直上まで重機による表土除去を行い自然堆積層上面で遺構検出・調査を行なった。調査区西側では、井戸跡や溝跡・土坑等が検出されたが、近代以降の土地造成により自然堆積層まで削平されていたため、近世遺構の検出数は僅かであった。10月

第3節 調査概要

23日には、調査区の北・南側の埋め戻しが完了。また、調査区西側も11月21日に調査を終了し11月27日に埋め戻しが完了した。12月中は、現地事務所において、遺物洗浄や遺構図・写真整理等を行ない、年の明けた平成21年1月5日より、最後に残った調査区東側の表土除去に着手、前年6月・9月に着手した調査範囲と西側を接するため、調査区西側の調査結果を基に確認面を定め重機による表土の除去を行う。調査区の西側に比べ東側では、多くのピットや溝跡、大型の土坑等を検出した。1月30日をもって全ての調査を終了、埋め戻しに着手した。2月20日まで基礎整理及び撤収作業を行ない全工程が完了した。

平成21年度の調査は、扇坂トンネル部2区と亀岡トンネル進入路部の2箇所の調査区である。扇坂トンネル部2区は西端を扇坂トンネル部1区と接し、東端は東北大學構内にある第二師団により構築されたとされる石垣までである。現地事務所の設置および調査区周辺の環境整備の後、4月24日より重機による表土の除去を調査区東側石垣付近より開始した。その際、石垣の解体も合わせて行なったが、高いところで6mを越す箇所もあり、人力による石垣解体は危険と判断し、石垣下から重機による解体作業を行なった。調査区中央付近の表土直下に、新たに南北に継ぐ石垣を検出した。この石垣を境に東側では、硬化面(Ⅲa層)を検出した、また石垣解体後の斜面地からも近世の整地層を検出した。石垣より西側でも重機による表土の除去を行なながら、並行して複数の掘削を行い複数の壁を利用して基本層の確認をした。ここでも近世の整地層が確認され、その上面で遺構検出を行った。調査区の西端は、8月19日より重機による表土除去を開始した。ここでも近世整地層が検出された。調査区東側では近代の造成により大きく削平されており、近世の遺構は僅かであった。調査区中央付近では不整形であるが大きくまとまった遺構や溝、僅かではあるがピットも検出された。調査区西端では多くの土坑やピット群、石組溝等が検出された。10月5日より一部先行して埋め戻しを開始、10月15日調査区南壁の撮影及び測量を行い調査が終了。引き続き埋め戻しを行い、10月30日に埋め戻しが終了した。基礎整理は10月21日より開始、11月30日まで現地事務所にて行い、平成21年12月1日から平成22年3月15日まで国際文化財東北支店で遺物の水洗浄及び注記、遺構図や写真的整理を行った。

亀岡トンネル進入路部は、南側に平成18年度調査区が位置し、北側は平成21年度調査区（北方武家屋敷第2次発掘調査 仙台市2010）が位置する。地下鉄工事工程の関係上工期を2期に分けて調査が行なわれた。平成21年5月20日より重機を使用して調査区南半の表土の除去を開始し、5月25日に表土除去が終了。複数の壁面で基本層を確認し、Ⅲ層を最初の確認面として調査を開始した。調査区南半では、区画溝と考えられる溝跡や大型の石組溝、住居の柱列、石組枠等多くの遺構を検出した。6月25日に調査終了、翌6月26日に機材撤収を終え調査区南側の工程を完了した。調査区北半は、地下鉄工事工程調整のため7月30日より重機による表土の除去を開始。翌7月31日表土の除去が終了し同日、遺構調査に着手した。調査区北半においても、南半で検出された大型の石組遺構の延長や埋廻遺構、井戸跡等が検出された。9月11日に調査区全景撮影および調査区壁面上土層注記を行い調査終了。9月14日に全ての撤収作業が終了し全調査工程を完了した。9月15日から10月23日まで現地調査事務所において遺物の水洗浄や写真・遺構図整理等の基礎整理を行った。

川内A遺跡

桜の小径1区は、平成20年11月10日から重機による表土の除去を開始した。近代の盛土の下からは、自然堆積層が確認されたためそこを確認面として調査を行なった。遺構は検出されなかつたが、縄文土器片が数点出土した。11月18日までに調査を終え撤収作業を完了させた。

桜の小径2区は、東側に桜の小径1区が位置し、西側に平成17年度調査区（仙台市 2007）が位置する。平成21年8月20日から調査区周辺の環境整備を行い、同日中に重機による表土の除去を開始した。調査区東側で自然堆積層を検出したため、そこを検出面とした。また、調査区南側では東側で検出した砂礫層より1枚上の自

然堆積層を検出したため、南側はその面を検出面とした。8月27日に表土の除去が終了、ここから人力による掘削に切り替えた。平成21年度調査区においても平成20年度調査区と同じく、遺構は検出されなかつたが、調査区の中央付近に沢跡を検出した。調査区南側では自然層から縄文土器の破片が数点出土した。9月14日に全ての調査及び撤収作業が終了し、翌9月15日から埋め戻し作業を開始し、9月17日埋め戻しが終了、前調査工程を完了した。基礎整理は10月19日から10月22日まで現地調査事務所において、遺物の水洗浄や図面および写真等の整理を行つた。

2 整理作業

整理作業及び報告書作成業務は、平成22年5月から2カ年にわたって行なつた。平成22年度は主に遺物接合・復元、遺物登録、遺物の実測、遺物トレース図の作成及び、遺構図の整理・点検・修正を行ない、平成23年度はそれらを基に図版作成、本文執筆をして報告書を作成した。出土遺物は内法54.5cm×33.6cm×15cmの平箱に211箱である。大部分を近世から近代の陶磁器と瓦が占め、その他に土師質土器、瓦質土器や杭・柱材・板材等を主体とした木製品、銭貨等の鉄製品が見られた。また少量ではあるが、縄文土器の破片や土師器の破片も見られた。出土遺物は水洗浄・注記した後、取り上げ番号毎に内容を確認し、遺物台帳に記載した。陶磁器・土師質土器・瓦質土器・瓦等は器種・器形・文様等により分類し接合を行つた。接合した後さらに産地別に分類し、取り上げ番号毎にそれぞれの破片数を集計した。また、産地・時期が判別でき、遺構や土層の性格が判断できるもの等について抽出し、実測・写真撮影のために破損箇所に樹脂を充填して補強・復元を行なつた。金属製品は付着している泥土や錆を落とし、陶磁器類と同様に分類・集計・抽出を実施した。木製品は洗浄後水漬けして保存し、器種・形状等で分類し、加工痕の見られるものについて抽出した。抽出遺物については登録をし、写真撮影を行つた。

遺構についても現場で計測・作成された遺構図面を確認し、検出面・堆積土・出土遺物等を確認してその帰属年代・性格を検討し、遺構図の作成を行なつた。

第2章 位置と環境

第1節 地理的環境

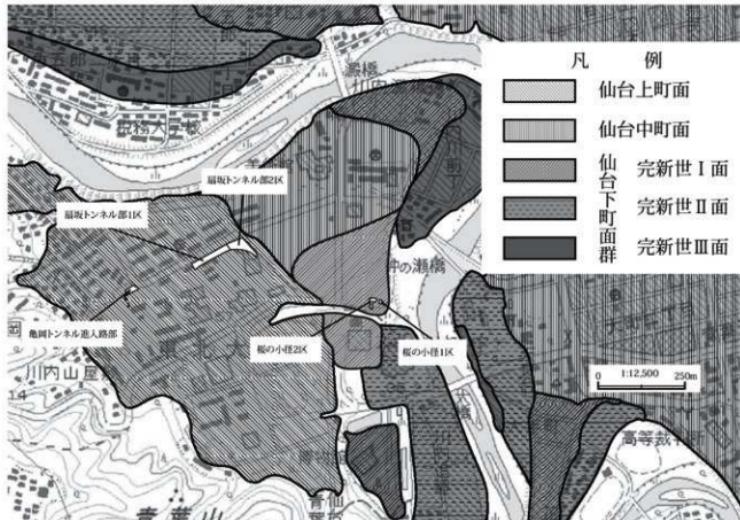
仙台城跡

仙台城跡は仙台市青葉区川内に所在する。本調査区（扇坂トンネル部・亀岡トンネル進入路部）は広瀬川の蛇行と浸食によって形成された青葉山から北東に張り出す緩く傾斜した仙台上町面に立地し、仙台城二の丸（東北大學川内キャンパス）の北西部にある。北側は約300mで広瀬川に至る（第2図）。

調査地の標高は亀岡トンネル進入路部で約65.5m、平成21年度調査区石垣付近で56.5mを測り、高低差約9mの傾斜地に位置している。この東北大學構内と東北大學グラウンドを分ける近代に造られた石垣付近が、仙台上町面と仙台中町面の段丘崖部分に当たる。

広瀬川の形成した河岸段丘は上位より青葉山面群・台ノ原面・仙台上町面・仙台中町面・仙台下町面（完新世Ⅰ面～Ⅲ面）の順に7面に区分される。段丘面の形成時期は、台ノ原面：約10万年前、仙台上町面：約2.6万年前、仙台中町面：約1.6万年前、仙台下町面（完新世Ⅰ面）：約9100～9500年前、仙台下町面（完新世Ⅱ面）：約2010年前とされている。また、仙台下町面（完新世Ⅲ面）形成時期については完新世Ⅱ面の形成から近世期の間に形成されたものと考えられる。（松本・熊谷2010）。

平成21年度仙台城跡（扇坂トンネル部）では、仙台上町面の段丘疊層を石垣付近で確認している。



第2図 河岸段丘分布図（松本・熊谷2010の図を一部改変して使用した）

川内A遺跡

川内A遺跡は仙台市青葉区青葉山に所在する。桜の小径1・2区は、広瀬川の蛇行と浸食により形成された青葉山から北東に張り出す仙台下町面群完新世Ⅰ面に立地し、調査区の標高は1区の東端部が約36.5mで、2区の南西側が約37.4mで、高低差約0.9mに位置する（第2図）。仙台城二の丸（東北大大学川内キャンパス）の北東、国際センターの北にあたり、1区の東側には広瀬川の影響により形成されたと思われる段丘崖がある。また、両調査区の南側には千貫沢が流れ、急峻な崖が形成されている。

第2節 歴史的環境

仙台城跡

亀岡トンネル進入路部及び扇坂トンネル部1・2区は、仙台城跡の遺跡範囲内にあり、当該遺跡の北辺に位置する。西方の丘陵には縄文時代を主とする青葉山B遺跡、青葉山E遺跡（第6図-21・22）があり、南東には経ヶ峯伊達家墓所（第6図-5）や茂ヶ崎城跡（第6図-10）がある。その丘陵付近には愛宕山横穴墓群A地点、愛宕山横穴墓群B・C地点、大年寺山横穴墓群（第6図-14・15・16）が所在する地域である。

仙台藩初代藩主伊達政宗は、慶長5年（1600）千代城のある青葉山の縄張りを行なう。その際、「千代」の名を「仙台」と改める。慶長6年（1601）より普請が開始された。本丸の中心となる大広間が完成したのが慶長15年（1610）のことである。二の丸の普請は、二代目藩主忠宗により寛永15年（1638）に開始した。用地は政宗の四男宗泰の屋敷が有った場所に造営される事となった。二の丸完成後は、それまで本丸で行なわれていた藩政や諸儀式のほとんどが二の丸へと移され、藩主の居所も二の丸に移された。二の丸の北側には、道を挟んで西屋敷があつた。ここは、政宗の長女五郎八姫が元和6年（1620）から死去する寛文元年（1661）まで居住地として使用していた。四代目藩主綱村の時代に、大規模な増改築が行なわれてこの西屋敷の敷地も二の丸中奥として取り込まれていった。また、文化元年（1804）には落雷に遭いこれが原因で出火し、二の丸の大部分を焼失するが文化6年（1809）には復興して、その後も藩政の中核として幕末まで機能した。

仙台城及びその周辺の屋敷割に関して、当時の状況を知り得るものとして正保2・3年（1645・1646）『奥州仙台城絵図』から明治26年（1893）『仙台市測量全図』まで15枚の絵図（第3図-1～・第4図-15）がある。現在確認されているもので最古のものは正保2・3年（1645・1646）に製作された『奥州仙台城絵図』（第3図-1）である。この絵図で本丸は「本丸山城」と記載され、その西側には「二の丸」、北隣に「西屋敷」が確認出来る。仙台城の北側には武家屋敷と記載されており、家臣の屋敷が広がっていた。亀岡トンネル進入路部及び扇坂トンネル部1・2区は、この家臣の屋敷が広がる一角に当たっていると考えられる。

近年、本調査区周辺において発掘調査が行われ、それら発掘調査の成果等をもとに調査位置の復元が試みられている。これら調査成果を参考に、本調査区が絵図に描かれている武家屋敷の、およよそどの位置に当たるのか考えてみたい。まず亀岡トンネル進入路部であるが、東北大大学埋蔵文化財調査室調査報告1（東北大大学埋蔵文化財調査室 2011）において、絵図に描かれている通で現在もおおよそ踏襲されている通を数本抽出している。その中で本調査区周辺において現在でも踏襲されていると推定される通に千貫沢の北側を沿って通っている「筋違橋通」がある。（第5図）また、復元が試みられている通で、南北に通る「大堀通」とこれに並行して南北に通る「裏下馬通」がある。これらの通は「筋違橋通」に南端で接する通である。亀岡トンネル進入路部の南には平成18年度調査区（仙台市2009）が位置する。平成18年度調査区（仙台市2009）では通跡は検出されなかつたが溝跡や池跡が検出されており、安政3～6年（1856～1859）『安政補正改革仙府絵図』（第5図）で見られる「大堀通」に面する「亀岡御殿」の敷地内に位置していると推定している。本調査区においては、建物跡や池跡、石組溝等が検出されているが、通跡や道に伴うであろう側溝跡等は検出されておらず、居住空間内と考えられることから、亀

第2節 歴史的環境

岡トンネル進入路部は「安政補正改革仙府絵図」(第5図)における亀岡御殿の敷地内的一部分に位置すると推定される。

扇坂トンネル部1・2区は、平成19年度調査区の東側に位置する。平成19年度調査区は周辺調査区の成果や通の推定復元等から、調査区東端を「裏下馬通」付近とし、「亀岡通」と「中ノ坂通」の間を調査範囲と推定している(仙台市2011)。扇坂トンネル部1・2区では、溝跡や建物跡等の検出はあったが通跡等の遺構は検出されなかった事から、屋敷の敷地内と考えられる。以上の事から本調査区は、「亀岡通」と「中ノ坂通」の間に位置していると推定される(第5図)。

両調査区の推定される範囲において、どのような家格の家臣が屋敷地を拝領していたのか、絵図を元に凡そその変遷を辿ってみる。ただし、家格及び知行不明の者に関しては表掲載のみとした(第2表)。亀岡トンネル進入路部では、寛文4年(1664)の「仙台城下絵図」(第3図-2)から元禄4・5年(1691～1692)の「仙台城下五釐掛図」(第3図-6)に見られる拝領者は、永沼作左衛門(召出)、成田作太夫(広間)、吉田長太夫(虎之間)、吉田寛左衛門(虎之間)、遠山帯刀(家格不明 200貫)。寛文4年の「仙台城下絵図」(第3図-2)から元禄4・5年(1691～1692)の「仙台城下五釐掛図」(第3図-6)まで凡そ屋敷割りに大きな変化は見られない。享保9年(1724)「仙台城下絵図」(第3図-7)には、伊達肥前(一門宮床伊達)、泉田(一家)が見られ、宝曆10年～明和3年(1760～1766)「仙台城下絵図」(第3図-8)には大町将監(一族)、天明6年～寛政元年(1786～1789)(第4図-9)では泉田大隈(一家)が見られる。享保9年「仙台城下絵図」(第3図-7)以降家格は平士から一門・一家・一族の上位家格の者にかわっており、屋敷割りも変化が見られる。安政3～6年(1856～1859)(第4図-10)では、拝領者名ではなく「亀岡御殿」と記載されているのが見られる。ここには、十三代藩主伊達慶邦の母である栄心院や、十三代藩主伊達慶邦の正室延寿院が居住している。明治3年(1870)には、伊達慶邦の養女である徳子が居している。明治4年(1871)に仙台城は、明治政府の兵部省の管轄となった。明治8年(1875)の「仙台郡仙臺町地引圖」(第4図-12)では、通はそのままであるが細かい屋敷割りは全て消えてその代りに新しく区別された区名が記載されている。本調査区推定範囲には、第五小區ノ三に位置する鎮台病院が確認出来る。明治13年(1880)「宮城懸仙臺區全圖」(第4図-13)では勘業試験場が見られる。この絵図でも、通は変化していない。明治15年(1882)の「懸臺區及近傍村落之圖」(第4図-14)では、武家屋敷の有ったところには陸軍省用地と記載されている。明治26年(1893)「仙台市測量全図」(第4図-15)では、「大堀通」と「川内三十人丁通」が繋がる箇所がそれ以前では沢の直ぐ南側で鍵の手状に繋がっていたのが、沢から南側に大分離れた所で繋がっているのが確認出来る。第二師団への改編に伴い調査区周辺の用地改修を行った事が見て取れる。戦後は、進駐米軍総司令部(略称GHQ)が駐留し、昭和32年(1957)に返還された後は、東北大學川内キャンパスとなり現在に至る。

次に、扇坂トンネル部調査区推定位置の変化を辿ってみる。寛文4年の「仙台城下絵図」(第3図-2)から寛文8・9年の「仙台城下絵図」(第3図-3)では、「亀岡通」側には、米山兵左衛門(中之間)、今村善太夫(家格不明 30貫23文)、入江左太夫(虎之間)で、「中ノ坂通」側には、渋川助太夫(虎之間)、黒沢勘右衛門(虎之間)、望月正太夫(虎之間)となっており、概ね平土となっている。延宝6～8年の「仙台城下大絵図」(第3図-4)では「亀岡通」には鈴木弥左衛門(召出)、新妻勘兵衛(虎之間)、新妻求馬(中之間)、入江佐助(虎之間)で、「中ノ坂通」には田村彦八(虎之間)、斎藤吉兵衛(虎之間)、望月内記(虎之間)が見られる。次に延宝9年～天和年間「仙台城下絵図」(第3図-5)では、「亀岡通」側には新妻求馬(中之間)で、「中ノ坂通」には、永沼五郎右衛門(着座)黒沢勘右衛門(虎之間)が見られる。ここでも主に平土が多く見られる。元禄4・5年の「仙台城下五釐掛絵図」(第3図-6)では、「亀岡通」には朽木元佐(虎之間)、塙喜三郎(虎之間)、牛田三之丞(虎之間)、渋川助太夫(虎之間)が見られ、「中ノ坂通」には田村数衛門(虎之間)、望月庄太夫(虎之間)が見られる。ここでは、全て平土の者たちである。享保9年「仙台城下絵図」(第3図-7)では、「亀岡通」には白石喜三郎(虎之間)、

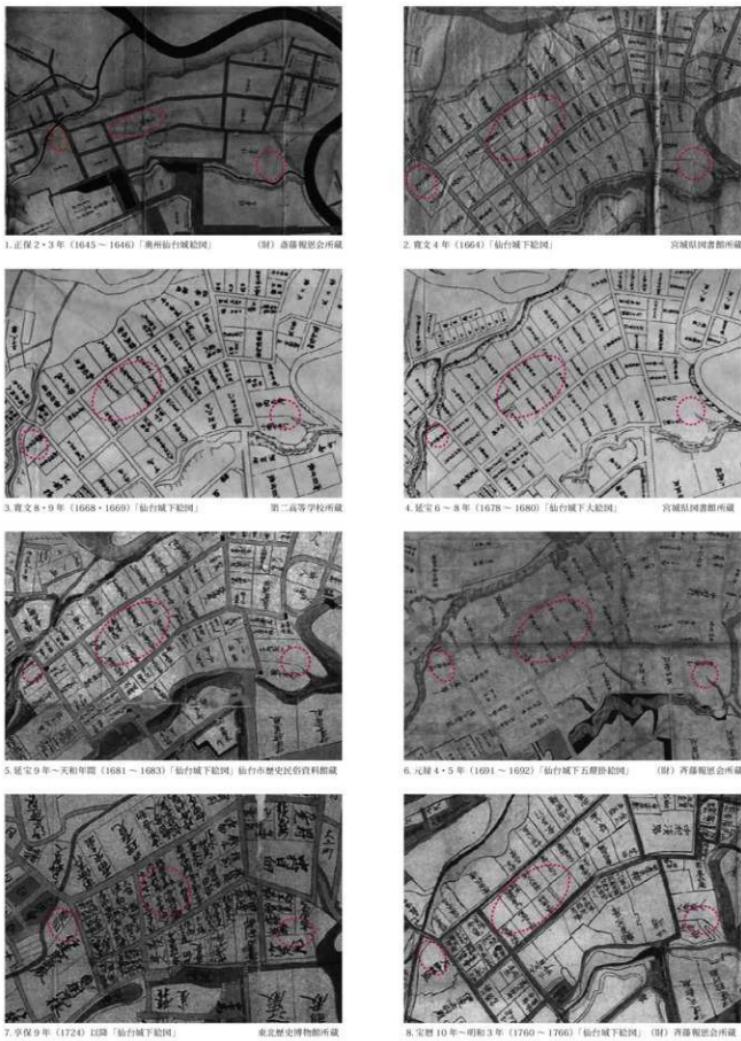
鶴田正兵衛（虎之間）が見られ、「中ノ坂通」には佐々木左七郎（虎之間）、大町出雲（着座）、望月伸右衛門（虎之間）が見られる。この頃も、主に平士が主体である。宝暦 10 年～明和 3 年の「仙台城下絵図」（第 3 図-8）では、「亀岡通」側に松本継殿右衛門（着座）、が見られ、「中ノ坂通」側には沼部左太郎（召出）、波部源助（虎之間）が見られる。天明 6 年～寛政元年の「仙台城下絵図」（第 4 図-9）では、「亀岡通」側に金上伝之進（召出）、山路八郎治（虎之間）、が見られ、「中ノ坂通」には木村藤馬（虎之間）、沼部陳伍（召出）、黒沢左門（中之間）が見られ、概ね平士である。安政 3 年～6 年の「安政補正改革仙府絵図」（第 4 図-10）では、「亀岡通」側に大町因幡（一族）が見られ、「中ノ坂通」側には木村皆之助（虎之間）、平賀団書（着座）、望月武之介（虎之間）が見られ、主に平士の者である。明治元年（1868）の「明治元年現状仙台城市之図」（第 4 図-11）では、図の左側に亀岡八幡神社が確認できその下に見える辺りが、本調査区推定範囲である。「宮城郡仙臺町地引圖」から「巣臺區及近傍村落之圖」（第 4 図 12 ～ 14）までは亀岡トンネル開削部進入路部のところで述べたように細かい屋敷割りは消えているが、通はそのまま踏襲されていることが確認出来る。「仙台市測量全図」（第 4 図-15）では「箭道橋通」はそのままであるが、「亀岡通」・「中ノ坂通」は消え「歩兵隊」敷地と「砲兵隊」敷地との間に新しく東西に伸びる通が造られている。扇坂トンネル部周辺も第二師団への改編に伴ない大規模な用地造成が行なわれた事が窺える。本調査区範囲も亀岡トンネル進入路部と同じく戦後は、進駐米軍総司令部（略称 GHQ）が駐留し、昭和 32 年（1957）に返還された後は、東北大學川内キャンパスとなり現在に至る。

川内 A 遺跡

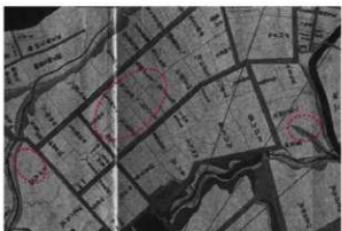
川内 A 遺跡の東には、近世武家屋敷跡を主とする川内 B 遺跡があり、更に川内 B 遺跡から東には仙台城跡の北端部が近接しており川内 A 遺跡の南側まで範囲が広がっている。広瀬川を挟んだ対岸には近世を主とする桜ヶ岡公園遺跡がある。

川内 A 遺跡の東側には「千貫沢」が流れているが、この沢は 15 枚全ての絵図（第 3 図 1 ～ 第 4 図 15）に描かれており、現代まで大きな変化がなかったと考えられる。広瀬川の蛇行により浸食されて形成された峻崖も、一直して絵図に描かれており、これも現代まで大きな変化が無かったと窺える。桜の小径 1 区はこの崖近辺での調査であり、桜の小径 2 区の調査では沢の一部を検出したことから、当該調査区は「安政補正改革仙府絵図」（第 5 図）に見られる千貫沢が流れる西側に見られる「御炭藏」の辺りであると推定される。これを元に絵図を辿っていくと、小国七衛門（虎之間）が、寛文 4 年の「仙台城下絵図」（第 3 図-2）から延宝 9 年～天和年間の「仙台城下絵図」（第 3 図-5）まで見られる。また同じく、寛文 4 年の「仙台城下絵図」（第 3 図-2）から延宝 9 年～天和元年の「仙台城絵図」（第 3 図-5）に見られる古内源太夫（着座）、古内志摩（古内源太夫と同一人物）、古内左門（着座）が見られる。元禄 4 ～ 5 年の「仙台城下五蘆掛絵図」（第 3 図-6）には、後藤孫兵衛（家格不明）が見られ、享保 9 年の「仙台城下絵図」（第 3 図-7）から安政 3 ～ 6 年の「安政補正改革仙府絵図」（第 4 図-10）では、推定範囲の凡そ半分は「御炭藏」が見られる。残りの半分には享保 9 年の「仙台城下絵図」（第 3 図-7）では高屋喜安（着座）が見られ、宝暦 10 年～明和 3 年の「仙台城下絵図」（第 3 図-8）では大條蔵人（着座）、天明 6 年～寛政元年の「仙台城下絵図」（第 4 図-9）には大條蔵人（一家）、安政 3 ～ 6 年の「安政補正改革仙府絵図」（第 4 図-10）では大條孫三郎が見られる。明治 8 年（1875）の「宮城郡仙臺町地引圖」から明治 14 年の「巣臺區及近傍村落之圖」（第 4 図-12 ～ 14）まで細かい屋敷割りは消えているが、通に変化は見られない。明治 26 年の「仙台市測量全図」（第 4 図-15）では、幅重巻が確認出来る。しかし、調査区の北を通る「川内柳丁通」と「大橋通」との繋ぎがクランク状であったのが一直線の通に変わっている。戦後は進駐米軍総司令部（略称 GHQ）が駐留し、昭和 32 年（1957）に返還された後は、青葉山公園の「桜の小径」として市民に親しまれ現在に至っている。

第2節 歷史的環境



第3図 絵図（1）



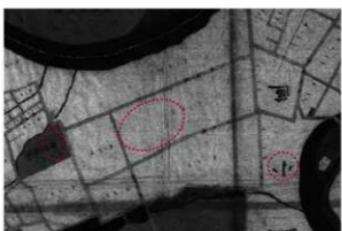
9. 天明 6 年～寛政元年（1786～1789）「仙台城下絵図」
仙台市博物館所蔵



10. 安政 3～6 年（1856～1859）「安政補正改築仙台絵図」
（輒賀精史）



11. 明治元年（1868）「明治元年現状仙台城市之図」
仙台市博物館所蔵



12. 明治 8 年（1875）「宮城郡仙塙町地図」
宮城縣公文書館所蔵



13. 明治 13 年（1880）「宮城縣仙塙町圖」
仙台市歴史民俗資料館蔵



14. 明治 15 年（1882）「鶴巣郡及近傍村落之図」
仙台市博物館所蔵



15. 明治 26 年（1893）「仙台市測量全図」
仙台「蓬華文庫」所蔵

第4図 絵図（2）

第2節 歴史的環境



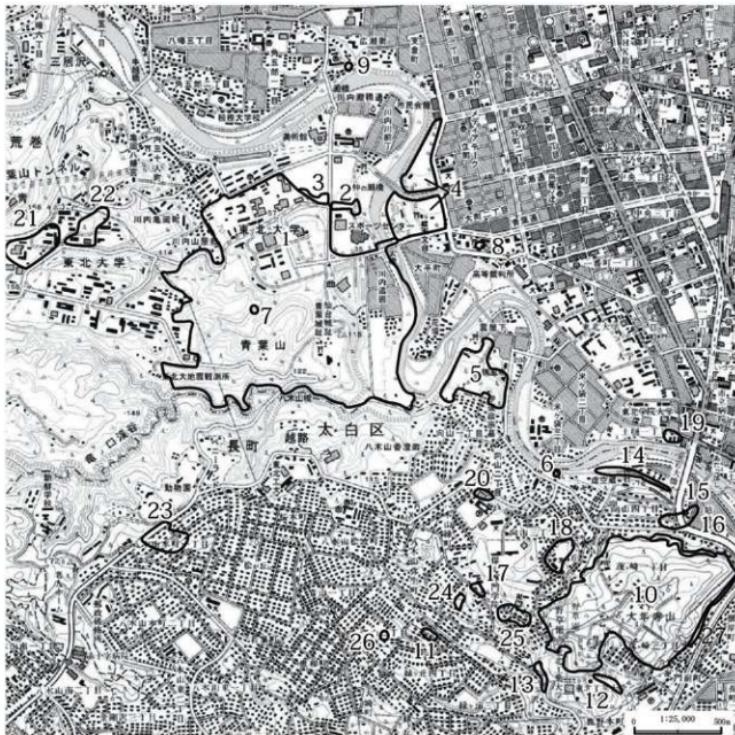
第5図 安政3～6年（1856～1859）「安政補正改革仙府絵図」に見られる通と名称
(総図・地図で見る仙台) 第一稿)

範囲	図	亀岡通を進入部たる 扇町通ルネル部（亀岡通側）	扇町通ルネル部（中ノ坂通り側）	川内人道跡
寛文4年 (1664)	図3-2	永沼作左衛門・成田作太夫 吉良太・入江左太夫	圓原有節・米山貞右衛門・今村 吉良太・吉良左衛門	山野三四郎・前川勘太夫・黒沢 吉良太・望月正太郎
寛文8～9年 (1668～1669)	図3-3	永沼作左衛門・成田作太夫	吉良左衛門・今村善太夫・入 江左太夫	小須七右衛門・古内源太夫 吉良四郎・黒沢勘南門・望月 吉良太
延宝6～8年 (1678～1680)	図3-4	永沼作左衛門・吉田長太夫	鈴木外次郎門・新瀬勘兵衛・新 井佐太郎・江住佐助	小須七右衛門・古内左門 吉田久兵衛・田村信八・鶴谷吉 兵衛・黒沢兵衛・望月内記
延宝9年～天和3年 (1681～1683)	図3-5	永沼作左衛門・吉田長太夫・古 井田左衛門	鈴木外次郎門・新瀬勘兵衛・新 井佐太郎・江住佐助	小須七右衛門・古内左門 吉田久兵衛・水江五郎右衛門 吉田久右衛門・望月内記
元禄4～5年 (1691・1692)	図3-6	鷹山寺刀削多田勝之助・吉田家 左衛門	内藤元亮・鍋高二郎・牛田三之 助・吉田善・渋谷助太夫	小須七右衛門・長浜松善・黒沢 吉良太・望月庄太夫
享保4年以降 (1724)	図3-7	伊達把綱・泉田	白石貞六・内崎勘左衛門・鶴 田正兵衛	後藤孫兵衛 佐々木久七郎・大河由雷・構内 柳安・望月仲右衛門
宝曆10年～明和3年 (1760～1766)	図3-8	大町判監	松本鍾殿右衛門・村上六兵衛 高ハシジマ	木村久馬・辻部左太郎・渡辺 義藏・大塚穂人
天明4年～寛政元年 (1768～1789)	図4-9	泉田大蔵	竹内伯助・金左伝之進・山路八 郎の高鍋酒之丞	御坂城・大塚穂人
安政3～6年 (1856～1859)	図4-10	亀岡御殿	大町判監・浜田大善・鶴小柳 一郎	木村伊之助・平賀廣樹・志賀三 太夫・望月武之介

第2表 屋敷抜領者一覧表

家柄	人数	参考
一門	11	角田石川氏・豆理伊達氏・永沼伊達氏・登米伊達氏・岩出山伊達氏・喜田伊達氏・川崎伊達氏・白川氏・三沢氏
一家	17	船貝・秋保・奥田・小原川・墨森・石井・喜田・尾木・黒木・石田山・瀬上・中村・石川・中日・豆理・斐田・舟倉
準一家	10	猪苗代・天童・松前・巖名・木宮・高森・鷲野・上田野・保土原・福原
一族	22	大町口・大町・(原沢郡)・大町・大内・西大畠・小原・西大立口・中島・(江別郡)・宮内・中島・(伊貝郡)・茂庭・道藤・佐藤・高木・片平・下船山・岩辺・大町・(吉城郡)・高誠・大松沢・石田母・坂
居老	3	岩峰のうち・番所の二家(道藤・但木・後藤)
番座	28	正月の儀式で登録し着座して蓮に拂拭する家柄
太刀上	10	正月賀詞に太刀を献上し蓬生から糸を垂讓する家柄
召し出し一番座	38	正月賀詞に召し出される家柄
召し出し一番座	51	正月賀詞に召し出される家柄
平士(100石以上)	6	
平士(500石以上)	68	
平士(100石以下)	994	
平士(100石未満)	不明	記載・資料なし
合計	1258	

第3表 仙台藩の家格 (仙台市史通史3近世1を一部改変して使用した)



第6図 周辺遺跡分布図

番号	遺跡名称	時代	所在地	性格
1	仙台城跡	中世～近世	青葉区川内・荒巣	城郭跡
2	川内 A 遺跡	縄文・近世	青葉区青葉山 2 丁目	武家所敷・散布地
3	川内 B 遺跡	縄文・近世	青葉区青葉山	武家所敷
4	桜ヶ丘公園道路	縄文・近世	青葉区桜ヶ丘公園	武家所敷・散布地
5	桜ヶ峯伊達家所跡	近世	青葉区桜ヶ丘下	居所
6	長徳寺軒跡	中世	青葉区向山 2 丁目	板跡
7	川内古墳群	中世	青葉区川内・荒巣	板跡
8	片平仙台大神宮の板跡	中世	青葉区片平 1 丁目	板跡
9	鶴不動寺文永十年板跡	中世	青葉区広瀬町	板跡
10	浅ヶ崎城跡	中世	太白区浅ヶ崎 1 丁目	城郭跡
11	青山二丁目遺跡	奈良・平安	太白区青山 2 丁目	横穴墓
12	浅ヶ崎横穴墓群	古墳・奈良	太白区二ツ沢	横穴墓
13	二ツ沢横穴墓群	古墳	太白区二ツ沢	横穴墓
14	愛宕山横穴墓群 A 地点	古墳	太白区向山 4 丁目他	横穴墓

番号	遺跡名称	時代	所在地	性格
15	愛宕山横穴墓群 B・C 地点	古墳・奈良	横穴墓	
16	大年寺横穴墓群	古墳	太白区向山 4 丁目	横穴墓
17	八木山横穴道路	弥生・奈良・平安	太白区八木山町	集落跡
18	桜ヶ丘遺跡	縄文・奈良・平安	太白区桜ヶ丘	散布地
19	土藏跡	縄文	青葉区土藏 1 丁目	散布地
20	向山高麗遺跡	縄文中期	太白区八木山町	散布地
21	青葉山 E 遺跡	縄文早・中・晚・弥生・平安	青葉区荒谷字青葉	包含地
22	青葉山 B 遺跡	縄文早・中・奈良・平安	青葉区荒谷字青葉	包含地
23	桜ヶ丘遺跡	縄文	太白区八木山町 1 丁目	散布地
24	二ツ沢遺跡	縄文	太白区八木山森生町	散布地
25	桜ヶ丘 B 遺跡	縄文	太白区桜ヶ丘・長嶋	散布地
26	酒山二丁目 B 遺跡	旧石器・縄文	太白区青山 2 丁目	散布地
27	利子山遺跡	近世	太白区浅ヶ崎 3 丁目他	土手

第4表 遺跡地名表

第3章 調査方法

第1節 調査方法

1 現地調査

調査方法は東北大大学のアスファルト・盛土層、進駐米軍総司令部（G H Q）盛土層及び近代初頭・日本陸軍第二師団整地層・盛土層を重機で除去し、以下は人力掘削により調査を実施した。扇坂トンネル部2区では、石垣の解体調査があったが石垣の高さが6mを越す箇所もあったため、人力による解体作業は危険であると判断し石垣の下より0.7バッカホーを使用して解体作業を行った。計測作業は、日本測地系座標に基づいて設置された基準点から、今回調査に使用可能な位置に新点を設置し、グリッドの設定及び、遺構の計測・遺物出土地点の計測を行なった。使用機材はトータルステーション：SOKKIA SET4・SOKKIA SRX5T32T-12、電子平板：福井コンピューター社ブルートレンドV及びCUBIC 社遺構くん 2008・2009を使用して図面の作成を実施した。写真撮影は、作業開始前、遺構検出状況、土層断面、遺物出土状況、遺構完堀状況、全景写真を35mm一眼レフカメラを使用してカラー・リバーサル及びモノクロ2種類のフィルムで撮影した。また、補助として500万画素以上のデジタルカメラで、調査写真と同一カットのほか、作業状況などを撮影し、調査日誌等に添付するなどして日々の状況を記録した。また、調査区の全景撮影は遺構検出状況及び完堀状況を、27mの高所作業車を使用して撮影を行なった。出土遺物については、調査区毎に1番から取り上げ番号を付し、遺物取り上げ台帳に調査区・出土地点（グリッド・遺構No.・層位・内容・出土年月日等）の情報を記載した。

2 整理作業

出土遺物は水洗いをし、十分に乾燥させた後、取り上げ時に記載した遺物カードの内容を注記し接合を行なった。注記内容は遺跡番号（仙台城跡：01033）・（川内A遺跡：01558）-調査次（H B 1）-調査年次（平成20年度：3）・（平成21年度：4）-調査区略号（平成20年度6月着手部：1、9月着手部：2、10月着手部：3、2月着手部：4）・（平成21年度扇坂トンネル部1区：1、扇坂トンネル部II区：2、扇坂トンネル部III区：3、亀岡トンネル進入路部1期：4、亀岡トンネル進入路部2期：5）出土地点（遺構名）-取り上げ番号の順に記載した。破片の接合にはセメダインC及びバラロイドB 72を使用した。接合作業後、遺物の器種、産地等を分類しながら破片数を数え、出土遺構や土層の性格を判断可能な主要遺物について抽出し、遺物登録を実施した。登録した遺物については、写真撮影及び遺物実測のために、モビニール、エレホン、マーライト等を用いて欠損部分の充填・復元を行なった。遺物写真は、1000万画素級のデジタル一眼レフを用いて正面のほか、見込み、高台内文様等を必要に応じて数方向からの撮影を実施した。遺物実測、外形及び断面を従来の手法で実測し、デジタルトレースする際に、並行してオルソーアイメージャ（完全正射影・深焦点撮影システム）を使用して得られた染付等の文様を画像処理して重ね合わせ遺物図を作成した。遺物のデジタルトレース及び編集にはAdobe社製の「Illustrator」を、画像処理には同社「Photoshop」を使用した。

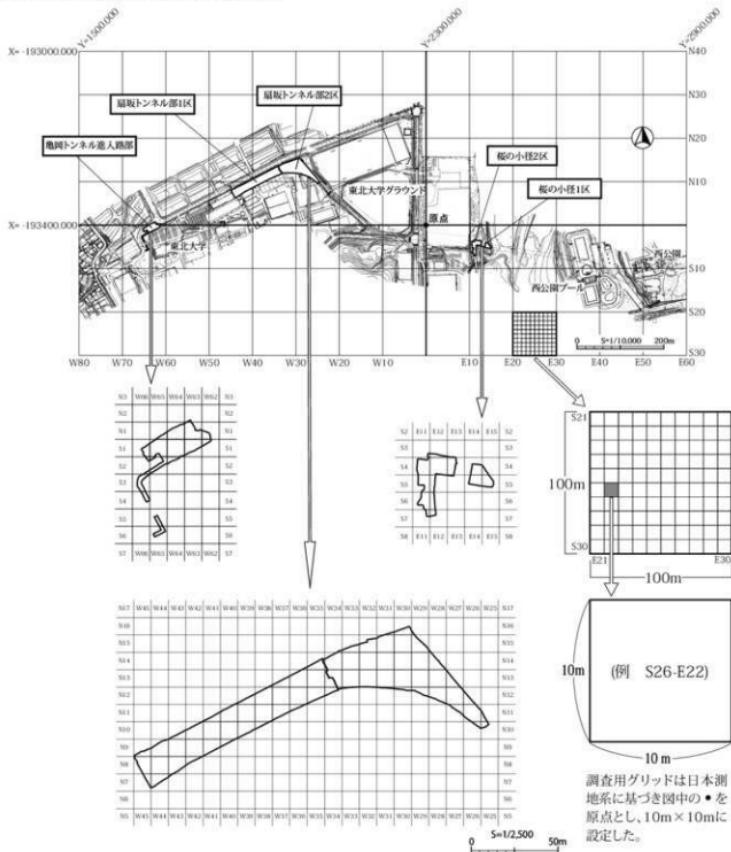
遺構平面図・断面図は、トータルステーション及び福井コンピュータ社製の電子平板「ブルートレンド」で計測・描画した図面データをAdobe社製「Illustrator」で編集・調整を行い作成した。また、遺構・遺物図版、写真図版のレイアウト及び報告書の編集作業にはAdobe社製「InDesign」を使用した。

3 遺構名称について

遺構番号は扇坂トンネル部1・2区、亀岡トンネル進入路部、桜の小径1・2区毎に遺構種別、検出順に1番から通し番号を付した。遺構の種類を表す略号は凡例に示したとおりである。

第2節 調査区グリッドの設定

高速鉄道東西線計画に係わる青葉山地区、川内地内、西公園地区の全域を網羅するグリッドが平成17年度の川内A遺跡調査時に設定されており、今回の調査でもそのグリッドに準拠して調査を実施した。日本測地系：X=193400 m、Y=2300 mの座標点を原点として、10 m単位の方眼を設定し、東西南北それぞれの方向へE1・W2・S3・N4というように方位記号と番号を付した。S-Nの方向の番号とE-W方向の番号2つを組み合わせ、N1-W6といったようなグリッド名として表記した。

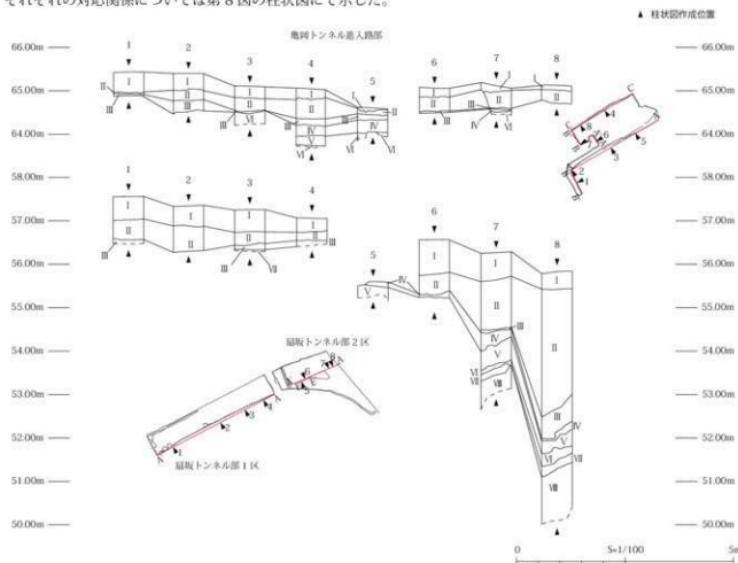


第7図 グリッド設定図

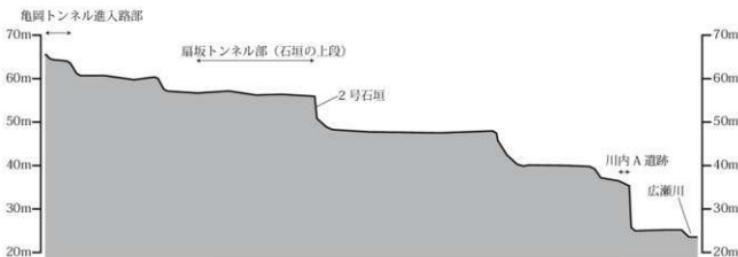
第2部 仙台城跡

第1章 基本層序

基本層序において、亀岡トンネル進入路部、扇坂トンネル部（石垣の上段）、川内A遺跡では高低差が35mあり、堆積状況が異なるため個々の調査区毎に層名をついている。以下それぞれの基本層序について調査区毎に述べる。それぞれの対応関係については第8図の柱状図にて示した。



第8図 柱状図



第9図 模式図

第1節 龜岡トンネル進入路部

本調査区南に位置する平成18年度調査区(仙台市2009)の調査成果に対比させて土層観察をした結果、基本層は大別して6層、細別22層が確認された。I層は東北大とGHQによる盛土層である。II層はII a～II e層の5層に細別される。II a層は第二師団による整地である。II b～II e層は、明治初頭と考えられる整地層である。III～V層が近世～近代初頭の整地層で、ほぼ全て西から東に向かって緩やかに傾斜している。VI層は自然堆積層である。

III層は、III a～III d層の4層に細別される。III a層は灰白色シルトで礫・砂の含有が非常に少ないシルト層で、II層の直下及び後述するIII b層の直上に堆積する。調査時において平面的な広がりは確認されず、調査区北東隅壁面でのみ検出された。III b層は黄灰色砂質シルトで、II層の直下に堆積する。一部近代・現代の造成により削平されているが、調査区南西側を除くほぼ全面において検出された。III c層は、暗灰黄色シルト質砂で前述のIII b層と同様に、調査区の広範囲において確認されたが南西側ではほぼ確認出来なかった。III d層は暗灰黄色砂質シルトで調査区西側の一帯で検出された。出土遺物は主に19世紀初頭から19世紀中頃の陶磁器が出土している。

IV層は、IV a層～IV e層の5層に細別される。IV a層は暗灰黄色シルト質砂で調査区南西部を除いた範囲で検出された。東から北西側に向かい層厚は薄くなり北西側では検出されなかった。IV b層は黄灰色シルト質砂で、調査区南東側の調査区南壁付近で僅かに検出された。IV c層はオリーブ褐色のシルト質砂層で、調査区の南西部を除いた南側の範囲において確認された。IV d層は暗灰黄色シルト質砂で、調査区の北東側でのみ分布する。IV e層はにぶい黄色砂質シルトで、シルトブロックを多く含み、上層のIV d層より硬く締まっている。調査区北東部分のみに分布する。出土遺物は、18世紀代から19世紀前半の陶磁器が出土している。

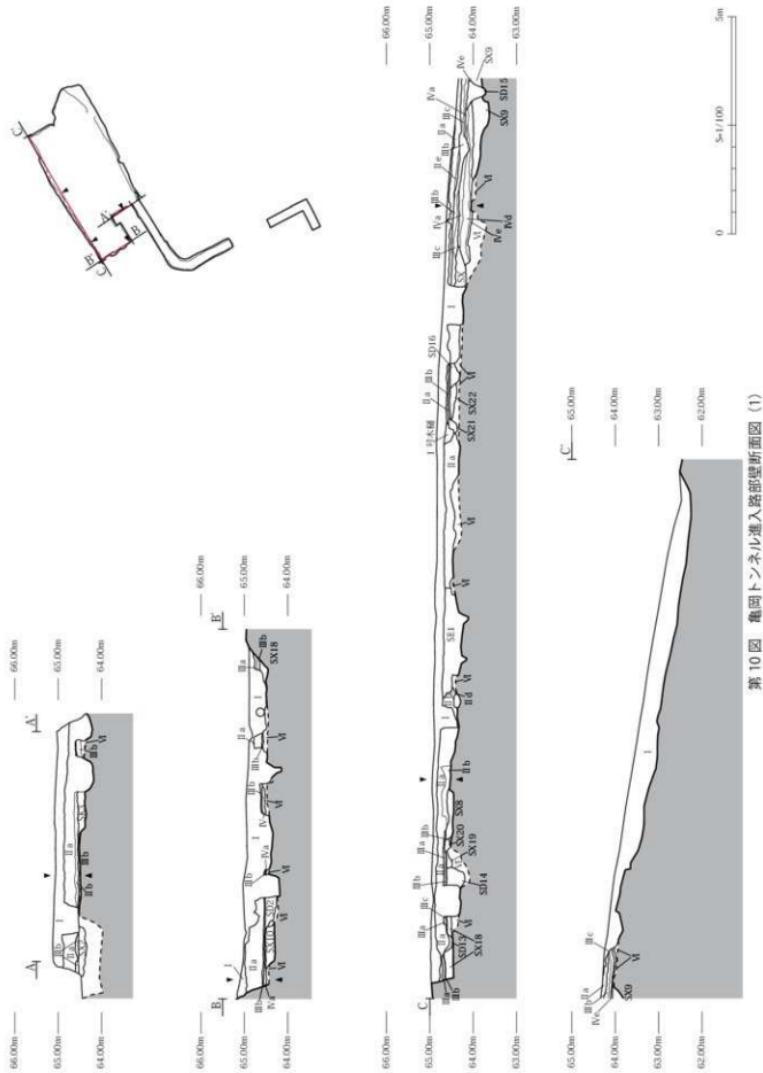
V層は、V a層～V e層の5層に細別される。V a層は灰黄色シルト質砂で、調査区東及び南側に分布する。V b層は暗灰黄色砂質シルトで、V d層の直上に堆積している。調査区南壁東端以外や調査区南東側以外において確認されなかった。V c層は黄灰色砂質シルトで、調査区南東側のみで確認された整地土で、調査区壁面においても南壁東側の一部でのみ確認された事。V d層は黄灰色砂質シルトで、V a層と同じく、調査区東および南側では確認されたが北側や西側では確認されていない。V e層は黄灰色砂質シルトで、V d層の直下に堆積しており、調査区南壁付近でのみ確認された。出土遺物は、16世紀末から18世紀前半の陶磁器が出土している。

以上のことから、亀岡トンネル進入路部においては整地層をIII層からV層の3面確認することができた。出土遺物と整地上の堆積状況から各整地面の時期は、III層 19世紀初頭～19世紀中頃、IV層 18世紀前半～19世紀前半、V層 17世紀代と考えられる。

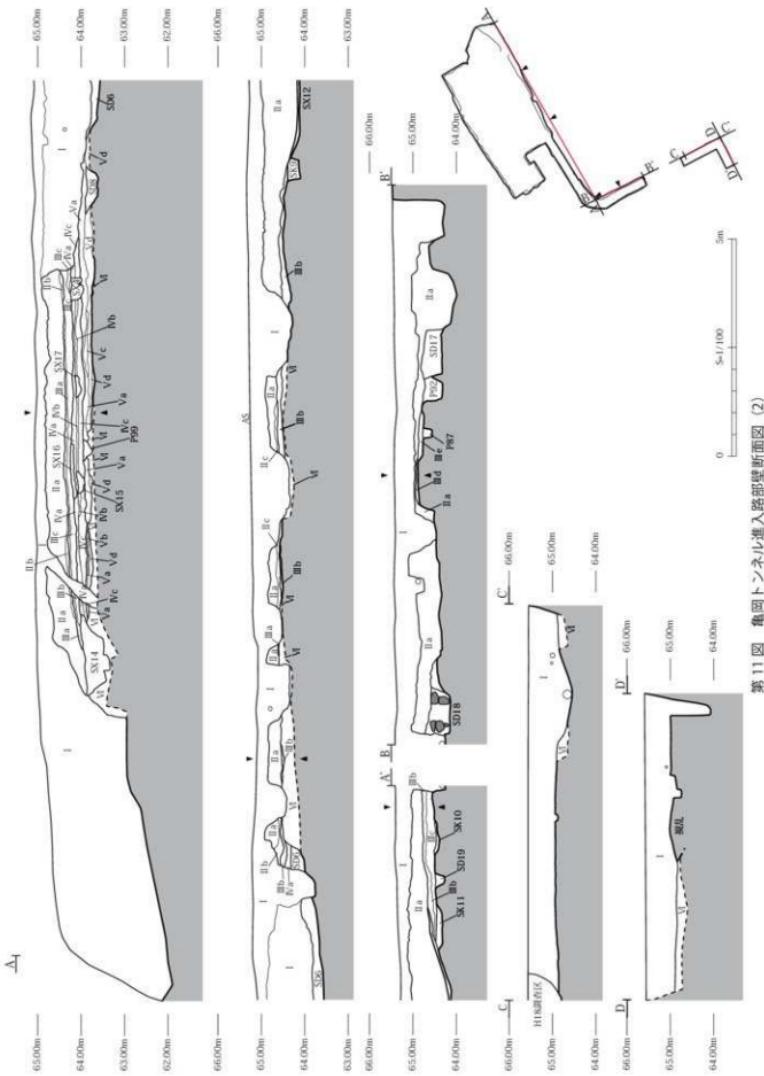
層名	土色	土質	粘性	しまり	備考	
					物理	化学
I	10YR2/2	黒褐色	シルト	なし	なし	無機多量 黄褐色土粒少量 明褐色シルトとの混合土
II a	10YR5/6	黒褐色	シルト	あり	あり	褐色土粒 径5～10cmの礫多量
II b	2.5Y5/4	黒褐色	砂質シルト	あり	ややあり	径5cmの礫少量
II c	2.5Y5/6	黒褐色	シルト質砂	なし	なし	径1～2cmのシルトブロックやや多量
II d	5Y5/1	灰色	砂質シルト	あり	ややあり	径1mmの白色粒子多量
II e	2.5Y5/1	黒褐色	シルト質砂	あり	なし	径1mmの白色粒子多量 径0.5～1cmの炭化物多量
III a	2.5Y7/1	灰褐色	シルト	あり	あり	
III b	2.5Y6/1	黄灰色	砂質シルト	ややあり	あり	径3～5mmの褐色少量 径1mmの炭化物少量
III c	2.5Y4/2	暗灰黄色	シルト質砂	なし	あり	径0.5～1cmの炭化物多量 径0.5～1cmの礫少量
III d	2.5Y5/2	暗灰黄色	シルト質砂	ややあり	あり	径3～5mmの暗褐色砂質シルトブロック少量 径5mmの礫少量
IV a	2.5Y5/2	暗灰黄色	シルト質砂	ややあり	あり	細粒砂多量 径0.5～1cmの炭化物少量
IV b	2.5Y5/1	黄褐色	シルト質砂	なし	あり	径0.5～1cmの炭化物少量
IV c	2.5Y4/3	オリーブ褐色	シルト質砂	なし	あり	径3～5cmの運搬やや多量
IV d	2.5Y5/2	暗灰黄色	シルト質砂	なし	あり	径1～5cmのシルトブロックやや多量 径1mmの炭化物少量
IV e	2.5Y6/3	にじむ黄色	砂質シルト	あり	あり	7.5Y7/3淡褐色土粒多量 径2～5cmの礫多量 0.5～2cmの炭化物少量
V a	2.5Y6/2	灰褐色	シルト質砂	なし	あり	径1mmの白色粒子やや多量
V b	2.5Y5/2	暗灰黄色	砂質シルト	あり	あり	径2mmの炭化物少量
V c	2.5Y5/1	黄褐色	砂質シルト	あり	あり	径3cmの礫少量
V d	2.5Y5/1	黄褐色	砂質シルト	あり	あり	径2～3cmのシルトブロック少量 径2cmの礫少量
V e	2.5Y4/1	黄褐色	砂質シルト	ややあり	あり	径2cmのシルトブロック少量 径1～3cmの礫少量
VI	10YR3/2	黒褐色	シルト	あり	あり	[白色砂粒]

第5表 亀岡トンネル進入路部土層観察表

第1節 亀岡トンネル進入路部



第10図 亀岡トンネル進入路部垂直断面図(1)



第11図 鹿児トンネル進入路部壁断面図(2)

第2節 扇坂トンネル部（石垣の上段）

これまでの試掘調査の成果と対比させた結果、基本層は大別して8層、細別41層が確認されている。I層は東北大及びGHQによる盛土である。II層は第二師団の盛土でIIa層～IIi層の9層に細別される。主体となっている盛土はIIa層黄褐色シルトと、IIb層黄灰色シルト質砂の2層である。IIa層は主に扇坂トンネル部2区に分布する。IIb層は主に扇坂トンネル部1区に分布する。

III層はIIIa層～IIIm層の13層に細別される。IIIa層は褐灰色シルトで、非常に硬く締まっている。扇坂トンネル部2区東端の2号石垣から、調査中央付近で検出された1号石垣との間でのみ検出された。IIIb層は黒褐色砂質シルトである。IIIc層は、黄褐色シルト質砂で礫が多量に混じっている。このIIIb層とIIIc層は、分布範囲が重なっている。IIIf・IIIi・IIIl層は、調査区東端の斜面に堆積しており、トレンチ1では、これらの層の上にIIIa層が堆積しており、IIIf・IIIi・IIIl層が敷設された後にIIIa層によって整地されている事が窺える。出土遺物は主に19世紀前半～19世紀中頃の陶磁器が出土している。

IV層は、IVa層～IVe層の5層に細別される。IVa層は黒褐色砂質シルトで、扇坂トンネル部2区東端斜面にて確認出来る。IVb層は、にぶい黄褐色砂質シルトで調査区ペルト1のみで確認出来る。IVc層は、にぶい黄褐色砂質シルトで扇坂トンネル部2区中央から西端まで広く確認出来る。IVd層はにぶい黄褐色砂質シルトで部分的に確認できる。出土遺物は、主に18世紀後半～19世紀代の陶磁器が出土している。

V層は、Va層～Vd層の4層に細別される。Va層ににぶい黄褐色シルトは調査区ペルト1及びトレンチ1・2で確認出来たが、その直下に堆積するVb層ににぶい黄褐色シルトは、調査区ペルト1及びトレンチ1で確認出来たがトレンチ2では確認されなかった。Vc層は、褐灰色シルトで扇坂トンネル部2区中央から西側まで広い範囲で確認された。また同じく、Vc層直下に堆積するVd層ににぶい黄褐色シルトも扇坂トンネル部2区中央から西側に広く確認出来る。扇坂トンネル部2区中央から東側の平坦面はIII層直下がVII層のため判然とはしないが、調査区中央付近で検出された1号石垣を境に斜面のVa・b層と石垣から西側のVc・d層とに分けられる。出土遺物は、主に18世紀前半～19世紀初頭の陶磁器が出土している。

VI層は、VIa層～VIb層の2層に細別され、扇坂トンネル部2区の斜面でのみ確認出来る層である。VIa層は黒褐色シルトで調査区ペルト1及びトレンチ1・2の壁面全てにおいて確認出来るため斜面全体に広がる層であると考えられる。VIb層は黒褐色シルトで1号石垣付近に分布する。礫の混入はVIa層よりも多いことから分層した。

VII層は、VIIa層～VId層の4層に細別される。VIIa層は扇坂トンネル部2区の斜面でのみ分布する。VIId層は1号石垣付近でのみ分布するが、VIIa層より礫の含有量が多いことから分層した。VIIc層は扇坂トンネル部1・2区において分布するが、1区においては大部分が近代の造成により削平されている。

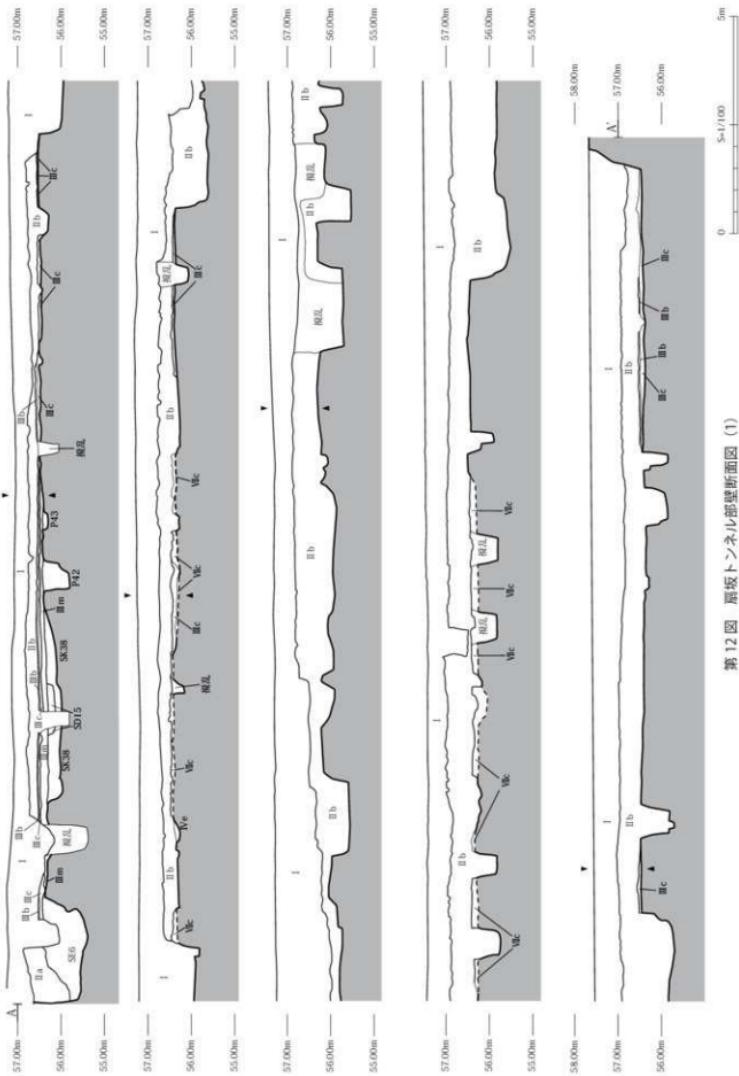
VIII層は、VIIa層～VIIc層の3層に細別される砂礫層である。VIIa層ににぶい黄褐色砂礫は、トレンチ2でのみ見られる。VIIb層は、黄褐色砂礫で調査区ペルト1でのみ見られる。VIIa層直下及び後述するVIIc層直上に堆積しており、VIIa層とVIIc層の漸移層と考えられる。VIIc層黄褐色砂礫層は扇坂トンネル部1・2区において確認出来る。

扇坂トンネル部ではIII層～V層までの3面の整地層を確認出来た。出土遺物と確認された整地土の堆積状況から各整地面の時期は、III層 19世紀中～19世紀後半、IV層 19世紀前半～19世紀中、V層 18世紀代～19世紀初頭と考えられる。

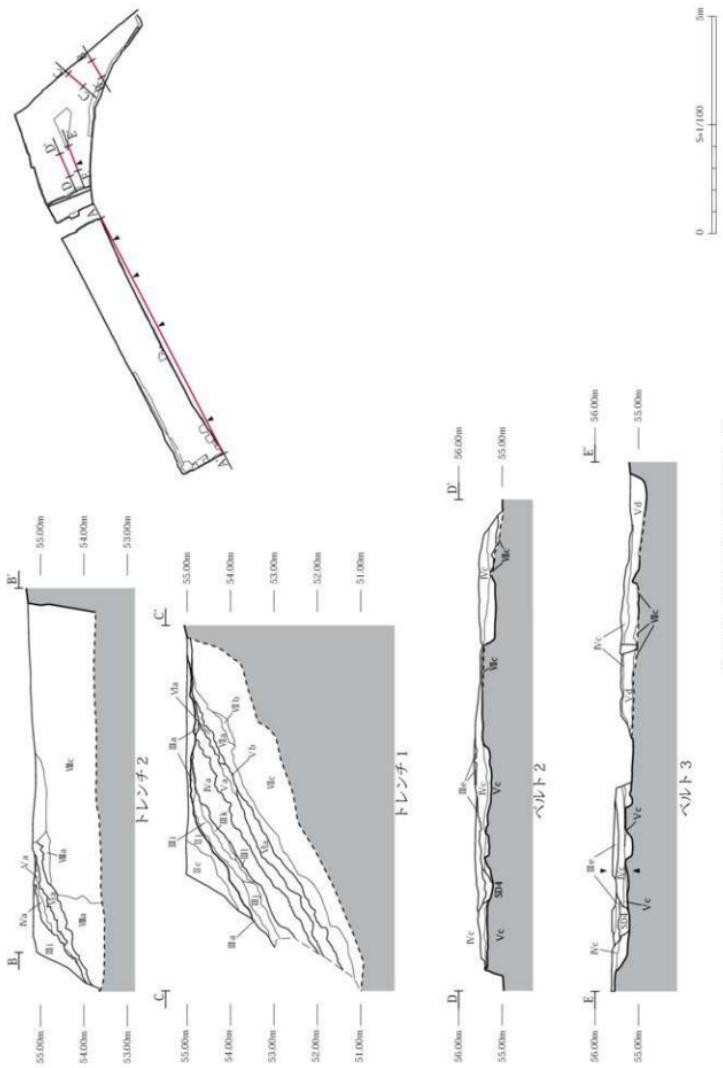
層名	土色	土質	粘性	繊まり	備考
I	10YR5/6 黄褐色	シルト	ややあり	あり	暗オリーブ色シルト西砂多量 灰礫多量
II a	10YR5/6 黄褐色	シルト	ややあり	あり	暗褐色砂質シルトブロック多量 灰黃色シルトブロック少量
II b	2.5Y4/1 地灰色	シルト質砂	ややあり	あり	径 10 ~ 10cm の礫少量
II c	2.5Y4/2 灰灰褐色	砂質シルト	なし	なし	径 10 ~ 20cm の礫多量
II d	2.5Y5/2 灰灰褐色	砂質シルト	ややあり	あり	径 5 ~ 20cm の礫多量
II e	2.5Y5/4 黄褐色	シルト	あり	あり	径 1 ~ 2cm のふくら褐色砂質シルト少量 径 5cm の礫少量
II f	10YR4/3 にぶい黄褐色	砂質シルト	あり	あり	黒褐色砂質シルトや多量 にぶい黃褐色シルト少量 径 5cm の礫多量
II g	2.5Y5/2 灰灰褐色	砂質シルト	ややあり	ややあり	黒褐色シルト多量 径 10cm の礫多量
II h	5GY4/1 暗オリーブ灰色	砂質シルト	あり	あり	グリーン化
II i	2.5Y6/6 明褐色	シルト	ややあり	あり	暗褐色砂質シルトや多量 径 5cm の礫少量
III a	10YR4/1 黄褐色	シルト	ややあり	あり	径 1 ~ 3mm の炭化物少量
III b	10YR3/1 黑褐色	砂質シルト	ややあり	ややあり	
III c	2.5Y4/1 黄褐色	シルト質砂	なし	なし	径 5cm の礫多量
III d	2.5Y5/6 黄褐色	シルト質砂	あり	あり	暗褐色砂質シルトや多量 暗褐色砂質シルト少量
III e	10YR5/4 にぶい黄褐色	砂質シルト	あり	あり	明褐色シルトブロックや多量 径 1 ~ 3mm の炭化物少量
III f	10YR3/2 黑褐色	シルト質砂	ややあり	あり	明褐色砂質シルト少量 径 1 ~ 5cm の礫少量
III g	10YR3/3 明褐色	砂質シルト	あり	あり	暗褐色砂質少量 径 1 ~ 3mm の炭化物少量
III h	10YR5/6 黑褐色	シルト	あり	あり	暗褐色砂質シルトや多量 径 3 ~ 5cm の礫少量
III i	2.5Y6/6 明褐色	シルト	あり	あり	暗褐色砂質シルト少量
III j	10YR4/3 にぶい黄褐色	砂質シルト	ややあり	あり	暗褐色砂質シルトや多量
III k	10YR4/2 黄褐色	砂質シルト	ややあり	あり	明褐色シルトや多量
III l	2.5Y4/1 黄褐色	砂質シルト	あり	ややあり	暗褐色砂質少量
III m	10YR5/3 にぶい黄褐色	砂質シルト	あり	ややあり	暗褐色シルト少量 径 1 ~ 2mm の炭化物少量
IV a	10YR3/3 暗褐色	砂質シルト	あり	あり	灰褐色砂質シルトや多量 径 3 ~ 5cm の礫や多量 径 1 ~ 2mm の炭化物少量
IV b	10YR5/3 にぶい黄褐色	砂質シルト	あり	あり	灰褐色砂質シルト少量 径 3 ~ 5cm の礫や多量
IV c	10YR4/3 にぶい黄褐色	砂質シルト	あり	あり	暗褐色砂質シルトや多量 径 5cm の礫や多量
IV d	10YR4/3 にぶい黄褐色	砂質シルト	あり	あり	暗褐色シルト少量
IV e	10YR4/2 黄褐色	シルト	あり	あり	酸化鉄や多量 径 1mm の炭化物微量
V a	10YR4/3 にぶい黄褐色	シルト	あり	あり	径 3cm の礫微量
V b	10YR4/3 にぶい黄褐色	シルト	あり	あり	黃褐色シルト少量
V c	10YR4/1 地灰色	シルト	あり	あり	黃褐色ブロック多量
V d	10YR5/3 にぶい黄褐色	シルト	あり	あり	明褐色シルトブロックや多量
VI a	10YR3/2 黑褐色	シルト	あり	ややあり	暗褐色シルト少量 径 5cm の礫微量
VI b	10YR3/2 黑褐色	シルト	あり	ややあり	径 5 ~ 20cm の礫や多量
VII a	10YR5/6 黄褐色	シルト	あり	あり	褐色粒子微量
VII b	10YR5/6 黄褐色	シルト	あり	あり	径 10cm の礫多量
VII c	10YR6/6 明褐色	シルト	あり	あり	灰白色粒子微量
VII d	2.5Y5/4 黄褐色	シルト	あり	ややあり	径 5cm の礫や多量
VII e	10YR4/3 にぶい黄褐色	砂礫	なし	なし	粗砂と 1 ~ 20cm の礫からなる
VII f	10YR5/8 黄褐色	砂礫	なし	なし	粗砂と 1 ~ 20cm の礫からなる
VII g	10YR6/8 黄褐色	砂礫	なし	なし	粗砂と 1 ~ 20cm の礫からなる

第6表 扇坂トンネル部(石垣の上段) 土層観察表

第2節 扇坂トンネル部（石垣の上段）

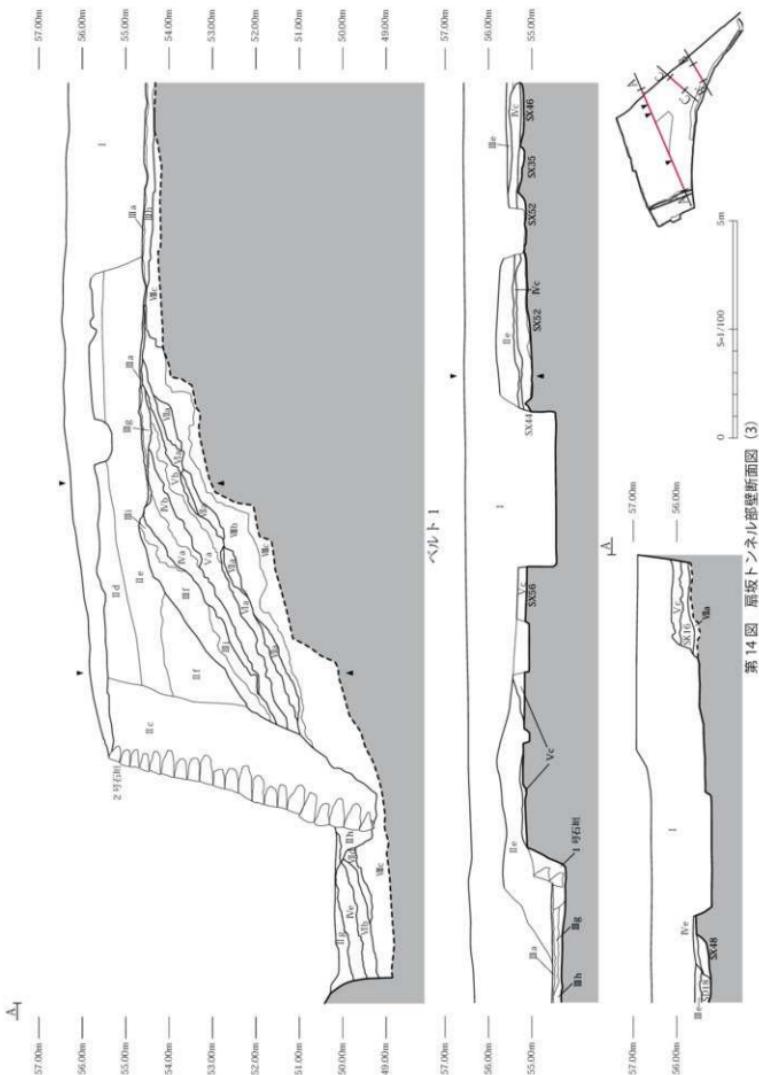


第12図 扇坂トンネル部壁断面図（1）

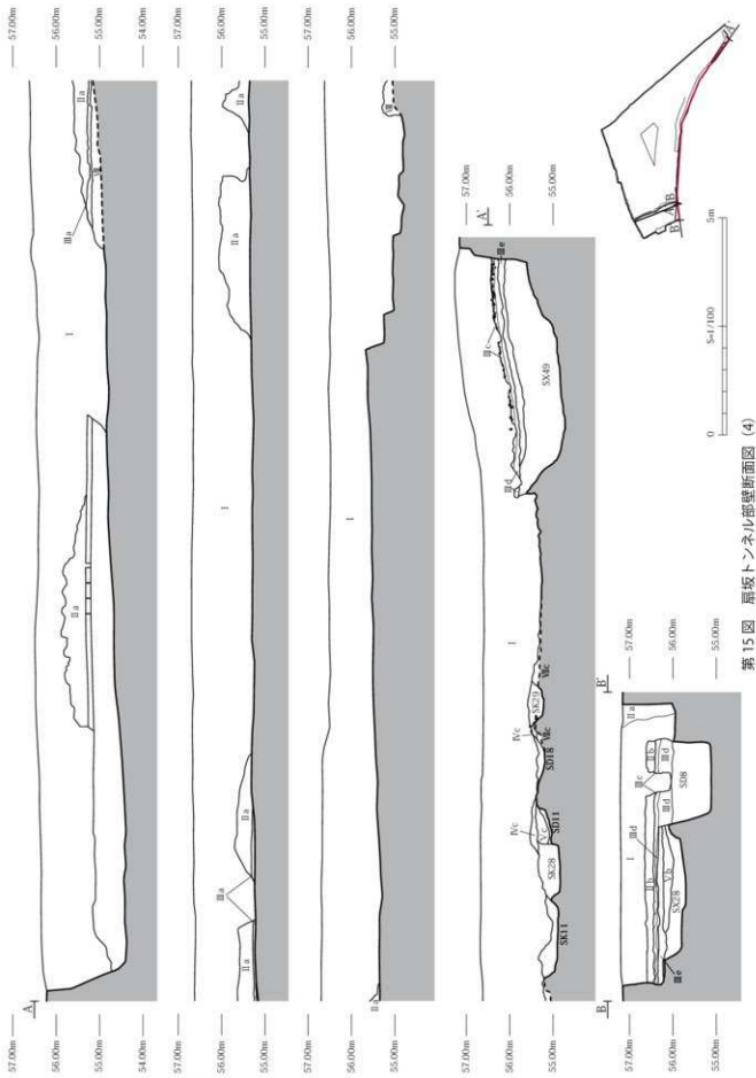


第13図 層板トンネル部壁断面図（2）

第2節 扇坂トンネル部（石垣の上段）



第14図 扇坂トンネル部壁面断面図(3)



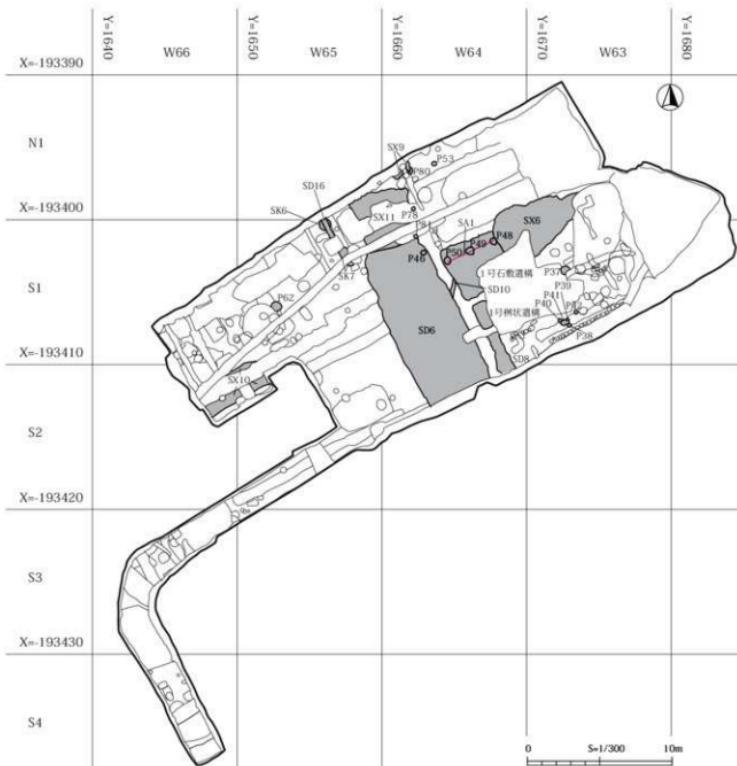
第15図 扇状トネル部断面図(4)

第2章 検出遺構と遺物

第1節 仙台城跡—亀岡トンネル進入路部—

1 V層上面檢出遺構

当調査区においてⅤ層は、調査区東側でのみ確認が出来た。西側では、Ⅲ層及びⅣ層直下がⅥ層（自然堆積層）となるため確認できなかったが、Ⅵ層上面で検出された遺構のうち、Ⅳ層相当の堆積土が認められる遺構及びそれより古い遺構については、Ⅴ層上面検出遺構と同時期の遺構と判断した。検出した遺構は、柱列跡1条、溝跡4条、土坑1基、性格不明遺構3基、石敷遺構1基、杭状遺構1基、ピット12基である。

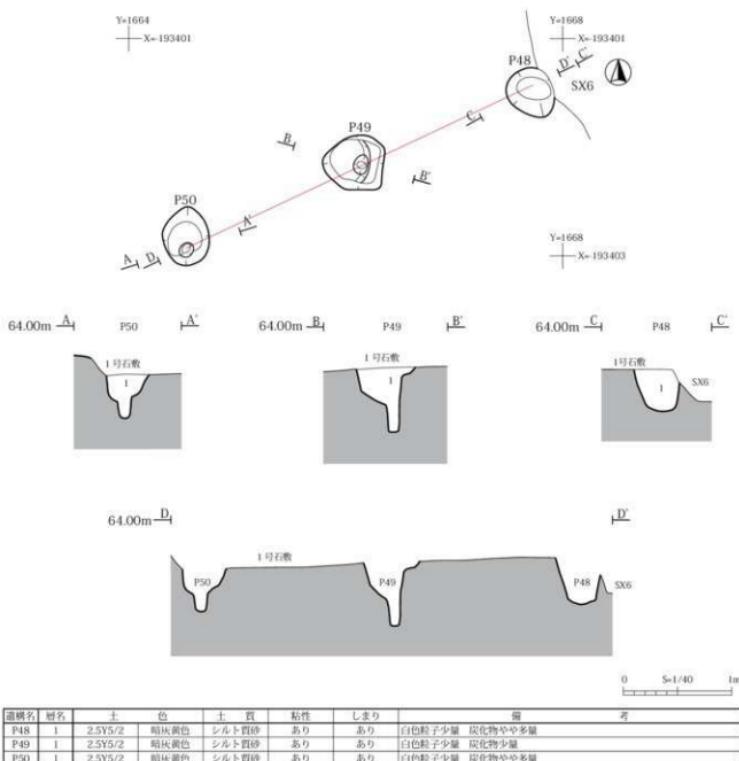


第16図 V層上面遺構配置図

(1) 柱列跡

1) SA1 柱列跡（第17図、図版3-4）

S1-W64 グリッドに位置する。1号石敷遺構の環の直下より検出したP48～P50が、南西から北東方向に直線的に並ぶ柱列跡である。1号石敷・SX6と重複し、それより古い。検出された規模は総長350cmを測り、柱間寸法は、約179cmである。主軸方位はN-45°Eを示す。3基の柱穴において、平面プラン及び断面の観察では、柱痕は確認出来なかったが、P49・50では遺構底面で柱痕を検出した。柱痕の径は、P49が12～18cm、P50が12～14cmを測る。掘り方の規模は、長軸48～58cm、短軸41～54cm、深さ38～60cmを測る。平面形は、P48が不整な円形、P49が不整な方形、P50が不整な楕円形を呈する。断面形は、P48がU字形、P49・50は漏斗形を呈する。堆積土はいずれも、シルト質砂の単層である。いずれの柱穴からも、遺物は出土していない。



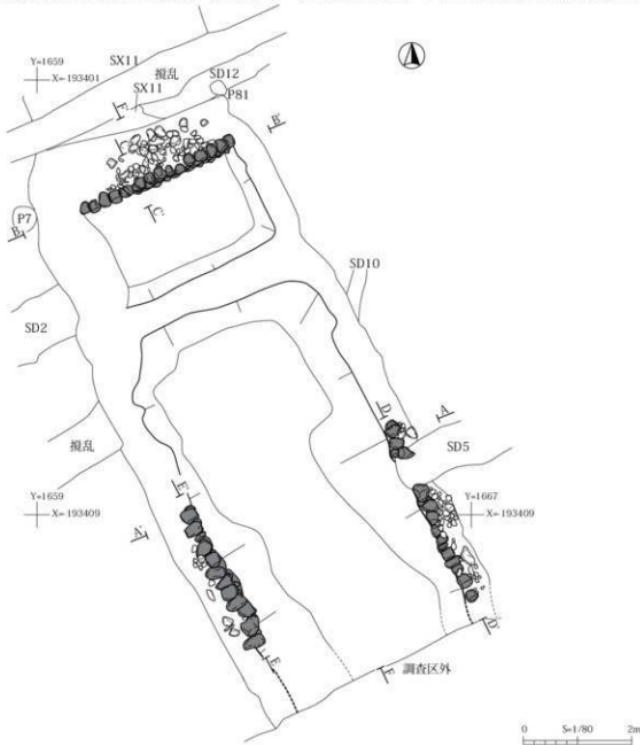
第17図 SA1建物跡平面図・断面図

第1節 仙台城跡一亜岡トンネル進入路部

(2) 溝跡

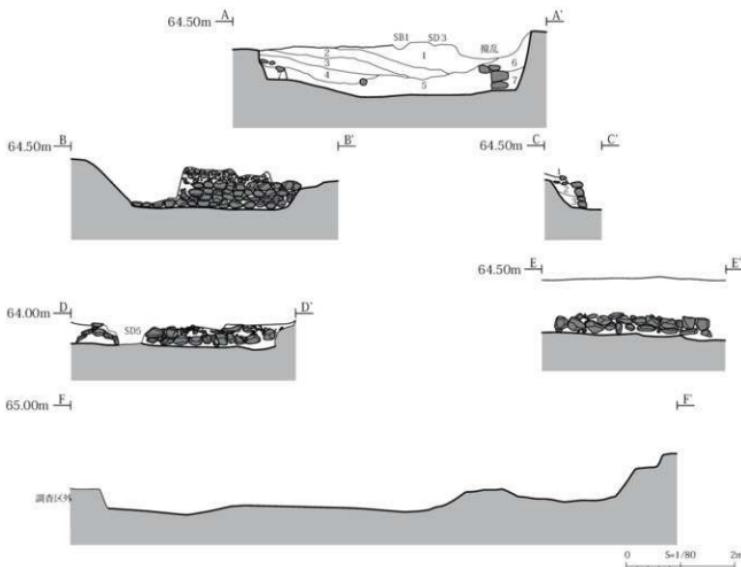
1) SD6 石組溝跡 (第18～20図、図版3-5～7)

S1・2-W64・65 グリッドに位置する。IV c層直下より検出された、南東から北西へ直線的に延びる北壁と東・西壁の一部に石組が見られる溝跡である。SD2・5・10・12、SX11、P7と重複し、SD10・SX11より新しく、SD2・5・12、P7より古い。南東側は調査区外へと延びる。残存する規模は、長さ 980cm、石組の上端幅は 359～380cm、下端幅 354～365cm、掘り方の規模は長さ 11.2m、上端幅 352cm、下端幅 264～284cm、深さ 128～176cm を測り、主軸方位は N-25°-W を示す。断面形は逆台形を呈する。底面は北から南へ傾斜しており、底面中央より北側に東西方向に帯状に延びる高まりがある。この高まりを境に北と南では 25cm 程の高低差が見られる。A 断面で見られる堆積土は 7 層からなり、1 層はシルト質砂で IV c 層に類似する。2・3 層はシルト質砂、4 層は砂質シルト、5 層は粘土質シルトで、酸化鉄を多量に含んでおりグライ化している。6・7 層は砂質シルトで、径 1～10cm の礫を含む石組の裏込めである。C 断面の 1～3 層も A 断面の 6・7 層と同じく石組の裏込めで、径



第18図 SD6 石組溝跡平面図

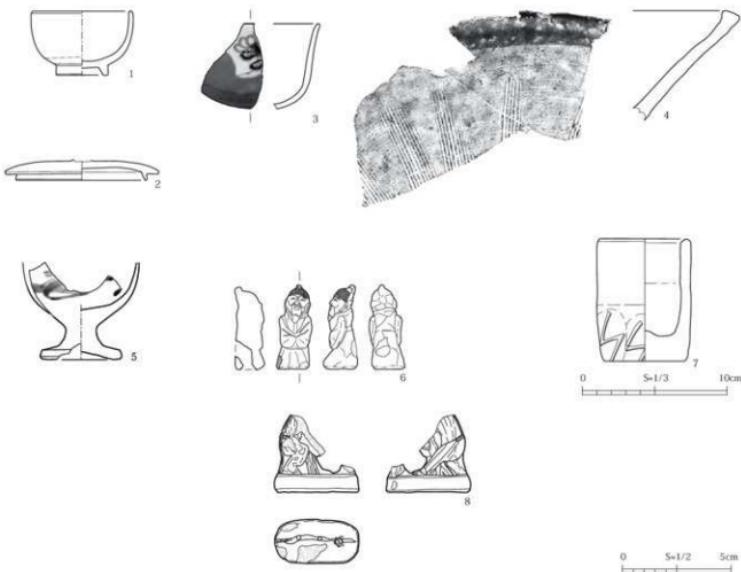
3～10cmの礫を多量に含む。石組は、東側で2段、西側で2段、北側で4段検出された。使用されている礫の規模は、長さ16～40cm、幅8～32cm、厚さ8～24cmを測り、自然礫の平坦面を遺構の内側へ向けて積み上げられている。当構南東方向の延長線上に、平成18年度調査区のⅢ区において、類似する規模のSX14が検出されている（仙台市2011）。ただし、SX14において石組は検出されていない。出土遺物は総数162点を数え、内訳は陶器41点、磁器47点、土師質土器19点、瓦質土器5点、土人形2点、瓦37点、木製品9点、骨1点、石製品1点である。1層からは18世紀末～19世紀初頭の大堀相馬産の蓋が、2層からは18世紀前葉～18世紀中葉の肥前産磁器の皿が、3層からは17世紀末～18世紀初頭の在地産の焼塙壺が、5層からは17世紀中葉の岸窯産の搖鉢が出土している。その内、18世紀後半の瀬戸・美濃産陶器の小杯、18世紀末葉～19世紀初頭の大堀相馬産の蓋、18世紀後半の肥前産陶器の碗、17世紀中葉の岸窯産の搖鉢を1点ずつ、磁器は17世紀の肥前産の唐人入形（芯立て）、18世紀代の仏飯具の2点、在地産の焼塙壺を1点、施釉された土人形を1点図示した。



断面	層名	層					参考
		土色	土質	粘性	しまり	備考	
A断面	1	2.5Y4/3	オリーブ褐色	シルト質砂	ややあり	あり	黄褐色粒子微量、白色粒微量
	2	2.5Y4/2	暗灰褐色	シルト質砂	ややあり	あり	径3～5mmの黄褐色シルト微量、径1～10cmの礫少量
	3	2.5Y4/1	黄褐色	シルト質砂	ややあり	あり	径3～5mmの黄褐色シルト微量、酸化鉄やや多量
	4	2.5Y4/1	黄褐色	砂質シルト	あり	ややあり	径1～10cmの礫やや多量、酸化鉄やや多量
	5	5Y4/1	褐色	粘土質シルト	あり	ややあり	浅黄色粒子微量、酸化鉄やや多量
	6	2.5Y5/2	暗灰褐色	砂質シルト	なし	あり	径1～3cmの黄褐色シルト少量、径1～5cmの礫やや多量
	7	2.5Y4/2	暗灰褐色	砂質シルト	ややあり	あり	径1～10cmの礫多量、径1cmの炭化物微量
C断面	1	2.5Y5/2	暗灰褐色	シルト質砂	なし	あり	径3cmの礫少量、径2mmの炭化物微量
	2	2.5Y4/2	暗灰褐色	砂質シルト	ややあり	ややあり	径5～10cmの礫多量、径1～2cmの炭化物少量
	3	2.5Y4/1	黄褐色	砂質シルト	ややあり	あり	黄褐色粒子微量、径5～10cmの礫多量、径1cmの炭化物少量

第19図 SD6 石組溝断面図・立面図

第1節 仙台城跡-亀岡トンネル進入路部-

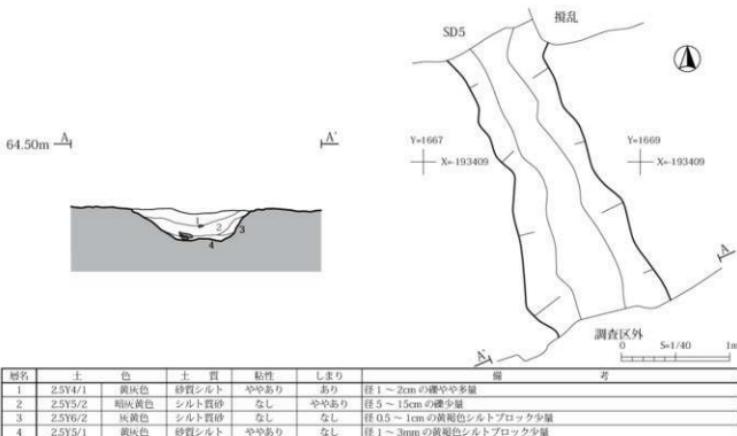


図版番号	写真図版番号	層位	種別	器種	部位	胎土	法量(cm)	備考	登録番号
							口径 従径 高さ		
1	20-1	1層	陶器	小杯	口縁～底部	やや粗	6.8 3.6 4.5	瀬戸・美濃 灰釉 貫入有 ロクロ：左	I-030
2	20-4	1層	陶器	着	体部～底部	やや密	10.1 9.0 (1.3)	大腹 18世紀末～ 相馬 灰釉 貫入有 ロクロ：右	I-033
3	20-2	1層	陶器	環状碗	口縁～体部	密	- - (16.1)	肥前 18世紀後半 灰釉 百化粧・乳頭・鉄粒 貫入有	I-039
4	20-3	5層	陶器	罐	口縁～体部	やや粗	(21.0) - (6.7)	岸 17世紀中葉 灰釉 乳頭 印口1条8本	I-059
5	20-5	2層	磁器	仏壇具	体部～底部	密	(8.2) (5.0) (6.7)	肥前 18世紀 外側：染付有	J-031
6	20-7	5層	磁器	唐人人物 (寸引貝)	上部～底部	密	- - 11.9	肥前 17世紀前半 顔部分に鐵粒 芯立て	J-026
7	20-8	3層	土蔵質土器	焼埴造	口縁～底部	粗	6.3 5.5 8.5	石垣 17世紀末～ 内面：ナデ 外面下部：タタキ	I-027
図版番号	写真図版番号	層位	種別	器種	法量(cm・g)			備考	登録番号
8	20-6	1層	土製品		長さ 幅 厚さ 重さ				P-007

第20図 SD6 石組溝跡出土遺物

2) SD8溝跡（第21図、図版4-1・2）

S1・2-W64 グリッドに位置する。南東から北西へ直線的に延びる溝跡である。北端の一部を擾乱により削平され、南側は調査区外へ延びる。SD5と重複し、SD5より古い。残存する規模は、長さ 276cm、上端幅 72cm ~ 114cm、下端幅 24 ~ 54cm、深さ 14 ~ 30cm を測り、主軸方位は N-22°-W を示す。断面形は上端付近がやや外反する逆台形を呈する。底面はやや起伏があり、北から南へ緩やかに傾斜している。堆積土は4層からなり、1層は砂質シルト、2・3層はシルト質砂、4層は砂質シルトである。遺物は、1層から平瓦が出土しているが、細片のため図示し得なかった。



第21図 SD8溝跡平面図・断面図

3) SD10溝跡 (第22図、図版4-3・4)

S1-W64 グリッドに位置する。東から南へ弧を描いて延びる溝跡である。1号石敷遺構の縁を取り上げた下から検出された。SD6, SX6, 1号石敷遺構と重複し、これらより古い。残存する規模は、総長530cm、上端幅24~32cm、下端幅18~20cm、深さ4~20cmを測り、主軸方位はN-47°Eを示す。断面形は逆台形を呈する。底面にはやや起伏が見られるが、南から東へ緩やかに傾斜している。堆積土は2層からなり、1層はシルト質砂、2層は砂質シルトである。遺物は出土していない。

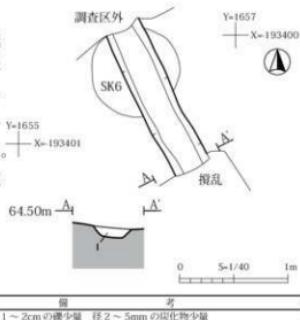


第22図 SD10溝跡平面図・断面図

第1節 仙台城跡-亀岡トンネル進入路部-

4) SD16溝跡（第23図、図版4-5・6）

N1～S1-W65 グリッドに位置する。南東から北西へ直線的に延びる溝跡である。北端は調査区外へと延び、南端は擾乱により削平される。SK6と重複し、SK6より新しい。残存する規模は、長さ142cm、上端幅34～37cm、下端幅19～24cm、深さ10～Y=1655 16cmを測り、主軸方位はN-27°-Wを示す。断面形は皿形を呈する。底面は、北西から南東へ緩やかに傾斜している。堆積土はシルト質砂の単層である。遺物は出土していない。

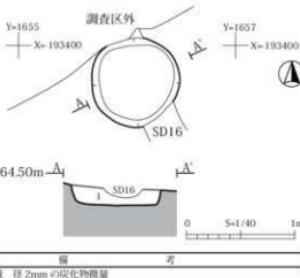


第23図 SD16溝跡平面図・断面図

(3) 土坑

1) SK6（第24図、図版4-7・5-1）

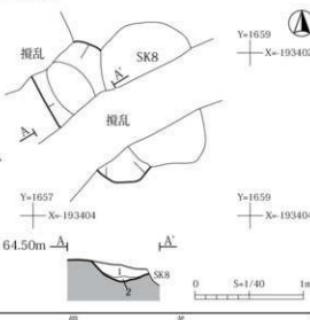
N1～S1-W65 グリッドに位置する。SD16と重複し、SD16より古い。残存する規模は、長軸84cm、短軸80cm、深さ19cmを測り、主軸方位はN-63°-Eを示す。平面形は円形で、断面形は逆台形を呈する。底面は僅かに起伏が見られるが、概ね平坦である。堆積土は砂質シルトの単層である。遺物は出土していない。



第24図 SK6 土坑平面図・断面図

2) SK7土坑（第25図、図版5-2）

S1-W65 グリッドに位置する。中央部分は擾乱により削平される。東側の大部分をSK8と重複し、SK8より古い。残存する規模は、長軸135cm、短軸68cm、深さ21cmを測る。平面形は梢円形を呈すると考えられ、断面形は皿形を呈する。底面は、中央部分に向かって緩やかに傾斜している。堆積土は2層からなり、1層は砂質シルト、2層はシルト質砂である。1層はV a層に類似する。遺物は出土していない。

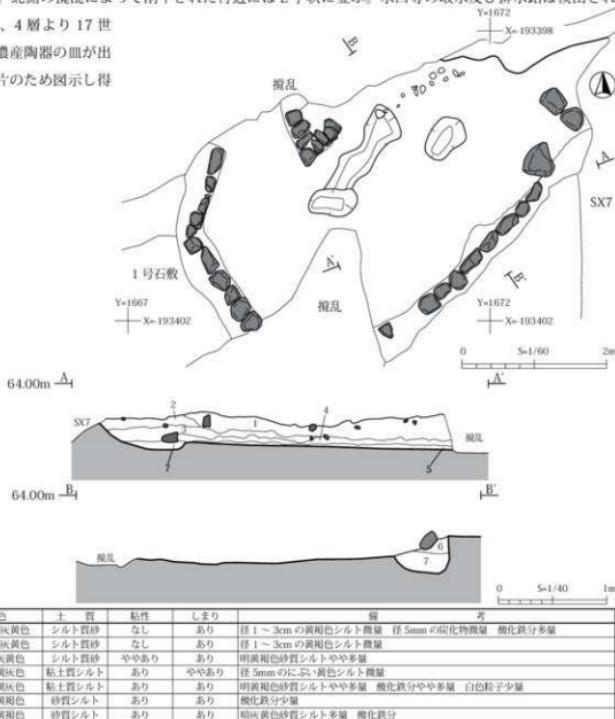


第25図 SK7 土坑平面図・断面図

(4) 性格不明遺構

1) SX6 性格不明遺構 (第26図、図版5-3)

N1・S1-W63・64 グリッドに位置する。遺構壁面に沿うように礫が設置され、薄くではあるが遺構底面に広く黄灰色粘土質シルトが分布することから池跡の可能性が考えられる。SX7と重複し、SX7より古い。また、1号石敷遺構と接する。残存する規模は、長軸655cm、短軸386cm、深さ18~34cmを測り、主軸方位はN43°-Eを示す。平面形は、大半を傾斜に削平されており不明である。断面形は皿形を呈する。底面は僅かに中央へ向かって傾斜している。堆積土は7層からなり、1~2層はシルト質砂で、遺構が廃絶された時に埋められた土の堆積層であると考えられる。3層はシルト質砂で護岸礫の裏込めが、何らかの理由により護岸が崩れた際に出来た堆積と考えられる。4層は粘土質シルトで、当遺構が機能していた当時の堆積である。5層は粘土質シルトで、遺構底面に薄くまた、広範囲に敷かれている。6~7層はいずれも砂質シルトで、護岸用の礫を固定するための掘り方であると考えられる。護岸の石組には、長さ15~42cm、幅12~49cm、厚さ18~38cmの自然礫が、遺構の壁に沿って配置されている。北側の掘乱によって削平された付近にはL字状に並ぶ。水口等の取水及び排水路は検出されなかった。遺物は、4層より17世紀初頭の瀬戸・美濃産陶器の皿が出土しているが、細片のため図示し得なかった。

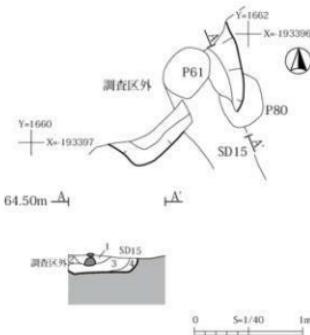


第26図 SX6 性格不明遺構平面図・断面図

第1節 仙台城跡-亀岡トンネル進入路部-

2) SX9 性格不明遺構 (第27図、図版5-4)

N1-W64 グリッドに位置する。北西側は調査区外へ延びる。SD15、P61・80と重複し、P80より新しく、SD15、P61より古い。残存する規模は、長軸 150cm、短軸 50cm、深さ 18 ~ 36cm を測り、主軸方位は N-49°-E を示す。平面形は遺構の大半が調査区外に延びるため不明である。断面形は逆台形を呈すると考えられる。堆積土は 4 層からなり、1 層はシルトで浅黄色シルトブロックを少量含んでいる。2 層は砂質シルト、3 層は粘土質シルト、4 層はシルトである。遺物は出土していない。

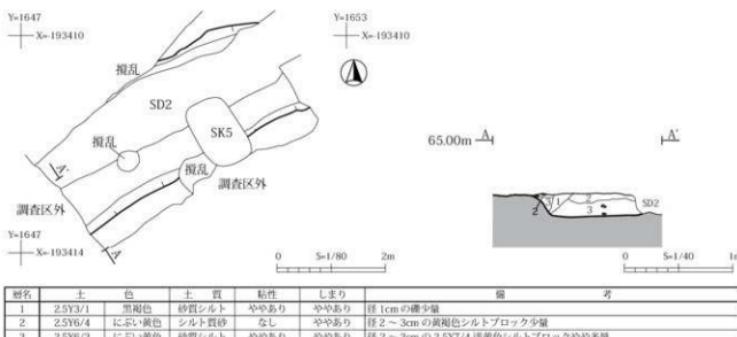


番号	土色	土質	粘性	しまり	層	考
1	Z.5YR6/3 にぶい緑色	シルト	なし	ややあり	① 1cmの浅黄色シルトブロック少量 径 5mmの明黄褐色シルトブロック少量 径 10cm の礫少額 径 1mmの白色粒子少量	
2	Z.5Y5/2 暗灰黄色	砂質シルト	ややあり	あり	2.5Y6/3にぶい黄褐色シルト多量 径 1 ~ 3cmの黄褐色シルトブロック少量	
3	Z.5Y5/1 黄褐色	粘土質シルト	あり	あり	シルト主体 径 1mmの白色粒子多量 径 0.5 ~ 2cmの炭化物少額	
4	10YR4/3 にぶい黄褐色	シルト	あり	ややあり	径 1mmの白色粒子 酸化鉄分少額	

第27図 SX9 性格不明遺構平面図・断面図

3) SX10 性格不明遺構 (第28図、図版5-5)

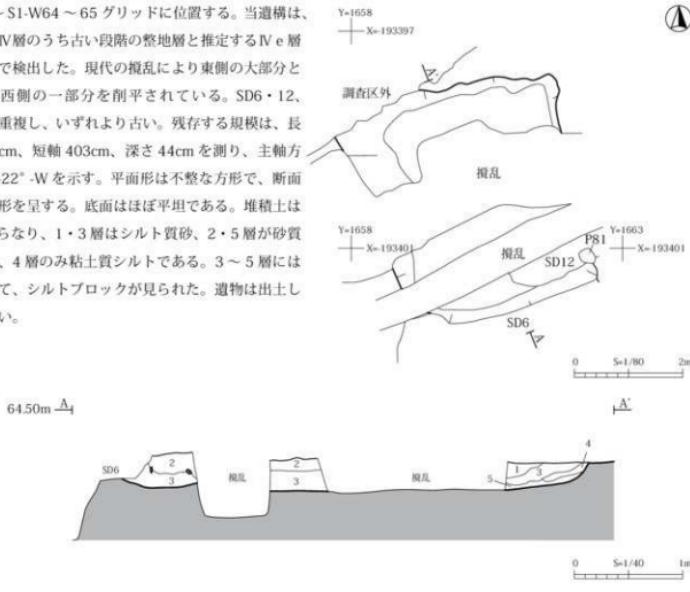
N12-W35 グリッドに位置する。南西端は調査区外へ延び、北東端は北側を SD2 に削平され、南側は調査区外へ延びる。SD2、SK5 と重複し、いずれより古い。残存する規模は、長軸 464cm、短軸 203cm、深さ 11 ~ 21cm を測り、主軸方位は N-55°-E を示す。平面形は帯状を呈し、断面形は皿形を呈する。底面は平坦であるが、南西から北東に傾斜している。堆積土は 3 層からなり、1・3 層は砂質シルトで、1 层は根の擾乱と考えられる。2 層はシルト質砂で、浅黄色シルトブロックをやや多量に含んでいる。遺物は出土していない。



第28図 SX10 性格不明遺構平面図・断面図

4) SX11 性格不明遺構 (第29図、図版5-6・7)

N1～S1-W64～65 グリッドに位置する。当遺構は、基本層IV層のうち古い段階の整地層と推定するIVc層の直下で検出した。現代の擾乱により東側の大部分と南側、西側の一部分を削平されている。SD6・12、P81と重複し、いずれより古い。残存する規模は、長軸440cm、短軸403cm、深さ44cmを測り、主軸方位はN-22°-Wを示す。平面形は不整な方形で、断面形は皿形を呈する。底面はほぼ平坦である。堆積土は5層からなり、1・3層はシルト質砂、2・5層が砂質シルト、4層のみ粘土質シルトである。3～5層には共通して、シルトブロックが見られた。遺物は出土していない。



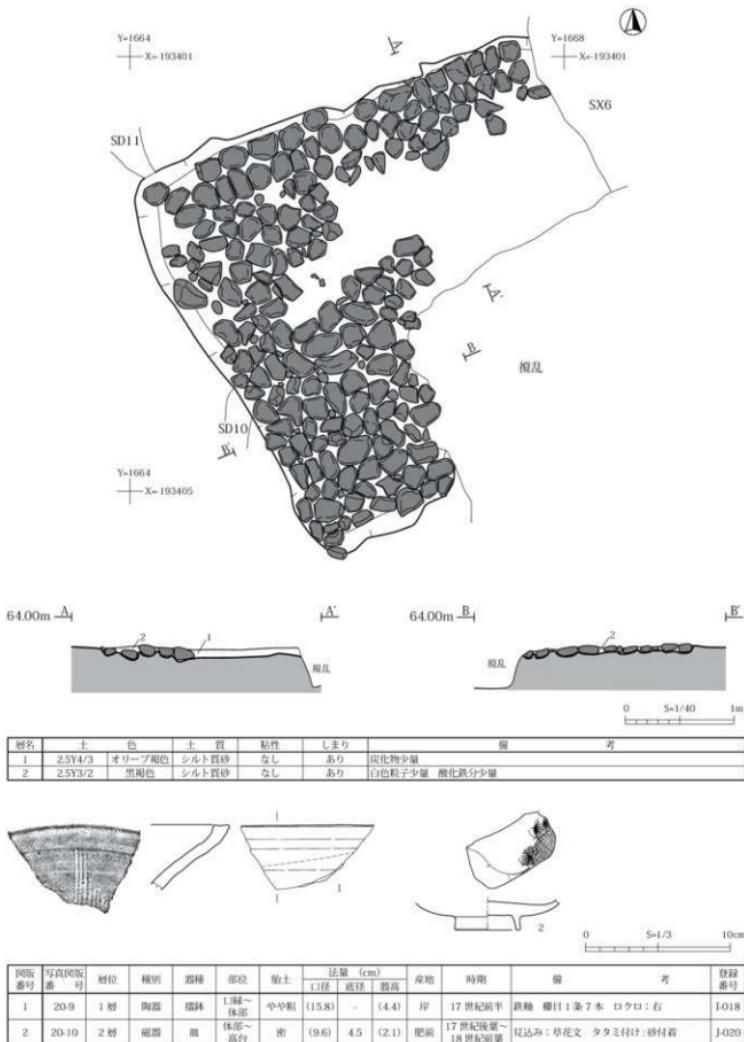
第29図 SX11 性格不明遺構平面図・断面図

(5) 石敷遺構

1) 1号石敷遺構 (第30図、図版5-8)

S1-W64 グリッドに位置する。北東側を擾乱により削平される。SA1、SD10・11と重複し、SA1、SD10より新しく、SD11より古い。残存する規模は、長軸402cm、短軸391cm、深さ13cmを測り、主軸方位はN-35°-Eを示す。平面形は丸方形状で、断面形は浅い皿形を呈する。振り方の底面は、ほぼ平坦である。堆積土は2層からなり、1・2層ともにシルト質砂である。ただし1層は、IVc層に類似する堆積土である。SX6(池跡)とは重複関係にあるように見えるが、当遺構とSX6はIVc層直下より検出されたことにより、同時期に存在したものと考えられる。敷かれている礫は、長さ14～39cm、幅7～27cm、厚さ4～20cmで、平坦な面を上に向けて配されている。遺物は、1層から17世紀前半の岸窯産の擂鉢、17世紀～18世紀の肥前産磁器の碗、在地産のかわらけ、ミニチュア等が、2層からは17世紀後葉～18世紀前葉の肥前産磁器の皿が出土している。その内、17世紀前半の岸窯産の擂鉢1点、17世紀後葉～18世紀前葉の肥前産磁器の皿を1点図示した。

第1節 仙台城跡—亀岡トンネル進入路部—

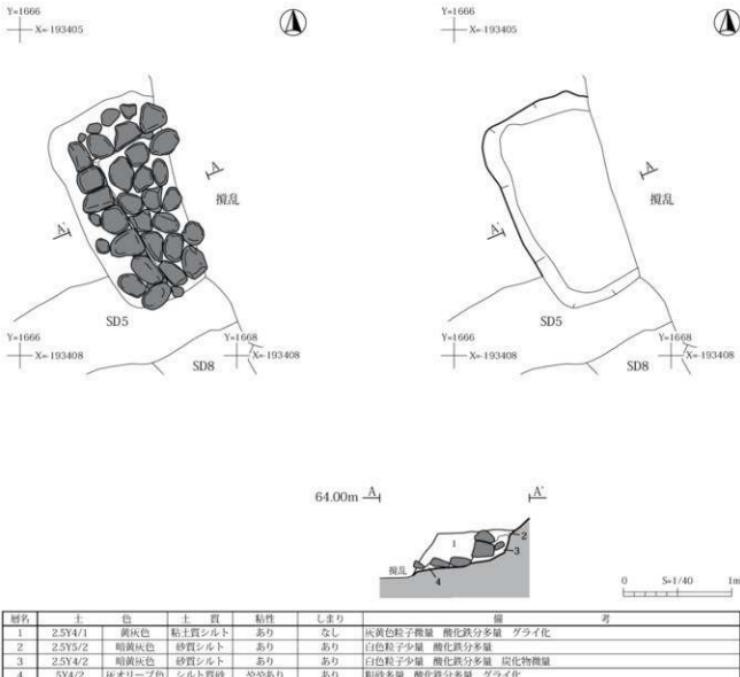


第30図 1号石敷造構平面図・断面図・出土遺物

(6) 枝状遺構

1) 1号枝状遺構 (第31図、図版6-1・2)

S1-W64 グリッドに位置する。IVc層の直下より検出した、遺構側面及び底面に礫を配した遺構である。東側を擾乱により削平される。SD5と重複し、SD5より古い。残存する規模は、長軸 143cm、短軸 60cm、深さ 53 ~ 63cm、掘り方の長軸は 192cm、短軸 86cm、深さ 20 ~ 68cm を測り、主軸方位は N-30°-W を示す。掘り方の平面形は隅丸方形で、断面形は逆台形を呈すると考えられる。石敷の上面、掘り方底面とともに東へ向かって傾斜している。遺構底面に敷かれている礫及び壁面に使用されている礫は、長さ 16 ~ 30cm、幅 18 ~ 29cm、厚さ 6 ~ 15cm で、北壁に 1段、西壁に 2段積まれている。堆積土は 4層からなり、1層は粘土質シルトでグライ化している。2・3層は砂質シルトで石組の裏込めである。4層は、シルト質砂で粗砂を多量に含み、敷かれた礫を固定させるための掘り方と考えられる。当遺構の北側へ約 40cm のところには 1号石敷遺構が、同じく西側へ約 40cm のところには SD6 が位置する。遺物は、1層から 17世紀後半の肥前産磁器の碗が出土しているが、細片のため図示し得なかった。

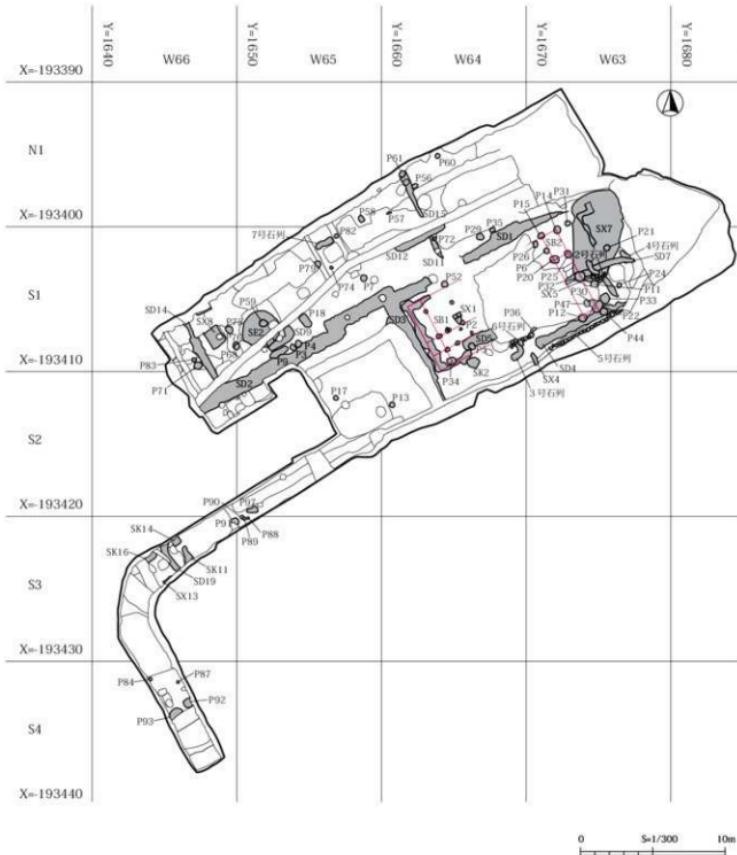


第31図 1号枝状遺構平面図・断面図

第1節 仙台城跡—亀岡トンネル進入路部—

2 IV層上面検出遺構と出土遺物

亀岡トンネル進入路部ではIV層は南西側の一部を除いてほぼ全面で確認されている。検出した遺構は、建物跡2棟、溝跡12条、井戸跡1基、土坑4基、性格不明遺構6基、石列5条、ピット49基である。

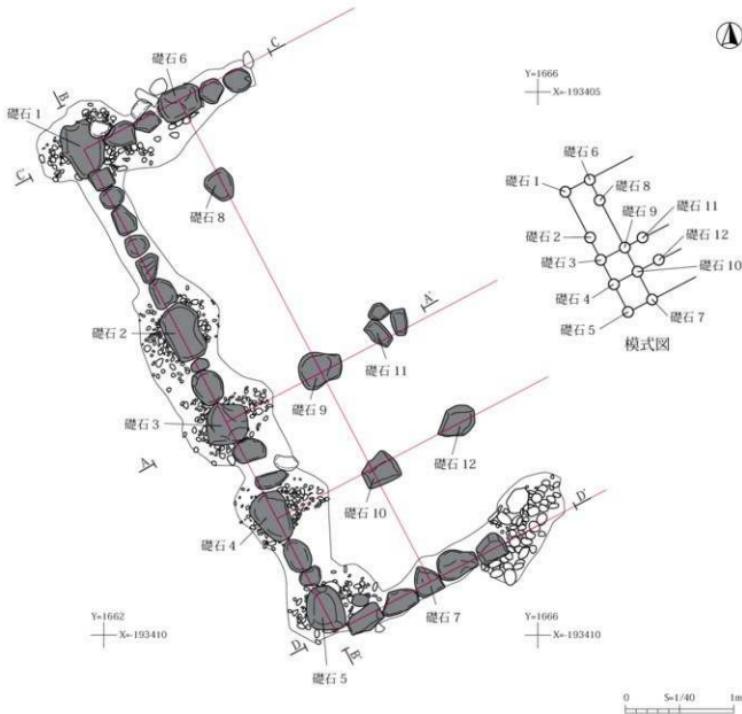


第32図 IV層上面構造配置図

(1) 建物跡

1) SB1 建物跡（第33・34図、図版6-3・4）

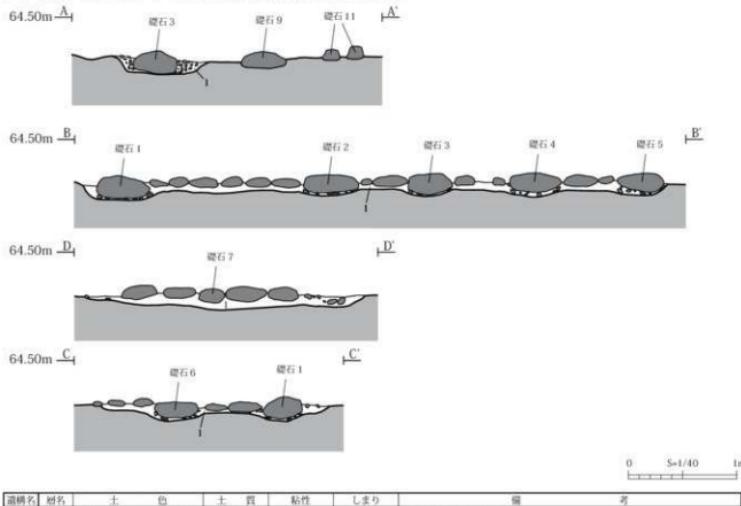
S1-W64 グリッドに位置する。「匁」字形を呈する掘り方に据えられた石列と、その内側に5基の礎石が並ぶ。残存する掘り方の規模は、総長10.40m、上端幅26~85cm、下端幅15~69cm、深さ10cmを測る。断面形は皿形を呈する。底面は、礎の沈下による起伏はあるが概ね平坦である。この掘り方には石列が据えられており、その残存する規模は、長辺526cm、短辺のうち北側は186cm、南側は263cmを測る。主軸方位は長辺がN-27°-Wを示し、短辺は北側がN-67°-Eを、南側がN-70°-Eを示す。東へ広がると推定されるが、大きく搅乱されており、詳細は不明である。石列では、径2~21cmの根固め石が敷かれた上に長さ41~54cm、幅29~41cm、厚さ12~22cmを測る礎石が、長辺において6尺3寸(188cm)を1間とした場合の半間等間で礎石2~5が据えられており、礎石1と礎石2の間に1間で据えられている。短辺北側も同じく礎石1から半間のところで、根固め石が敷かれた場所に礎石6が据えられているが、南側短辺では礎石5から半間にあたる礎石7の下で根固め石は確認されなかった。ただし、礎石7から東へ凡そ1間先には、礎石は確認されなかったが、根固め石と考えられ



第33図 SB1 建物跡平面図

第1節 仙台城跡-亀岡トンネル進入路部

る小礫がやや崩れた様子を呈しているが、集中する箇所がある。これら礫石の間を、長さ16~48cm、幅11~28cm、厚さ6~13cmを測る礫が、地覆石状に並ぶ。石列内側には長さ18~40cm、幅15~34cm、厚さ7~18cmの礫石が据えられており、礫石1から礫石5の列と、これに並行して並ぶ礫石8~10との間隔はいずれも97cm(3尺2寸)で、礫石7・10間が112cm(3尺7寸)、石列9・10間が112cm(3尺7寸)、石列8・9間が194cm(6尺4寸)、石列6・8間が94cm(3尺1寸)で、更に東側に並ぶ2つの礫石の内、礫石12と石列南側短辺の距離は、118cm(3尺9寸)で、礫石12と礫石10との距離は94cm(3尺1寸)、礫石11との距離は115cm(3尺8寸)で、礫石11と礫石9との距離は86cm(2尺8寸)である。このように柱間距離にやや統一性にかける様に見られる。これらの事から、石列は建物の壁の基礎と考えられ、その内側にあるやや不規則な並びの礫石は床棟と考えられる。また、石列が建物の壁である事からこの建物の西端の一部と考えられる。堆積土は、シルト質砂を基調とする単層である。遺物は出土していない。

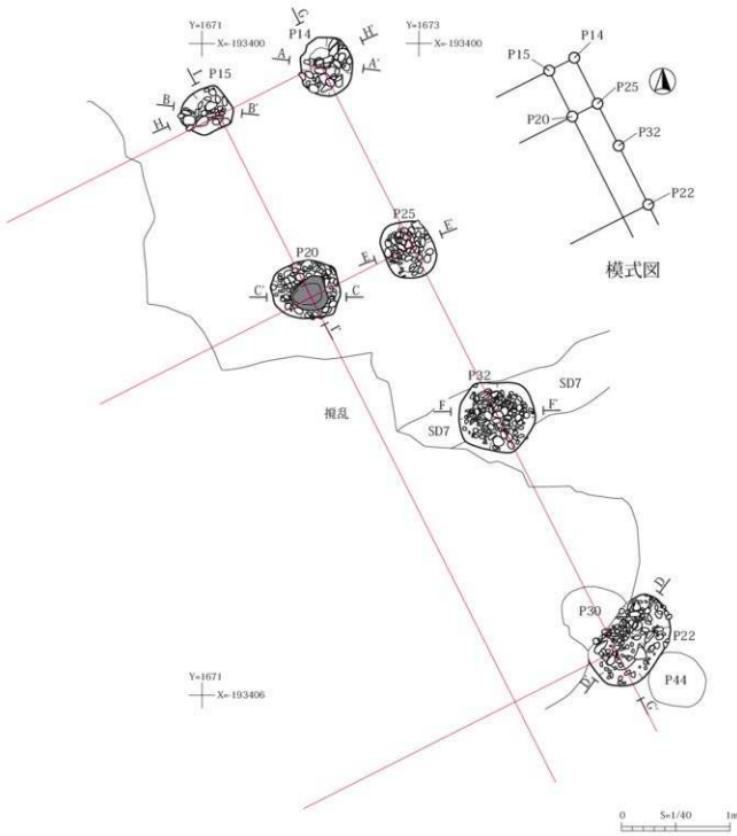


第34図 SB1 建物跡断面図

2) SB2 建物跡 (第35・36図、図版6-5・7-1)

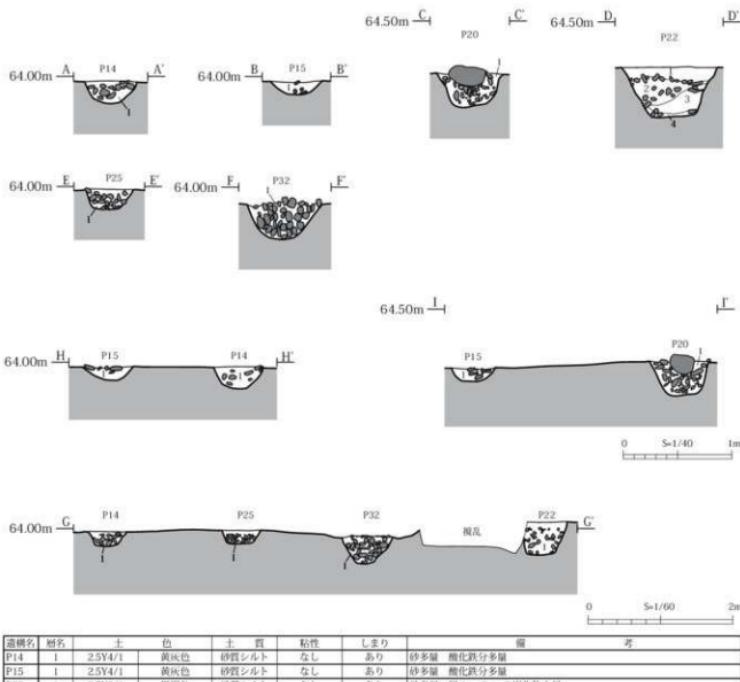
N1-W63~S1-W63グリッドに位置する。P14・15・20・22・25・32の6基の柱穴によって構成される。北側には当建物跡と同時期に機能していたと考えられるSD1が位置し、P22から南へ70cm先は調査区外となる。西側は搅乱がVI層まで大きく削平しており、東側には同時期に機能していたと考えられる2号石列が位置する。これらの事から、当建物跡は南北方向に広がる可能性があると示唆される。東西1間、南北3間以上と考えられる礫石建物跡である。P22はSD4、P30・44と重複し、P32はSD7と重複し、SD7より新しい。残存する規模は、東西104cm、南北595cmを測り、桁行・梁行が判然としないため主軸方位は不明であるが、南北軸はN-27°・W、東西軸はN-63°・Eを示す。南北方向の柱間距離は、P14・15・32の間がいずれも188cm(6尺3寸)、P15・20の間も同じく188cmで、P32・22の間が219cm(7尺2寸)を測り、東西方向の柱間距離は

P14・15の間、P25・20の間はいずれも 104cm(3尺4寸)を測る。各柱穴の規模は長軸 40~88cm、短軸 37~63cm、深さ 4~46cm を測る。平面形は、楕円形ないし不整な円形を呈し、断面形は U字状もしくは逆台形を呈する。堆積土は、砂質シルトないしシルト質砂を基調とし、なかには P22 のようにシルトや粘土質シルトが堆積する柱穴も見られる。全ての柱穴に多量の根固め石が充填されており、P20 はその根固め石の上に礎石を設置している。遺物は出土していない。



第35図 SB2 建物跡平面図

第1節 仙台城跡-亀岡トンネル進入路部-

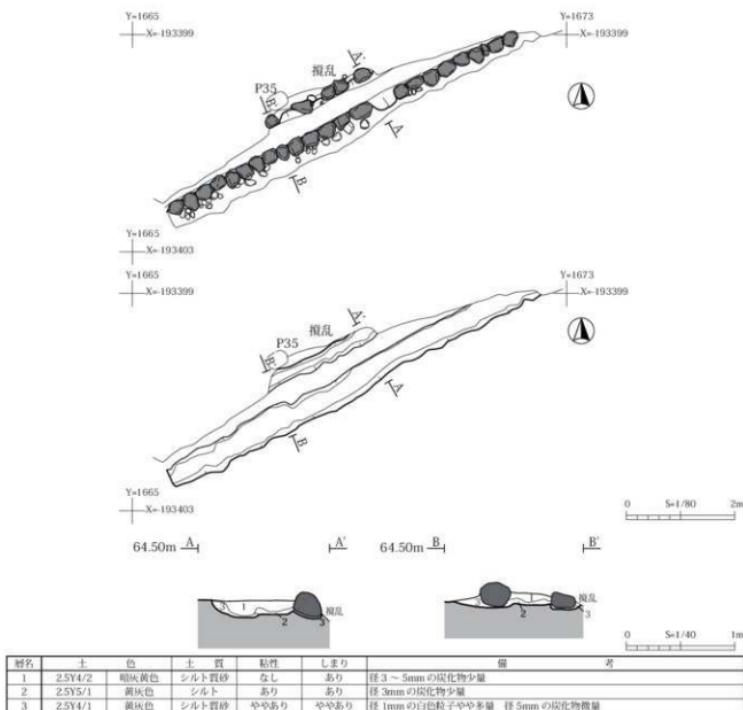


第36図 SB2建物跡断面図

(2) 溝跡

1) SD1石組溝跡（第37図、図版7-2・3）

N1～S1-W63・64グリッドに位置する。南西から北東へ直線的に延びる石組溝跡である。残存する規模は、長さ754cmで、石組内側の上端幅は34～39cm、下端が33～37cmを測る。石組に使用されている礫は、長さ19～44cm、幅22～31cm、厚さ12～24cmを測る。掘り方の上端幅は100～109cmで、下端幅は84～98cm、深さ12～28cmを測り、主軸方位はN-62°-Eを示す。掘り方の断面形は皿形を呈する。底面は起伏があるもののほぼ平坦である。堆土土は3層からなり、1層はシルト質砂で、土色・土質とともにⅢc層に類似しており、Ⅲc層の土が堆積したものと考えられる。2層はシルト層で、当溝が機能していた時期に堆積した層と考えられる。3層はシルト質砂で、石組の裏込めである。遺物は出土していない。

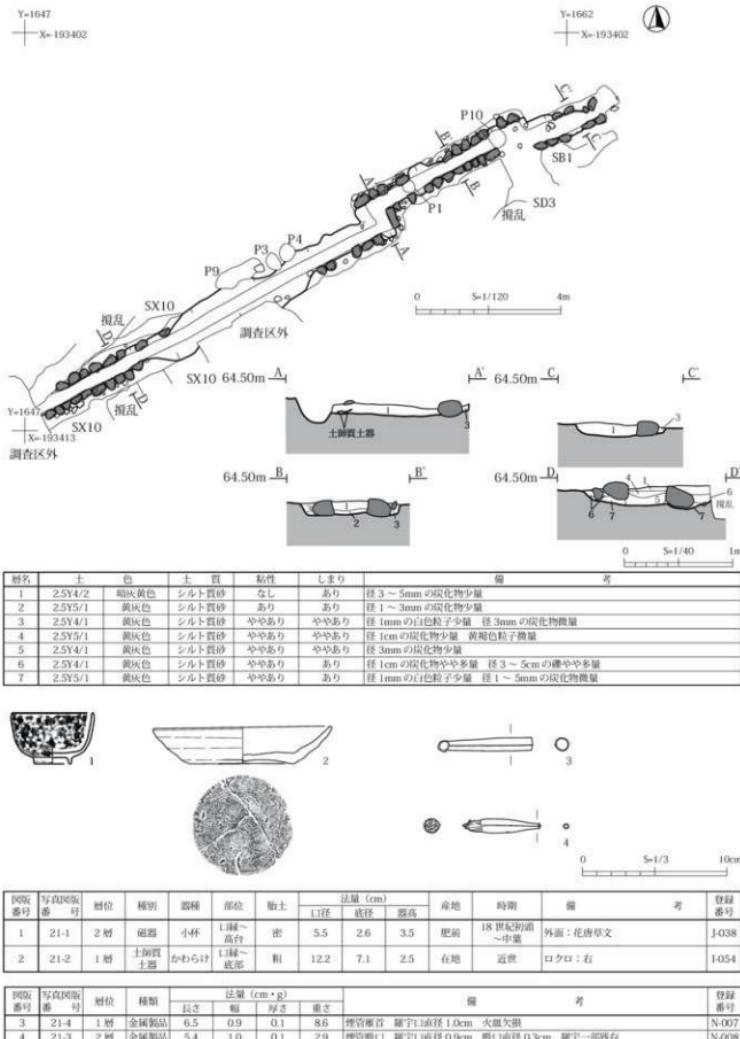


第37図 SD1石組溝跡平面図・断面図

2) SD2石組溝跡(第38図、図版7-4~8-4)

S1・2-W64・65グリッドに位置する。南西から北東へ延びる石組溝跡で、途中2度クランク状に屈折する。SX10、P1・3・4・9・10と重複し、SX10より新しく、P1・3・4・9・10より古い。また、北東端付近でSD3と接する。残存する規模は、全長19.51m。石組内側の上端幅28~45cm、下端幅24~41cmを測る。石組に使用されている礫は、長さ18~60cm、幅19~34cm、厚さ12~16cmで、自然礫の平坦な面を内側に向けて1段並べられている。振り方の上端幅は62~116cm、下端幅は46~95cm、深さ13~25cmを測り、主軸方位はN-62°-Eを示す。断面形は皿形を呈する。底面は、緩やかに南西から北東に傾斜している。堆積土は7層からなり、いずれもシルト質砂である。1層はⅢc層由来の堆積土と考えられる。3・6・7層は、礫を安定または固定させるために敷かれたものと考えられる。遺物は、1層から18世紀代の肥前産陶器の碗、18世紀中葉～後葉の大堀相馬産の碗、17世紀代の瀬戸・美濃産陶器の碗、在地産の焰焼やかわらけ、煙管の雁首が、3層から18世紀前葉～中葉の肥前産磁器の碗、在地産のかわらけ、煙管の吸口が出土している。そのうち、磁器では、18世紀初頭～中葉の肥前産小杯を1点、在地産のかわらけを1点、煙管の雁首と吸口を各1点ずつ図示した。

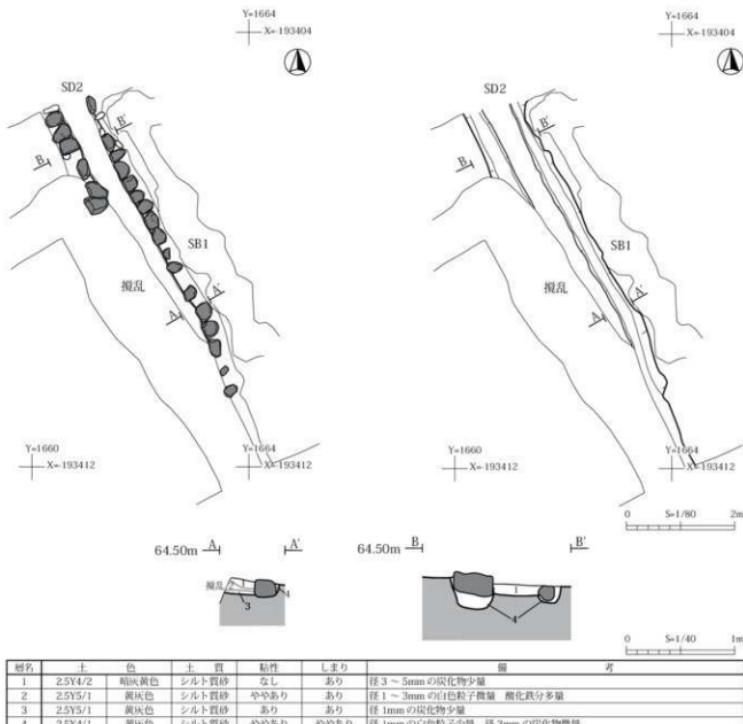
第1節 仙台城跡-亀岡トンネル進入路部-



第38図 SD2石組溝跡平面図、断面図、出土遺物

3) SD3 石組溝跡 (第39・40図、図版8-5～7)

S1・2-W64 グリッドに位置する。南東から北西へ直線的に延びる石組溝跡である。北端でSD2と接続する。残存する規模は、長さ 761cm、石組の内側の上端幅 35～50cm、下端幅 33～38cm、深さ 14～19cm を測る。石組は、長さ 21～47cm、幅 12～32cm、厚さ 11～24cm の自然礫が平坦な面を内側に向けて 1段並べられ下層を掘り窪め、シルト質砂を詰めて石を安定させている。掘り方の上端幅は 98～103cm、下端幅は 84～96cm、深さ 20cm を測り、主軸方位は N-26°-W を示す。断面形は逆台形を呈する。底面はほぼ平坦であり、傾斜はしていない。堆積土は 4 層からなり、いずれの層もシルト質砂である。遺物は主に 1 層から、18世紀末～19世紀前葉の大堀相馬産の碗、18世紀中葉～後葉の小野相馬産の皿、18世紀中葉～後葉の京焼の碗、在地産の焼塩壺の蓋、かわらけ、煙管の雁首等が出土している。そのうち、陶器は 18世紀末葉～19世紀前葉の大堀相馬産の碗、18世紀中葉～後葉の京焼の碗を各 1 点ずつ、磁器では 18世紀前葉～中葉の肥前産の蓋 1 点、在地産のかわらけ 1 点、焼塩壺の蓋 1 点を図示した。



第39図 SD3 石組溝跡平面図・断面図

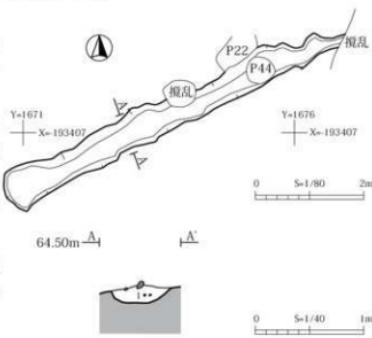
第1節 仙台城跡-亀岡トンネル進入路部-



第40図 SD3石組溝跡出土遺物

4) SD4溝跡（第41・42図、図版9-1・2）

S1-W63グリッドに位置する。南西から北東へ直線的に延びる溝跡である。北東端は、擾乱により削平されている。P22・44と重複し、いずれより古い。残存する規模は、長さ682cm、上端幅18～78cm、下端幅7～67cm、深さ14～22cmを測り、主軸方位はN-65°-Eを示す。断面形は皿形を呈する。底面は南西から北東へ緩やかに傾斜している。堆積土は、シルト質砂の単層である。遺物は、18世紀中葉～後葉の大堀相馬産の碗、17世紀中葉～後葉の肥前産磁器の皿、在地の土師質土器が出土している。そのうち、17世紀中葉～後葉の肥前産磁器1点を図示した。



第41図 SD4溝跡平面図・断面図

遺名	土色	土質	粘性	しまり	備考	日録番号
I	2.5Y5/4	黄褐色	シルト質砂	ややあり	あり 径1cmの2.5Y5/6 黄褐色シルトブロック多層 径1mmの青色粒子少量	



回収番号	写真回収番号	層位	種別	器種	部位	胎土	法量(cm)	高さ	時期	備考	登録番号
1	21-10	上層	磁器	皿	口縁～ 底部	密	12.4	(2.5)	肥前	17世紀中葉 ～後葉 内面：染付有	J-023

第42図 SD4溝跡出土遺物

5) SD5溝跡（第43図、図版9-3・4）

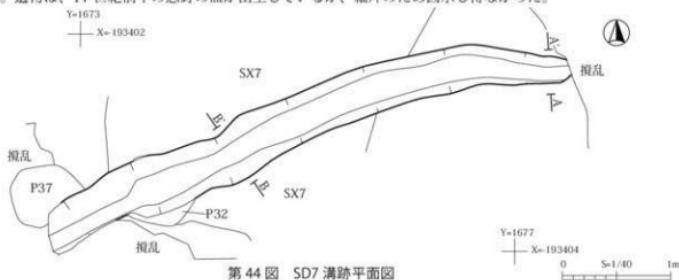
S1-W64 グリッドに位置する。南西から北東へ直線的に延びる溝跡である。SD6・8、1号杭状遺構と重複し、いずれの遺構よりも新しい。残存する規模は、長さ 233cm、上端幅 66 ~ 80cm、下端幅 25 ~ 59cm、深さ 44cm を測り、主軸方位は N-68°-E を示す。断面形は不整な逆台形を呈し、北側の壁には1段張り出しが見られる。堆積土は2層からなり、1層は砂質シルト、2層はシルト質砂である。遺物は出土していない。



第43図 SD5溝跡平面図・断面図

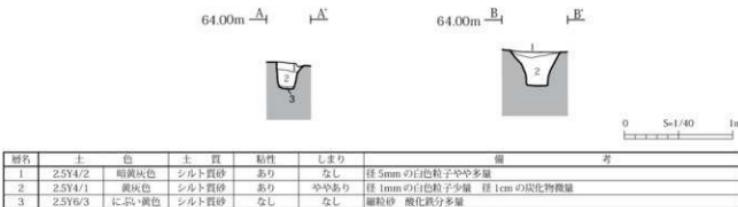
6) SD7溝跡（第44・45図、図版9-5）

S1-W63 グリッドに位置する。南西から北東へ緩く湾曲するように延びる溝跡である。両端は搅乱により削平されている。SX7、P32・37と重複し、SX7、P37より新しく、P32より古い。残存する規模は、総長 513cm、上端幅 27 ~ 54cm、下端幅 13 ~ 27cm、深さ 25 ~ 33cm を測り、主軸方位は N-71°-E を示す。断面形は箱形もしくは逆台形を呈する。底面は南西から北東へ緩やかに傾斜している。堆積土は3層からなり、いずれもシルト質砂である。遺物は、17世紀前半の志野の皿が出土しているが、細片のため図示し得なかった。



第44図 SD7溝跡平面図

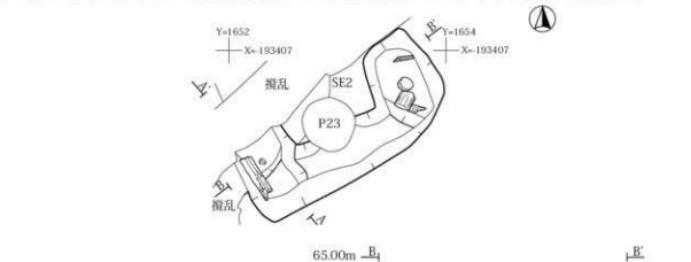
第1節 仙台城跡一亜岡トンネル進入路部-



第45図 SD7溝跡断面図

7) SD9布堀り (第46図、図版9-6・7)

S1-W65 グリッドに位置する。「コ」の字形を呈する遺構であり、形状が溝状なので「溝跡」としているが、柱穴を有する布堀りと考えられる。SE2、P23と重複し、SE2より新しく、P23より古い。残存する規模は、総長246cm、上端幅47～55cm、下端幅18～41cm、深さ49～74cmを測り、主軸方位はN-62°-Eを示す。断面形は逆台形を呈する。底面は、南西から北東にやや傾斜している。短辺部分の底面は平坦であるが、長辺部分の底面より13～17cm下に位置する。堆積土は8層からなり、1・3～5層はシルト質砂で、2・6～8層は砂質シルトである。遺構の平面形態や柱痕の検出から、布堀りと考えられる。遺物は2層から18世紀中葉～後葉の大壺相馬産の碗、5層から木材が出土している。陶器は細片のため図示し得なかったが、木材は写真のみ掲載した。

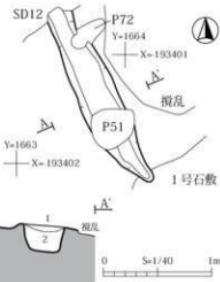


層名	土色	土質	粘性	しまり	備考
1	Z5Y6/1 黄灰色	シルト質砂	なし	あり	径5cmの礫少量
2	Z5Y6/4 にふ、黄色	砂質シルト	ややあり	あり	径5～1cmの礫少量
3	Z5Y5/1 褐色	シルト質砂	なし	あり	径2～3cmの礫少量
4	Z5Y6/1 褐色	シルト質砂	なし	あり	2.5Y7/2灰黃色シルトや多量 径10cmの礫微量
5	Z5Y6/1 褐色	シルト質砂	なし	あり	径3～5cmの礫やや多量
6	Z5Y7/2 灰褐色	砂質シルト	ややあり	ややあり	2.5Y7/4灰黃色シルト多量 径5cmの炭化物少量
7	Z5Y5/2 暗灰黄色	砂質シルト	ややあり	なし	2.5Y7/4灰黃色シルト多量
8	Z5Y5/2 暗灰黄色	砂質シルト	ややあり	ややあり	柱痕 (下面は空洞化) 径1～2mmの炭化物少量

第46図 SD9布堀り平面図・断面図

8) SD11溝跡（第47図、図版10-1・2）

S1-W64 グリッドに位置する。南東から北西へ直線的に延びる溝跡である。1号石敷、P51・72と重複し、1号石敷より新しく、P51・72より古い。残存する規模は、長さ 182cm、上端幅 11 ~ 37cm、深さ 10 ~ 20cm を測り、主軸方位は N-27°-E を示す。断面形は箱形を呈する。底面は、ほぼ平坦である。堆積土は 2 層からなり、1 層はシルト質砂、2 層は砂質シルトである。遺物は、1 層から 18 世紀中葉～後葉の大堀相馬産の碗が出土しているが、細片 64.00m -A4 のため図示し得なかった。

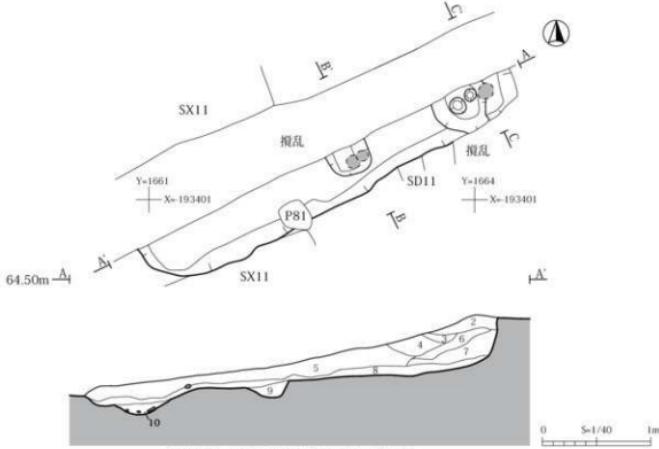


第47図 SD11溝跡平面図・断面図

層名	土色	土質	粘性	しまり	腐
1 2.5Y4/1	黄灰色	シルト質砂	なし	あり	往 2 ~ 3cm の礫少量 往 1 ~ 2cm の炭化物少量
2 2.5Y5/1	黄灰色	砂質シルト	ややあり	ややあり	往 0.5 ~ 1cm の黄褐色シルトブロック少量 往 5mm の炭化物少量

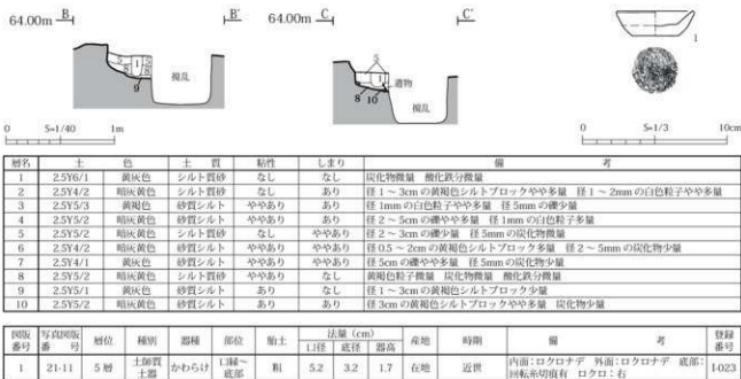
9) SD12布掘り（第48・49図、図版10-3～5）

N1 ~ S1-W64 グリッドに位置する。南西から北東へ直線的に延びる。また、柱痕を検出したことから布掘り状の遺構と考えられる。SD11、SX11、P81 と重複し、SD11、SX11、より新しく P81 より古い。残存する規模は、長さ 380cm、上端幅 30 ~ 49cm、下端幅 17 ~ 38cm、深さ 9 ~ 44cm を測り、主軸方位は N-25°-E を示す。断面形は逆台形を呈する。底面は南西から北東へ緩やかに傾斜しているが、北東端付近で少し傾斜が強くなる。また、当溝底部中央と北東端に 2箇所の窪みを検出した。その付近の平面及び断面で柱痕を検出したことから柱穴の掘り方と考えられる。堆積土は 10 層からなり、1・2・5・8 層はシルト質砂、3・4・6・7・9・10 層は砂質シルトである。溝状を呈する遺構形態と柱痕を検出したことにより建物ないしは壁の布掘りと考えられる。遺物は、5 層より 18 世紀中葉～後葉の京焼の碗、在地産のかわらけが出土している。そのうち、在地産のかわらけを 1 点図示した。



第48図 SD12布掘り平面図・断面図

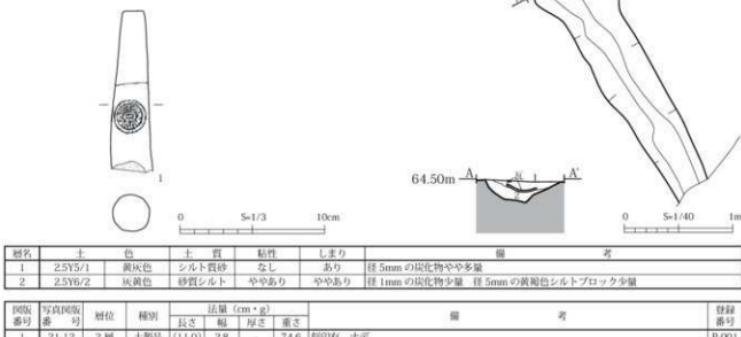
第1節 仙台城跡-亀岡トンネル進入路部-



第49図 SD12布掘り断面図・出土遺物

10) SD14溝跡（第50図、図版10-6・7）

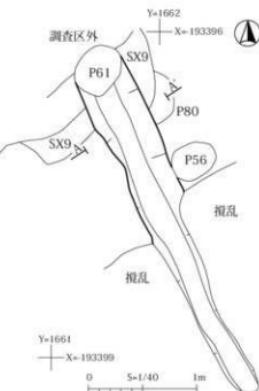
S1・2-W66 グリッドに位置する。南東から北西へ直線的に延びる溝跡である。残存する規模は、長さ 423cm、上端幅 24 ~ 72cm、下端幅 9 ~ 28cm、深さ 12 ~ 27cm を測り、主軸方位は N-28°・W を示す。断面形は逆台形を呈する。底面は南東から北西に緩やかに傾斜している。堆積土は 2 層からなり、1 層はシルト質砂、2 層は砂質シルトである。遺物は、1 層より在地産のかわらけや瓦、2 層から 18 世紀中葉～後葉の小野相馬産の皿、18 世紀の肥前産磁器の碗・皿、在地産と考えられる土製品が出土している。そのうち、土製品 1 点を図示した。



第50図 SD14溝跡平面図・断面図・出土遺物

11) SD15 溝跡 (第51図、図版11-1・2)

N1-W64 グリッドに位置する。南東から北西へ直線的に延びる溝跡である。南東側半分は、擾乱により上端を削平されている。SX9、P56・61・80 と重複し、SX9、P80 より新しく、P56・61 より古い。残存する規模は、長さ 320cm、上端幅 21 ~ 52cm、深さ 34 ~ 41cm を測り、主軸方位は N-25°・W を示す。断面形は U 字形を呈する。底面は北西から南東に僅かに傾斜している。堆積土は 3 層からなり、1 層はシルト質砂、2・3 層は砂質シルトである。遺物は出土していない。

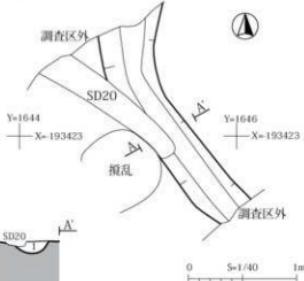


剖名	土色	土質	粘性	しまり	備考
1 2.5Y5/2	暗灰黄色	シルト質砂	なし	ややあり 径 3 ~ 5cm の塊多量 径 5mm の炭化物や多量	
2 2.5Y4/2	暗灰黄色	砂質シルト	ややあり	ややあり 径 3 ~ 10cm の塊多量	
3 2.5Y4/1	黄灰色	砂質シルト	ややあり	ややあり 部分的に粗粒砂と灰黄色シルトとのラミナ堆積	

第51図 SD15 溝跡平面図・断面図

12) SD19 溝跡 (第52図、図版11-3・4)

S3-W66 グリッドに位置する。南東から北西へ直線的に延び、途中くの字に屈曲し北へと延びる溝跡である。SD20 と重複し、SD20 より古い。残存する規模は、総長 204cm、上端幅 34 ~ 67cm、下端幅 14 ~ 25cm、深さ 12 ~ 14cm を測り、主軸方位は N-28°・W を示す。断面形は皿形を呈する。傾斜は見られなかった。堆積土は砂質シルトの單層である。遺物は出土していない。



剖名	土色	土質	粘性	しまり	備考
1 2.5Y4/2	暗灰黄色	砂質シルト	ややあり	ややあり 径 1 ~ 3cm の褐色シルトブロック少量 酸化鉄分や多量	

第52図 SD19 溝跡平面図・断面図

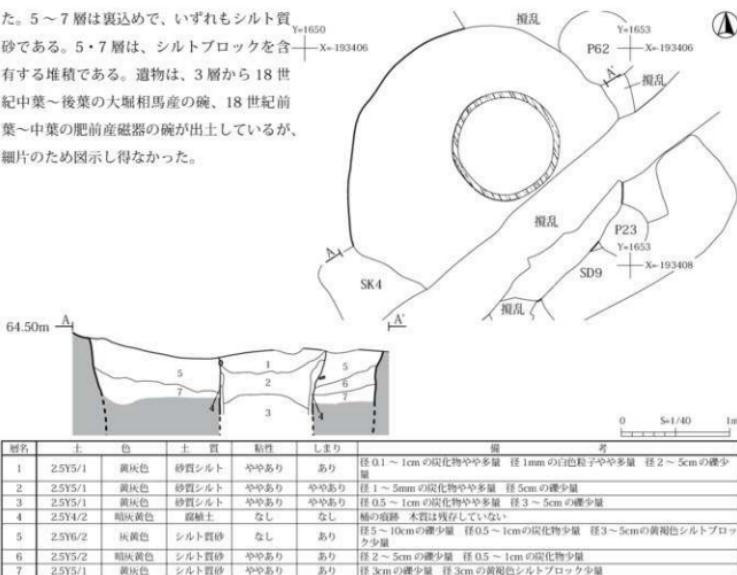
(3) 井戸跡

1) SE2 井戸跡 (第53図、図版11-5・6)

S1-W65 グリッドに位置する。井側に桶を使用した井戸跡である。調査時に、深くなることが想定されたため、安全性を考慮し、道路工事掘削深度までの調査にとどめた。SD9、SK4、P23・62 と重複し、P62 より新しく、SD9、SK4、P23 より古い。井側の径は約 80cm を測る。平面形は円形を呈し、断面形は筒形を呈する。掘り方の規模は、上端径約 273cm、下端径約 245cm、深さ 70cm 以上である。平面形は不整な円形を呈し、断面形は筒型を呈する。堆積土は 7 層からなり、1 ~ 3 層は、砂質シルトで井側内の堆積土である。4 層は、腐植土で井側に使用されていた桶の側板が腐食して土壌化したものである。木質が僅かに確認されたが腐食が激しく図化し得なかっ

第1節 仙台城跡-亀岡トンネル進入路部

た。5～7層は裏込めで、いずれもシルト質砂である。5・7層は、シルトブロックを含む有する堆積である。遺物は、3層から18世紀中葉～後葉の大堀相馬産の碗、18世紀前葉～中葉の肥前産磁器の碗が出土しているが、細片のため図示し得なかった。

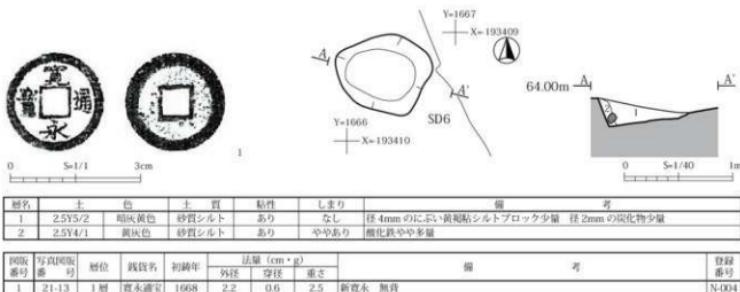


第53図 SE2井戸跡平面図・断面図

(4) 土坑

1) SK2 土坑 (第54図、図版11-7・8)

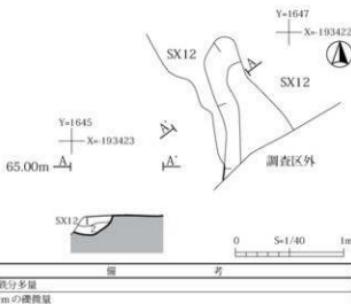
S1-W64 グリッドに位置する。SD6 と重複し、SD6 より新しい。残存する規模は、長軸 83cm、短軸 73cm、深さ 26cm を測り、主軸方位は N-70°-W を示す。平面形は不整な円形で、断面形は逆台形を呈する。底面は南東から北西へ傾斜している。堆積土は 2 層からなり、いずれも砂質シルトである。遺物は、寛永通宝 1 点を図示した。



第54図 SK2 土坑平面図・断面図・出土遺物

2) SK11 土坑 (第55図、図版12-1)

S3-W66 グリッドに位置する。Ⅲ層上面で検出された SX12 と重複し、SX12 より古い。南東端は調査区外へ延びる。残存する規模は、長軸 108cm、短軸 71cm、深さ 11cm を測り、主軸方位は N-18°-W を示す。平面形は不明で、断面形は U 字形を呈すると考えられる。底面は中央がやや崖んでいる。堆積土は 2 層からなり、1 層は粘土質シルト、2 層は砂質シルトである。遺物は出土していない。

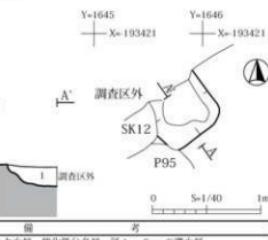


第55図 SK11 土坑平面図・断面図

3) SK14 土坑 (第56図、図版12-3)

S3-W66 グリッドに位置する。SK12、P95 と重複し、P95 より新しく、SK12 より古い。残存する規模は、長軸 61cm、短軸 49cm、深さ 21cm を測り、主軸方位は N-50°-E を示す。65.00m A'-A'

平面形は隅丸方形で、断面形は逆台形を呈する。底面は平坦である。堆積土は、粘土質シルトの単層である。遺物は、18世紀末葉～19世紀初頭の大堀相馬家の碗が出土しているが、細片のため図示し得なかった。



第56図 SK14 土坑平面図・断面図

4) SK16 土坑 (第57図、図版12-2・3)

S3-W66 グリッドに位置する。南西側を擾乱により削平され、北西側は調査区外へ延びる。SD20 と重複し、SD20 より古い。残存する規模は、長軸 83cm、短軸 40cm、深さ 11cm を測り、主軸方位は N-51°-E を示す。平面形は不明で、断面形は皿形を呈すると考えられる。底面は確認されなかった。堆積土は、粘土質シルトの単層である。遺物は出土していない。



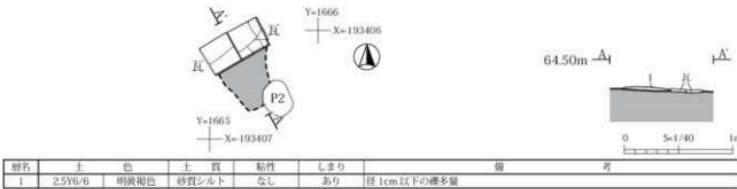
第57図 SK16 土坑平面図・断面図

(5) 性格不明遺構

1) SX1 性格不明遺構 (第58図、図版12-4)

S1-W64 グリッドに位置する。瓦による構造物の一部と考えられる遺構である。P2 と重複し P2 より古い。長さ約 30cm、幅約 26cm、厚さ約 5cm の平瓦が東西方向に 2 枚並んだ状態で検出された。瓦の周囲に掘り方は見られず、そのまま据えられたと考えられる。この並べられた瓦の南東側に、明黄褐色砂質シルトが敷かれた範囲を検出した。瓦とシルトが敷かれた範囲の規模は、長軸 75cm、短軸 58cm を測る。瓦が掘り込みを持たないこと、断面の様子から瓦の下から明黄褐色砂質シルトが確認されなかったことから、瓦をそのまま置いた後に明黄褐色砂質シルト敷いたと考えられる。なお、明黄褐色砂質シルトの範囲はトーンで示した。遺物は瓦のみであった。

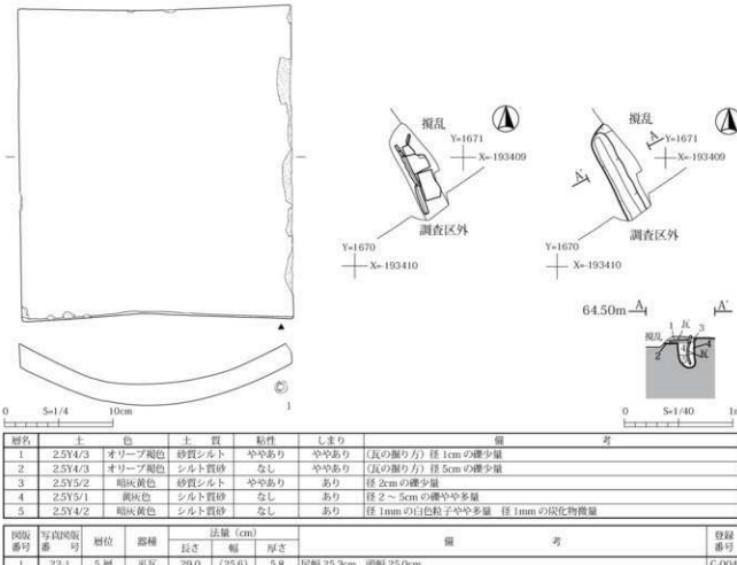
第1節 仙台城跡一亜岡トンネル進入路部



第58図 SX1 性格不明遺構平面図・断面図

2) SX4 性格不明遺構（第59図、図版12-5・6）

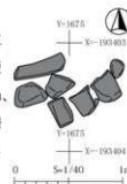
S1-W63 グリッドに位置する。SX1と同じく、瓦による構造物の一部と考えられる。西側は搅乱により削平され、南東側は調査区外へと延びる。南東から北西へ平置きされた平瓦と、同方向へ遺構の壁に沿うように縱置きされた平瓦を検出した。残存する規模は、長軸 56cm を測り、主軸方位は N=30°-W を示す。平置きされた瓦の掘り方の規模は、長軸 87cm、短軸 30cm、深さ 5cm を測る。平面形は不明で、断面形は逆台形を呈すると考えられる。平置きされた瓦を取り除いた下から、縱置きされた瓦とその掘り方を検出した。この掘り方の規模は、長さ 84cm、上端幅 17 ~ 20cm、下端幅 6 ~ 10cm、深さ 25 ~ 27cm を測る。傾斜は見られなかった。断面形は U 字形を呈する。堆積土は 5 層からなり、1・3 層は砂質シルト、2・4・5 層はシルト質砂である。2 ~ 5 層は平置きもしくは縱置きした瓦を固定するための掘り方である。遺物は、平瓦のみでそのうち刻印がある平瓦を 1 点図示した。



第59図 SX4 性格不明遺構平面図・断面図・出土遺物

3) SX5 性格不明遺構（第60図、図版12-7）

S1-W63 グリッドに位置する。平滑な面を描いた自然礫を並べ、その平坦側面に板状に加工された礫を平置きして並べている集石遺構と考えられる。残存する規模は、長軸 106cm、短軸 64cm を測り、主軸方位は N-62°-E を示す。掘り方は確認されなかった。長さ 17 ~ 49cm、幅 12 ~ 22cm、厚さ 10cm ~ 18cm の礫を直接地面に据えていると考えられる。礫は、自然礫をそのまま使用しているものから、加工して板状にしているものまで見られる。遺物は出土していない。

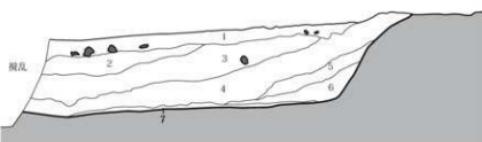
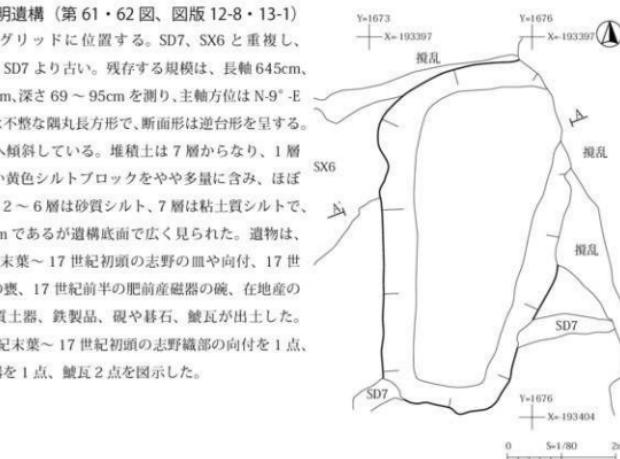


第60図 SX5 性格不明遺構平面図

4) SX7 性格不明遺構（第61・62図、図版12-8・13-1）

N1 ~ S1-W63 グリッドに位置する。SD7、SX6 と重複し、SX6 より新しく、SD7 より古い。残存する規模は、長軸 645cm、短軸 215 ~ 362cm、深さ 69 ~ 95cm を測り、主軸方位は N-9°-E を示す。平面形は不整な隅丸長方形で、断面形は逆台形を呈する。底面は南から北へ傾斜している。堆積土は 7 層からなり、1 層はシルトで、びい黄色シルトブロックをやや多量に含み、ほぼ平らに堆積する。2 ~ 6 層は砂質シルト、7 層は粘土質シルトで、層厚は薄く約 4cm であるが遺構底面で広く見られた。遺物は、4 層より 16 世紀末葉～17 世紀初頭の志野の皿や向付、17 世紀後半の岸窯産の甕、17 世紀前半の肥前産磁器の碗、在地産の瓦質土器、土師質土器、鉄製品、硯や碁石、鍼瓦が出土した。そのうち、16 世紀末葉～17 世紀初頭の志野鐵部の向付を 1 点、在地産の瓦質土器を 1 点、鍼瓦 2 点を図示した。

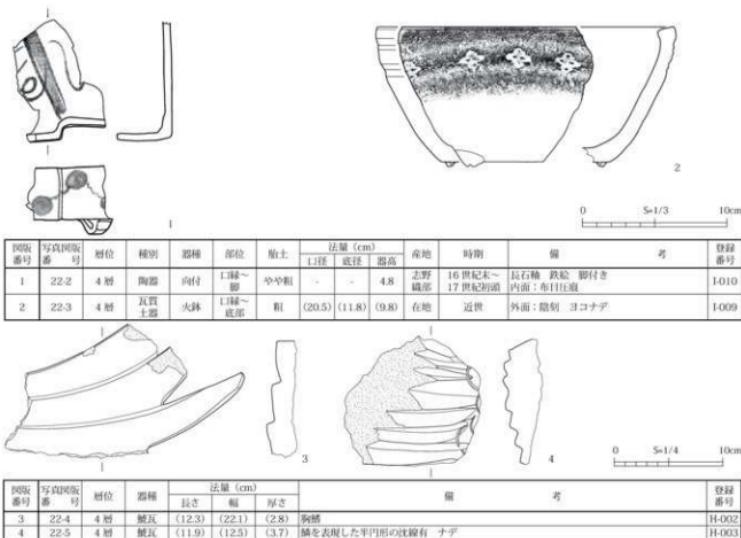
64.00m A-A'



番号	土色	土質	粘性	しまり	層	特
1	2.5Y5/2	暗灰黄色	シルト	あり	1	径 5cm の 2.5Y6/3 にびい黄色シルトブロックやや多量 酸化鉄分少量 径 3 ~ 5cm の礫少量
2	2.5Y5/2	暗灰黄色	砂質シルト	あり	2	酸化鉄分少量
3	2.5Y4/2	暗灰黄色	砂質シルト	ややあり	3	径 1 ~ 10cm の塊少量 酸化鉄分
4	2.5Y4/2	暗灰黄色	砂質シルト	あり	4	酸化鉄分多量
5	2.5Y5/4	黄褐色	砂質シルト	ややあり	5	径 1 ~ 3cm の 2.5Y6/6 明黄褐色砂質シルトブロックやや多量 酸化鉄分少量
6	2.5Y5/3	黄褐色	砂質シルト	ややあり	6	径 1 ~ 3cm の 2.5Y6/6 明黄褐色砂質シルトブロック多量 酸化鉄分少量
7	2.5Y7/2	灰褐色	粘土質シルト	あり	7	酸化鉄分多量

第61図 SX7 性格不明遺構平面図・断面図

第1節 仙台城跡-亀岡トンネル進入路部-

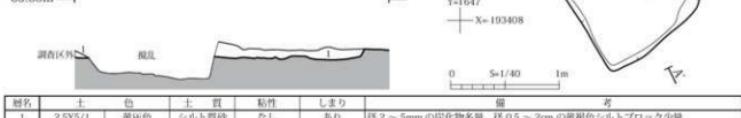


第62図 SX7 性格不明遺構出土遺物

5) SX8 性格不明遺構（第63図、図版13-2・3）

S1-W66 グリッドに位置する。遺構の北西側は調査区外へ延びる。1号木箱埋設遺構と重複し、これより古い。残存する規模は、長軸 264cm、短軸 110cm、深さ 13cm を測り、主軸方位は N-32°-W を示す。平面形は長方形で、断面形は皿形を呈する。底面は概ね起伏が見られた。堆積土はシルト質砂の単層である。遺物は、近世の肥前産白磁の碗が出土しているが、細片のため図示し得なかった。

65.00m A



第63図 SX8 性格不明遺構平面図・断面図

6) SX13 性格不明遺構（第64図、図版13-4）

S3-W66 グリッドに位置する。遺構の東側は、調査区外に延びる。残存する規模は、長軸 78cm、短軸 17cm、深さ 11cm を測り、主軸方位は N-47°-E を示す。平面形は不整な梢円形で、断面形は皿形を呈すると考えられる。底面は南西側がやや窪んでいる。堆積土は粘土質シルトの単層である。遺物は出土していない。



(6) 石列

1) 2・4号石列（第65図、図版13-5）

N1～S1-W63 グリッドに位置する。現地での調査時は、2号石列と4号石列とに分けて調査を行なったが、整理段階で再検討をした結果、礫の標高が2号石列・4号石列とともに同じような高さを示したため同一の施設として提示する。また、2号石列から南西に約40cmのところにSB2が位置しており、いずれも同一の軸方位であることと、2号石列の礫の標高とP20で確認された礫石の標高がほぼ揃うことから、SB2に付随する建物に関連する遺構と考えられる。

[2号石列]

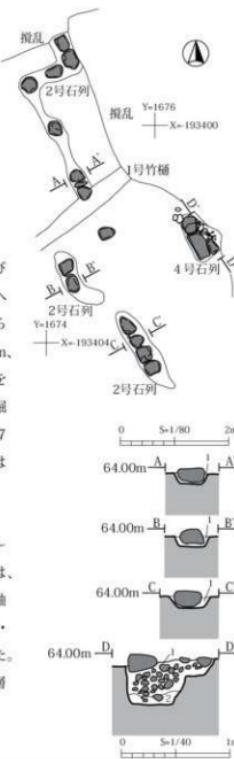
3箇所に分断された状態で検出された。北側の部分は、南東から北西に延び途中クランクし、また北西方向へ延びる。中央部分は、南端附近が南東方向へ屈曲するが、この屈曲部分より北側は北西に延びる。南側の部分は、南東から北西へ直線的に延びる。掘り方の規模は、総長693cm、上端幅は12～44cm、下端幅5～33cm、深さ8～11cmを測り、主軸方位はいずれもN-26°-Wを示す。掘り方の断面形は、逆台形を呈する。底面に傾斜は見られなかった。掘り方に据えられた石列の規模は、総長546cmを測り、長さ23～36m、幅7～31cm、厚さ11～18cmの自然礫が平坦な面を上に向けて並ぶ。堆積土はシルト質砂の単層である。遺物は出土していない。

[4号石列]

残存する石列の規模は、長軸84cmを測り、長さ27～51cm、幅16～30cm、厚さ16～23cmの自然礫や加工された礫が3基並ぶ。掘り方の規模は、長軸92cm、短軸60cm、中端の深さは15cm、最深部は42cmを測り、主軸方位はN-27°-Wを示す。平面形は不整な長方形を呈する。断面形は、南壁・東壁はほぼ垂直に立ち上がり、北壁に段がある。底面に傾斜は見られなかった。堆積土は2層からなり、1層はシルト質砂、2層は砂質シルトで、いずれの層にも径3～10cmの礫が確認された。遺物は出土していない。

層名	土色	土質	粘性	しまり	層	考
1	2.5Y5/4	黄褐色	シルト質砂	なし	あり	[径3～10cmの礫多量]
2	2.5Y6/1	黄褐色	砂質シルト	ややあり	あり	[径5mmの白色粒子や多量、径3～5cmの礫少量]

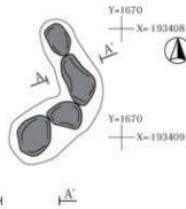
第65図 2・4号石列平面図・断面図



第1節 仙台城跡-亀岡トンネル進入路部-

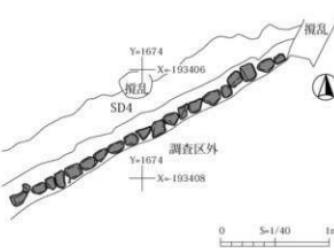
2) 3号石列（第66図、図版13-6・7）

S1-W64 グリッドに位置する。南西から北東へ延び途中北西に屈折する石列遺構である。掘り方は総長164cm、上端幅32～49cm、下端幅22cm～36cm、深さ12～15cmを測り、主軸方位は屈折部分を境に北側はN-27°・W、南側はN-49°・Eを示す。平面形は逆くの字状を呈し、掘り方の断面形は逆台形を呈する。底面は平坦である。残存する石列の規模は、総長142cmを測り、長さ31～49cm、幅20～31cm、厚さ9～14cmの自然礫が4基並ぶ。堆積土は、シルト質砂の単層である。遺物は出土していない。



3) 5号石列（第67図、図版14-1）

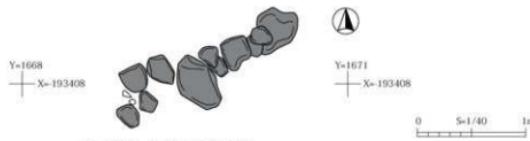
S1-W63 グリッドに位置する。SD4に沿って南西から北東に延びる石列遺構である。残存する石列の規模は、長さ285cmを測り、主軸方位はN-62°・Eを示す。掘り方は検出されなかった。石列は、長さ19～35cm、幅16～27cm、厚さ8～22cmの自然礫が平坦な面を北西に向けて並ぶ。SD4と平行しており、同時期に機能していた可能性が考えられる。遺物は出土していない。



第67図 5号石列平面図

4) 6号石列（第68図、図版14-2）

S1-W63 グリッドに位置する。南西から北東へ延びる石列遺構である。残存する規模は、長さ188cmを測り、主軸方位はN-62°・Eを示す。掘り方は検出されなかった。石列は、長さ21～54cm、幅14～38cm、厚さ2～25cmの自然礫や一部加工された礫が、平坦な面を北西方向に向けて並ぶ。遺物は出土していない。



第68図 6号石列平面図

5) 7号石列（第69図、図版14-3）

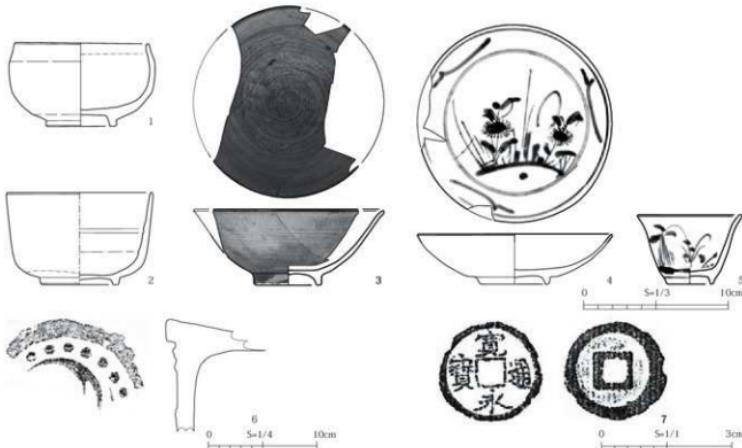
S1-W65 グリッドに位置する。南西から北東に延びる石列遺構である。残存する掘り方の規模は、長さ130cm、幅46cm、深さ5～13cmを測り、主軸方位はN-28°・Wを示す。平面形は不整な隅丸長方形で、断面形は逆台形を呈する。底面は、北東側の大型礫付近が窪んでいる。残存する石列の規模は、長さ82cmを測る。南西側は石が欠損しており北東側に、礎石と考えられる長さ26～34cm、幅21cm、厚さ9～15cmの平坦な面を上に向けている自然礫が2基並び、下には径1～8cmの根固め石を敷いている。検出状況により建物の基礎跡と考えられる。堆積土は2層からなり、いずれも砂質シルトの掘り方である。遺物は出土していない。



第69図 7号石列平面図・断面図

(7) IV層出土遺物 (第70図、版図 22-6 ~ 23-3)

IV層からの出土遺物は、総数67点出土した。内訳は陶器26点、磁器26点、土師質土器7点、瓦4点、金属製品1点、石製品1点、土製品2点である。陶磁器に関しては、17世紀前半～18世紀後半の遺物が出土している。これら出土した遺物から7点図示した。また、堤焼の碗が1点出土しており、19世紀前半と考えられるが、18世紀末葉まで遡る可能性もあるため、今回参考資料として図示した。



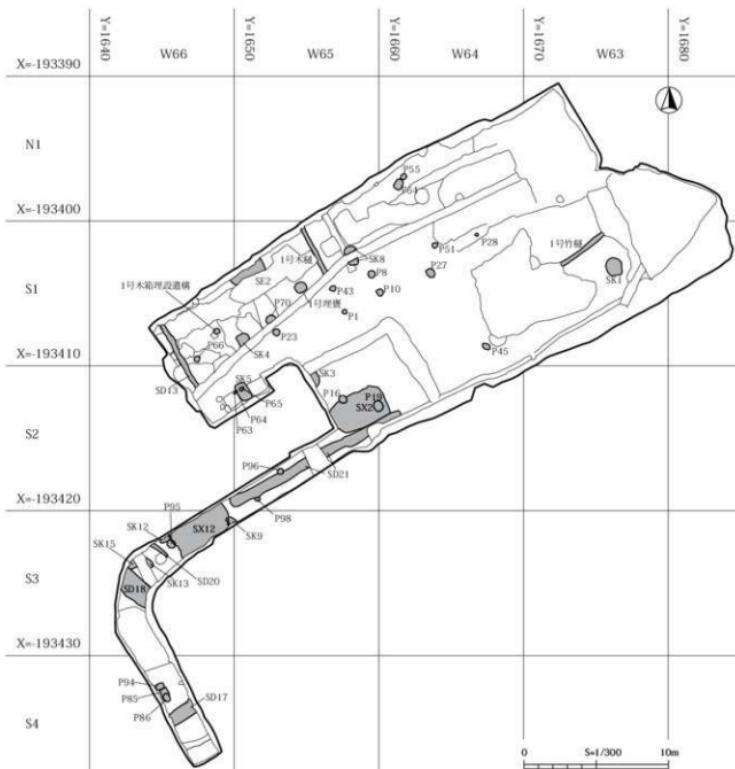
登録番号 番号	写真回数 番号	グリッド	種別	器種	部位	胎	法量(cm)			产地	時期	備考	登録番号
							上径	底径	器高				
1	22-6	S1-W63	陶器	蓋物	口縁～高台	密	9.2	4.8	5.8	肥前	18世紀?	灰釉 貫入有 口縁部：釉ぬぐい ロクロ：左	I-057
2	22-7	S1-W63	陶器	筒形鏡	口縁～高台	やや粗	(10)	5.2	6.4	堺	19世紀前半	黒釉 内面：沈継	I-132
3	22-8	S1-W63	陶器	瓶	口縁～高台	密	13.3	4.6	5.2	唐津	18世紀	古化粧土 内面：刷毛目 内面山形部に象嵌有 外面：刷毛目 タクミ付け 砂付着	I-074
4	22-9	S1-W63	磁器	皿	口縁～高台	密	13.4	4.8	3.6	肥前	17世紀後半	内面：壺付有 圓窓 見込み：草花文 二重圓窓 タクミ付け 砂付着	J-042
5	23-1	S1-W63	磁器	小杯	口縁～高台	密	7.1	3.2	4.8	肥前	17世紀末～ 18世紀前半	外面：草花文 圓窓 タクミ付け 砂付着 鏊反	J-043
登録番号 番号	写真回数 番号	グリッド	器種	法量(cm)			備考			登録番号			
				長径	幅	厚さ							
6	23-3	S1-W63	軒丸瓦	9.1	(6.3)	6.8	頭幅8.7cm	文様幅7.2cm	周縁幅2.2cm	瓦当厚み2.1cm	通珠三文巴(左巻)	F-001	
登録番号 番号	写真回数 番号	グリッド	銘抜名	法量(cm・g)			備考			登録番号			
				外径	穿径	重さ							
7	23-2	S1-W63	賣水通室	1636	2.4	0.6	1.9	古窓水 無背			N-002		

第70図 IV層出土遺物

第1節 仙台城跡一亜岡トンネル進入路部

3 III層上面検出遺構と出土遺物

III層は、亜岡トンネル進入路部のほぼ全面において確認された。検出した遺構は、溝跡4条、井戸1基、土坑9基、性格不明遺構2基、埋甕1基、木箱埋設遺構1基、竹籠1条、木樋1条、ピット24基である。



第71図 III層上面遺構配置図

(1) 溝跡

1) SD13 溝跡 (第72図、図版14-4・5)

S1・2-W66 グリッドに位置する。北西から南東へ直線的に延びる溝跡である。残存する規模は、長さ 490cm、上端幅 27 ~ 39cm、下端幅 12 ~ 27cm、深さ 8 ~ 16cm を測り、主軸方位は N-29°-W を示す。断面形は逆台形を呈する。底面は起伏があるが、傾斜は確認されなかった。堆積土は、II b 層に類似する砂質シルトの単層である。当溝の東側には、IV 層上面で検出された同じような主軸方位を持つ、SD14 が並行して延びる。遺物は、19世紀代の大堀相馬産の鍋が出土しているが、細片のため図示し得なかった。

65.00m Δ4

Δ

番号	土色	土質	粒性	しまり	備考
1	2.5V6/1 黄灰色	砂質シルト	やわらか	径 1 ~ 5mm の炭化物や多量 径 1 ~ 3cm の礫や多量	

第72図 SD13 溝跡平面図・断面図

2) SD17 石組溝跡 (第73図、図版14-6)

S4-W66 グリッドに位置する。南西から北東へ直線的に延びる石組溝跡である。南西側は複雑により削平されており、溝の両端は調査区外へと延びる。P92・93 と重複し、いずれより新しい。残存する規模は、長さ 175cm、石組内側の上端幅は 31 ~ 39cm、下端幅は 28 ~ 34cm、深さ 41 ~ 45cm を測り、主軸方位は N-60°-E を示す。石組に使用されている礫は、長さ 54 ~ 69cm、幅 43 ~ 79cm、厚さ 14 ~ 23cm を測り、両側共 2段積みである。石組には自然礫をそのまま使用したり、一部を加工した礫が見られる。掘り方の規模は、長さ 183cm、下端幅 74 ~ 86cm 以上を測る。断面形は逆台形を呈すると考えられる。底面は平坦で、南西から北東へ緩やかに傾斜している。堆積土は 5 層からなり、1・2 層は砂質シルト、3 層はシルト質砂である。4 層は砂質シルトで、5 層はシルト質砂で共に裏込めの堆積である。遺物は 18世紀末葉～19世紀初頭の大堀相馬産の土瓶、19世紀前葉～中葉の瀬戸・美濃産磁器の碗が、いずれも 4 ~ 5 層裏込めから出土している。そのうち、19世紀代の瀬戸・美濃産磁器の碗を 1点図示した。

番号	土色	土質	粒性	しまり	備考
1	2.5V4/2 暗紅色	砂質シルト	やわらか	あり	2.5V5/4 黄褐色砂質シルト少量 煙化鉄分微量
2	2.5V5/6 黄褐色	砂質シルト	あり	あり	2.5V6/3 に 5. 黄褐色シルト少量 煙化鉄分微量
3	2.5V5/2 暗紅色	シルト質砂	あり	やわらか	2.5V6/4 明黄色砂質シルト少量 径 3 ~ 5cm の礫少量
4	2.5V4/2 暗紅色	砂質シルト	やわらか	あり	径 0.5 ~ 2cm の炭化物少量 径 3 ~ 7cm の礫少量
5	2.5V4/1 黄褐色	シルト質砂	やわらか	あり	径 1 ~ 3cm の炭化物や多量 径 3 ~ 10cm の礫少量

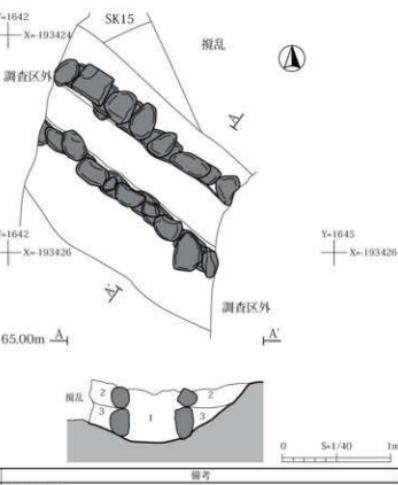
図版 写真出版 番号	層位	種別	器種	部位	出土 寸法	法量 (cm) 寸法	底径 底深	产地	時期	備 考	登録 番号
1	23-4	4 層	磁器	陶瓶	上縁～体部	直 -	-	(3.7) 濃赤・美濃	19世紀～	内面：染付有 外面：染付有	J-022

第73図 SD17 石組溝跡平面図・断面図・出土遺物

第1節 仙台城跡-亀岡トンネル進入路部-

3) SD18 石組溝跡（第74図、図版15-1）

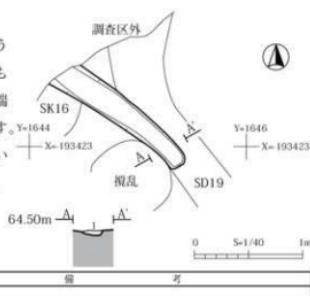
S3-W66 グリッドに位置する。南東から北西へ直線的に延びる石組溝跡である。SK15と重複し、調査区外 SK15より新しい。残存する規模は、長さ 218cm、石組内側の上端幅は、38～44cm、下端幅 32～40cm、深さ 44～48cm を測る。石組に使用されている礫は、長さ 16～35cm、幅 10～28cm、厚さ 12～28cm を測る。掘り方の上端幅は 147cm～158cm、下端幅は 48～52cm を測り、主軸方位は N-53°-W を示す。断面形は U字形を呈する。底面は、緩やかに北西から南東へ傾斜している。堆積土は 3 層からなり、いずれも砂質シルトである。1 層は IIa 層に類似している。2・3 層は裏込めである。遺物は、平瓦と棟付平瓦が 2～3 層より出土しているが、細片のため図示し得なかった。



第74図 SD18 石組溝跡平面図・断面図

4) SD20 溝跡（第75図、図版15-2・3）

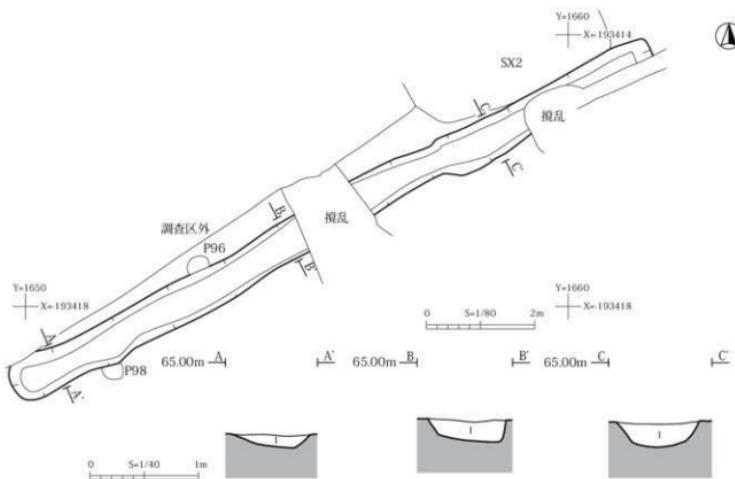
S3-W66 グリッドに位置する。南東から北西へやや弧を描くよう に延びる溝跡である。SD19、SK16 と重複し、いずれの遺構よりも新しい。残存する規模は、総長 139cm、上端幅 17～30cm、下端幅 13～21cm、深さ 5～9cm を測り、主軸方位は N-52°-W を示す。断面形は皿形を呈する。底面は北西から南東へ緩やかに傾斜している。堆積土は粘土質シルトの単層である。遺物は出土していない。



第75図 SD20 溝跡平面図・断面図

5) SD21 溝跡（第76図、図版15-4）

S2-W64・65 グリッドに位置する。南西から北東へ直線的に延びる溝跡である。SX2、P96・98 と重複し、いずれの遺構よりも新しい。残存する規模は、長さ 13.26m、上端幅 58～80cm、下端幅 30～63cm、深さ 13～25cm を測り、主軸方位は N-62°-E を示す。断面形は逆台形を呈する。底面は、北東から南西へ傾斜している。堆積土は砂質シルトの単層で、IIa 層に類似する。遺物は出土していない。



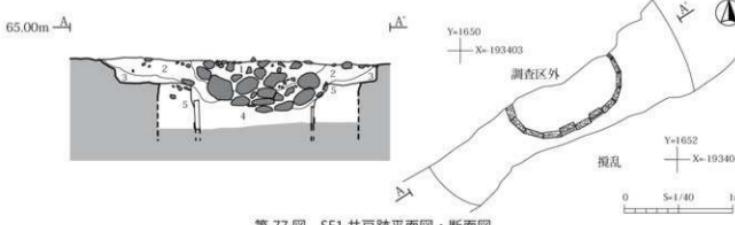
層名	土色	土質	粘性	しまり	備考
I	2.5W6/4 にふい黄色	砂質シルト	ややあり	あり	径1～5cmの2.5Y5/6黄褐色シルトブロック多量 径3～5cmの礫多量

第76図 SD21溝跡平面図・断面図

(2) 井戸

1) SE1 井戸跡 (第77・78図、図版15-5)

S1-W65 グリッドに位置する。調査区の端に位置し、深くなると想定されるため、安全性を考慮し工事掘削深度までの調査にとどめた。掘り方の上端幅256cm、下端幅は182cm、深さ100cm以上を測る。途中に径184cmを測る段を有する。井側の側板内径は107cmを測る。平面形は梢円形を呈する。壁面は底部から上へほぼ垂直に立ち上がり、中端を経て北東側はほぼ垂直に立ち上がり、南西側の壁は外へ広がるように斜めに立ち上がる。側板は廃絶時に上部が激しく破壊されている。側板は、長さ9～27cm以上、幅12～18cm、厚さ2～4cmを測る。桶の側板を束ねる縫には、竹材を編んだものを使用している。堆積土は5層からなり、1・2・4・5層は砂質シルト、3層はシルト質砂である。1・2層には、廃絶時に廃棄されたと考えられる、径3～30cmの礫を多量に検出した。5層は掘り方である。遺物は出土していない。



第77図 SE1 井戸跡平面図・断面図

第1節 仙台城跡－亀岡トンネル進入路部－

65.00m A

A'



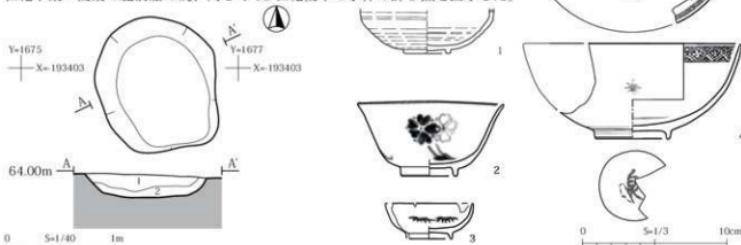
番号	土色	土質	粘性	しまり	備考
1	2.5Y4/1	暗灰色	砂質シルト	なし	あり 径20~30cmの礫多量 粒0.2~3cmの炭化物多量
2	2.5Y6/1	暗灰色	砂質シルト	なし	あり 径0.2~2cmの炭化物多量 粒3~10cmの礫多量
3	5Y6/2	灰オリーブ色	シルト質砂	なし	ややあり 径1~5mmの炭化物少量
4	2.5Y5/2	暗灰黄色	砂質シルト	なし	あり 径5~10cmの礫少量
5	5Y6/2	灰オリーブ色	砂質シルト	ややあり	あり 径2~5cmの2.5Y6/6明黄褐色シルトブロック多量 粒5~10cmの礫少量

第78図 SE1 井戸跡立面図

(3) 土坑

1) SK1 土坑 (第79図、図版16-1・2)

S1-W63 グリッドに位置する。残存する規模は、長軸124cm、短軸113cm、深さ22cmを測り、主軸方位はN17°Wを示す。平面形は不整な円形で、断面形は逆台形を呈する。底面は平坦である。堆積土は2層からなり、1層は砂質シルトで、出土遺物はこの層に集中している。2層は粘土質シルトである。遺物は、1層から38点、2層から11点、総数49点出土している。内訳は陶器が25点、磁器が20点、土師質土器3点、軟質施釉陶器1点である。陶器は、18世紀末葉～19世紀初頭の大堀相馬産の碗・皿、同じく19世紀前葉～中葉の土瓶、19世紀の漁戸・美濃産陶器染付の皿、18世紀中葉～後葉の肥前産磁器の蕎麦猪口、19世紀前葉～中葉の漁戸・美濃産磁器の碗が見られる。49点の出土遺物から、18世紀代の京・信楽焼系の陶器の碗1点、磁器では19世紀代の漁戸・美濃産の碗、18世紀中葉～後葉の肥前産の碗、同じく18世紀後半の小杯の計3点を図示した。

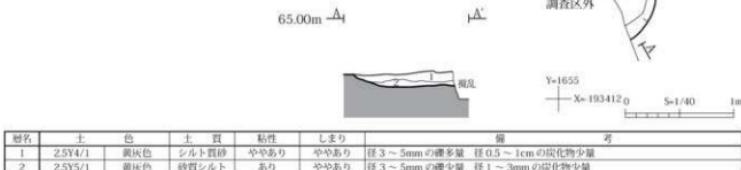


番号	土色	土質	粘性	しまり	備考								
1	2.5Y4/2	暗灰黄色	砂質シルト	ややあり	あり 径1~2cmの礫多量 炭化物多量 炭化鉄分多量								
2	2.5Y3/1	黒褐色	粘土質シルト	あり	あり 径1~2cmの褐色粘土ブロック多量 砂多量								
図版写真版番号	部位	種別	器種	部位	胎土	法線	底径	高径	器高	岸地	時期	備考	登録番号
1	23-5	2層	陶器	碗	体部～高台	やや密	-	(3.2)	(3.1)	京・信楽系	18世紀	白濁釉 ロクロ：左	J-017
2	23-6	1層	磁器	磁碗	口縁～高台	密	10	4	5.1	漁戸・美濃	19世紀	花文	J-012
3	23-7	1層	磁器	小杯	口縁～高台	密	6.0	3.0	2.5	肥前	18世紀中葉～後葉	外面：花文	J-105
4	23-8	1層	磁器	碗	口縁～高台	密	15.2	5.2	6.6	肥前	18世紀後半	外面：紅葉文 内面：四方理 足込み：二重 内面：紅葉文 高台内：上書き「泉」二重開 縫 塗墨痕有	J-013

第79図 SK1 土坑平面図・断面図・出土遺物

2) SK3 土坑 (第 80 図、図版 16-3)

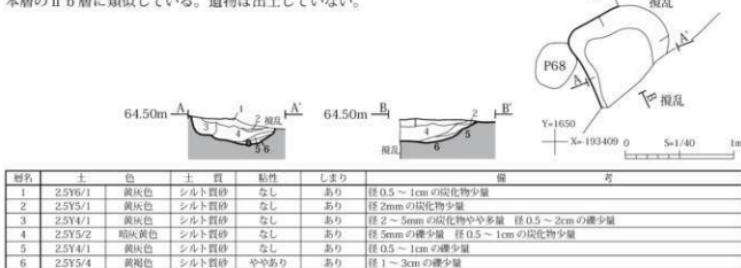
S2-W65 グリッドに位置する。北側を擾乱により削平され、西側は調査区外へ延びる。残存する規模は、長軸 93cm、短軸 47cm、深さ 11cm を測り、主軸方位は N-30°-W を示す。平面形は橢円形で、断面形は皿形を呈すると考えられる。底面は平坦である。堆積土は 2 層からなる。遺物は出土していない。



第 80 図 SK3 土坑平面図・断面図

3) SK4 土坑 (第 81 図、図版 16-4)

S1-W65 グリッドに位置する。P68 と重複し、P68 より新しい。残存する規模は、長軸 84cm、短軸 70cm、深さ 17 ~ 27cm を測り、主軸方位は N-58°-E を示す。平面形は不整な方形で、断面形は逆台形を呈する。底面は南西から北東へ傾斜している。堆積土は 6 層からなり、いずれもシルト質砂である。1 層は、基本層の II b 層に類似している。遺物は出土していない。



第 81 図 SK4 土坑平面図・断面図

4) SK5 土坑 (第 82 図、図版 16-5)

S2-W65 グリッドに位置する。SD2、SX10、P64 と重複し、P64 より古く、SD2、SX10 よりも新しい。残存する規模は、長軸 131cm、短軸 83cm、深さ 38cm を測り、主軸方位は N-30°-W を示す。平面形は隅円方形で、断面形は逆台形を呈する。底面は中央付近が窪んでいる。堆積土は 6 層からなり、1・3・4・6 層はシルト質砂、2・5 層は砂質シルトである。5 層には腐食した木質が多量に含まれており、遺物もこの層より出土している。遺物は、19 世紀前葉～中葉の大堀相馬産の皿、18 世紀前葉～中葉の肥前産磁器の碗、在地産の土師質土器、瓦質土器が出土している。そのうち、18 世紀中葉～後葉の肥前産磁器の碗を 1 点図示した。

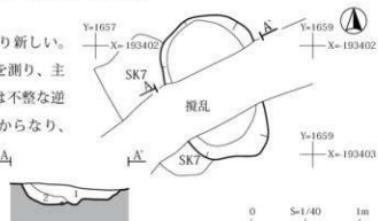
第1節 仙台城跡一亜岡トンネル進入路部



第82図 SK5 土坑平面図・断面図・出土遺物

5) SK8 土坑 (第83図、図版 16-6・7)

SI-W65 グリッドに位置する。SK7 と重複し、SK7 より新しく。残存する規模は、長軸 132cm、短軸 91cm、深さ 19cm を測り、主軸方位は N-17°-W を示す。平面形は楕円形で、断面形は不整な逆台形を呈する。底面は起伏が見られる。堆積土は 2 層からなり、いずれも砂質シルトである。遺物は出土していない。



第83図 SK8 土坑平面図・断面図

6) SK9 土坑 (第84図、図版 16-8)

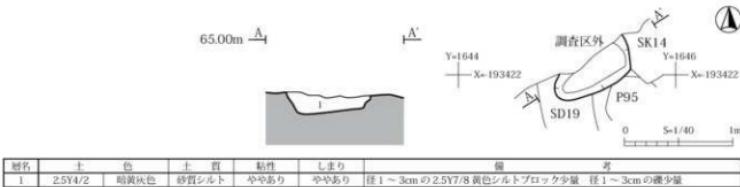
SI-W65 ~ 66 グリッドに位置する。SX12・P91 と重複し、P91 より新しく、SX12 より古い。残存する規模は、長軸 55cm、短軸 66cm、深さ 18cm を測り、主軸方位は N-36°-W を示す。平面形は不整な楕円形を呈すると考えられる。北西側の壁は垂直に立ち上がり、中端を経て斜めに立ち上がる。底面は平坦である。堆積土は 2 層からなり、いずれも砂質シルトである。遺物は出土していない。



第84図 SK9 土坑平面図・断面図

7) SK12 土坑 (第85図、図版17-1)

S3-W66 グリッドに位置する。SD19・SK14・P95 と重複し、いずれの遺構よりも新しい。残存する規模は、長軸 82cm、短軸 32cm、深さ 15 ~ 20cm を測り、主軸方位は N-57°-E を示す。平面形は橢円形で、断面形は逆台形を呈する。底面は北東から南西へ傾斜している。堆積土は、砂質シルトの単層である。遺物は出土していない。



第85図 SK12 土坑平面図・断面図

8) SK13 土坑 (第86図、図版17-2)

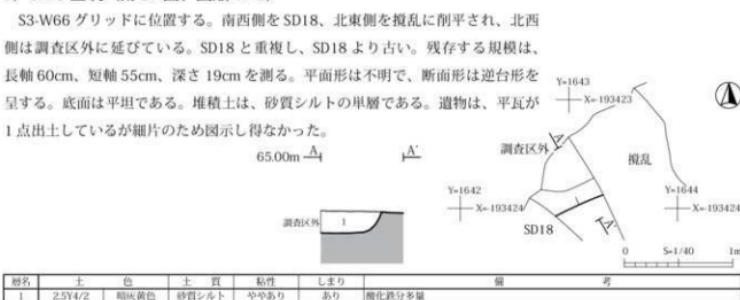
S3-W66 グリッドに位置する。遺構の西側を擾乱により削平されている。残存する規模は、長軸 60cm、短軸 43cm、深さ 17cm を測る。平面形は不明で、断面形は U 字状を呈すると考えられる。底面は、中央に向かってやや窪む。堆積土は、砂質シルトの単層である。遺物は出土していない。



第86図 SK13 土坑平面図・断面図

9) SK15 土坑 (第87図、図版17-3)

S3-W66 グリッドに位置する。南西側を SD18、北東側を擾乱に削平され、北西側は調査区外に延びている。SD18 と重複し、SD18 より古い。残存する規模は、長軸 60cm、短軸 55cm、深さ 19cm を測る。平面形は不明で、断面形は逆台形を呈する。底面は平坦である。堆積土は、砂質シルトの単層である。遺物は、平瓦が 1 点出土しているが細片のため図示し得なかった。



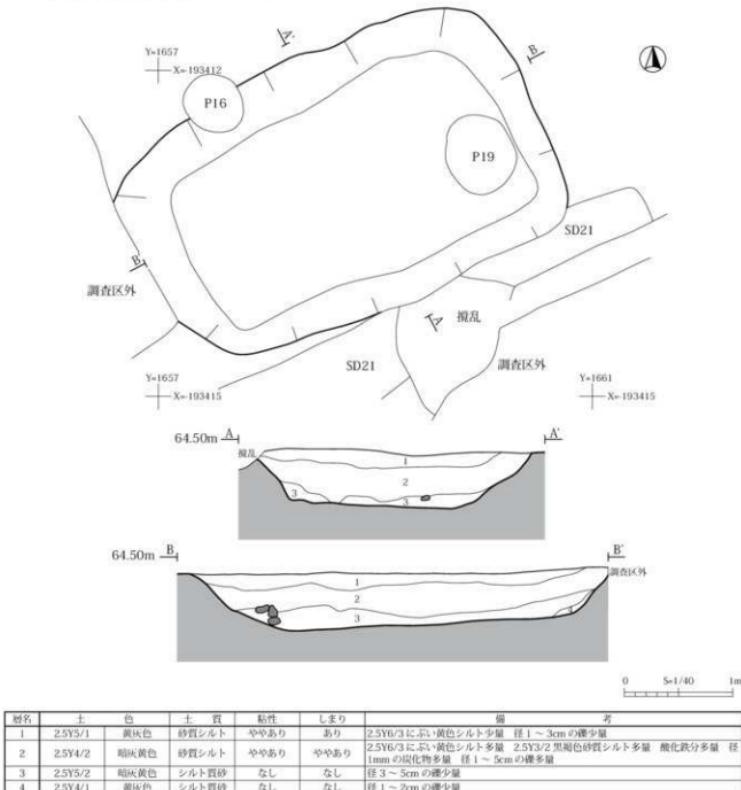
第87図 SK15 土坑平面図・断面図

第1節 仙台城跡-亀岡トンネル進入路部-

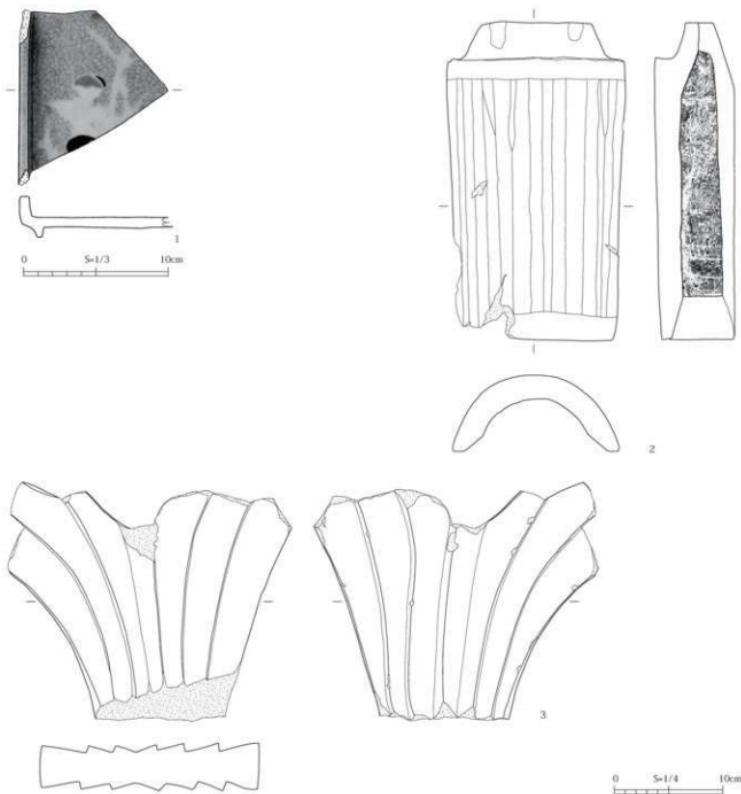
(4) 性格不明遺構

1) SX2 性格不明遺構 (第88・89図、図版17-5~7)

S2-W64・65 グリッドに位置する。SD21、P16・19と重複し、いずれの遺構よりも古い。残存する規模は、長軸389cm、短軸253cm、深さ53cmを測り、主軸方位はN-63°-Eを示す。平面形は隅丸長方形で、断面形は逆台形を呈する。底面は平坦であるが、北東から南西に傾斜している。堆積土は4層からなり、1・2層は砂質シルト、3・4層はシルト質砂である。2層はにぶい黄色シルトや黒褐色砂質シルト、酸化鉄分、炭化物、礫等が多く含まれる。出土遺物の多くは3層から出土している。遺物は、18世紀代～19世紀代の瀬戸・美濃産陶器の皿、在地産土師質土器、瓦質土器、丸瓦、平瓦、鰯瓦等が出土しており、そのうち18世紀代～19世紀代の瀬戸・美濃産陶器の皿1点、丸瓦1点、鰯瓦1点を図示した。



第88図 SX2 性格不明遺構平面図・断面図



図版番号	写真図版番号	層位	種別	器種	部位	胎土	法量(cm)	備考	登録番号	
1	23-12	3層	陶器	角鉢	口縁～高台	やや粗	(10.6) (9.3) 2.8	繩戸・美濃 18世紀～ 19世紀	吉野地 買入有 内面：上輪付け（眞輪・赤 輪）・外縁：草花文？	I-006
<hr/>										
図版番号	写真図版番号	層位	器種	法量(cm)	備考	登録番号				
2	23-10	3層	丸瓦	29.0 15.5 7.5	瓦幅16.2cm 瓦幅(13.5cm) 玉縁先幅10.1cm 玉縁先長さ3.0cm 外面：ヨコナデヘラ ケズ 内面：コビキB 布目状斑	F-004				
3	23-11	2層	鋪瓦	(22.0) (26.3) 4.4 尾縁		H-001				

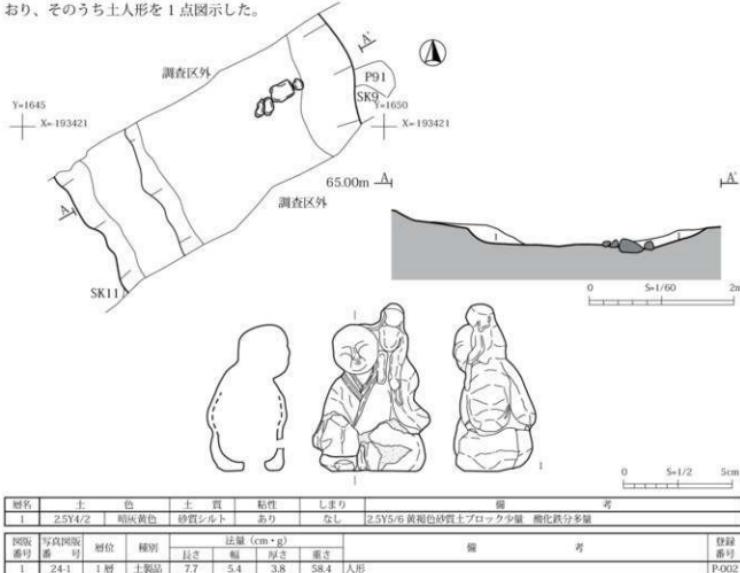
第89図 SX2 性格不明遺構出土遺物

2) SX12 性格不明遺構 (第90図、図版18-1・2)

S2・3-W66 グリッドに位置する。遺構の北西側と南東側は、調査区外に延びる。SK9・11、P91と重複し、いずれの遺構よりも新しい。残存する規模は、長軸430cm、短軸193cm、深さ47cmを測る。断面形は不整な皿形を呈し、南西壁には中端を有する。底面はほぼ平坦である。遺構底面からは径14～38cmを測る礫を検出した。

第1節 仙台城跡-亀岡トンネル進入路部-

堆積土は砂質シルトの単層である。遺物は、19世紀前葉～中葉の大堀相馬産の土瓶、在地産の土人形が出土しており、そのうち土人形を1点図示した。

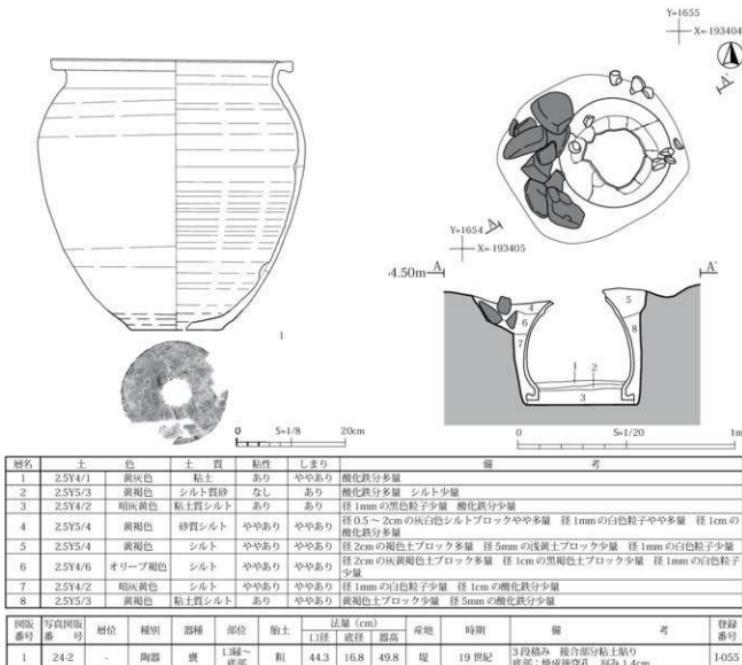


第90図 SX12性格不明遺構平面図・断面図・出土遺物

(5) 埋甕

1) 1号埋甕遺構（第91図、図版18-3～5）

S1-W65グリッドに位置する。素焼きの大甕が底を上にした状態で埋設されていた遺構である。上部の搅乱土を重機で掘削中に発見したため、底部の一部を破損したが破片を接合した結果、底部には焼成後に穿った孔があることが確認された。掘り方の規模は、長軸88cm、短軸78cm、深さ60cmを測り、主軸方位はN-62°-Eを示す。平面形は隅丸方形で、遺構壁は下端からほぼ垂直に立ち上がり、中端を経てそこから北東壁はほぼ垂直に立ち上がり、南西壁は斜めに立ち上がる。底面は平坦である。堆積土は8層からなり、1層は粘土、2層はシルト質砂、3層は粘土質シルト、4層は砂質シルト、5～7層はシルト、8層は粘土質シルトである。3層は、埋設された甕の口縁外周にほぼ合うように敷かれており、甕を安定させるための構築土である。4～8層は、掘り方の埋土である。設置されていた甕は、19世紀代と考えられる堤焼の素焼きの大甕である。器高49.8cm、口径44.3cm、底径16.8cmを測り、内面には継ぎ目が2段見られ、大きく3段に分けて積み上げられている。底部には、焼成後外から内に向かって孔があつらえられている。当遺構は、底部を穿孔した大型の甕が逆さまに埋設されていること、口縁部を粘土質シルトで隙間無く固着させ水漏れが無いようにしていることから、水琴窟の可能性が考えられる。遺物は、埋設された19世紀の堤焼の大甕、3層から19世紀前葉～中葉の瀬戸・美濃産磁器の碗、5層から18世紀の肥前産磁器の皿、19世紀前葉～中葉の瀬戸・美濃産磁器の碗が出土している。そのうち、埋設されていた堤焼の大甕のみを図示した。



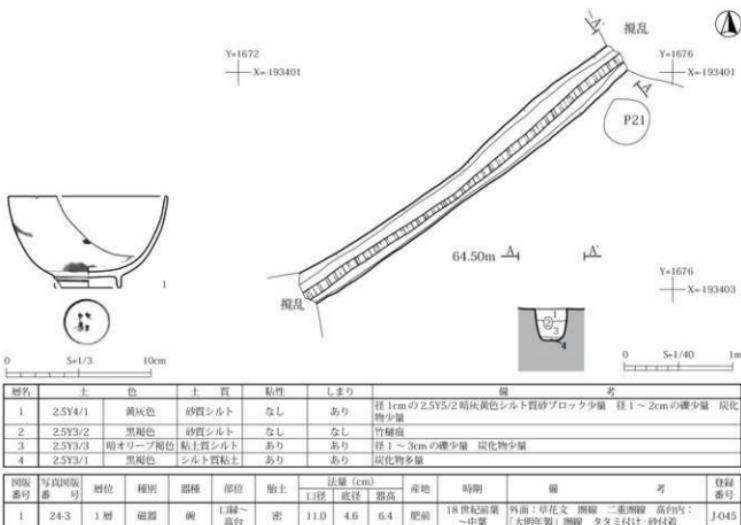
第91図 1号埋甕遺構平面図・断面図・出土遺物

(6) 竹樋

1) 1号竹樋(第92図、図版18-6・7)

S1-W63 グリッドに位置する。南西から北東へ直線的に延びる竹樋跡である。竹樋本体は残存していないが、断面および平面で竹樋に使用されていたと考えられる竹の外皮が残っていたため竹樋と判断した。竹樋の痕跡は平面図上でトーン掛けをして範囲を図示した。両端は、搅乱により削平されている。残存する竹樋跡の規模は、長さ365cm、幅5～9cm、深さ4～10cmを測り、主軸方位はN-52°Eを示し、南西から北東へ傾斜する。断面形は丸形を呈する。掘り方の規模は、長さ365cm、上端幅25～38cm、下端幅15～27cmを測る。断面形はU字状を呈する。底面は僅かに起伏があり、南西から北東へ傾斜している。堆積土は4層からなり、1・2層は砂質シルトで、1層は竹樋設置後掘り方上部を埋め戻した埋土、2層は竹樋が設置されていたが竹樋が腐食し土壤化した層である。3層は粘土質シルトで、竹樋を固定するために敷かれた掘り方下部の埋土である。4層はシルト質粘土である。遺物は、1層から18世紀中葉～後葉の大堀相馬産の甕、19世紀前半の在地産の鉢、18世紀中葉～後葉の肥前産磁器の皿、在地産のかわらけが出土、3層から17世紀後半～18世紀前半の唐津の甕、18世紀中葉～後葉の京焼の甕、19世紀前葉～中葉の大堀相馬産の香炉、18世紀代の肥前産磁器の甕・皿、在地産の土師質土器、瓦質土器が出土した。そのうち18世紀前葉～中葉の肥前産磁器の甕を1点図示した。

第1節 仙台城跡—亀岡トンネル進入路部—

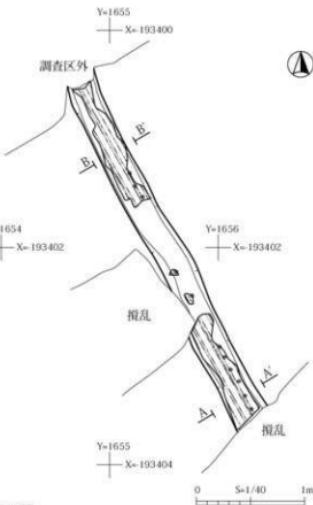


第92図 1号竹桶跡平面図・断面図・出土遺物

(7) 木樋

1) 1号木樋 (第93・94図、図版19-1~3)

S1-W65 グリッドに位置する。南東から北西へ直線的に延びる木樋跡である。北西端は調査区外へと延び、南東端は擾乱により削平される。木樋本体は、腐食し僅かに木質と鉄釘が検出されたのみであった。検出された木質の範囲には平面図でトーン掛けをし、鉄釘は検出された位置のみを図示した。残存する掘り方の規模は、長軸350cm、上端幅27~37cm、下端幅19~29cm 深さ4~12cmを測り、主軸方位はN-26°-Wを示す。断面形は逆台形を呈する。底面は平坦であり、南東から北西へ緩やかに傾斜する。堆積土は7層からなり、1層は砂質シルトで、木質が僅かに残存している。2・7層はシルト質砂で、木樋を据えるために敷かれた掘り方下部の埋土である。3層は砂質シルトで木樋の内部に堆積した層である。4層は木質が腐食して出来た層である。5・6層は、木樋を固定するための掘り方と考えられる。遺物は出土していない。



第93図 1号木樋跡平面図

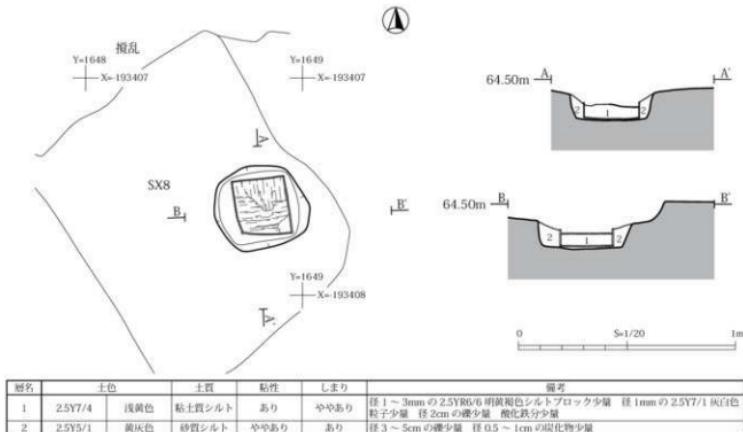


第94図 1号木桶跡断面図

(8) 木箱埋設遺構

1) 1号木箱埋設遺構 (第95図、図版19-4～6)

S1-W66 グリッドに位置する。SX8 と重複し、SX8 より新しい。残存する掘り方規模は、長軸 44cm、短軸 40cm、深さ 13cm を測り、主軸方位は N-84°-E を示す。平面形は不整な隅方形を呈し、断面形は逆台形を呈する。底面は平坦である。内部から、一辺約 26cm、深さ約 8cm の木製の箱が出土した。掘り方のやや東寄りに置かれており、歪みがあるものの正方形を呈していたものと考えられる。木箱内上部には蓋と考えられる平置きされた板を検出した。箱から釘が確認されなかったことから、はめ込み式に板材を組んで作られた箱と考えられる。昭和 63 年度に行なわれた、東北大埋蔵文化財調査室による仙台城二の丸跡第 5 地点 (NMS) の調査でも類似する木箱を作り遺構が 4 基確認されている (東北大埋蔵文化財調査委員会 1993)。堆積土は 2 層からなり、1 層は粘土質シルトで木箱の中の堆積層である。2 層は砂質シルトで木箱を固定するための掘り方の理土と考えられる。木箱以外に遺物は出土していない。木箱は残存状態が悪く図化までには至らなかった。

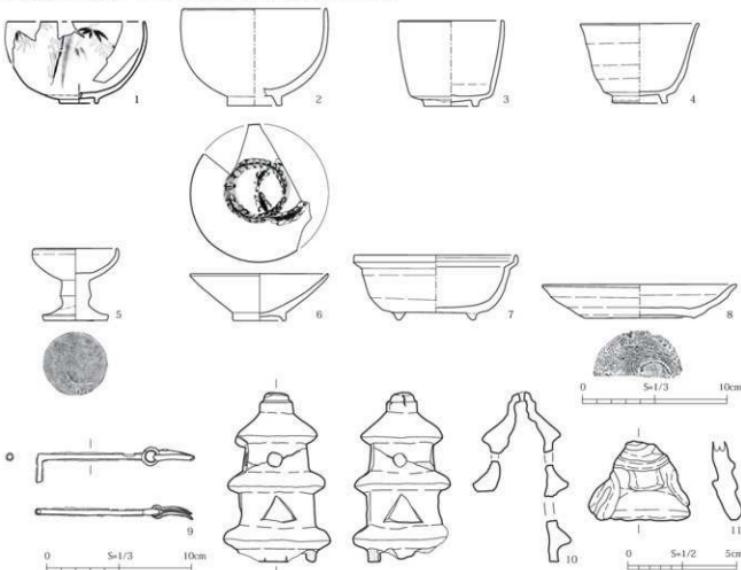


第95図 1号木箱埋設遺構平面図・断面図

第1節 仙台城跡-亀岡トンネル進入路部

(9) III層出土遺物 (第96図、図版24-4～25-8)

III層からの出土遺物は、総数431点出土した。内訳は陶器210点、磁器71点、瓦質土器7点、土師質土器108点、土製品5点、石製品1点、金属製品4点、瓦25点である。陶磁器に関しては、17世紀～19世紀前半の遺物が出土している。これらのうちから11点を図示した。



図版番号	写真図版番号	グリッド	種類	器種	部位	胎土	法量 (cm ³)	产地	時期	備考	登録番号
						上口幅	底径	高さ			
1	24-4 W63-64	S1-W63	陶器	碗	口縁～高台	中空泥	(1.0) (2.9)	5.8	京	18世紀 灰入有 竹文	I-014
2	24-5 S1-W63	陶器	碗	口縁～高台	中空泥	9.8	3.8	6.8	18世紀後葉～ 大瓶 粗陶	灰入 19世紀初頭？ 買入有	I-065
3	24-6 S1-W63	陶器	猪口	口縁～高台	中空泥	7.2	3.7	6.0	大瓶 粗陶	18世紀 灰入有	I-068
4	25-1 S1-W63	陶器	猪口	口縁～高台	中空泥	8.1	3.8	5.5	大瓶 粗陶	18世紀 灰入有	I-070
5	25-2 S1-W64	陶器	伝瓶	口縁～脚部	中空泥	(5.8)	4.4	5.0	19世紀前半 粗陶	白釉輪 底部：回転系切妻有 口クロ：左	I-083
6	25-3 S1-W63	磁器	杯	口縁～高台	直	9.6	3.7	3.3	肥前	18世紀前半 中盤 見込み：上駒付け (赤駒・緑駒・黄駒) 付け砂付有	J-044
7	25-5 S1-W64	欌質鉢輪	刷毛	口縁～底部	粗	(11.2) (5.9)	4.0	7.4	近世	鉢輪 足2個所残	I-058
8	25-4 S1-W63	土師質土器	かわらけ	口縁～底部	粗	11.8	6.2	2.5	在地	ロクロナデ ロクロ：左 底部：回転系切妻有	I-080

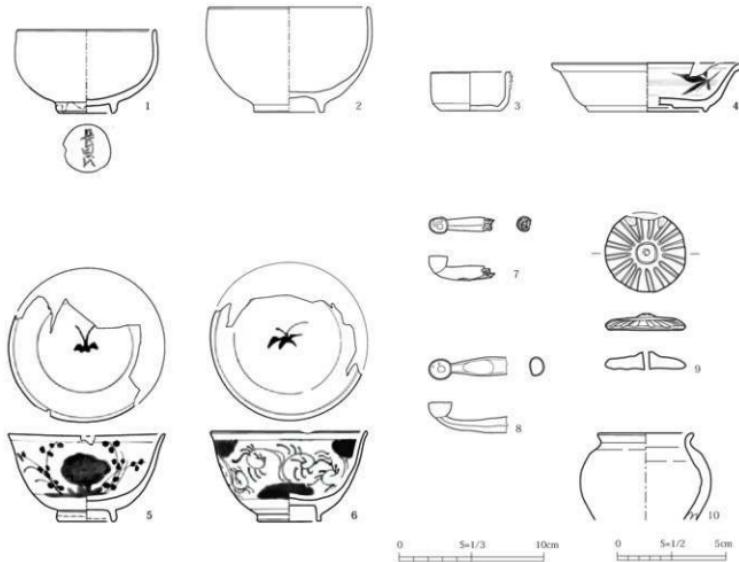
図版番号	写真図版番号	グリッド	種類	法量 (cm ³ ・g)	備考	登録番号				
				長さ 帯	厚さ	重さ				
9	25-6 S1-W64	金銀製品	10.9	2.0	0.4	13.4	門			N-003

図版番号	写真図版番号	グリッド	種類	法量 (cm ³ ・g)		備考	登録番号	
				長さ	幅	厚さ	重さ	
10	25-8 S1-W63	土製品	(7.8)	4.5	14.9	55.8	人形 開棧	P-005
11	25-7 S1-W64	土製品	(3.7)	4.6	(1.4)	12.2	人形 開棧？	P-004

第96図 III層出土遺物

4 II層出土遺物（第97図、図版26-1～10）

今回の調査で、II層から多くの近世・近代遺物が出土した。それらのうち参考資料として、10点図示した。18世紀中葉～後葉の大堀相馬産の碗には、高台内に墨書（長田氏？）が見られる（第97図-1）。



回版 番号	写真回版 番号	グリッド	層位	種別	器種	部位	胎土	口径	底径	高さ	時期	備考	目録 番号
1	26-1	S1-W65	II層	陶器	碗	口縁～ 高台	半火粗	9.3	3.8	5.8	大堀 相馬	18世紀中葉 ～後葉 灰釉 高台：墨書有「長田氏(?)」	I-087
2	26-2	S1-W65	II層	陶器	碗	口縁～ 高台	半火密	11.5	4.8	7.3	大堀 相馬	18世紀 灰釉 貫入有 ロクロ：左	I-092
3	26-3	S1-W65	II層	陶器	削跡	口縁～ 底部	粗	5.6	4.1	2.7	堤	19世紀 灰釉	I-098
4	26-4	S1-W64	II層	磁器	皿	口縁～ 高台	密	13.2	8.1	3.4	切込	19世紀前葉 ～中葉 内面：楓文？ 圖線 日輪1箇所 見达 み：二重圖線 蛇の目型高台	J-077
5	26-5	S1-W65	II層	磁器	端反襷	口縁～ 高台	密	10.3	3.8	6.0	切込	19世紀 外面：草花文 足付：一重襷綬	J-064
6	26-6	N1-W64	II層	磁器	端反襷	口縁～ 高台	密	11.0	4.4	6.3	切込	19世紀 外付：豪付有 圖線 内面：圖線 二重 圖線 見达：楓文	J-070

回版 番号	写真回版 番号	グリッド	層位	種類	法量 (cm × g)				備考	目録 番号
					長さ	幅	厚さ	重さ		
7	26-9	N1-W63	II層	金属製品	3.9	1.0	0.1	4.5	埋没部分 火薬筒首 口径1.3cm 壁厚1.0cm	N-005
8	26-10	S1-W63	II層	金属製品	5.4	1.3	0.1	5.1	埋没部分 火薬筒首 口径1.6cm 壁厚1.8cm	N-006

回版 番号	写真回版 番号	グリッド	層位	種類	法量 (cm × g)				備考	目録 番号
					長さ	幅	厚さ	重さ		
9	26-7	S1-W65	II層	土器品	0.8	3.7		8.0	拿?	P-008
10	26-8	S1-W63	II層	土器品	(4.0)	6.0	0.5	9.1	ミニチュア 碗 口径 (4.5cm)	P-009

第97図 II層出土遺物

第2節 扇坂トンネル部

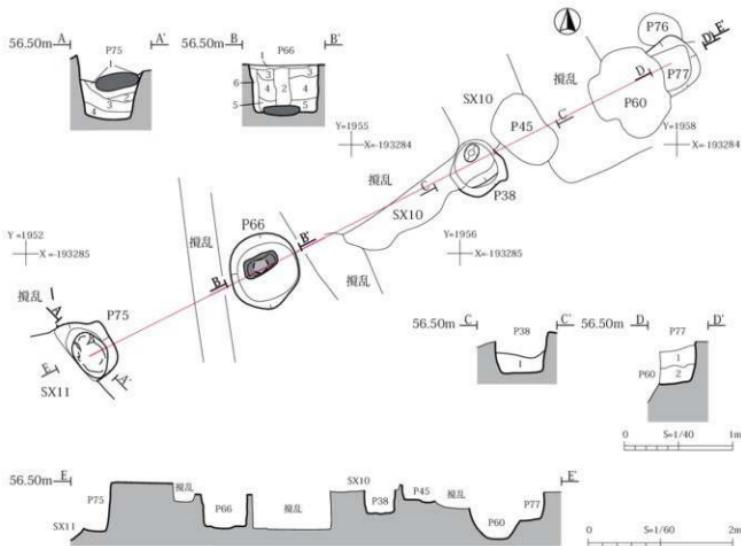
1 V層上面検出遺構と出土遺物

V層整地層は、扇坂トンネル部2区中央から西側及び扇坂トンネル部1区の東端分布する。また、扇坂トンネル部2区東端ではV層相当と考えられる堆積土が見られた。検出した遺構は、柱列跡1条、溝跡7条、井戸跡1基、土坑19基、性格不明遺構30基、ピット44基である。

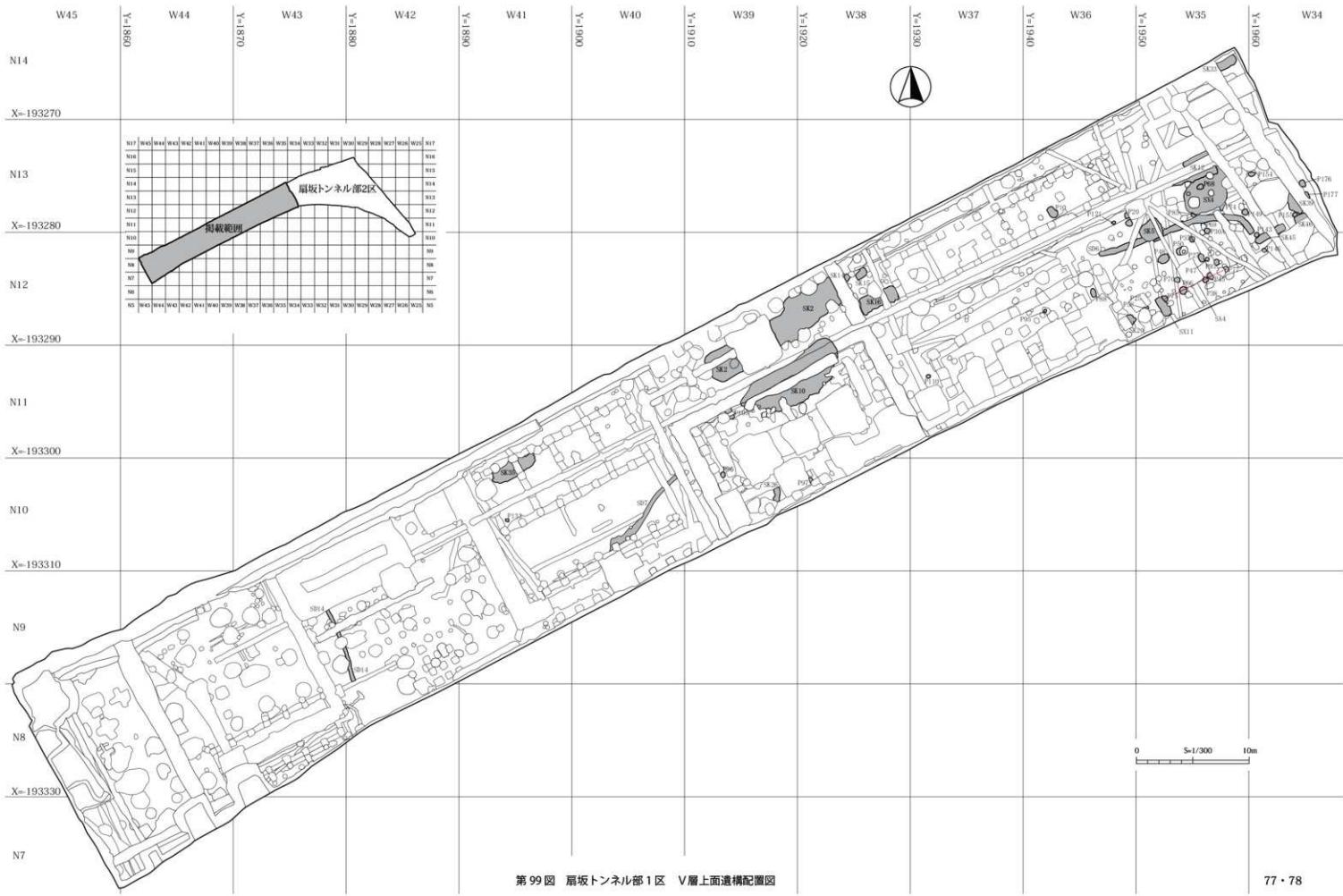
(1) 柱列跡

1) SA4 柱列跡（第98図、第7表、図版38-5～39-5）

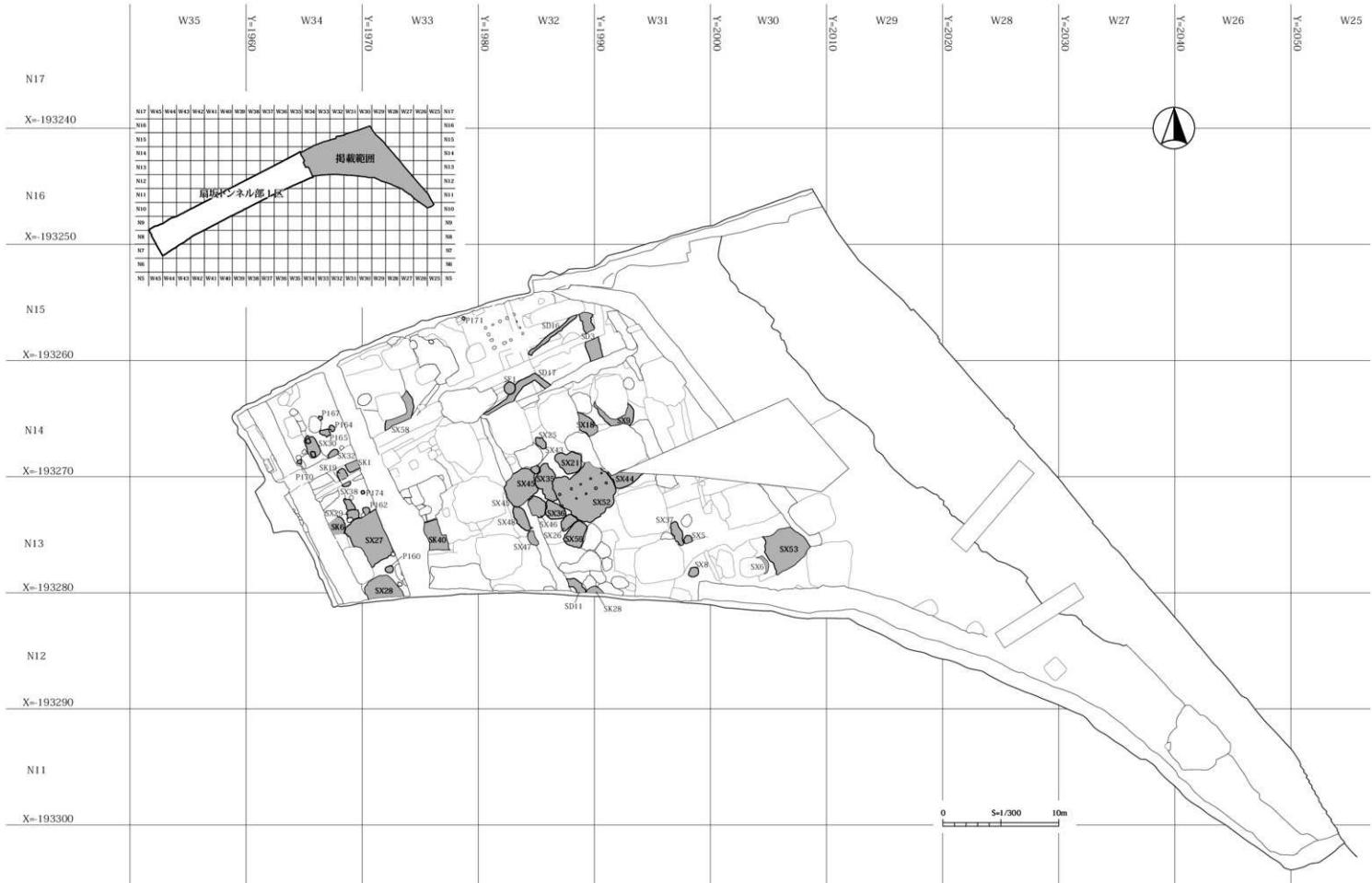
1区のN12-W35グリッドに位置する。P38・66・75・77の4基の柱穴によって構成される柱列跡である。P38がSX10と重複、P75がSX11と重複、P77がP60・76と重複する。P38はSX10より古く、P75はSX11より古い。P77はP76より新しく、P60より古い。柱列跡の東西両端の先は、遺構や擾乱が複雑に重複するため両端の先は不明である。確認された規模は、総長635cmを測り、柱間寸法は、200cm(6尺6寸)を測る。主軸方位は、N=63°-Eを示す。掘り方の規模は、長軸48～70cm、短軸40～63cm、深さ39～61cmを測る。平面形は、不整な円形もしくは不整な方形を呈する。P66では径13cmを測る柱痕と、掘り方底面で長さ35cm、幅18cm、厚さ9cmを測る礎石を検出した。堆積土は、P38が粘土質シルトの単層、P66は砂質シルト主体、P75は粘土質シルト主体、P77はシルト主体である。遺物は出土していない。



第98図 SA4 柱列跡平面図・断面図



第99図 扇坂トンネル部1区 V層上面造構配置図



第100図 扇坂トンネル部2区 V層上面造構配置図

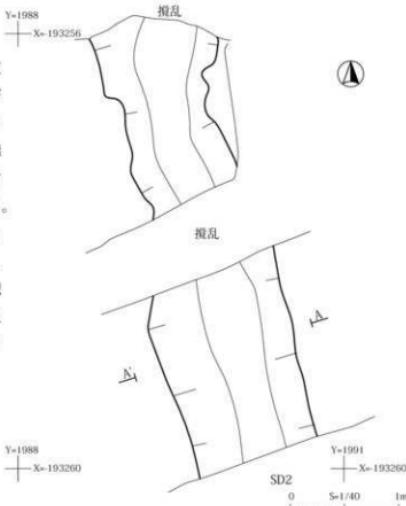
遺構名	層名	土色	土質	粘性	しまり	備考
P38	1	10YR6/4	明黄褐色	粘土質シルト	あり	あり 径1~3cmの黒褐色砂質シルト少量
	1	10YR4/1	褐灰色	砂質シルト	ややあり	あり 径1cmの暗褐色灰色シルト少量
	2	10YR3/1	褐色	砂質シルト	ややあり	あり 径1~3cmの明黄褐色シルトやや多量
	3	10YR6/8	明黄褐色	シルト	あり	あり 径1~3cmのふくらみシルト少量
	4	10YR4/3	にふくらみ	砂質シルト	ややあり	あり 径1~3cmの明黄褐色シルト少量
	5	10YR4/2	灰黄褐色	シルト	あり	あり 径1~3cmの明黄褐色シルトやや多量
P66	6	10YR3/3	暗褐色	砂質シルト	ややあり	あり 径1~3cmの明黄褐色シルトやや多量 径1cmの灰黄褐色シルト少量
	1	10YR7/8	黄褐色	粘土質シルト	あり	あり 径1~3cmの黒褐色砂質シルト少量 径1~5cmの褐灰色シルト少量
	2	10YR6/4	にふくらみ	粘土質シルト	あり	あり 径1~5cmの明黄褐色シルト少量
	3	10YR6/4	にふくらみ	粘土質シルト	あり	あり 径1~15cmの明黄褐色砂質シルト少量
	4	10YR6/4	にふくらみ	粘土質シルト	あり	あり 径1~5cmの明黄褐色シルト少量 径1~5cmの暗オリーブ灰色シルト少量
	5	10YR6/3	にふくらみ	シルト	あり	あり 径1~5cmの暗褐色砂質シルト少量 径1~3mmの黄褐色シルト少量
P75	6	10YR6/3	にふくらみ	シルト	あり	あり 径1~3mmの黄褐色シルト少量
	7	10YR6/3	にふくらみ	シルト	あり	あり 径1~3cmの黄褐色シルト少量
P77						

第7表 SA4柱列跡層観察表

(2) 溝跡

1) SD3 溝跡 (第101図、図版39-6・7)

2区のN14・15-W31 グリッドに位置する。南東から北西へ直線的に延びる溝跡である。北端及び中央付近を複雑により削平されている。残存する規模は、長さ 424cm、上端幅 75~128cm、下端幅 35~70cm、深さ 11~32cm を測り、主軸方位は N-13°-W を示す。断面形は逆台形状を呈する。底面はやや起伏があり、南西から北東へ低くなっている。堆積土はシルトの単層である。遺物は、19世紀前葉～中葉の大堀相馬産の碗、18世紀の肥前産磁器の蓋、在地産の軟質施釉陶器の焙烙、土師質土器の灯明皿、瓦等が出土しており、そのうち土師質土器の灯明皿を1点図示した。



図版番号	写真回数	層位	種別	遺構	部位	胎土	法線(cm)	直径	高さ	产地	時期	備考	登録番号
I	82-1	1層	土師質土器	灯明皿	口縁～底部	粗	11.1	6.3	2.1	在地	近世	ロクロナデ 油煙付着 底部:回転系切痕有 ロクロ:左?	I-442



0 S=1/3 10cm

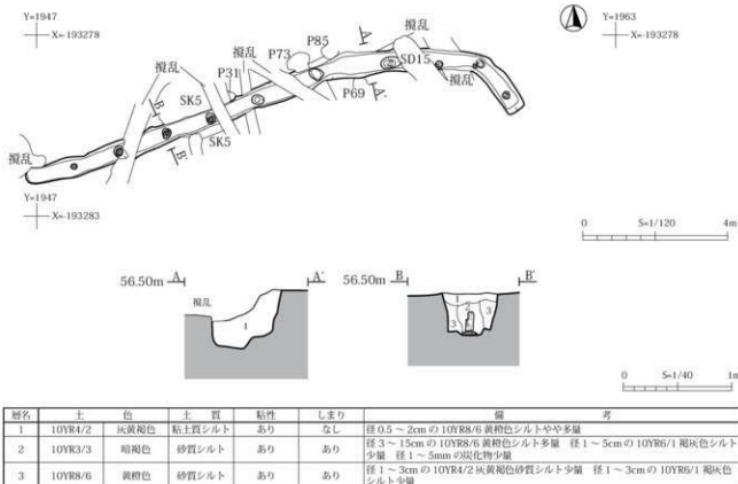
層名	土色	土質	粘性	しまり	備考
I	10YR4/3	にふくらみ	シルト	あり	あり 径0.5~1cmの暗褐色砂質シルト少量 径1mmの白色粒子少量 径0.3~1cmの軟化鉄粉や多量

第101図 SD3 溝跡平面図・断面図・出土遺物

第2節 扇坂トンネル部

2) SD6 布掘り (第102図、図版39-8~40-2)

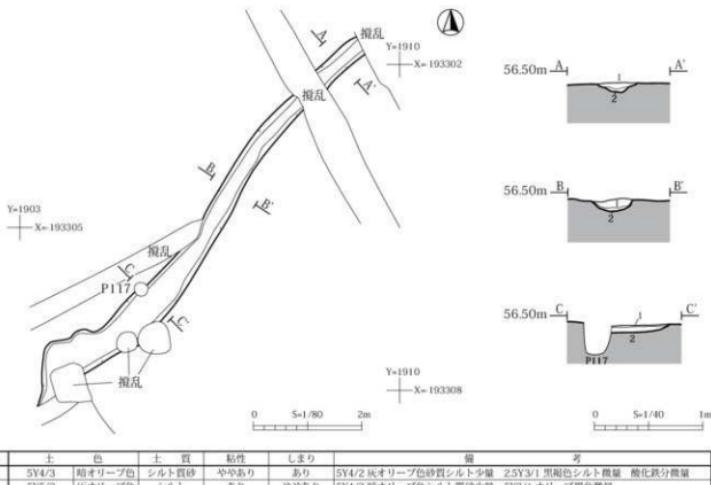
1区のN12-W36グリッドに位置する。南西端の一部と屈曲部分の一部を搅乱に、また中央付近を搅乱に削平される。南西から北東へ延び、東側末端付近で南東へ屈曲して延びる布掘りである。SD15、SK5、P31・69・73と重複し、P31・73より新しく、SD15、SK5、P69より古い。残存する規模は、総長14.75m、上端幅44~72cm、下端幅30~50cm、深さ9~55cmを測り、主軸方位は、東側末端付近で屈曲する箇所を境に西側がN70°Eを、東側がN38°Wを示す。断面形は不整な箱状もしくは逆台形状を呈する。底面は、概ね平坦で、南西から北東へ低くなっている。また、底面には礎板石の掘り方または柱痕が、113~137cm(約3尺8寸~4尺5寸)の間隔で9箇所あり、規模は長軸21~54cm、短軸18~32cm、深さ4~12cmを測る。礎板石は4個確認され、そのうち2個は掘り方があり残り2個には掘り方が見られなかった。礎板石には、長さ18~19cm、幅14~19cm、厚さ4~7cmの円盤を使用している。当溝は、礎板石や柱痕が一列に並び、両側に広がりが見られないことから、堀の布掘りと考えられる。堆積土は3層からなり、1層は粘土質シルト、2・3層は砂質シルトである。遺物は、17世紀の唐津の鉢、在地産の土師質土器、瓦が出土したが、いずれも細片のため図示し得なかった。



第102図 SD6 布掘り平面図・断面図

3) SD7 溝跡 (第103図、図版40-3~5)

1区のN10-W40グリッドに位置する。南西から北東へ、緩やかに蛇行しながら延びる溝跡である。両端を搅乱に削平されている。P117と重複し、P117より古い。残存する規模は、総長897cm、上端幅31~80cm、下端幅18~63cm、深さ8~21cmを測り、主軸方位はN40°Eを示す。断面形は皿形もしくは逆台形を呈する。底面はやや起伏をもしながら、南西から北東へ緩やかに低くなっている。堆積土は2層からなる。遺物は出土していない。



第103図 SD7溝跡平面図・断面図

4) SD11溝跡（第104図、図版40-6・7）

2区のN13-W32グリッドに位置する。南から西へ屈曲して延びる溝跡である。南端は調査区外に延びる。SD18と重複し、SD18より古い。残存する規模は、総長156cm、上端幅62～73cm、下端幅22～42cm、深さ16～21cmを測り、主軸方位は、屈曲部分を境に西側がN-87°-Wを、東側がN-40°-Wを示す。断面形は皿形を呈する。底面は、西から南へ緩やかに傾斜している。堆積土はシルトの単層である。遺物は出土していない。

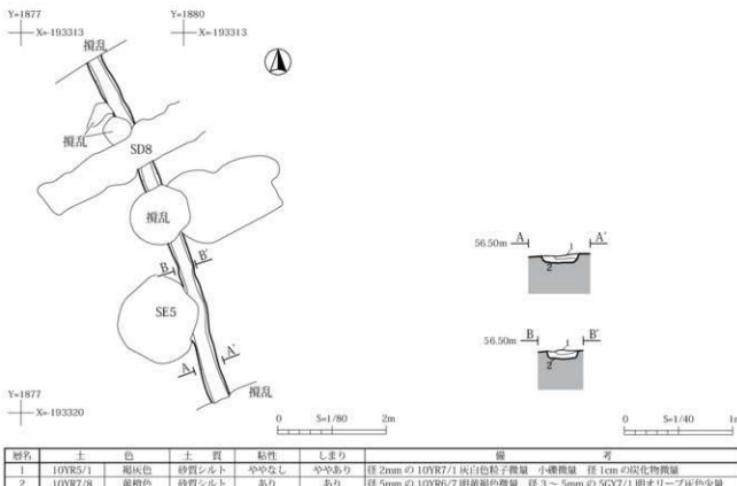


第104図 SD11溝跡平面図・断面図

5) SD14溝跡（第105図、図版41-1・2）

1区のN9-W42・43グリッドに位置する。南東から北西へ直線的に延びる溝跡である。両端を擾乱により削平される。SD8、SE5と重複し、いずれより古い。残存する規模は、長さ669cm、上端幅27～38cm、下端幅19～29cm、深さ4～8cmを測り、主軸方位はN-20°-Wを示す。断面形は逆台形を呈する。底面は、北西から南東へ緩やかに傾斜している。堆積土は2層からなる。遺物は出土していない。

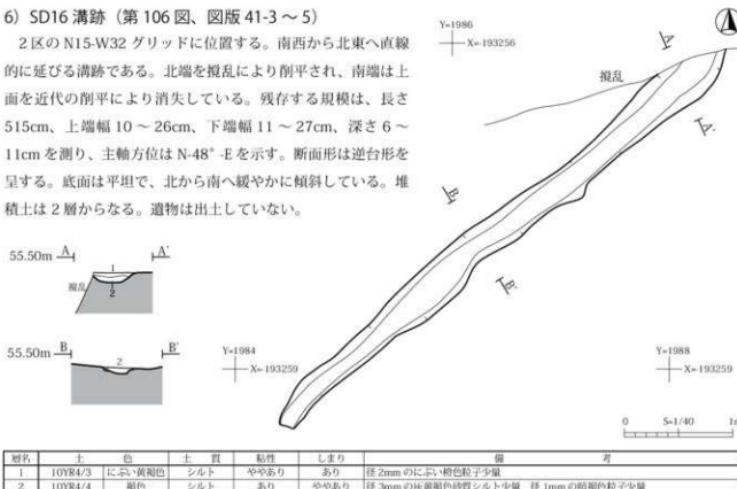
第2節 扇坂トンネル部



第105図 SD14溝跡平面図・断面図

6) SD16溝跡 (第106図、図版41-3~5)

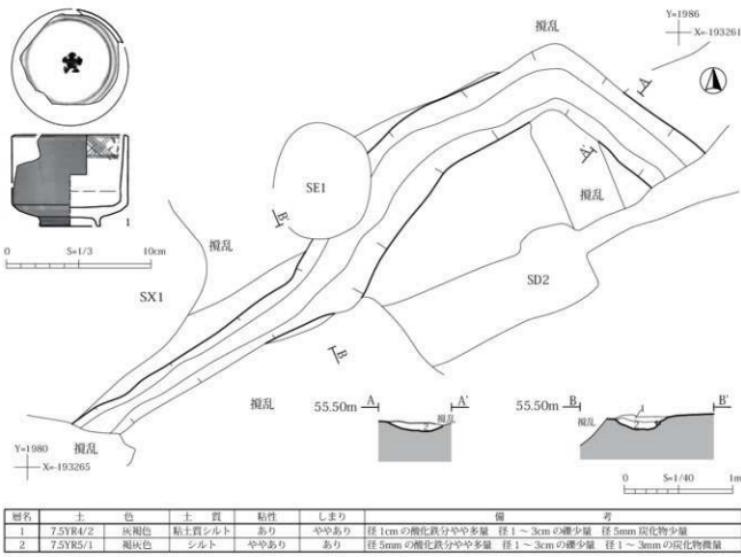
2区のN15-W32グリッドに位置する。南西から北東へ直線的に延びる溝跡である。北端を擾乱により削平され、南端は上面を近代の削平により消失している。残存する規模は、長さ515cm、上端幅10~26cm、下端幅11~27cm、深さ6~11cmを測り、主軸方位はN-48°-Eを示す。断面形は逆台形を呈する。底面は平坦で、北から南へ緩やかに傾斜している。堆積土は2層からなる。遺物は出土していない。



第106図 SD16溝跡平面図・断面図

7) SD17 溝跡（第107図、図版41-6～42-1）

2区のN15-W31 グリッドに位置する。南西から北東へ延び、途中弧を描いて南東方向へ屈曲する溝跡である。西端は擾乱に、東端はSD2により削平される。SD2、SE1、SX1と重複し、いずれよりも古い。残存する規模は、総長 688cm、上端幅 35～62cm、下端幅 8～30cm、深さ 10～16cm を測り、主軸方位は西から順に N:58°-E、N:37°-E、N:63°-E、N:52°-W を示す。断面形は逆台形状もしくは皿形を呈する。底面はやや起伏があり、南西から北東へ緩やかに傾斜している。堆積土は2層からなる。遺物は、17世紀後半の肥前産陶器の皿、18世紀中葉～後葉の大堀相馬産の碗、18世紀中葉～後葉の肥前産磁器の碗、19世紀前半の瀬戸・美濃産磁器の碗、在地産の軟質施釉陶器、瓦が出土している。そのうち 18世紀中葉～後葉の肥前産磁器の碗 1点を図示した。



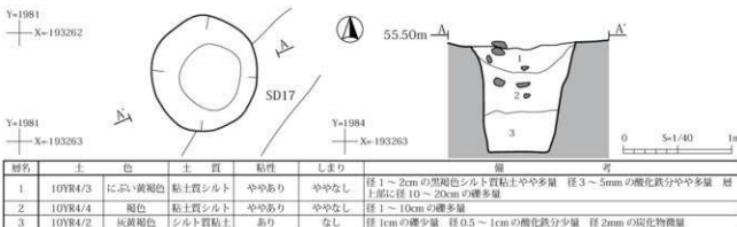
第107図 SD17 溝跡平面図・断面図・出土遺物

(3) 井戸跡

1) SE1 井戸跡（第108図、図版42-2・3）

2区のN14-W32 グリッドに位置する。素掘りの井戸跡である。SD17 と重複し、SD17 よりも新しい。規模は、上端径 99～105cm、下端径 59～62cm、深さ 102cm を測る。平面形は不整な円形を呈する。底面は平坦で、壁はやや外に張り出るように立ち上がり、南西側の壁は上端付近で外反する。堆積土は3層からなり、1・2層は粘土質シルト、3層はシルト質粘土である。遺物は、18世紀中葉～後葉の京焼の碗、18世紀中葉～後葉の大堀相馬産の碗、18世紀中葉～後葉の肥前産磁器の碗・皿が出土しているが、いずれも細片のため図示しなかった。

第2節 扇坂トンネル部

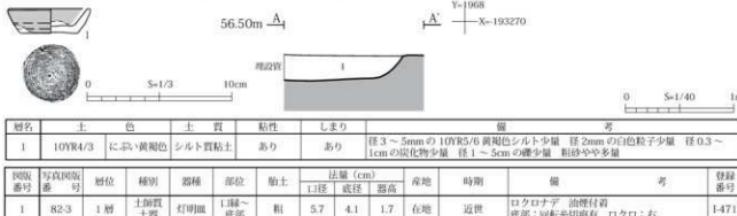


第108図 SE1井戸跡平面図・断面図

(4) 土坑

1) SK1 土坑 (第109図、図版42-4)

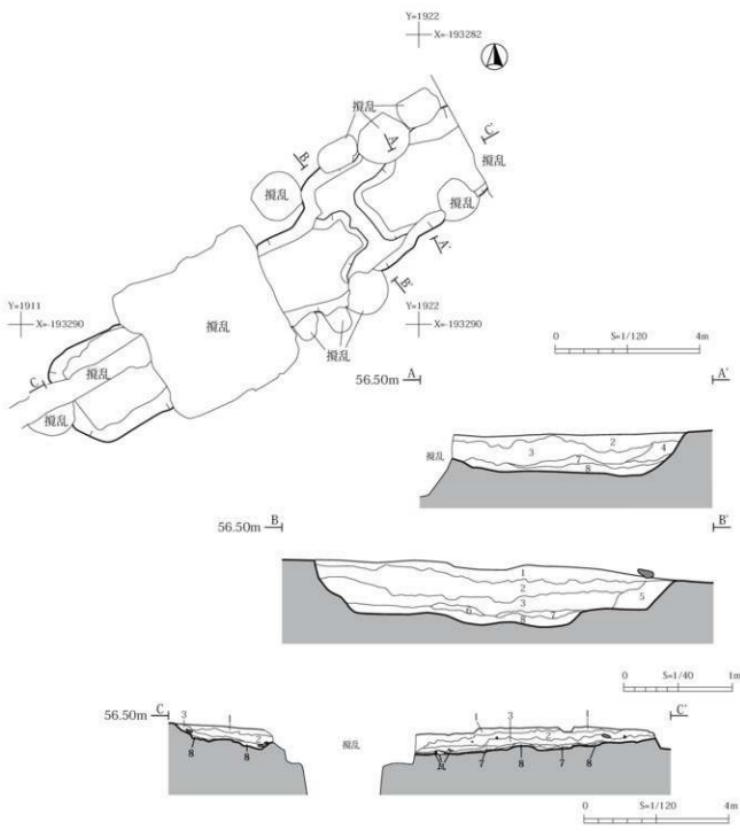
2区のN14-W34グリッドに位置する。北側を搅乱により削平され、東側は埋設管のため不明である。残存する規模は、長軸113cm、短軸83cm、深さ24cmを測り、長軸に対しほぼ並行する南東壁はN-65°-Wを示す。平面形は方形で、断面形は逆台形を呈すると考えられる。底面は平坦である。堆積土は、シルト質粘土の単層である。遺物は、18世紀中葉～後葉の肥前産磁器の碗、在地産の土質質土器の灯明皿、瓦が出土しており、そのうち灯明皿を1点図示した。



第109図 SK1土坑平面図・断面図・出土遺物

2) SK2 土坑 (第110～111図、図版42-5～43-4)

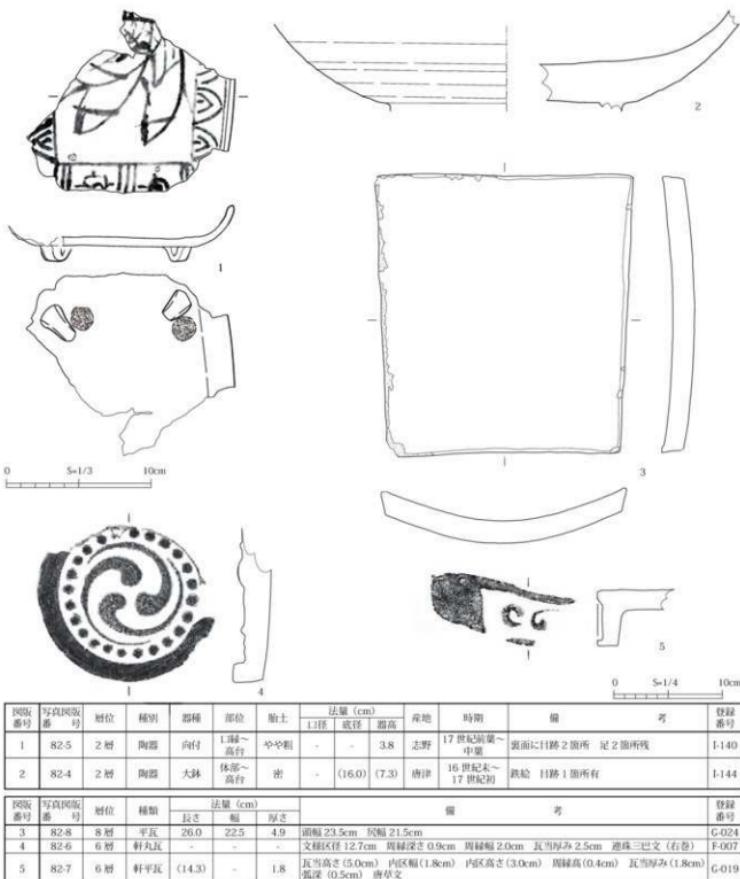
1区のN12-W38・39グリッドに位置する。遺物が遺構底面から多量に出土しており、主に瓦を廃棄した土坑と考えられる。東端と西端付近及び西端の一部と南北壁の一部を搅乱により削平される。残存する規模は、長軸13.32m、短軸336cm、深さ87cmを測り、主軸方位はN-62°-Eを示す。平面形は溝状で、断面形は逆台形を呈する。底面は北西側に、一段高くなるところがあるが、全体的には中央に向けて低くなる。当遺構から南へ約130cmのところにSK10が位置する。当遺構同様に大型の遺構であるが、遺物の出土量は非常に少ない。堆積土は8層からなり、1～3層は砂質シルトで、4・5・8層は粘土質シルト、6・7・8層はシルトである。遺物は、1層から17世紀後半の美濃産の鉢類、18世紀中葉～後葉の大堀相馬産の碗、2層から17世紀前葉～中葉の志野の向付、16世紀末葉～17世紀初頭の唐津の大鉢、18世紀中葉～後葉の肥前産磁器の瓶、6・7・8層からは251点の瓦が出土した。そのうち、17世紀前葉～中葉の志野の向付、16世紀末葉～17世紀初頭の唐津の大鉢を各1点、瓦3点を図示した。



番号	土色	土質	粘性	しまり	備考
1	10YR3/4	暗褐色	砂質シルト	ややあり	あり
					径1～10cmの10YR6/8明黄褐色シルトやや多量 径0.5～1cmの10YR7/3にぶい黄褐色質シルト多量 径1～3cmの褐色少量 酸化鉄分微量
2	10YR6/1	褐色	砂質シルト	あり	ややあり
					径1～15cmの10YR6/8明黄褐色シルト多量 径1～3cmのにぶい黄褐色砂質シルトや多量 径1～3cmの褐色少量 酸化鉄分微量
3	10YR5/1	明黄褐色	砂質シルト	あり	ややあり
					10YR5/1 暗褐色シルトやや多量 径1～5cmの5GY6/1オリーブ灰色少量 酸化鉄分少量
4	10YR5/1	褐色	粘土質シルト	あり	あり
					径1～5cmの10YR6/8明黄褐色シルト少量 径0.1～2cmの5GY6/1オリーブ灰色少量
5	10YR4/1	褐色	粘土質シルト	あり	あり
					径1～3cmの5GY6/1オリーブ灰色微量
6	10YR4/1	褐色	シルト	あり	あり
					径1～3cmの10YR7/3にぶい褐色地砂質シルト微量
7	10YR4/6	褐色	シルト	あり	あり
					10YR5/3にぶい褐色地砂質シルト微量 酸化鉄分少量
8	10YR5/1	褐色	粘土質シルト	あり	あり
					径0.3～5cmの10YR6/8明黄褐色シルトやや多量 径1～4cmの5GY6/1オリーブ灰色少量 酸化鉄分微量

第110図 SK2 土坑平面図・断面図

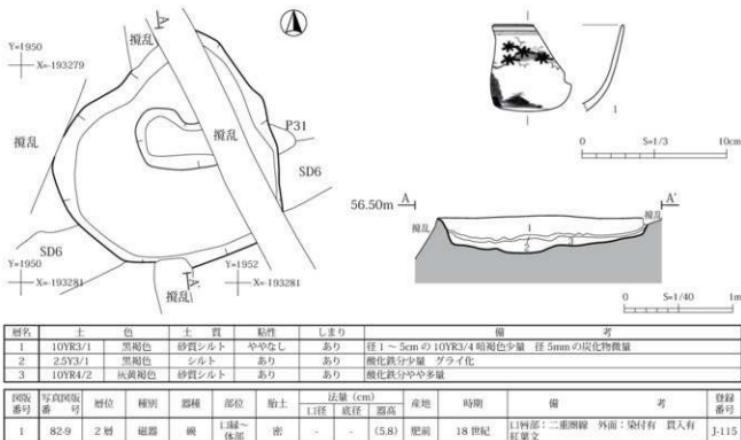
第2節 扇坂トンネル部



第111図 SK2土坑出土遺物

3) SK5土坑（第112図、図版43-5・6）

1区のN13-W35グリッドに位置する。東側を溝状の擾乱により削平される。SD6、P31と重複し、SD6、P31より新しい。残存する規模は、長軸207cm、短軸203cm、深さ31cmを測り、主軸方位は、N-14°-Eを示す。平面形は不整な円形で、断面形は皿形を呈する。底面は中央付近がやや窪んでいる。堆積土は3層からなり、1・3層は砂質シルトで、2層はシルトでグライ化している。遺物は、18世紀代の肥前産陶器の碗、同じく磁器の碗・皿、18世紀中葉～後葉の大堀相馬産の碗が出土しており、そのうち肥前産磁器の碗を1点図示した。



第112図 SK5 土坑平面図・断面図・出土遺物

4) SK6 土坑 (第113図、図版43-7・8)

2区のN13-W34グリッドに位置する。南北側を擾乱により削平される。残存する規模は、長軸146cm、短軸137cm、深さ39cmを測り、主軸方位は不明である。平面形は不明で、断面形は逆台形を呈すると考えられる。底面はやや起伏が見られる。堆積土は3層からなり、1・2層は粘土質シルト、3層はシルト質粘土である。遺物は17世紀代の肥前産陶器の皿、18世紀前葉～中葉の肥前産磁器の碗、在地産の軟質施釉陶器、瓦が出土した。そのうち、瓦を1点図示した。



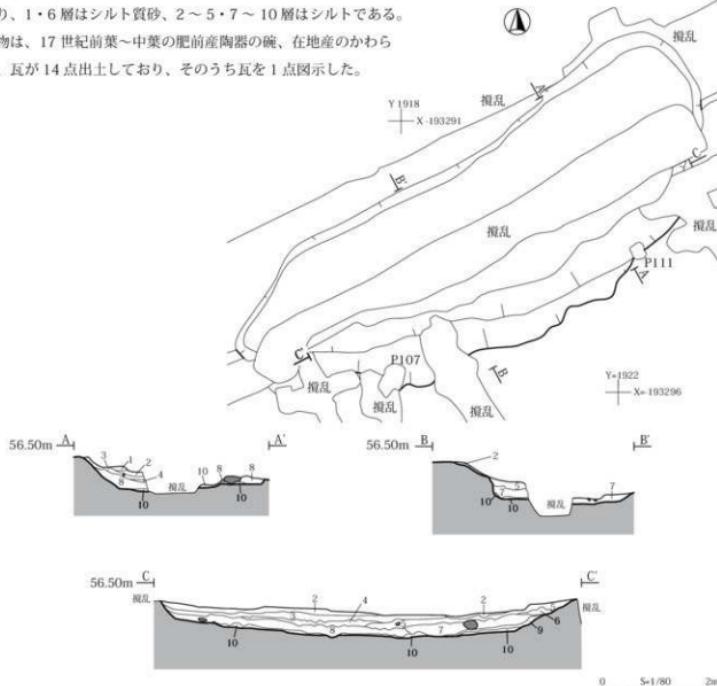
第113図 SK6 土坑平面図・断面図・出土遺物

第2節 扇坂トンネル部

5) SK10 土坑 (第114・115図、図版44-1～8)

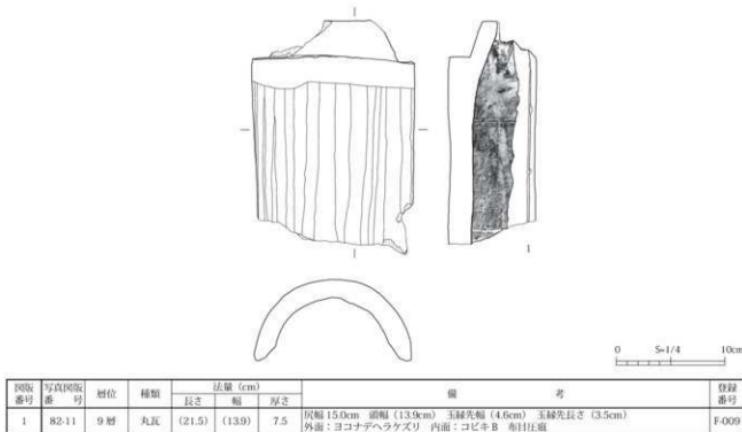
1区のN11-W38・39グリッドに位置する。上端の大分を擾乱により削平される。P107・111と重複し、P107・111より古い、残存する規模は、長軸980cm、短軸354cm、深さ106cmを測り、主軸方位はN-62°-Eを示す。平面形は不整な梢円形で、断面形は逆台形を呈すると考えられる。当遺構から北へ、130cmにSK2が位置する。当遺構と同様に大型遺構であるが、SK2からは多量の瓦が遺構底面より出土している。堆積土は10層からなり、1・6層はシルト質砂、2～5・7～10層はシルトである。

遺物は、17世紀前葉～中葉の肥前産陶器の碗、在地産のかわらけ、瓦が14点出土しており、そのうち瓦を1点図示した。



層名	土色	土質	粘性	しまり	備考
1	10YR4/2	灰黄褐色	シルト質砂	なし	あり 径2～3mmの10Y4/1範囲色シルト質砂少量 酸化鉄分多量
2	5Y4/2	灰オリーブ色	シルト	ややあり	あり 5Y3/1オリーブ黒色シルト多量 径2～3mmの炭化物微量 酸化鉄分少量
3	5Y4/2	灰オリーブ色	シルト	ややあり	あり 5Y6/3オリーブ黄色シルト微量 径2～3mmの炭化物微量 酸化鉄分微量
4	5Y4/2	灰オリーブ色	シルト	ややあり	あり 部分的に5Y5/2灰オリーブ色中粒砂多量 径1～2mmの白色粒子微量 酸化鉄分微量
5	2.5Y6/4	にふい黄色	シルト	ややあり	あり 径1～2mmの白色粒子微量 酸化鉄分微量
6	7.5Y5/2	灰オリーブ色	シルト質砂	ややあり	あり 5Y3/2灰オリーブ色粗粒多量 径2～5mmの白色粒子微量
7	5Y4/2	灰オリーブ色	シルト	ややあり	あり 5Y3/2灰オリーブ色シルト微量 2.5Y5/4黃褐色シルト微量 酸化鉄分微量
8	5Y4/2	灰オリーブ色	シルト	ややあり	あり 5Y5/2灰オリーブ色シルト微量
9	5Gv4/1	暗オリーブ色	シルト	あり	ややあり 5Y6/4オリーブ黄色中粒砂微量 径3～5mm炭化物微量
10	5Y4/2	灰オリーブ色	シルト	あり	ややあり 黑色シルト少量 径3mmの炭化物微量

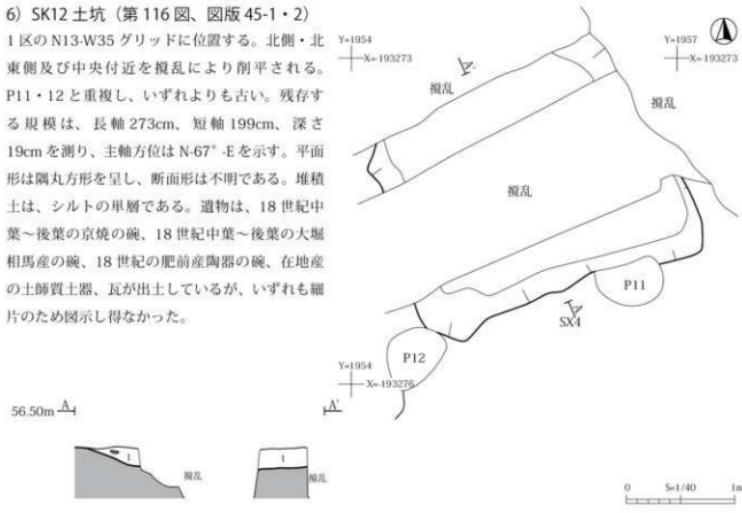
第114図 SK10 土坑平面図・断面図



第115図 SK10 土坑出土遺物

6) SK12 土坑 (第116図、図版45-1・2)

1区のN13-W35グリッドに位置する。北側・北東側及び中央付近を擾乱により削平される。P11・12と重複し、いずれよりも古い。残存する規模は、長軸273cm、短軸199cm、深さ19cmを測り、主軸方位はN-67°-Eを示す。平面形は隅丸方形を呈し、断面形は不明である。堆積土は、シルトの单層である。遺物は、18世紀中葉～後葉の京焼の碗、18世紀中葉～後葉の大堀相馬産の碗、18世紀の肥前产陶器の碗、在地産の土師質土器、瓦が出土しているが、いずれも細片のため図示し得なかった。

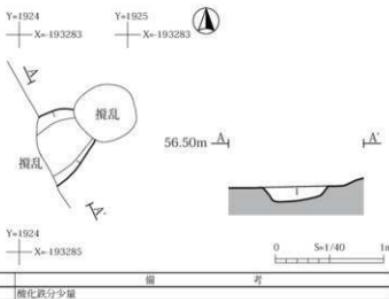


第116図 SK12 土坑平面図・断面図

第2節 扇坂トンネル部

7) SK14 土坑 (第117図、図版45-3)

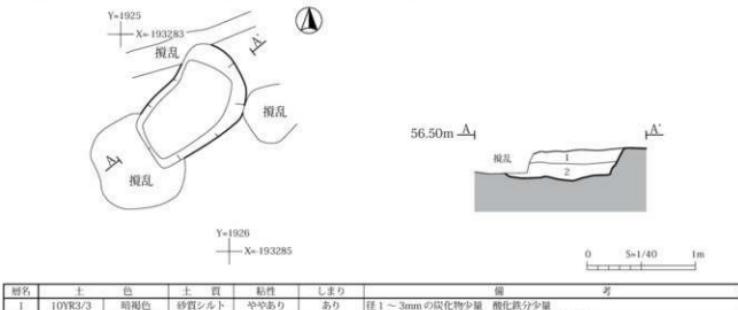
1区のN12-W38グリッドに位置する。東西両端を搅乱により削平される。残存する規模は、長軸62cm、短軸45cm、深さ14cmを測り、主軸方位は不明である。平面形は不明で、断面形は逆台形を呈する。底面は北へ緩やかに傾斜する。堆積土は、シルトの単層である。遺物は、18世紀代の瀬戸・美濃産陶器の向付、瓦が出土したが、いずれも細片のため図示し得なかった。



第117図 SK14 土坑平面図・断面図

8) SK15 (第118図、図版45-4・5)

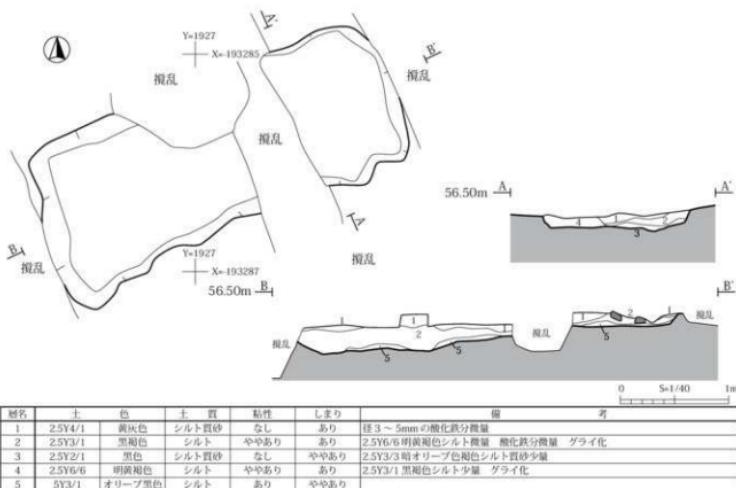
1区のN12-W38グリッドに位置する。西端及び東端一部の上端を搅乱により削平される。残存する規模は、長軸111cm、短軸66cm、深さ31cmを測り、主軸方位はN-26°-Eを示す。平面形は不整な長方形で、断面形は逆台形を呈すると考えられる。底面はやや起伏をもつ。堆積土は2層からなり、いずれも砂質シルトである。遺物は、1層から19世紀前葉～中葉の瀬戸・美濃産磁器の碗、在地産の土師質土器、瓦、2層から18世紀中葉～後葉の大堀相馬産の碗が出土しているが、いずれも細片のため図示し得なかった。



第118図 SK15 土坑平面図・断面図

9) SK16 土坑 (第119図、図版45-6～46-2)

1区のN12-W38グリッドに位置する。中央付近及び、東西端の一部を搅乱により削平される。残存する規模は、長軸354cm、短軸159cm、深さ38cmを測り、主軸方位はN-64°-Eを示す。平面形は不整な長方形、断面形は逆台形である。堆積土は5層からなり、1・3層はシルト質砂、2・4・5層はシルトである。遺物は、1層から17世紀前半の唐津の皿、2層から18世紀中葉～後葉の大堀相馬産の碗、5層から18世紀代の肥前産磁器の皿が出土しているが、いずれも細片のため図示し得なかった。



第119図 SK16 土坑平面図・断面図

10) SK19 土坑 (第120図、図版46-3～5)

2区のN13・14-W34 グリッドに位置する。礫が廃棄された廃棄土坑と考えられる。中央からやや南側を搅乱により削平されている。検出した規模は、長軸 161cm、短軸 86cm、深さ 37cm を測り、主軸方位は N-25°-W を示す。平面形は不整な隅丸長方形で、断面形は逆台形を呈する。底面は平坦である。堆積土は3層からなり、1・2層はシルトで、3層は粘土質シルトである。各層位から、長さ5~21cm、幅3~17cm、厚さ3~16cmの礫が多量に散乱して検出された。遺物は、18世紀中葉~後葉の大堀相馬家の碗、18世紀前葉~中葉の肥前産磁器の碗、在地産の土師質土器、瓦が出土しているが、いずれも細片のため図示し得なかった。

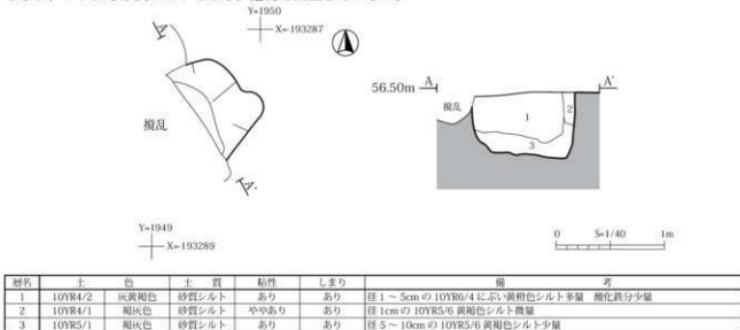


第120図 SK19 土坑平面図・断面図

第2節 扇坂トンネル部

11) SK20 土坑 (第 121 図、図版 46-6・7)

1 区の N12-W36 グリッドに位置する。遺構の大半を擾乱により削平される。残存する規模は、長軸 96cm、短軸 62cm、深さ 61cm を測り、主軸方位は不明である。平面形は不明で、断面形は箱形を呈する。堆積土は 3 層からなり、いずれも砂質シルトである。遺物は出土していない。



第 121 図 SK20 土坑平面図・断面図

12) SK26 土坑 (第 122 図、図版 46-8・47-1)

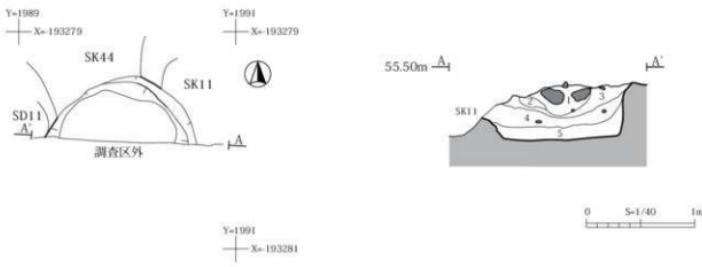
1 区の N10-W39 グリッドに位置する。北側と南側を擾乱により削平される。残存する規模は、長軸 138cm、短軸 57cm、深さ 25cm を測り、主軸方位は N-1°-E を示す。平面形は不整形と考えられ、断面形は逆台形を呈する。堆積土は 4 層からなり、1・3 層はシルト、2・4 層は砂質シルトである。遺物は出土していない。



第 122 図 SK26 土坑平面図・断面図

13) SK28 土坑 (第 123 図、図版 47-2・3)

1 区の N12・13-W31・32 グリッドに位置する。南側は調査区外に延びる。SD11・SK11・44 と重複し、SD11 よりも新しく、SK11・44 より古い。残存する規模は、長軸 157cm、短軸 61cm、深さ 54cm を測り、主軸方位は不明である。平面形は不明で、断面形状は、西側がほぼ垂直に立ち上がり、直線的に外反する。底面は平坦である。堆積土は 5 層からなり、1・3 ~ 5 層は粘土質シルトで、2 層はシルト質粘土である。遺物は、16 世紀末～17 世紀前葉の唐津の皿、18 世紀中葉～後葉の大堀相馬産の碗、18 世紀中葉～後葉の肥前産磁器の皿、瓦が出土しているが、いずれも細片のため図示し得なかった。

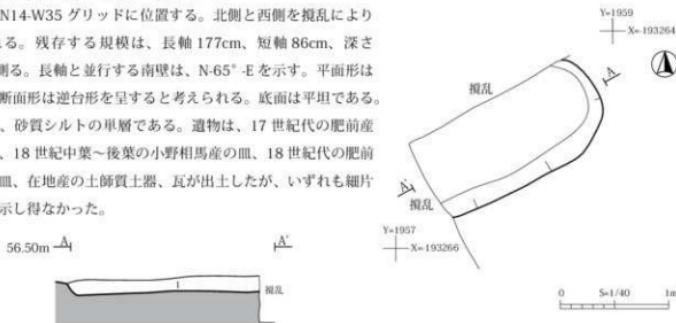


番名	土色	土質	粘性	しまり	備考
1	10YR4/2	灰黄褐色	粘土質シルト	ややあり	あり 斑状に黄褐色シルト少量
2	10YR6/1	褐色	シルト質粘土	あり	径5mmの黄褐色少量化
3	10YR5/1	褐色	粘土質シルト	あり	径1～5cmの黄褐色シルトや多量
4	10YR5/1	褐色	粘土質シルト	ややあり	径2～10cmの黄褐色シルトや多量 径1～2cmの炭化鉄分や多量
5	10YR4/1	褐色	粘土質シルト	あり	径0.5～1cmの炭化鉄分少量

第123図 SK28 土坑平面図・断面図

14) SK33 土坑 (第124図、図版47-4)

1区のN14-W35グリッドに位置する。北側と西側を擾乱により削平される。残存する規模は、長軸177cm、短軸86cm、深さ11cmを測る。長軸と並行する南壁は、N-65°-Eを示す。平面形は不明で、断面形は逆台形を呈すると考えられる。底面は平坦である。堆積土は、砂質シルトの单層である。遺物は、17世紀代の肥前産陶器の皿、18世紀中葉～後葉の小野相馬産の皿、18世紀代の肥前産磁器の皿、在地産の土師質土器、瓦が出土したが、いずれも細片のため図示し得なかった。



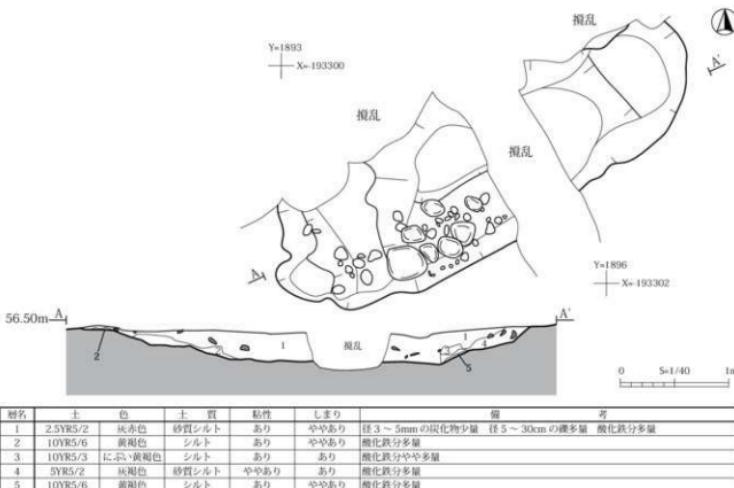
番名	土色	土質	粘性	しまり	備考
1	10YR4/2	灰黄褐色	砂質シルト	ややあり	10YR4/6褐色砂質シルト少量 径1～3cmの炭化物少量

第124図 SK33 土坑平面図・断面図

15) SK35 土坑 (第125図、図版47-5～8)

2区のN10-W41グリッドに位置する。礫が廃棄された廃棄土坑と考えられる。残存する規模は、長軸433cm、短軸157cm、深さ35cmを測り、主軸方位はN-58°-Eを示す。平面形は不整な楕円形で、断面は不明である。底面は複雑な起伏を見せながら、中央に向かって窪んでいる。当遺構内南西側底面から上面までに、径3～37cmの礫を多量に検出した。平坦な面を描えてはおらず意図的に礫を据えている様子が見られないことや、大小様々なに散乱していることから、廃棄されたものと考えられる。堆積土は5層からなり、1・4層は砂質シルトで、2・3・5層はシルトである。遺物は、18世紀中葉～後葉の大堀相馬産の碗、肥前産磁器の碗、在地産の軟質施釉陶器、瓦が出土したがいざれも細片のため図示し得なかった。

第2節 扇坂トンネル部

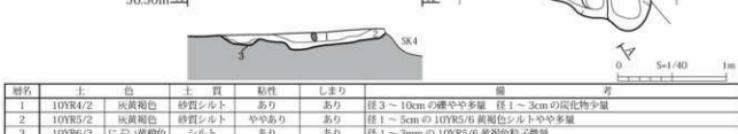


第125図 SK35 土坑平面図・断面図

16) SK39 土坑 (第126図、図版48-1・2)

I区のN13-W34グリッドに位置する。北東側を擾乱により削平されている。SK4と重複し、SK4より古い。残存する規模は、長軸198cm、短軸90cm、深さ19cmを測り、主軸方位は不明である。平面形は不明で、断面形は台形状を呈すると考えられる。底面は複雑な起伏がある。堆積土は3層からなり、1・2層は砂質シルトで、3層はシルトである。遺物は出土していない。

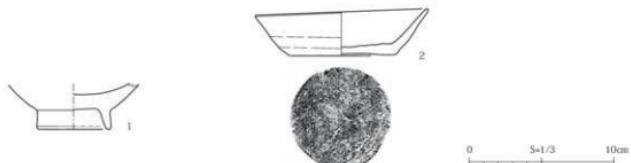
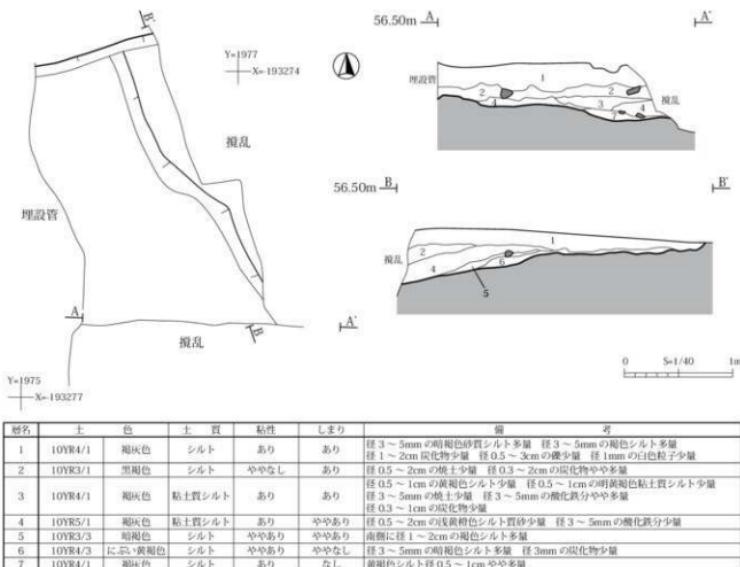
56.50m



第126図 SK39 土坑平面図・断面図

17) SK40 土坑 (第127図、図版48-3～6)

I区のN13-W33グリッドに位置する。南・東側を擾乱により削平される。西側は埋設管のため不明である。残存する規模は、長軸265cm、短軸179cm、深さ39cmを測り、主軸方位は不明である。平面形及び断面形は不明である。東側には上に段が見られ、底面の最深部から約20cmの高低差を測る。堆積土は7層からなり、1・2・5～7層はシルト、3・4層は粘土質シルトである。遺物は、17世紀後半の肥前産陶器の碗、18世紀中葉～後葉の大堀相馬産の碗、18世紀代の肥前産磁器の碗・皿、在地産の土師質土器、瓦質土器、瓦等が出土しており、そのうち17世紀後半の肥前産陶器の碗1点、在地産の土師質土器1点を図示した。



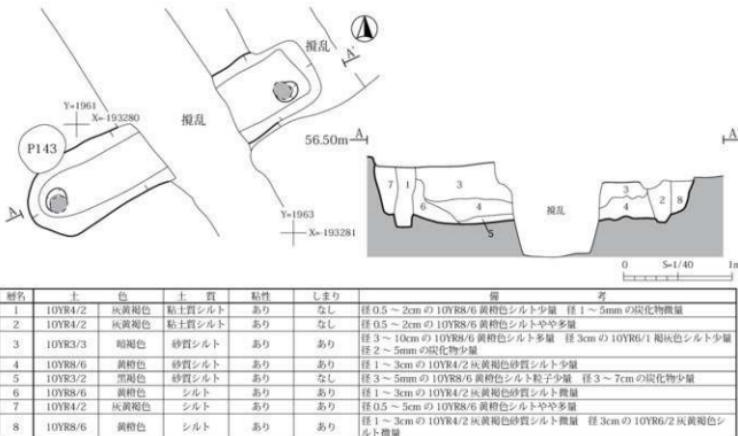
図版番号	写真図版番号	層位	種別	器種	部位	断土	法量(cm)	产地	時期	備考	登録番号	
1	82-12	2層	陶器	罐	体部~高台	溶	-	5.1 (3.2)	肥前	17世紀後半	I-464	
2	82-13	2層	土加質土器	かわらけ	上縁~底部	粗	12.0	7.3 (3.2)	在地	近世	波面:回転形切削面 ロクロ:左	I-458

第127図 SK40 土坑平面図、断面図、出土遺物

18) SK45 土坑 (第128図、図版49-1~3)

1区のN12・13-W34 グリッドに位置する。中央付近を搅乱により削平される。P143と重複し、P143より古い。残存する規模は、長軸 294cm、短軸 72cm、深さ 63cmを測り、主軸方位は N-62°-E を示す。平面形は不整な隅丸長方形で、断面形は逆台形を呈する。北東端及び南西端付近で柱痕跡を検出した。柱痕跡の柱間寸法は、236cmを測る。平面の形状や、両端付近で柱痕跡を検出したことから建物や塀等の布掘りと考えられる。堆積土は8層からなり、1・2層は粘土質シルト、3~5層は砂質シルト、6~8層はシルトである。遺物は出土していない。

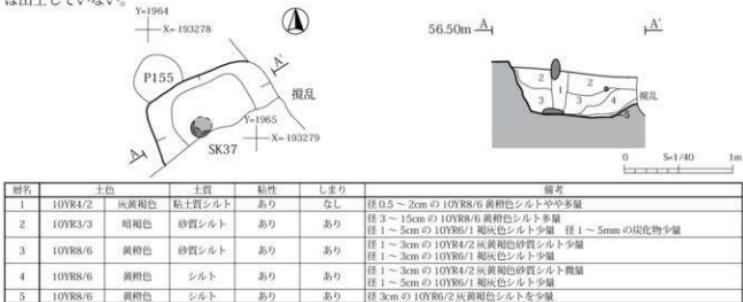
第2節 扇坂トンネル部



第128図 SK45 土坑平面図・断面図

19) SK46 土坑 (第129図、図版49-4・5)

1区のN13-W34グリッドに位置する。東側を擾乱により削平される。SK37、P155と重複し、P155より新しく、SK37より古い。長軸119cm、短軸55cm、深さ52cmを測り、主軸方位はN-61°-Eを示す。平面形は不整な長方形を呈すると考えられ、断面形は逆台形を呈する。北西側で柱痕跡を検出し、その底面から長さ20cm、幅17cm、厚さ5cmの礎石を検出した。柱痕跡の検出やその下から礎石を検出したことから柱穴跡と考えられる。ただし、柱痕や礎石の規模に対して掘り方が大きいことから、SK37の重複によって判然とはしないが、南東方向へ延びる布掘りも考えられる。また、当遺構の南西側にSK45が位置する。当遺構とSK45は、ほぼ同一の軸方位を示し、南北から北東へ並ぶ様相を呈する。SK45の東端付近で検出された柱痕と、当遺構の柱痕の柱間寸法は、181cm(6尺)を測る。堆積土は5層からなり、1層は粘土質シルト、2・3層は砂質シルト、4・5層はシルトである。遺物は出土していない。

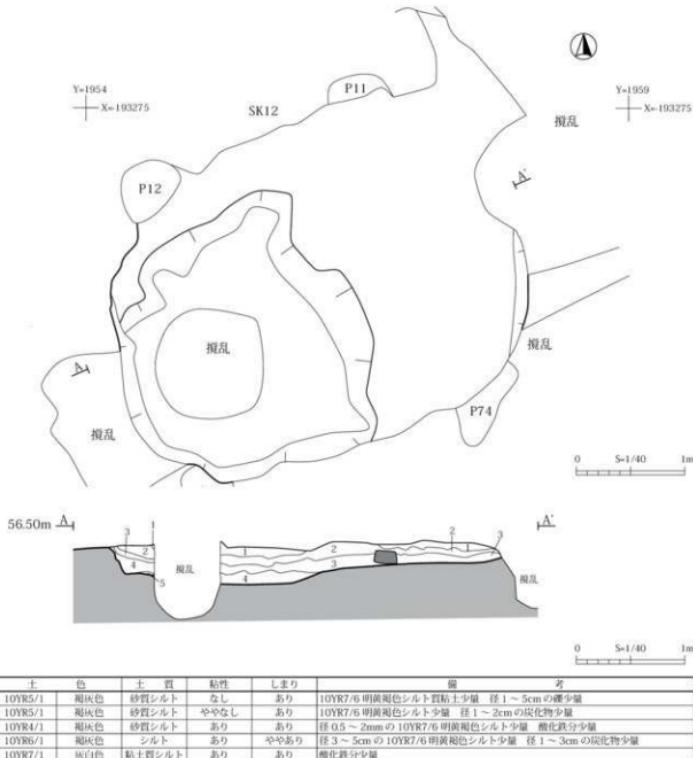


第129図 SK46 土坑平面図・断面図

(5) 性格不明遺構

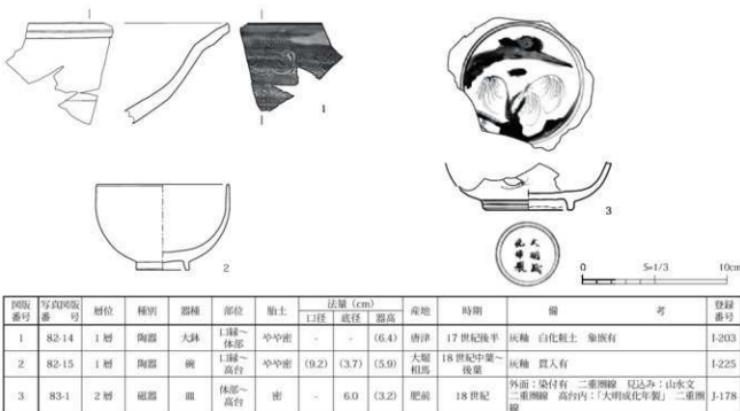
1) SX4 性格不明遺構 (第 130・131 図、図版 49-6～8)

1 区の N13-W35 グリッドに位置する。上端や縁辺部を、遺構や壊乱により削平されている。SK12、P11・12・74・85 と重複し、SK12、P74・85 より新しく、P11・12・より古い。残存する規模は、長軸 460cm、短軸 304cm、深さ 35cm を測り、主軸方位は N-55° E を示す。平面形は不明で、断面形は逆台形を呈すると考えられる。底面の西側には不整形で大きな窪みが見られ、その規模は東西 236cm、南北に 246cm、深さ 37cm を測る。堆積土は 5 層からなり、1～3 層は砂質シルトで、4 層がシルト、5 層が粘土質シルトである。遺物は、17 世紀代の肥前産陶器碗、18 世紀中葉～後葉の大堀相馬産の碗、18 世紀代の肥前産磁器の碗・皿・鉢、在地産の土師質土器が出土している。そのうち、17 世紀後半の唐津の大鉢、18 世紀中葉～後葉の大堀相馬産の碗を 1 点ずつ、18 世紀代の肥前産磁器の碗 1 点を図示した。



第 130 図 SX4 性格不明遺構平面図・断面図

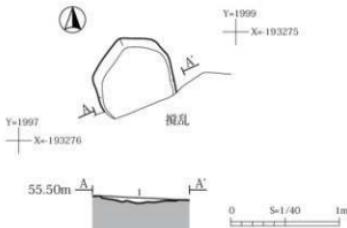
第2節 扇坂トンネル部



第131図 SX4 性格不明遺構出土遺物

2) SX5 性格不明遺構 (第132図、図版50-1・2)

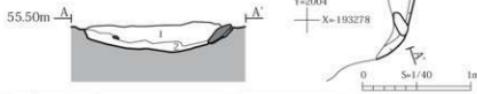
1区のN13-W31 グリッドに位置する。南側を搅乱により削平される。残存する規模は、長軸 73cm、短軸 67cm、深さ 17cm を測る。平面形は不整な円形を呈すると考えられ、断面形は皿形を呈する。底面には起伏が見られる。堆積土は砂質シルトの単層である。遺物は出土していない。



第132図 SX5 性格不明遺構平面図・断面図

3) SX6 性格不明遺構 (第133図、図版50-3)

1区のN13-W30 グリッドに位置する。遺構の大半を搅乱により削平される。残存する規模は、長軸 152cm、短軸 31cm、深さ 23cm を測り、主軸方位は不明である。平面形は不明で、断面形は皿形を呈する。底面は中央に向かってやや窪む。堆積土は2層からなり、いずれも砂質シルトである。遺物は出土していない。

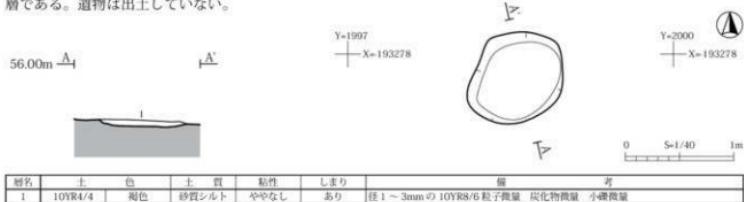


剖名	土色	土質	粘性	しまり	備考
1	10YR4/4	褐色	砂質シルト	ややあり	径 1 ~ 10cm の黄褐色シルトや多量 径 3mm の黄褐色粒子微量 炭化物微量
2	10YR4/3	にぶい黄褐色	砂質シルト	ややあり	ややあり 径 0.1 ~ 1cm の10YR7/8 黄褐色シルト少量 径 3mm の10YR7/4 にぶい黄褐色粒子微量 炭化物微量 小磯少量

第133図 SX6 性格不明遺構平面図・断面図

4) SX8 性格不明遺構 (第 134 図、図版 50-4)

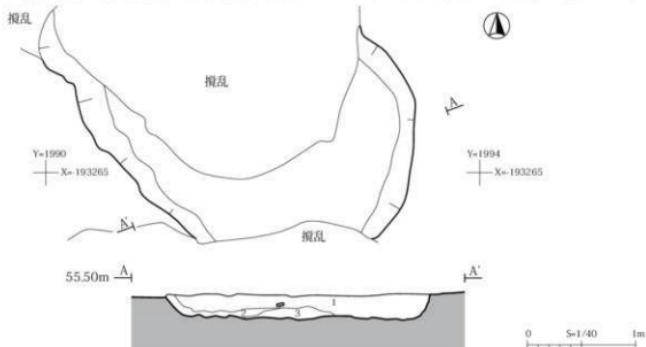
1 区の N13-W31 グリッドに位置する。残存する規模は、長軸 98cm、短軸 84cm、深さ 8cm を測り、主軸方位は、N-53°-E を示す。平面形は不整な円形で、断面形は皿形を呈する。底面は平坦である。堆積土は砂質シルトの単層である。遺物は出土していない。



第 134 図 SX8 性格不明遺構平面図・断面図

5) SX9 性格不明遺構 (第 135 図、図版 50-5・6)

1 区の N14-W31・32 グリッドに位置する。北側と南端を擾乱により削平される。残存する規模は、長軸 369cm、短軸 255cm、深さ 25cm を測り、主軸方位は不明である。平面形は不明で、断面形は逆台形を呈する。底面には起伏が見られる。堆積土は 3 層からなり、1・2 層はシルト、3 層は粘土質シルトである。遺物は、18世紀中葉～後葉の大堀相馬産の碗、在地産の土師質土器が出土しているが、いずれも細片のため図示し得なかった。



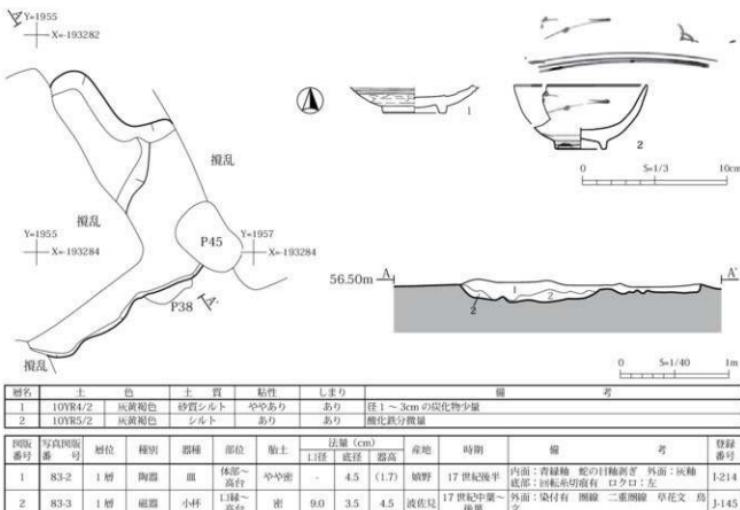
第 135 図 SX9 性格不明遺構平面図・断面図

6) SX10 性格不明遺構 (第 136 図、図版 50-7・8)

1 区の N12-W35 グリッドに位置する。遺構の大半を擾乱により削平される。P38・45 と重複し、P38 より新しく、P45 より古い。残存する規模は、長軸 218cm、短軸 210cm、深さ 17cm を測り、主軸方位は不明である。平面形は不明で、断面形は不整な逆台形状を呈すると考えられる。底面には起伏が見られる。堆積土は 2 層からなり、1 層は砂質シルト、2 層はシルトである。遺物は、17世紀代の唐津の碗、18世紀中葉～後葉の大堀相馬産の碗・皿、

第2節 扇坂トンネル部

18世紀中葉～後葉の小野相馬産の碗、18世紀中葉～後葉の肥前產磁器の碗、在地産の土師質土器、金属製品、瓦が出土している。そのうち17世紀後半の姫野の皿を1点、17世紀中葉～後葉の波佐見産磁器の碗1点を図示した。



第136図 SX10性格不明遺構平面図・断面図・出土遺物

7) SX11性格不明遺構 (第137図、第8表、図版51-1・2)

1区のN12-W35グリッドに位置する。P55・75と重複し、いざれより古い。残存する規模は、長軸187cm、短軸87cm、深さ79cmを測り、主軸方位はN-31°-Wを示す。平面形は隅丸長方形で、断面形は逆台形を呈する。底面北端には長軸43cm、短軸40cm、南端には長軸59cm、短軸50cmを測る不整な隅丸形を呈する窪みが見られ、北端の窪みには長さ31cm、幅12cm、厚さ9cmの、南端の窪みには、長さ41cm、幅17cm、厚さ12cmの礎板石と考えられる礎を1点ずつ検出した。また、南端付近では柱痕を検出した。平面の形状や、遺構底面の両端で礎板石と考えられる礎を検出したこと、南端付近で柱痕を検出したことから、当遺構は布掘りの可能性が考えられる。堆積土は7層からなり、1・4層は砂質シルトで、2・3・5・6層はシルト、7層は粘土質シルトである。遺物は出土していない。

第137図 SX11性格不明遺構平面図・断面図

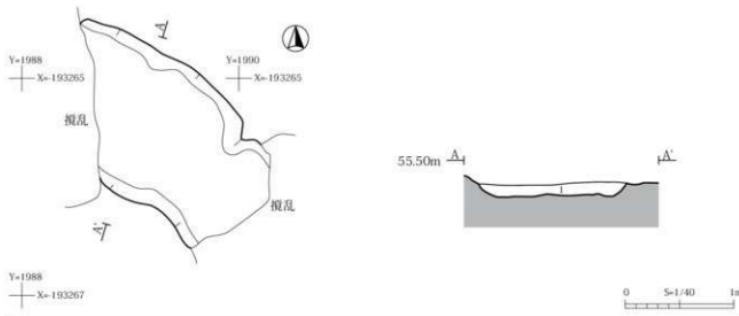


番号	土色	土質	粘性	しまり	備考
1	10YR4/2	灰黄褐色	砂質シルト	ややあり	あり 径3~20cmの10YR5/6 黄褐色シルト多量 径1~3cmの10YR4/2 灰黄褐色砂質シルト微量
2	10YR5/6	黄褐色	シルト	あり	あり 径1~5cmの10YR4/2 灰黄褐色砂質シルト少量 径1~3cmの10YR4/6 褐色シルト微量
3	10YR5/8	黄褐色	シルト	あり	あり 径1~3cmの10YR4/2 灰黄褐色砂質シルト微量 径3~5cmの10YR6/1 褐色シルト微量
4	10YR4/2	灰黄褐色	砂質シルト	あり	あり 径1~3cmの10YR4/2 灰黄褐色砂質シルト微量 径3~5cmの10YR6/1 褐色シルト微量
5	10YR5/6	黃褐色	シルト	あり	あり 径1~3cmの10YR4/2 灰黄褐色砂質シルトやや多量 径1~3cmの10YR4/6 褐色シルト少量
6	10YR5/8	黄褐色	シルト	あり	あり 径1cmの10YR4/2 灰黄褐色砂質シルト微量
7	10YR5/3	土褐色	粘土質シルト	あり	ややあり 径1~3cmの10YR4/2 灰黄褐色砂質シルト微量

第8表 SX11性格不明遺構土層観察表

8) SX18性格不明遺構（第138図、図版51-3・4）

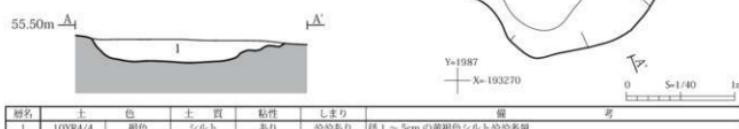
2区のN14-W31・32グリッドに位置する。北側と南東側を搅乱により削平される。残存する規模は、長軸236cm、短軸134cm、深さ14cmを測り、主軸方位はN-47°-Wを示す。平面形は不整形で、断面形は逆台形とする。底面はやや起伏が見られる。堆積土は粘土質シルトの単層である。遺物は出土していない。



第138図 SX18性格不明遺構平面図・断面図

9) SX21性格不明遺構（第139図、図版51-5・6）

2区のN14-W32グリッドに位置する。残存する規模は、長軸244cm、短軸195cm、深さ22cmを測り、N-64°-Eを示す。平面形は不整形で、断面形は不整な逆台形を呈する。底面は平坦である。堆積土は、シルトの単層である。遺物は出土していない。

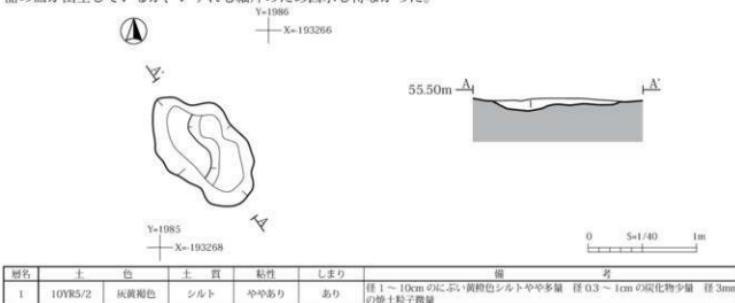


第139図 SX21性格不明遺構平面図・断面図

第2節 扇坂トンネル部

10) SX25 性格不明遺構 (第140図、図版51-7・8)

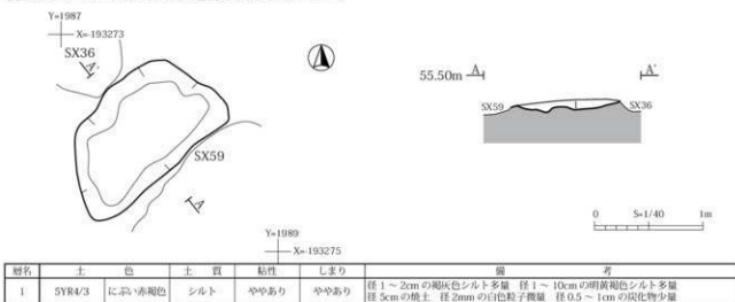
2区のN14-W32 グリッドに位置する。残存する規模は、長軸122cm、短軸72cm、深さ11cmを測り、主軸方位はN-44°-Wを示す。平面形は不整な梢円形で、断面形は不整な皿形を呈すると考えられる。底面の西側に、段が見られる。堆積土は、シルトの単層である。遺物は18世紀中葉～後葉の大堀相馬産の皿、18世紀の肥前産磁器の皿が出土しているが、いずれも細片のため図示し得なかった。



第140図 SX25 性格不明遺構平面図・断面図

11) SX26 性格不明遺構 (第141図、図版52-1・2)

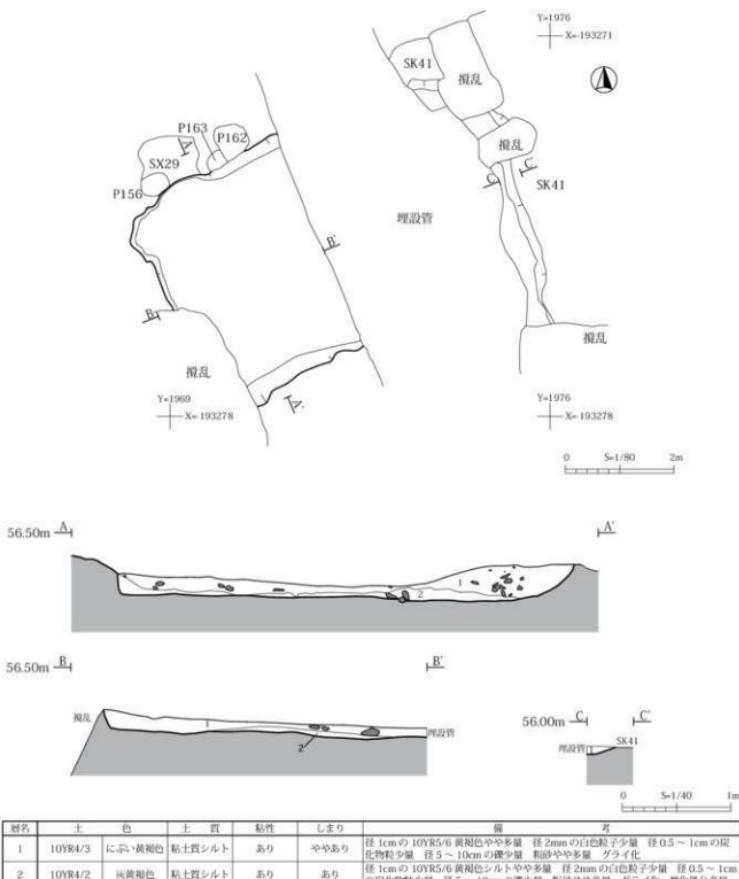
2区のN13-W32 グリッドに位置する。残存する規模は、長軸162cm、短軸72cm、深さ11cmを測り、主軸方位はN-48°-Eを示す。平面形は不整な長方形で、断面形は不整な皿形を呈する。底面はやや起伏が見られる。堆積土はシルトの単層である。遺物は出土していない。



第141図 SX26 性格不明遺構平面図・断面図

12) SX27 性格不明遺構 (第142図、図版52-3～6)

2区のN13-W33・34 グリッドに位置する。南西隅、北東隅を搅乱により削平される。SK41と重複し、SK41より古い。残存する規模は、長軸730cm、短軸429cm、深さ35cmを測り、主軸方位はN-70°-Eを示す。平面形は不整な長方形で、断面形は逆台形を呈する。底面はほぼ平坦である。堆積土は2層からなり、いずれも粘土質シルトである。遺物は近世の産地不明の陶器、瓦質土器、瓦が出土しているが、いずれも細片のため図示し得なかった。



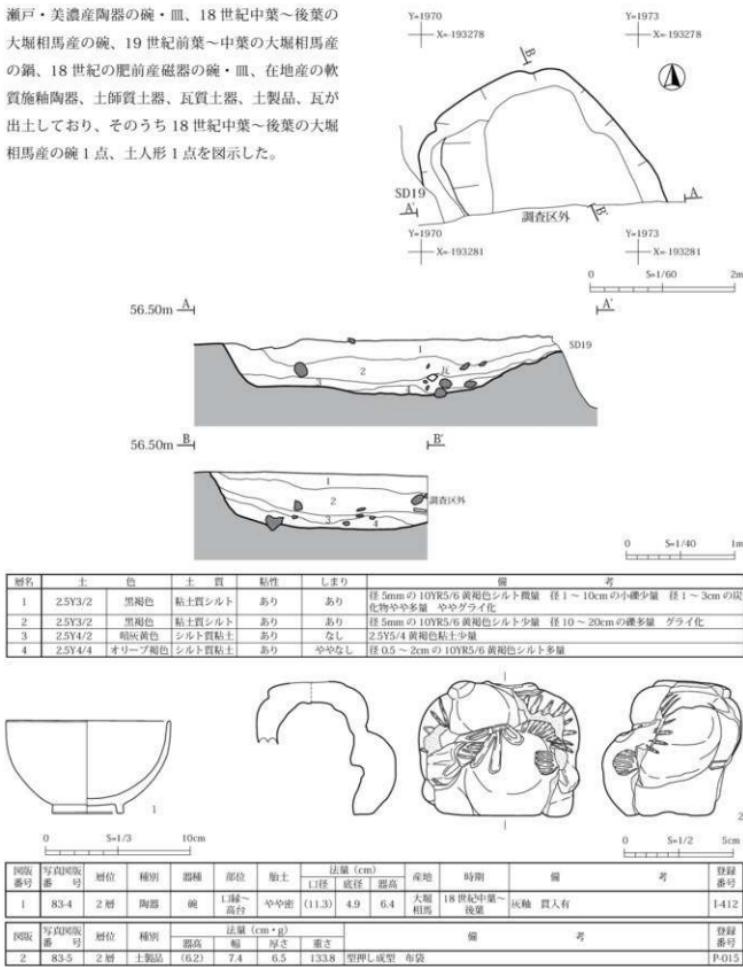
第142図 SX27 性格不明遺構平面図・断面図

13) SX28 性格不明遺構（第143図、図版52-7～53-1）

2区のN12・13-W33・34グリッドに位置する。南側は、調査区外へと延びる。SD19と重複し、SD19より古い。残存する規模は、長軸261cm、短軸228cm、深さ54cmを測り、主軸方位は不明である。平面形は不明で、断面形は逆台形を呈する。底面はやや起伏が見られる。堆積土は4層からなり、1・2層は粘土質シルトでグラウヒ化している。3・4層はシルト質粘土である。遺物は、17世紀末～18世紀前葉の岸窯産の擂鉢、17世紀～18世紀の

第2節 扇坂トンネル部

瀬戸・美濃産陶器の碗・皿、18世紀中葉～後葉の大堀相馬産の碗、19世紀前葉～中葉の大堀相馬産の鍋、18世紀の肥前産磁器の碗・皿、在地産の軟質施釉陶器、土師質土器、瓦質土器、土製品、瓦が出土しており、そのうち18世紀中葉～後葉の大堀相馬産の碗1点、土人形1点を図示した。

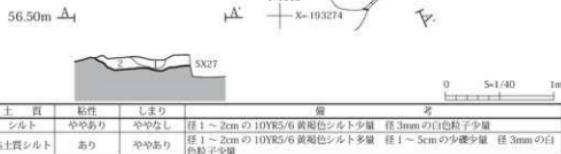


第143図 SX28性格不明遺構平面図・断面図・出土遺物

14) SX29 性格不明遺構（第144図、図版53-2）

2区のN13-W34グリッドに位置する。SX27・38、P156と重複し、SX38より新しく、SX27、P156より古い。残存する規模は、長軸112cm、短軸108cm、深さ13cmを測り、主軸方位は不明である。平面形は不明で、断面

形は逆台形状を呈すると考えられる。底面はやや起伏が見られる。堆積土は2層からなり、1層はシルトで、2層は粘土質シルトである。遺物は、17世紀後葉～18世紀前葉の肥前産陶器の碗、18世紀中葉～後葉の京焼の碗、18世紀中葉～後葉の大堀相馬産の碗、18世紀中葉～後葉の肥前産磁器の碗等が出土したが、いずれも細片のため図示し得なかった。



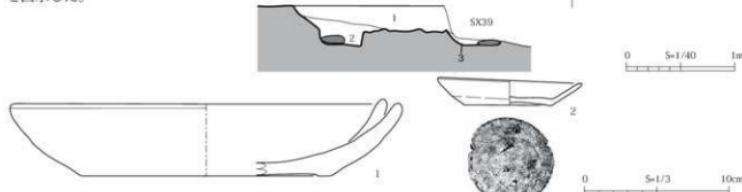
第144図 SX29 性格不明遺構平面図・断面図

15) SX30 性格不明遺構 (第145図、図版53-3)

2区のN14-W34グリッドに位置する。SX39と重複し、SX39より古い。残存する規模は、長軸202cm、短軸111cm、深さ39cmを測り、主軸方位はN-21°-Wを示す。平面形は不整な長方形を呈し、断面形は不整な逆台形を呈すると考えられる。底面北端と南端に、長軸42～51cm、短軸29～37cm、深さ14cmを測り、平面形は不整形な方形もしくは長方形の窪みが1基ずつ見られる。いずれの窪みにも、長さ21～26cm、幅16～21cm、厚さ5～7cmの縁が、平坦な面を上に向けて置かれており、礎板石の様相を呈する。平面形は長方形を呈し、遺構底面の両端で礎板石状の縁を検出したことから布掘りの可能性が考えられる。堆積土は3層からなり、1・3層は粘土質シルトで、2層はシルト質粘土である。遺物は、16世紀末～17世紀初頭の唐津の向付、17世紀初頭の志野の皿、在地産の土師質土器、瓦が出土しており、そのうち17世紀初頭の志野の皿1点、在地産の土師質土器1点

56.50m Δ

を図示した。



番号	土色	土質	粘性	しまり	備考
1	10YR3/2	黒褐色	粘土質シルト	あり	ややあり 径0.5～1cmの10YR5/6 黄褐色シルト少量 径5cmの少磊少量 径3mmの白色粒子少量、グライ化
2	5G5/1	黒褐色	シルト質粘土	あり	あり 径0.5～1cmの10YR5/6 黄褐色シルト少量 径2mmの白色粒子少量、グライ化
3	10YR3/2	黒褐色	粘土質シルト	あり	あり 径0.5～1cmの10YR5/6 黄褐色シルト多量 径2mmの白色粒子少量、グライ化

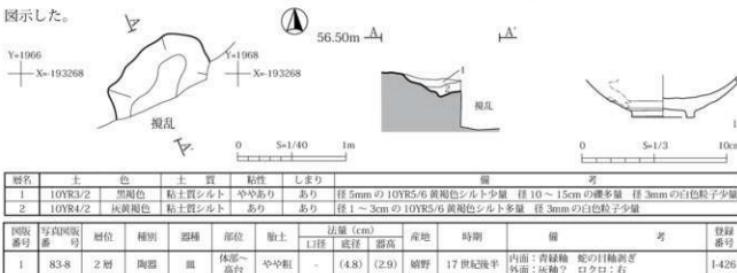
図版 番号	層位	種類	器種	部位	胎土	測定(cm)			備考	登録 番号
						L径	W径	高さ		
1	82-6	1層	陶器	皿	上縁～底部	やや粗	(27.3)	(17.4)	(5.0)	志野 17世紀初 志野釉 外面：重ね焼痕有 I-420
2	82-7	1層	土師質 土器	印明顯	上縁～底部	粗	(9.8)	6	1.9	有地 近世 内面：クロナデ 外面：ロクロナデ 口縁：油懸付着 底部：回転系切妻有 ロクロ：左 I-424

第145図 SX30 性格不明遺構平面図・断面図・出土遺物

第2節 扇坂トンネル部

16) SX32 性格不明遺構 (第146図、図版53-4～54-1)

2区のN14-W34 グリッドに位置する。南側を擾乱により削平される。残存する規模は、長軸 86cm、短軸 67cm、深さ 21cm を測り、主軸方位は不明である。平面・断面形とともに不明である。底面はやや起伏が見られる。堆積土は2層からなり、いずれも粘土質シルトである。遺物は17世紀後半の嬉野産の皿が出土しており、それを図示した。



第146図 SX32 性格不明遺構平面図・断面図・出土遺物

17) SX35 性格不明遺構 (第147図、図版54-2・3)

2区のN13・14-W32 グリッドに位置する。残存する規模は、長軸 335cm、短軸 190cm、深さ 29cm を測り、主軸方位は N-19°-W を示す。平面形は不整形で、断面形は逆台形を呈すると考えられる。底面は平坦である。堆積土はシルトの単層である。遺物は出土していない。

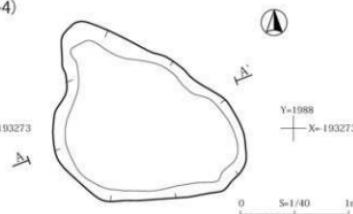


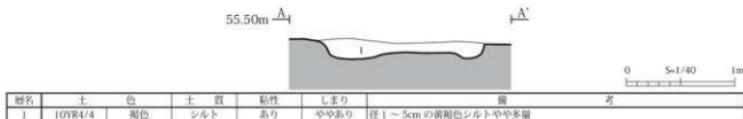
第147図 SX35 性格不明遺構平面図・断面図

18) SX36 性格不明遺構 (第148・149図、図版54-4)

2区のN14-W31・32 グリッドに位置する。残存する規模は、長軸 206cm、短軸 140cm、深さ 18cm を測り、主軸方位は N-49°-W を示す。平面形は不正形で、断面形は逆台形状を呈する。底面は起伏が見られる。堆積土はシルトの単層である。遺物は出土していない。

第148図 SX36 性格不明遺構平面図

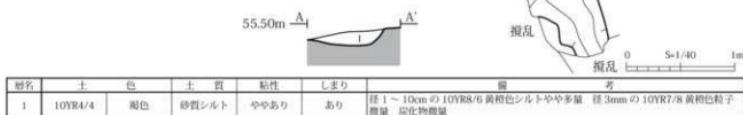




第149図 SX36 性格不明遺構断面図

19) SX37 性格不明遺構（第150図、図版54-5）

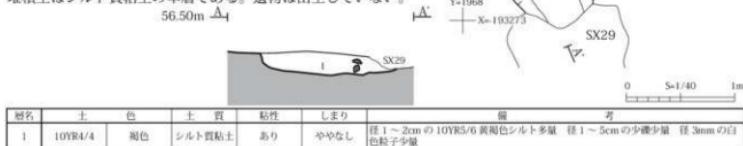
2区のN13-W31グリッドに位置する。南端を搅乱により削平される。残存する規模は、長軸213cm、短軸85cm、深さ16cmを測り、主軸方位はN-22°-Wを示す。平面形は不整形で、断面形は逆台形状を呈する。底面は平坦である。堆積土は砂質シルトの単層である。遺物は出土していない。



第150図 SX37 性格不明遺構平面図・断面図

20) SX38 性格不明遺構（第151図、図版54-6・7）

2区のN13-W34グリッドに位置する。SX29と重複し、SX29より古い。残存する規模は、長軸135cm、短軸71cm、深さ22cmを測り、主軸方位はN-28°-Wを示す。平面形は不整な楕円形を呈し、断面形は逆台形を呈すると考えられる。底面はやや起伏が見られる。堆積土はシルト質粘土の単層である。遺物は出土していない。



第151図 SX38 性格不明遺構平面図・断面図

21) SX43 性格不明遺構（第152図、図版54-8・55-1）

2区のN14-W32グリッドに位置する。SX42と重複し、SX42より古い。残存する規模は、長軸73cm、短軸71cm、深さ12cmを測り、N-43°-Eを示す。平面形は不整な円形で、断面形は皿形を呈する。底面は中央部分が窪んでいる。堆積土はシルトの単層である。遺物は出土していない。

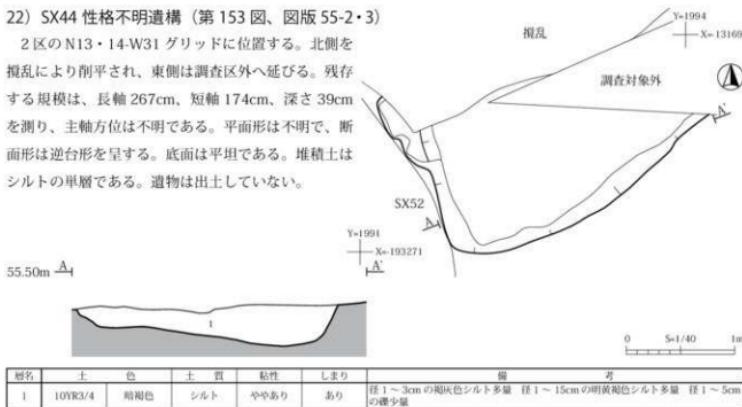


第152図 SX43 性格不明遺構平面図・断面図

第2節 扇坂トンネル部

22) SX44 性格不明遺構 (第153図、図版55-2・3)

2区のN13・14-W31 グリッドに位置する。北側を擾乱により削平され、東側は調査区外へ延びる。残存する規模は、長軸 267cm、短軸 174cm、深さ 39cm を測り、主軸方位は不明である。平面形は不明で、断面形は逆台形を呈する。底面は平坦である。堆積土はシルトの単層である。遺物は出土していない。

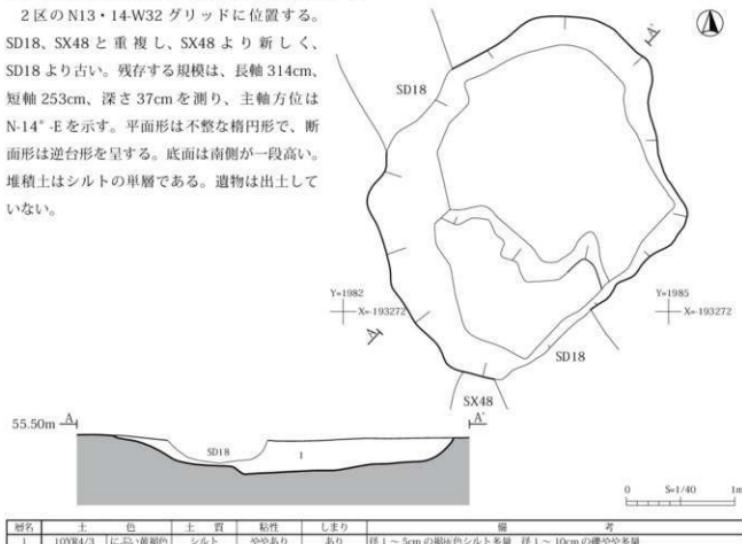


第153図 SX44 性格不明遺構平面図・断面図

23) SX45 性格不明遺構 (第154図、図版55-4)

2区のN13・14-W32 グリッドに位置する。

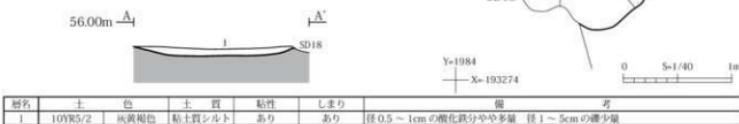
SD18、SX48 と重複し、SX48より新しく、SD18より古い。残存する規模は、長軸 314cm、短軸 253cm、深さ 37cm を測り、主軸方位は N-14°-E を示す。平面形は不整な梢円形で、断面形は逆台形を呈する。底面は南側が一段高い。堆積土はシルトの単層である。遺物は出土していない。



第154図 SX45 性格不明遺構平面図・断面図

24) SX46 性格不明遺構（第155図、図版55-5）

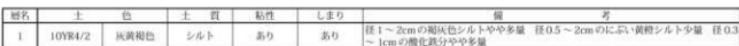
2区のN13-W32 グリッドに位置する。SD18と重複し、SD18より古い。残存する規模は、長軸 197cm、短軸 147cm、深さ 10cm を測り、主軸方位は N-19°-W を示す。平面形は不整な椭円形で、断面形は逆台形を呈する。底面は平坦である。堆積土は粘土質シルトの単層である。遺物は出土していない。



第155図 SX46 性格不明遺構平面図・断面図

25) SX47 性格不明遺構（第156図、図版55-6）

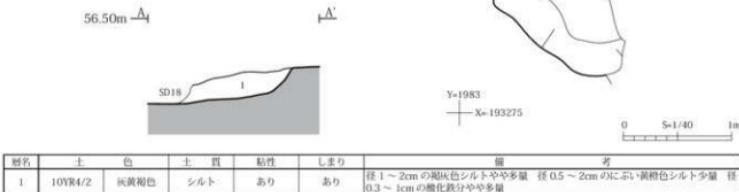
2区のN13-W32 グリッドに位置する。SD18と重複し、SD18より古い。残存する規模は、長軸 135cm、短軸 65cm、深さ 18cm を測り、主軸方位は N-24°-W を示す。平面形は不整な椭円形を呈すると考えられ、断面形は不明である。底面は平坦である。堆積土はシルトの単層である。遺物は出土していない。



第156図 SX47 性格不明遺構平面図・断面図

26) SX48 性格不明遺構（第157図、図版55-7）

2区のN13-W32 グリッドに位置する。SD18、SX45と重複し、いずれの遺構よりも古い。残存する規模は、長軸 245cm、短軸 105cm、深さ 34cm を測り、主軸方位は不明である。平面形・断面形は不明である。底面は平坦である。堆積土はシルトの単層である。遺物は出土していない。

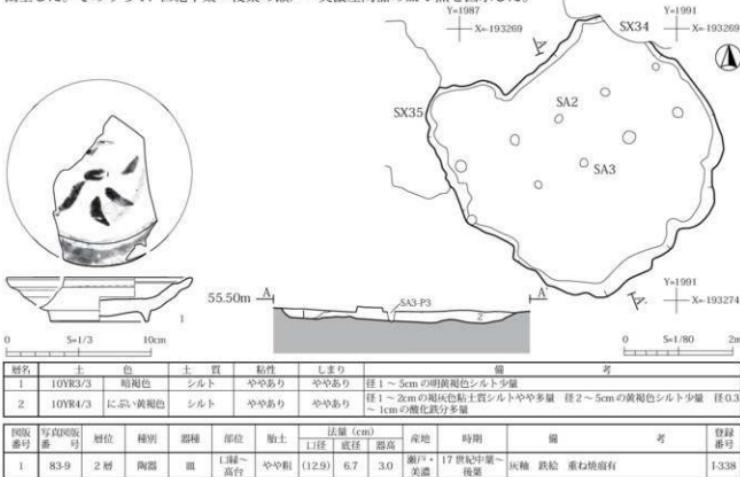


第157図 SX48 性格不明遺構平面図・断面図

第2節 扇坂トンネル部

27) SX52 性格不明遺構 (第158図、図版55-8)

2区のN13・14-W31・32 グリッドに位置する。SA2・3・SX34・35と重複し、SX35より新しく、SA2・3・SX34より古い。残存する規模は、長軸 488cm、短軸 255cm、深さ 29cm を測り、主軸方位は不明である。平面形は不整形で、断面形は逆台形を呈する。底面はやや起伏が見られる。堆積土は2層からなり、いずれもシルトである。遺物は、17世紀中葉～後葉の瀬戸・美濃産陶器の皿、18世紀中葉～後葉の京焼の碗、18世紀中葉～後葉の大堀相馬産の碗・皿、17世紀代の肥前産磁器の皿、在地産の軟質施釉陶器、土師質土器、瓦等が出土した。そのうち 17世紀中葉～後葉の瀬戸・美濃産陶器の皿 1点を図示した。



第158図 SX52 性格不明遺構平面図・断面図・出土遺物

28) SX53 性格不明遺構 (第159・160図、図版56-1～3)

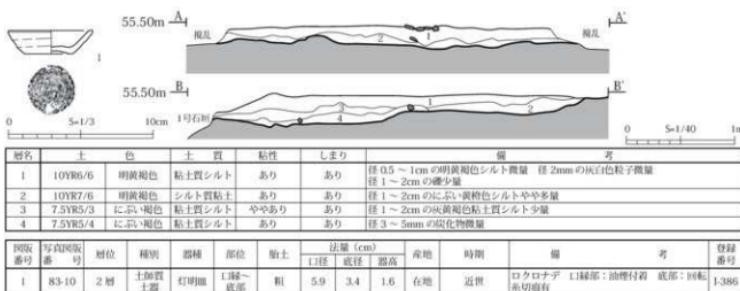
2区のN13-W30 グリッドに位置する。南北を擾乱に

により削平される。調査区中央付近 (N13 ~ 15・W30 ~ 32) で検出された 1号石垣と重複し、1号石垣より古い。

残存する規模は、長軸 376cm、短軸 355cm、深さ 28cm を測り、主軸方位は不明である。平面形および断面形は、ともに不明である。底面西側には、段が見られる。堆積土は4層からなり、1・3・4層が粘土質シルトで、2層がシルト質粘土である。遺物は、17世紀代の肥前産陶器の碗、17世紀代の瀬戸・美濃産陶器の皿、18世紀中葉～後葉の大堀相馬産の碗、18世紀代の肥前産磁器の碗、在地産の土師質土器、瓦が出土した。そのうち、在地産の土師質土器を1点図示した。



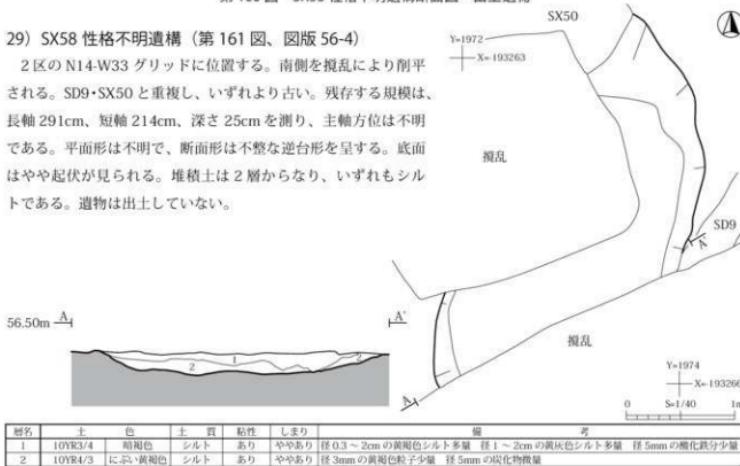
第159図 SX53 性格不明遺構平面図



第160図 SX53 性格不明遺構断面図・出土遺物

29) SX58 性格不明遺構（第161図、図版 56-4）

2区のN14-W33 グリッドに位置する。南側を撲乱により削平される。SD9・SX50 と重複し、いずれより古い。残存する規模は、長軸 291cm、短軸 214cm、深さ 25cm を測り、主軸方位は不明である。平面形は不明で、断面形は不整な逆台形を呈する。底面はやや起伏が見られる。堆積土は2層からなり、いずれもシルトである。遺物は出土していない。



第161図 SX58 性格不明遺構平面図・断面図

30) SX59 性格不明遺構（第162・163図、図版 56-5・6）

2区のN13-W32 グリッドに位置する。残存する規模は、長軸 229cm、短軸 172cm、深さ 19cm を測り、主軸方位は N-31°-E を示す。平面形は不整な長方形を呈し、断面形は逆台形を呈すると考えられる。底面は平坦である。堆積土は3層からなり、いずれも粘土質シルトである。遺物は出土していない。



第162図 SX59 性格不明遺構平面図

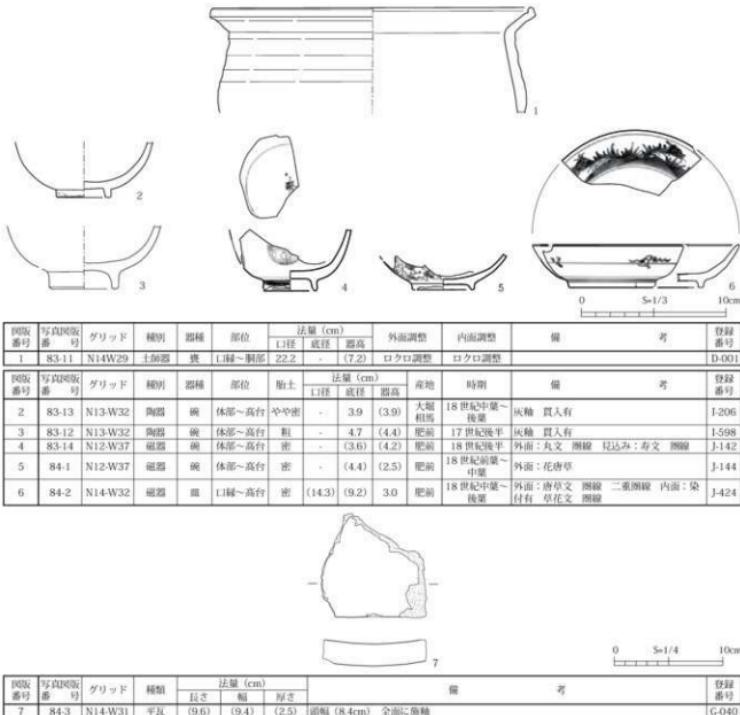
第2節 扇坂トンネル部



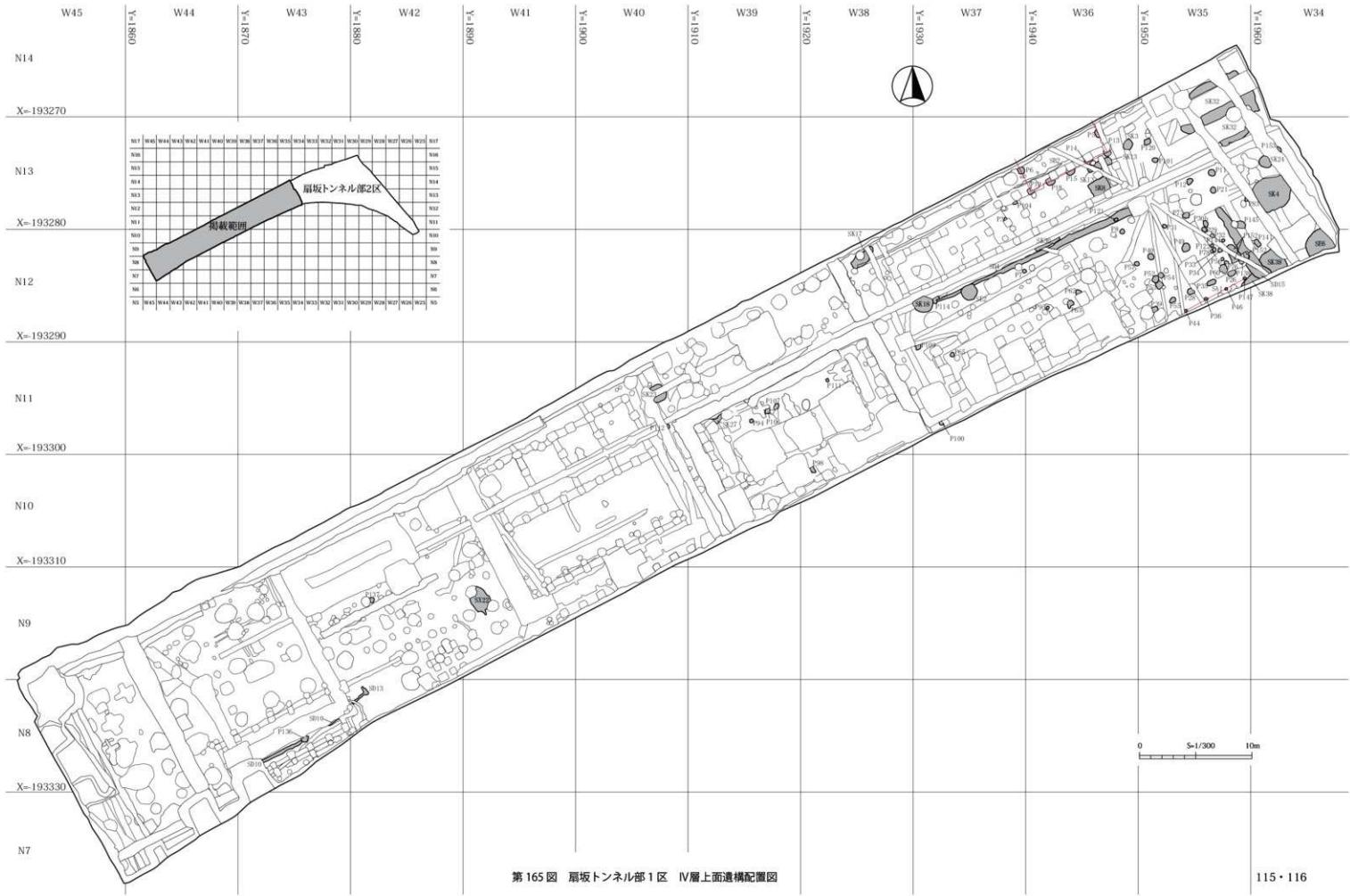
第163図 SX59 性格不明遺構断面図

(6) V層出土遺物 (第164図、図版83-11~84-3)

今回V層から、総点数278点遺物が出土した。その内訳は、陶器119点、磁器112点、土師器2点、瓦質土器9点、土師質土器17点、土製品1点、石製品1点、金属製品3点、瓦14点が出土した。これらのうち、陶器2点、磁器3点、土師器1点、瓦1点を図示した。瓦は破片であるが、全面に施釉されているため図示した。



第164図 V層出土遺物





第166図 扇坂トンネル部2区 IV層上面遺構配置図

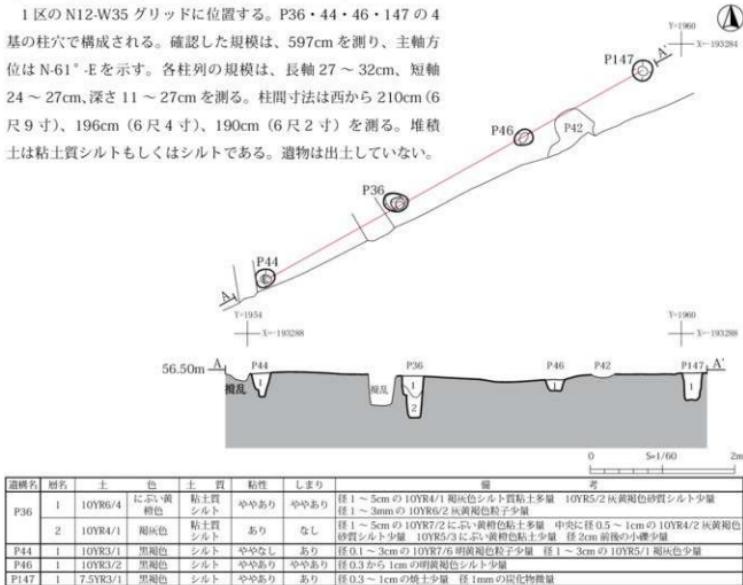
2 IV層上面検出遺構と出土遺物

IV層整地層は、2区中央から西側及び1区東端に分布する。また、2区東端崖部においてIV層相当と考えられる堆積を確認した。遺構は、杭例1条、建物跡1棟、溝跡6条、井戸跡2基、土坑22基、性格不明遺構20基、ピット57基である。

(1) 柱列跡

1) SA1 柱列跡（第167図、図版56-7～57-4）

1区のN12-W35グリッドに位置する。P36・44・46・147の4基の柱穴で構成される。確認した規模は、597cmを測り、主軸方位はN-61°-Eを示す。各柱列の規模は、長軸27～32cm、短軸24～27cm、深さ11～27cmを測る。柱間寸法は西から210cm(6尺9寸)、196cm(6尺4寸)、190cm(6尺2寸)を測る。堆積土は粘土質シルトもしくはシルトである。遺物は出土していない。



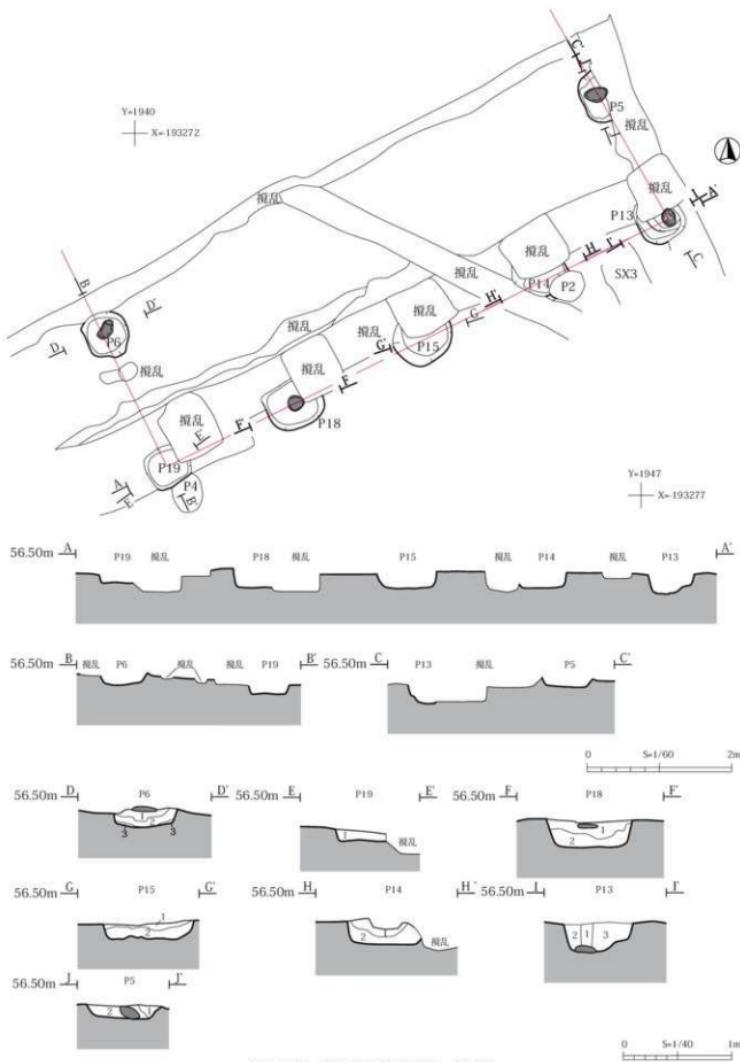
第167図 SA1 柱列跡平面図・断面図

(2) 建物跡

2) SB2 建物跡（第168図、第9表、図版57-5～59-2）

1区のN13-W36-37グリッドに位置する。P5・6・13～15・18・19の7基の柱穴で構成される。東西4間(772cm)、南北1間(201cm)以上の建物跡である。P14がP2と重複し、P2より古い。また、P19がP4と重複し、P4より古い。柱穴列が示す方位は、東西がN-63°-E、南北がN-24°-Wを示す。各柱穴の規模は、長軸61～85cm、短軸33～70cm、深さ11～27cmを測る。柱間寸法はP13からP14が192cm(6尺3寸)、P14からP15が197cm(6尺5寸)で、そのほかは201cm(6尺6寸)を測る。P13では柱痕を、P5・13では遺構底面において径23～35cmを測る礫を検出した。堆積土は、概ね粘土質シルトを主体とする。遺物は、P5から19世紀前葉～中葉の漁戸・美濃産磁器の碗、P18から19世紀前葉～中葉の漁戸・美濃産磁器の皿が出土しているが、いずれも細片のため図示し得なかった。

第2節 扇坂トンネル部



第168図 SB2 建物跡平面図・断面図

遺構名	層名	土色	土質	粘性	しまり	備考
P5	1	10YR3/1 黒褐色	粘土質シルト	なし	あり	径 0.5 ~ 1cm の 10YR7/6 明黃褐色粘土質シルトや多量
	2	10YR7/6 明黃褐色	粘土質シルト	あり	あり	径 0.5 ~ 1cm の 10YR7/6 明黃褐色粘土質シルトや多量
P6	1	10YR3/2 黒褐色	シルト	ややなし	あり	径 0.5 ~ 1cm の 10YR7/6 黄褐色粘土質シルト少量 径 0.5 ~ 1cm の 10YR8/6 黄褐色粘土質シルト少量
	2	10YR7/8 黄褐色	粘土質シルト	ややあり	あり	10YR3/2 黑褐色シルト やや多量 径 0.5 ~ 1cm の 10YR7/4 に ぶく 黄褐色粘土小量 径 0.5 ~ 1cm の 10YR4/3 に ぶく 黄褐色粘土質シルト少量
	3	10YR7/8 黄褐色	粘土	あり	あり	径 0.5 ~ 1cm の 10YR7/4 に ぶく 黄褐色粘土や多量 10YR3/2 黑褐色シルト少量
P13	1	10YR3/1 黒褐色	粘土質シルト	なし	あり	径 0.5 ~ 1cm の 10YR7/8 黄褐色粘土質シルト少量
	2	10YR3/1 黒褐色	粘土質シルト	なし	あり	径 0.5 ~ 1cm の 10YR7/8 黄褐色粘土質シルト少量
	3	10YR7/8 黄褐色	粘土質シルト	ややあり	あり	径 0.5 ~ 1cm の 10YR7/8 黄褐色粘土質シルト少量 径 0.5 ~ 1cm の 10YR3/1 黒褐色シルト少量
P14	1	10YR7/6 明黃褐色	粘土質シルト	ややなし	あり	径 1 ~ 5cm の 10YR3/1 黑褐色シルトを地状に少量 径 1 ~ 3mm の 5YR4/8 黄褐色燒土微量
	2	10YR3/1 黒褐色	シルト	ややなし	あり	径 0.5 ~ 10cm の 10YR7/6 黄褐色シルト質粘土や多量 径 1 ~ 3mm の 5YR4/8 黄褐色燒土微量
P15	1	10YR4/1 黒褐色	シルト質粘土	なし	あり	径 0.5 ~ 10cm の 10YR7/6 明黃褐色や多量 径 1 ~ 5cm の 10YR2/1 黒色シルト少量
	2	10YR7/6 明黃褐色	シルト質粘土	あり	あり	径 1 ~ 5cm の 10YR3/1 黑褐色シルト質粘土少量 径 1 ~ 5cm の 10YR7/1 黑褐色シルト質粘土少量
P18	1	10YR3/1 黒褐色	粘土質シルト	なし	あり	径 0.5 ~ 10cm の 10YR6/6 明黃褐色粘土質シルト多量 径 0.5 ~ 1cm の 10YR5/1 黑褐色シルト質粘土や多量 径 1 ~ 3mm の 10YR7/1 黑褐色燒土微量
	2	10YR3/1 黑褐色	粘土質シルト	ややあり	あり	径 0.5 ~ 10cm の 10YR6/6 明黃褐色粘土質シルト多量 径 0.5 ~ 1cm の 10YR5/1 黑褐色シルト質粘土や多量 径 1 ~ 3mm の 10YR7/1 黑褐色燒土微量
P19	1	10YR3/1 黑褐色	粘土質シルト	ややなし	あり	径 1 ~ 5cm の 10YR7/8 黄褐色粘土質粘土少量 径 5cm の 壊少量 径 1 ~ 3mm の 10YR7/1 黑褐色燒土微量

第9表 SB2 建物跡層面観察表

(3) 溝跡

1) SD2 溝跡（第169図、図版59-3～6）

2区のN14・15-W31 グリッドに位置する。南西から北東へ直線的に延びる溝跡である。南端を擾乱により削平される。SD1・3・5・17と重複し、SD3・17より新しく、SD1・5より古い。残存する規模は、長さ11.39m、上端幅65～126cm、下端幅11～70cm、深さ11～32cmを測り、主軸方位はN-64°Eを示す。断面形は逆台形状もしくは、皿状を呈する。底面はやや起伏があり、南西から北東へ低くなる。堆積土は4層からなり、1層は砂質シルトで、2層はシルト、3層はシルト質粘土、4層は粘土質シルトである。遺物は、19世紀前葉～中葉の大堀相馬産の碗、18世紀の肥前産磁器の蓋、在地産の軟質施釉陶器の熔塊、瓦が出土しているが、いずれも細片のため図示し得なかった。

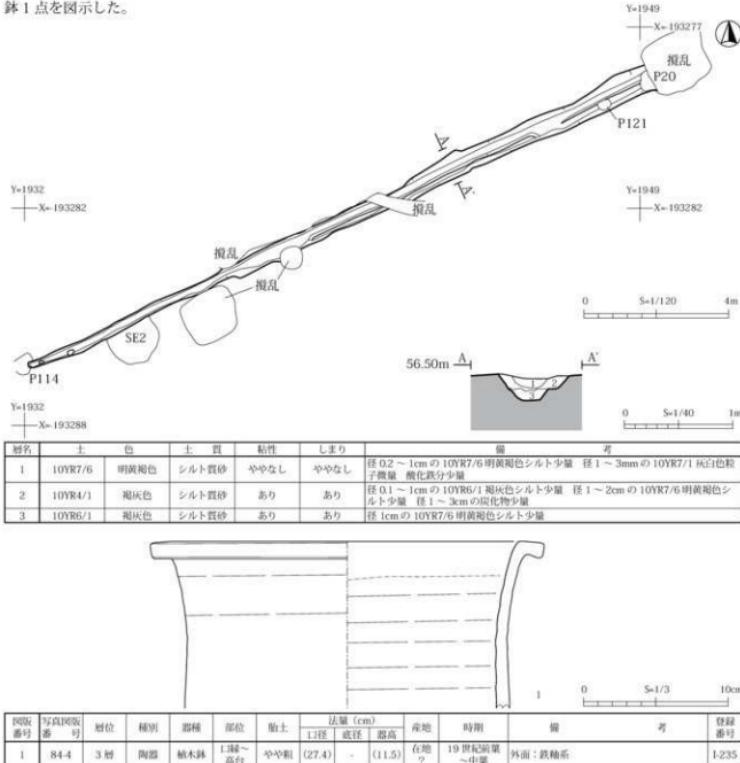


第169図 SD2 溝跡平面図・断面図

第2節 扇坂トンネル部

2) SD4溝跡（第170図、図版59-7・60-1）

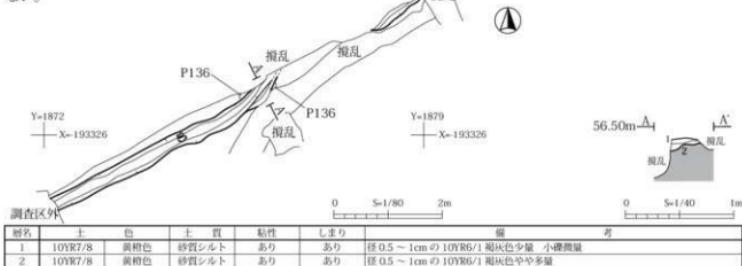
1区のN12・13-W36・37グリッドに位置する。南西から北東へ直線的に延びる溝跡である。北東端は擾乱により削平され、南西端はP114と重複する。P20・114・121と重複し、SE2、P20・114・121より新しく、SE2より古い。残存する規模は、長さ18.92m、上端幅18～80cm、下端幅9～41cm、深さ9～31cmを測り、主軸方位はN-65°Eを示す。断面形は南西側では逆台形を呈し、北東側では南壁に段を有する。底面はやや起伏し、南西から北東へ傾斜している。堆積土は3層からなり、いずれもシルト質砂である。遺物は、1層から17世紀代の志野の皿、18世紀末～19世紀初頭の大堀相馬産の碗や皿、18世紀～19世紀前半の肥前産磁器、2層からは、18世紀中葉～後葉の大堀相馬産の碗、19世紀前葉～中葉の大堀相馬産の碗、19世紀前葉～中葉の在地産と考えられる陶器の植木鉢、18世紀中葉～後葉の肥前産磁器の碗が出土している。そのうち、在地産と考えられる植木鉢1点を図示した。



第170図 SD4溝跡平面図・断面図・出土遺物

3) SD10溝跡（第171図、図版60-2）

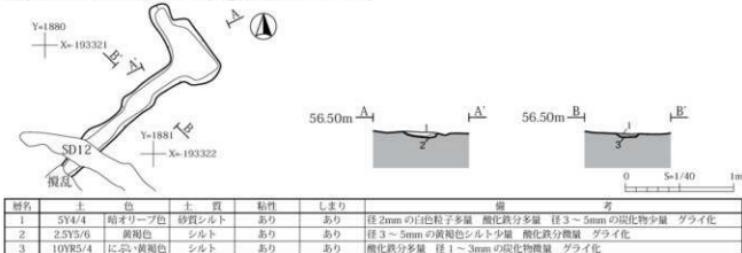
1区のN8-W43 グリッドに位置する。南西から北東へ直線的に延びる溝である。東側を擾乱により削平される。南西端は、調査区外へ延びる。P136と重複し、P136より新しい。残存する規模は、558cm、上端幅25～36cm、下端幅8～18cm、深さ3～12cmを測り、主軸方位はN-60°-Eを示す。断面形は不明である。底面はやや起伏があり、北東から南西へやや傾斜している。堆積土は2層からなり、いずれも砂質シルトである。遺物は出土していない。



第171図 SD10溝跡平面図・断面図

4) SD13溝跡（第172図、図版60-3～5）

1区のN8-W42 グリッドに位置する。南西から北東へ延び途中屈折する溝跡である。南西端を擾乱により削平される。SD12と重複し、SD12より古い。残存する規模は、総長245cm、上端幅15～36cm、下端幅8～35cm、深さ4～6cmを測り、主軸方位は南西から北東方向がN-47°-E、南東から北西方向がN-36°-Wを示す。断面形は逆台形を呈する。底面は平坦である。堆積土は3層からなり、1層は砂質シルト、2・3層はシルトで、いずれも酸化鉄分がみられグライ化している。遺物は出土していない。

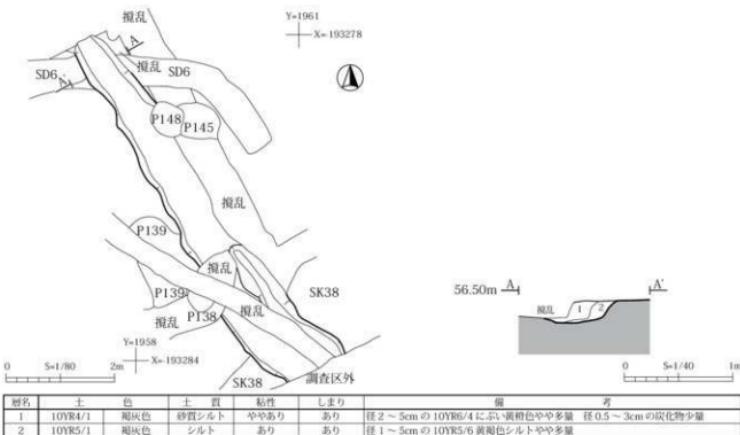


第172図 SD13溝跡平面図・断面図

5) SD15溝跡（第173図、図版60-6・61-1）

1区のN12-W34・35 グリッドに位置する。南東から北西へ直線的に延びる溝跡である。北端を擾乱により削平され、南端は調査区外へ延びる。SD6、SK38、P139・148と重複し、SD6、SK38、P139より新しく、P148より古い。残存する規模は、741cm、上端幅61～120cm、下端幅28～107cm、深さ26～39cmを測り、主軸方位はN-35°-Wを示す。断面形は逆台形を呈す。底面は、北西から南東へやや深くなる。堆積土は2層からなり、1層は砂質シルトで、2層はシルトである。遺物は出土していない。

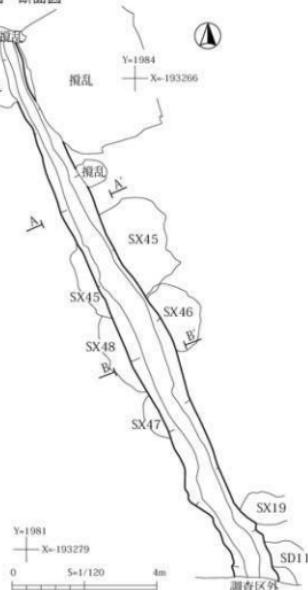
第2節 扇坂トンネル部



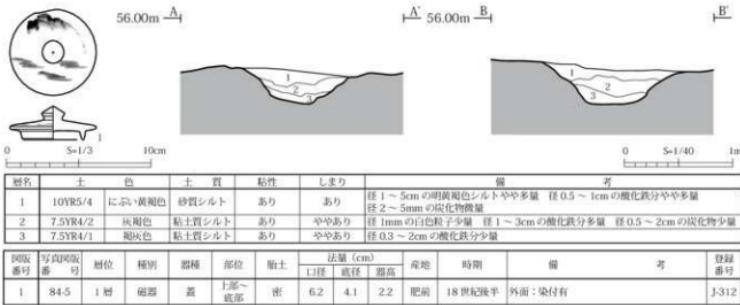
第173図 SD15溝跡平面図・断面図

6) SD18溝跡 (第174・175図、図版61-2～5)

1区のN13・14-W32グリッドに位置する。南東から北西へ直線的に延びる溝跡である。北端は擾乱により削平され、南端は調査区外へと延びる。SD11、SX19・45～48と重複し、いずれの遺構よりも新しい。残存する規模は、長さ16.50m、上端幅45～131cm、下端幅19～66cm、深さ9～39cmを測り、主軸方位はN 25°Wを示す。断面形は逆台形を呈する。底面は概ね平坦である。堆積土は3層からなり、1層は砂質シルト、2・3層は粘土質シルトである。遺物は、総出土点数55点を数え、内訳は陶器27点、磁器17点、瓦質土器6点、金属製品1点、木製品1点、瓦13点である。遺物は主に1層から出土しており、18世紀末～19世紀初頭の大堀相馬産の土瓶、18世紀後半の肥前産磁器の蓋、19世紀前葉～中葉の瀬戸・美濃産磁器の碗、在地産の瓦質土器が出土している。そのうち、18世紀後半の肥前産磁器の蓋1点を図示した。



第174図 SD18溝跡平面図

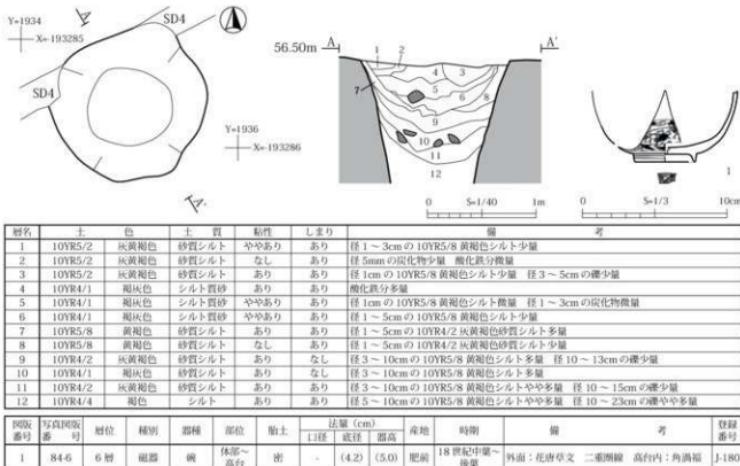


第175図 SD18溝跡断面図・出土遺物

(4) 井戸跡

1) SE2 井戸跡 (第176図、図版61-6~62-2)

1区のN12-W37 グリッドに位置する。調査時に、確認面より約110cmまで掘り下げたところで、崩落の危険が有ったためこれ以上の掘り下げを中止した。素掘りの井戸跡と考えられる。SD4と重複し、SD4より古い。残存する規模は、上端径 67 ~ 150cm、深さ 114cm を測る。平面形は円形で、断面形は筒形を呈する。堆積土は12層からなり、1 ~ 3・7 ~ 11 層は砂質シルト、4 ~ 6 層はシルト質砂、12 層はシルトである。12 層の下部では径 10 ~ 23cm の礫が多量に確認された。遺物は、17世紀の志野の皿、18世紀中葉～後葉の大瀬相馬産の碗、18世紀の肥前産陶器の碗・皿、18世紀中葉～後葉の肥前産磁器の碗、瓦等が出土している。そのうち、18世紀中葉～後葉の肥前産磁器の碗 1点を図示した。

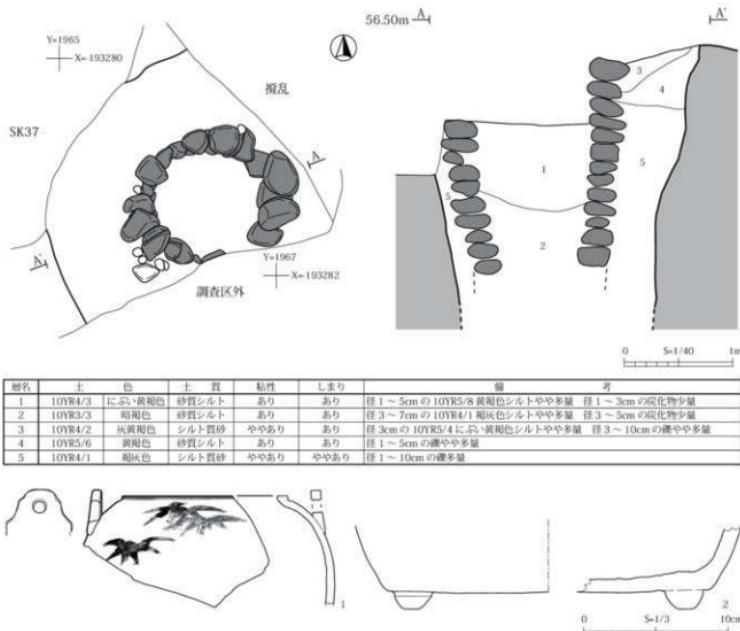


第176図 SE2 井戸跡平面図・断面図・出土遺物

第2節 扇坂トンネル部

2) SE6 井戸跡 (第177図、図版62-3～5)

1区のN12-W34 グリッドに位置する。石組の井戸跡である。調査時に、確認面より約120cmまで人力で掘り下げたが崩落の危険があったため調査終了後、重機を使用して断ち割りを行ない、確認面から約240cmまで掘り下げたが底面は検出されなかった。東側を搅乱に削平され、南側は調査区外へ延びる。SK37と重複し、SK37より古い。残存する規模は、石組の内径90～103cmを測る。石組には、長さ21～44cm、幅15～32cm、厚さ9～20cmの礫が使用されている。掘り方の規模は、上端径190～244cm、下端幅179cm、深さ241cmを測る。堆積土は5層からなり、1・2・4層は砂質シルトで、3・5層はシルト質砂である。1・2層は廃棄後の埋土で、3～5層は掘り方である。遺物は、1層から17世紀の肥前産陶器の碗・皿、18世紀の瀬戸・美濃産陶器の碗、18世紀中葉～後葉の小野相馬産の碗、19世紀前半の大堀相馬産の土瓶、2層から18世紀後半～19世紀前半の大堀相馬産の土瓶、3層から瓦質土器や瓦、4層から焼塙瓦や瓦が出土している。そのうち、18世紀後半～19世紀前半の大堀相馬産の土瓶1点、瓦質土器1点を図示した。



第177図 SE6 井戸跡平面図・断面図・出土遺物

(5) 土坑

1) SK3 土坑 (第178図、図版62-6・7)

1区のN13-W36 グリッドに位置する。西侧上端を搅乱により削平される。残存する規模は、長軸99cm、短軸78cm、深さ19cmを測り、主軸方位はN-13°・Eを示す。平面形は不整な梢円形、断面形は逆台形を呈する。底面は平坦である。堆積土は3層からなり、1・3層は砂質シルト、2層はシルトで 56.50m A4 ある。遺物は出土していない。



第178図 SK3 土坑平面図・断面図

2) SK4 土坑 (第179 ~ 181図、図版63-1 ~ 4)

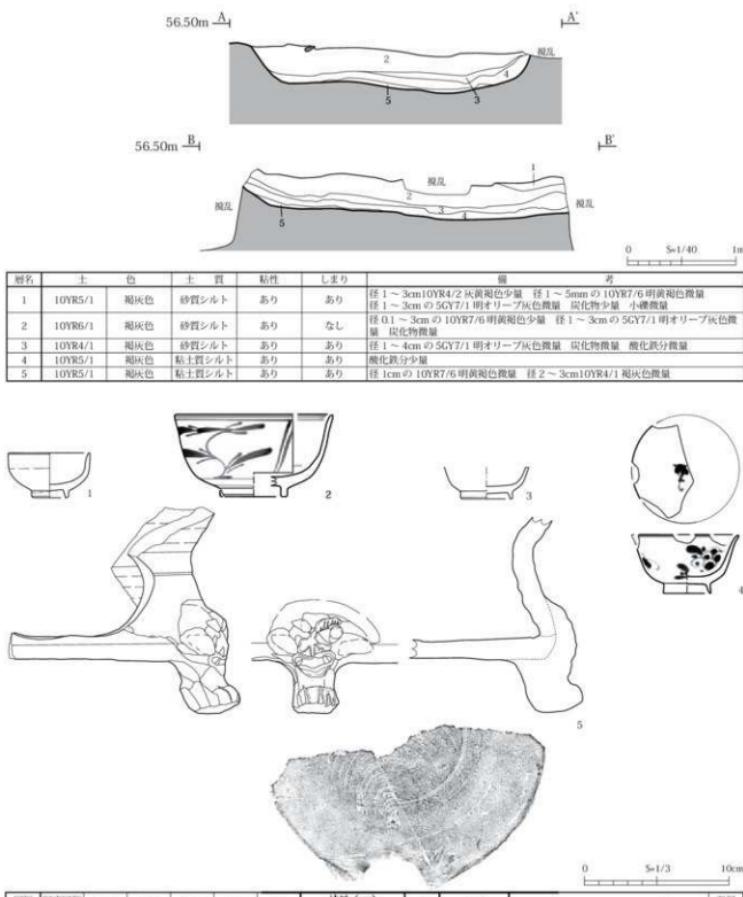
1区のN13-W34・35 グリッドに位置する。北東側と南西側を搅乱に削平される。SK25・39と重複し、いずれより新しい。残存する規模は、長軸304cm、短軸298cm、深さ46cmを測り、主軸方位はN-63°Eを示す。平面形は不整な梢円形を呈すると考えられ、断面形は逆台形を呈する。堆積土は5層からなり、1~3層は砂質シルトで、4・5層は粘土質シルトである。遺物は出土総点数274点を数え、その内訳は陶器137点、磁器78点、軟質施釉陶器6点、瓦質土器3点、土師質土器13点、土製品5点、金属製品1点、石製品2点、木製品9点、瓦20点である。層位毎では3層から19世紀前葉～中葉の大堀相馬産の土瓶、18世紀の肥前産磁器の碗、4層から18世紀の肥前産陶器の碗、18世紀中葉～後葉の京焼の碗、19世紀前葉～中葉の大堀相馬産の土瓶、18世紀中葉～後葉の肥前産磁器の碗、19世紀前葉～中葉の瀬戸・美濃産磁器の碗、19世紀前葉～中葉の切込産磁器の碗、5層から19世紀前葉～中葉の瀬戸・美濃産磁器の碗、18世紀代の肥前産磁器の小杯1点、19世紀前葉～中葉の瀬戸・美濃産磁器の碗2点、在地産の瓦質土器の紋造り1点、土人形2点を

図示した。



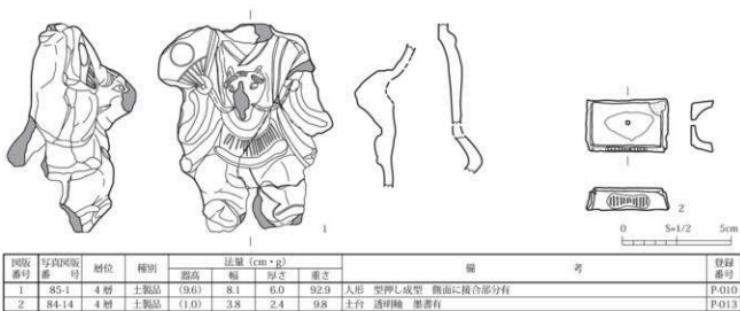
第179図 SK4 土坑平面図

第2節 扇坂トンネル部



第180図 SK4 土坑断面図・出土遺物 (1)

回取 番号	写真出版 番号	層位	種別	器種	部位	胎土	法長(cm) 口径(底径)	高さ	产地	時期	備 考	登録 番号
1	84-13	4層	陶器	小杯	L壁~高台	やや密	5.6	2.2	3.1	大坂 田原	19世紀前半 美濃 白瀬釉 灰釉	I-145
2	84-11	4層	磁器	碗	L壁~高台	密	(10.4)	(4.0)	5.8	高岡 中量	19世紀後葉~ 内面:染付有 磁盤 内面:二重磁盤 見込 み? 磁盤	J-110
3	84-9	3層	磁器	小杯	休憩~ 高台	密	-	(3.3)	(2.2)	肥前	白磁	J-155
4	84-10	4層	磁器	碗	L壁~ 高台	密	7.5	3.4	4.2	高岡 中量	19世紀後葉~ 外面:草花文 足付:染付有	J-154
5	84-12	2層	瓦質土器	紋通り	休憩~ 脚部	粗	-	-	(13.3)	有地	近世 外面:ヘラケズリ 底部:回転条直底有 ナ ガロクロ:左	I-153



第181図 SK4 土坑出土遺物（2）

3) SK7 土坑（第182図、図版63-5・6）

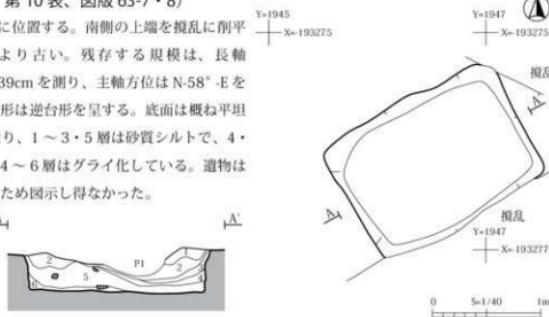
2区のN14-W34 グリッドに位置する。西側は調査区外へ延びる。SD19と重複し、SD19より古い。残存する規模は、長軸 93cm、短軸 39cm、深さ 42cm を測り、主軸方位は不明である。平面形は不明で、断面形は半円形を呈する。底面は中央部分が窪む。堆積土は3層からなり、いずれもシルト質粘土である。遺物は出土していない。



第182図 SK7 土坑平面図・断面図

4) SK8 土坑（第183図、第10表、図版63-7・8）

1区のN13-W36 グリッドに位置する。南側の上端を擾乱に削平される。P1と重複し、P1より古い。残存する規模は、長軸 173cm、短軸 129cm、深さ 39cm を測り、主軸方位はN-58°-Eを示す。平面形は長方形、断面形は逆台形を呈する。底面は概ね平坦である。堆積土は6層からなり、1~3・5層は砂質シルトで、4・6層は粘土質シルトである。4~6層はグライ化している。遺物は瓦が出土しているが、細片のため図示し得なかった。



第183図 SK8 土坑平面図・断面図

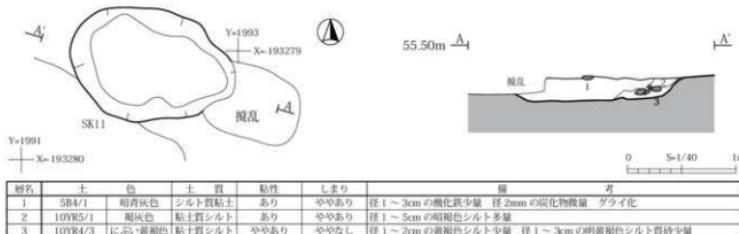
第2節 扇坂トンネル部

層名	土色	土質	粘性	しまり	層	考
1	10YR3/2	黒褐色	砂質シルト	なし	あり	径1~10cmの10YR7/6明黄褐色シルト質粘土やや多量 径0.5~1cmの10YR5/1褐色 色シルト少量
2	10TR3/3	褐褐色	砂質シルト	なし	あり	径0.5~1cmの10YR5/1褐色やや多量 径0.5~1cmの10YR7/6明黄褐色やや多量 褐色部分少量
3	10YR6/8	明黄褐色	砂質シルト	あり	ややあり	径0.5~1cmの10YR5/1褐色少量 径1~3mmの炭化物微量
4	10YR6/1	褐色	粘土質シルト	あり	あり	炭化物多量 グラナイト化
5	10YR4/1	褐色	砂質シルト	あり	あり	径0.5~1cmの10YR6/1褐色少量 径1~5cmの礫やや多量 炭化物少量 グラナイト化
6	10YR5/8	黄褐色	粘土質シルト	あり	なし	径0.5~1cmの10YR5/1褐色少量 径0.3~1cmの10YR6/8明黄褐色少量 グラナイト化

第10表 SK8 土坑土層観察表

5) SK9 土坑 (第184図、図版64-1・2)

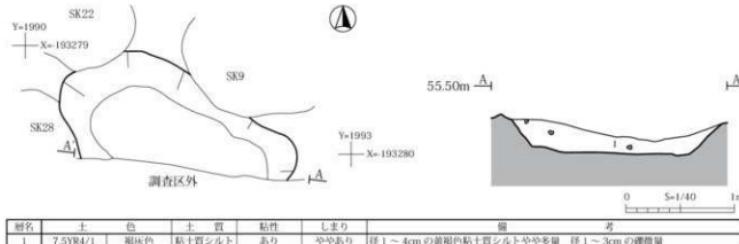
2区のN13-W31グリッドに位置する。東側の上端を擾乱に削平される。SK11と重複し、SK11より新しい。残存する規模は、長軸156cm、短軸107cm、深さ23cmを測り、主軸方位はN-74°-Wを示す。平面形は不整な梢円形、断面形は逆台形を呈する。底面は概ね平坦である。堆積土は3層からなり、1層はシルト質粘土、2・3層は粘土質シルトである。遺物は、18世紀中葉～後葉の大堀相馬家の碗、18世紀中葉～後葉の肥前産磁器の皿、19世紀前葉～中葉の瀬戸・美濃産磁器の皿が出土しているが、いずれも細片のため図示し得なかった。



第184図 SK9 土坑平面図・断面図

6) SK11 土坑 (第185図、図版64-3・4)

2区のN13-W31・32グリッドに位置する。南側は調査区外に延びる。SK9・22・28と重複し、SK28より新しく、SK9・22より古い。残存する規模は、長軸228cm、短軸102cm、深さ33cmを測り、主軸方位はN-68°-Wを示す。平面形は不整な梢円を呈すると考えられ、断面形は逆台形を呈する。底面はやや起伏が見られる。堆積土は粘土質シルトの単層である。遺物は、18世紀中葉～後葉の大堀相馬家の碗、18世紀中葉～後葉の小野相馬の皿、18世紀の肥前産磁器の碗・皿、瓦が出土しているが、いずれも細片のため図示し得なかった。



第185図 SK11 土坑平面図・断面図

7) SK13 土坑 (第186図、図版64-5)

1区のN13-W36グリッドに位置する。東側上端と西側を擾乱に削平され、SX3・P2と重複し、いずれより古い。残存する規模は、長軸229cm、短軸71cm、深さ17cmを測り、主軸方位はN-77°・Eを示す。平面形は開丸長方形で、断面形は皿形を呈する。底面は概ね平坦である。堆積土は砂質シルトの単層である。遺物は出土していない。



第186図 SK13 土坑平面図・断面図

8) SK17 土坑 (第187図、図版64-6・7)

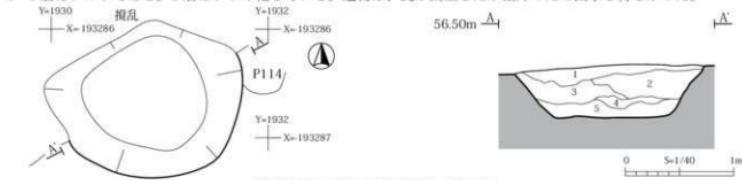
1区のN12-W38グリッドに位置する。北側の一部、東側、南側の上端を擾乱に削平される。残存する規模は、長軸247cm、短軸114m、深さ29cmを測り、主軸方位はN-42°・Eを示す。平面形は不整形を呈し、断面形は逆台形を呈すると考えられる。底面は概ね平坦である。堆積土は砂質シルトの単層である。遺物は瓦が出土したが細片のため図示し得なかった。



第187図 SK17 土坑平面図・断面図

9) SK18 土坑 (第188図、第11表、図版64-8・65-1)

1区のN12-W37グリッドに位置する。北側を擾乱に削平される。P114と重複し、P114より新しい。残存する規模は、長軸174cm、短軸143cm、深さ48cmを測り、主軸方位はN-61°・Eを示す。平面形は不整な梢円形、断面形は逆台形を呈する。底面は概ね平坦である。堆積土は5層からなり、1層はシルト質砂、2・3層は砂質シルト、4・5層はシルトである。5層はグライ化している。遺物は、瓦が出土したが細片のため図示し得なかった。



第188図 SK18 土坑平面図・断面図

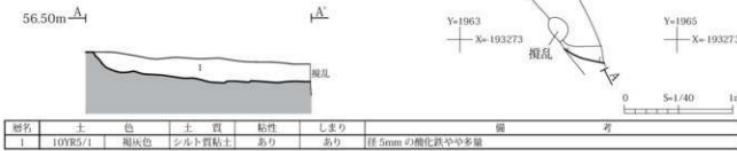
第2節 扇坂トンネル部

層名	土色	土質	粘性	しまり	備考
1	10YR4/2	灰黄褐色	シルト質砂	ややあり	あり 径3~5cmの10YR6/3に占比褐色シルト少量 径5~10cmの褐色多量 径3~10cmの10YR6/3に占比褐色少量
2	10YR4/1	褐色	砂質シルト	ややあり	あり 径3~5cmの褐色少量 径3~5cmの褐色シルトや多量 径3~10cmの褐色少量
3	10YR5/1	褐色	砂質シルト	ややあり	あり 径3~5cmの褐色少量 径3~5cmの褐色シルトや多量 径3~10cmの褐色少量
4	10YR4/1	褐色	シルト	あり	ややあり 硫酸鉄分少量
5	10YR4/1	褐色	シルト	あり	あり 2.5Y6/4灰黄色シルトや多量 硫酸鉄分少量 グライ化

第11表 SK18 土坑土層観察表

10) SK21 土坑 (第189図、図版65-2・3)

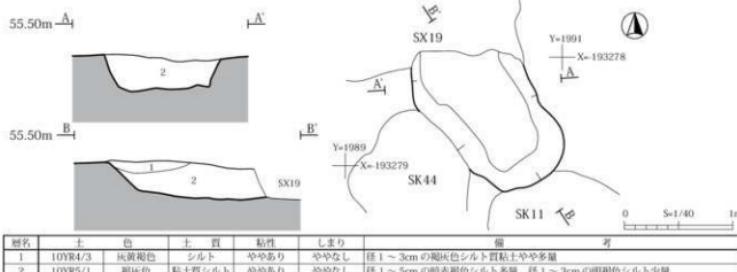
1区のN13-W34グリッドに位置する。北側は擾乱により削平され、西側は調査区外へ延びる。SD19と重複し、SD19より古い。残存する規模は、長軸203cm、短軸51cm、深さ29cmを測り、主軸方位は不明である。平面形・断面形ともに不明である。底面はやや起伏が見られる。堆積土はシルト質粘土の単層である。遺物は、17世紀後半の唐津の碗、19世紀前葉～中葉の大堀相馬産の碗、18世紀前葉～中葉の肥前産磁器の皿が出土しているが、いずれも細片のため図示し得なかった。



第189図 SK21 土坑平面図・断面図

11) SK22 土坑 (第190図、図版65-4)

2区のN13-W31・32グリッドに位置する。SK11・44、SX19と重複し、SK11より新しく、SK44、SX19より古い。残存する規模は、長軸161cm、短軸99cm、深さ36cmを測り、主軸方位はN-34°Wを示す。平面形は不整な梢円形で、断面形は短軸が逆台形を呈し、長軸が皿形を呈すると考えられる。底面はやや起伏が見られる。堆積土は2層からなり、1層はシルト、2層は粘土質シルトである。遺物は、18世紀中葉～後葉の大堀相馬産の碗、18世紀中葉～後葉の肥前産磁器の皿が出土しているが、いずれも細片のため図示し得なかった。



第190図 SK22 土坑平面図・断面図

12) SK23 土坑 (第191図、図版65-5・6)

1区のN10-W40 グリッドに位置する。南北の上端と西側及び東側の一部を擾乱に削平される。残存する規模は、長軸 164cm、短軸 151cm、深さ 17cm を測り、主軸方位は N-64°-E を示す。平面形は梢円形、断面形は皿形を呈すると考えられる。底面は中央に向けてやや陥る。堆積土は 4 層か

なり、1～3 層は砂質シルト 56.50m Δ_4

で、4 層はシルトである。遺物

は、瓦が出土したが細片のため

図示し得なかった。

剖面番号	土色	土質	粘性	しまり	備考
1	10YR4/3' にぶく黄褐色	砂質シルト	なし	ややあり	2.5Y3/1 黄褐色沙質シルト少量 硫化鉄分少量
2	10YR4/2' 灰黄褐色	砂質シルト	なし	あり	10YR5/4 にぶく黄褐色沙質シルト少量 硫化鉄分多量
3	10YR3/1' 黒褐色	砂質シルト	なし	あり	10YR5/4 にぶく黄褐色沙質シルト少量 硫化鉄分少量
4	10YR5/6 黄褐色	シルト	ややあり	あり	10YR4/2 灰黄褐色沙質シルト少量 10YR4/1 黑褐色沙質シルト少量 硫化鉄分少量

第191図 SK23 土坑平面図・断面図

13) SK24 土坑 (第192図、図版65-7・8)

2区のN13-W34 グリッドに位置する。北東側を擾乱に削平される。残存する規模は、長軸 112cm、短軸 96cm、深さ 28cm を測り、主軸方位は N-38°-W を示す。平面形は不整な円形で、断面形は逆台形を呈する。底面は平坦である。堆積土は 4 層からなり、1 層はシルト質砂、2・4 層は砂質シルト、3 層はシルトである。1・2・4 層で炭化物が見られ、特に 4 层では顕著である。遺物は、18世紀中葉～後葉の京焼の碗、19世紀前葉～中葉の大堀相馬産の碗・油皿、18世紀中葉～後葉の肥前産磁器の碗、土製品、瓦が出土している。そのうち 19世紀前葉～中葉の大堀相馬産の油受け皿 1 点を図示した。

剖面番号	土色	土質	粘性	しまり	備考
1	10YR4/3' にぶく黄褐色	シルト質砂	ややあり	あり	径 0.5～1cm の 10YR5/6 黄褐色シルト粒子少量 径 3～5mm の炭化物微量
2	10YR4/2' 灰黄褐色	砂質シルト	あり	あり	径 1～3cm の 10YR5/6 黄褐色シルトや多量 径 1～3cm の炭化物少量
3	10YR5/3' にぶく黄褐色	シルト	あり	ややあり	
4	10YR3/3' 黄褐色	砂質シルト	あり	ややあり	径 1～3cm の炭化物多量

剖面番号	番号	層位	種別	器種	部位	堆土	法量 (cm)	備考	登録番号
1	85-2	4 層	陶器	油皿	口縁～底部	やや厚	9.2 4.0 4.2 大堀相馬 19世紀前葉～中葉		I-173

第192図 SK24 土坑平面図・断面図・出土遺物

14) SK27 土坑 (第193図、図版66-1・2)

2区のN11-W39 グリッドに位置する。遺構の大半を擾乱により削平される。残存する規模は、長軸

112cm、短軸 57cm、深さ 5cm を測り、主軸方位

は不明である。平面形は不明で、断面形は逆台形を

呈する。底面は平坦である。堆積土は砂質シルトの

單層である。遺物は出土していない。

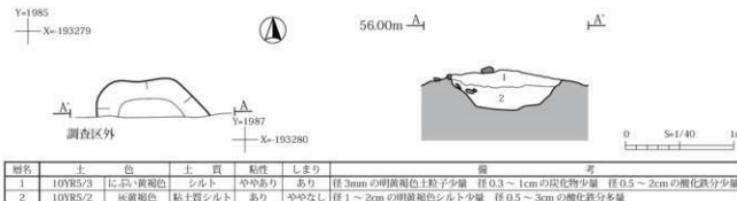
剖面番号	土色	土質	粘性	しまり	備考
1	2.5Y4/3 オリーブ褐色	砂質シルト	なし	あり	径 2～3mm 白色粒子少量 5Y3/1 オリーブ褐色砂質シルト微量 硫化鉄分微量

第193図 SK27 土坑平面図・断面図

第2節 扇坂トンネル部

15) SK29 土坑 (第 194 図、図版 66-3)

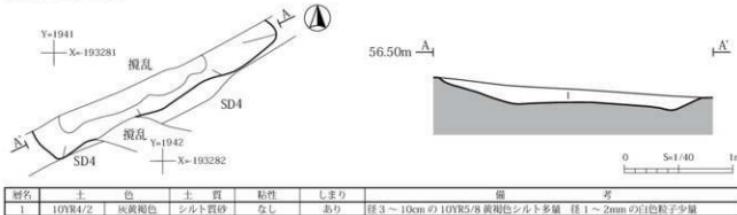
2 区の N13-W32 グリッドに位置する。南側は調査区外へ延びる。残存する規模は、長軸 104cm、短軸 36cm、深さ 32cm を測り、主軸方位は不明である。平面形は不明で、断面形は逆台形を呈する。底面はやや起伏が見られる。堆積土は 2 層からなり、1 層はシルト、2 層は粘土質シルトである。遺物は出土していない。



第 194 図 SK29 土坑平面図・断面図

16) SK30 土坑 (第 195 図、図版 66-4)

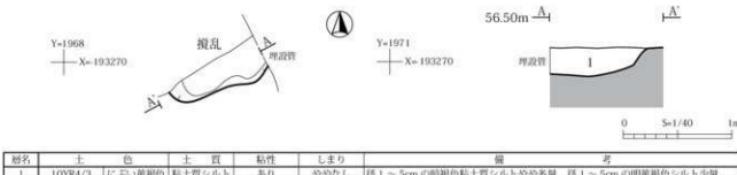
1 区の N12-W36 グリッドに位置する。北側の大部分と南側の一部を擾乱に削平される。南東側には SD4 が近接する。残存する規模は、長軸 239cm、短軸 35cm、深さ 31cm を測り、主軸方位は N-64°-E を示す。平面形は長方形を呈すると考えられ、断面形は逆台形を呈する。底面は平坦である。堆積土はシルト質砂の単層である。遺物は出土していない。



第 195 図 SK30 土坑平面図・断面図

17) SK31 土坑 (第 196 図、図版 66-5・6)

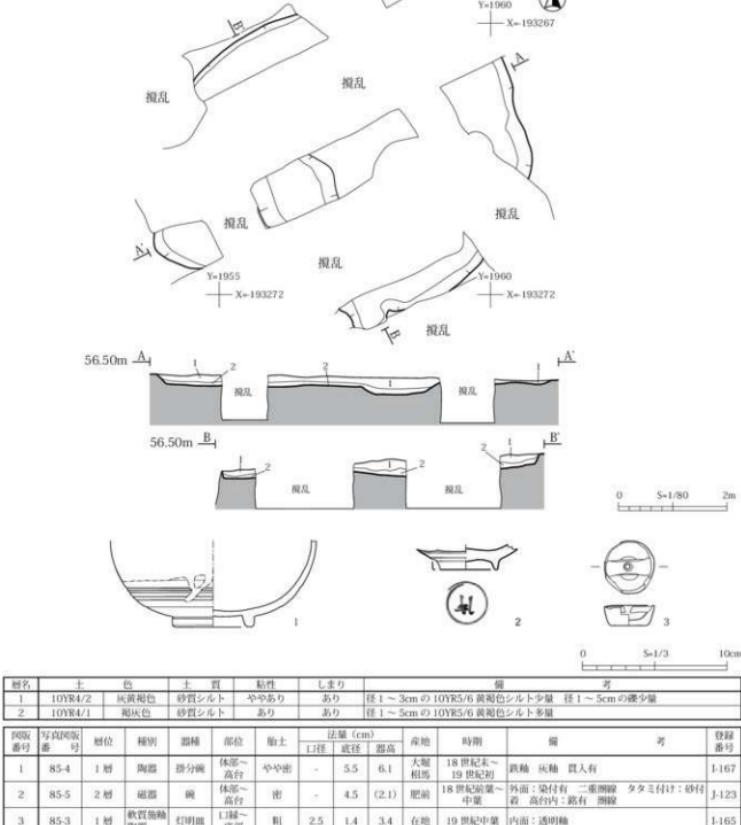
1 区の N13・14-W34 グリッドに位置する。北側・東側を擾乱により削平される。残存する規模は、長軸 92cm、短軸 37cm、深さ 27cm を測り、主軸方位は不明である。平面形・断面形はともに不明である。底面は平坦である。堆積土は粘土質シルトの単層である。遺物は出土していない。



第 196 図 SK31 土坑平面図・断面図

18) SK32 土坑 (第197図、図版66-7・8)

1区のN13・14-W35 グリッドに位置する。大半を擾乱により削平される。残存する規模は、長軸 726cm、短軸 597cm、深さ 41cm を測り、主軸方位は N-63°-E を示す。平面形は不整な円形、断面形は逆台形状を呈すると考えられる。底面は南西側に窪みが見られる。堆積土は2層からなり、いずれも砂質シルトである。遺物は、18世紀中葉～後葉の大堀相馬産の碗、19世紀前葉～中葉の大堀相馬産の皿、18世紀中葉～後葉の肥前産磁器の皿、在地産の土師質土器、瓦が出土している。18世紀末葉～19世紀初頭の大堀相馬産の碗1点、18世紀前葉～中葉の肥前産磁器の碗1点、在地産の軟質施釉陶器1点を図示した。

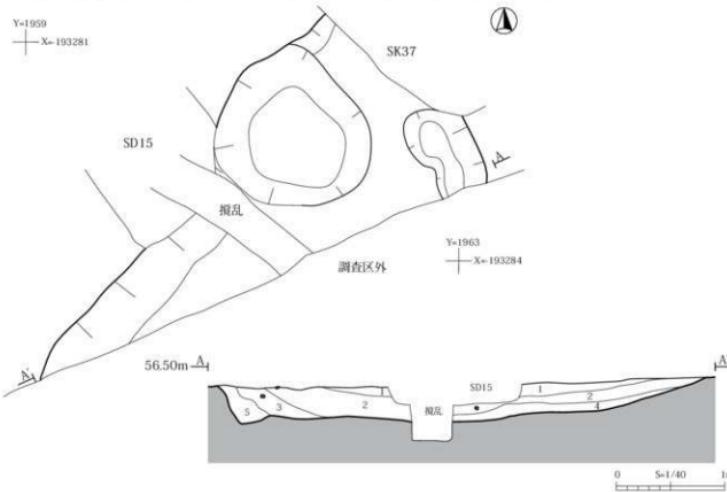


第197図 SK32 土坑平面図・断面図・出土遺物

第2節 扇坂トンネル部

19) SK38 土坑 (第198図、図版67-1・2)

1区のN12-W34・35グリッドに位置する。南側は調査区外へ延びる。SD15、SK37と重複し、いずれより古い。残存する規模は、長軸458cm、短軸197cm、深さ43cmを測り、主軸方位は不明である。平面形は不明で、断面形は、西壁は下端から緩やかに立ち上がるのにに対して、東壁はやや立ち上がりがきつく上端付近で外反する。北東側の底面に大きな窪みがある。堆積土は5層からなり、1～3層は砂質シルト、4・5層はシルトである。遺物は出土総点数70点を数え、その内訳は陶器21点、磁器15点、軟質施釉陶器1点、土師質土器7点、瓦質土器1点、土製品3点、瓦22点である。1層からは18世紀末～19世紀初頭の大堀相馬産の蓋物、2層から18世紀中葉～後葉の大堀相馬産の碗、4層から17世紀の肥前産陶器の皿、18世紀中葉～後葉の大堀相馬産の碗、18世紀前葉～中葉の肥前産磁器の碗等が出土しているが、いずれも細片のため図示し得なかった。

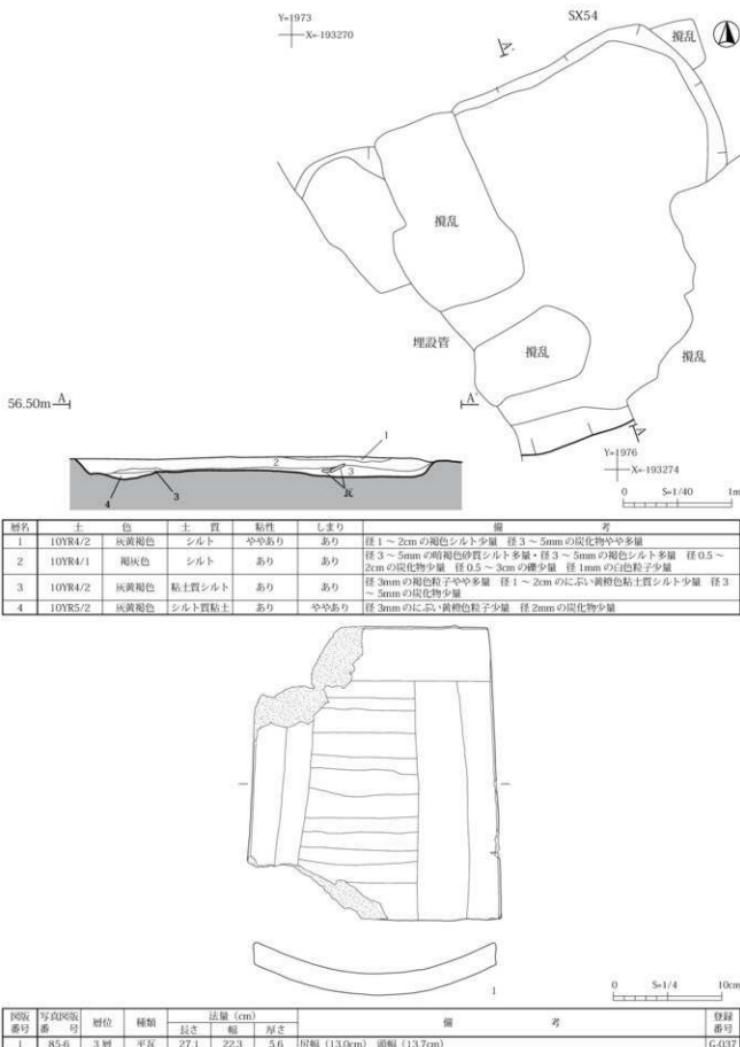


層名	土色	土質	粘性	しまり	備考
1	10YR4/2	灰黄褐色	砂質シルト	あり	径1～3cmの10YR5/3にぶつかる褐色砂質シルト少量、径1～5cmの炭化物少量
2	10YR4/3	にぶつかる褐色	砂質シルト	あり	径1～5cmの炭化物や多量
3	10YR4/1	褐色	砂質シルト	あり	ややあり 径1～3cmの10YR5/6 黄褐色シルト少量、径15cmの炭化物微量
4	10YR5/1	褐色	シルト	あり	ややあり 径1～3cmの炭化物少量
5	10YR4/1	褐色	シルト	あり	あり 径1～5cmの10YR5/6 黄褐色シルト多量

第198図 SK38 土坑平面図・断面図

20) SK41 土坑 (第199図、図版67-3～5)

2区のN13・14-W33グリッドに位置する。南東側を擾乱により削平され、南西側は埋設管のため不明である。SX54と重複し、SX54より新しい。残存する規模は、長軸374cm、短軸330cm、深さ20cmを測り、主軸方位は不明である。平面形は不明で、断面形は逆台形を呈する。底面は平坦である。堆積土は4層からなり、1・2層はシルト、3層は粘土質シルト、4層はシルト質粘土である。遺物は、18世紀代の肥前産陶器の碗・皿、瓦が出土しており、そのうち瓦を1点図示した。

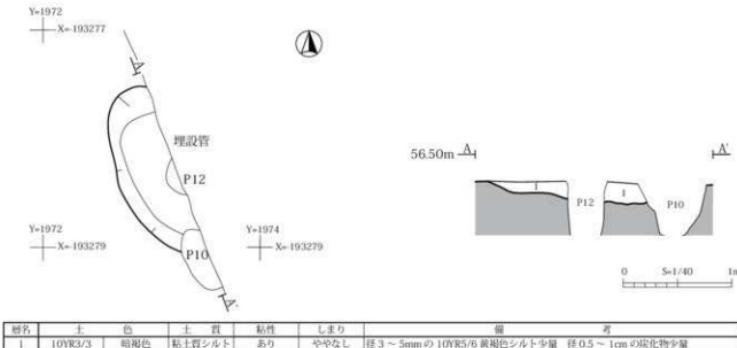


第199図 SK41 土坑平面図・断面図・出土遺物

第2節 扇坂トンネル部

21) SK42 土坑 (第200図、図版67-6)

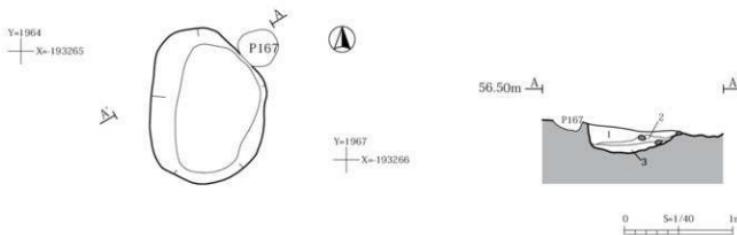
2区のN13-W33 グリッドに位置する。東側は埋設管のため不明である。P10・12と重複し、いずれより古い。残存する規模は、長軸 146cm、短軸 55cm、深さ 21cm を測り、主軸方位は N-23°-W を示す。平面形は楕円形で、断面形は逆台形を呈すると考えられる。底面はやや起伏が見られる。堆積土は粘土質シルトの単層である。遺物は出土していない。



第200図 SK42 土坑平面図・断面図

22) SK43 土坑 (第201図、図版67-7・8)

2区のN14-W34 グリッドに位置する。P167と重複し、P167より古い。残存する規模は、長軸 141cm、短軸 105cm、深さ 27cm を測り、主軸方位は N-12°-W を示す。平面形は不整な楕円形で、断面形は西壁が緩やかに立ち上がるのに対し、東壁は下端からほぼ垂直に立ち上がる。底面は平坦である。堆積土は3層からなり、1層はシルト、2・3層は粘土質シルトである。遺物は出土していない。

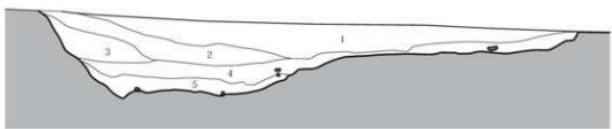
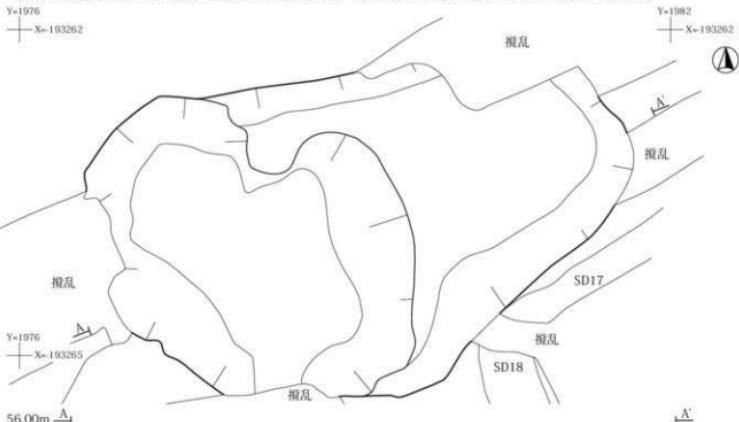


第201図 SK43 土坑平面図・断面図

(6) 性格不明遺構

1 SX1 性格不明遺構 (第202・203図、図版68-1～4)

2区のN14-W32・33グリッドに位置する。東側や西側、南側の一部を搅乱に削平される。SD18・17と重複し、SD18・17より新しい。残存する規模は、長軸489cm、短軸370cm、深さ35cmを測り、主軸方位はN55°-Eを示す。平面形は不正形で、断面形は逆台形状を呈すると考えられる。底面は、西側に長軸337cm、短軸278cmを測る窪みが見られる。堆積土は5層からなり、1・2層はシルト、3・4層が粘土質シルト、木質遺物を多量に含んでいる。5層がシルト質粘土である。遺物は出土総数209点を数える。その内訳は陶器33点、磁器25点、軟質施釉陶器3点、土師質土器11点、瓦質土器7点、土製品2点、鉄製品1点、木製品80点、瓦46点、石製品1点である。17世紀の肥前産陶器の碗、18世紀中葉～後葉の大堀相馬産の碗、18世紀の肥前産磁器の碗・皿・鉢、19世紀前葉～中葉の瀬戸・美濃産陶器の瓶掛、在地産の土師質土器が出土している。そのうち、17世紀後半の肥前産陶器の碗、18世紀中葉～後葉の大堀相馬産の碗、19世紀中葉の大堀相馬産の小杯を1点ずつ、19世紀中葉～後葉の切込産磁器の碗1点、在地産の焼塙壺1点、丸瓦1点、銭貨1点、土人形1点を図示した。



番号	土色	土質	粘性	しまり	備考
1	10YR4/3 に赤・黄褐色	シルト	ややあり	あり	径1～4cmの黄褐色シルト少量 径0.3～1cmの炭化物や多量
2	7.5YR5/2 灰黄褐色	シルト	ややあり	あり	径1～3cmの刷毛粘土質シルト多量 径2mmの黒色土粒子や多量 褶径1～15cm少量 熟化度少や多量 一部グライ化
3	7.5YR5/2 灰褐色	粘土質シルト	あり	ややあり	径0.5～5cmの黄褐色シルト多量 径3～10cmの礫や多量 径5mmの炭化物微量 一部グライ化
4	10YR3/3 暗褐色	粘土質シルト	ややあり	なし	木質遺物多量
5	10YR4.3/2 に赤・黄褐色	シルト質粘土	あり	ややなし	径1～5cm 青灰色シルト質粘土やや多量 径1～5cmの灰白色シルト質粘土少量 径0.5～1cmの炭化物少量 グライ化

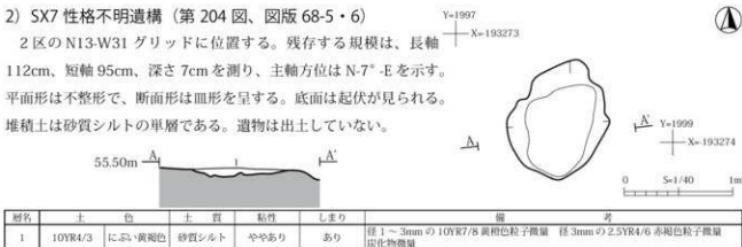
第202図 SX1性格不明遺構平面図・断面図

第2節 扇坂トンネル部



第203図 SX1 性格不明遺構出土遺物

2) SX7 性格不明遺構 (第 204 図、図版 68-5・6)

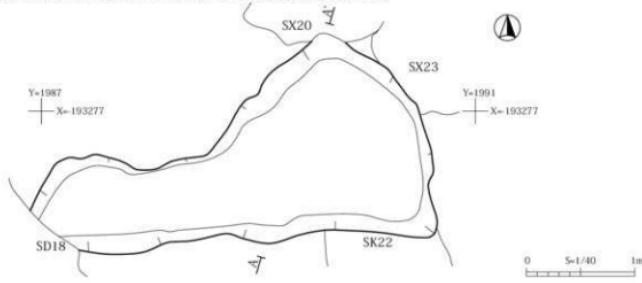


3) SX12 性格不明遺構 (第 205 図、図版 68-7)

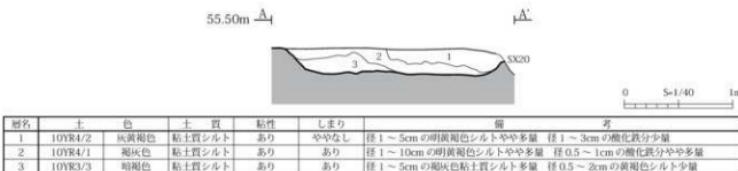


4) SX19 性格不明遺構 (第 206・207 図、図版 68-8・69-1)

2 区の N13-W31・32 グリッドに位置する。SD18, SK22, SX20・23 と重複し、SK22, SX23 より新しく、SD18, SX20 より古い。残存する規模は、長軸 372cm、短軸 185cm、深さ 27cm を測り、主軸方位は N-74°・E を示す。平面形は不整形で、断面形は逆台形を呈する。底面は平坦である。堆積土は 3 層からなり、いずれも粘土質シルトである。遺物は、18 世紀中葉～後葉の京焼の碗、18 世紀中葉～後葉の大堀相馬産の碗、在地産の土師質土器、瓦質土器が出土しているが、いずれも細片のため図示し得なかった。



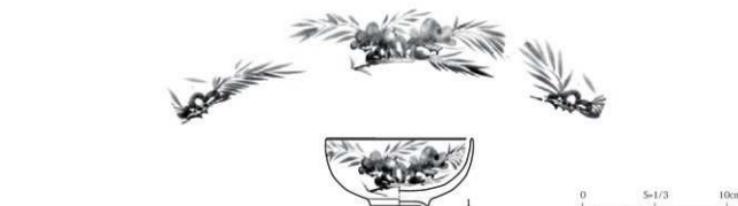
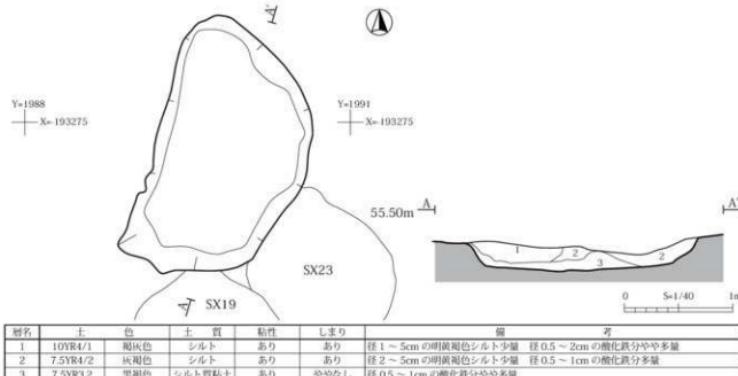
第2節 扇坂トンネル部



第207図 SX19 性格不明遺構断面図

5) SX20 性格不明遺構 (第208図、図版69-1・2)

2区のN13-W31・32グリッドに位置する。SX19・23と重複し、いずれより新しい。残存する規模は、長軸244cm、短軸143cm、深さ32cmを測り、主軸方位はN-21°-Eを示す。平面形は不整な長方形で、断面形は逆台形を呈する。底面は平坦である。堆積土は3層からなり、1・2層はシルト、3層はシルト質粘土である。遺物は、18世紀中葉～後葉の京焼の碗、18世紀中葉～後葉の大堀相馬産の碗、18世紀前葉～中葉の肥前産磁器の碗、在地産の土師質土器、瓦質土器が出土しており、そのうち、18世紀前葉～中葉の肥前産磁器の碗1点を図示した。

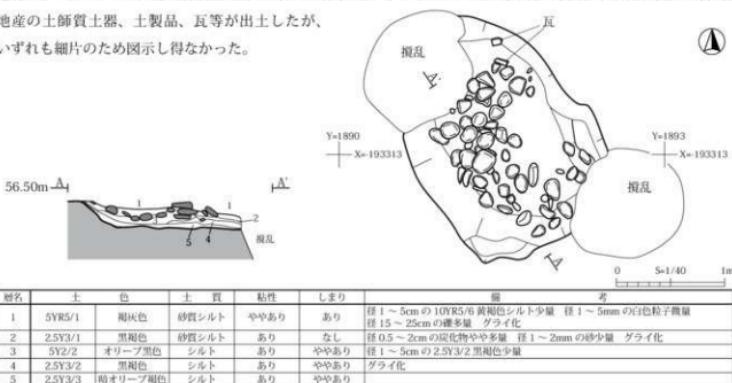


図版番号	写真回数	層位	種別	器種	部位	胎土	法線(cm)	直径	高さ	产地	時期	備考	登録番号
1	86-7	2層	磁器	碗	口縁～高台	密	10.0	3.9	4.7	肥前	18世紀前葉～中葉	外面：草花文	J-296

第208図 SX20 性格不明遺構平面図・断面図・出土遺物

6) SX22 性格不明遺構 (第209図、図版69-3・4)

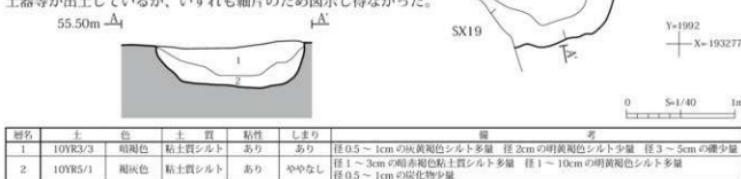
1区のN9-W41 グリッドに位置する。北西端と南東端を壊乱により削平される。残存する規模は、長軸 224cm、短軸 170m、深さ 27cm を測り、主軸方位は N-26° W を示す。平面形は不整な梢円形で、断面形は逆台形を呈すると考えられる。底面はやや起伏が見られる。堆積土は 5 層からなり、1・2 層は砂質シルト、3～5 層はシルトである。1～3 層では、長さ 5～22cm、幅 3～18cm、厚さ 3～7cm の礫を多量に検出した。検出された礫は、平坦な面を描えている様子は無く、大小関係なく散乱していることから、廃棄されたものと考えられる。また、5 層には腐食した有機質物が確認された。これらのことから、当遺構は礫や木質等を廃棄した廃棄遺構と考えられる。遺物は、1 層から 18 世紀の肥前産磁器の碗、土師質土器が、4 層から 18 世紀中葉～後葉の大堀相馬産の碗、在地産の土師質土器、土製品、瓦等が出土したが、いずれも細片のため図示し得なかった。



第209図 SX22 性格不明遺構平面図・断面図

7) SX23 性格不明遺構 (第210図、図版69-5・6)

2区のN13-W31 グリッドに位置する。SX19・20 と重複し、いずれより古い。残存する規模は、長軸 133cm、短軸 127cm、深さ 43cm を測り、主軸方位は N-51° -W を示す。平面形は不整な円形で、断面形は逆台形を呈する。底面は平坦である。堆積土は 2 層からなり、いずれも粘土質シルトである。遺物は、18 世紀中葉～後葉の小野相馬産の碗、18 世紀中葉～後葉の大堀相馬産の皿、18 世紀中葉～後葉の肥前産磁器の碗、在地産の土師質土器等が出土しているが、いずれも細片のため図示し得なかった。



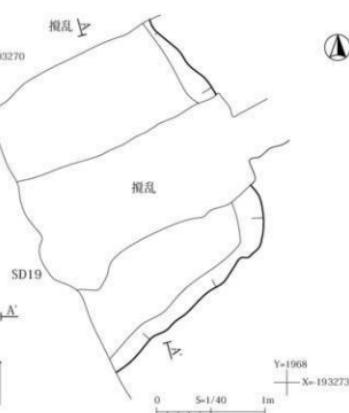
第210図 SX23 性格不明遺構平面図・断面図

第2節 扇坂トンネル部

8) SX31 性格不明遺構 (第211図、図版69-7・8)

2区のN13・14-W34 グリッドに位置する。北側と中央付近を擾乱により削平される。SD19と重複し、SD19より古い。残存する規模は、長軸267cm、短軸195cm、深さ16cmを測り、主軸方位は不明である。平面形は不明で、断面形は圓形を呈すると考えられる。底面は平坦である。堆積土は2層からなり、1層はシルト、2層は粘土質シルトである。遺物は瓦が出土したが、細片のため図示し得なかった。

56.50m A-A'



9) SX33 性格不明遺構 (第212図、図版70-1・2)

2区のN14-W34 グリッドに位置する。南北の上端と西側を擾乱により削平される。残存する規模は、長軸101cm、短軸55cm、深さ21cmを測り、主軸方位は不明である。平面形・断面形はともに不明である。底面はやや起伏が見られる。堆積土は2層からなり、1層は粘土質シルト、2層はシルト質粘土である。いずれもグライ化している。遺物は出土していない。

56.50m A-A'



56.50m A-A'

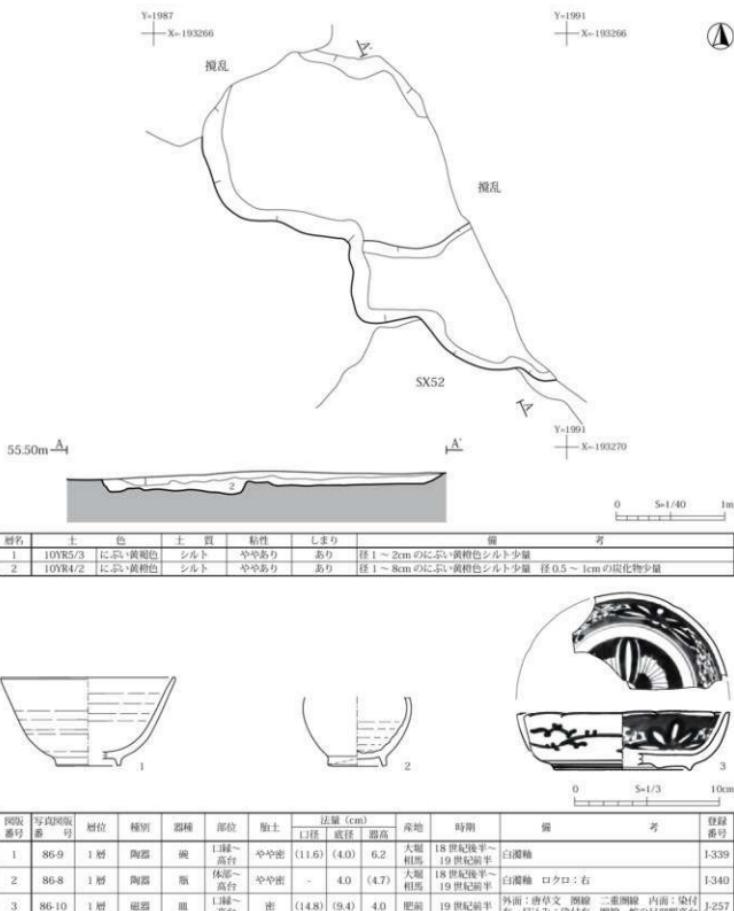


番号	土色	土質	粘性	しまり	備考
1	10YR4/3	にぶい黄褐色	シルト	ややあり	あり 粒5mmの10YR5/6 黄褐色シルト少量 粒10~20cmの礫や多量 グライ化
2	10YR5/6	黄褐色	粘土質シルト	あり	ややあり 粒0.5~1cmの10YR5/6 黄褐色シルト少量

第212図 SX33 性格不明遺構平面図・断面図

10) SX34 性格不明遺構 (第213図、図版70-3)

2区のN14-W31・32 グリッドに位置する。北側と東側は擾乱に削平される。SX52と重複し、SX52より新しい。残存する規模は、長軸409cm、短軸206cm、深さ22cmを測り、主軸方位は不明である。平面形は不明で、断面形は逆台形を呈すると考えられる。底面はやや起伏が見られる。堆積土は2層からなり、いずれもシルトである。遺物は、18世紀中葉～19世紀の大堀相馬産の碗・皿等、19世紀前半の肥前產磁器の皿、在地産の土質質土器等が出土した。そのうち、18世紀後半～19世紀前半の碗と瓶1点ずつ、19世紀前半の肥前產磁器の皿1点を図示した。



第213図 SX34 性格不明遺構平面図・断面図・出土遺物

11) SX39 性格不明遺構 (第214図、図版70-4・5)

2区のN13-W34 グリッドに位置する。南側を搅乱に削平される。SX30と重複し、SX30より新しい。残存する規模は、長軸 214cm、短軸 114cm、深さ 40cm を測り、主軸方位は N-66°-E を示す。平面形は不整な方形で、断面形は逆台形を呈すると考えられる。底面は平坦である。堆積土は3層からなり、1・3層は粘土質シルト、2層はシルトである。遺物は出土していない。

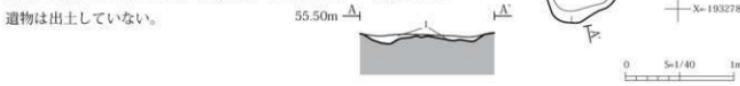
第2節 扇坂トンネル部



第214図 SX39 性格不明遺構平面図・断面図

12) SX41 性格不明遺構 (第215図、図版70-6)

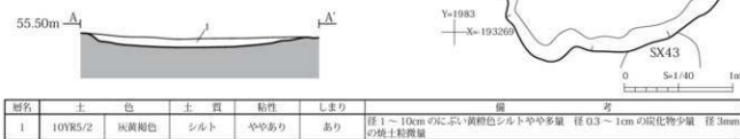
2区のN13-W31グリッドに位置する。残存する規模は、長軸119cm、短軸94cm、深さ10cmを測り、主軸方位はN-11°-Wを示す。平面形は不整形で、断面形は不整な逆台形状を呈する。底面北側には、堆みが見られる。堆積土は、粘土質シルトの単層である。遺物は出土していない。



第215図 SX41 性格不明遺構平面図・断面図

13) SX42 性格不明遺構 (第216図、図版70-7)

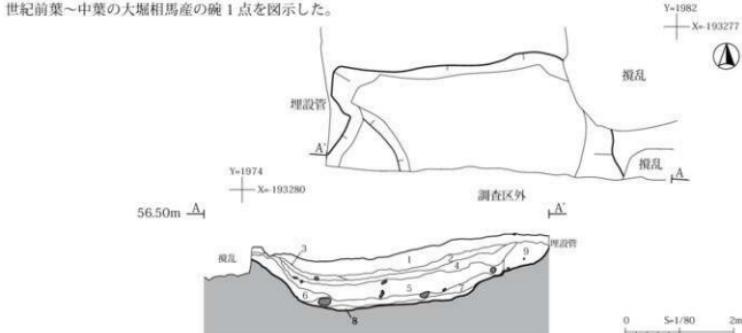
2区のN14-W32グリッドに位置する。北側を擾乱により削平される。SX43と重複し、SX43より新しい。残存する規模は、長軸224cm、短軸178cm、深さ14cmを測り、主軸方位はN-65°-Eを示す。平面形は不整な長方形で、断面形は皿状を呈する。底面は平坦である。堆積土は、シルトの単層である。遺物は、18世紀の瀬戸・美濃焼陶器の碗が出土しているが、細片のため図示し得なかった。



第216図 SX42 性格不明遺構平面図・断面図

14) SX49 性格不明遺構 (第217図、図版70-8~71-2)

2区のN13-W32・33 グリッドに位置する。南側は、調査区外へ延びる。残存する規模は、長軸 254cm、短軸 111cm、深さ 70cm を測り、主軸方位は N-84°・E を示す。平面形は不整な長方形で、断面形は逆台形を呈する。底面は緩やかに西へ傾斜している。堆積土は9層からなり、1~4・9層は粘土質シルト、5~8層はシルト質粘土である。遺物は、17世紀中葉～後葉の肥前産陶器の皿、18世紀中葉～後葉の京焼の碗、18世紀中葉～後葉の小野相馬産の皿、19世紀前葉～中葉の大堀相馬産の碗、18世紀の肥前産磁器の碗・皿等、19世紀前葉～中葉の瀬戸・美濃産磁器の碗、瓦質土器、瓦が出土している。そのうち、17世紀中葉～後葉の肥前産陶器の皿1点、19世紀前葉～中葉の大堀相馬産の碗1点を図示した。



層名	土色	土質	粘性	しまり	備考
1	10YR5/1	褐灰色	粘土質シルト	あり	あり 径1~3cmの赤褐色シルト多量 径3mmの灰白色粒子少量 径0.5~3cmの発化鉄分少量
2	10YR5/2	灰黃褐色	粘土質シルト	あり	あり 径0.5~2cmの暗褐色シルト少量 径3mmの灰白色粒子微量 径0.5~3cmの発化鉄分少量
3	10YR5/2	灰黃褐色	粘土質シルト	あり	ややなし 径1~4cmの明褐色シルト少量 径0.5~1cmの発化鉄分少量
4	10YR4/1	褐色	粘土質シルト	あり	あり 径2cmの褐色シルト質粘土少量 径1cmの墨褐色シルト質粘土微量 径0.5~1cmの発化鉄分や多量
5	7.5YR4/1	褐色	シルト質粘土	あり	ややなし 径1~3cmの褐色シルト質粘土や多量 径1~2cmの黒褐色シルト質粘土少量
6	7.5YR5/2	灰褐色	シルト質粘土	ややあり	径1~2cmの褐色粘土質シルトや多量
7	7.5YR4/1	褐色	シルト質粘土	あり	あり 径1~2cmの墨褐色シルト質粘土少量
8	586/1	青灰色	シルト質粘土	あり	無灰に暗青灰褐色シルト質粘土多量 グライ化
9	7.5YR5/1	褐色	粘土質シルト	あり	あり 径1~2cmの発化鉄分や多量 グライ化



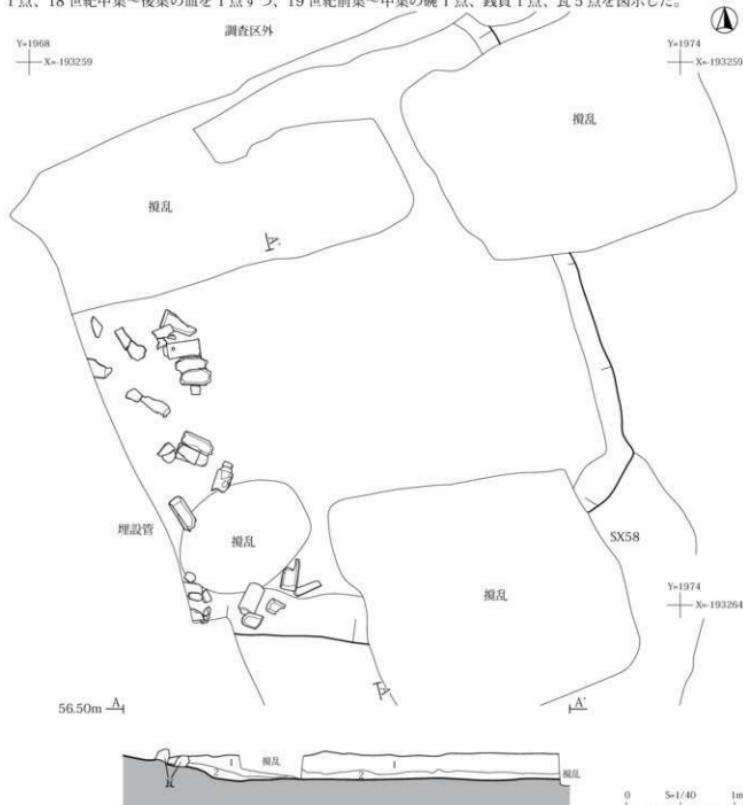
第217図 SX49 性格不明遺構平面図・断面図・出土遺物

15) SX50 性格不明遺構 (第218~221図、図版71-3~5)

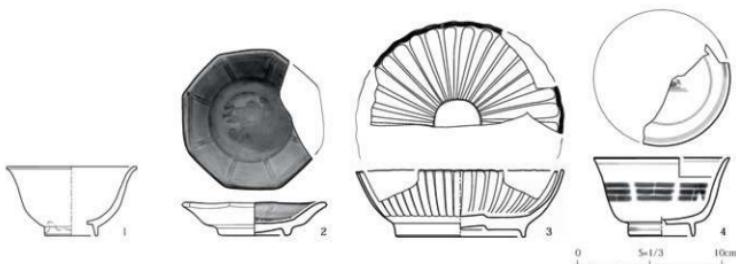
2区のN14・15-W33・34 グリッドに位置する。北側は調査区外へと延び、西側は搅乱により削平され、西側は調査区外へ延びる。SX58と重複し、SX58より新しい。残存する規模は、長軸 470cm、短軸 436cm、深さ 21cm を測り、主軸方位は N-19°・W を示す。平面形、断面形とともに不明である。底面は平坦である。堆積土は2

第2節 扇坂トンネル部

層からなり、1層はシルトで、2層は粘土質シルトである。遺物は出土総数237点を数え、内訳は陶器38点、磁器50点、軟質施釉陶器34点、土師質土器11点、瓦質土器3点、金属製品2点、木製品1点、瓦132点である。これらの遺物の大半が遺構底面より出土しており、主に瓦を廃棄した遺構と考えられる。主な出土遺物は、18世紀の肥前産陶器の碗・皿等、18世紀～19世紀前半の瀬戸・美濃産陶器の碗・皿等、18世紀後半～19世紀中葉の大堀相馬産の碗・皿・土瓶等、17世紀後半～19世紀前半の肥前産磁器の碗・皿、19世紀の瀬戸・美濃産磁器の碗・皿、そのうち、19世紀前葉の大堀相馬産の碗の陶器1点、肥前産磁器の17世紀代と考えられる青磁の皿1点、18世紀中葉～後葉の皿を1点ずつ、19世紀前葉～中葉の碗1点、銭貨1点、瓦5点を図示した。



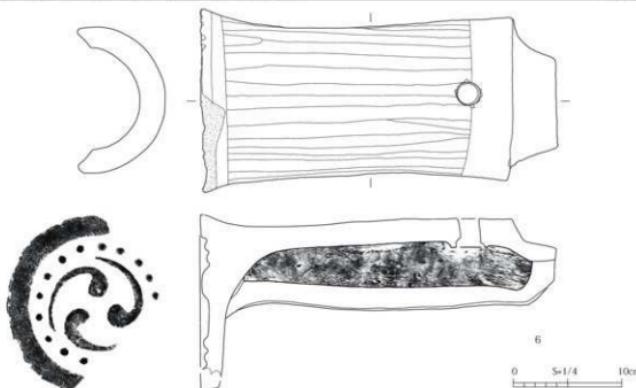
第218図 SX50 性格不明遺構平面図・断面図



図版番号	写真図版番号	層位	種別	器種	部位	胎土	法量(cm)	備考	登録番号	
							外径 内径 厚さ	高さ		
1	87-1	2層	陶器	罐	腹	U縫~ 高台	宍半切	(9.8) 4.7	小野 組物 19世紀油壺 灰釉 貫入有	I-375
2	87-2	2層	磁器	八角皿	底	U縫~ 高台	10.1 (9.0)	4.9 4.5	肥前 17世紀? 青磁 内面:沈線 魚と波瀬刷 神し タクシ付付:砂付有	J-277
3	87-3	2層	磁器	菊花皿	底	U縫~ 高台	(15.2) (9.0)	4.2 4.5	肥前 18世紀後葉~ 後葉 青磁 U縫:蛇の目四高台 外面:染付有 圓線 内面:二重網繩 見込	J-278
4	87-4	2層	磁器	瑞花碗	底	U縫~ 高台	(9.4) (4.4)	5.5 5.5	肥前 19世紀後葉~ 中葉 外面:染付有 圓線 内面:二重網繩 見込	J-280



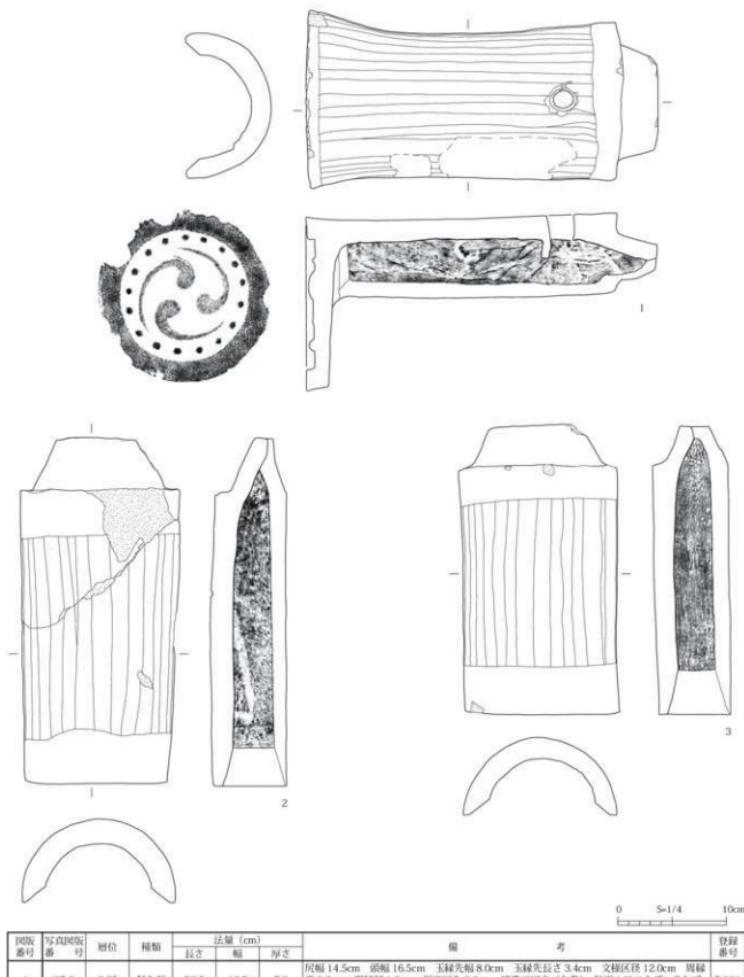
図版番号	写真図版番号	層位	種類	銘文名	初期年	法量(cm・g)	備考	登録番号
						外径 内径 厚さ		
5	87-5	2層	實永通長	1668	2.2	0.6 1.5	新良木 無背	N-023



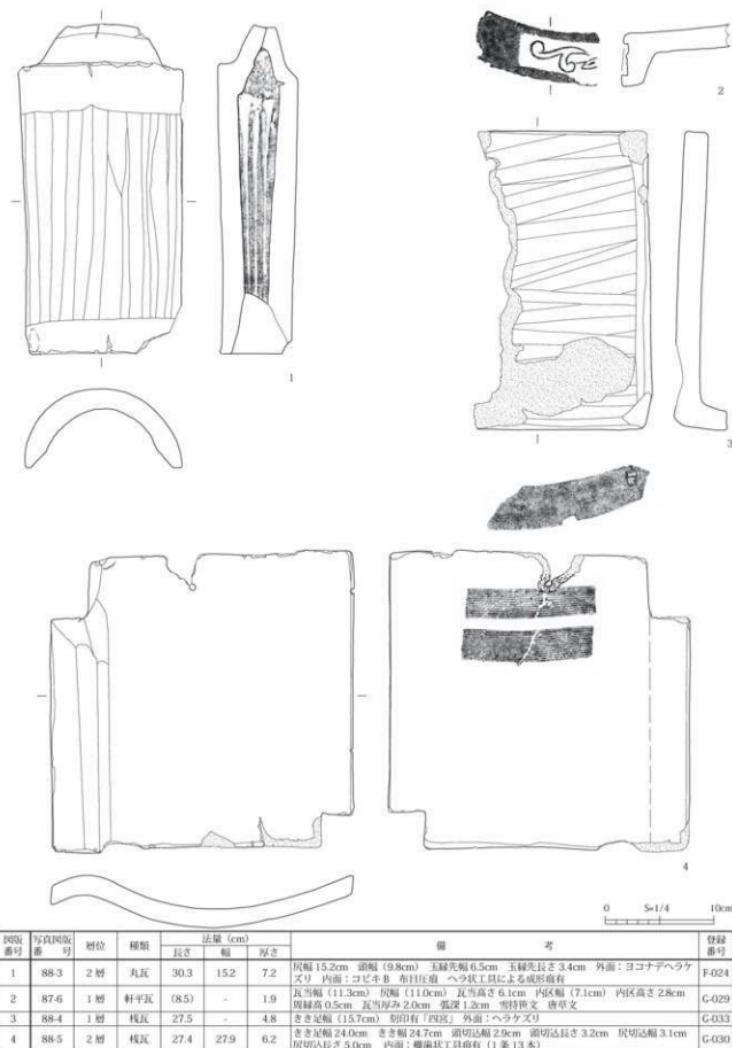
図版番号	写真図版番号	層位	種類	法量(cm)	備考	登録番号
				長さ 幅 厚さ		
6	87-7	2層	軒丸瓦	32.7 16.9 8.0	房幅15.0cm 滲幅16.9cm 玉縫先幅8.3cm 玉縫先長さ4.3cm 文頸区往(11.5cm) 周縫高0.6cm 周縫幅2.2cm 瓦当厚み2.0cm 銘款二行文(右巻) 外面:ヨコナデハ ラケズリ 内面:ヨビキモ 布目仕道 ヘラ状工具による成形削有	F-020

第219図 SX50性格不明遺構出土遺物(1)

第2節 扇坂トンネル部



第220図 SX50性格不明遺構出土遺物(2)

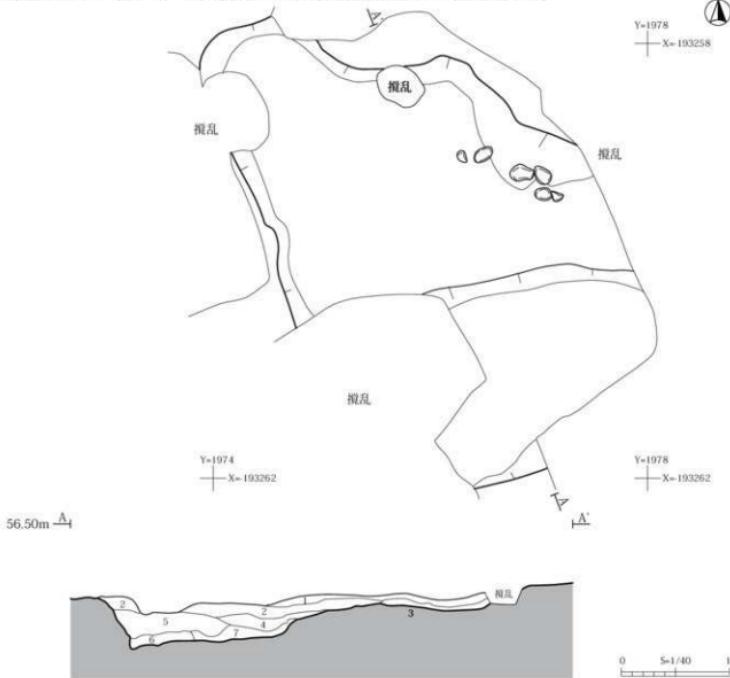


第221図 SX50性格不明遺構出土遺物(3)

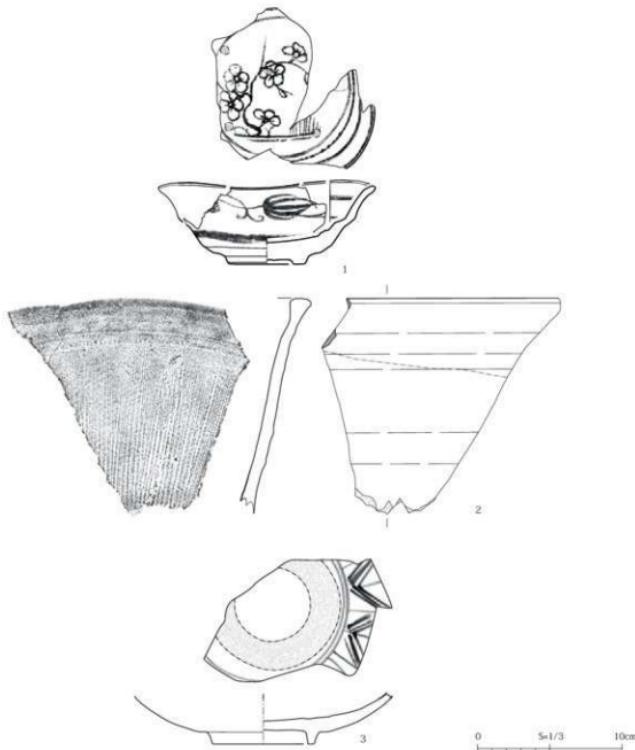
第2節 扇坂トンネル部

16) SX51 性格不明遺構（第222・223図、図版72-1・2）

2区のN14・15-W33 グリッドに位置する。南側や東側を擾乱により削平される。残存する規模は、長軸474cm、短軸294cm、深さ48cmを測り、主軸方位は不明である。平面形は不明で、断面形は不整な逆台形を呈する。底面は南側に窪みが見られる。堆積土は7層からなり、1～3層はシルトで、4～7層は粘土質シルトである。遺物は、17世紀中葉～後葉の岸窯産の擂鉢、16世紀末～17世紀初頭の唐津の向付、18世紀中葉～後葉の小野相馬産の碗、在地産の軟質施釉陶器、瓦質土器が出土した。また、7層から18世紀の肥前産磁器碗・皿、19世紀前半の瀬戸・美濃産磁器の碗が出土している。16世紀末葉～17世紀初頭の唐津の向付、17世紀中葉～後葉の岸窯産の擂鉢を1点ずつ、18世紀末葉～19世紀の肥前産磁器の皿1点を図示した。



第222図 SX51 性格不明遺構平面図・断面図

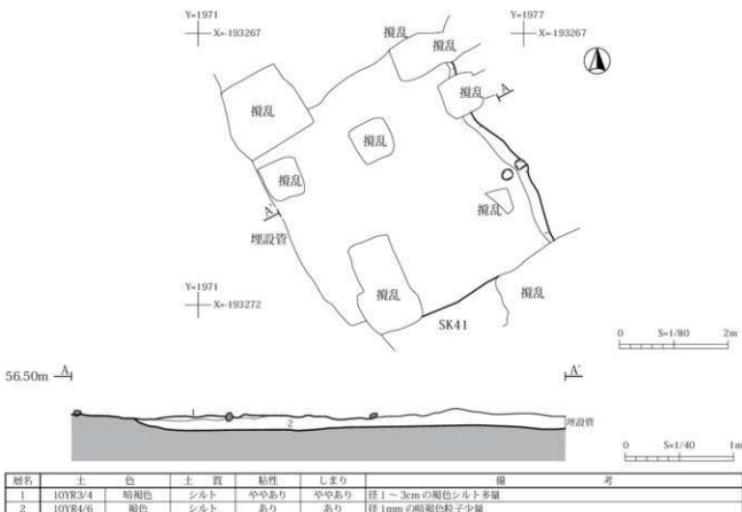


第223図 SX51性格不明遺構出土遺物

17) SX54 性格不明遺構（第224図、図版72-3・4）

2区のN13・14-W33グリッドに位置する。北・南・西側を搅乱により削平される。SK41と重複し、SK41より新しい。残存する規模は、長軸462cm、短軸452cm、深さ31cmを測る。平面形・断面形は、ともに不明である。底面は平坦である。堆積土は2層からなり、いずれもシルトである。遺物は、18世紀の肥前産陶器の碗、17世紀中葉～後葉の肥前産磁器の碗が出土しているが、いずれも細片のため図示し得なかった。

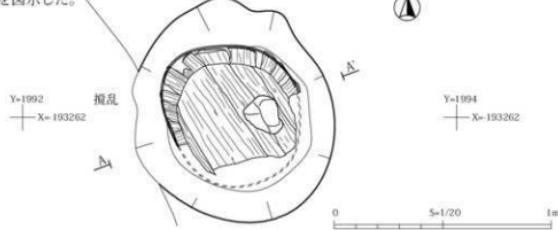
第2節 扇坂トンネル部



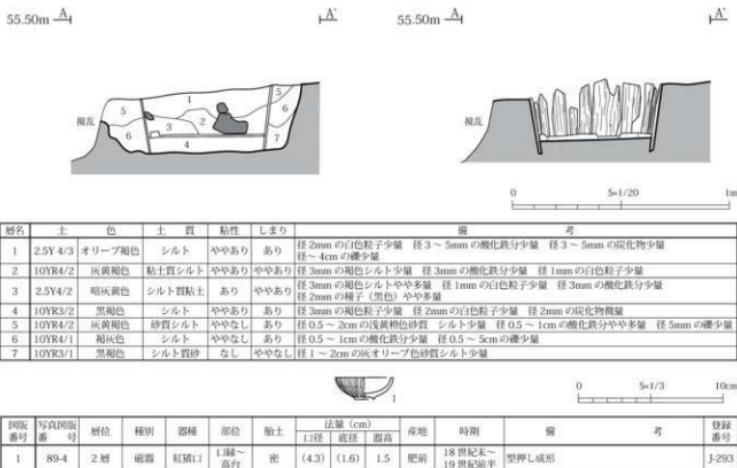
第 224 図 SX54 性格不明構造平面図・断面図

18) SX55 性格不明遺構（第 225・226 図、図版 72-5～8）

2 区の N14-W31 グリッドに位置する。一部西側の上端を掘削に削平される。結構が埋設されている遺構である。残存する掘り方の規模は、長軸 105cm、短軸 93cm、深さ 33cm を測り、主軸方位は N-22°・W を示す。平面形は不整な梢円形、断面形は不整な逆台形を呈する。掘り方底面は、概ね平坦である。遺構内には、上端径 63～68cm、下端径 55～59cm を測る結構が埋設されている。残存する側板の長さ 21～34cm、幅 3～13cm、厚さ約 1cm を測る。堆積土は 7 層からなり、1・4・6 層はシルトで、2 層は粘土質シルト、3 層はシルト質粘土、5 層は砂質シルト、7 層はシルト質砂である。遺物は、18 世紀代の肥前産陶器の碗、18 世紀代の瀬戸・美濃産陶器の皿、18 世紀末～19 世紀前半の肥前産磁器の紅猪口等が出土している。そのうち、18 世紀末から 19 世紀前半の肥前産磁器の紅猪口 1 点を図示した。



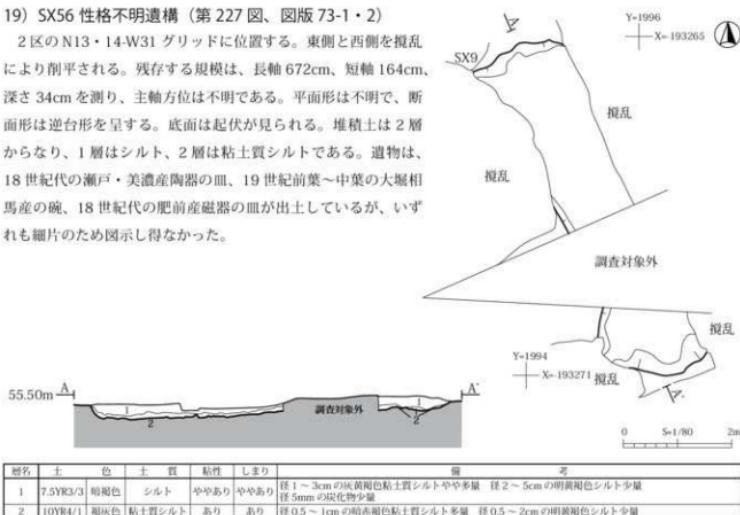
第225図 SX55性格不明構造平面図



第226図 SX55 性格不明遺構断面図・立面図・出土遺物

19) SX56 性格不明遺構（第227図、図版73-1・2）

2区のN13・14-W31グリッドに位置する。東側と西側を擾乱により削平される。残存する規模は、長軸672cm、短軸164cm、深さ34cmを測り、主軸方位は不明である。平面形は不明で、断面形は逆台形を呈する。底面は起伏が見られる。堆積土は2層からなり、1層はシルト、2層は粘土質シルトである。遺物は、18世紀代の瀬戸・美濃産陶器の皿、19世紀前葉～中葉の大堀相馬産の碗、18世紀代の肥前産磁器の皿が出土しているが、いずれも細片のため図示し得なかった。

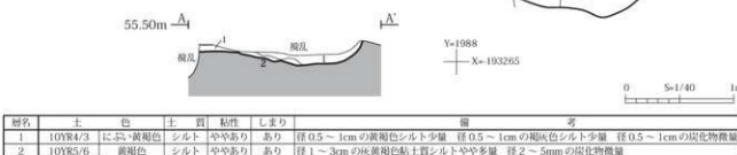


第227図 SX56 性格不明遺構平面図・断面図

第2節 扇坂トンネル部

20) SX57 性格不明遺構（第228図、図版73-3・4）

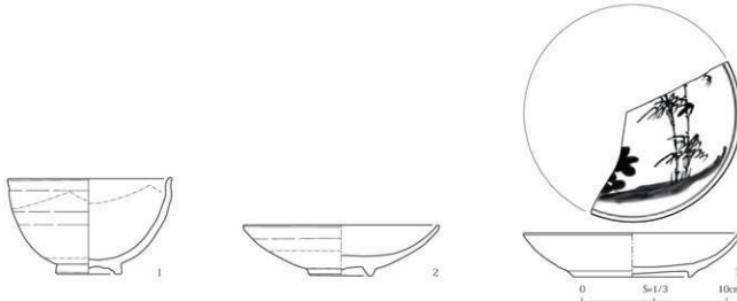
2区のN14-W32 グリッドに位置する。西側を擾乱により削平される。残存する規模は、長軸 212cm、短軸 162cm、深さ 24cm を測り、主軸方位は N42°W を示す。平面形は不整な橢円形を呈し、断面形は不整な皿状を呈する。底面はやや起伏が見られる。堆積土は2層からなり、いずれもシルトである。遺物は出土していない。



第228図 SX57 性格不明遺構平面図・断面図

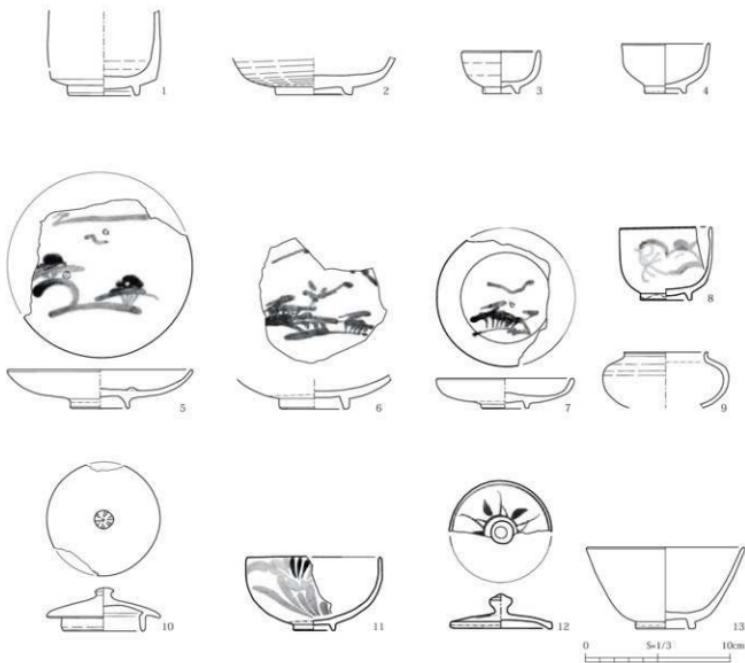
(7) IV層出土遺物（第229～234図、図版89-5～93-10）

IV層からは、総点数 1728 点の遺物が出土した。その内訳は、陶器 784 点、磁器 640 点、瓦質土器 68 点、土師質土器 88 点、土製品 16 点、石製品 9 点、金属製品 28 点、木製品 9 点、瓦 85 点、自然遺物 1 点が出土地。それらのうち、陶器 15 点、磁器 18 点、軟質施釉陶器 2 点、土師質土器 5 点、瓦 1 点、土製品 2 点を図示した。平成 21 年度調査区の段丘崖のIV層からは多量の陶磁器が出土しており、大堀相馬は 18 後半～19世紀前半の皿や碗、土瓶、袋物等多様な器種が見られた。また、18世紀代～19世紀代の肥前産磁器、19世紀代の瀬戸・美濃産磁器の皿や碗等。他にも、培培や瓦質土器の蚊遣りや火入れ、土人形等多種多様な遺物が出土した。また、ピットから出土した遺物でやや時期が古いものを 3 点図示した。



図版番号	写真図版番号	遺物名	層位	種別	器種	部位	胎土	法量(cm)			产地	時期	備考	写真番号
								上口径	底径	高さ				
1	89-5	P137	2層	陶器	碗	口縁～高台	やや粗	11.3	4.5	6.6	瀬戸・美濃	17世紀？	長石釉 貫入有 口縁部：鉄輪底部：ヘラカズリ ロクロ：左 天目系	I-254
2	89-6	P24	3層	陶器	皿	口縁～高台	やや密	(13.6)	4.4	(3.5)	頃野	17世紀後半	透明釉 脚付円盤割ぎ 内面：焼付着 ロクロ：右	I-438
3	89-7	P114	2層	磁器	皿	口縁～高台	密	15.0	6.0	3.0	肥前	18世紀	内面：竹文 タタミ付け：紗付着	J-194

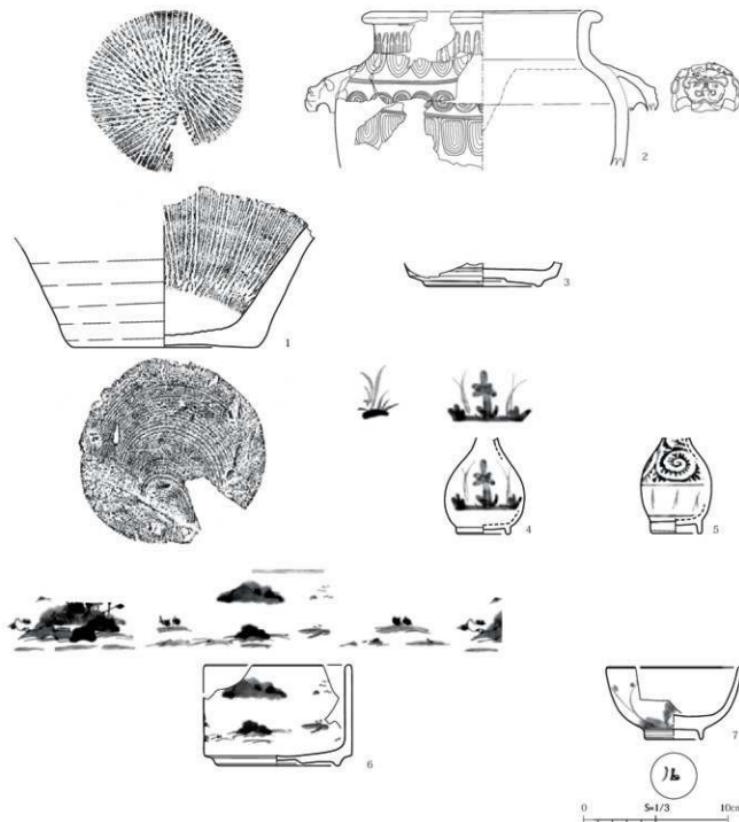
第229図 IV層ピット出土遺物



図版番号	写真版番号	グリッド	種別	器種	部位	胎土	法量(cm)			産地	時期	備考	登録番号
							口径	底径	器高				
1	90-8	N14-W33	陶器	不明	底盤~高台	密	-	(5.5)	(5.8)	大坂相馬	19世紀	内面：鉄輪 外面：鉄輪 ロクロ：右 黒輪 底部：ヘラケズリ調整	I-227
2	89-13	N14-W33	陶器	碗	底盤~高台	やや密	-	(5.4)	(2.6)	大坂相馬	18世紀前半	ロクロ：右	I-228
3	89-11	N12+13-W28	陶器	小杯	口縁~高台	やや密	5.5	2.6	3.0	大坂相馬	19世紀	白潤輪	I-508
4	90-6	N13-W28+29	陶器	小杯	口縁~高台	やや密	6.2	2.9	3.5	大坂相馬	18世紀後半	灰輪	I-509
5	90-4	N12+13-W28+29	陶器	皿	口縁~高台	やや密	(12.7)	4.0	2.7	大坂相馬	18世紀末~19世紀初葉	灰輪 跡輪 内面：口跡3箇所有	I-515
6	90-5	N14-W28	陶器	皿	口縁~高台	やや密	(10.7)	4.9	(2.1)	大坂相馬	19世紀前葉	灰輪 内面：鉄輪 跡輪	I-516
7	90-1	N13-W28+29	陶器	皿	口縁~高台	やや密	(9.5)	3.5	2.1	大坂相馬	19世紀前葉	灰輪 跡輪	I-517
8	89-9	N13-W28+29	陶器	小杯	口縁~高台	やや密	(6.5)	3.6	5.1	大坂相馬	19世紀前	灰輪 刻線 跡輪	I-514
9	89-12	N13-W28+29	陶器	器物	底盤	やや密	(5.8)	-	(3.9)	大坂相馬	18世紀末~19世紀初葉	灰輪	I-521
10	90-2	N14-W29	陶器	土瓶	つまみ(底部)	やや密	7.8	5.7	3.0	大坂相馬	18世紀後半~19世紀初葉	白潤輪 貫入有 つまみ：菊花	I-524
11	89-8	N13-W28+29	陶器	碗	口縁~高台	密	(9.0)	(3.9)	5.1	京	18世紀中葉~	灰輪 上給付け(赤輪・緑輪)	I-534
12	90-3	N14+15-W29	陶器	土瓶	つまみ(底部)	密	-	7.0	2.3	大坂相馬	19世紀	灰輪 透明輪 白化粧土 鉄輪 山水文	I-545
13	89-10	N13-W28+29	陶器	碗	口縁~高台	やや密	11.0	4.0	5.6	大坂相馬	19世紀前葉~中葉	白潤輪 鉄輪流し掛け	I-603

第230図 IV層出土遺物(1)

第2節 扇坂トンネル部



図版番号	写真図版番号	グリッド	種別	器種	部位	胎土	法量(cm)			产地	時期	備考	登録番号
							口径	底径	器高				
1	90-7 W28・29	N13-	陶器	盤鉢	底部～底部	やや粗	-	13.0	(7.5)	在地	近世	直輪 底部：回転系切痕有 口クロ：右 柳口 1条 7木	I-561
2	90-9 W28・29	N13-	陶器	盤鉢	口縁～底部	やや粗	(16.6)	-	(10.8)	瀬戸・19世紀前葉～ 中葉 英濃	白蘭釉 汎線 隔筋 猫面貼付		I-607
3	92-7 W42	N10-	磁器	香炉	底部～高台	密	-	7.8	(1.7)	肥前	18世紀	外面：團線 二重團線 蛇の目四型高台	J-158
4	91-7 W28・29	N14-	磁器	瓶	体部～底部	密	-	3.7	(6.6)	肥前	19世紀	松竹梅文？ 無繩痕有	J-356
5	91-8 W28・29	N13-	磁器	瓶	体部～底部	密	-	3.5	(6.6)	肥前	19世紀	頬唐草文 團線 二重團線 タタミ付け：砂付着	J-357
6	91-9 W28・29	N13-	磁器	火入	口縁～高台	密	10.0	8.7	7.0	肥前	18世紀中葉～ 後葉 外側：染付有 山水文？ 蛇の目四型高台 真人有 口クロ：右	J-358	
7	91-3 W28・29	N13-	磁器	圓	口縁～高台	密	(9.8)	4.2	5.0	肥前	18世紀中葉～ 後葉 外側：草花文 團線 二重團線	J-361	

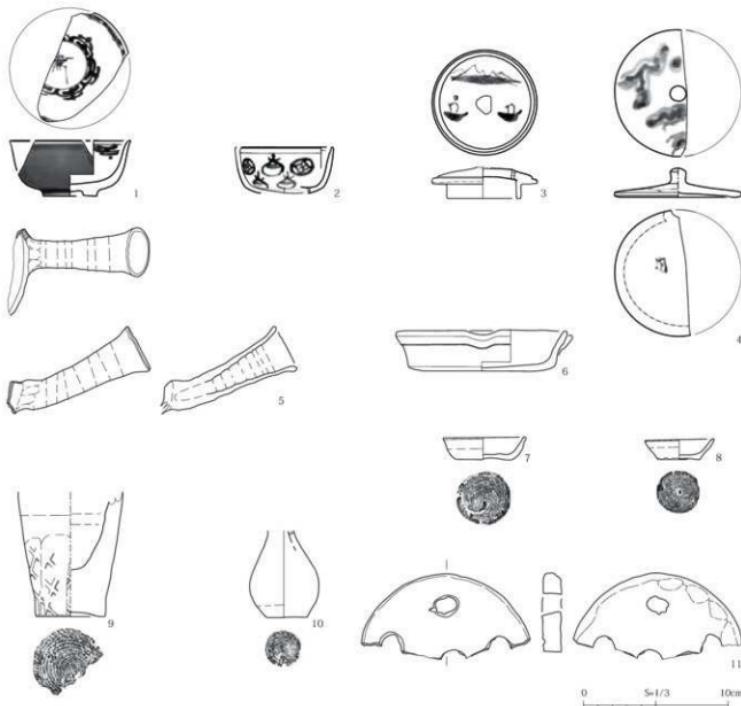
第231図 IV層出土遺物(2)



回版 番号	写真図版	グリッド	種別	器種	部位	胎土	法量(cm)			产地	時期	備 考	写真 番号
							口径	底径	器高				
1	91-1	N14-W28	磁器	碗	口縁～高台	密	10.0	3.7	5.8	肥前	18世紀	磁盤色蛇(赤・緑・青) 口紅	J-362
2	91-5	N13-W28	磁器	小杯	口縁～高台	密	(7.0)	2.9	4.3	肥前	19世紀	外面：染付有 高台内：路有	J-366
3	91-4	N14-W28	磁器	皿	口縁～高台	密	11.1	5.6	2.6	肥前	19世紀前葉～中葉	外周：染付有 内面：高台内「太清夜降年製」七踏	J-370
4	92-6	N13-W28-29	磁器	皿	口縁～高台	密	7.8	4.8	1.9	肥前	19世紀前半	外周：染付有 見込み：山水樓閣文	J-371
5	90-10	N13-W28-29	磁器	皿	口縁～高台	密	(9.5)	5.0	2.3	肥前	18世紀	外周：染付有 見込み：草花文	J-372
6	92-5	N13-W28-29	磁器	角小皿	口縁～高台	密	(7.4)	3.9	2.3	肥前	19世紀前半	白磁：型押し成形 見込み：五弁花	J-373
7	92-1	N13-W28	磁器	蓋	上部～底部	密	9.0	3.7	3.3	肥前？	18世紀？	外周：染付有 圓線 内面：染付有 圓線 見込み：	J-376
8	91-6	N14-W28	磁器	端反射	口縁～高台	密	9.2	3.9	5.0	瀬戸・19世紀前葉～中葉	染付有(仙芝祝寿文?) 圓線 内面：染付有 圓線 見込み：染付有	J-386	
9	92-3	N14-W29	磁器	蓋	上部～底部	密	-	9.0	2.5	瀬戸・19世紀前葉～中葉	外周：染付有 二重圓線 内面：染付有 圓線 見込み：染付有 二重圓線	J-393	

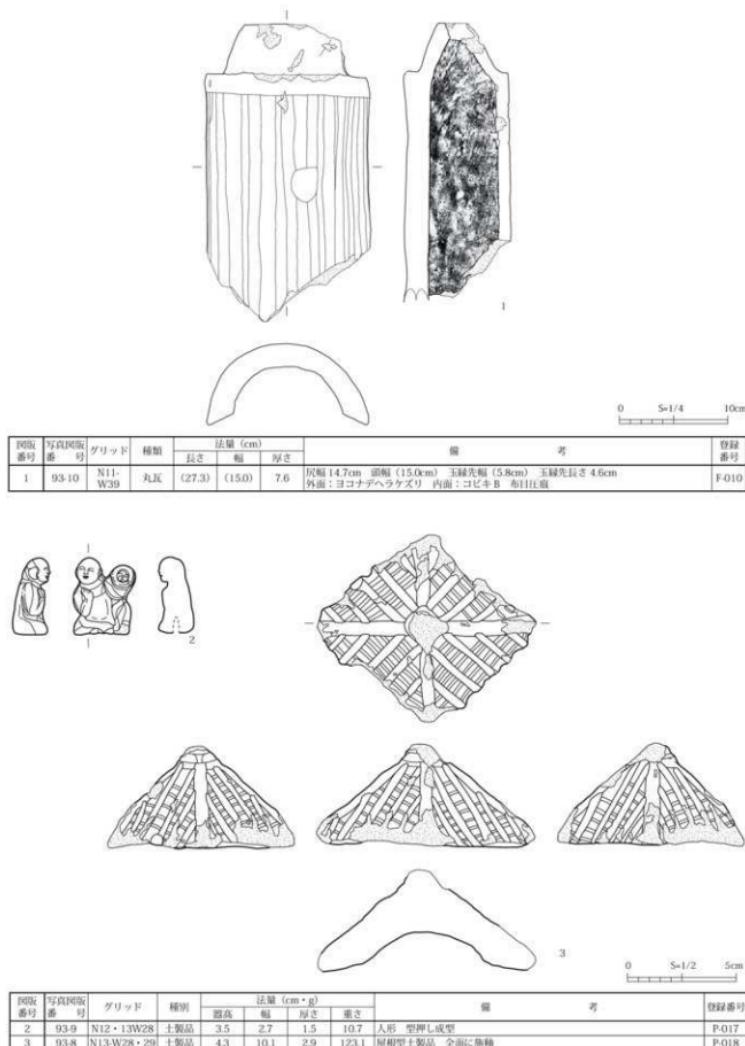
第232図 IV層出土遺物(3)

第2節 扇坂トンネル部



圖版 番号	写真図版 番号	ダリッジ 種別	器種	部位	胎土	法量(cm) 口径 底径 器高	产地	時期	備 考	登録 番号	
1	91-10	N14-15 W32	磁器	碗	口縁～ 高台	密 (8.6) (3.6)	3.8	肥前	19世紀 外面：細織輪、内面：輪宝文、見込み：「有」輪宝文、タヌキ目付：口縁有	J-423	
2	92-4	N14-15 W32	磁器	蓋付碗	口縁～ 底部	密 (3.2) (6.3)	-	肥前	18世紀後半？ 外面：宝珠文、七宝文、圓輪、口縁部：輪ぬぐい	J-422	
3	91-2	N14 W29	磁器	蓋	上部～ 底部	密 (7.4) (5.0)	(2.1)	肥前	19世紀 山に舟文	J-473	
4	92-2	N13- W28-29	磁器	蓋	上部～ 底部	密 (8.8) (8.0)	-	2.0	肥前 燒廠窯有、内面：輪渦ぎ	J-622	
5	93-6	軟質陶 W28-29	軽輪器	把手	粗	-	6.0	在地	近世 透明輪、軟質施釉陶器	I-552	
6	93-1	軟質陶 W28-29	軽輪器	把手	粗	(11.5) (9.8)	(3.8)	在地	近世 透明輪、軟質施釉陶器	I-551	
7	93-2	N12- W36	土師質 かわけ	口縁～ 底部	粗	5.8 (3.8)	3.8 (1.6)	在地	近世 ロクロナデ、底部：回転系切削有	I-155	
8	93-5	N14- W28-29	土師質 かわけ	口縁～ 底部	粗	4.8 (3.0)	3.0 (1.4)	在地	近世 底部：回転系切削有、ロクロ：右	I-554	
9	93-4	N13- W35	土師質 土器	体部～ 底部	粗	-	5.0 (8.7)	在地	近世 底部：回転系切削有、タヌキ目付有、ナデ、ロクロ：左	I-224	
10	93-3	N14- W33	土師質 土器	底	体部～ 底部	粗	-	2.6 (6.0)	在地	近世 底部：回転系切削有、ロクロ：右	I-590
11	93-7	N14- W29	瓦質 土器	さな	-	粗	-	-	在地	近世 縫隙 (11.7cm)、器厚 (1.3cm)、ナデ、南頭有	I-557

第233図 IV層出土遺物(4)



第234図 IV層出土遺物(5)

第2節 扇坂トンネル部

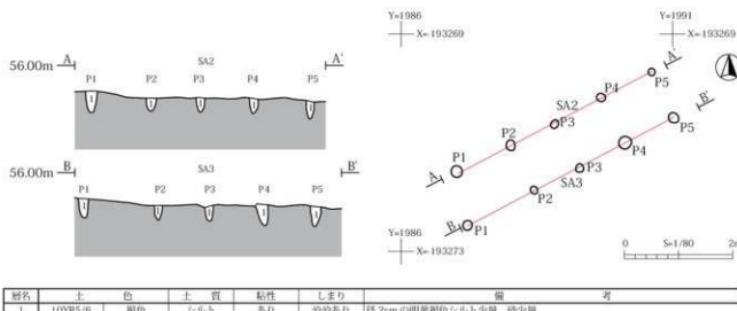
3 III層上面検出遺構と遺物

III層は、扇坂トンネル部2区のほぼ全面で確認され、扇坂トンネル部1区では調査区の中央付近から東側では広範囲に確認し、西側では所々ではあるが確認した。検出した遺構は、柱列1条、建物跡2棟、溝跡6条、井戸跡3基、土坑4基、性格不明遺構7基、近代石垣1基、ピット32基である。

(1) 杭列跡

1) SA2・3杭列跡（第235図、図版73-5）

2区のN13・14-W31・32グリッドに位置する。南西から北東へ、1列5基の杭跡で構成される杭列が、2列並行して並ぶ杭列跡である。検出された長さはSA2が403cm、SA3列が429cmをで、各列における杭の間隔は南西から北側の列が109cm（3尺5寸）・90cm（2尺9寸）・100cm（3尺3寸）・105cm（3尺5寸）測り、南側の列が138cm（4尺5寸）92cm（3尺）95cm（3尺1寸）101cm（3尺3寸）を測り、両列の間の杭の間隔は南西から100cm（3尺3寸）92cm（3尺）94cm（3尺1寸）95cm（3尺）94cm（3尺1寸）を測る。杭跡の径は、13～25cmを測る。主軸方位は、両列いずれもN-63°-Eを示す。

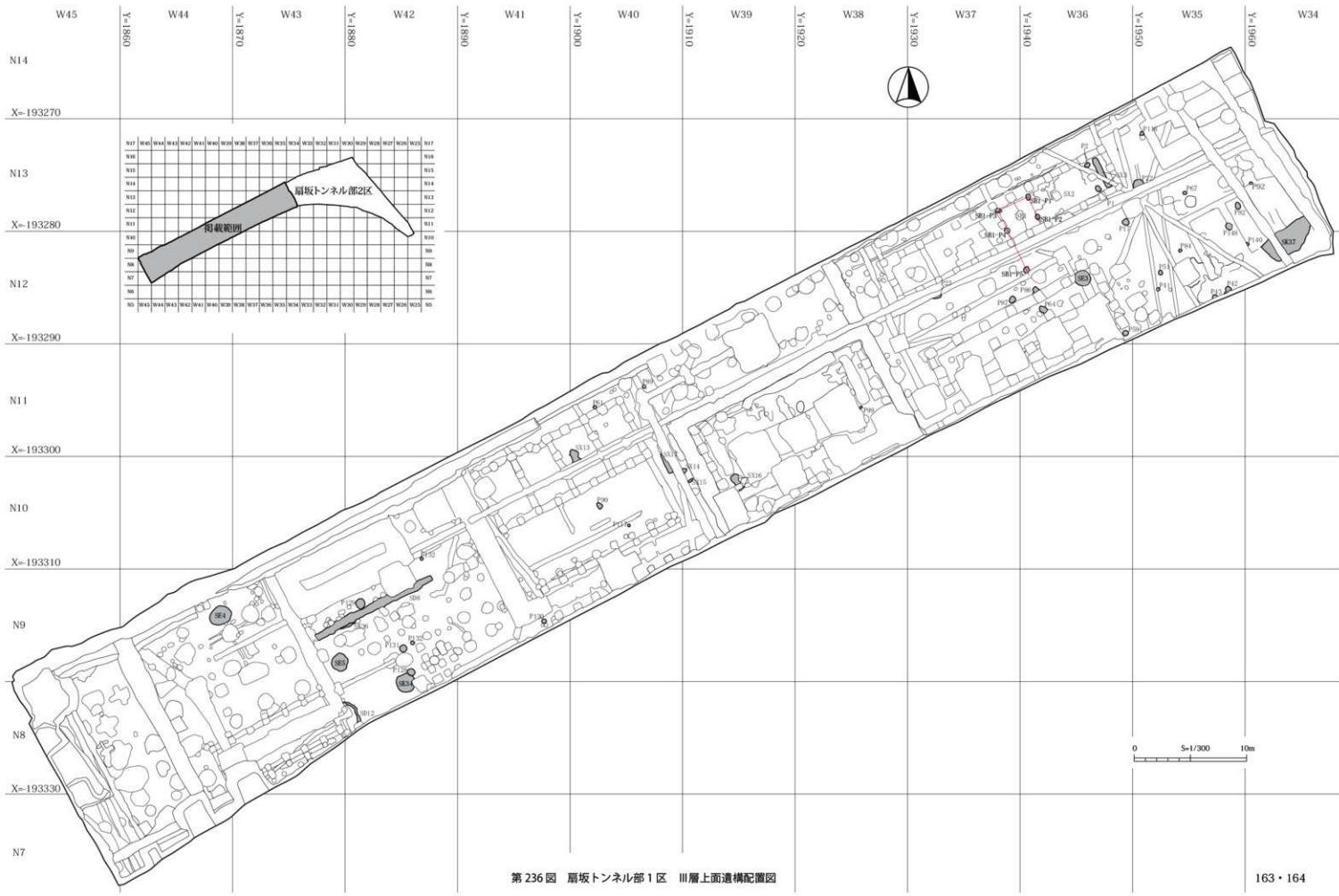


第235図 SA2・3杭列跡平面図・断面図

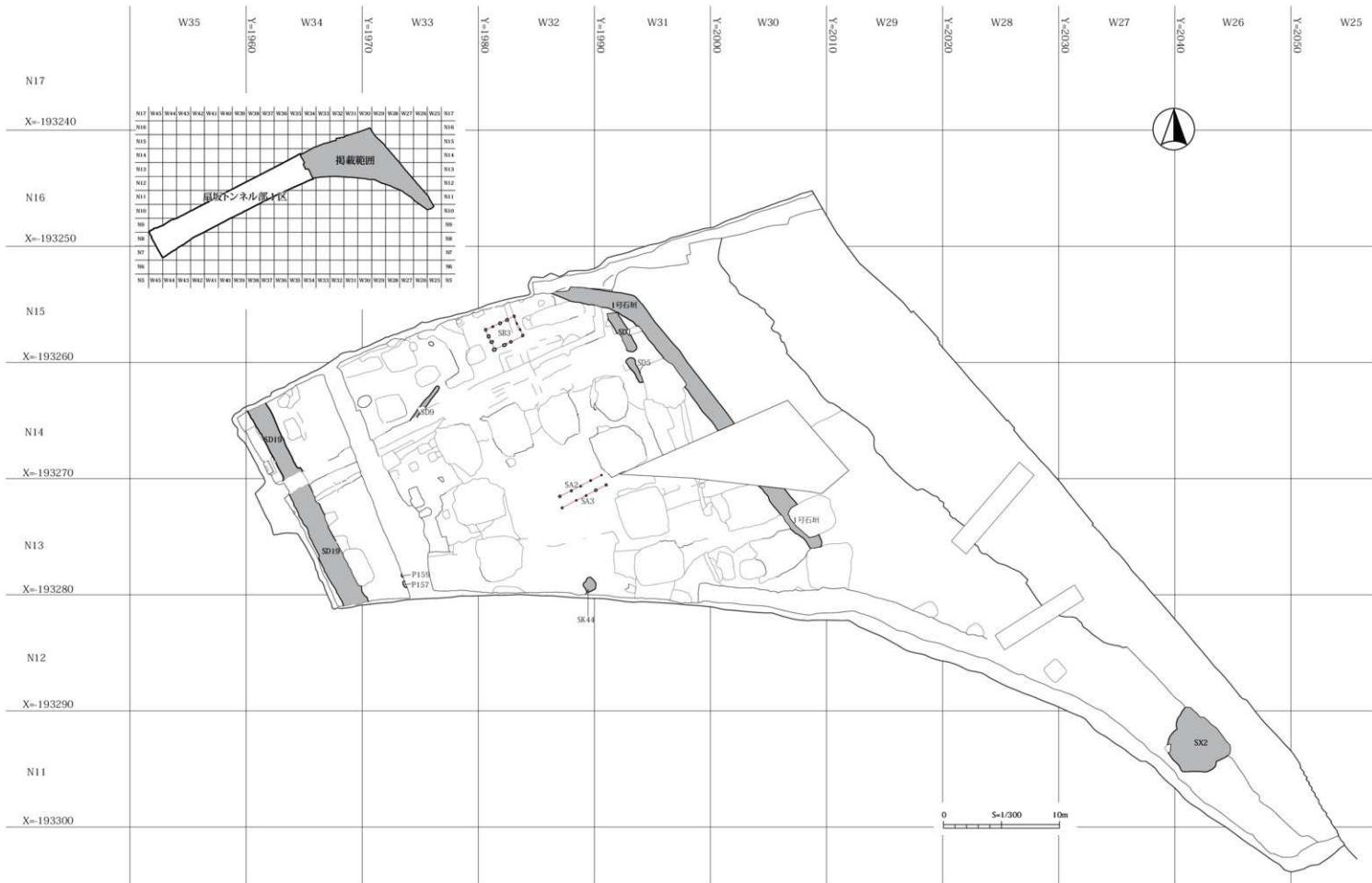
(2) 建物跡

1) SB1建物跡（第238・239図、図版73-6）

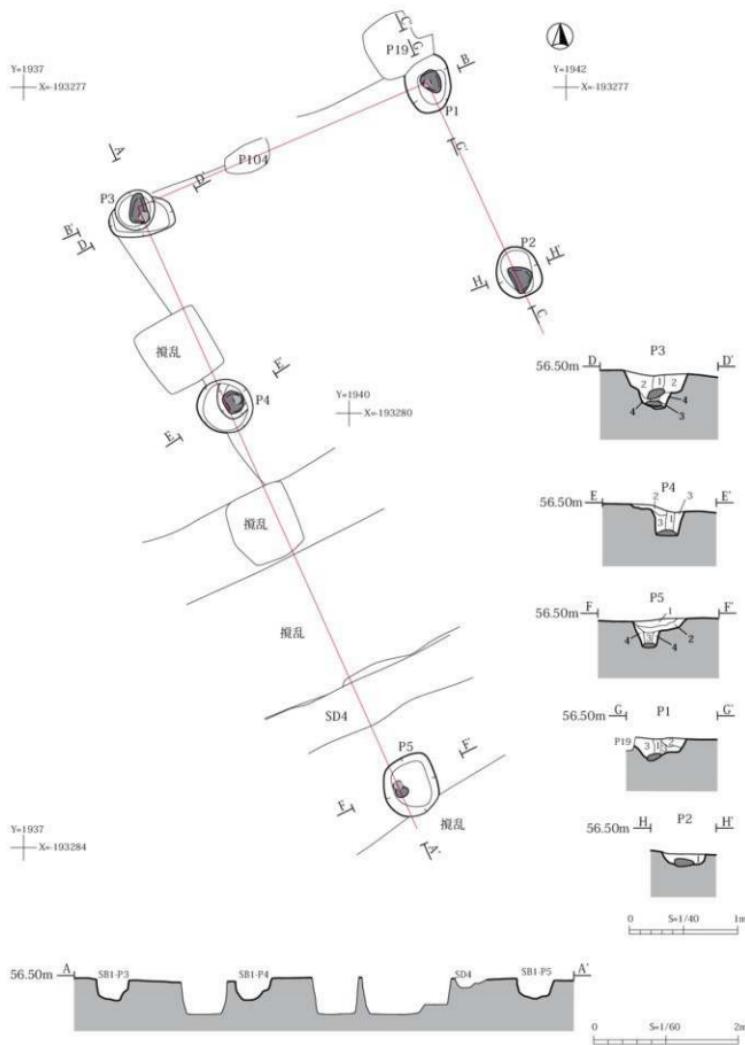
1区のN12・13-W36・37グリッドに位置する。SB1-P1～SB1-P5の5基の柱穴で構成される建物跡である。SB1-P1がP19と重複し、P19より新しい。確認された規模は、西側柱列が587cm、東側柱列が200cm、北側柱列が296cmを測り、東・西側の柱列はN-26°-W、北側の柱列はN-66°-Eを示す。各柱穴の規模は、長軸47～61cm、短軸26～52cm、深さ11～27cmを測る。柱間寸法は、SB1-P1からSB1-P2へ201cm（6尺6寸）、SB1-P1からSB1-P1からSB1-P3へ288cm（9尺5寸）、SB1-P3からSB1-P4へ190cm（6尺2寸）、SB1-P4からSB1-P5まで384cm（12尺6寸）を測る。平面形は楕円形もしくは円形で、断面形は不整な逆台形を呈する。SB1-P1・P3～P5で柱痕跡を確認した。また、いずれの柱穴からも底面で、径12～28cm測る礎板石を検出した。堆積土は、SB1-P1はシルト質粘土、SB1-P2はシルトの単層、SB1-P3～P5が砂質シルトもしくは粘土質シルトである。遺物はSB1-P5から、19世紀前葉～中葉の大堀相馬産の土瓶、在地産の土師質土器等が出土地したが、細片のため図示し得なかった。



第236図 扇坂トンネル部1区 III層上面造構配置図

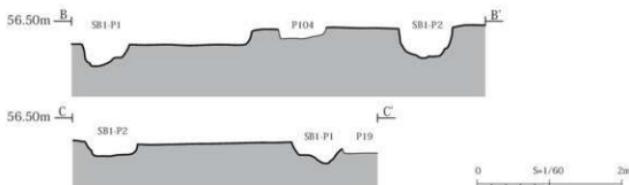


第237図 扇坂トンネル部2区 III層上面遺構配置図



第238図 SB1建物跡平面図・断面図

第2節 扇坂トンネル部

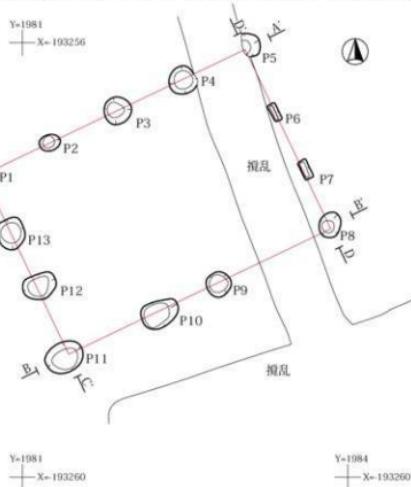


通構名	規名	土色	土質	粒性	しまり	備考
P1	1 7.5YR4/2	灰褐色	シルト質粘土	半やあり	あり	径0.5～1cmの10YR8/6明黄色シルト質粘土多量
	2 7.5Y4/1	褐色	シルト質粘土	あり	あり	径0.5～1cmの黄褐色シルト少量 径0.5～1cmの墨灰色シルト少量
	3 7.5YS/1	褐色	シルト質粘土	あり	あり	径3mmの炭化物微量
P2	1 10YR3/1	黒褐色	シルト	ややあり	ややあり	径1～2cmの10YR7/8前時代少量 炭化鉄少量化
	2 2.5V4/3	オリーブ褐色	砂質シルト	なし	あり	径0.1～3cmの10YR7/8 黄褐色少量
P3	2 2.5Y6/6	明褐色	シルト	ややあり	あり	樹上部に径0.5～5cmの10YR3/1 黑褐色少量 径1～3cmの10YR7/8 黄褐色少量
	3 2.5Y6/6	明褐色	シルト	あり	あり	径0.3～1cmの褐色鉄分少量 径5mmの炭化物少量
	4 7.5YR4/2	灰褐色	粘土質シルト	ややあり	ややなし	径1cmの褐色鉄分シルト少量 径1mmの炭化物粒子微量
	1 2.5V4/3	オリーブ褐色	砂質シルト	あり	あり	径1～3mmの10YR7/8 黄褐色微量
P4	2 2.5Y6/6	明褐色	シルト	あり	あり	径1～2mmの2.5Y4/3オリーブ褐色微量
	3 2.5Y6/8	明褐色	シルト	あり	あり	径1～2cmの2.5Y4/3オリーブ褐色微量
	4 7.5YR3/2	暗褐色	砂質シルト	なし	あり	径3mmの10YR4/3に沿う褐色鉄分少量
P5	2 7.5YR3/3	暗褐色	砂質シルト	ややあり	あり	径1～3cmの10YR4/3に沿う褐色鉄分少量
	3 10YR6/8	明褐色	シルト	あり	あり	径1～2mmの10YR3/1～3/2 黑褐色少量化
	4 10YR7/8	褐色	シルト	あり	あり	径1～2mmの10YR3/1 黑褐色微量

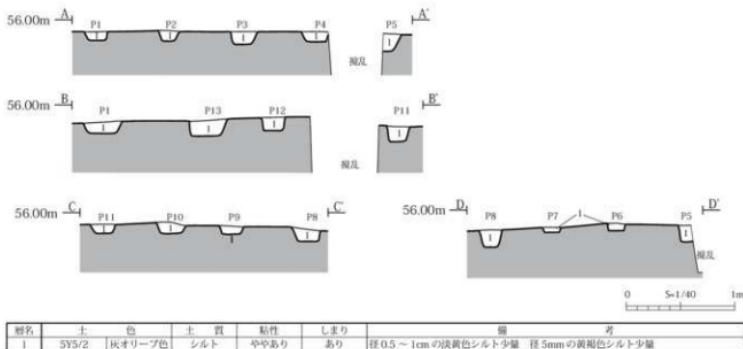
第239図 SB1 建物跡断面図

2) SB3 建物跡 (第240・241図、図版73-7)

1区のN15-W32グリッドに位置する。Ⅲ層直下より検出した。南側桁行の柱跡を1基欠損しているが、SB3-P1～P13の13基の柱跡で構成される長方形を呈する建物跡である。桁行4間(268cm)、梁行3間(186cm)で、柱間の寸法は北側桁行が67cm(2尺2寸)等間で、南側桁行きが西から92cm(3尺)、65cm(2尺1寸)、115cm(3尺7寸)を測り、西側梁行が南から68cm(2尺2寸)、56cm(1尺8寸)、62cm(2尺)で、東側梁行が56cm(1尺8寸)、59cm(1尺9寸)、66cm(2尺1寸)を測る。掘り方の規模は、長軸20～36cm、短軸15～28cm、深さ5～16cmを測る。平面形は不整な円形もしくは不整な梢円形であるが、東側棟行の中央2基は長方形を呈する。断面形は逆台形を呈し、底面は平坦である。堆積土はシルトの単層である。遺物は出土していない。



第240図 SB3 建物跡平面図



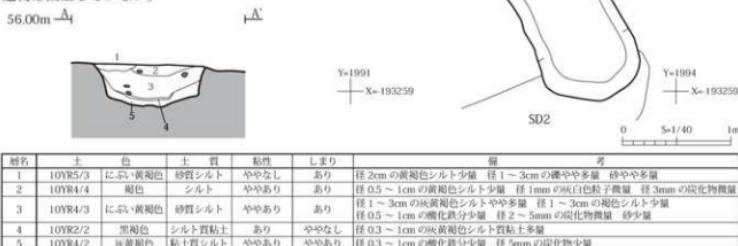
第241図 SB3 建物跡断面図

(3) 溝跡

1) SD1 溝跡（第242図、図版74-1～3）

2区のN15-W31グリッドに位置する。南東から北西へ直線的に伸びる溝跡である。北端と中央付近の一部を擾乱により削平される。SD2と重複し、SD2より新しい。残存する規模は、長さ346cm、上端幅83～102cm、下端幅63～82cm、深さ38～40cmを測り、主軸方位はN-28°-Wを示す。断面形は逆台形を呈する。底面はやや起伏があり、北から南へ緩やかに低くなる。堆積土は5層からなり、1・3層は砂質シルトで、3層はIV層に類似する。2層はシルト、4層はシルト質粘土、5層は粘土質シルトである。

遺物は出土していない。

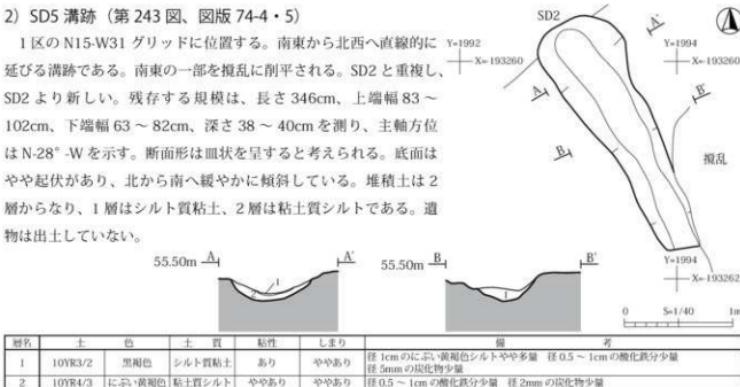


第242図 SD1 溝跡平面図・断面図

第2節 扇坂トンネル部

2) SD5 溝跡（第243図、図版74-4・5）

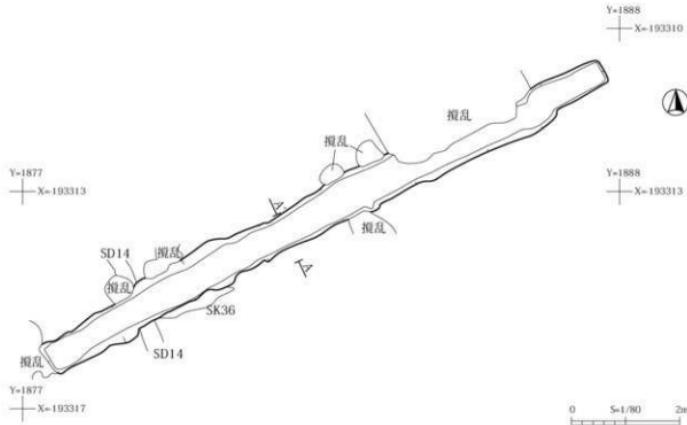
1区のN15-W31 グリッドに位置する。南東から北西へ直線的に延びる溝跡である。南東の一部を擾乱に削平される。SD2と重複し、SD2より新しい。残存する規模は、長さ346cm、上端幅83～102cm、下端幅63～82cm、深さ38～40cmを測り、主軸方位はN-28°-Wを示す。断面形は皿状を呈すると考えられる。底面はやや起伏があり、北から南へ緩やかに傾斜している。堆積土は2層からなり、1層はシルト質粘土、2層は粘土質シルトである。遺物は出土していない。



第243図 SD5 溝跡平面図・断面図

3) SD8 溝跡（第244・245図、図版74-6・7）

1区のN9-W42・43 グリッドに位置する。南西から北東へ直線的に延びる溝跡である。SD14、SK36と重複し、いずれより新しい。残存する規模は、長さ11.57m、上端幅48～91cm、下端幅39～65cm、深さ9～21cmを測り、主軸方位はN-62°-Eを示す。断面形は逆台形状を呈する。底面は平坦で、北東から南西へ傾斜している。堆積土は2層からなり、1層は砂質シルト、2層はシルトである。いずれもグライ化した層である。遺物は、18世紀中葉～後葉の大堀相馬産の碗、近代の陶器、瓦が出土しているが、いずれも細片のため図示し得なかった。



第244図 SD8 溝跡平面図



第245図 SD8溝跡断面図

4) SD9溝跡（第246図、図版75-1・2）

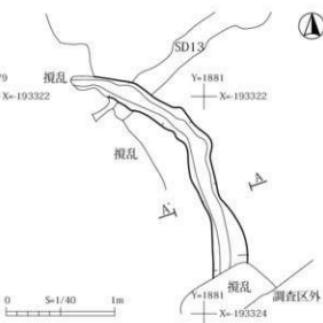
2区のN14-W33 グリッドに位置する。南西から北東へ直線的に延びる溝跡である。南端を擾乱により削平される。SX58 と重複し、SX58より新しい。残存する規模は、長さ 377cm、上端幅 33～45cm、下端幅 21～27cm、深さ 17～18cm を測り、主軸方位は N-37°-E を示す。断面形は逆台形状を呈する。底面は平坦である。堆積土は 2 層からなり、1 層は砂質シルトで、2 層はシルトで自然堆積層が被熱したものである。被熱範囲は、底面北側と、壁全体的に確認された。遺物は出土していない。



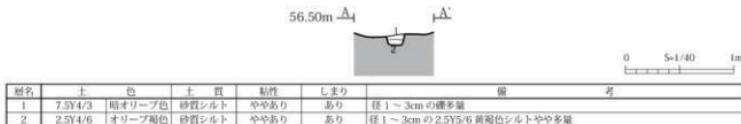
第246図 SD9溝跡平面図・断面図

5) SD12溝跡（第247・248図、図版75-3・4）

1区のN8-W42・43 グリッドに位置する。南から西へ弧を描いて延びる溝跡である。両端を、擾乱により削平される。SD13 と重複し、SD13より新しい。残存する規模は、総長 254cm、上端幅 10～32cm、下端幅 5～16cm、深さ 10cm を測り、主軸方位は中央より南側が N-23°-W、北側が N-59°-W、を示す。断面形は逆台形を呈する。底面に傾斜は見られなかった。堆積土は 2 層からなり、いずれも砂質シルトで 1 層は III 層に相当する。遺物は、瓦が出土したが、細片のため図示し得なかった。



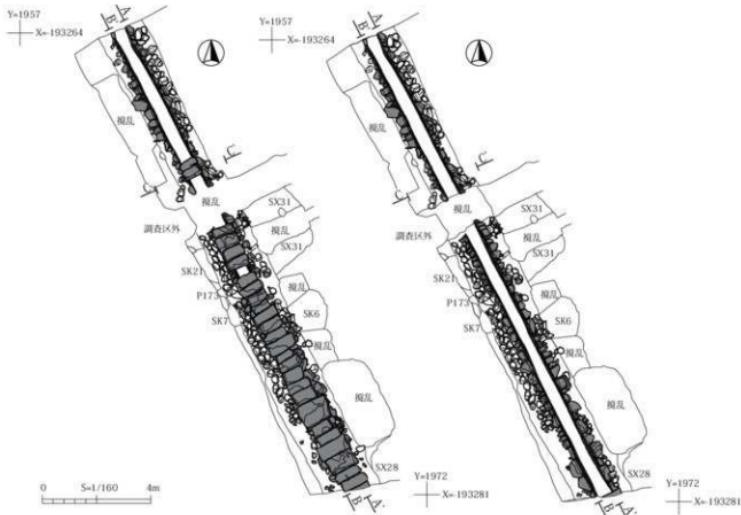
第247図 SD12溝跡平面図



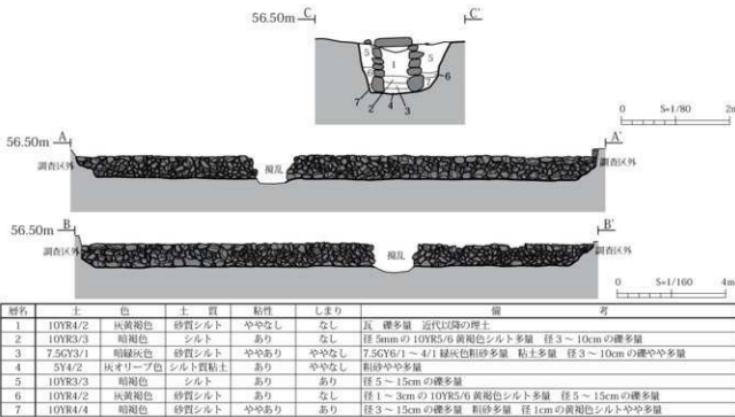
第248図 SD12溝跡断面図

6) SD19 石組溝跡 (第 249・250 図、図版 75-5・6)

2区のN12～13-W33～35グリッドに位置する。南東から北西へ直線的に延びる石組暗渠溝跡である。両端が調査区外へ延びる。SK6・7・7・21、SX31、P173と重複し、いずれよりも新しい。残存する規模は、長さ19.0mを測り、石組み内側の上端幅51～68cm、下端幅33～53cm、を測る。両壁には、長さ22～69cm、幅17～51cm、厚さ6～29cmの礫が平坦面や、一部加工された平坦面を内側に向けて、大型の礫を石組みの最上段と最下段に積み、その間を埋めるように小型の礫を不規則に積んでいる。この石組の上面には長さ64～73cm、幅29～89cm、厚さ15～20cmの長方形に加工された石蓋が設置されている。主軸方位はN-27°-Wを示す。掘り方の上端幅は142cm～203cm、下端幅88～149cm、深さ84～121cmを測る。断面形は逆台形を呈する。底面は北西から南東へ傾斜している。堆積土は7層からなり、1～4層は溝の中の堆積土、5～7層は裏込めである。当溝の上面を第二師団時の整地土が覆っていることから、明治初頭頃の石組暗渠溝跡と考えられる。遺物は出土していない。



第249図 SD19石組溝跡平面図

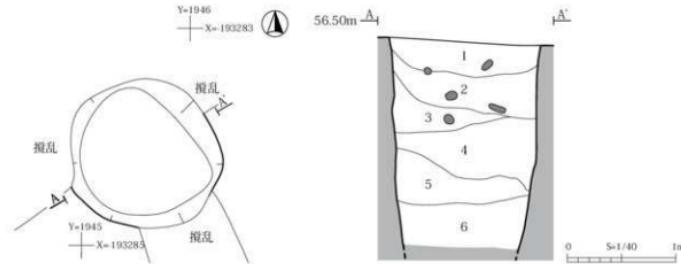


第250図 SD19 石組溝跡断面図・立面図

(4) 井戸跡

1) SE3 井戸跡 (第251図、図版76-1・2)

1区のN12-W36グリッドに位置する。素掘りの井戸跡である。調査面より約195cm掘り下げたところで、底部から湧水し、壁が崩落する危険があったことからそれ以上の掘り下げを中止した。残存する規模は、上端径133～144cm、下端径103～123cm、深さ195cm以上を測る。平面形は不整な円形で、断面形は筒形を呈する。堆積土は6層からなり、1・2・4・5層は砂質シルト、3・6層はシルト質砂である。遺物は、18世紀中葉～後葉の漁戸・美濃産陶器の瓶が出土したが細片のため図示しえなかった。

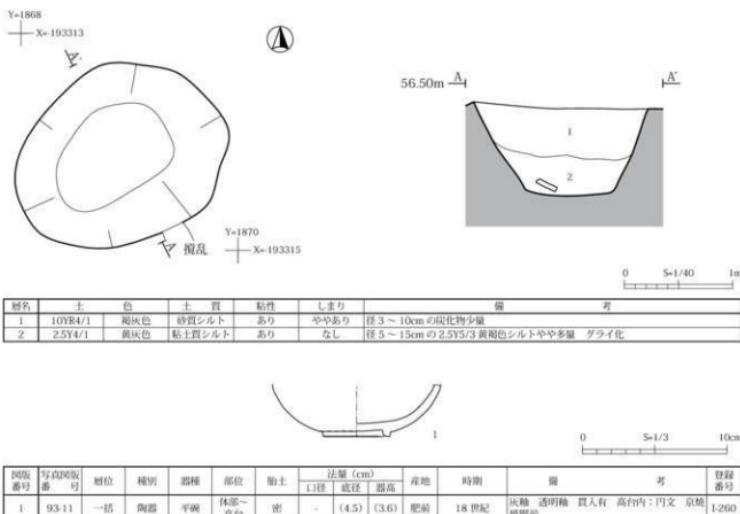


第251図 SE3 井戸跡平面図・断面図

第2節 扇坂トンネル部

2) SE4 井戸跡 (第252図、図版76-3・4)

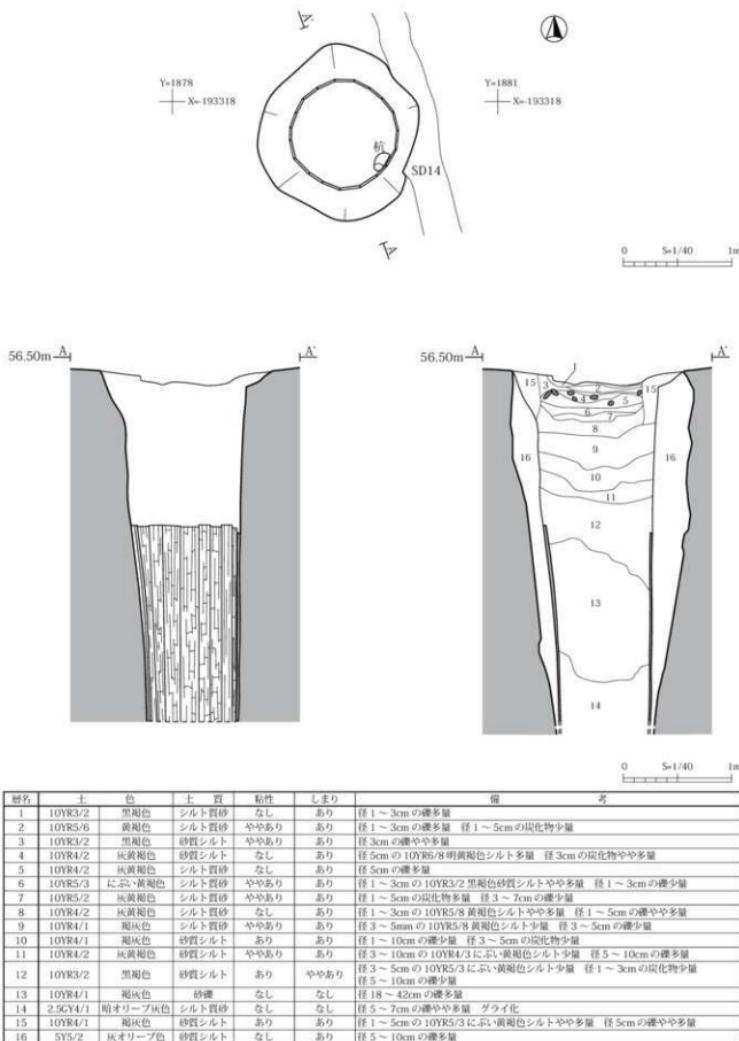
1区のN9-W44グリッドに位置する。残存する規模は、上端径162cm～200cm、下端径80～113cm、深さ87cmを測る。平面形は不整な楕円形で、断面形は逆台形を呈する。堆積土は2層からなり、1層は砂質シルト、2層は粘土質シルトでグラライ化している。遺物は、18世紀の肥前産陶器の碗が出土した。この陶器1点を図示した。



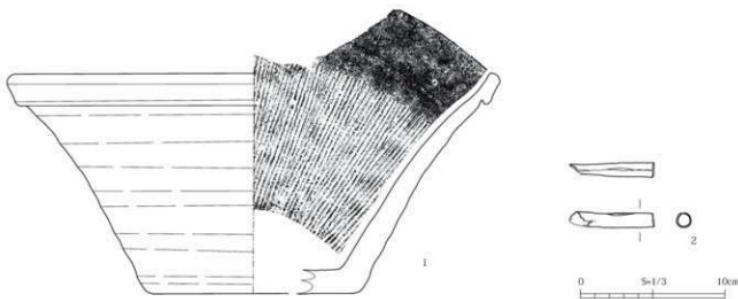
第252図 SE4 井戸跡平面図・断面図・出土遺物

3) SE5 井戸跡 (第253・254図、図版76-5～7)

1区のN9-W42・W43グリッドに位置する。井側に桶を使用した井戸跡である。調査時に、確認面より約140cmまで人力で掘り下げたが、造構壁崩落の危険があったため調査終了後、重機を使用して断ち割りを行なった。確認面から約330cmまで掘り下げたが底面は検出されなかった。SD14と重複し、SD14より新しい。残存する規模は、井戸側の径は98～103cmで、井戸側に長さ180cm以上、幅18cm、厚さ2.5cmの板材で作られた桶を使用している。掘り方の規模は、上端径149～164cm、下端径93cm、深さ327cm以上を測る。平面形は不整な円形で、壁は上端から下端に向かって徐々に狭まっている。堆積土は16層からなり、1・2・5～9・14層はシルト質砂、3・4・10～12・15・16層は砂質シルト、13層は砂礫層である。1～15層は、井側内の堆積で廃絶時に埋め戻された堆積土、16層は掘り方である。遺物は、2層から18世紀中葉～後葉の大堀相馬産の碗、小野相馬産の皿、肥前産磁器の皿、3層から瓦。4層から18世紀末～19世紀初頭の大堀相馬産の土瓶、5層から18世紀中葉～後葉の肥前産磁器の碗、6層から18世紀の肥前産磁器の碗、7層から18世紀中葉～後葉の大堀相馬産の碗、8層から18世紀の肥前産陶器の碗、9層から19世紀前半の瀬戸・美濃産磁器の碗が出土しており、そのうち19世紀前葉～中葉の在地産と考えられる擂鉢1点、煙管1点を図示した。



第253図 SE5 井戸跡平面図・断面図・立面図

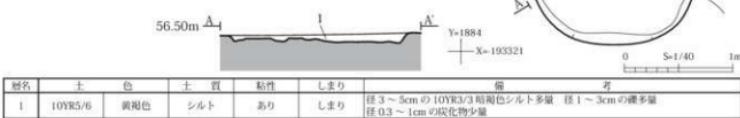


回収番号	写真実版番号	層位	種類	部位	胎土	法量(cm)	产地	時期	備考	登録番号
1	93-13	12層	陶器	擂鉢	上縁～底部	やや粗(34.0)(14.1) 15.2	有地	19世紀前葉～中葉	鐵輪 鐵口1条8本	I-243
2	93-12	9層	金屬製品	5.9	(1.0)	0.1	6.7	性質複合 灰色欠損 斧頭口直径1.0cm 真鍮なしし鋼製		N-009

第254図 SES 井戸跡出土遺物

4) SK34 土坑 (第255図、図版77-1・2)

1区のN8・9-W42 グリッドに位置する。P128と重複し、P128より古い。残存する規模は、長軸 166cm、短軸 164cm、深さ 10cm を測り、主軸方位は N-61°-E を示す。平面形は隅丸方形で、断面形は逆台形を呈する。底面は起伏が見られる。堆積土は、シルトの単層である。遺物は出土していない。



第255図 SK34 土坑平面図・断面図

5) SK36 土坑 (第256図、図版77-3・4)

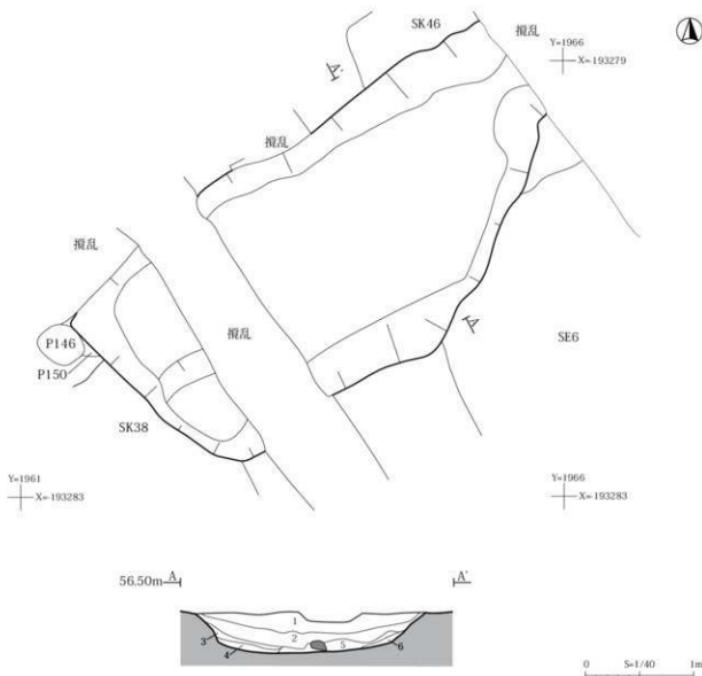
1区のN9-W42 グリッドに位置する。SD8と重複し、SD8より古い。残存する規模は、長軸 148cm、短軸 22cm、深さ 9cm を測り、主軸方位は N-68°-W を示す。平面形は不整形で、断面形は皿形を呈すると考えられる。底面は平坦である。また、底面より瓦が出土したが、意図的に据えられた様子が見られないことから、当遺構は廃棄土坑と考えられる。堆積土は、砂質シルトの単層である。遺物は、在地産の軟質施釉陶器、瓦が出土したが、いずれも細片のため図示し得なかった。

剖名	土色	土質	粘性	しまり	備考
1	5Y4/4	暗オリーブ色	砂質シルト	ややあり	あり 径1~3mmの白色粒子や多量 径0.5~1cmの炭化物少量 グライ化

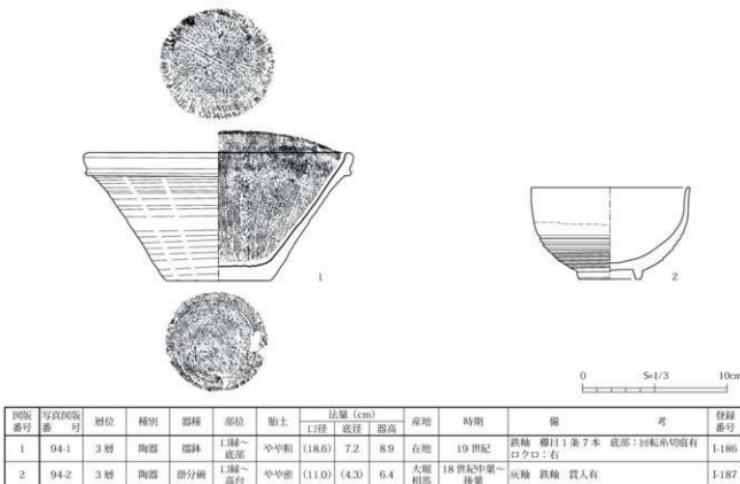
第256図 SK36 土坑平面図・断面図

6) SK37土坑(第257・258図、図版77-5・6)

1区のN12・I3-W34 グリッドに位置する。SE6、SK38・46、P146・150と重複し、いずれの遺構よりも新しい。残存する規模は、長軸 462cm、短軸 229cm、深さ 38cm を測り、主軸方位は N-49° E を示す。平面形は不整形で、断面形は逆台形を呈する。底面は平坦である。堆積土は 6 層からなり、1～5 層は砂質シルトで、6 層はシルトである。遺物は出土総点数 167 点を数え、その内訳は陶器 88 点、磁器 29 点、軟質施釉陶器 1 点、土師質土器 10 点、瓦質土器 3 点、土製品 2 点、瓦 34 点である。17世紀前葉～中葉の唐津の碗、18世紀中葉～後葉の京焼の碗、19世紀前葉～中葉の大堀相馬産の皿・土瓶、4層から 18世紀末～19世紀初頭の大堀相馬産の土瓶の蓋が出土した。そのうち、19世紀代の在地産と考えられる播鉢を 1 点、18世紀中葉～後葉の大堀相馬産の碗 1 点を示した。



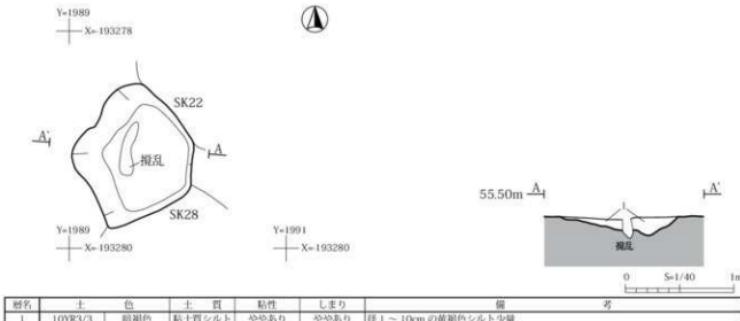
第257図 SK37 土坑平面図・断面図



第258図 SK37土坑出土遺物

7) SK44 土坑 (第259図、図版77-7・8)

1区のN13-W31・32グリッドに位置する。SK22・28と重複し、いずれの遺構よりも新しい。残存する規模は、長軸136cm、短軸110cm、深さ18cmを測り、主軸方位はN-14°-Eを示す。平面形は不整形で、断面形は西へ低くなっている。底面はやや起伏が見られる。堆積土は粘土質シルトの単層である。遺物は、18世紀中葉～後葉の大堀相馬産の碗、18世紀前葉～中葉の肥前産磁器の碗、19世紀前半の瀬戸・美濃産磁器の碗、在地産の土師質土器、瓦質土器、瓦が出土したが、いずれも細片のため図示し得なかった。

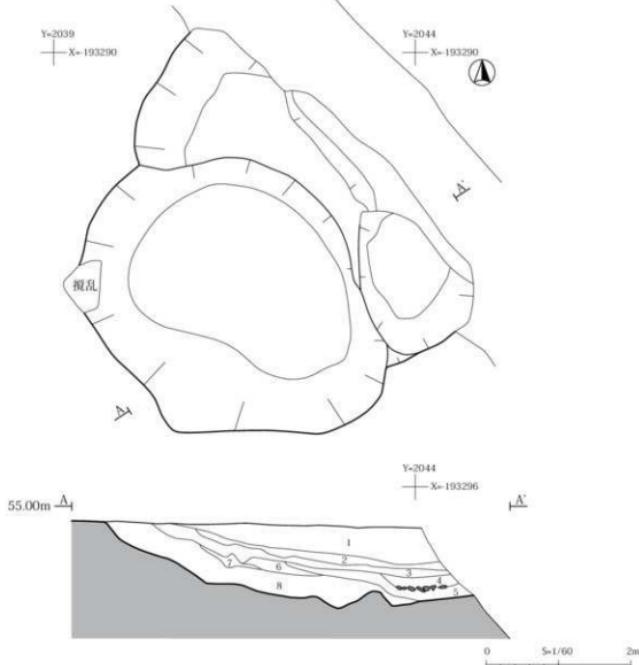


第259図 SK44土坑平面図・断面図

(5) 性格不明遺構

1) SX2 性格不明遺構 (第 260 ~ 267 図、図版 78-1 ~ 4)

2 区の N11・12-W26・27 グリッドに位置する。残存する規模は、長軸 552cm、短軸 463cm、深さ 109cm を測り、主軸方位は N-40°-W を示す。平面形は不整形で、断面形は逆台形を呈すると考えられる。底面は、複雑な起伏が見られる。堆積土は 7 層からなり、1 層は砂質シルトで、2 ~ 7 層はシルトである。遺物は出土総数 752 点を数え、内訳は陶器 345 点、磁器 261 点、軟質施釉陶器 34 点、土師質土器 26 点、瓦質土器 44 点、金属製品

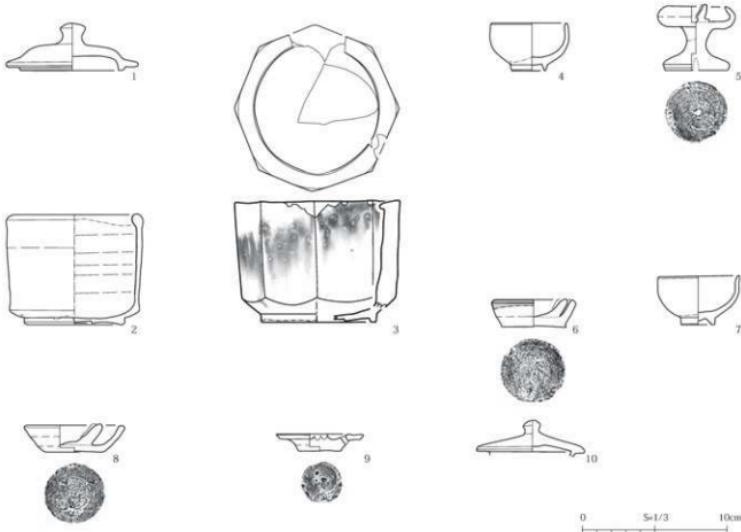


層名	土色	土質	粘性	しまり	備考
1	10YR6/8 明黄色	シルト	あり	あり	暗灰黄色質シルトや多量 程 5cm の礫少量
2	10YR3/3 暗褐色	砂質シルト	ややあり	ややあり	径 1cm の礫多量 程 1 ~ 4cm の炭化物少量 径 0.5 ~ 2cm の酸化鉄分少量
3	10YR4/3 にぶく黃褐色	シルト	ややあり	あり	径 0.3 ~ 1cm の塊状物少量 程 1 ~ 2cm の礫多量 径 3 ~ 5mm の炭化物少量
4	10YR3/4 暗褐色	シルト	あり	あり	径 0.5 ~ 2cm の炭化物分少量 径 0.5 ~ 1cm の炭化物少量 径 10 ~ 20cm の礫多量
5	10YR3/3 暗褐色	シルト	ややあり	ややあり	径 0.3 ~ 1cm の塊状物少量 径 2mm の褐色粒子微量 径 0.5 ~ 1cm の炭化物少量 径 0.5 ~ 2cm の酸化鉄分少量 径 1 ~ 2cm の礫少量
6	10YR4/2 灰褐色	シルト	あり	あり	径 0.3 ~ 1cm の炭化物少量 径 1 ~ 2cm の礫少量 径 0.5 ~ 2cm の酸化鉄分少量 径 2mm の塊状物少量
7	10YR4/4 褐色	シルト	ややなし	ややなし	径 0.5 ~ 2cm の炭化物多量
8	10YR4/4 褐色	シルト	ややあり	あり	径 5mm の明瞭褐色微量 径 1 ~ 4cm の礫少量 径 0.5 ~ 1cm の炭化物少量 径 2mm の褐色粒子微量

第 260 図 SX2 性格不明遺構平面図・断面図

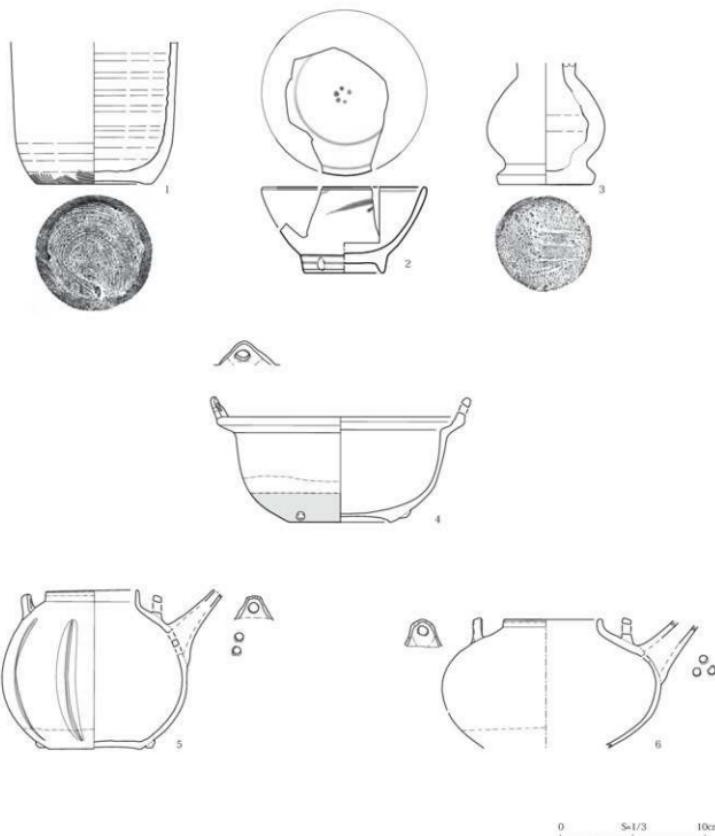
第2節 扇坂トンネル部

5点、石製品5点、土製品6点、瓦26点である。主に2・7層から多量の遺物が出土しており、陶器類を主体として廃棄された遺構と考えられる。主な出土遺物は、17世紀～18世紀の肥前産陶器の碗・皿・鉢等、17世紀後半～19世紀前半の瀬戸・美濃産陶器の碗・皿・瓶掛等18世紀の常滑産の甕、18世紀中葉～後葉の京焼の碗、18世紀後半～19世紀中葉の大堀相馬産の碗・皿・土瓶等、19世紀の堤焼の甕・擂鉢・灯明皿、17世紀後半～19世紀前半の肥前産磁器の碗・皿・土瓶等、19世紀の瀬戸・美濃産磁器の碗・皿、煙管の雁首、硯、砥石、土人形等が出土している。そのうち陶器19点、磁器11点、軟質施釉陶器1点、土師質土器2点、瓦質土器3点、金属製品3点、石製品2点、土人形1点を図示した。



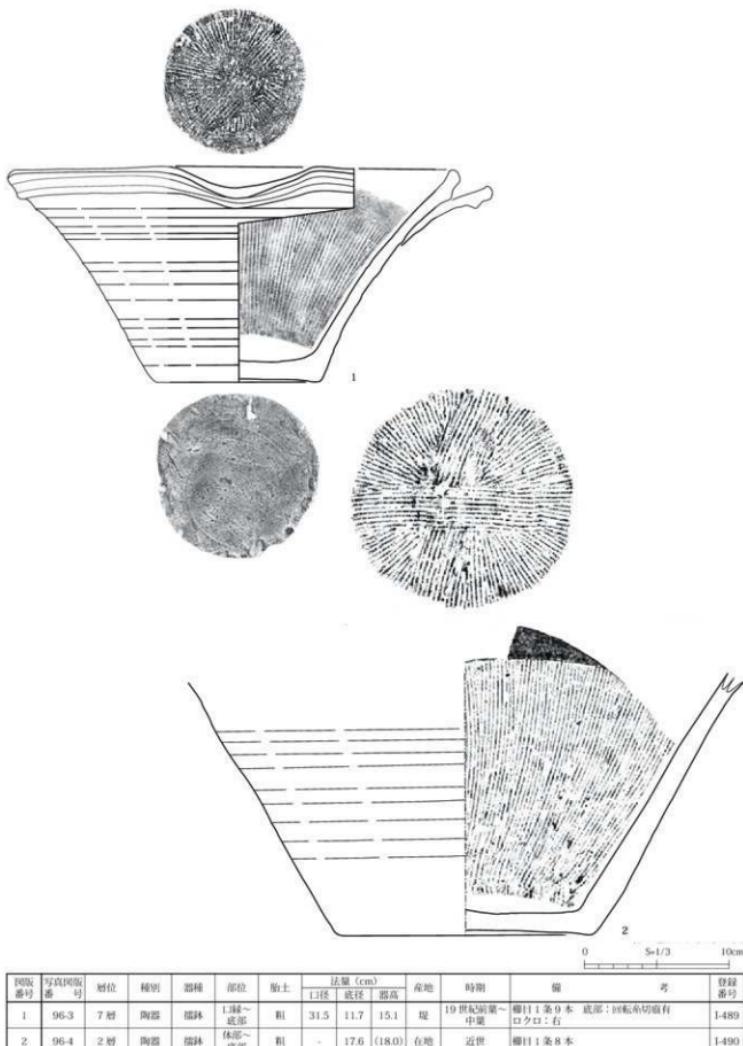
回収番号	写真回収番号	層位	種別	器種	部位	胎土	法線(cm)	产地	時期	備考	写真番号	
1	94-5	2層	陶器	蓋	つまみ ~底部	粗	9.1	7.2	3.3	堤	19世紀 灰釉	I-282
2	94-6	2層	陶器	香炉	口縁~ 高台	やや密	(9.4)	6.5	7.7	大堀 相馬	19世紀前葉～ 中葉 外面：黒釉	I-284
3	94-7	2層	陶器	香炉	口縁~ 高台	やや密	(11.4)	(7.9)	8.4	大堀 相馬	19世紀前葉～ 中葉 外面：白濁釉・青緑釉波しおけ 貫入有	I-285
4	94-8	2層	陶器	小杯	口縁~ 高台	やや密	5.4	2.5	3.3	大堀 相馬	19世紀 灰釉 貫入有	I-286
5	95-4	7層	陶器	束腰	上部~ 脚部	やや粗	4.0	4.3	4.5	大堀 相馬	19世紀 灰釉 底部：中心に丸い凹軸系切痕有 口クロ：左	I-287
6	95-2	7層	陶器	束腰	口縁~ 底部	粗	5.4	4.4	2.0	堤	19世紀 灰釉 底部：回転系切痕有 口クロ：右	I-288
7	94-9	2層	陶器	小杯	口縁~ 高台	密	5.5	2.4	3.4	大堀 相馬	19世紀 白濁釉	I-289
8	95-3	2層	陶器	印明皿	口縁~ 底部	粗	7.0	4.0	1.9	堤	19世紀 灰釉 油煙付着 底部：回転系切痕有 口クロ：右	I-302
9	95-6	2層	陶器	蓋	上部~ 底部	やや密	6.0	2.9	(1.2)	大堀 相馬	19世紀前葉～ 中葉 白濁釉一部付着 底部：回転系切痕有 口クロ：左	I-316
10	95-7	2層	陶器	土瓶(蓋)	つまみ ~口縁	やや密	7.5	(5.9)	(2.2)	大堀 相馬	19世紀中葉～ 緑釉	I-326

第261図 SX2 性格不明構出土遺物（1）

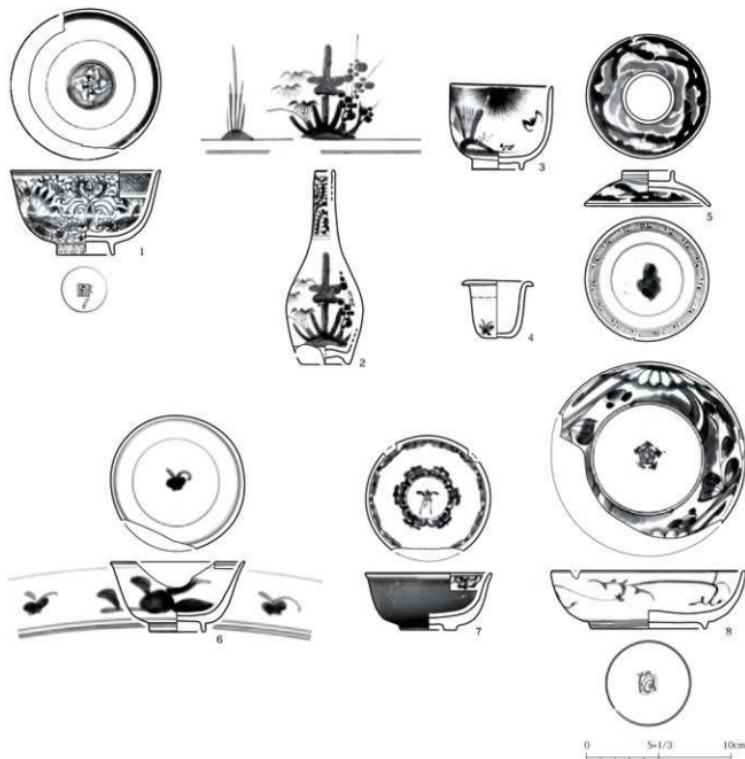


第262図 SX2 性格不明構出土遺物（2）

回数 番号	写真範囲 番号	層位	種別	器種	部位	胎土	法量(cm)	产地	時期	備 考	登録 番号
1	95-9	1層	陶器	甕	底面～ 底部	粗	(11.0) 8.2 (9.8)	堤	19世紀前葉～ 中葉	鉄輪 タタ辛目？ 底部：回転切妻有 口クロ：右	I-319
2	95-8	6層	陶器	広口瓶	上縁～ 高台	やや粗	(11.5) 5.5 5.9	瀬戸・ 奈良	19世紀中葉	灰輪 内輪：鉄頭船 外面：鉄頭船 陶器染付	I-320
3	96-1	2層	陶器	仙人器	底面～ 底部	粗	- 6.5 (8.4)	堤	19世紀	鉄輪 底部：砂付着 調整窓有	I-327
4	95-10	2層	陶器	罐	口縁～ 底部	やや密	18.0 (7.0) 8.7	大堀 相馬	19世紀前葉～ 中葉	鉄輪 ヘラケズリ調整 底部：焼付着 口クロ：右 三星	I-331
5	97-1	5層	陶器	土瓶	口縁～ 底部	やや密	6.5 6.4 11.0	大堀 相馬	18世紀後半～ 19世紀初半	白輪輪 灰入有	I-491
6	97-2	2層	陶器	土瓶	口縁～ 底部	やや密	(6.8) - (8.9)	大堀 相馬	19世紀中葉	外面：絆輪	I-492



第263図 SX2 性格不明構出土遺物(3)



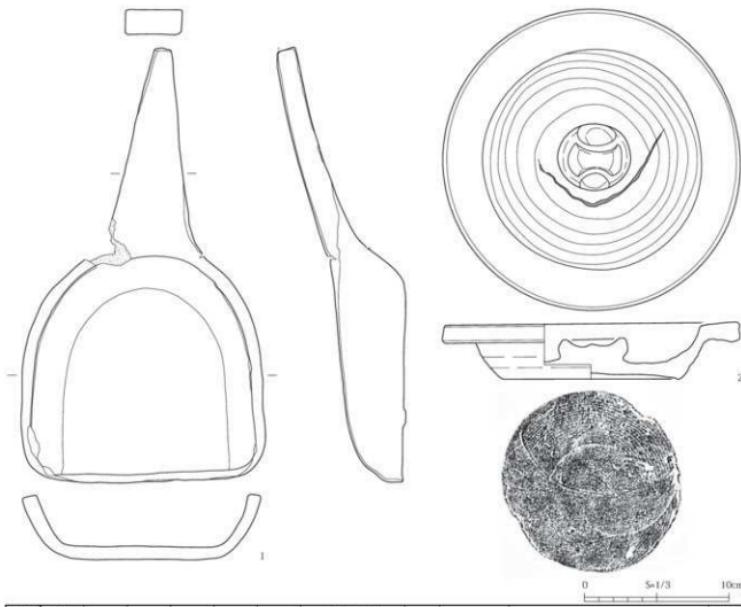
図版番号	写真図版番号	層位	種別	器種	部位	胎土	法量(cm)			产地	時期	備考	登録番号
							口径	底径	器高				
1.	97-3	2層	磁器	碗	口縁～高台	密	10.3	4.0	5.8	肥前	19世紀前葉～中葉	外面：染付有、團扇 内面：染付有 足込み：染付有、團扇 高台内：路有、燒綻 田有、燒綻留有	J-228
2.	97-6	2層	磁器	瓶	口縁～底部	密	1.4	3.5	13.5	肥前	19世紀	外面：繪唐草 松竹梅文 二重團扇	J-234
3.	97-4	7層	磁器	碗	口縁～高台	密	(7.3)	3.8	6.0	肥前	18世紀後葉～19世紀初葉	外面：團扇文 松文？	J-235
4.	98-4	2層	磁器	不明	口縁～底部	密	4.6	1.9	4.0	肥前	19世紀	外面：昆虫文？ 外面口縁下部：袖ぐい	J-248
5.	98-1	2層	磁器	蓋	上蓋～底部	密	-	8.5	2.5	肥前	19世紀前葉～中葉	外面：染付有、團扇 内面：雷文 團扇 二重團扇 見込み：染付有、二重團扇 燃綻留有	J-242
6.	97-5	2層	磁器	碗	口縁～高台	密	9.4	3.9	4.9	肥前	19世紀前葉～中葉	外面：染付有、團扇 二重團扇 足込み：染付有、二重團扇	J-243
7.	97-7	2層	磁器	碗	口縁～高台	密	8.7	3.8	4	肥前	19世紀前半	外面：團扇繪 内面：輪文 文見込み：「母」に輪文字	J-245
8.	98-6	2層	磁器	皿	口縁～高台	密	13.7	8.0	4.0	肥前	18世紀中葉～後葉	外面：唐文 團扇 二重團扇 内面：染付有、見込み：コンニャク印判五井花 高台付：滿華 團扇	J-247

第264図 SX2 性格不明遺構出土遺物(4)

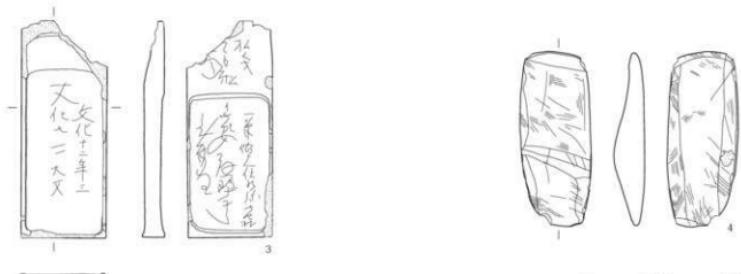


写真 番号	現地 番号	層位	種類	器種	部位	胎土	法量(cm)	産地	時期	備 考	登録 番号
1	98-5	7層	磁器	蓋	上部～ 底部	密	9.3 4.0 2.8	肥前	18世紀中期～ 後期	外面：梅文に鳥 見込み：梅文	J-251
2	98-2	2層	磁器	皿	口縁～ 高台	密	(14.0) 9.2 3.2	肥前	18世紀中期～ 後期	外面：唐草文 圓線～二重圓線 内面：雪輪文 見込み：染付有 二重圓線	J-252
3	98-3	2層	磁器	菊花皿	口縁～ 高台	密	(14.9) 9.0 5.1	肥前	18世紀後半	見込み：草花文 黒はじき 口縁部：口鍔	J-253
4	96-2	2層	軟質陶器	焰塔	口縁～ 底部	粗	- -	(4.9) 在地	近世	透印輪	I-335
5	95-5	2層	土師質 土器	かわらけ	口縁～ 底部	粗	10.6 6.4 2.0	在地	近世	底部：回転糸切痕有 ロクロ：右	I-301
6	95-1	土師質 土器	灯籠皿	口縁～ 底部	粗	5.9 2.6 1.5	在地	近世	油付有 底部：回転糸切痕有 ロクロ：右	I-334	
7	96-5	2層	瓦質土器	板邊り (蓋)	上部～ 底部	粗	20.7 15.3 5.9	在地	近世	内面：燐付蓋	I-558

第265図 SX2 性格不明遺構出土遺物（5）



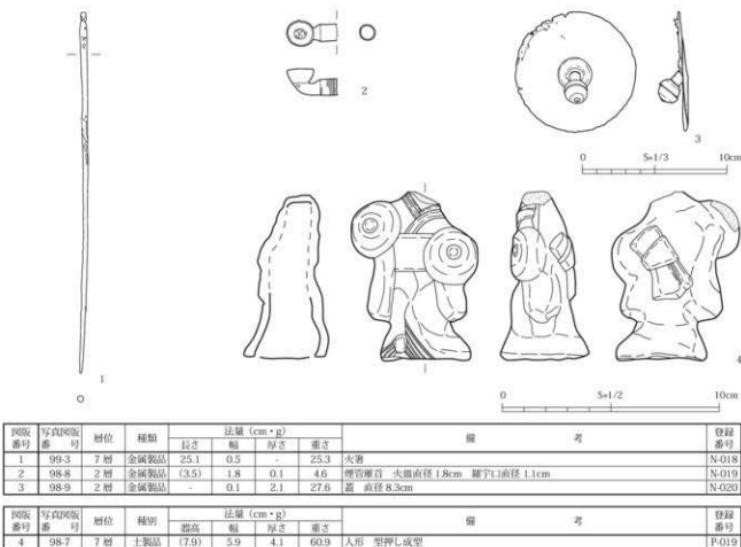
回収番号	写真回収番号	層位	種類	器種	部位	胎土	法量(cm)	備考	登録番号
							上径 厚さ 器高		
1	94-3	2層	瓦質土器	十進	上部～下部	粗	- - -	有地 近世 外曲：鉛頭切痕有 柄部：へらナデ 長さ 30.0cm 幅 16.9cm	I-279
2	94-4	7層	瓦質土器	火消し窓(縫)	上部～下部	粗	20.6 12.4 4.0	有地 近世 底部：回転系切痕有 口クロ：有	I-280



回収番号	写真回収番号	層位	種類	法量(cm・g)			石材	備考	登録番号
				長さ	幅	厚さ			
3	99-1	2層	石製品	15.0	5.9	1.1	粘板岩	刻字「文化十二年三」区画内径 5.3cm	K-001
4	99-2	2層	石製品	12.0	4.8	2.2	石英安山岩質凝灰岩	砥石 全面に使用面有	K-002

第266図 SX2 性格不明遺構出土遺物（6）

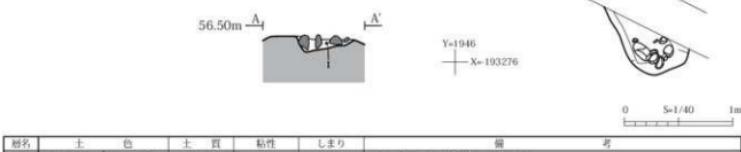
第2節 扇坂トンネル部



第 267 図 SX2 性格不明遺構出土遺物 (7)

2) SX3 性格不明遺構 (第 268 図、図版 79-1・2)

1 区の N13-W16 グリッドに位置する。南端付近を擾乱により分断されている。SK13 と重複し、SK13 より新しい。残存する規模は、長軸 294cm、短軸 54cm、深さ 14cm を測り、主軸方位は N-61°-W を示す。平面形は隅丸長方形で、断面形は西へ低くなっている。底面は平坦である。当遺構内から、長さ 2 ~ 27cm、幅 1 ~ 14cm、厚さ 2 ~ 15cm を測る礫を多量に検出した。堆積土はシルト質砂の単層である。遺物は 19 世紀前葉～中葉の瀬戸・美濃産磁器の碗等が出土しているが、細片のため図示し得なかった。



第 268 図 SX3 性格不明遺構平面図・断面図

3) SX13 性格不明遺構 (第269図、図版79-3～5)

1区の10・11-W40グリッドに位置する。被熱により暗赤褐色に変色し硬化した範囲とその周囲に炭化物が分布する範囲を確認した。掘り方は確認されず、自然堆積層が被熱した範囲と考えられる。南側を搅乱により削平される。確認された被熱範囲は、長軸67cm、短軸43cm、深さ2cmを測る。炭化物が分布する範囲は、長軸113cm、短軸83cm、深さ2cmを測る。被熱範囲と炭化物分布範囲には、各々図上においてトーンでその範囲を示した。遺物は出土していない。



第269図 SX13 性格不明遺構平面図・断面図

4) SX14 性格不明遺構 (第270図、図版79-6～8)

1区のN10-W39・40グリッドに位置する。被熱により暗赤褐色に変色し硬化した範囲のみを検出した。掘り方は確認されず、自然堆積層が被熱した範囲と考えられる。南西側を搅乱により削平される。確認された被熱範囲は、長軸47cm、短軸36、深さ6cmを測る。当被熱範囲から南へ73cmのところに、同じく被熱範囲のみを検出したSX15が位置するが、当遺構との関連性とは判然としない。被熱範囲は、図上においてトーンでその範囲を示した。遺物は出土していない。



第270図 SX14 性格不明遺構平面図・断面図

5) SX15 性格不明遺構 (第271図、図版80-1～3)

1区のN10-W39グリッドに位置する。被熱により暗赤褐色に変色し硬化した範囲のみを検出した。掘り方は確認されず、自然堆積層が被熱した範囲と考えられる。西側を搅乱により削平される。確認された被熱範囲は、長軸53cm、短軸22cm、深さ3cmを測る。被熱範囲から北へ73cmのところに、同じく被熱範囲のみを検出したSX14が位置するが、当遺構との関連性とは判然としない。被熱範囲は、図上においてトーンでその範囲を示した。遺物は出土していない。



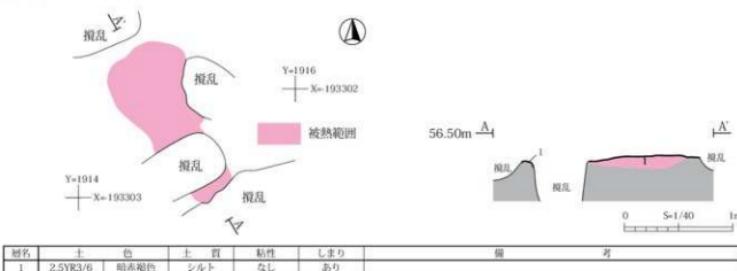
第271図 SX15 性格不明遺構平面図・断面図

6) SX16 性格不明遺構 (第272図、図版80-4～6)

1区のN10-W39グリッドに位置する。被熱により暗赤褐色に変色し硬化した範囲のみを検出した。掘り方は確認されず、自然堆積層が被熱した範囲と考えられる。南側と東側上端の一部を搅乱により削平される。確認された範囲は、長軸154cm、短軸80cm、深さ11cmを測る。被熱範囲は、図上においてトーンでその範囲を示した。遺

第2節 扇坂トンネル部

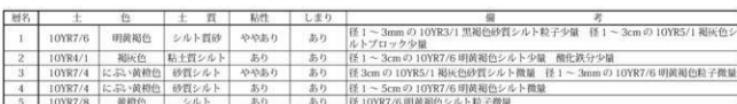
物は出土していない。



第272図 SX16 性格不明遺構平面図・断面図

7) SX17性格不明遺構 (第273図、図版80-7・8)

1区のN10・11-W40グリッドに位置する。大半を擾乱により削平される。残存する規模は、長軸195cm、短軸43cm、深さ9cmを測り、主軸方位はN-29°Wを示す。平面形は不整形で、断面形は逆台形を呈する。底面は平坦である。堆積土は5層からなり、1層はシルト質砂、2層は粘土質シルト、3・4層は砂質シルト、5層はシルトである。遺物は出土していない。

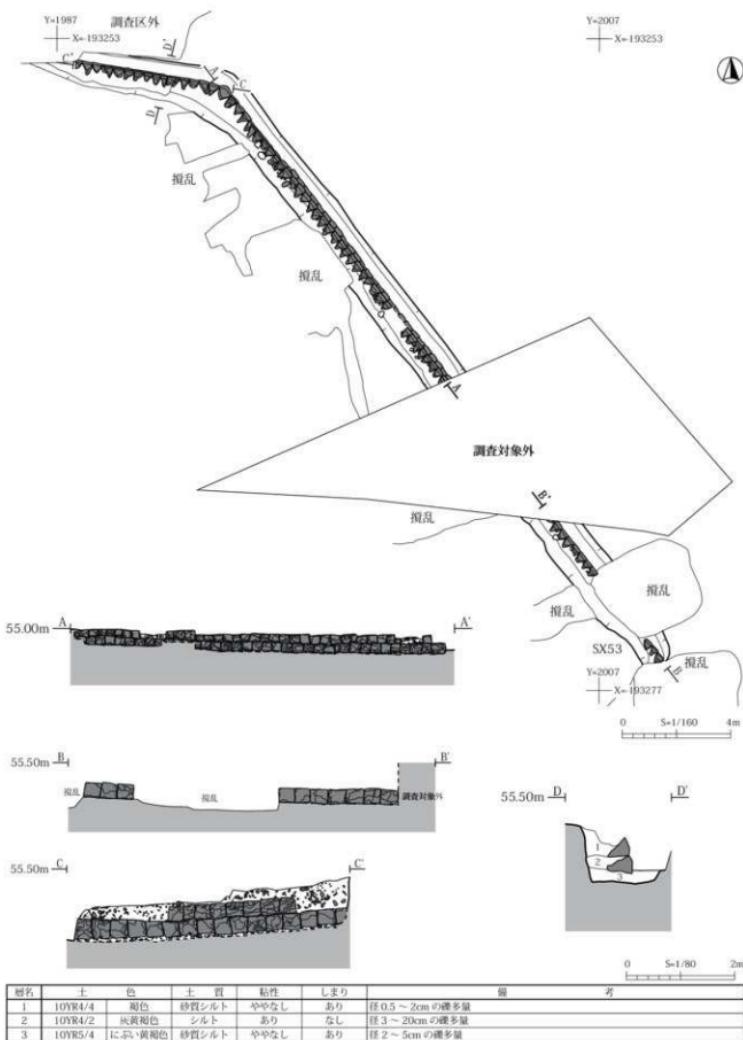


第273図 SX17 性格不明遺構平面図・断面図

(6) 石垣

1) 1号石垣 (第274図、図版81-1～6)

2区のN13～15・W30～32グリッドに位置する。II層直下より検出した。西側は調査区外へと延び、南端は擾乱に削平される。残存する規模は、総長32.06mを測り、主軸方位は南北に延びる部分がN-37°W、東西に延びる部分がN-80°Wを示す。石垣には、長さ0.28～0.53m、幅0.23～0.54m、厚さ0.29～0.33mを測る間知石を1段もしくは2段積み上げている。堆積土は3層からなり、1層は砂質シルト、2層はシルトとともに裏込めである。3層は砂質シルトで間知石を安定させるための掘り方である。遺物は裏込めより、19世紀中葉頃の大堀相馬産の土瓶、19世紀前葉～中葉の瀬戸・美濃産磁器の碗・皿が出土したが細片のため図示し得なかった。



第274図 1号石塙平面図・断面図・立面図

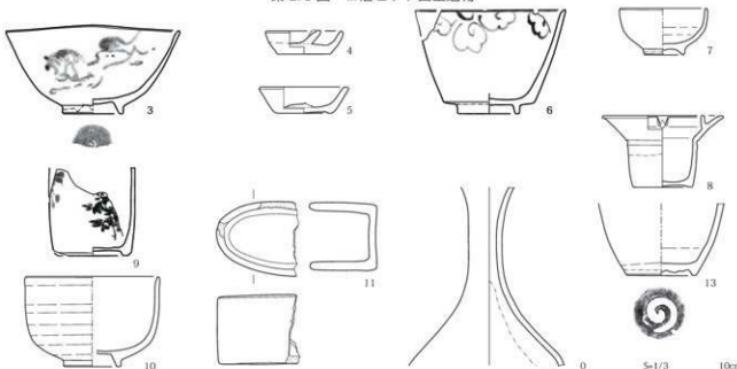
第2節 扇坂トンネル部

(7) III層出土遺物 (第275～278図、図版99-4～101-7)

III層からは、総点数1153点の遺物が出土しておりその内訳は、陶器365点、磁器688点、瓦質土器20点、土師質土器25点、土製品1点、石製品1点、金属製品6点、木製品3点、瓦43点、自然遺物1点が出土した。これらのうち、陶器11点、磁器8点、瓦1点、金属製品3点を図示した。眼鏡は「支柱式天狗眼鏡」で、1870年(明治時代初頭)頃のものと考えられる。扇坂トンネル部2区東端斜面地付近で出土した。

図版番号	写真版番号	遺物名	部位	説明	初期年	法量 (cm・g)	備考	登録番号
1	99-4	P23	2層	永樂通宝	1408	外径: 2.3 穿孔: 0.6 重さ: 2.5		N-011
2	99-5	P87	1層	宋通元宝	960	外径: 2.4 穿孔: 0.6 重さ: 3.1		N-013

第275図 III層ピット出土遺物



図版番号	写真版番号	グリッド	種別	器種	部位	胎土	法量 (cm)	備考	登録番号	
3	99-6	N1213 W29	陶器	瓶	口縁～ 高台	やや粗 目隠し	1.23 (4.2)	6.2 大堀 相馬	19世紀前葉～ 中葉 灰釉 製造地 走馬文	I-499
4	100-4	N14- W28	陶器	灯明	底部	粗	5.4	3.7 1.6 堤	19世紀 灰釉	I-547
5	100-5	N14- W32	陶器	灯明	底部	粗	6.2	3.8 1.8 堤	19世紀 灰釉 底部: 砂付着	I-583
6	100-1	N14- W32	陶器	瓶	口縁～ 高台	やや粗	10.5	4.2 7.2 大堀 相馬	18世紀後半 灰釉 製造: ロクロ: 右	I-608
7	99-9	N15- W30	陶器	小杯	口縁～ 高台	やや粗	6.1)	2.7 3.2 大堀 相馬	18世紀末～ 19世紀初葉 灰釉 ロクロ: 右	I-609
8	99-8	N15- W3031	陶器	油受け	底部	やや粗	8.5	4.1 4.9 大堀 相馬	19世紀 灰釉	I-610
9	100-9	N14- W29	陶器	燭台	底部	やや粗	-	5.0 (6.1) 美濃	19世紀中葉 灰釉 製造 距輪	I-535
10	99-7	N14- W28	陶器	瓶	口縁～ 高台	やや粗	(9.3)	(4.1) (6.3) 大堀 相馬	19世紀前葉～ 中葉 灰釉 貢入有	I-618
11	100-2	N14- W29	陶器	質置	底部	やや粗	(5.4)	(5.5) (4.8) 小野 相馬	18世紀中葉～ 後葉 灰釉 貢入有 底面: 布目	I-632
12	100-3	N13- W28	陶器	瓶	体部	密	-	(12.3) 肥前 18世紀 灰釉		I-633
13	100-6	N14- W31	陶器	猪口	体部～ 高台	粗	-	(5.0) (5.1) 肥前 18世紀? 灰灰釉 釘引き タタミ付け: 砂付着		I-564

第276図 III層出土遺物 (1)

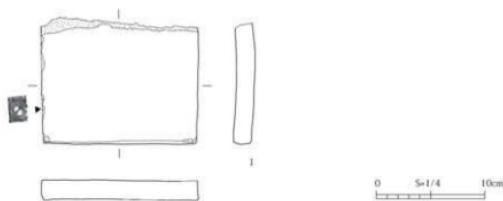


0 5×1/3 10cm

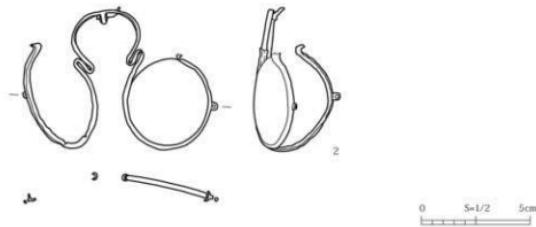
図版番号	写真出版号	グリッド	種別	器種	部位	胎土	法量(cm) 寸径 底径 器高	产地	時期	備考	写録番号
1	101-2	N12-W38	磁器	碗	体部～高台	密	- 3.9 (3.2)	瀬戸・美濃	19世紀前葉～中葉	外面：染付有・草文・二重周縁 見込み：染付有・團紋	J-165
2	100-12	N9-W41	磁器	碗	口縁～高台	密	12.2 4.5 5.1	肥前	18世紀	染付有・團紋・蛇の目輪割ぎ 見込み：コンニャク印押五瓣花・二重周縁	J-220
3	100-7	N14-W29	磁器	ミニチュア	上部～底部	密	1.8 1.2 1.4	肥前	近世	蓋・白絵・花文	J-405
4	100-8	N14-W30	磁器	紅皿	口縁～高台	密	4.4 1.4 1.3	瀬戸・美濃	19世紀前葉～中葉	外面：染付有	J-406
5	101-4	N15-W29	磁器	輪花皿	口縁～高台	密	(14.2) 7.7 (4.2)	肥前	18世紀後葉	外側：唐草文・團紋・二重周縁 内面：唐草文 見込み：五瓣花・高台内：角柄端・團紋 使締印有 絞り付有・口縁5箇所有	J-439
6	101-3	N14-W22	磁器	碗	口縁～高台	密	10.2 4.0 6.2	肥前	19世紀	外側：斑文・二重周縁 内面：二重周縁・足 付有・足文・團紋	J-440
7	100-10	N13-W28	磁器	端反皿	口縁～高台	密	(9.6) (4.2) (5.2)	瀬戸・美濃	19世紀	白磁 畫刻有(梅花?)	J-441
8	101-1	N13-W28	磁器	碗	体部～高台	密	- 4.1 (10.0)	肥前	18世紀中葉～後葉	外側：染付有・波・人物・模印文・二重周縁 見込み：染付有・岩波文・團紋・絞り文? 繊細有	J-508
9	100-11	N14-W31	磁器	皿	口縁～高台	密	(12.4) (5.0) 3.4	波佐見	17世紀後葉～18世紀前葉	内面：染付有 外面：蛇の目輪割ぎ	J-521

第277図 III層出土遺物(2)

第2節 扇坂トンネル部



図版番号	写真図版番号	グリッド	種類	法量(cm)			備考	登録番号
				長さ	幅	厚さ		
1	101-5	N14-W33	平瓦	14.5	(11.1)	2.0	房幅(10.6cm) 諸幅(10.7cm) 刻印有	G-039



図版番号	写真図版番号	グリッド	種類	法量(cm・g)			備考	登録番号
				長さ	幅	重さ		
2	99-10	N14-W29	金属製品	~	~	~	15.6 眼鏡 レンズの厚み 0.2cm	N-028

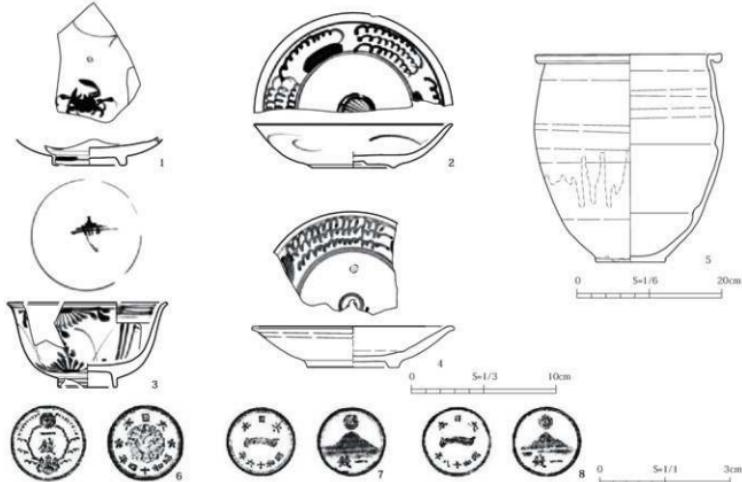


図版番号	写真図版番号	グリッド	銭銘名	初期年	法量(cm・g)			備考	登録番号
					外径	内径	重さ		
3	101-7	N14-W32	寛永通宝	1668	2.3	0.6	2.9	新寛永無背	N-024
4	101-6	N15-W31	寛永通宝	1636	2.4	0.6	3.6	古寛永無背	N-025

第278図 III層出土遺物(3)

4 II層出土遺物（第279図、図版102-1～103-6）

扇坂トンネル部1・2区において第二師団による土地造成の削平が著しく、盛土も全面にわたり行なわれておりII層から大量の遺物が確認された。また、第二師団の建物跡と考えられるものも多く見られ、そこから多くの遺物が確認された。これらの中から、19世紀代の陶器2点、磁器3点、及び銭貨3点を参考資料として図示した。また、第二師団の陶器6点を写真図版のみ掲載した（図版103-1～6）。堤焼の大甕（第279図-5）と銭貨3点（第279図-6～8）は、いずれも第二師団の便所基礎より出土した。



図版番号	写真図版番号	グリッド	種別	器種	部位	胎土	法量(cm)	産地	時期	備考	登録番号
						L径	底径	高さ			
1	102-2	N11-W38	磁器	皿	底部～高台	密	-	5.1 (2.0)	廟門・美濃	外面：團線 二重團線 内面：蟹文 見込み：染付有	J-159
2	102-5	N12-W37	磁器	皿	口縁～高台	密	(13.7)	5.6 (3.1)	廟門・美濃	外面：草文 内面：みじん唐草文 見込み：荒磯文 蛇の目円型高台	J-166
3	102-3	N12-W39	磁器	瑞反碗	底部	12.2	4.0	5.8	19世紀前半 中葉	外面：染付有 團線 二重團線 見込み：染付有 團線	J-182
4	102-4	N13-W30	陶器	皿	口縁～高台	や今和	14.0	6.4	2.8 廟門・美濃	透明釉 陶脂染付	J-269
5	102-1	N13-14-W35	陶器	甕	底部	粗	25.8	9.3	28.9 堀	なまこ種 切脚径 26.3cm	J-276
-	103-1	N9-W42	陶器	鉢	口縁～底部	密	14.9	8.3	6.1 -	近代 外面：里 高台内：「總陶」	J-270
-	103-2	N9-W42	陶器	鉢	口縁～底部	密	15.6	7.8	6.2 -	近代 内面：「I-29」 外面：星	J-271
-	103-6	N9-W42	陶器	皿	口縁～底部	粗	20.0	11.5	3.5 -	近代 内面：團線 外面：「歩二九」	J-272
-	103-3	N9-W42	陶器	皿	口縁～底部	密	18.8	11.1	3.1 金沢	内面：星・「I-29」 高台内：「THE IRON STONE CHINA Nipponkoushiyoutoku.co.ltd Kanazawa」の切印	J-273
-	103-4	N9-W42	陶器	皿	口縁～底部	密	19.3	11.3	3.3 -	内面：星 高台内：「總陶」	J-274
-	103-5	N9-W42	陶器	皿	口縁～底部	密	18.8	11.2	3.1 金沢	内面：星・「I-29」 高台内：「THE IRON STONE CHINA Nipponkoushiyoutoku.co.ltd Kanazawa」の切印	J-275
図版番号	写真図版番号	グリッド	銭貨名	初期年	法量(cm・g)	備考	登録番号				
					外径 空量	重さ					
6	102-6	N14-W32	古鉄	-	1.7	-	1.0 表：一鉄 菊 舟 裏：大日本 明和十四年	N-014			
7	102-7	N1314-W35	古鉄	-	1.6	-	0.6 表：一鉄 菊 富士山 裏：大日本 明和十六年	N-015			
8	102-8	N1314-W35	古鉄	-	1.6	-	0.6 表：一鉄 菊 富士山 裏：大日本 明和十八年	N-016			

第279図 II層出土遺物

第3章 自然科学分析

第1節 平成20年度自然科学分析

扇坂トンネル上段部の植物化石群

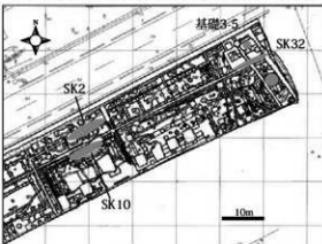
吉川昌伸・吉川純子（古代の森研究会）

1.はじめに

扇坂トンネル部1区は、仙台城二の丸の北方に展開する武家屋敷跡にある。広瀬川右岸には上位より青葉山段丘、上町段丘、中町段丘、下町段丘の4つの段丘面が形成され、本丸は青葉山段丘、二の丸は上町段丘、東丸は中町段丘と異なる段丘面に作られている。扇坂トンネル部1区は上町段丘面に位置し、近世は武家屋敷地、明治時代以降は主に軍用地として利用されていたことがわかつている。ここでは主に武家屋敷周辺の植生と生業、遺構の用途や堆積環境などを明らかにすることを目的に、花粉化石、珪藻化石、植物珪酸体化石、大型植物化石の植物化石群の調査を行った。

2. 試料と方法

なお、各地点のセクション図や堆積物の記載については以下では示さないので関係する章を参照されたい。扇坂トンネル部1区より検出された多くの遺構内堆積土は、武家屋敷地の造成にあたり、人為的に動かされた整地土である 第280図 扇坂トンネル部1区の分析試料採取位置。このため、分析試料の選定にあたっては、調査所見にもどづき原位置が維持されていると推定された土壤を選別した。SK2・10・32は大型の廐棄土坑の可能性が考えられたため、また基礎3-5は第二師団のトイレ跡と考えられたため、今回それらの土壤を採取し分析を行なった。



a) 花粉分析

花粉化石群の調査は、SK10の3試料、SK32の2試料、SK2の5試料である。花粉化石の抽出は、試料約2~4gを秤量し体積を測定後に10%KOH(湯煎約15分)、傾斜法により粗粒砂を取り除き、48%HF(約15分)、重液分離(比重2.15の臭化亜鉛)、アセトトリス処理(濃硫酸1:無水酢酸9の混液で湯煎5分)の順に処理を行った。なお、粗粒な植物遺体を多く含むNo.10についてはKOH処理後に250μmの篩で取り除いた。プレラバート作製は、残渣を適量に希釈しタッヂミキサーで十分攪拌後、マイクロビペットで取り重量を測定(感量0.1mg)しダ

No.	遺構	層位	遺物	花粉分析	貝類分析	大型植物化石	植物珪酸体
1	SK10	7層	近世	○	○		
2	SK10	8層	“	○	○		
3	SK10	10層	“	○	○		
4	SK32	1層	18~19世紀中葉	○			
5	SK32	2層	18~19世紀中葉	○			○
6	SK2	1層	18~19世紀中葉	○	○		
7	SK2	2層	“	○	○		
8	SK2	3層	“	○	○		
9	SK2	7層	“	○	○		
10	SK2	8層	“	○	○		
15	基礎3-5	堤防内部土底面 (トイレ跡)	明治期			○	

第12表 扇坂トンネル部1区分析試料のリストと項目

リセリンで封入した。また、堆積物の性質を調べるために、有機物量、泥分（シルト以下の細粒成分）、砂分量、及び生葉の指標となる微粒炭量について調査した。有機物量については強熱減量を測定した。強熱減量は、電気マッフル炉により750°Cで3時間強熱し、強熱による減量を乾燥重量百分率で算出した。微粒炭量は、デジタルカメラでプレパラートの顕微鏡画像を取り込み、画像解析ソフトのImageJで75 μmより大きいサイズの微粒炭の積算面積を測定した。

b) 珪藻分析

珪藻化石群の調査は、SK10の3試料とSK2の5試料で行った。珪藻化石の抽出は、試料約1gをトルビーカーにとり、35%過酸化水素水を加えて加熱し、有機物の分解と粒子の分散を行う。反応終了後に、沈底法により水洗を5~6回行った。次に分散した試料を適当な濃度に調整し、十分攪拌後マイクロビペットで取りカバーガラスに展開して乾燥させる。スライドガラスにマウントメディア（封入剤）を適量のせ、これに先程のカバーガラスをかぶせ、加熱して封入剤の揮発成分を気化させて永久プレパラートを作成した。検鏡は1000倍の光学顕微鏡を使用して、珪藻殻が1/2以上残存したものについて同定・計数を行った。珪藻の同定および各種の生態情報は、Krammer & Lange-Bertalot (1986, 1988, 1991a, 1991b)、渡辺 (2005) を参考にし、古環境の復元のための指標としては小杉 (1988) と安藤 (1990) の環境指標種群や渡辺 (2005) の有機汚濁とpHなどを用いた。

c) 植物珪酸体分析

植物珪酸体分析はSK32の1~2層の2試料である。植物珪酸体化石の抽出は、試料約1gをトルビーカーにとり、過酸化水素水、6N塩酸、超音波処理の順に処理し、沈底法により10 μm以下の粒子を除去した。傾斜法により粗粒な粒子を除いた残渣を遠心管に移し、十分攪拌後マイクロビペットで取りカバーガラスに展開して乾燥させ、マウントメディアで封入してプレパラートを作製した。検鏡は1000倍の光学顕微鏡を使用して、主にイネ科機動細胞起源とイネ科短細胞起源珪酸体の同定・計数を行った。植物珪酸体の分類は近藤・佐瀬 (1986)に基づき、タケア科植物機動細胞珪酸体は杉山・藤原 (1986)、タケア科植物短細胞珪酸体は近藤・大滝 (1992) による。

d) 大型植物化石分析

試料は基礎3-5 (No.15) の堤焼窯内埋土の1試料である。堆積物は、細かい植物片を多く含む灰色シルトとなり、印刷物や微小な魚骨も混入する。処理は、堆積物50ccを0.25mm目の篩で水洗し、残渣から実体顕微鏡で同定可能な部位を選別し同定・計数した。

3. 結果

a) 花粉化石群

花粉分析試料の堆積物の特性を第13表に示す。堆積物は主に砂質シルトからなり、全般に無機物が卓越するがSK2の下部層では植物遺体がラミナ状に多く含まれる。

出現した分類群のリストとその個数を第14表に、主要花粉分布図を第281図に示す。出現率は、樹木は樹木花粉数、草本胞子は花粉胞子数を基準として百分率で算出した。なお、No.4は検出された樹木花粉数が60粒と少な

No.	通構	堆積物の特徴	砂	泥	強熱減量(有機物量)
1	SK10	灰オーリーブ色細粒砂質シルト	10.3	77.7	12.0
2		灰オーリーブ色細粒砂質シルト	26.4	60.1	13.5
3		暗オーリーブ色細粒砂質シルト	24.6	63.3	12.1
4	SK32	灰黄褐色細粒砂質シルト	24.1	64.9	11.0
5		灰黃褐色細粒砂質シルト	25.6	61.8	12.6
6	SK2	暗(灰色)~中粒砂質シルト	32.9	56.3	10.8
7		豊富な暗色細粒砂質シルト	31.4	58.1	10.5
8		オリーブ黒色~中粒砂質シルト	32.9	57.0	10.1
9		豊富な暗色細粒砂質シルト	29.7	61.0	9.3
10		暗オーリーブ色中~細粒砂質シルト、植物遺体層付に混入	18.9	54.6	26.5

第13表 扇坂トンネル部1区の花粉分析試料の堆積物の特性(重量%)

いが参考までに図示した。第281図のうちSK2については時間軸に沿って配列している。図表中で複数の分類群をハイフンで結んだのは、分類群間の区別が明確でないものである。また、図版に示したAFR.MY番号は単体標本の番号を示す。

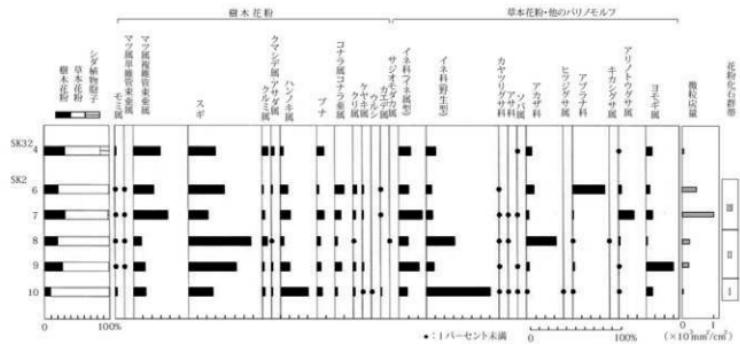
SK10は、産出した花粉は少ないが花粉膜の保存は比較的良好。少ない中ではイネ属型が比較的多く産出し、抽水植物のオモダカ属、ソバ属なども検出され、No.1と3からは回虫や鞭虫の寄生虫卵も僅かに検出される。花粉の保存が比較的良好こと、樹木花粉量が少ないとから短期間に埋積したと考えられる。

SK32では、No.4と5の2試料とも産出した花粉は少ないが組成は異なる。つまり、No.4ではマツ属複雑管束亞属やスギが比較的多く、ブナやクルミ属などを伴うが、No.5ではコナラ亞属が多くスギは検出されない。草本ではイネ属型やイネ科が産出し、No.4ではイヌタデ属、アカザ科などが比較的多く、No.5では抽水植物のオモダカ属やスプタ属も僅かに検出されている。花粉組成が異なるのはSX10と同様に堆積速度に関連している可能性がある。

SK2は主要樹木花粉の層位的産出傾向にもとづき、下位よりOJ-I、II、IIIの3つの花粉化石群帯を設定する。OJ-I (No.10)は、ハンノキ属とスギが比較的高率で出現し、マツ属複雑管束亞属やブナ、コナラ亞属、クリ属、モミ属、ウルシなどを伴う。草本ではイネ科(野生型)が高率を占め、イネ属型やソバ属などを伴う。微粒炭量は23 mmf/cm³と少ない。

OJ-II (No.8-9)は、スギが増加し高率で出現する。他にマツ属複雑管束亞属やクルミ属、コナラ属、ブナなどを伴い、ハンノキ属は低率になる。草本ではイネ属型が比較的高率を占め、イネ科(野生型)やアカザ科、ヨモギ属などを伴う。微粒炭量は221～261 mmf/cm³と幾分多くなる。

OJ-III (No.6-7)は、マツ属複雑管束亞属が増加し、スギと共に比較的高率で出現する。他にハンノキ属、コナラ亞属、クリ属、ブナなどを伴う。草本ではイネ属型、アブラナ科、アリノトウガサ属などが比較的多く産出する。微粒炭量は470～1023 mmf/cm³と多く含まれる。



第281図 畿坂トンネル部1区の主要花粉分布図
(出現率は樹木は樹木花粉数、草本・胞子は花粉胞子数を基数として百分率で算出した)

第14表 扇坂トンネル部1区より産出した花粉化石の一覧表

第1節 平成20年度自然科学分析

分類群	指標種	有機汚濁	pH	SK10					SK2				
				1	2	3	6	7	8	9	10		
海水～淡水生種													
<i>Camploctenus echesiae</i> Ehrenberg ex Kützing	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Nitzschia brevissima</i> Grunow	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-
淡水生種													
<i>Aulacoseira ambigua</i> (Grunow) Simonsen	N	ind	neut	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-
<i>Aulacoseira canadensis</i> (Hustedt) Simonsen	W	-	-	3	-	1	2	1	-	-	-	-	-
<i>Aulacoseira distans</i> (Ehrenberg) Simonsen	N	ind	acph	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-
<i>Aulacoseira</i> sp.	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Caloneis bacillaris</i> (Grunow) Cleve	W	ind	aliph	-	-	-	-	-	-	-	-	2	-
<i>Caloneis silicula</i> (Ehrenberg) Cleve	W	ind	aliph	-	-	-	1	-	-	2	2	2	-
<i>Caloneis</i> sp.	-	-	-	-	-	-	-	-	-	2	2	2	-
<i>Cratichnus cespitosus</i> (Kützing) D.G.Mann	W	-	-	4	-	4	-	-	-	-	-	-	-
<i>Cyanothea aspera</i> (Ehrenberg) Peragallo	O	ind	aliph	1	1	2	-	-	-	-	-	-	-
<i>Cymbella</i> sp.	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Diplosira elliptica</i> (Kützing) Cleve	Q	saxo	aliph	-	-	-	1	1	2	1	-	-	-
<i>Diplosira yanakaeensis</i> Horik. et Ohano	W	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-
<i>Diplosira</i> spp.	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Eunotia circumbohlei</i> Lange-Bertalot & Nöppel	W	-	acti	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Eunotia glauca</i> Meister	W	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-
<i>Eunotia minor</i> (Kützing) Grunow in Van Heege	W	saxo	neut	1	-	-	-	-	2	1	-	-	-
<i>Eunotia praesumpta</i> var. <i>falcata</i> (Ehrenberg)	O	ind	neut	-	-	-	-	-	-	4	-	-	-
Grunow	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Eunotia praesumpta</i> Ehrenberg	W	saxo	neut	-	-	-	3	3	3	10	-	-	-
<i>Eunotia</i> sp.	-	-	-	1	-	-	1	-	1	-	-	-	-
<i>Fragilaria</i> sp.	-	-	-	-	-	-	-	-	-	14	-	-	-
<i>Gomphonema acuminatum</i> Ehrenberg	O	ind	siph	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Gomphonema angustatum</i> Agardh	W	saxo	aliph	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Gomphonema parvulum</i> (Kützing) Kützing	W	ind	neut	-	-	-	2	-	-	-	-	-	-
<i>Gomphonema</i> sp.	-	-	-	-	-	-	-	-	-	3	-	-	-
<i>Gyrosigma cf. processum</i> Hustedt	W	ind	neut	6	-	5	-	-	-	-	-	-	-
<i>Hantzschia amphioxys</i> (Ehrenberg) Grunow in Cleve & Grunow	Q	ind	neut	7	-	3	144	59	82	32	25	-	-
<i>Navicula</i> sp. Kützing	Q	saph	aliph	-	-	-	3	10	9	-	-	-	-
<i>Navicula</i> spp.	-	-	-	-	-	-	1	-	1	-	-	-	-
<i>Neidium ampliatum</i> (Ehrenberg) Krammer	W	-	acph	2	1	-	3	1	2	-	-	-	-
<i>Neidium</i> sp.	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-
<i>Nothochlaena</i> sp.	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-
<i>Pinnularia acerosa</i> W.Smith	O	-	-	1	-	-	-	-	2	-	-	-	-
<i>Pinnularia appendiculata</i> (Agardh) Cleve	W	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-
<i>Pinnularia borealis</i> Ehrenberg	Q	ind	acph	-	-	-	15	38	25	3	3	-	-
<i>Pinnularia borealis</i> var. <i>undulata</i> Hustedt	W	-	-	-	-	-	2	-	-	-	-	-	-
<i>Pinnularia gibba</i> Ehrenberg	O	ind	acph	1	-	2	1	-	-	-	-	-	-
<i>Pinnularia interrupta</i> W.Smith	W	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-
<i>Pinnularia microstaura</i> (Ehrenberg) Cleve	W	saph	acti	1	-	3	-	-	1	-	-	-	-
<i>Pinnularia nodosa</i> (Ehrenberg) W.Smith	O	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-
<i>Pinnularia obscura</i> Krasske	W	-	-	-	-	-	1	1	4	-	-	-	-
<i>Pinnularia streptophite</i> Cleve	W	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-
<i>Pinnularia subcapitata</i> Gregory	Q	saph	acti	1	-	-	9	1	1	-	-	-	-
<i>Pinnularia viridis</i> (Nitzsch) Ehrenberg	O	ind	neut	6	-	17	2	2	5	1	-	-	-
<i>Pinnularia</i> sp.	-	-	-	2	-	1	4	2	2	-	-	-	-
<i>Rhopalostylis gibba</i> (Ehrenberg) O.Müller	W	ind	neut	-	-	-	-	-	4	-	1	-	-
<i>Rhopalostylis gibba</i> (Ehrenberg) O.Müller	W	-	-	-	-	-	-	-	7	1	-	-	-
<i>Selaphora americana</i> (Ehrenberg) D.G.Mann	W	-	-	1	-	-	-	-	1	-	-	-	-
<i>Selaphora leviensis</i> (Kützing) D.G.Mann	W	ind	neut	1	-	1	-	-	-	-	-	-	-
<i>Staurodes</i> sp.	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-
<i>Staurodes acuta</i> W.Smith	W	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Staurodes pheonicostratum</i> (Nitzsch) Ehrenberg	O	ind	neut	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-
<i>Sutirella angusta</i> Kützing	W	ind	neut	-	-	-	-	-	-	2	-	-	-
<i>Synedra ulna</i> (Nitzsch) Ehrenberg	W	ind	aliph	1	-	-	-	-	-	-	1	-	-
<i>Tryblionella leviiensis</i> W.Smith	W	saph	neut	-	-	-	-	-	1	1	-	-	-
細胞浮游植物													
浮游生物量 (× 1000 個/g)	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0
湖面沉降物中細胞總數 (N)	0	0	0	0	0	0	1	0	1	0	1	0	1
沉降地帶生物量總和 (O)	10	1	21	3	3	9	1	1	1	1	1	1	1
降域沉積物 (Q)	8	0	4	172	110	118	35	28	-	-	-	-	-
淡水底泥分布種 (W)	22	1	15	15	19	41	3	6	-	-	-	-	-
不定	3	1	2	11	10	9	4	5	-	-	-	-	-
群落密度	43	3	42	201	142	179	43	41	-	-	-	-	-
群落生物量 (× 1000 個/g)	22.7	1.3	19.9	97.3	62.2	92.5	20.6	29.5	-	-	-	-	-
付近湖面群落に見つかる有機汚濁指標数 (Dalgo)	-	-	-	48	47	47	-	-	-	-	-	-	-
saxo: 好酸性種, saph: 好鹼性種, ind: 混合性種, acti: 自動性種, neut: 中性種, aliph: 好アルカリ性種, alcal: 善アルカリ性種	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-

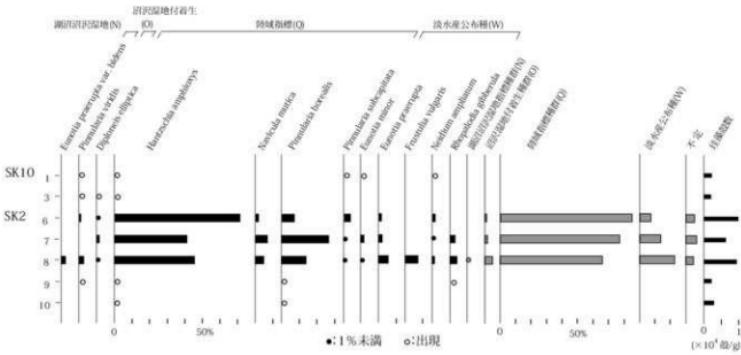
第15表 扇坂トンネル部1区の珪藻分析結果一覧表
(指標種群は安藤(1990)。有機汚濁とpHは渡辺(2005)に基づく)

b) 硅藻化石群

検出した珪藻化石群のリストとその個数を第15表に、珪藻化石群分布図を第282図に示す。出現率は珪藻殻総数を基準として百分率で算出した。

SK10では、No.1とNo.3からは少量検出されたが、No.2は稀である。No.1・3では、陸域指標種群の *Hantzschia amphioxys* や沼沢湿地付着生種群の *Pinnularia viridis*、淡水産分布種の *Craticula cuspidata*、*Gyrosigma cf. procerum*、*Aulacoseira canadensis* などが検出される。

SK2では、上部のNo.6～8からは比較的多くの珪藻化石が検出されたが、下部のNo.9～11は少ない。No.6～8では、陸域指標種群 *Hantzschia amphioxys* が高率で出現し、陸域指標種群の *Pinnularia borealis* や *Navicula mutica*, *Diploneis elliptica* を伴う。また、下部のNo.8では淡水産公衆種の *Frustulia vulgaris* や *Eunotia praerupta*, 湖沼沼澤地指標種群の *Eunotia praerupta* var. *bidens* が低率で出現するが上部では減少し、陸域指標種群の比率が高くなる。一方で、下部のNo.9～10では、珪藻化石が少ない中では *Hantzschia amphioxys* や *Pinnularia borealis* の陸域指標種群が多く検出されている。



第282図 扇坂トンネル部1区の主要珪藻分布図

c) 植物珪酸体分析

検出した植物珪酸体の分類群のリストとその個数を表 16 に、植物珪酸体分布図を第 283 図に示す。

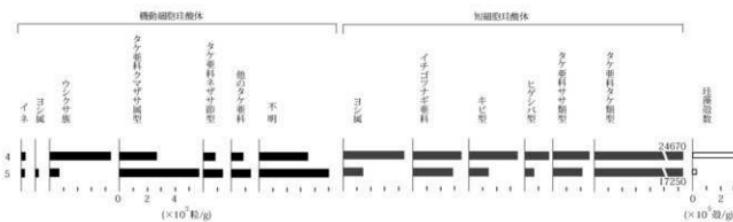
産出傾向は No.4 と No.5 で異なる。No.4 では機動細胞起源はウシクサ族が多く、他にクマザサ属型やネザサ節型、他のタケ亜科、イネなどからなり、短細胞起源ではタケ亜科タケ類型が多く出現し、ヨシ属やキビ型、イチゴナギサ科、レガシバ型、タケサ科ササ類型が輸出される。

No.5では、クマザサ属型が多くウシケサ族は少なく、短細胞起源のヨシ属やキビ型はNo.4と比べ少ない。イネの機動細胞起源はNo.4で530個/g、No.5で460個/g検出される。また、イネの機動細胞は他の穀類と同様に細胞は扁平で、No.4には*Magnolia campbellii*

Pinnularia viridis や *Pinnularia microstauron*, *Aulacoseira* などの珪藻化石が多く検出される。

分類	4	5
イネ科細胞壁蛋白質		
イネ	0.53	0.46
ヨシ属		0.46
ウシクサ族	8.81	1.44
タケ属(タマゴサ属型)	5.29	11.50
タケ属(タネサ属型)	1.76	2.88
他のクサ科属	1.76	2.88
不明	7.05	10.06
イネ科細胞壁蛋白質		
イネ	-	-
ヨシ属	8.81	2.88
イチゴナガサ科属	7.05	5.75
ホビ属	7.05	2.88
ヒゲンアワ属	3.52	1.44
タケ属(タマゴサ属型)	5.29	4.31
タケ属(タネサ属型)	24.67	17.25
(当該率)	24.6%	17.2%

第 16 表 SK32 遺構の植物珪酸体分析
結果一覧表 (単位は 1000 個/g)



第283図 SK32 遺構の植物珪酸体分布図

d) 大型植物化石群

基礎3-5(No.15)の堤焼甕内出土した大型植物化石は、イネの穎破片が最も多く、完形穎も出土した。イネのほかにはハギ属、イヌビエやモミ属葉片などを出土した。イネ以外は畠地内に生育していた植物と考えられる。遺構はトイレ遺構と推測されているが、消化器官を通過したような種実は確認されない。

4. 考察

a) SK2 と SK10 の堆積環境

SK2 遺構内の堆積環境は、じめじめした環境が優勢であったとみられる。つまり、SK2 は下部の No.9 ~ 10 では珪藻殻数が少ないと、その中では陸域指標種群の *Hantzschia amphioxys* が多く検出されている。さらに、上部の No.6 ~ 8 においても *Hantzschia amphioxys* や *Pinnularia borealis* などの陸域指標種群が 66 ~ 86% を高率を占める。陸域指標種群は「コケ類を含めた陸上植物の表面や岩石の表面、土壤の表層部など大気に接触した環境に生活する一群」(小杉, 1986) で他の生育地には出現しないか、出現しても主要でない (安藤, 1990) とされている。SK2 では陸域指標種群が多く占めるため、全般にじめじめした環境にあったとみられる。但し、No.8 層準では沼沢湿地付着生種群や淡水産公布種が比較的多く産出しているため、部分的に滞水域が形成されていたと推測される。なお、珪藻化石が比較的多く出現した層準の付着珪藻群集に基づく有機汚濁指数 (渡邊, 2005) は 47 ~ 48 の β 中貧水性水域を示すため、少し汚れた水質であったと考えられる。

SK10 土坑は東西 9.75m、南北 3m の近世の大型土坑で、下層は調査時に水成堆積の状況が考えられている。産出した珪藻化石は少ないが、10 層や 7 層からは沼沢湿地付着性種群の *Pinnularia viridis* や淡水産公布種の *Gyrosigma cf. procerum* などが検出されているため、滞水した環境にあったことは明らかである。また、花粉化石の保存状態が比較的良好な割合で花粉量が少ない産状から堆積速度が速いことが想定され、珪藻殻数も少ない状況であるため土坑は比較的短期間に埋積された推測される。一方で、イネ科 (イネ属型) 花粉が相対的に多く含まれている。イネの穎内にはイネ花粉が残留し洗米した水にはイネ花粉がふくまれることから、土坑内に生活排水が流入していた可能性も考えられる。

分類群	出土部位	No.15
モミ属	葉片	1
イネ	留完形 留破片	5 14
イヌビエ	Echinochloa crus-galli Beauvois.	2
アブラナ科	Cruciferace	1
ハギ属	Lespedeza	6
マメ科	Leguminosae	1
不明	Unknown	1

第17表 扇坂トンネル部1区基礎3-5(No.15)の甕内底面堆積物出土大型植物化石

第284図 扇坂トンネル部1区No.15甕内出土大型植物化石真写
1:モミ属,葉片;2:イネ,穎;3:イヌビエ,穎;4:マメ科,炭化種子;5:アブラナ科,種子;6:ハギ属,種子。
スケールは1mm

b) 扇坂トンネル部1区周辺の植生と生業

SK2 地点の花粉化石群の層位的変動に基づくと、近世（18世紀代～19世紀中葉）頃の周辺植生は、ハンノキとスギの時期、スギ林が優勢な時期、マツとスギの時期の3つの植生期に区分される。各植生期は花粉化石群帶のOJ-Ⅰ、Ⅱ、Ⅲにそれぞれ対応する。

ハンノキ属とスギの時期

1区の二の丸北方武家屋敷周辺には、針葉樹のスギやマツ、モミ属、落葉広葉樹のハンノキ属、クルミ属、クリ、コナラ亜属、ケヤキ、ウルシ、カエデ属などが分布していたとみられる。樹木花粉の比率が低いことや樹木花粉量が少ないとから、樹木は疎らに分布していた可能性が高く、その中ではスギやハンノキ属が目立って分布していたと考えられる。また、クリ属は2%と低率であるため、クリ花粉の飛散状況（荒川ほか、2008）からは100m程度離れたところにクリ個体が分布していた可能性がある。また、遺構内にはイネ科が繁茂し、浮葉植物のヒツジグサ属も生育していたと推測される。なお、イネ属型花粉も検出されているがSK2 遺構の性格が不明なため、遺構内に分布していたのか、あるいは周辺から飛来ないし流水により搬入されたかは定かでない。

スギ林が優勢な時期

この期には、ハンノキ属が縮小しスギ林が拡大したと考えられる。他の分類群には際立った変化はみられないことから、前時期と概ね同様であったとみられる。遺構内にはイネ科と、抽水植物のサジオモダカ属やキカシグサ属も分布していた可能性がある。但し、前述のように遺構の用途が不明なため搬入された花粉の可能性もある。

マツとスギの時期

この期にはスギが縮小し、マツが拡大したようである。他の分類群は、前時期と同様に際立った変化がないことから、概ね同様であったとみられる。

c) SK32 土坑の堆積層について

SK32 土坑は、東西約7m、南北約5.8mの大型の不整円形の土坑で、18世紀代から19世紀中葉頃と考えられている。検出した花粉化石群は少ないがNo.4の1層と、No.5の2層で組成が異なり、No.4ではマツ属複管束亜属やスギが比較的多く占めOJ-Ⅲと類似した花粉組成を示すのに対し、No.5ではコナラ亜属が多くスギは検出されていない。また、2試料ともイネ属型花粉が含まれ抽水植物を伴う。一方、植物珪酸体化石は、イネやヨシ属、ウシクサ族、タケ亜科クマザサ属型、タケ亜科ネザサ節型イネ機動細胞などが検出されているが、イネの保存状態は他の分類群の珪酸体より保存がよく、No.4では多量の珪藻化石が含まれる。こうしたことから、No.4が土坑内の堆積環境と周辺植生を反映していると推定される。また、花粉量が少ないわりに珪藻化石が多量に含まれることから、土坑内は滞水するものの埋積は速かったと考えられる。No.5は埋土に用いられた堆積物にイネ珪酸体や花粉などが付加された組成を呈していると考えられる。

引用文献

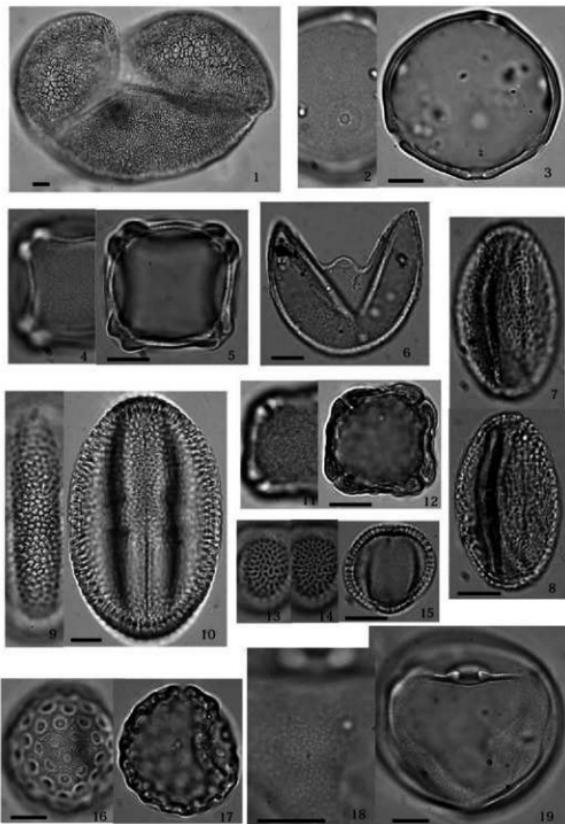
- 荒川隆史・吉川昌伸・吉川純子・門口実代. 2008. 繩文時代のクリ利用に関する調査と実験. 考古学ジャーナル 574, 23-27.
- 安藤一男. 1990. 淡水産珪藻による環境指標種群の設定と古環境復元への応用. 東北地理, 42, 73-88.
- 近藤謙三・大瀬美代子. 1992. タケ亜科植物葉身の短細胞珪酸体. 富士竹類植物園報告, 第36号, 23-43.
- 近藤謙三・佐瀬 隆. 1986. 植物珪酸体、その特性と応用. 第四紀研究, 25, 31-63.
- 小杉正人. 1986. 陸生珪藻による古環境の解析とその意義. わが国への導入とその展望. 植生史研究, 1号, 29-44.
- 小杉正人. 1988. 硅藻の環境指標種群の設定と古環境復元への応用. 第四紀研究, 27, 1-20.
- Krammer, K. and Lange-Bertalot, H. (1986, 1988, 1991a, 1991b) Bacillariophyceae. 1.Teil:Naviculaceae. 876p.; 2.Teil:Bacillariaceae, Epithemiaceae, Suriellaceae. 596p.; 3.Teil:Centrales, Fragilariaeae, Eunotiaceae. 576p.; 4.Teil:Achnanthaceae, Hritische Erganzungen zu Navicula (Lineolatae) und Gomphonema. 437p. In: Ettl, H., Gerloff, J., Heyning, H., Mollenhauer, D. (eds.) „Süsswasserflora von Mitteleuropa, Bd2/1-4. Gustav Fische, Stuttgart.

第1節 平成20年度自然科学分析

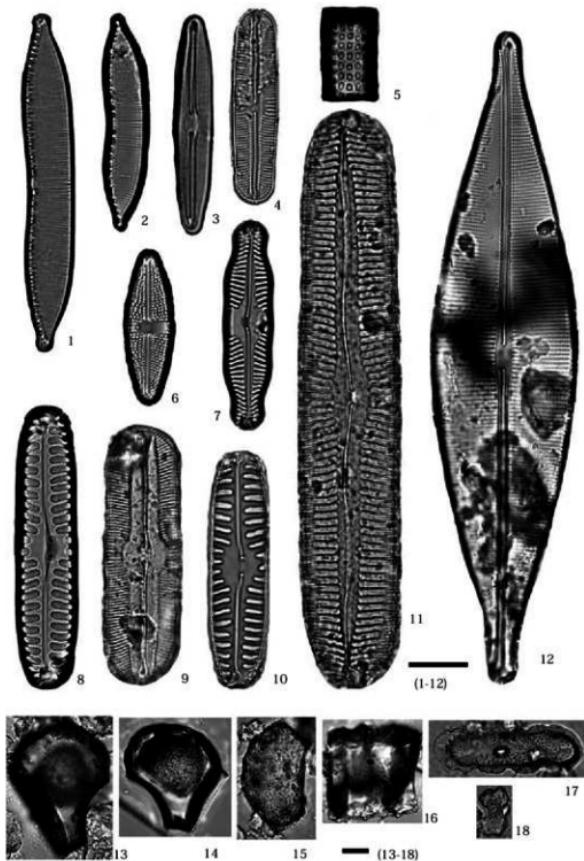
杉山真二。2000. 植物珪酸体 (プラント・オパール)。「考古学と植物学」(辻誠一郎編) 189-213. 同成社。

杉山真二・藤原宏志。1986. 機動細胞珪酸体の形態によるタケ亜科植物の同定・古環境推定の基礎資料として。考古学と自然科学, 19, 69-84.

渡辺仁治。2005. 淡水珪藻生態図鑑。666 p. 内田老鶴園, 東京。



第285図 犀坂トネル部1区より产出した花粉化石
1:モミ属(*Abies*) , 5, 2-3: クルミ属(*Juglans*) , 10, AFR.MY 1895. 4-5: ハンノキ属(*Alnus*) , 10, AFR.MY 1894.
6:スキ (*Cryptomeria japonica*) , 8, AFR.MY 1899. 7-8: ウルシ (*Rhus vernicifluus*) , 10, AFR.MY 1892.
9-10:ソノリ (*Fagopyrum*) , 3, AFR.MY 1897. 11-12:アリノトウガサ属 (*Halonigia*) , 7, AFR.MY 1900.
13-15:アブラナ科 (*Cruciferae*) , 6, AFR.MY 1901. 16-17:アカザ科 (*Chenopodiaceae*) , 8, AFR.MY 1898.
18-19:イネ科イネ属型 (*Oryza* type) , 10, AFR.MY 1893. スケール=10 μm.



第286図 磐坂トンネル部1区より産出した珪藻化石と植物珪酸体
1 Hantzschia amphioxys, no.6. 2 Hantzschia amphioxys, no.10. 3 Frustulia vulgaris, no.8.

4 Sellephora laevissima, no.1. 5 Aulacoseira canadiensis, no.1. 6 Navicula mutica, no.8.

7 Pinnularia interrupta, no.10. 8 Pinnularia borealis, no.10. 9 Sellaphora americana, no.1.

10 Pinnularia borealis, no.6. 11 Pinnularia viridis, no.1. 12 Craticula cuspidata, no.1.

13 イネ機動細胞, no.4. 14 イネ機動細胞, no.10. 15 タケ亜科クマザサ属型機動細胞, no.4.

16 タケ亜科ネササ節型機動細胞, no.4. 17 イチゴツナギ亞科短細胞, no.4. 18 キビ型短細胞, no.4.

スケール = 10 μ m

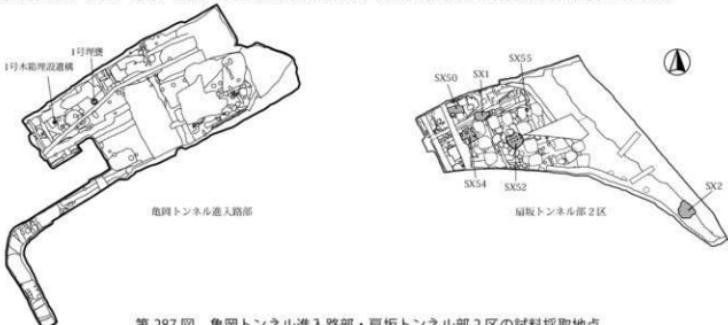
第2節 平成21年度自然科学分析

扇坂トンネル上段部と亀岡トンネル進入路部の植物化石

吉川昌伸・吉川純子（古代の森研究会）

1.はじめに

扇坂トンネル部2区の東部と、その2区の西側に位置する亀岡トンネル進入路部の主に植物化石について調査した。扇坂トンネル部2区は上位より2段目の上町段丘面に位置し、近世は武家屋敷地として利用されていたことがわかっている。本丸は最上位段丘面の青葉山段丘、二の丸は扇坂トンネル部2区と同じ上町段丘、東丸は下位面の中町段丘と異なる段丘面に作られている。ここでは主に仙台城二の丸の北方武家屋敷の植生と生業、遺構の用途などを明らかにすることを目的に、花粉化石、珪藻化石、大型植物化石、木材化石の植物化石と寄生虫卵の調査を行った。なお、花粉、珪藻、寄生虫卵は吉川昌伸が、大型植物化石と木材化石を吉川純子が行った。



第287図 亀岡トンネル進入路部・扇坂トンネル部2区の試料採取地点

2. 試料と方法

分析試料採取地点の位置を第287図に、試料のリストと分析項目を第18表に示す。花粉化石、珪藻化石、大型植物化石、寄生虫卵の調査は、扇坂トンネル部2区の近世のSX1、SX2、SX50、SX52、SX54の遺構内堆積物と、SX55の埋設桶の底部の堆積物、亀岡トンネル進入路部の近世（新期）の1号埋甕内と1号木箱埋設構内の堆積物で調査した。このうち1号埋甕は、堤焼の甕（高さ50cm、口径48cm）を伏せて埋設し、底部は焼成後に穿孔している。1号埋甕試料のNo.64・(71)は甕設置時の堆積物、No.63(70)はそれを覆う甕内堆積物である。1号木箱埋設構はSX8底面で検出した箱状木製品（25cm四方、高さ7cm）で、試料は遺構内の覆土である。なお、各地点のセクション図や堆積物の記載については以下では示さないので関係する考古の章を参照されたい。

木材化石は、扇坂トンネル部2区出土の木製品や加工木と自然木、亀岡トンネル進入路部出土の木製品と加工木について樹種同定を行った。

扇坂トンネル部2区より検出された多くの遺構内堆積土は、武家屋敷地の造成にあたり、人為的に動かされた整地土である。このため、分析試料の選定にあたっては、調査所見にもとづき元位置性が高いと推定された土壤を選別した。現場所見において、1号埋甕は水琴窟、SX55は便所跡、SX1・2・50・54は廐棄土坑の可能性が考えられていたため、またSX52、1号木箱埋設構はその性格は不明だが特徴的の遺構であったため各々の土壤を探取し分析を行なった。

地点	遺構	層位	時期	No. 花粉	No. 寄生虫卵	No. 貝殻	No. 種実	堆積物の特徴	砂	泥	強熱減量 (有機物量)
扇坂	SX1	4 層	10世紀前～中葉	57	68	66		暗褐色有機質粘粒砂質シルト	14.3	53.3	32.4
	SX2	2 層	10世紀中葉	58				暗褐色細粒砂質シルト	35.4	55.7	8.9
	SX50	2 層	10世紀前～中葉	59				に少く淡褐色細粒砂質シルト	20.5	69.5	10.0
	SX52	2 層	18世紀代	60				に少く淡褐色細粒砂質シルト	24.7	63.9	9.4
	SX54	2 層	10世紀中葉	61				褐色細粒砂質シルト	31.1	59.1	9.8
	SX55	3 層	10世紀前～中葉	62	69	67		淡灰褐色細粒砂質シルト	34.7	56.2	9.1
亀岡	1号埋甕	2層	19世紀前～中葉	63	70			黃褐色中～細粒砂質シルト	39.9	51.6	8.5
	1号埋甕	3層	19世紀前～中葉	64	71			淡灰褐色シルト質細粒砂	44.7	47.4	7.9
	1号木箱埋	1層	19世紀前～中葉	65				淡黃色シルト質中～細粒砂	62.9	29.4	7.7
	設置場										

第18表 扇坂トンネル部2区と亀岡トンネル進入路部における分析試料の堆積物の特性(重量%)

1) 花粉分析

花粉化石は、扇坂トンネル部2区の遺構内堆積物6試料と、亀岡トンネル進入路部の3試料で調査した(第18表)。花粉化石の抽出は、試料約1~3gを秤量し体積を測定後に10%KOH(湯煎約15分)、傾斜法により粗粒砂を取り除き、48%HF(約15分)、重液分離(比重2.15の臭化亜鉛)、アセトリシス処理(濃硫酸1:無水酢酸9の混液で湯煎5分)の順に処理を行った。プレバート作製は、残渣を適量に希釈しタッヂミキサーで十分攪拌後、マイクロビベットで取り重量を測定(感量0.1mg)しグリセリンで封入した。また、堆積物の性質を調べるために、有機物量、泥分(シルト以下の細粒成分)、砂分量、及び生業の指標となる微粒炭量について調査した。有機物量については強熱減量を測定した。強熱減量は、電気マップル炉により750°Cで3時間強熱し、強熱による減量を乾燥重量百分率で算出した。微粒炭量は、デジタルカメラでプレバートの顕微鏡画像を取り込み、画像解析ソフトのImageJで75 μmより大きいサイズの微粒炭の積算面積を測定した。

2) 寄生虫卵分析

寄生虫卵は、扇坂トンネル部2区のSX1(No.68:以下ではNo.を省略)とSX55(69)遺構内堆積物で調査した。試料約1gを2%KOH、48%HFの順に短時間処理し、残渣を適量に希釈しタッヂミキサーで十分攪拌後、マイクロビベットで取り重量を測定(感量0.1mg)しグリセリンで封入した。また、花粉分析に伴い出現した寄生虫卵についても同定、計数した。

3) 珪藻分析

珪藻化石の調査は、亀岡トンネル進入路部地点から出土した1号埋甕内堆積物の2層準で行った。珪藻化石の抽出は、試料約1gをトルビーカーにとり、35%過酸化水素水を加えて加热し、有機物の分解と粒子の分散を行う。反応終了後に、沈底法により水洗を5~6回行った。次に分散した試料を適当な濃度に調整し、十分攪拌後マイクロビベットで取りカバーガラスに展開して乾燥させる。スライドグラスにマウントメディア(封入剤)を適量のせ、これに先程のカバーガラスをかぶせ、加热して封入剤の揮発成分を気化させて永久プレバートを作成した。珪藻の同定および各種の生態情報は、Krammer & Lange-Bertalot (1986, 1988, 1991a, 1991b)、渡辺(2005)を参考にし、古環境の復元のための指標としては小杉(1988)と安藤(1990)の環境指標種群や渡辺(2005)の有機汚濁とpHなどを用いた。

4) 大型植物化石分析

SX55(67)遺構内の堆積物は、60ccを0.25mm目の篩で水洗し、残渣を実体顕微鏡で観察し同定可能な植物部位を選別し、同定・計数した。SX1(66)遺構の現地取り上げ試料は肉眼による同定を行った。

5) 樹種同定

樹種同定を行った試料は、扇坂トンネル部2区と亀岡トンネル進入路部の溝、土坑などから出土した杭、柱、棒、板材などの加工材と、桶、箸などの木製品、および木片や自然木である。樹種試料は、扇坂トンネル部2区40試料、亀岡トンネル進入路部33試料、計73試料である。出土木材からは直接剥刀を用いて横断面、接線断面、放射断面の3方向の薄片を採取し、ガムクロラールを用いてプレバートに封入し、生物顕微鏡で観察・同定した。

第2節 平成21年度自然科学分析

科名	学名	扇 岩						地 国		
		SX1	SX2	SX30	SX52	SX54	SX55	1号理標	1号木箱 理設置	65
S7	58	59	60	61	62	63	64	65		
木本										
モミ属	Abies	1	3	2	1	5	1	3	8	-
ツガ属	Tsuga	-	-	-	1	1	-	-	1	-
マツ属 单球被重垂属	Pinus subgen. Haplopyton	-	-	-	3	2	-	-	-	-
マツ属 植物被重垂属	Pinus subgen. Diplopyston	11	60	45	45	68	17	75	73	-
マツ属 (Unknown)	Pinus (Unknown)	1	2	-	-	-	1	-	-	-
コウヤマキ属	Sciadopitys	-	-	-	-	-	1	-	1	-
スギ	Cryptomeria japonica (L.f.) D.Don	75	117	88	50	96	35	176	165	-
イチイ科・ヒノキ科・イヌヤナ科	Taxaceae - Cupressaceae - Cephalotaxaceae									
イチイ型	Chamaecyparis type	1	2	-	-	-	-	-	-	-
タルソ属	Juglans	5	4	33	1	6	5	2	15	-
イヌクイデ	Carpinus tchonensis Maxim.	-	-	1	-	-	-	-	-	-
ケンジダ属・アサダ属	Carpinus - Ostrea	1	-	2	-	-	-	-	-	-
ハシミツ属	Corylus	-	-	4	-	-	-	-	-	-
カバノキ属	Betula	-	2	3	2	-	-	-	2	-
ハンノキ属	Alnus	1	1	6	-	2	-	2	2	-
ブナ	Fagus crenata Blume	1	1	21	-	2	-	5	3	-
イヌクイナ	Fagus japonica Maxim.	1	-	1	-	-	-	-	1	-
コナラ属コナラ属	Quercus subgen. Lepidobalanus	5	2	5	2	12	4	6	5	-
コナラ属アカシキ属	Quercus subgen. Cyclobalanopsis	-	-	-	-	-	1	-	-	-
クリ属	Castanea	185	33	-	11	41	173	6	3	-
ニレ属	Ulmus	-	-	1	-	-	-	-	-	-
ケヤキ属	Zelkova	3	2	2	-	3	1	1	3	-
エノキ属・ムクノキ属	Celtis - Aphananthe	-	-	-	-	-	-	-	1	-
ヤドリギ属	Viscum	-	-	-	-	-	-	-	-	-
サクランボ近縁種	c. Prunus	1	-	-	-	-	-	-	-	-
ウルシ	Rhus verniciflora Stokes	-	-	4	-	-	-	-	-	-
ヤマツルシ属	Rhus trichocarpa type	-	-	2	-	-	-	-	-	-
ヌルズ	Rhus	-	-	3	-	-	-	-	-	-
モルヒキ属	Betx	1	1	-	-	3	-	-	-	-
カエデ属	Acer	1	-	-	-	1	-	2	1	-
ウコギ科	Araliaceae	-	-	1	-	1	-	-	-	-
イボガノキ属	Ligustrum	-	-	-	-	1	-	-	-	-
トネリコ属	Fraxinus	1	-	-	-	-	-	-	-	-
草本										
イネ科 (イネ属型)	Oryzae (Oryza type)	6	4	47	1	3	2	6	14	-
イネ科 (野生型)	Oryzae (Wild type)	2	5	34	1	7	-	-	9	1
カラシナグサ科	Cyperaceae	1	3	-	-	-	-	-	4	-
ユリ属	Liliacae	-	-	-	-	-	-	-	1	-
ゼバシソ属	Houtan	-	-	-	-	-	-	-	-	-
アサ料	Comelinaceae	-	-	-	-	-	-	-	1	1
クワ科・イクサ科	Moraceae - Urticaceae	-	-	-	-	-	1	-	-	-
イヌマテ属	Persicaria	-	1	1	-	-	1	-	-	-
ソバ属	Fagopyrum	-	1	2	-	1	1	-	-	-
アカツキ科	Chenopodiaceae	1	2	18	3	3	4	3	4	-
ヒコ科	Amaranthaceae	-	1	-	3	-	1	-	-	-
他のカザワ・ヒコ科	Chenopodiaceae - Amaranthaceae	-	19	1	19	3	11	1	-	-
ナデコ科	Caryophyllaceae	-	4	4	3	10	3	-	1	-
キンポウゲ科	Ranunculaceae	-	-	2	1	-	-	-	-	-
アブクマ科	Araceae	-	12	1	3	4	19	17	3	-
バカリシ科	Rosaceae	-	-	-	-	-	-	1	1	-
フクシソウ属	Geraniaceae	-	-	-	-	1	-	-	-	-
アリソクサ属	Hedera	-	-	-	1	1	-	-	-	-
セリ科	Umbelliferae	-	-	1	-	1	-	-	-	-
オオバコ属	Plantago	-	-	-	-	-	-	1	-	-
オミエシ属	Patrinia	-	-	-	-	2	-	-	-	-
スズクリ属	Melothria	-	-	-	-	-	-	-	1	-
ヨモギ属	Artemisia	2	2	7	4	11	1	5	5	5
他のヨモギ属	other Tubuliflorae	-	2	-	2	6	-	1	2	-
タンポポ科	Liguliflorae	-	-	4	2	13	2	5	-	-
シダ植物										
ヒカゲノカズラ属	Lycopodium	-	-	1	-	-	-	-	-	-
ゼンショイ属	Osmunda	-	1	1	-	-	-	2	-	-
サンショウモモ	Salvinia natans (L.) All.	-	1	-	-	-	-	-	-	-
他のシダ植物群	other Pteridophyta	1	10	7	7	10	5	1	1	-
他のリンドウ科										
毒生植物										
回虫	Ascaris	-	-	1	-	-	1	-	-	-
鞭虫	Trichuris	1	1	-	-	-	-	-	-	-
毛滴虫	Capillaria	1	-	-	-	-	1	3	-	-
樹木粉和孢子	Arborescent pollen	295	231	224	116	244	239	278	284	0
日本木粉和孢子	Nonarboreal pollen	12	56	122	43	66	46	47	47	1
シダ植物孢子類	Fern spores	1	12	9	7	10	5	3	1	0
灰粉・孢子總数	Pollen and Spores	308	299	355	166	320	290	328	332	1
不明粉類	Unknown pollen	2	3	2	0	1	4	3	3	0
樹木粉量 ($\times 10^3$ 粒 / cm ³)		133.7	4.7	1.4	1.0	0.9	0.5	3.7	0.8	0
樹木粉量 (mmol / cm ³)		381	745	147	378	92	241	107	102	4

第19表 扇板トンネル部2区と亀岡トンネル部進入路より出現した花粉化石の一覧表

3. 結果

1) 花粉化石群

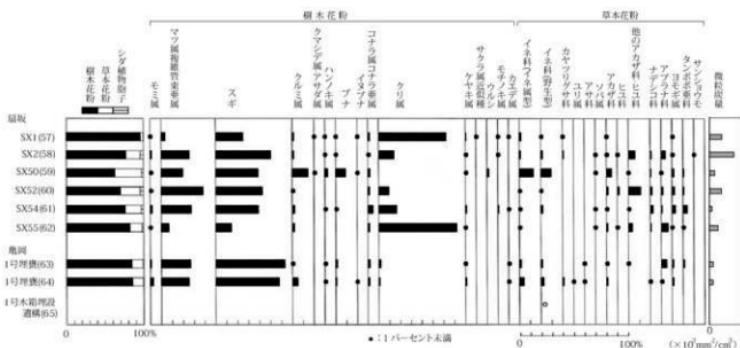
花粉分析試料の堆積物は、扇坂トンネル部2区は主に細粒砂質シルトからなり、全般に無機物が卓越するが、SX1では植物遺体が比較的多く含まれる(第18表)。また、亀岡トンネル進入路部試料は細粒砂質シルトないしシルト質中～細粒砂よりなり、扇坂より全般に粗粒である。

出現した分類群のリストとその個数を第19表に、主要花粉分布図を第288図に示す。出現率は、樹木は樹木花粉数、草本胞子は花粉胞子数を基準として百分率で算出した。図表中で複数の分類群をハイフンで結んだのは、分類群間の区別が明確でないものである。また、図版に示したAFR.MY番号は単体標本の番号を示す。

扇坂トンネル上段部では、花粉化石群の組成はSX1(57)・SX35(62)と、SX2(58)・SX52(60)・SX54(61)、SX50(59)の3タイプに区分される。SX1(57)・SX55(62)は、クリ属が63～72%と高率で出現し、スギやマツ属複雑管束亞属を比較的多く伴う。他の分類群は低率であるが、クルミ属やモミ属、コナラ亜属、ケヤキ属などが出現在、草本花粉は低率であるがその中ではアブラナ科がSX55(62)で幾分多い。SX2(58)・SX52(60)・SX54(61)では、スギ属が高率で出現し、マツ属複雑管束亞属を高率ないし比較的の高率で、クリ属を9～17%で伴う。他にモミ属やクルミ属、コナラ亜属などを伴う。草本ではイネ科(イネ属型)やソバ属、アカザ科・ヒユ科、アブラナ科などが出現している。SX50(59)は、スギが高率で出現し、マツ属複雑管束亞属とクルミ属、ブナを比較的の高率で伴う。またウルシが低率ながら出現し、草本花粉のイネ科(イネ属型と野生型)、アカザ科を幾分多く伴う。なお、虫媒種のクリ属を除く風媒種の出現傾向は類似し、スギが優勢でマツ属を比較的の高率で伴う。また、微粒炭はSX2(58)で745mm³/cm³と多いが、他の試料は92～381mm³/cm³とそれ程多いわけではない。

亀岡トンネル進入路部では、1号埋糞のNo.63とNo.64でおおむね同様な組成を示し、スギが高率に占め、マツ属複雑管束亞属を比較的の高率で伴う。他の分類群は低率で、クルミ属やコナラ亜属、ケヤキ属などや、草本のイネ科やアブラナ科などが出現し、アブラナ科はNo.63で幾分頻度が高い。

一方、No.65の箱状木製品の覆土から出現した花粉は稀である。



第288図 扇坂トンネル部2区と亀岡トンネル進入路部の主要花粉分布図
(出現率は樹木は樹木花粉数、草本・胞子は花粉胞子数を基準として百分率で算出した)

2) 寄生虫卵

SX1 (68) と埋設桶の SX55 (69) 遺構から出現した寄生虫卵は少ない。SX1 (68) では鞭虫卵が423個/gと毛細虫卵が423個/g、SX55 (69) は回虫卵が291個/gと毛細虫卵が97個/gであった。

他の試料では、花粉分析試料において SX2 (58) から鞭虫卵、SX50 (59) から回虫卵が僅かに検出されている。

3) 珪藻化石群

1号理査の設置時の堆積物であるNo.71試料から検出された珪藻殻数は少なく、陸域指標種群の Hantzschia amphioxys や淡水産公布種が僅かに出現している（第20表）。埋設内堆積物のNo.70試料においても珪藻殻数が多いわけではないが、その中では Hantzschia amphioxys, Navicula mutica, Pinnularia borealis の陸域指標種群が大半を占める。他に沼澤湿地付着生種群の Gomphonema acuminatum や Pinnularia viridis などが出現している。

分類群	指標種群	有機汚濁	pH	70	71
Cocconeis placentula var. evagyna (Ehrenberg) Grunow	W	sase	alph	1	-
Gomphonema acuminatum Ehrenberg	O	ind	alph	1	-
Compsomonas sp.	-	-	-	1	-
Hantzschia amphioxys (Ehrenberg) Grunow in Cleve & Grunow	Q	ind	neut	38	3
Navicula mutica Kutzng	Q	saph	alph	1	-
Navicula placenta var. obtusa Meister	W	-	-	-	1
Pinnularia borealis Ehrenberg	Q	ind	acph	3	-
Pinnularia intermedia W.Smith	W	-	-	1	-
Pinnularia schroederi (Hustedt) Kramer	W	-	-	-	1
Pinnularia viridis (Nitzsch) Ehrenberg	O	ind	neut	1	-
Pinnularia sp.	-	-	-	-	1
環境指標種群（個数）					
沼澤湿地付着生種群 (O)				2	0
陸域指標種群 (Q)				42	3
淡水産公布種 (W)				2	2
不定				1	1
珪藻殻数				47	6
珪藻殻数 ($\times 1000$ 個/g)				30.5	3.1
sase:好汎活性種, saph:好汚活性種, ind:広適活性種, alph:真酸性種, acph:好酸性種, neut:中性種, alph:好アルカリ性種, albi:真アルカリ性種					

第20表 1号理査より産出した珪藻分析結果一覧表

(指標種群は安藤 (1990), 有機汚濁と pH は渡辺 (2005) による)

4) 大型植物化石群

SX1 (66) から出土した植物はスギの球果と、可食または利用可能な植物のオニグルミ、クリ、モモ、ヤツバキであった（第21表）。クリの果皮は破片となっていた。オニグルミの食痕がある内果皮はネズミなどにかじられたものである。半分の内果皮は、食痕は確認できたが内部が風化して失われており、ヒトによる割跡は確認できなかった。また、モモとヤツバキは完形で出土した。

SX35 (62) から出土した可食または利用可能な植物は、カジノキ、ヤマゴボウ、オランダイチゴ属で、その他ではイグサ属、ノミツヅリ属やカタバミ属が出現している。

分類群		出土部位	SX1 (66)	SX55 (67)
可食植物				
オニグルミ	Juglans mandshurica Maxim. var. sachalinensis (Miyabe et Kudo) Kitamura	内果皮完形 内果皮食痕 内果皮半風化	2 6 (11)	- - -
クリ	Castanea crenata Sieb. et Zucc.	栗皮破片	(1)	-
カジノキ	Broussonetia papyrifera (L.) Vent.	内果皮	-	4 (1)
モモ	Prunus persica Batsch.	核	1	-
ヤツバキ	Camellia japonica L.	種子	1	-
ヤマゴボウ	Phytolacca esculenta van Houtte	種子	-	10 (6)
オランダイチゴ属	Fragaria	核	-	101
その他				
スギ	Cryptomeria japonica (Linn. fil.) D. Don	球果	11	-
イグサ属	Juncus	種子	-	1
イヌタデ属	Persicaria	果実	-	1
ノミツヅリ属	Arenaria	種子	-	2
カタバミ属	Oxalis	種子	-	1

第21表 扇坂トンネル部2区出土種実（() 内は割れた種実の個数）

5) 樹種同定

扇坂トンネル部2区と亀岡トンネル進入路部から出土した木材の樹種同定結果一覧を第22～23表に示す。扇坂トンネル部2区から出土した木製品と加工材の樹種の内訳は、スギ22点、ヒノキとマツ属複雜管束亞属が各3点、クリ、ヤナギ属、タケ亜科、カエデ属が各2点、カマツカ属、クワ属、マツ属、針葉樹が各1点であった（第24表）。亀岡トンネル進入路部から出土した木材の樹種は、クリ17点、スギ6点、ヒノキと針葉樹が各4点、アスナロ属とケヤキが各1点であった（第25表）。以下に同定された分類群の記載を行う。

マツ属複雜管束亞属（*Pinus subgen. Diploxylon*）：早材から晩材への移行は急で、晩材部が広く大きい垂直樹脂道が多い。放射組織の上下に放射仮道管があり、内壁が鋸歯状に不規則に突出している。放射柔細胞の分野壁孔は窓状である。また放射組織には水平樹脂道が含まれるものがある。

スギ（*Cryptomeria japonica* (Linn.fil.) D.Don.）：早材から晩材への移行は急で晩材部が厚い。分野壁孔はスギ型で横に長い格円形となり、1分野に2～3個ある。

ヒノキ（*Chamaecyparis obtuse* (Sieb. et Zucc.) Endl.）：早材から晩材への移行は急で、晩材部が少なく不明瞭である。分野壁孔はヒノキ型で、1分野に2個ある。

アスナロ属（*Thujopsis*）：早材から晩材への移行は急で、晩材部が薄い。分野壁孔はヒノキ～スギ型で、1分野に4個ある。

針葉樹：早材から晩材への移行は比較的急で樹脂道は確認できない。放射組織は柔細胞のみからなるようであるが、分野壁孔が溶けで確認できない。

No.	遺構	部位	時期	遺物番号	状況	分類群
1	SD2	4枚	19C前葉～中葉	-	加工材	スギ
2	SD18	1枚	19C前葉～中葉	517	木片	クリ
3	SD18	1枚	19C前葉～中葉	518-1	自然木	クワ属
4	SD18	1枚	19C前葉～中葉	604	板	スギ
5	SE1	2枚	18C～19C初頭	578-1	自然木	ヤナギ属
6	SE1	2枚	18C～19C初頭	568-1	板	ヤナギ属
7	SX1	4枚	19C前葉～中葉	565-1	板	マツ属複雜管束亞属
7-2	SX1	4枚	19C前葉～中葉	565-1	板	スギ
8	SX1	4枚	19C前葉～中葉	566-1	丸棒	スギ
8	SX1	4枚	19C前葉～中葉	566-2	丸材	カマツカ属
8	SX1	4枚	19C前葉～中葉	566-3	木片	ヒノキ
8	SX1	4枚	19C前葉～中葉	566-4	薄板	スギ
8	SX1	4枚	19C前葉～中葉	566-5	書片	スギ
8	SX1	4枚	19C前葉～中葉	566-6	書片	スギ
8	SX1	4枚	19C前葉～中葉	566-7	へら?	スギ
8	SX1	4枚	19C前葉～中葉	566-8	薄板	スギ
8	SX1	4枚	19C前葉～中葉	566-9	角材	スギ
9	SX1	4枚	19C前葉～中葉	567-1	板	ヒノキ
10	SX1	4枚	19C前葉～中葉	579-1	板	スギ
11	SX1	4枚	19C前葉～中葉	580-1	加工材	針葉樹
12	SX1	4枚	19C前葉～中葉	584-1	自然木	クリ
13	SX1	4枚	19C前葉～中葉	587-2	自然木	スギ
27	SX1	4枚	19C前葉～中葉	588-2	木片	タケ亜科
28	SX1	4枚	19C前葉～中葉	588-3	木片	タケ亜科
30	SX1	4枚	19C前葉～中葉	584-2	突出部分付部材	スギ
30	SX1	4枚	19C前葉～中葉	586-3	四角棒	ヒノキ
30	SX1	4枚	19C前葉～中葉	584-4	薄板	カエデ属
25	SX50	2枚	19C前葉～中葉	299	加工材	カエデ属
14	SX55	-	19C前葉～中葉	495	補底板	スギ
29	SX55	-	19C前葉～中葉	495	補側板	スギ
15	近世面直上	墨繪	19C中葉	215	杭	スギ
16	近世盛土	IV層	19C前葉～中葉	424	木片	スギ
17	近世盛土	IV層	19C前葉～中葉	425	杭	スギ
18	近世盛土	IV層	19C前葉～中葉	426	杭	スギ
19	近世盛土	IV層	19C前葉～中葉	427	杭	スギ
20	近世盛土	IV層	19C前葉～中葉	428	加工材	マツ属複雜管束亞属
21	近世盛土	IV層	19C前葉～中葉	429	木片	マツ属複雜管束亞属
22	近世盛土	IV層	19C前葉～中葉	430	杭	スギ
23	近世盛土	IV層	19C前葉～中葉	431	杭	スギ
24	近世盛土	IV層	19C前葉～中葉	432	杭	マツ属

第22表 扇坂トンネル部2区出土木材の樹種

第2節 平成21年度自然科学分析

No.	遺構	時期	遺物番号	状況	分類群
31	P09	18C～19C 初頭	4	丸柱材	クリ
32	P09	18C～19C 初頭	5	角材	針葉樹
33	P09	18C～19C 初頭	29	丸柱材	アスナロ属
34	P18	18C～19C 初頭	93	木片	スキ
35	P23	19C 初頭～中頭	146	穀板	スキ
36	P42	17C 前半～後半	94	丸柱材	クリ
37	P63	19C 初頭～中頭	158	丸柱材	クリ
38	P70	19C 初頭～中頭	144	削り材 1/4	クリ
39	SE5	18C～19C 初頭	151	削り材 1/2	クリ
40	SE5	18C～19C 初頭	147	削り材 1/2	クリ
41	SE5	18C～19C 初頭	148	削り材 1/2	クリ
42	SE5	18C～19C 初頭	149	組合わせ部材	クリ
43	SE5	18C～19C 初頭	150	板	ヒノキ
44	SE5	18C～19C 初頭	152	板	クリ
45	SE5	18C～19C 初頭	153	角材	クリ
46	SE5	18C～19C 初頭	154	削り材 1/2	クリ
47	P75	18C～19C 初頭	155	丸柱材	クリ
48	P76	18C～19C 初頭	156	削り材 1/4	クリ
49	1号本箱埋設構造	19C 初頭～中頭	160	箱体木製品	針葉樹
50	P83	18C～19C 初頭	157	机	クリ
51	S06	17C 前半～後半	95-1	板	スキ
52-1	S06	17C 前半～後半	96-1	書片	スキ
52-2	S06	17C 前半～後半	96-2	不明加工木製品	ケヤキ
52-3	S06	17C 前半～後半	96-3	板目板	スキ
52-4	S06	17C 前半～後半	96-4	書片	ヒノキ
52-5	S06	17C 前半～後半	96-5	書片	ヒノキ
52-6	S06	17C 前半～後半	96-6	薄板	針葉樹
52-7	S06	17C 前半～後半	96-7	跡り加工付き板	スキ
52-8	S06	17C 前半～後半	96-8	書片	ヒノキ
53	S09	18C～19C 初頭	91	丸柱材	クリ
54	S09	18C～19C 初頭	92	丸柱材	クリ
55	S09	18C～19C 初頭	145	丸柱材	クリ
56	SE1	19C 初頭～中頭	159	穀板	針葉樹

第23表 亀岡トンネル進入路部出土木材の樹種

分類群	楕	著等	板	棒	加工材	柱材	机	木片	自然木	計(40)
マツ属複数根束系属	-	-	1	-	1	-	-	1	-	3
マツ属	-	-	-	-	-	-	-	1	-	1
スキ	2	3	5	1	3	-	6	1	1	22
ヒノキ	-	-	1	1	-	-	-	1	-	3
針葉樹	-	-	-	-	1	-	-	-	-	1
ヤナギ属	-	-	1	-	-	-	-	-	1	2
クリ	-	-	-	-	-	-	-	1	1	2
クワ属	-	2	-	-	-	-	-	-	1	1
カマツカ属	-	-	-	-	-	1	-	-	-	1
カエデ属	-	-	1	-	1	-	-	-	-	2
タケモ科	-	-	-	-	-	-	-	2	-	2

第24表 扇坂トンネル部2区の木製品と加工材の利用樹種

分類群	楕	著等	箱等	板	部材	柱材	穀板	机	削り材	木片	計(33)
スキ	-	1	1	2	-	-	1	-	-	1	6
ヒノキ	-	3	-	1	-	-	-	-	-	-	4
アスナロ属	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	1
針葉樹	1	-	1	1	-	1	-	-	-	-	4
クリ	-	-	-	1	1	8	-	1	6	-	17
ケヤキ	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	1

第25表 亀岡トンネル進入路部の木製品と加工材の利用樹種

ヤナギ属 (Salix) : 年輪内に放射方向に数個複合したやや小さい道管が均一に分布し晩材部で急に径を減じる散孔材。道管の穿孔孔は單一で放射組織は単列で異性、道管放射組織間壁孔が大きい節状となる。

クリ (Castanea crenata Sieb. et Zucc.) : 年輪はじめに大きい道管が花弁状に配列し、急に径が減じて火炎状に配列する環孔材である。道管は單穿孔、放射組織は1～2列ではほぼ同性である。

ケヤキ (Zelkova serrata (Thunb.) Makino) : 年輪はじめにやや大きい道管が1～2列配列し、小道管が斜めから接線状に多数複合して配列する環孔材。穿孔板は單一で小道管にはらせん肥厚がある。放射組織は異性で1-4細

胞幅の紡錘形、上下端に結晶細胞がある。

クワ属 (*Morus*)：年輪最初に大きな道管が数列あり、徐々に径を減じながら単独ないし数個斜めあるいは塊状に複合しながらまばらに配列する環孔材。道管の穿孔板は單一で放射組織は異性で1-6細胞幅である。

カマツカ属 (*Poorthiaea*)：小さい道管が単独で年輪内に平等に散在する散孔材。道管は單穿孔で道管側壁は交互状で内壁にらせん肥厚がある。放射組織は異性で1-4細胞幅である。

カエデ属 (*Acer*)：やや小さい道管が単独ないし2-3個複合して年輪内に散在する散孔材。道管内壁にらせん肥厚があり、道管は單穿孔で放射組織は同性で1-5細胞幅。

タケ亜科 (Subfam. *Bambusoideae*)：散在する維管束は厚壁細胞からなる維管束鞘が一次木部と一次師部とを囲み、後生木部は一对の大型の道管からなる。

4. 考察

1) 扇坂トンネル部2区東部と龜岡トンネル進入路部の武家屋敷の植生と生業

扇坂トンネル部2区の花粉化石群の組成は、クリ属の出現傾向により3つに区分される。すなわち、クリ属がSX1(57)とSX55(62)では63~72%と高率に出現し、SX2(58)・SX52(60)・SX54(61)では9~17%と比較的高率で、SX50(59)は検出されずクルミ属が比較的高率に占める。また、各試料の風媒種の出現傾向は類似し、スギが優勢でマツ属複維管束亜属を伴う。クリ花粉はクリ純林内では樹木花粉を基数とした出現率は30%以上、林内に林縁から約25m以上の場所で約60%以上を占め、クリ林外で急減し樹冠縁から約20mで5%以下、約200mでは1%以下とクリ花粉の散布範囲が狭いことがわかっている(吉川、2011)。こうしたことから、SX1遺構とSX55埋設施設はクリの樹冠直下に、SX2-SX52-SX54各遺構からは約20m以内の範囲にクリ個体があったことが推定されるため、SX1とSX55の近傍に複数のクリ個体が植栽されていたと考えられる。一方、SX50遺構はSX1やSX54遺構に近接するがクリ花粉が検出されないことや、他の試料と花粉組成が異なりクルミ属やブナが比較的多いため2つの可能性が考えられる。つまり、SX1やSX54遺構とほぼ同じ時期である場合とそうでない場合で異なり、同時期の場合はSX50(59)の2層が秋頃から春先の間に堆積した可能性があり、時期が異なる場合は植生が異なることになる。

屋敷周辺ではスギやマツ属複維管束亜属が目立って分布し、モミ属やオニグルミ、コナラ亜属、ケヤキ属、サクラ属やモチノキ属、カエデ属なども植栽されていたようである。なお、SX50からはウルシ花粉が複数粒検出されているため、屋敷にウルシが植栽されていたと考えられる。さらにウルシは上段部のSK2遺構や下段部のSX37遺構からも出現していること、ウルシ花粉の散布範囲が狭いため、北方武家屋敷に多く植栽されていた可能性がある。龜岡トンネル進入路部では、埋甕内の組成に基づくと周辺には主にスギやマツ属複維管束亜属が分布し、モミ属、クルミ属、ケヤキ属、カエデ属などが植栽され、クリは2%以下と低率なため約100m以上離れた所に分布していたと推測される。

2) 龜岡トンネル進入路部の1号埋甕内の堆積環境

埋甕内堆植物から出現した珪藻化石は、複数の種の陸域指標種群を主体とし、淡水産公布種を僅かに伴う。陸域指標種群は、コケ類を含めた陸上植物の表面や土壤の表層部など大気に接触した環境に生活する一群(小杉、1986)で他の生育地には出現しないか、出現しても主要でない(安藤、1990)とされている。こうしたことから、甕内はじめじめした環境にあったとみられるが、一方で沼沢湿地付着生種群や淡水産公布種が稀に含まれるため、流入水があったことも想定される。ただし、流入水の量や頻度などの状況については不明である。

3) SX1とSX55遺構の寄生虫卵と種実、花粉

SX1では、寄生虫卵は鞭虫卵423個/gと毛細虫卵423個/gと少なく、花粉ではクリ属が優占するが食用植物の草本花粉で目立って多いものはない。種実はオニグルミ、モモ、ヤブツバキとスギの球果が出土している。この

第2節 平成21年度自然科学分析

ように寄生虫卵が少量検出されるが、花粉や大型植物化石からは糞便堆積物を遺構内に頻繁に廃棄した状況はみられない。なお、遺構はクリの樹冠直下にあり、スギも近接して生育していたようである。

埋設桶のSX55からは寄生虫の回虫卵 291 個/g と毛細虫卵 97 個/g と少量検出されている。花粉ではクリ属が優勢で、その他に食用植物ではアブラナ科が他の試料より幾分多い程度である。種実ではカジノキ、ヤマゴボウ、オランダイチゴ属が出土し、これら3種は食用または薬用として用いることが可能である。カジノキは樹皮繊維の利用以外に果実を食用または強壮剤やかすみ目などに用い、ヤマゴボウは葉を食用とするほか根は利尿薬として用いるが種子利用の記述はない(福田編、1986)。オランダイチゴ属は、在来種はモリイチゴなどがあり、いずれの集合果も食用になる。寄生虫卵の密度が高い場合は糞便堆積物の証拠になるが、密度が低い場合はヒトの感染状況により異なることが想定されるため寄生虫卵のみでは糞便堆積物かどうかを判断することは難しい。本遺構では花粉化石は食用植物の花粉が目立って多いわけではないが、大型植物化石で食用可能なオランダイチゴ属や薬用に利用される植物の種実が出土している状況からは糞便堆積物と関係する可能性も考えられる。ただし、クリ属花粉が多量に含まれているためSX55遺構はクリの樹冠直下にあったようである。

なお、回虫と鞭虫は手指や野菜に付着したものや塵と共に食物の上に散布した幼虫包囊卵をヒトが経口摂取で感染する。毛細虫の生活史の詳細は不明であるがヒトへの感染は淡水魚の生食によると考えられ、わが国へは渡り鳥による伝播が考えられている(吉田ほか、1996；藤田、1997)。回虫寄生の症状は極めて複雑で、成虫が小腸内で静かに寄生している場合は大した症状のないこともあるが、腹痛や下痢などの消化器症状を起こし、ときに他の臓器に侵入すると重大な障害を引き起こすことがある(吉田ほか、1996；藤田、1997)。鞭虫は少数寄生の場合はほとんど無症状で、多数寄生すると下痢、腹痛、食欲不振などの消化器症状が現れ、毛細虫は下痢や腹痛が長く続き、吸収不良のため栄養失調になり死亡する場合もある(藤田、1997)とされている。

4) 木製品と加工木の利用樹種

扇坂トンネル部2区から出土した樹種は、スギ 22点、ヒノキとマツ属維管束亜属が各3点、クリ、ヤナギ属、タケア科、カエデ属が各2点、カマツカ属、クワ属、マツ属、針葉樹が各1点であった。木製品と加工木の利用樹種は、スギは桶、箸、板、杭などさまざまな製品に使われていた。桶と箸はスギだけであったが、板はスギの他にヒノキ、マツ属複維管束亜属、ヤナギ属、カエデ属と様々な樹種が使用されていた。また、杭にはスギとマツ属で針葉樹のみが使われていた。自然木はスギ、クリ、ヤナギ属、クワ属を出土し、これらは周囲に生育していた可能性がある。

亀岡トンネル進入路部から出土した樹種は、クリ 17点、スギ 6点、ヒノキと針葉樹が各4点、アスナロ属とケヤキが各1点であった。クリは柱材と割り材に多く使用されており、土木建築材として普通に利用されていたと考えられる。スギは板、箸等の製品と礎板に使用されていた。ヒノキは箸と板でいずれも製品である。保存が悪く針葉樹とされた試料もスギかヒノキである可能性が高い。

以上のように扇坂ではスギが多く使用され全体の55%を占めていた。これに対し亀岡ではクリが52%を占めるが、多いのは柱材と割り材である。製品別に比較すると両地点とも桶、箱等、箸にはスギ、ヒノキなどの針葉樹が使われ、柱材や自然木はクリが多い。

引用文献

- 安藤一男. 1990. 淡水産珪藻による環境指標種群の設定と古環境復元への応用. 東北地理 42: 3-88.
藤田鶴一郎. 1997. 新訂臨床検査講座8 医動物学. 130p. 医薬学出版, 東京.
福田満 編. 1996. 世界有用植物事典. 1499p. 平凡社, 東京.
小杉正人. 1986. 陸生珪藻による古環境の解析とその意義-わが国への導入とその展望. 植生史研究 1: 29-44.

小杉正人. 1988. 珪藻の環境指標種群の設定と古環境復元への応用. 第四紀研究 27: 1-20.

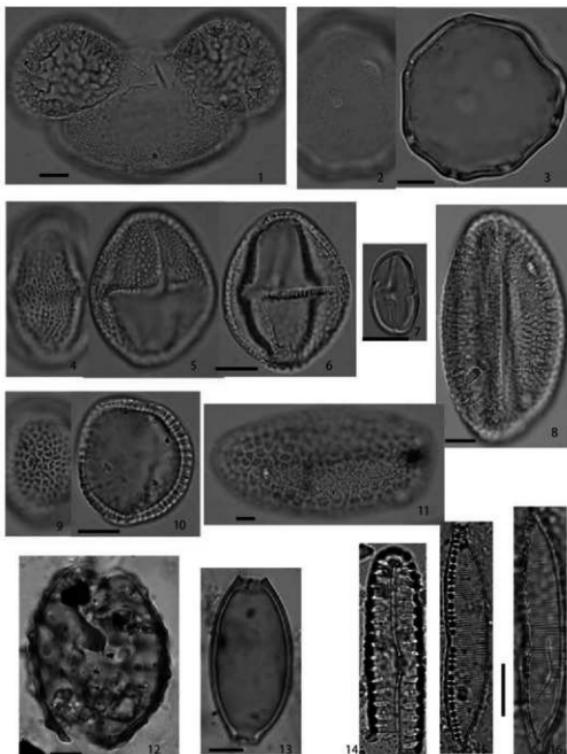
Krammer, K. and Lange-Bertalot, H. (1986, 1988, 1991a, 1991b) Bacillariophyceae. 1.Teil:Naviculaceae, Epithemiaceae, Surirellaceae. 596p.; 2.Teil:Bacillariaceae, 876p.; 3.Teil:Centrales, Fragilariaeae, Eunotiaceae. 576p.; 4.Teil:Achnanthaceae, Hittische Ergänzungen zu Navicula (Lineolatae) und Gomphonema. 437p. In: Ettl, H., Gerloff, J., Heyning, H., Mollenhauer, D. (eds.) Süsswasserflora von Mitteleuropa. Bd2/1-4. Gustav Fischer, Stuttgart.

仙台市史編さん委員会編. 1994. 仙台市史 特別編1自然. 520p., 仙台市.

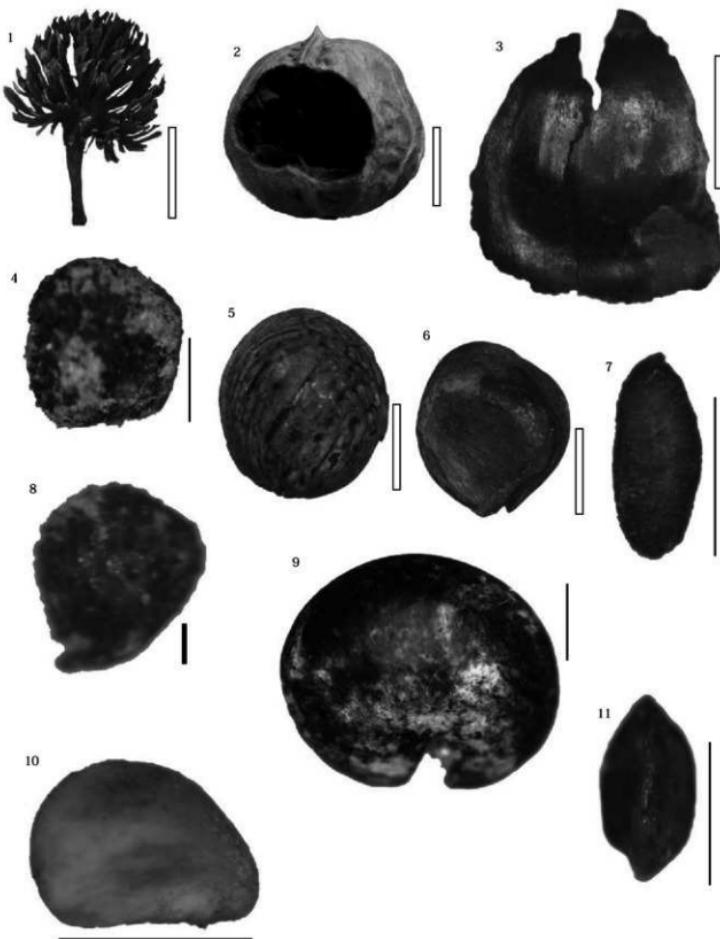
吉田幸雄. 1996. 国説人寄生虫学. 293p., 南山堂, 東京.

吉川昌伸. 2011. クリ花粉の散布と三内丸山遺跡周辺における縄文時代のクリ林の分布状況. 植生史研究. 18: 65-76.

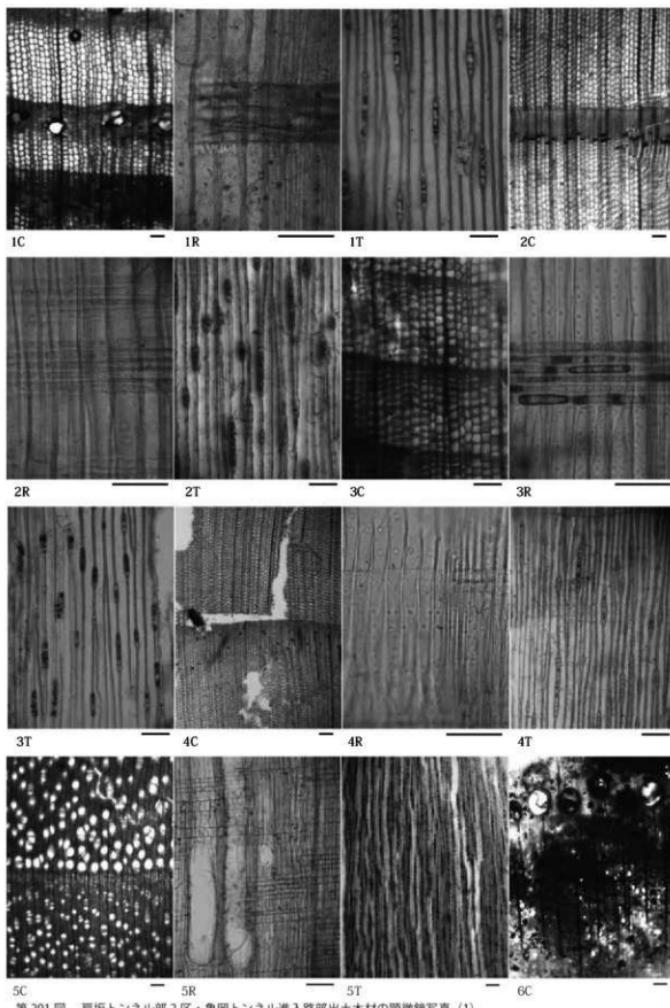
渡辺仁治. 2005. 淡水珪藻生態図鑑. 666p. 内田老舗, 東京.



第289図 扇坂トンネル部2区と亀岡トンネル進入路部より出現したバノモルフと珪藻化石
1:マツ属複維管束属, SX50 (59), AFR.MY 1958. 2-3:クルミ属, SX50 (59), AFR.MY 1958.
4-6:ウルシ, SX50 (59), AFR.MY 1958. 7:クリ属, SX1 (57), AFR.MY 1957. 8:ソバ属, SX50 (59), AFR.MY 1958. 9-10:アブランナ科, 1号埋甕 (63), AFR.MY 1960. 11:ユリ属, 1号埋甕 (64), AFR.MY 1961. 12:回虫卵, SX35 (69). 13:鞭虫卵, SX1 (68). 15:Pinnularia borealis, 1号埋甕 (70). 15-16:
Hantzschia amphioxys, 1号埋甕 (70). スケール=10 μm



第290図 畠坂トンネル部2区から出土した種実
1.スギ、果実 2.オニグルミ、内果皮食痕あり 3.クリ、果皮破片 4.カジノキ、内果皮
5.モモ、核 6.ヤブツバキ、種子 7.イグサ属、種子 8.ノミノツヅリ属、種子
9.ヤマゴボウ、種子 10.オランダイチゴ属、核 11.イヌタデ属、果実
1,2,3,5,6はSX1 (スケールは10mm)、4,7-8はSX55 (スケールは1mm, 8のみ0.1mm)

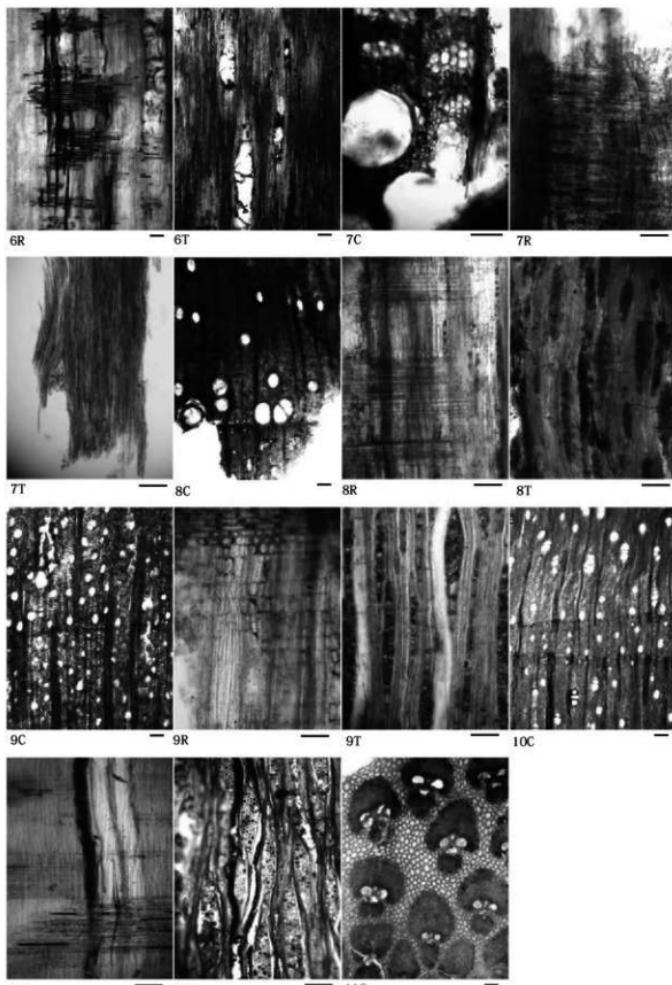


第291図 留坂トンネル部2区・亀岡トンネル進入路部出土木材の顕微鏡写真(1)

1.マツ属複維管束亞属(留坂近世盛土429木片)2.スギ(亀岡P23-146 側板)

3.ヒノキ(亀岡SD6-96-5著)4.アヌラ属(亀岡P09-29 柱材)5.ヤナギ属(留坂SE1-568-1 板)

6.クリ(亀岡P63-158 柱材) C:横断面 R:放射断面 T:接線断面 スケールは0.1mm



第292図 屋坂トンネル部2区・亀岡トンネル進入路部出土木材の顕微鏡写真(2)
6.クリ(亀岡P63-158柱材)7.ケヤキ(亀岡SD6-96-2不明木製品)8.クワ属(屋坂SD18-518-1自然木)
9.カマツカ属(屋坂SX1-566-2柱材)10.カエデ属(屋坂SX50-299加工材)
11.タケ亜科(屋坂SX1-580-3木片) C:横断面 R:放射断面,T:接線断面、スケールは0.1mm

第4章 出土遺物と検出遺構について

第1節 亀岡トンネル進入路部 - 出土遺物について

亀岡トンネル進入路部において近世の整地層は、Ⅲ層～V層の3層が確認されている。Ⅲ層は調査区全体で確認され、IV層もほぼ調査区全体において確認された。V層は、調査区の一部で確認された。これら整地層および各層で検出された遺構からは、陶器、磁器、土師質土器、瓦質土器、瓦、石製品、土製品、金属製品、その他の遺物が出土し、総数は1777点を数える（第26表）。

本節では、整地層及び遺構内より出土した陶磁器を産地別に分類し、本調査区内における陶磁器の様相及び各層の年代について述べる。

出土層位	陶器	磁器	瓦質土器	土師質土器	土製品	石製品	金属製品	木製品	瓦	自然遺物	合計
I層出土	19	42	0	9	0	0	0	0	4	0	74
II層出土	228	196	9	44	3	1	4	0	6	0	491
III層出土	210	71	7	108	5	1	4	0	25	0	431
Ⅲ層上面検出遺構出土	73	33	3	25	1	0	10	7	50	0	202
IV層出土	26	26	0	7	2	1	1	0	4	0	67
IV層上面検出遺構出土	82	42	3	49	2	2	6	14	52	0	252
V層出土	6	2	0	0	0	0	0	0	9	0	17
V層上面遺構出土	44	59	16	18	2	0	0	7	44	2	192
頃瓦	21	24	3	1	2	0	0	0	0	0	51
合計	709	495	41	261	17	5	25	28	194	2	1777

第26表 亀岡トンネル進入路部出土遺物数量一覧表

1 出土した陶磁器について

(1) 産地分類の方法

調査において出土した陶磁器は、整理段階で各整地層、整地層上面検出遺構毎に接合作業を行なった。Ⅲ層～V層及び各遺構内から出土した陶磁器の接合後の破片点数は、陶器439点、磁器235点、總点数674点となる。これらの陶磁器を産地別、整地層別、遺構別に算出し、出土遺物の推移を示す表と図を作成した（第293～296図、第27～30表）。表に見られる不明の欄は、細片のため産地・時期ともに判別できなかった点数である。整地層から14点、遺構から21点あり、図には表していない。

(2) 陶磁器の出土傾向（第293・294図、第27・28表）

V層とV層上面検出遺構に見られる陶磁器の傾向は、肥前産が71.3%で更に唐津産を含むと75.6%になる。瀬戸・美濃産が9.6%で志野を含むと11.7%で、岸窯が7.4%である。この他に、常滑産や在地産と考えられる陶器が出土しているが、合わせても2.2%と全体における割合は少ない。

IV層とV層上面検出遺構では、肥前産が40.4%で唐津産を含むと42.0%となり、V層同様に他の産地に比べ全体における占める割合が多い。これに対し、瀬戸・美濃産は3.1%で志野を含めても4.1%とV層の半分以下となる。また、大堀相馬産の陶器が出土し始め、36.8%と肥前産に次ぐ割合となる。また、小野相馬産も出土量は2.6%と全体における占める割合は少ないが出土し始める。この他に、京焼も8.0%と全体における割合は少ないが出土し始める。岸窯は1.6%とV層より出土量が減少し、常滑産は出土しなかった。在地産と考えられる陶器は1.6%と僅かながら増えている。

Ⅲ層とⅢ層上面検出遺構では、IV・V層で最も多く出土していた肥前産の陶磁器が28.9%で、唐津産を含めても30.1%と全体における割合が減るのにに対し、大堀相馬産陶器は45.0%とIV層よりも僅かながら全体における出土量の割合が増す。瀬戸・美濃産陶磁器は僅かではあるが、4.4%と全体における割合が増える。また、在地産と考えられる陶器が3.1%、堤焼が1.0%と増えている。これに対し、京焼は5.2%、岸窯は0.5%、小野相馬産は2.1%

第1節 亀岡トンネル進入路部-出土遺物について

と全体における割合が減少している。この他に、丹波産が0.3%、中国産が0.5%と微量であるが出土し始める。

(3) 出土傾向のまとめ

以上のように、亀岡トンネル進入路部において出土した陶磁器を产地別に分類し、各整地層、各整地層上面検出遺構毎の出土量の推移を表した。これらの出土傾向をもとに、本調査区内における出土陶磁器の様相及び各層の年代について述べる。

V層及びV層上面検出遺構から出土する陶磁器の数量は、唐津産を含む肥前系が8割近くを占めているが、これら陶磁器67点中62点が磁器の数量である。志野を含む瀬戸・美濃系陶器は1割程となっている。しかし、陶器だけの出土状況を見た場合、唐津産を含む肥前系だと29.0%、志野を含む瀬戸・美濃系陶器の35.5%を下回る量となる(第29・30表、第295・296図)。V層からは、16世紀末～17世紀代の陶磁器が出土しており、遺構からは18世紀前半の磁器が出土している。また、V層及びV層上面検出遺構から相馬系の陶器は出土していないことから、V層の下限年代は18世紀前半と考えられる。

IV層及びIV層上面検出遺構では、V層と同じく唐津産を含む肥前系陶磁器が出土量の5割弱を占める。これに対し、志野を含む瀬戸・美濃系陶器は更に出土量が減り、1割に満たない量となる。また、V層では志野を含む瀬戸・美濃系陶器が唐津産を含む肥前系陶器より出土量が上回っていたが、IV層では肥前系陶器より出土量が減る。この出土量の変化に関係してか、大堀相馬産の陶器が出土し始め、その量は4割を占め、陶器だけを見た場合の出土量は全体の5割を超す量となる。また、小野相馬産、堤焼も出土し始め、在地産と考えられる陶器も僅かながら出土量が増える。これ以外にも、京焼の陶器が出土し始める(第29・30表、第295・296図)。このように、相馬系の陶器の出土や以前瀬戸・美濃産の磁器が出土しないことや、18世紀末葉～19世紀前葉の大堀相馬産の碗や18世紀前葉～中葉の肥前産磁器の蓋等が出土していること等から、IV層は18世紀代～19世紀初頭と考えられる。

III層では、唐津産を含む肥前系陶磁器の出土量が更に減り、全体の3割程度となる。これに対し、瀬戸・美濃産陶磁器は、微量ではあるが出土量が増える。この瀬戸・美濃産陶磁器の17点中5点は磁器である。IV層で大量に出土した大堀相馬産の陶器は、ここでも更に出土量が増え全体の5割近くになる。陶器だけを見た場合、6割を越す出土量となる。京焼、小野相馬産の陶器は出土量が減少するが、堤焼、在地産と考えられる陶器は微量ではあるが、出土量が増える(第29・30表、第295・296図)。III層及びIII層上面検出遺構から、瀬戸・美濃産の磁器が出土し始めるところから、III層は19世紀前葉～中葉と考えられる。

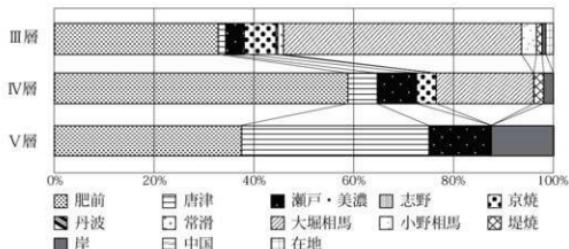
このように、本調査区から出土した陶磁器の様相は、V層及びV層上面検出遺構では、肥前系陶磁器と瀬戸・美濃産陶器が大部分を占め、特に肥前産磁器が主体となっていたが、IV層およびIV層上面検出遺構では、肥前産陶磁器の出土量は僅かではあるが増えるものの、全体的な出土量の割合としては5割に届かない量になる。また、瀬戸・美濃産陶器も出土量が減る。これらに対し、17世紀末頃より操業を開始した大堀相馬産陶器や小野相馬産、堤焼等、東北産の陶磁器が出土し始め、全体の半分に迫る量が出土し、III層及びIII層上面検出遺構では、大堀相馬産、小野相馬産、堤焼、在地産と考えられる陶器等、東北産陶器の出土量は5割を超え、全体の陶器だけの出土量を見た場合7割近くを占める割合となる。

また各層の年代は、III層が19世紀前葉～中葉、IV層が18世紀代～19世紀初頭、V層が17世紀前半～18世紀前半と考えられる。

第4章 出土遺物と検出遺構について

出土層位	肥前	唐津	瀬戸・美濃	志野	京焼	丹波	常滑	大堀相馬	小野相馬	堤焼	岸	中国	在地	不明
Ⅲ層	88	4	10	0	17	1	3	128	8	3	2	0	4	13
Ⅳ層	30	3	4	0	2	0	0	10	0	1	1	0	0	1
Ⅴ層	3	3	1	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0

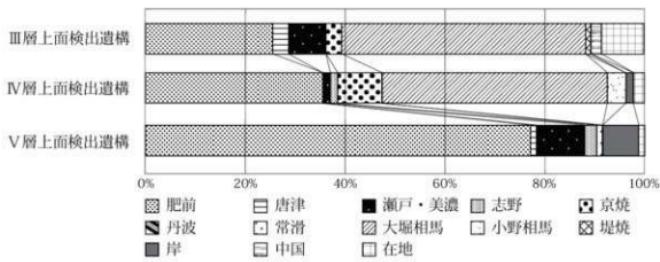
第27表 基本層出土陶磁器產地別数量表



第293図 基本層出土陶磁器產地別比率

出土層位	肥前	唐津	瀬戸・美濃	志野	京焼	丹波	常滑	大堀相馬	小野相馬	堤焼	岸	中国	在地	不明
Ⅲ層上面検出遺構	24	3	7	0	3	0	0	46	0	1	0	2	8	12
Ⅳ層上面検出遺構	48	0	2	2	12	0	0	61	5	0	2	0	3	6
Ⅴ層上面遺構	64	1	8	2	0	0	1	0	0	0	6	0	1	3

第28表 基本層上面遺構出土陶磁器產地別数量表

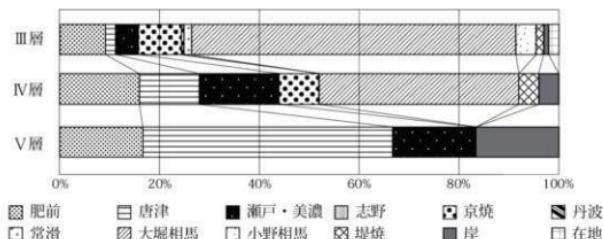


第294図 基本層上面遺構出土陶磁器產地別比率

出土層位	肥前	唐津	瀬戸・美濃	鍋部	志野	京焼	丹波	常滑	大堀相馬	小野相馬	堤焼	岸	中国	在地	不明
Ⅲ層	18	4	9	0	0	17	1	3	128	8	3	2	4	13	
Ⅳ層	4	3	4	0	0	2	0	0	10	0	1	1	0	1	
Ⅴ層	1	3	1	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	

第29表 基本層出土陶器產地別数量表

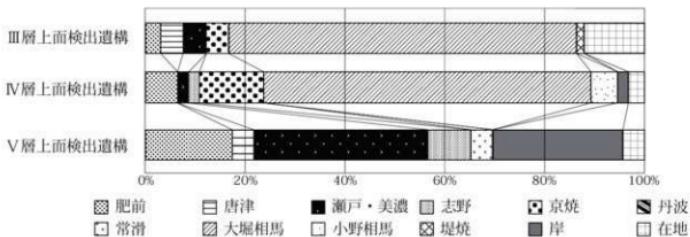
第1節 亀岡トンネル進入路部・出土遺物について



第295図 基本層出土陶器産地別比率

出土層位	肥前	唐津	瀬戸・美濃	織部	志野	京焼	丹波	常滑	大堀相馬	小野相馬	堤燒	岸	在地	不明
III層上面検出遺構	2	3	3	0	0	3	0	0	46	0	1	0	8	7
IV層上面検出遺構	6	0	2	0	2	12	0	0	61	5	0	2	3	6
V層上面遺構	4	1	8	0	2	0	0	1	0	0	0	6	1	2

第30表 基本層上面遺構出土陶器産地別数量表



第296図 基本層上面遺構出土陶器産地別比率

2 SD3 出土の暦文碗について

本調査区から、暦をあしらった器が出土した。この描かれた暦の内容等を確認しながら、何時の暦なのかまたそれによりこの器が何時頃製作されたものなのか述べたい。

(1) 調査区出土の暦文碗について

今回の調査で、IV層上面で検出されたSD3の1層より暦文の碗が出土した。(第297図)種別は陶器で、器種は筒型碗である。産地は、胎土の様子から京焼と考えられる。法量は、口径 9.7cm、底径 6.0cm、器高 7.0cmを測る。高台部以外の内面から胴部まで灰軸が施釉されている。その上に日にちや暦註等を赤で上絵付している。月の部分は色が消失しており何色で描かれていたかは不明であるが、痕跡は残っているため描かれていた内容は確認出来る。半分ほど欠損しているが、確認出来る暦の種類は、月の大小、日、朔日の十二支、六十干支、暦註である。内容は、二月から八月までの暦が確認でき、年号、年の六十干支、正月(一月)、九月から十二月までは欠損している(第31表)。

八 小	七 大	六 小	五 小	四 大	三 小	二 大
廿十 七五七 日日日日 日	廿廿 九五期 日日日日 日	廿廿十 八三九九六 日日日日日 日	廿廿 七一五期 日日日日日 日	廿廿十 六二三五期 日日日日日 日	廿廿 四廿六期 日日日日 日	廿廿十 四一ニ一四期 日日日日 日
巳ひか八午 己かうせ んしん ん	セニ子 つ百 十 日	セ日か土八未 つ己うよせ しらん ん	セ半入と つ夏はら 生い	セ日か八申 つ己うせ しん ん	セ八月ラ つ十そ 八く や	セ日ひ つ己

第31表 SD3出土暦文碗の暦



第297図 SD3出土暦文碗



(2) その他の地域出土の類似する暦文碗との比較

ここでは、宮城県外で出土した暦文碗の暦から本調査区から出土した暦文碗に描かれていたと考えられる年号を割り出す。今回出土した暦文碗と類似するもので、東京都新宿区市谷薬王寺町遺跡出土の暦文碗がある（新宿区市谷薬王寺町遺跡 1998）（第298図）。種別は陶器で、器種は筒型碗、器の法量は口径 9.4cm、底径 4.6cm、器高 6.6cm を測る。产地は京焼で、内面から体部まで白化粧を施した後、灰釉（透明釉）を施釉し、緑（黒に変色）と赤で暦文を描く。暦の内容は、下記の第32表のとおりである。

十 大	九 小	八 小	七 大	六 小	五 小	四 大	三 小	二 大	正 小	金 寛保 とく 四年 未 と 申甲 ラ 西子う 間
廿十 六七九二 日日日日期 日	廿十 六 四三五七期 日日日日日 日	廿廿 九五期 日日日日 日	廿廿十 八三九九六 日日日日日 日	廿廿 七一五期 日日日日日 日	廿廿十 六二三五期 日日日日日 日	廿 十 五廿四期 日日日日 日	廿廿 四一二六四期 日日日日日 日	廿廿 四廿六四期 日日日日 日	廿廿 四一ニ一四期 日日日日 日	廿廿 四 正 小
巳ひか八セ 己うセつ んし ん	日日夷 そそ くくセ つ	巳ひか八午 己かうセ んし ん	セニ子 つ百 十 日	セ日か土八未 つ己うよせ しらん ん	セ半入と つ夏はら 生い	セ日か八申 つ己うせ しん申 ん	セ八月ラ つ十そ 八く や	セ日ひ つ己	セひか八ヒ つ己うかセリ しんし ん	セた つ己うかセリ しんし ん

第32表 新宿区市谷薬王寺出土暦文碗の暦



第298図 新宿区市谷薬王寺出土暦文碗

以上の暦文の内容と本調査区出土の暦文碗に描かれている暦の内容を比較してみると、月の大小及び暦註は全て合致する。日にちの部分では、二大の十一日と六日、八小の十七日と十三日の2ヶ所において相違が見られる。また、この2ヶ所の相違以外に薬王寺遺跡出土の暦文碗に描かれている「寛保四年」であるが、寛保年間は元年（1741）から3年（1743）までで、寛保4年にあたる年は延享元年（1744）である。

(4) 実際の暦との比較（第33表）

先に述べたように、2つの暦文碗に描かれている暦には2ヶ所の相違と年号の誤筆が確認された。このため、実際の暦と比較し、暦文の内容を検討したい（第33表）。江戸時代の前半では平安時代から用いられてきた中国の「宣明暦」を使用していたが、貞享2年（1685）から「貞享暦」が宝暦5年（1755）の改暦まで使用されていた。先ず年号の箇所において寛保4年は実際には無かったか、もしくは途中で改元された年であるが、その他の描かれている内容はどうか。市谷薬王寺遺跡出土の暦文碗には「寛保四年」の下に「甲子」と描かれており、これは延享元年の六十干支も「甲子」になり合致する。次に月の大小であるが、こちらは先に述べたように両遺物共に全て合致している。延享元年の月の並びは「正小、二大、三小、四大、五小、六小、七大、八小、九小、十大、十一大、十二小」であり、2つの遺物の暦と全て合致する。朔日の六十干支は、「庚辰、己酉、己卯、戊申、戊寅、丁未、丙子、丙午、乙亥、甲辰、甲戌、甲辰」であり、こちらも暦文碗に描かれている朔日の十二支と合致する。これらの事から、年号は「寛保四年」と描かれているが、年の六十干支や月の大小、朔日の六十干支との一致などからこれら2つの暦文碗に描かれている暦は延享元年（1744）であると考えられる。これにより使われている暦は「貞享暦」と分かる。日にちと暦註に関しては、先に述べた2ヶ所の相違の確認と合わせてみる。相違があるのは2ヶ所で、1つは二大の箇所で本調査出土の暦文碗は「六日」となっている。暦註は本調査区出土の暦文碗は一部欠損の

十二	十一	十	九	八	七	六	五	四	三	二	正	月	暦註で年
小	大	大	小	小	大	小	小	大	小	大	小	月の大小	甲子
甲辰	甲戌	甲辰	乙亥	丙午	丁未	戊寅	戊申	己卯	己酉	庚辰	庚辰	月の干支	
大寒	冬至	小雪	霜降	秋分	小暑	大暑	夏至	小滿	穀雨	春分	雨水	中氣	
18	18	17	16	15	14	13	11	11	9	9	8	日	
小寒	大雪	立冬	寒露	白露	立秋	小暑	芒種	立夏	清明	穀雨	驚蟄	節氣	
3	3	2	1		29	28	27	26	25	24	23	日	

第33表 延享元年暦表（『日本暦日原典』内田1975）

ため「ひ」1文字のみ確認出来る。市谷薬王寺遺跡出土の暦文碗は「ひかん」と描かれており雑節の「彼岸」である。貞享暦で「彼岸」の入りは春分・秋分の翌々日からとされている。延享元年の暦では、春分は2月9日とされており、この日から翌々日は2月11日になるため、「二大十二日」の前は「十一日」になる。もう1つは、八小の箇所で本調査出土の暦文碗は「十五日」の後ろが「十七日ひかん（彼岸）」であるのに対し、新宿区出土の暦文碗は十五日の後ろが「十三日ひかん（彼岸）」となっている。こちらも同じく貞享暦の彼岸の入りの規則に当てはめると、延享元年の秋分の日は8月15日とされており、そこから翌々日は8月17日となるため「八小十五日」の後ろは「十七日」となる。これらの事から、日付及び暦註も延享元年の暦を描いていたと考えられる。

(5) 暦文碗のまとめ

類似する暦文碗と暦との対比により、本調査区から出土した暦文碗に描かれている暦は延享元年（1744）のものであることが窺える。この事から、この器が寛保年間から延享元年に作成されたと考えられる。他に、「三小十四日」、「九小朔日」、「九小十六日」の下に描かれている「日そく（日食）」、「月そく（月食）」は実際に、描かれた日付けに日食、月食が発生しており（仙臺實測志 上）、江戸時代の天文学の緻密さもこの1つの出土遺物からうかがい知ることが出来る。

第2節 亀岡トンネル進入路部 - 検出遺構について

亀岡トンネル進入路部において 149 基の近世の遺構が検出された。本節では、調査区から検出された遺構を検出面毎に見ていき、本調査区の様相について述べたい。

1 V層上面検出遺構

V層上面においては 25 基の遺構が検出された。SX10 と P62 は、調査区西側に位置し、それ以外は、調査区中央から東側に位置する。調査区中央付近で検出された遺構で、池跡である SX6 がある。護岸用の礫を設置するための掘り方を持ち、底面には黄灰色の粘土質シルトが広範囲に敷かれている。ただし、水口や舗水等の用水施設、池底に敷かれる玉石、礫浜等は検出されなかった。SX6 の南西側には隣接するように 1 号石敷遺構が、更に 1 号石敷の更に南西に 80cm 程のところには SD6 が、同じく 1 号石敷遺構の南東に 40cm 程のところには 1 号枠状遺構が同じ IV 層整地直下より検出された。SD6 の東壁、1 号石敷遺構の西壁、1 号枠状遺構の西壁の延長線が示す方位がほぼ同一であり、これらの遺構が向き合う壁はほぼ等間隔に平行して延びているのが見られる。

2 IV層上面検出遺構

IV 層上面において 79 基の遺構が検出された。IV 層上面では、ほぼ調査区全体で遺構が検出されている。調査区中央付近では、SD1 ~ 3 の石組溝跡を検出した。これらは途中削平されているため、調査時は各々遺構名を付して調査したが、お互い延長線上で繋がることから同一の遺構と考えられる。SD1 の南側、SD3 の東側には、SB1・2 建物跡が位置する。SB1 は、匁の字状石列とその内側に礎石を配した建物跡である。SB2 は、掘り方に根固め石を充填しその上に礎石を設置した柱穴の建物跡である。両建物跡では基礎の構造は違うことと、SB1・2 の間を擾乱によって削平されているため、2 棟の建物として分けているが、全体として溝によって区画され軸方位が同一の方位を示し、柱筋が通るところもあるため 1 棟の建物の可能性が高い。また、SB1・2 は共に IV 層整地層上面で検出していることから、同時期に機能していた遺構であると考えられる。前述した SD1 ~ 3 の溝跡も IV 層整地層直上で検出しておりこれらの建物跡と溝跡は同時に機能していたと考えられる。これらの事から、基礎構造の違う建物が建ち、その周囲にある石組溝が区画溝として機能していたことが推測される。この他に、SD1・2 を境に北側では両溝に直行するように延びる、SD11・14・15 や調査区北西付近では井戸跡が検出されている。ただし、建物跡は検出されなかった。同じく、SD3 を境に西側でもピットや溝は検出されたが、建物跡等は検出されなかった。

3 III層上面検出遺構

III 層上面において 45 基の遺構が検出された。III 層上面では、調査区中央から東側ではピットや土坑、竹樋が検出されるも散見される程度である。それに対し西側では、多くの遺構が検出されている。調査区南西側では、石組みの溝である SD17・18 が検出されている。両溝は、両端が調査区外へ延びているためその先の様子は判然としない。また、南西から北西に延びる SD21 溝跡や、南東から北西へ延びるこちらも SD13 溝跡が検出されているが、これら溝跡の周囲で建物跡等は検出されていないことから、区画溝であるかは判然としない。この他に、調査区西側で 1 号埋蔵遺構を検出している。底部に穴を穿った素焼きの堤焼の大甕を逆さまに埋設している。遺構の性格としては「水琴窟」の可能性が考えられ、その場合この周辺が庭として使用されていたと推定されるが、その他に庭を推定させる遺構は確認できない。

第2節 亀岡トンネル進入路部・検出遺構について

4 検出遺構のまとめ（第299図）

各検出面の遺構出土遺物からの年代観は、V層上面が

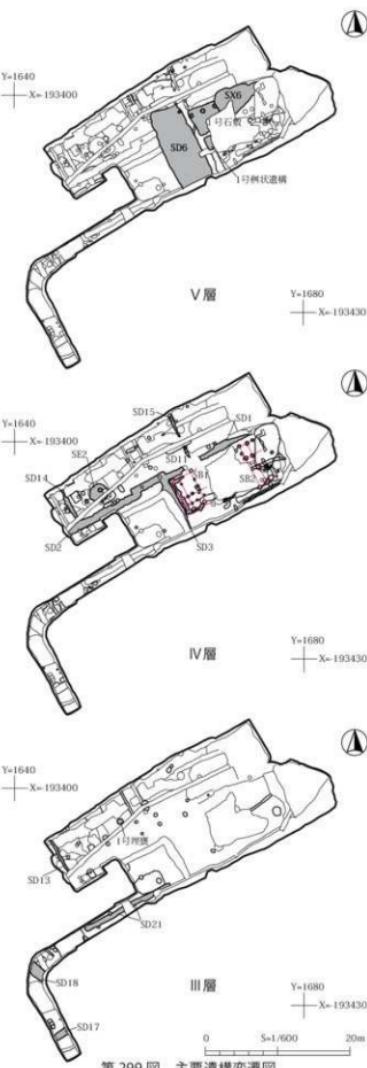
17世紀代～18世紀前半、IV層上面検出遺構が18世紀

代～19世紀初頭、III層上面検出遺構が19世紀前半～中頃と考えられる。

V層上面では、池跡と想定されるSX6が検出されていることから屋敷地内の庭と推定される。また、明確な機能は不明だが、位置関係から池跡の付随施設として考えられる1号石敷、1号枠状遺構、石組遺構のSD6等も庭の建築物である可能性が考えられる。1号石敷に切られている、SA1はそれ以前の土地利用のあり方を示すものであろう。検出された12基のピットも、建物やその付随施設の柱穴として機能していたと考えられる。

IV層上面では、SB1・2が検出されている。建物基礎構造は違うが1棟の建物の可能性が高い。SB1・2、それらを区画する溝跡と考えられるSD1・3、SD3と直行するSD2の北側にあるSE2、SD1・2に直行するSD11・14・15等も屋敷地内を区画する溝と考えられる。従って18世紀以降、19世紀初頭の当該地区は、居住域として機能していたと考えられる。

III層上面では、1号埋甕、SD13・21等ほとんどの遺構が西側で検出されている。SD13・21は区画溝として機能していたと考えられ、1号埋甕は庭の施設として考えられるので西側は、屋敷地内の庭として利用されたと考えられる。調査区中央及び東側で遺構が検出されていないことについては、調査区南壁セクションではIII層が確認されるが、調査区北壁セクションでは中央付近でIII層が切れて確認できなかったことから、上位近・現代の建物や土地造成のため削平されていると考えられる。



第299図 主要遺構変遷図

第3節 扇坂トンネル部 - 出土遺物について

扇坂トンネル部では、Ⅲ層～V層の近代初頭から近世の整地層が確認された。各整地層の年代は、第4章の「調査区基本層序」で述べたようにⅢ層が19世紀中葉頃、IV層が19世紀前葉～中葉、V層が18世紀代～19世紀初頭である。調査時に、これら各整地層と各整地層上面検出遺構及び近現代の盛土から、陶器、磁器、土師質土器、瓦質土器、瓦、石製品、土製品、金属製品、その他の遺物等が出土した。出土遺物の総数は、14483点を数える。(第34表)

本節では、整地層及び遺構内より出土した陶磁器を産地別に分類し、本調査区内における陶磁器について述べる。

出土層位	陶器	磁器	瓦質土器	土師質土器	土製品	石製品	金屬製品	木製品	瓦	自然遺物	土師器	その他	不明	合計
I層	451	1275	27	8	4	3	27	0	22	1	0	5	0	1823
II層	843	1495	34	37	3	4	10	0	54	1	0	1	0	2482
III層	365	688	20	25	1	1	6	3	43	1	0	0	0	1153
III層上面検出遺構	544	325	47	41	9	8	12	13	80	29	0	0	0	1108
IV層	784	640	68	88	16	9	28	9	85	1	0	0	0	1728
IV層上面検出遺構	548	418	50	135	31	5	15	337	434	6	0	1	0	1980
V層	119	112	9	17	1	1	3	0	14	0	2	0	0	278
V層上面遺構	222	175	7	63	1	4	4	34	324	3	0	1	0	838
現況	513	2108	7	33	4	1	76	44	282	40	0	1	0	3109
合計	4389	7236	269	447	70	36	181	440	1338	82	2	9	0	14483

第34表 扇坂トンネル部出土遺物数量一覧表

1 出土した陶磁器について

(1) 産地分類の方法

扇坂トンネル部は、平成20・21年度と2カ年にわたる調査であったため、整理段階で先ず調査年度毎に各整地層及び各整地層上面検出遺構の接合作業を行なった後に全体の接合を行った。Ⅲ層～V層及び各遺構から出土した陶磁器の接合後の破片数は、陶器2582点、磁器2342点、総点数4924点となった。これら陶磁器の数量を産地別、整地層別、各遺構検出面別に算出し、出土遺物の推移を示す表と図を作成した(第35～38表、第300～303図)。また、表に見られる不明は、細部のため産地や時期が共に判別できなかった点数であり、整地層から170点、遺構から153点あり、図には表していない。

(2) 陶磁器の出土傾向(第300・301図、第35・36表)

V層及びV層上面検出遺構出土の陶磁器は、唐津産を含む肥前系陶磁器が53.4%で全体の5割以上を占めている。次に大堀相馬産が25.8%と全体の3割近くの出土量を占めている。他に、瀬戸・美濃系が5.6%、志野を含めても6.3%、京焼が2.8%、小野相馬産が2.6%、堤焼が0.2%、中国産が0.2%と出土しているが、全て合わせても1割を僅かに超える量である。

IV層及びIV層上面検出遺構出土の陶磁器は、唐津産を含む肥前系陶磁器の出土量が減るもの、42.8%と全体の4割を占める出土量である。大堀相馬産は34.5%と更に全体の中で占める割合が増えており、肥前産陶磁器と大堀相馬産陶器の2つを合わせると7割を超える量となる。また、瀬戸・美濃産陶磁器は9.2%、堤焼が0.5%と僅かながら全体の中で占める割合が増えるのに対し、京焼は1.7%、小野相馬は2.3%と出土数量は増えれるが、全体の出土量の中で占める割合は減少するものも見られる。この他に、切込産や在地産と考えられる陶器などが僅かではあるが出土し始める。

III層及びIII層上面検出遺構出土の陶磁器は、肥前産陶磁器の出土量が全体の28.7%と更に減少し、大堀相馬産も30.0%と減少している。これに対し全体の1割程度の出土量であった瀬戸・美濃産陶磁器は27.1%と、3割近くの出土量となる。また、京焼が0.6%、小野相馬産が0.8%、在地産と考えられる陶器が0.2%と減少しているが、堤焼は6.9%と全体における占める割合が更に増えている。

第3節 扇坂トンネル部-出土遺物について

(3) 出土傾向のまとめ（第302・303図、第37・38表）

以上のように、扇坂トンネル部において出土した陶磁器について産地別に分類し、各整地層、各整地層上面検出遺構毎にその出土量の推移を表した。これらの出土傾向をもとに、本調査区の出土陶磁器の様相および各層の年代について述べる。

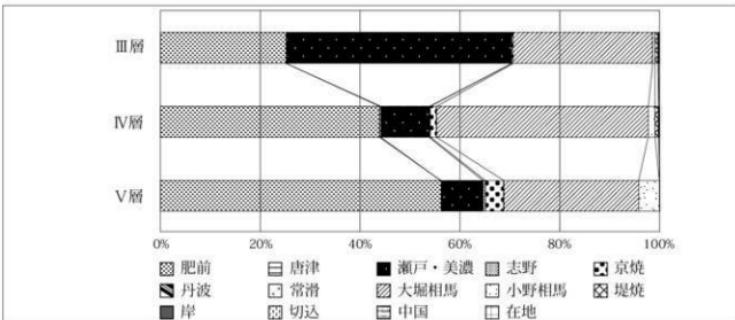
本調査区から出土した遺物の様相は、V層及びV層上面検出遺構では肥前産の陶磁器と大堀相馬産の陶器が大部分を占め、特に肥前産の陶磁器が主体となっている。V層の年代は、18世紀代の肥前産磁器や18世紀中葉～19世紀初頭の大堀相馬産の陶器が出土していること、堤焼は出土していないことから、18世紀代～19世紀初頭と考えられる。

IV層及びIV層上面検出遺構では、肥前産陶磁器及び大堀相馬産の陶器が大分を占め、特に肥前産の陶磁器がここでも主体となる。ただし、IV層及びIV層上面検出遺構では肥前産陶磁器の出土量は増えるが、出土量全体における占める割合は減少する。これに対し、大堀相馬産陶器が占める割合が増加している。また、瀬戸・美濃産磁器が出土し始めることにより、瀬戸・美濃産陶磁器の全体における割合が増加している。この、瀬戸・美濃産の磁器が出土することや、堤焼の陶器や切込産磁器が出土し始めることから、IV層は19世紀前葉～中葉と考えられる。

III層及びIII層上面検出遺構では、肥前産陶磁器の出土量は更に減少し全体の3割にも満たない量になる。同様に、大堀相馬産の陶器も出土量が僅かに減少し出土量全体の3割となる。これに対し、瀬戸・美濃産陶磁器の出土量が増加しこちらも全体の3割近くを占める量となり、肥前産、瀬戸・美濃産、大堀相馬産の3つが出土量全体の大部分を占める様相となる。ただし、陶器だけを見た場合、大堀相馬産と堤焼の東北系陶器だけ陶器出土量全体の9割近くまでを占める様相となる。また、肥前産陶器及び瀬戸・美濃産陶器の出土量は、V層からIII層までの間で徐々に減少していく、それぞれの陶磁器内で磁器が占める割合は9割となる。瀬戸・美濃産の磁器や堤焼の陶器が更に増えることや、銅版転写の器が出土していないこと等から、III層は19世紀中葉ころと考えられる。

出土層位	肥前	唐津	瀬戸・美濃	志野	京焼	丹波	常滑	大堀相馬	小野相馬	堤焼	岸	切込	中国	在地	不明
III層	255	0	456	0	3	0	0	282	5	6	1	1	0	1	43
IV層	582	4	128	2	17	0	0	562	18	9	0	0	2	1	99
V層	108	0	16	1	7	0	0	52	8	0	0	0	0	0	28

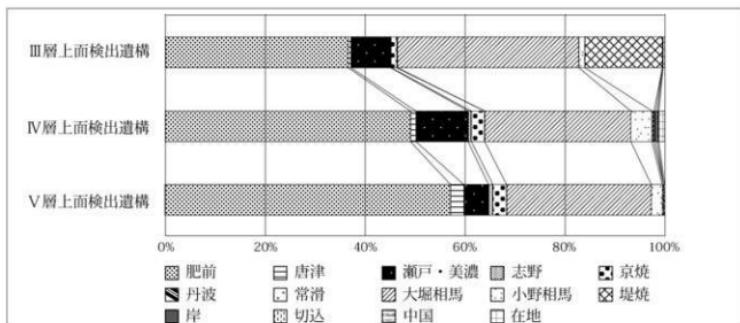
第35表 基本層出土陶磁器産地別数量表



第300図 基本層出土陶磁器産地別比率

出土層位	肥前	唐津	瀬戸・美濃	志野	京焼	月波	常滑	大堀相馬	小野相馬	堤焼	岸	切込	中国	在地	不明
Ⅲ層上面検出遺構	297	5	64	1	9	0	1	295	10	126	0	0	1	3	57
Ⅳ層上面検出遺構	440	10	93	6	24	0	0	262	38	3	4	3	2	11	70
Ⅴ層上面遺構	209	10	18	3	10	0	0	106	8	1	0	0	1	0	26

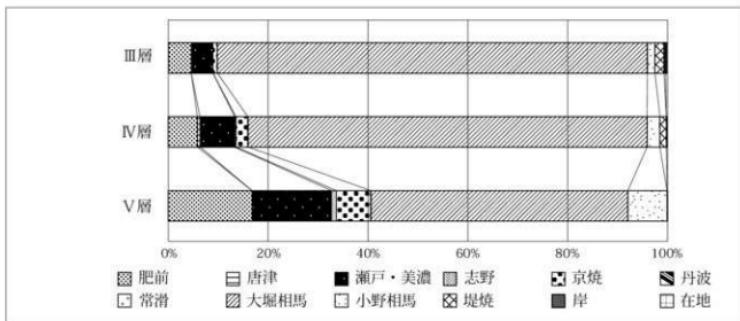
第36表 基本層上面遺構出土陶磁器產地別数量表



第301図 基本層上面遺構出土陶磁器產地別比率

出土層位	肥前	唐津	瀬戸・美濃	志野	京焼	常滑	大堀相馬	小野相馬	堤焼	岸	在地	不明	中国	在地	不明
Ⅲ層	15	0	14	0	3	0	282	5	6	1	1	38	0	1	43
Ⅳ層	41	4	48	2	17	0	562	18	9	0	1	82	2	1	99
Ⅴ層	17	0	16	1	7	0	52	8	0	0	0	18	0	0	28

第37表 基本層出土陶器產地別数量表

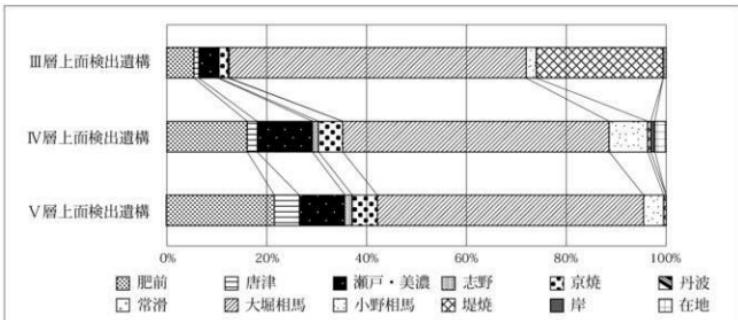


第302図 基本層出土陶器產地別比率

第3節 扇坂トンネル部-出土遺物について

出土層位	肥前	唐津	瀬戸・美濃	志野	京焼	常滑	大堀相馬	小野相馬	堤焼	岸	在地	不明	中国	在地	不明
Ⅲ層上面検出遺構	27	5	19	1	9	1	295	10	126	0	3	48	1	3	57
Ⅳ層上面検出遺構	79	10	54	6	24	0	262	38	3	4	11	57	2	11	70
Ⅴ層上面遺構	43	10	18	3	10	0	106	8	1	0	0	23	1	0	26

第38表 基本層上面遺構出土陶器産地別数量表



第303図 基本層上面遺構出土陶器産地比率

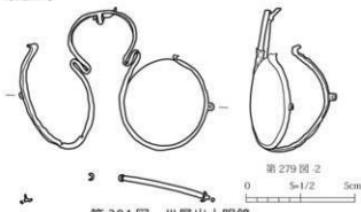
2 出土した眼鏡について

(1) 本調査区出土の眼鏡について

2区の調査において、N14-W29 グリッドのⅢ層より眼鏡が出土した(第304図)。この眼鏡は『支柱式天狗眼鏡(鼻立て眼鏡)』と呼称されており、1870年頃(明治時代初頭)のものと考えられている。右目のレンズは欠損していたが左目のレンズは完全な状態で残っていた。枠は金属製で、中央に額あてがあったと考えられる。レンズ枠は途中に穴を有する突起が付き、末端は大きく外反する。レンズ枠の途中に付く穴を有する突起は、穴に紐を通し耳にかけるためのものである。

(2) 本調査区以外での出土例

宮城県内においては、三代藩主伊達綱宗の靈屋善光殿から径5cm程の水晶製レンズの眼鏡が出土している。岩沼市西須賀原遺跡(岩沼市教育委員会 2011)で近世墓から『支柱式天狗眼鏡』が1点出土している(写真1)。レンズはガラス製で左目のレンズは一部欠損するものの両レンズが確認されている。枠は真鍮製で、中央に一部欠損しているが額あてがある。耳かけ用の紐を通す穴を有する突起は、レンズ枠が途中から欠損しているため確認出来ない。



第304図 Ⅲ層出土眼鏡

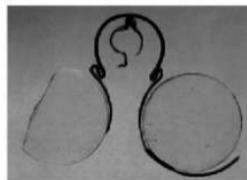


写真1 岩沼市西須賀原遺跡出土眼鏡

第4節 仙台城跡 - 扇坂トンネル部 - 検出遺構と調査区東端部斜面地について

1 各層上面検出遺構の様相について（第305図）

扇坂トンネル部において289基の遺構が検出された。本節では、調査区から検出された主要な遺構を検出面毎に見ていき、本調査区の様相について述べたい。

(1) V層上面検出遺構について

V層上面では101基の遺構が検出された。1区の南東端でSA（柱列跡）を1条（SA4）検出した。また、1区の東側、2区の西側において多数のピットが検出されており、これは建物跡等があった可能性を示唆するものと考えられる。溝跡は1区で3条（SD6・7・14）、2区で4条（SD3・11・16・17）の計7条の溝が検出されている。これらのうち、明確に区画溝と言えるものはないが、1区の東側で検出されたSD6が、複数のピットと土坑を取り囲む溝と考えられる。土坑および性格不明遺構については、1区の中央よりやや東側に大型の土坑2基が検出されている（SK2・10）。SK2は長軸13.32m、短軸336cmを測り、SK10は、長軸980cm、短軸354cmを測り、いずれも大型の遺構で主軸方位も同じN-62°を示す。SK2は遺構底面で瓦が破片等を含めて251点出土しており、他にも陶磁器が14点出土している。これに対しSK10では瓦が破片等を含め14点、陶器が1点のみ出土する程度であった。SK2は廃棄土坑と考えられる。2区の中央やや西寄りには、15基の性格不明遺構が集中して検出されているが、これらについては遺構の性格を決定する特徴がとぼしい。

(2) IV層上面検出遺構

IV層上面検出遺構では、1区東側で杭列跡1条（SA1）、建物跡1棟（SB2）を検出した。このSA1の主軸方位が示す方向とSB2の主軸方位が示す方向は東で、その傾きもほぼ同じとなる。また、扇坂トンネル部1区で4条（SD4・10・13・15）、扇坂トンネル部2区で2条（SD2・18）の計6条の溝跡が検出された。これらの溝のうち、扇坂トンネル部1区で検出されたSD4の東端、SD15の北端の延長線が直行し区画溝の様相を見せる。同様に2区で検出されたSD2の西端、SD18の北端の延長線が直行し区画溝の様相を見せる。また、SD2とSD4の主軸方位はほぼ同じ傾きを示す。また、SA1及びSB2の主軸方位、SD2及びSD4の主軸方位に大きな違いは見られない。この他に、SK4・38、SX1・50の大型遺構から多量の遺物が出土しており、廃棄土坑と考えられる。

(3) III層上面検出遺構

1区東側で建物跡1棟（SB1）、2区西側中央からやや西側で2条の平行する杭列跡（SA2・3）、その北側で建物跡1棟（SB3）を検出した。SB1の短軸方位とSA2・3、SB3の長軸の方位はいずれも同じ方向を示し、同一時期の建物配置の様相を呈する。1区で2条（SD8・12）、2区で4条（SD1・5・9・19）の計6条の溝が検出されている。このうち、SD1・5・19の主軸方位の同一である。また、SB1の長軸、SB3の短軸の示す軸の方位及びSD1・5・19の主軸方位は、ほぼ同様の傾きを示しておりSD1・5・19は区画を意識した溝と考えられる。この他に、2区南東端で長軸552cm、短軸463cmを測るSX2が検出されている。SX2からは多量の遺物が出土しており、その総数は752点を数え、大型の廃棄土坑と考えられる。同様の遺構で、1区南東隅で検出されたSK37がある。SK37は長軸462cm、短軸229cmを測るこちらも大型の遺構である。SK37からも多量の遺物が出土しており、その出土総数は169点を数える。この他に、SD9、SX13～16では被熱範囲が見られたが、遺構の性格は不明である。

(4) 検出遺構のまとめ

以上のように、検出面毎に特筆される遺構について述べてきた。ここでは、検出面毎に遺構群の概略を述べる。

V層上面の主な遺構を概観すると、前述した区画の溝と考えられるSD6が検出され、SA4やその周辺で検出されたピット群の集中する箇所と前記の大型土坑やSXが集中する箇所の土地利用の区分が見られる。以上のことか

第4節 仙台城跡 - 扇坂トンネル部 - 檜出遺構と調査区東端斜面地について

らV層上面の遺構群は当該調査区の屋敷地における最初の遺構景観を示すものと考えられる。

IV層上面の主な遺構を概観すると、主軸方位の同一性から1区東側中央で検出されたSD4に区画されるSA1とSB2及びSA1の北側のピット群も成立はしていないが、SA1と同一区画にある建物跡と考えられる。また、SD15の北側には大型遺構のSK4が検出されている。SK4からは、多量の遺物が出土しており、上記の建物跡で使用されたと考えられる器等を捨てた廐棄土坑と考えられる。また、2区中央や西側には、SD2・18という主軸が直行する2条の溝に区画された箇所に14基の土坑や、性格不明遺構が検出されているが、結桶が埋設されたSX55以外は、比較的深さを持たず用途不明の遺構である。この溝の区画外の西側にはSX1やSX50等の大型で多量に遺物が出土した廐棄土坑と考えられる遺構が検出されている。以上の事からIV層上面では、2ヶ所の区画とその間のSK4やSX1・50等の廐棄土坑が検出されたという土地利用の様相がIV層上面の遺構景観を示すものと考えられる。

III層上面の遺構を概観すると1区西側にSD8が検出され、その南側にSE5が検出されており、これらの遺構群は区画溝と屋敷地内の井戸跡と考えられる。1区の西側には、SB1とSE3が検出されており、この箇所も屋敷地内の一帯と考えられる。2区には同一の主軸方位のSB3と柵列跡のSA2・3が検出されている。このようにIII層上面では3～4箇所の居住域の単位が想定されるが、明治初頭の武家屋敷廐棄後もしくは鎮台施設の可能性も考えられる。

各検出面の全体の様相は以上であるが調査面積に対し、建物跡が少なく井戸、土坑、溝等の検出数も少なく、この箇所が屋敷地内の中心ではなく背後地のような土地利用をされている様相が窺える。

2 調査区東端斜面地における近世の地形

扇坂トンネル部2区東端に、南北方向に延びる近代に構築された石垣がある。発掘調査着手前は、この石垣の裏側に近世の石垣があるのでとを考えられていたが、石垣解体後の確認で石垣の裏側からはそれ以前の石垣または石垣が構築されたであろう痕跡は確認されなかった。ただし、この確認の結果近代において大掛かりな土地造成を行なったと見られる状況が確認された。それにより、近世までの地形の一端が垣間見られた。

(1) 近代石垣の状況（第307図）

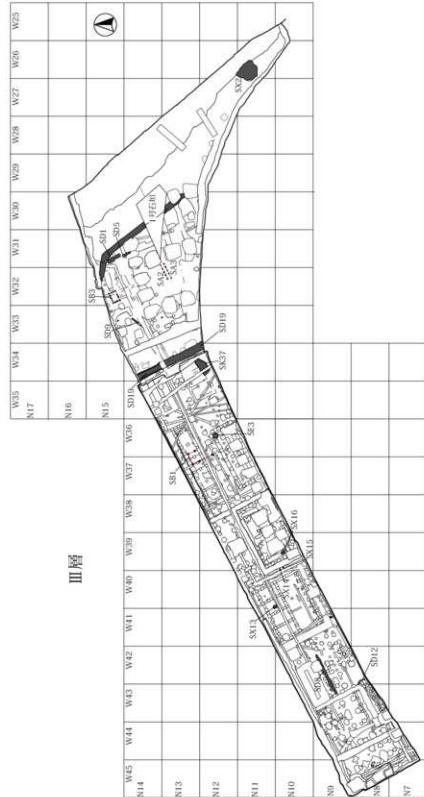
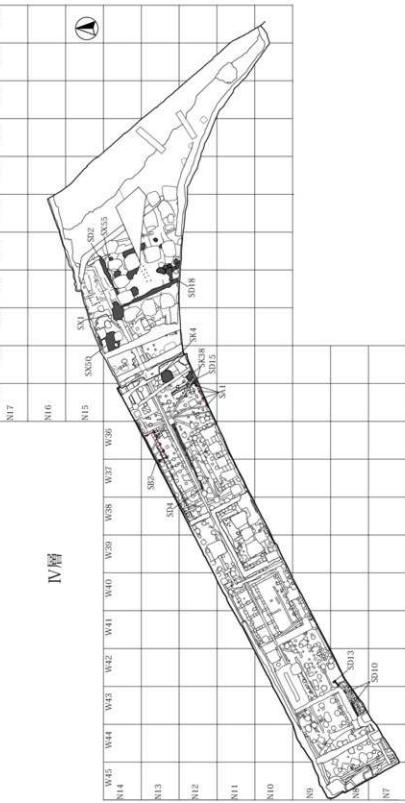
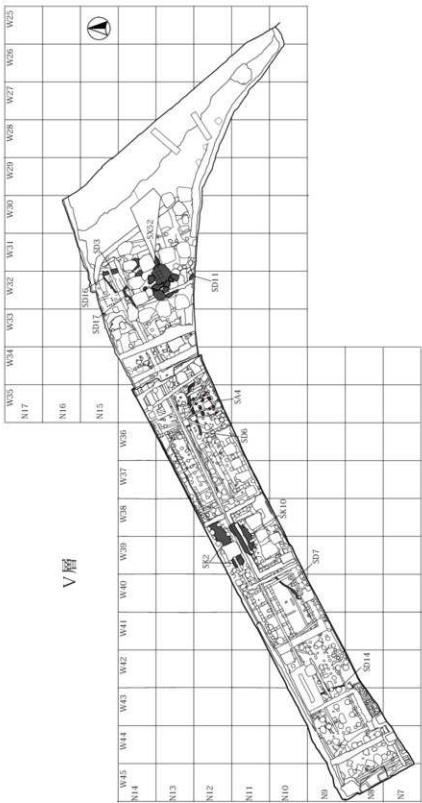
今回解体した石垣は、明治21年（1888）に構築されたと考えられる（東北大大学埋蔵文化財調査年報21 2007）。東北大大学のグラウンドとキャンパスを区画する様に南北に延び、北端は調査区北側に並行する道路付近で西方向へ折れ、西へと延びながら道路の下へ延びる。南北に延びる石垣の総長は、約218mを測る。そのうち今回の調査では、北端から南へ約65mのところまでを解体した。調査範囲にかかる石垣の高さは約550～600cmを測り、石垣には長さ40～63cm、幅28～44cm、厚さ24～35cmの間隔石が基底部から21段積まれている。

(2) 近代の造成について

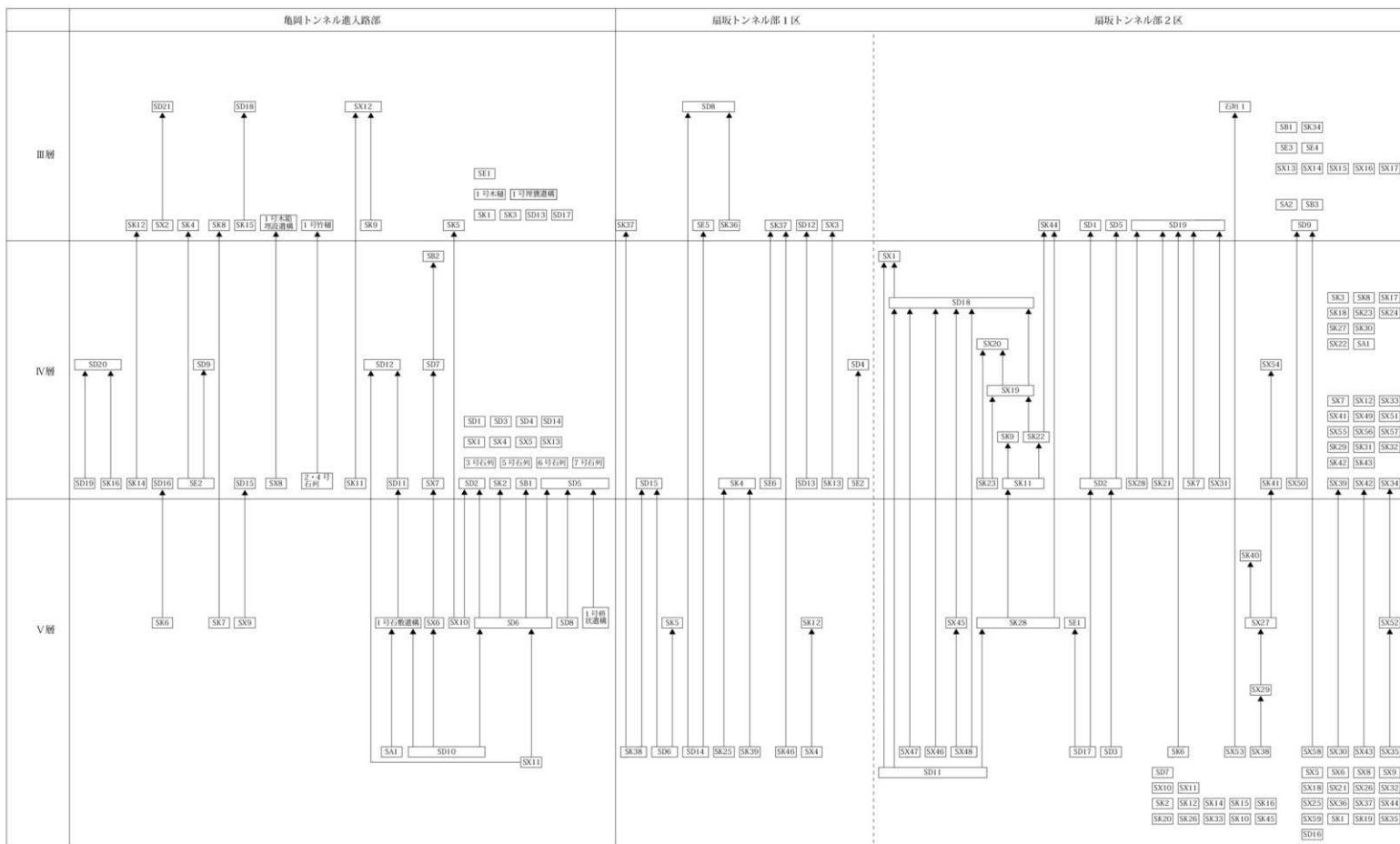
石垣の解体及び調査に際し、ベルト及びトレチを斜面の直行方向に3箇所設定し、石垣裏斜面地の堆積状況を確認し、合わせて平面上で整地層の範囲確認を行なった。その結果、断面において第3章で述べた大別8層の基本層序が確認された。VII～VI層が自然堆積層、V a～V b層、IV a～IV b層、III a・III f・III i～III l層が近世から近代初頭の堆積層、II層が第二師団による盛土及び整地層、I層が現代及びGHQによる盛土である。また断面観察から、III～VII層までが切り土された状況を確認した。平面上では、1号石垣から東へ段丘の上端までIV層～VI層が確認されず、VII層及びVIII層の直上にはIII層が堆積する状況が確認された。また、斜面地においてはIII 1層、IV a層、V a層の分布が見られたが（第308図）、N12ライン以南は分布が見られず段丘疊層まで削られている。

(3) 近代造成のまとめ

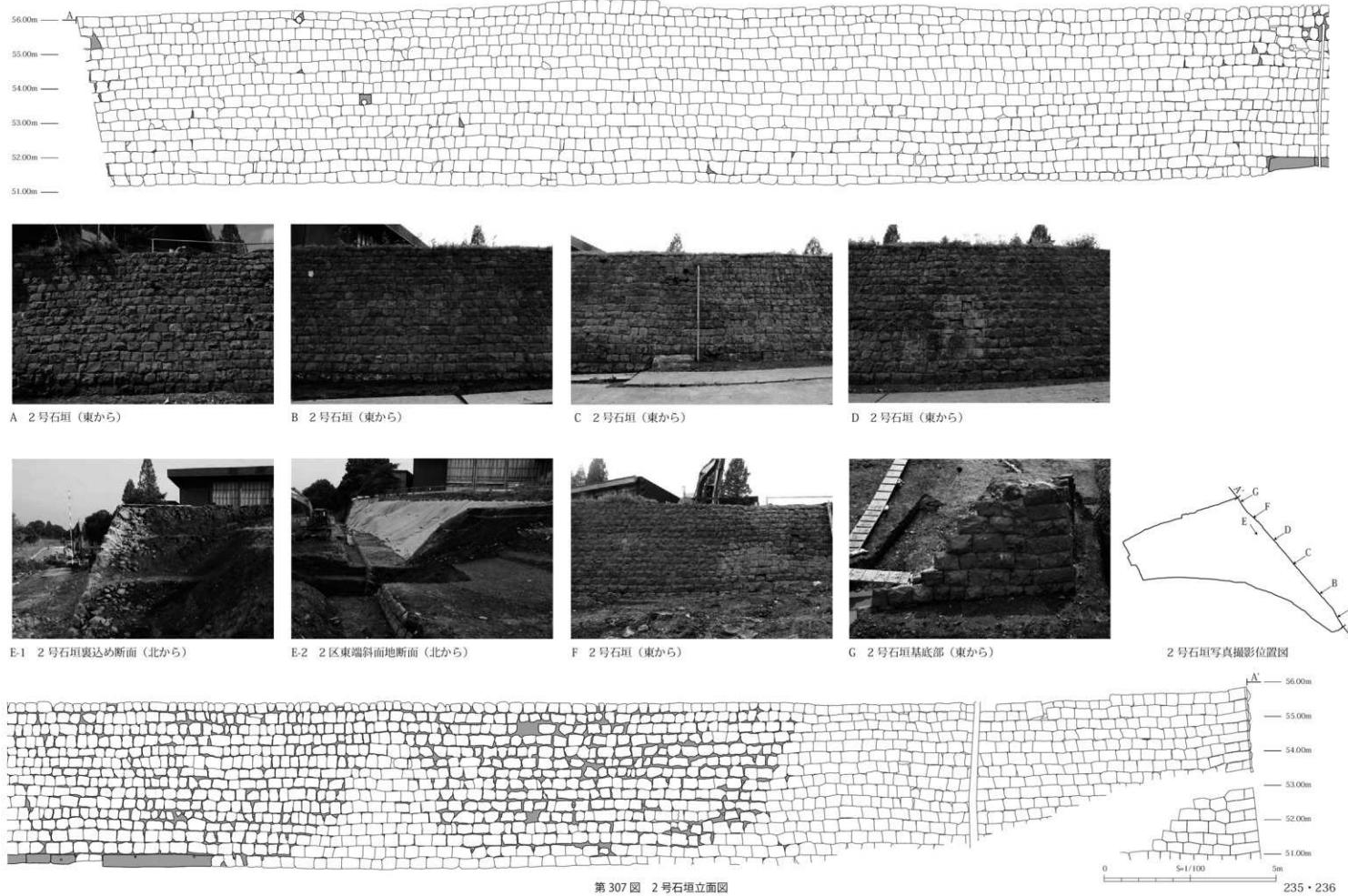
以上のことより、扇坂トンネル部2区東端斜面地の南側は、近世までやや張り出す地形を呈していたと考えられるが、近代以降に大掛かりな土地造成が行なわれ、石垣を設置するために斜面地の下部を削平し、直線的に石垣を設置するため張り出した斜面地を削平したと考えられる。

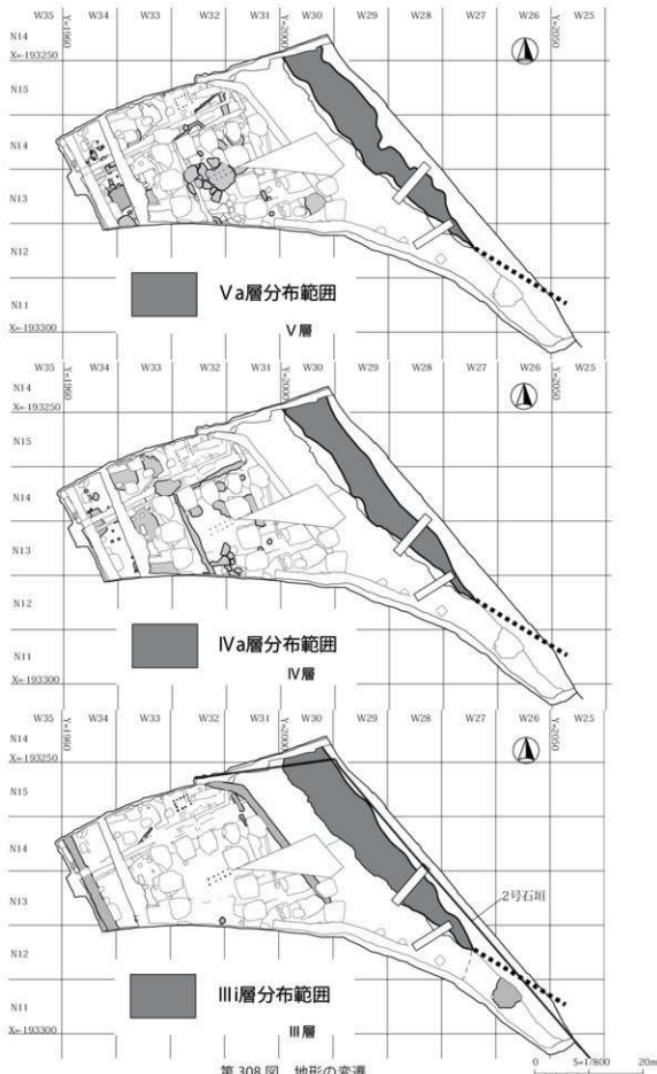


第305図 遺構変遷図



第306図 遺構変遷模式図





第5章まとめ

1. 仙台城跡（扇坂トンネル部1・2区・亀岡トンネル進入路部）は、広瀬川の蛇行と浸食により形成された青葉山から北東に張り出した仙台上町面に立地し、標高は56.5～65.5mである。
2. 発掘調査は、扇坂トンネル部1・2区が平成20年6月20日～平成21年1月30日・平成21年4月1日～平成21年10月30日、亀岡トンネル進入路部が平成21年5月20日～9月14まで行なった。調査面積は、扇坂トンネル部1・2区は延べ4582m²、亀岡トンネル進入路部570m²である。
3. 調査区はいずれも、仙台城跡北側の一角に位置する。調査では主に近世の遺物・遺構が検出された。
4. 亀岡トンネル進入路部
 - (1) 柱列跡1条、建物跡2棟、溝跡21条、井戸跡2基、土坑15基、性格不明遺構12基、石敷遺構1基、石列遺構5条、埋甕遺構1基、木箱埋設遺構1基、竹籠1条、枠状遺構1基、木樋1基、ビット84基で、総数149基を検出した。
 - (2) 遺構の年代は、整地層の堆積状況及び出土遺物から3つの年代に分けられる。V層上面検出以降は17世紀前半～17世紀後半、IV層上面検出遺構は18世紀前半～19世紀前半、III期は19世紀前半～中頃と考えられる。V層上面：調査区中央から東側でSD6やSX6、1号石敷遺構、1号枠状遺構等庭園施設と考えられる遺構を検出した。
 - IV層上面：SD1～3やSB1・2等建物に関する遺構を検出した。
 - III層上面：遺構は、西側に分布しており溝跡、埋甕等を検出した。
- (3) 出土遺物の総点数は1777点を数える。瓦、陶器、磁器、土師質土器、瓦質土器、石製品、木製品、金属製品、錢貨、土製品等が見られた。
- (4) 近世の整地層及び遺構から出土した陶磁器は、674点で、産地は磁器が肥前、瀬戸・美濃、中国、陶器は肥前系（唐津含む）、瀬戸・美濃系（志野・織部含む）、京焼、岸窯、丹波、常滑、大堀相馬、小野相馬、堤焼等である。
5. 扇坂トンネル部1・2区
 - (1) 杭列後1条、柱列跡2条、建物跡3棟、溝跡19条、井戸跡6基、土坑45基、性格不明遺構57基、石垣1基、ビット155基で、総数289基の遺構を検出した
 - (2) 遺構の年代は、遺構出土遺物や遺構の切り合い関係等から3つの年代に分けられる。V層上面検出遺構は18世紀代、IV層上面検出遺構は19世紀前葉～中葉、III層上面検出以降は19世紀中葉～後葉と考えられる。
 - V層上面：SK2・10や、SX52等大型の遺構を検出した。また、SD3・6・7・16の主軸方位に違いが見られる溝跡を検出した。
 - IV層上面：大型で多量の遺物が出土したSK4・38、SX1・50が検出された。SD15・18のように主軸に違いが見られる溝跡やSD2・4・10やSA1、SB2のように主軸が描う遺構が検出された。
 - III層上面：大型で多量の遺物が出土したSK37やSX2を検出した。SD1・5・19やSA2、SB1・3等軸方向が違う遺構を検出した。また、SD9やSX13～16の様な被熱が確認された遺構を検出した。
- (3) 出土遺物の総点数は14499点を数える。土師器、瓦、陶器、磁器、土師質土器、瓦質土器、石製品、木製品、金属製品、錢貨、土製品等が見られた。
- (4) 近世の整地層及び遺構から出土した陶磁器は、4924点である。産地は磁器が、肥前、瀬戸・美濃、切込、中國で、陶器が肥前系（唐津含む）、瀬戸・美濃系（志野・織部含む）、京焼、岸窯、丹波、常滑、大堀相馬、小野相馬、堤焼等である。
- (5) 特記遺物として、III層より近代初頭と考えられる、『支柱式天狗眼鏡』が出土した。

第3部 川内A遺跡

第1章 基本層序

基本層序において、亀岡トンネル進入路部、扇坂トンネル部、川内A遺跡では高低差が35mあり、堆積状況が異なるため個々の調査区毎に層名をついている。以下それぞれの基本層序について調査区毎に述べる。それぞれの対応関係については第309図の柱状図にて示した。

I区の基本層は大別して3層、細別8層が確認されている。I層は現代の盛土である。

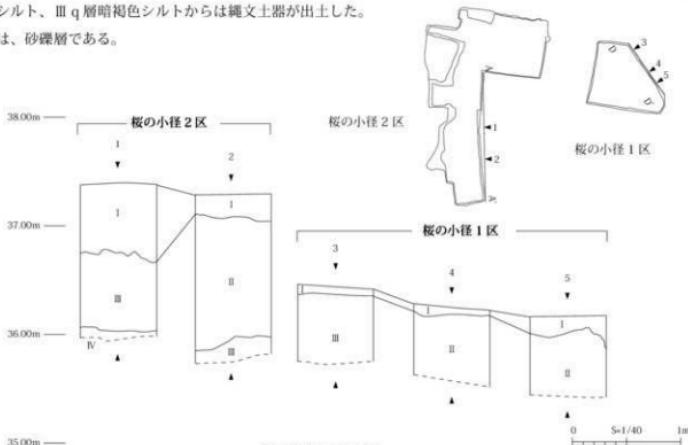
II層はIII①層～III⑥層の6層に細別される。III①層にはぶい黄褐色シルトで、現生する樹木の根攪乱である。後述するIII②層に土質が類似しており同一の層であると考えられる。III③層灰黄褐色砂質シルト、III④層にはぶい黄褐色砂質シルト、III⑤層黄褐色シルト、III⑥層黄褐色シルトは北から南へやや緩やかに傾斜している。IV層は砂礫層である。III層中から、縄文土器の破片が出土している。

II区の基本層は大別して4層、細別20層が確認される。I層は現代の盛土及び碎石、アスファルトである。

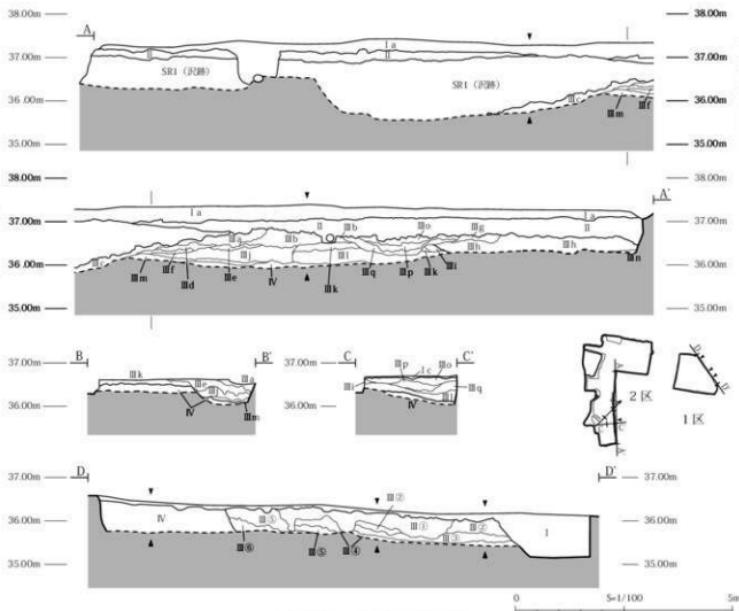
II層は黒褐色砂質シルトで沢跡(SR1)の堆積土直上に堆積しており、ほぼ平坦に堆積している。沢跡(SR1)の堆積土から、銅版転写が施された磁器の碗・皿や第二師団の湯飲み碗・近代のガラス製品等が出土しており、また、焼けた瓦礫や粒径の大きい炭化物、焼土等も検出されていることから、戦後のGHQ駐留にあたり焼土や焼けた瓦礫等を沢の一部に廃棄し、そこにII層の土で整地したと考えられる。

III層はIII a層～III q層の17層に細別される。III a層暗褐色シルト、III c層褐色シルト、III d層褐色シルト、III e層黄褐色シルト、III f層黒褐色砂質シルトは、緩やかに南から北へ傾斜している。III k層は褐灰色粘土質シルトで調査区東壁付近で検出した。調査区壁面では帯状に堆積しているが、北で断絶してしまう。ただし、一段下がったところで同質のIII m層褐灰色粘土質シルトが確認出来る。調査区東側で確認されたIII o層黄褐色シルト、III p層褐色シルト、III q層暗褐色シルトからは縄文土器が出土した。

IV層は、砂礫層である。



第309図 柱状図



第310図 桜の小径壁断面図

層名	土色	土質	粘性	礫まり	備考
I	10YR3/1	黒褐色	砂質シルト	ややあり	あり コンクリート・礫多量
II	10YR3/1	黒褐色	砂質シルト	なし	なし 径 1cm ~ 10cm の礫多量 レンガや多量
III a	10YR3/4	暗褐色	シルト	あり	明褐色粒子微量 広黄褐色粒子微量
III b	10YR6/8	明褐褐色	シルト	あり	あり 黑褐色シルト微量 黑褐色粒子微量
III c	10YR4/4	褐色	シルト	あり	あり 明褐色シルト微量 にふく黄褐色粒子微量
III d	10YR4/6	褐色	シルト	あり	あり 黄褐色粒子微量
III e	10YR5/6	黃褐色	シルト	あり	あり 黄褐色粒子微量
III f	10YR3/2	黒褐色	砂質シルト	あり	あり 黄褐色粘土シルト微量
III g	10YR4/3	にふく黃褐色	砂質シルト	あり	あり 黑褐色シルト微量 径 1cm ~ 3cm や多量
III h	10YR3/4	暗褐色	シルト	なし	あり 径 1cm ~ 10cm の礫多量
III i	10YR4/6	褐色	砂質シルト	あり	あり 明褐色粒子微量 黑褐色粒子微量 径 1cm ~ 3cm の礫微量
III j	10YR6/8	黃褐色	砂質シルト	あり	あり 黄褐色粘土シルトやや多量
III k	10YR6/1	暗褐色	粘質シルト	あり	あり にふく黄褐色シルト微量
III l	10YR6/8	明褐褐色	シルト	なし	あり 浅褐色シルトストーン少量 砂質シルト微量
III m	10YR6/1	暗褐色	粘質シルト	あり	あり 黄褐色粒子微量
III n	10YR5/8	黃褐色	砂質シルト	なし	なし 黄褐色粒子微量
III o	10YR5/6	黃褐色	シルト	ややあり	あり 黄褐色シルト微量 径 1mm の炭化物微量
III p	10YR4/4	褐色	シルト	ややあり ややあり	黒褐色粒子微量 黄褐色粒子微量
III q	10YR3/3	暗褐色	シルト	あり ややあり	黒褐色粒子微量 径 1mm の炭化物微量
IV'	10YR6/8	明褐褐色	砂質	なし ややあり	あり 沙粒(粗粒)と 径 1cm ~ 20cm の礫からなる

第39表 桜の小径2区土層観察表 (A・B・C断面)

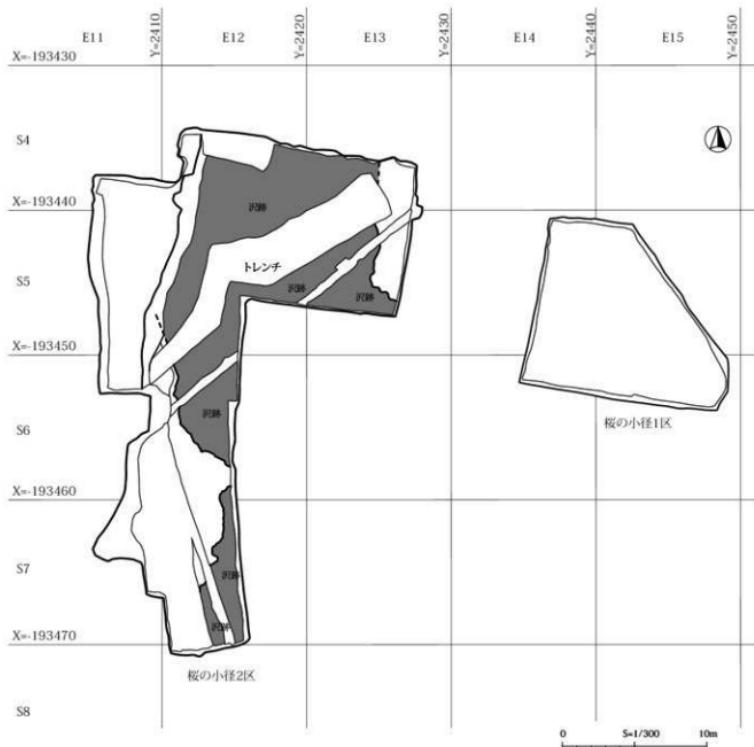
層名	土色	土質	粘性	礫まり	備考
I	10YR6/2	黒褐色	シルト	あり	あり 径 1cm ~ 3cm の礫少量
III (1)	にふく 黄褐色	シルト	あり	あり 黑褐色シルト少量	
III (2)	10YR4/3	にふく 黄褐色	シルト	あり	あり 黄褐色粒子微量 径 1cm ~ 5cm の礫少量
III (3)	10YR4/2	明褐褐色	砂質シルト	あり	あり にふく 黄褐色砂質シルト少量
III (4)	10YR5/3	にふく 黄褐色	砂質シルト	あり	あり 黄褐色シルト少量
III (5)	10YR5/6	黃褐色	シルト	あり	あり 白褐色粒子微量 表面(粗粒)と 径 1cm ~ 20cm の礫からなる
III (6)	10YR5/8	黃褐色	シルト	あり	あり 径 1cm ~ 3cm の礫や多量
IV	10YR6/6	明褐褐色	砂質	なし	なし 砂體(粗粒)と 径 1cm ~ 20cm の礫からなる

第40表 桜の小径1区土層観察表 (D断面)

第2章 検出遺構と遺物

第1節 検出遺構と遺物

桜の小径1・2区の現地調査において、近世以前の遺構は検出されなかった。ただし、1区の調査では調査区全体に広がる沢跡を検出した。また、1・2区において自然堆積層から縄文土器の破片が出土した。



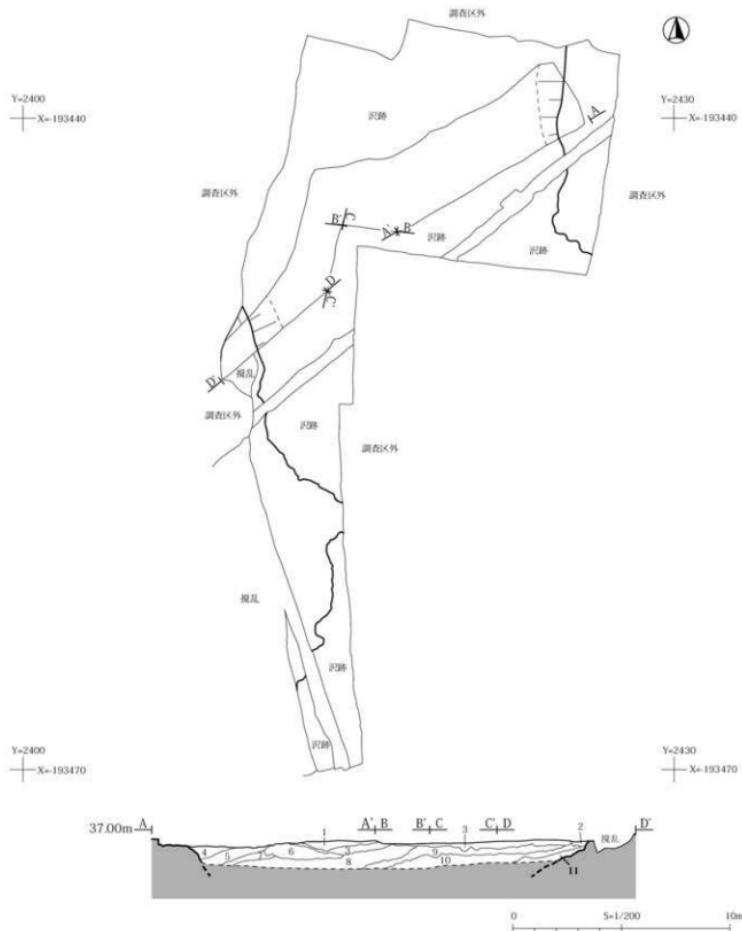
第311図 桜の小径遺構配置図

1) SR1沢跡（第312・313図、図版108-1・2）

N4 ~ 8-W12・13 グリッドに位置する。検出したプランが長大であったため、重機による掘削を行った。2m弱掘削したところで下面から湧水し、断面壁等が崩落したため危険を考慮し1mほど埋め戻して調査をした。検出した規模は、長さ34.61m、幅18.15m、深さ145cm以上を測る。堆積土は11層からなり、1層がシルトで、それ

第1節 検出遺構と遺物

以外の層はシルト質砂である。4・7層は焼土を主体としている。6・8層からは多量の瓦礫が確認された。遺物は、第二師団の器、磁器製品やガラス製品、鉄製品、腐食した革製品等、近代の遺物が多量に出土した。それらのうち、磁器を3点図示した。



第312図 SR1 沢跡平面図・断面図

番号	土色	土質	粘性	しまり	備考
1	10YR4/6	褐色	シルト	あり	あり 径3~5cmの塊少量
2	10YR5/8	黄褐色	シルト質砂	なし	なし 径5cmの塊や多量 径0.5~1cmの炭化物少量
3	10YR3/1	黒褐色	シルト質砂	なし	なし 10YR3/2 黑褐色砂質シルト少量 径1~5cmの塊や多量
4	5YR3/6	暗赤褐色	シルト質砂	なし	なし 10YR3/4 の砂質シルトや多量 径1~3cmの10YR5/8 黄褐色シルト少量
5	10YR3/2	黒褐色	シルト質砂	なし	なし 径5~10cmの塊少量
6	10YR3/3	暗褐色	シルト質砂	なし	なし 径0.3~2cmの5YR4/8 暗褐色シルト質砂ブロック少量 灰塵多量
7	5YR3/4	暗赤褐色	シルト質砂	なし	なし 10YR3/2 黑褐色砂質シルトや多量 径1~3cmの塊や多量
8	10YR3/2	黒褐色	シルト質砂	なし	なし 径1~5cmの5YR4/8 暗褐色シルト質砂ブロックや多量 灰塵多量
9	10YR3/1	黒褐色	シルト質砂	なし	なし 径1cmの塊少量
10	10YR3/2	黒褐色	シルト質砂	なし	なし 10YR5/6 黄褐色シルト少量 径1~3cmの炭化物多量 径1~5cmの塊や多量
11	10YR3/2	黒褐色	シルト質砂	なし	なし 径1~3mmの10YR6/8 黄褐色砂子少量 径1~5mmの炭化物少量

第41表 SR1 沢跡土層觀察表



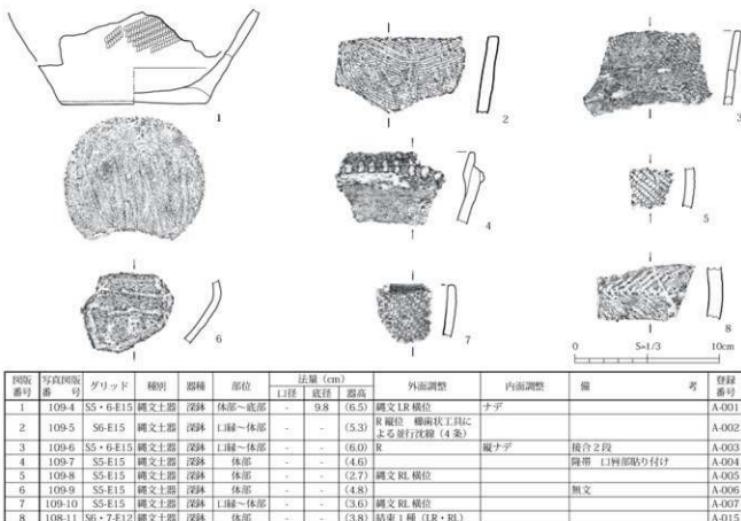
番号	写真図版番号	グリッド	地位	種別	遺物名	部位	脳土	法量(cm)	背地	時期	備考	保管番号
1	109-3	S6-E12	6層	磁器	小杯	口縁~高台	密	5.6	2.3	3.1	- 近代 外面：鋼版軸写「高砂」 裏と把手	J-002
-	110-2	S6-E12	6層	磁器	小杯	口縁~高台	密	5.6	2.0	2.8	- 近代 口縁部：鉄輪 内面：「仙台支部武術大会」記念	J-003
-	110-3	S6-E12	6層	磁器	小杯	口縁~高台	密	5.6	2.1	3.0	- 近代 内面：鋼版軸写「天賀」 第二師団	J-004
2	109-1	S6-E12	8層	磁器	湯呑み瓶	口縁~底	密	(6.5)	3.6	7.5	- 近代 外面：「二工酒屋」 第二師団	J-005
-	110-4	S6-E12	8層	磁器	湯呑み瓶	体部~底	密	-	3.8	(4.4)	- 近代 外面：「附」 高台内：「森永中研」 第二師団	J-006
-	110-7	S6-E12	8層	磁器	湯呑み瓶	口縁~高台	密	(6.3)	3.7	7.4	- 近代 外面：「二工将軍」 第二師団	J-007
-	110-5	S6-E12	8層	磁器	湯呑み瓶	体部~底	密	(6.9)	-	(5.8)	- 口縁部：緑色・重團線 第二師団	J-008
3	109-2	S6-E12	8層	磁器	蓋	上部~底	密	6.2	6.4	1.8	- 表面：「日本海名産」「丸大芸商店」「大」型押し	J-009
-	111-1	S6-E12	8層	ガラス	ワインボトル	上部~底部	-	-	-	18.8	- 近代 オリーブ色	X-001
-	111-2	S6-E12	8層	ガラス	薬瓶?	上部~底部	-	-	-	7.5	- 近代 透明・深青色付着	X-002
-	111-3	S6-E12	8層	ガラス	薬瓶	上部~底部	-	-	-	7.9	- 青色「雅興薬行」「外用ビューアー水」	X-003
-	111-6	S6-E12	8層	ガラス	薬瓶?	上部~底部	-	-	-	2.8	- 近代 緑色	X-004
-	111-4	S6-E12	8層	ガラス	インク瓶	上部~底部	-	-	-	6.1	- 近代 緑色 インク付着	X-005
-	111-5	S6-E12	8層	ガラス	インク瓶	上部~底部	-	-	-	6.8	- 底面「RIGHT INK IN JAPAN」蓋：ゴム製 称：コレク「RIGHT INK」「FOUNTAIN PEN INK」「RIGHT」	X-006

第313図 SR1 沢跡出土遺物

第1節 検出遺構と遺物

III層出土遺物

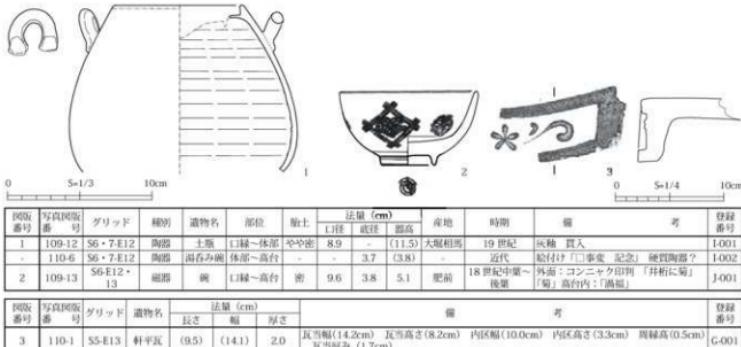
平成20・21年度調査区においてIII層から縄文土器の破片が15点出土した。そのうち8点を図示した。



第314図 III層出土遺物

II層出土遺物

II層は、近代以降の盛土であるが、近世の遺物も出土したため参考資料として、陶器1点、磁器1点、瓦1点を図示した。



第315図 II層出土遺物

第3章 出土遺物と検出遺構について

第1節 出土遺物について

今回2カ年にわたって行なわれた発掘調査では、近世の整地層及び遺構は確認されなかった。出土遺物の多くは沢跡内の堆積土や搅乱及び表土からであった。出土遺物は、縄文土器、陶器、磁器、瓦質土器、土師質土器、石製品、木製品、金属製品、瓦、土製品、その他の遺物等である。総点数は283点を数える。また、その他の遺物は全てガラス製品である(第42表)。

出土層	陶器	磁器	瓦質土器	土師質土器	土製品	石製品	金属製品	木製品	瓦	縄文土器	その他	不明	合計
表土	0	9	0	1	0	0	0	0	7	1	0	0	18
近代遺土	0	3	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	3
自然堆積層	0	0	0	0	0	0	0	0	0	15	0	0	15
沢跡	5	188	2	0	0	0	1	0	0	0	14	0	210
搅乱	10	20	1	0	0	0	3	0	0	0	2	1	37
合計	15	220	3	1	0	0	4	0	7	16	16	1	283

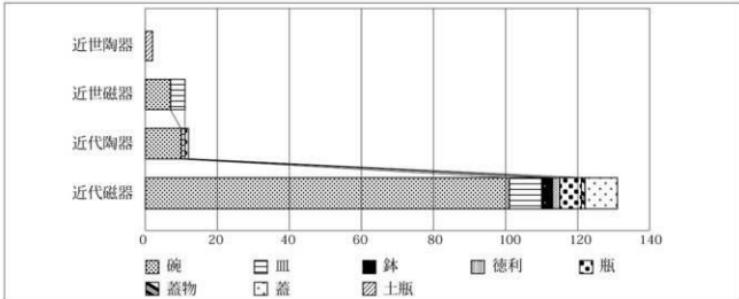
第42表 桜の小径出土遺物一覧表

1 出土した陶磁器について

今回の調査で出土した陶磁器を、整理段階において接合作業を行なった結果、総数は232点となった(第43表、第316図)。そのうち、陶器が16点、磁器が216点と圧倒的に磁器が多い。近世と近代で分けた場合近世陶磁器が13点なのに対し、近代陶磁器は219点を数える。また、近代陶磁器を陶器と磁器で分けた場合、近代陶器は14点で近代磁器は205点と磁器製品が多い。これらの事から、近代において陶器製品より磁器製品が主体となっていたことがうかがえる。

	碗	皿	鉢	徳利	瓶	蓋物	蓋	土瓶	不明
近世陶器	0	0	0	0	0	0	0	2	0
近世磁器	7	4	0	0	0	0	0	0	0
近代陶器	10	1	0	0	1	0	0	0	2
近代磁器	101	9	3	2	6	1	9	0	74

第43表 近世・近代出土陶磁器種別数量表



第316図 近世・近代出土陶磁器種別比率

第2節 検出した沢跡について

2 記名のある遺物について

近代陶器には、銅版転写により図柄が描かれているものが多いが、中には文字が書かれた遺物も見られる。今回出土した近代の遺物にも文字が書かれた遺物がある。それら遺物に記されたものの内容に付いて述べたい。第318図は、磁器製の小杯で外面に文字と絵が施されている。文字は、「高砂」の1行から始まりその後7行が続く。これは、能の演舞の一つである高砂の一幕である「四海波しづかにて～」の一節である。

写真2-1は、見込みに「天賞」と書かれている。この「天賞」とは、宮城県で古くから営まれている酒造会社の一つである天賞酒造（現まるや天賞株式会社 2011年廃業）が製造している酒の一銘柄である。

写真2-2は、ガラス製品で外面の一方には「棚橋樂行」もう一方には「外用ピューアー水」と陽刻されている。側面には、繋ぎ目のバリ跡があることから型作りの大量生産品である。



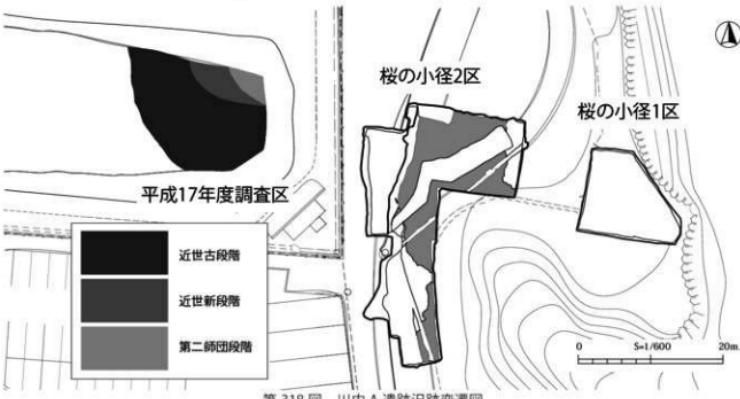
第317図 桜の小径出土遺物



写真2 桜の小径出土遺物

第2節 検出した沢跡について

桜の小径2区において、ほぼ調査区全面に広がる沢跡を検出した。また、平成17年度に行なわれた発掘調査（仙台市 2007）において調査区北東隅で沢跡（SR1）が検出されている（第318図）。この平成17年度調査区で検出された沢跡は、近世の整地土によって徐々に埋められており最後に第二師団の盛土で上面が覆われていることから、第二師団の頃には完全に埋め立てられていたと考えられる。本調査区で検出された沢跡からも、第二師団の食器類や近代のガラス製品が多く出土したことから、第二師団以降に埋め立てられたと考えられる。これらのことから、北西方向から時間をかけて徐々に沢を埋めで行き、第二師団以降にはこの沢がほぼ完全に埋め立てられ、現在の地形となっていたと考えられる。また、沢を埋めたところに建物と考えられる痕跡は確認されなかったため、埋め立てられたが空き地のような場所であったと考えられる。



第318図 川内A 遺跡沢跡変遷図

第4章まとめ

1. 川内A遺跡は、広瀬川の蛇行と浸食により形成された青葉山から北東に張り出した仙台下町面に立地し、標高は36.1～37.5mである。
2. 発掘調査は、平成20年11月10日～18日、平成21年8月20日～9月17日まで行なった。調査面積は延べ536m²である。
3. 両調査区は、川内A遺跡内の東側に位置し、両調査区の南側には千貫沢が流れる。主に近代の遺物が出土した。また、縄文土器の破片が少量出土している。
4. 2カ年に亘る調査で、沢跡1基を確認した。
5. 沢跡は、多量の近代遺物や焼土、瓦礫等を含んでおり、近代以降に埋め立てられたと考えられる。
6. 出土遺物の総数は283点を数え、主に近代の遺物である。近代の陶磁器が半数以上を占めており、特に近代磁器は205点で出土遺物の7割を占める。
7. 平成17年度の調査区（仙台市 2007）においても沢跡の一部が検出されており、こちらの沢跡は近世の頃より徐々に埋め立てられ、第二師団の頃には完全に埋められている。今回の調査でも第二師団以降に埋め立てられていることが確認できたことにより、西側から時代の移り変わりと共に徐々に埋め立てられていったと考えられる。
8. 基本土層中において帯状に堆積するⅢk層に含まれる火山灰の特定を狙って、科学分析に出したが、結果として、層中に含まれる火山灰が特定不能であったため、今回本報告に取り上げることはしなかった。

第4部 過年度調査区の概要

平成16年度より開始された、高速鉄道東西線建設に伴う仙台城跡北辺部分や川内A遺跡の確認及び試掘調査により近世の遺構・遺物が確認された。これらの成果を踏まえ仙台城跡や川内A遺跡において本調査が行なわれ、その結果試掘の成果どおり近世を主体とする遺構や遺物が多く検出された。ここでは、それら過去の調査区の成果について概略を述べたい。(第319図、第44表)。

仙台城跡

仙台城跡の北辺部分では、2度の試掘調査が行われた。平成16年度の試掘調査では、A～Dの4つの調査区で試掘調査が行なわれた。そのうち、仙台城跡の範囲に該当するのがC区である。C区では5箇所のトレントを設定し、平成16年8月18日～9月3日まで試掘調査が行なわれ、土坑1基、性格不明遺構7基、ピット6基を検出した。遺物は17世紀代～19世紀代の陶磁器が出土した。平成17年度の試掘調査では、A～Hの8つの調査区で試掘調査が行なわれた。平成17年度の試掘調査区で該当する調査区は、C・E～G区である。C区ではトレントを1箇所設定し、平成17年7月25日～8月30日まで試掘調査を行なった。土坑3基、溝跡4条、性格不明遺構3基、ピットを2基検出した。遺物は17世紀代～19世紀代の陶磁器が出土した。E区では3箇所のトレントを設定し、平成17年7月25日～8月30日まで試掘調査を行なった。性格不明遺構5基、ピット24基を検出した。遺物は17世紀代～19世紀代の陶磁器が出土した。F区ではトレントを3箇所設定し、平成17年8月4日～8月30日まで試掘調査を行なった。遺構は検出されなかつたが、近世の陶磁器が出土した。G区では5箇所のトレントを設定し、平成17年8月29日～9月20日まで試掘調査を行なった。性格不明遺構6基、ピット9基を検出した。遺物は17世紀代～19世紀代の陶磁器が出土した。以上の試掘調査の成果から、周辺に近世の遺構・遺物が存在すると考えられる事から、本調査への運びとなった。

本調査は、平成18年度より開始した。平成18年度の調査は、平成18年6月5日～平成19年2月26日まで調査を行なった。柱列跡24条、溝跡42条、井戸跡6基、土坑52基、性格不明遺構16基、石垣2基、池跡5基、埋甕1基、祭祀遺構1基、竹櫛2条、道路状遺構1条、土手状遺構1基、枠状遺構2基、木櫛4条、ピット257基を検出した。遺物は、17世紀代～19世紀代の陶磁器や土師質土器、瓦質土器、土製品、金属製品、木製品、瓦、繩文土器等が出土している。平成19年度の調査は、平成19年4月23日～平成20年2月1日まで調査を行なった。柱列跡8条、建物跡3棟、溝跡43条、井戸跡4基、土坑127基、正確不明遺構46基、池跡3基、階段状遺構1基、上水施設1基、木櫛1条、ピット267基を検出した。遺物は、16世紀末～19世紀代の陶磁器、土師質土器、瓦質土器、土製品、金属製品、木製品、瓦等が出土した。また、宮城県内では2例目となる鍋島焼が、SX21および池1から1点ずつ出土している。平成21年度には本報告書で報告している亀岡トンネル進入部の北側で同年次に、北方武家屋敷第2次発掘調査が行なわれた。この調査では、柱列跡1条、溝跡1条、井戸跡1基、土坑8基、性格不明遺構2基、ピット99基を検出した。遺物は、繩文土器、非クロコロ土師器、ロクロ土師器、13世紀代～19世紀代の陶磁器、土師質土器、瓦質土器、土製品、金属製品等が出土している。平成18・19年度の調査では区画施設と考えられる溝跡や建物跡が検出されているが、近世の各時期に亘ってほぼ同じような主軸方位を示しており、ある一定の規格を踏襲していることが窺える。この他、本報告書の調査区でも検出されている池跡や建物跡等が両年度の調査区でも検出されていることから、これら一連の調査区は絵図に見られる武家屋敷の屋敷地内であることが窺える。ただし、これらの施設が絵図のどの屋敷のものであるかは未だ不明瞭であり、また場所推定の要となる通跡が検出されていないことから、調査区の位置も推測の域を出ない。遺物の出土傾向として、

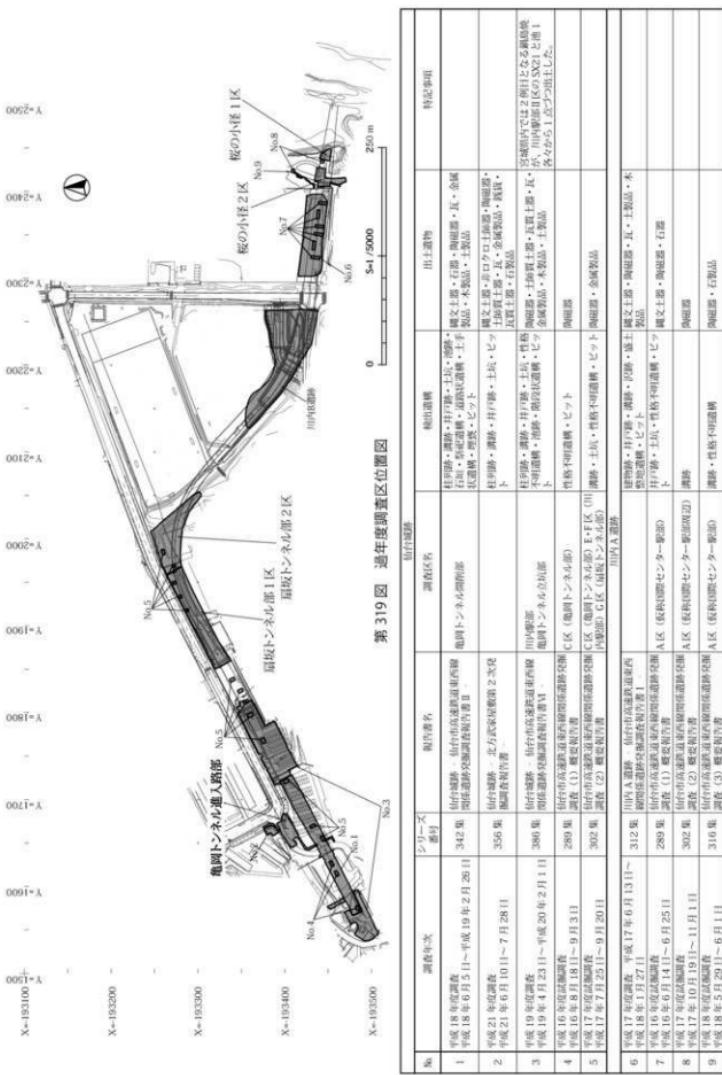
17世紀代の陶磁器は肥前産系が多くを占めるが、陶器のみで見た場合、瀬戸・美濃産の陶器が多くなる。また、磁器だけを見た場合において、平成18年度の調査区では中国産の磁器が多く見られる傾向を示している。この他に、僅かではあるが岸窯産や丹波産の陶器が見られる。18世紀代では、肥前産の陶磁器の占める割合が多くなり、特に磁器が占める量が多くなる。ただし、陶器の出土の割合は減る傾向を示す。また、瀬戸・美濃産も陶器の出土量が絶る。この頃より大堀相馬産の陶器が多く出土する傾向も見られ、陶器だけで見た場合、肥前産や瀬戸・美濃産の陶器より多く出土する。この他に京焼の出土量がやや増え、小野相馬産の陶器が見られるようになる。19世紀代では、陶磁器の出土量は肥前産がもっとも多く次いで大堀相馬産が多く見られる傾向を示す。また、瀬戸・美濃産の磁器が出土し始め、肥前産の磁器よりも占める割合が大きくなる。また、陶器だけで見た場合、大堀相馬産の占める割合は更に大きくなり、他の堤産や在地産と考えられる陶器や切込産磁器の出土も見られるようになる。

以上のことから、17世紀代は肥前産と瀬戸・美濃産が出土する割合の多くを占め、18世紀代は磁器では肥前産が、陶器では大堀相馬産が割合の多くを占める。19世紀代になると、更に大堀相馬産陶器が占める割合が多くなり、磁器に関しては瀬戸・美濃産磁器が多くを占めるようになる。また、大堀相馬産陶器の出土量が多くなる事と、東北産の焼物が多く見られるようになる。

川内A遺跡

川内A遺跡は、3度の試掘調査が行なわれている。平成16年度では、該当する調査区はA区で6箇所のトレチを設定し、平成16年6月14日～6月25日まで試掘調査を行なった。これにより、井戸跡1基、土坑2基、性格不明遺構6基、ピット8基を検出した。遺物は、17世紀代～19世紀代の陶磁器が出土した。この成果内容を踏まえ、周辺には近世の遺構・遺物が存在すると考えられる事から、平成16年7月15日付で「川内A遺跡」として遺跡登録をされた。平成17年度も同じくA区で2箇所のトレチを設定し、平成17年10月19日～11月1日まで試掘調査を行なった。溝跡を1基検出した。遺物は、縄文土器や17世紀代～18世紀代の陶磁器が出土した。18年度も同じくA区で1箇所のトレチを設定し、平成18年5月29日～6月1日まで試掘調査を行なった。遺構は、溝跡1基、性格不明遺構1基を検出した。遺物は、縄文土器、17世紀代～19世紀代の陶磁器、土師質土器、石製品、瓦等が出土した。

本調査は平成17年度に行なわれており、この発掘調査の成果を締めた報告書が高速鉄道東西線関係遺跡の第1冊目に当たる。遺構は、柱穴跡1条、溝跡3条、井戸跡3基、沢跡1基、性格不明遺構9基を検出した。遺物は、縄文土器、17世紀代～19世紀代の陶磁器、土師質土器、瓦質土器、石製品、木製品、金属製品等が出土した。検出された沢跡は近世の頃より埋められていて、第二師団によって完全に埋め立てられていた。また、本報告書で報告している川内A遺跡2区においてもSRI(沢跡)が検出されたが、こちらも第二師団以降に埋め立てられている。この事から、沢が時代と共に徐々に埋め立てられていったと考えられる。



第44表 過年度調査区選択一覧表

参考文献

- 阿刀田令造 1936『仙台城下絵図の研究』齊藤恩思博物館図書部研究報告4
- 岩沼市教育委員会 2011『西須賀原遺跡』宮城県岩沼市文化財調査報告書10集
- 内田正男 1975『日本勝利原典』雄山閣
- 江戸遺跡研究会編 2001『闇解 江戸考古学研究辞典』柏書房
- 大橋康二構成 2002『萬葉猪口辞典』平凡社
- 旧芝離宮庭園調査会 1998『旧芝離宮庭園 浜松町駅高架式歩行者架設工事に伴う発掘調査報告』
- 坂田啓編 1995『私本仙台藩主辞典』創栄出版
- 新宿区市谷榮王寺町遺跡調査会 1998『市谷榮王寺町遺跡II 東京都住宅供給公社「トミンハイム榮王寺」建設に伴う緊急発掘調査』
- 新宿区筑土八幡町遺跡調査会 1996『筑土八幡町遺跡 東京消防庁半蔵消火署新設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』
- 新宿区遺跡調査会 1994『矢来町遺跡一区立矢来町区民住宅建設に伴う緊急発掘調査報告書』
- 新宿区内藤町遺跡調査会 1992『内藤町遺跡 - 放射5号線整備事業に伴う緊急発掘調査報告書』
- 財團法人渕戸市文化振興財团 2006『江戸時代のやきもの一生産と流通』記念講演会・シンポジウム資料会
- 財團法人渕戸市文化振興財团 2006『江戸時代のやきもの一生産と流通』平成18年度財團法人渕戸市文化振興財团埋蔵文化財センター企画展図録
- 仙台市教育委員会 1985『仙台城三ノ丸跡』仙台市文化財調査報告書76集
- 仙台市教育委員会 2002『仙台城跡 1-平成13年度調査報告書』仙台市文化財調査報告書259集
- 仙台市教育委員会 2003『仙台城跡 2-平成14年度調査報告書』仙台市文化財調査報告書264集
- 仙台市教育委員会 2004『仙台城跡 3-平成15年度調査報告書』仙台市文化財調査報告書270集
- 仙台市教育委員会 2004『仙台城跡 4-平成15年度調査報告書』仙台市文化財調査報告書271集
- 仙台市教育委員会 2005『高速鉄道東西線関係遺跡発掘調査(1)概要報告書』仙台市文化財調査報告書289集
- 仙台市教育委員会 2006『高速鉄道東西線関係遺跡発掘調査(2)概要報告書』仙台市文化財調査報告書302集
- 仙台市教育委員会 2007『高速鉄道東西線関係遺跡発掘調査(3)概要報告書』仙台市文化財調査報告書316集
- 仙台市教育委員会 2007『川内A遺跡-仙台市高速鉄道東西線関係遺跡発掘調査I-』
- 仙台市教育委員会 2008『仙台城跡-仙台市高速鉄道東西線関係遺跡発掘調査報告書I-』
- 仙台市教育委員会 2010『仙台城跡 10-平成21年度調査報告書-仙台城本丸大広間跡調査成果の総括』仙台市文化財調査報告書316集
- 仙台市環境計画課編・松本秀明監修 2001『せんだい空中写真集-杜の都いまむかし』仙台市環境課
- 仙台市史編纂委員会 1975『仙台市史8 文書・資料・古代-近世資料篇』
- 仙台市史編纂委員会 1975『仙台市史9 文書・資料・近世-明治資料篇』
- 仙台市史編纂委員会 1975『仙台市史10 年表・書目・索引篇』
- 仙台市史編さん委員会 1994『仙台市史特別編1 自然』
- 仙台市史編さん委員会 1995『仙台市史特別編2 考古資料』
- 仙台市史編さん委員会 2002『仙台市史通史編3 近世1』
- 仙台市史編さん委員会 2003『仙台市史通史編4 近世2』
- 仙台市史編さん委員会 2004『仙台市史通史編5 近世3』
- 高倉淳ほか編 1994『絵図・地図で見る仙台第一輯』今野印刷株式会社
- 高倉淳ほか編 1994『絵図・地図で見る仙台第二輯』今野印刷株式会社
- 地下鉄7号線福池・駒込間遺跡調査会 1997『福池遺跡』地下鉄7号線福池・駒込間遺跡発掘調査報告書7-1
- 東京都埋蔵文化財センター 2003『港区宇和島篠島屋敷跡遺跡-政策研究大学院大学建設に伴う調査』東京都埋蔵文化財調査報告第141集
- 東京都埋蔵文化財センター 2006『尾張藩上屋敷跡遺跡X II 防衛庁新設建物建設工事に伴う調査』東京都埋蔵文化財調査報告第180集
- 東京都埋蔵文化財センター 2006『沙留跡跡N-旧沙留貨物駅跡地内の調査-』東京都埋蔵文化財センター 第189集
- 東北大学埋蔵文化財研究センター 1993『東北大大学埋蔵文化財調査年報6』
- 東北大学埋蔵文化財研究センター 1994『東北大大学埋蔵文化財調査年報7』
- 東北大学埋蔵文化財研究センター 1997『東北大大学埋蔵文化財調査年報8』
- 東北大学埋蔵文化財研究センター 1998『東北大大学埋蔵文化財調査年報9』
- 東北大学埋蔵文化財研究センター 1998『東北大大学埋蔵文化財調査年報10』
- 東北大学埋蔵文化財研究センター 2000『東北大大学埋蔵文化財調査年報11』
- 東北大学埋蔵文化財研究センター 2000『東北大大学埋蔵文化財調査年報13』

引用・参考文献

- 東北大大学埋蔵文化財研究センター 2005『東北大大学埋蔵文化財調査年報 18』
東北大大学埋蔵文化財研究センター 2006『東北大大学埋蔵文化財調査年報 19』第 1 分冊
東北大大学埋蔵文化財研究センター 2007『東北大大学埋蔵文化財調査年報 19』第 2 分冊
東北大大学埋蔵文化財研究センター 2008『東北大大学埋蔵文化財調査年報 19』第 3 分冊
東北大大学埋蔵文化財研究センター 2009『東北大大学埋蔵文化財調査年報 19』第 4 分冊
東北大大学埋蔵文化財研究センター 2010『東北大大学埋蔵文化財調査年報 19』第 5 分冊
東北大大学埋蔵文化財調査室 2011『東北大大学埋蔵文化財調査室調査報告 1 仙台城跡二の丸北方武家屋敷地区第 11 地点・第 12 地点
－仙台市高速鉄道東西線機能補償機関調査報告書－』
特別展「みしま～三島駅から三島茶碗へ～」実行委員会 2001『みしま～三島駅から三島茶碗へ～』
兵庫埋蔵調査会 1996『日本出土銭鑑』
福島市教育委員会 1994『井窯－近世窯跡の調査－』
松本秀明・熊谷真樹 2010『広瀬川中流部における完新世の川床高度変化に関する知見』『東北地理学会・北海道地理学会共催秋季学術大会発表要旨 季刊地理学』Vol.63
宮城県宮崎町教育委員会 1990『切込窯跡』宮崎町文化財調査報告書第 3 集
森本伊知郎 2009『近世陶磁器の考古学－出土遺物から見た生産と消費』相山女子大学研究叢書 35 雄山閣
山崎信二 2008『近世瓦の研究』同成社

写真図版



1. 亀岡トンネル進入路部南壁



2. 亀岡トンネル進入路部南壁



3. 亀岡トンネル進入路部南壁



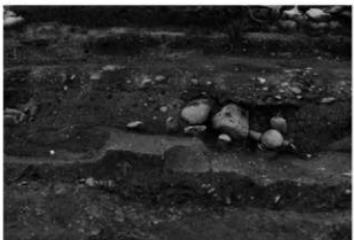
4. 亀岡トンネル進入路部北壁



5. 亀岡トンネル進入路部北壁

図版1 亀岡トンネル進入路部壁面（1）

検出構写真



1. 亀岡トンネル進入路部北壁



2. 亀岡トンネル進入路部北壁



3. 亀岡トンネル進入路部北壁



4. 亀岡トンネル進入路部北壁



5. 亀岡トンネル進入路部北壁



6. 亀岡トンネル進入路部北壁



7. 亀岡トンネル進入路部北壁



8. 亀岡トンネル進入路部北壁

図版2 亀岡トンネル進入路部壁面（2）



1. 亀岡トンネル進入路部北壁



2. 亀岡トンネル進入路部北壁



3. 亀岡トンネル進入路部北壁



4. SA1 完掘（北から）



5. SD6 西側積石



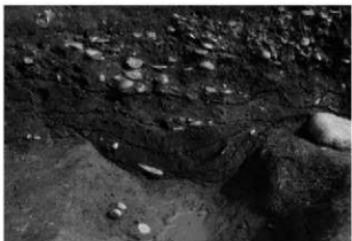
6. SD6 積石（南東から）



7. SD6 完掘（南東から）

図版3 亀岡トンネル進入路部壁面 (3)・V層上面遺構 (1)

検出遺構写真



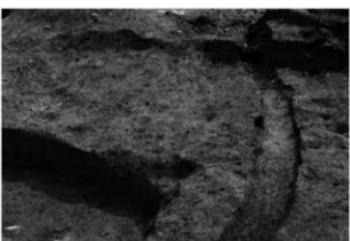
1. SD8 断面（南から）



2. SD8 完成（西から）



3. SD10 断面（西から）



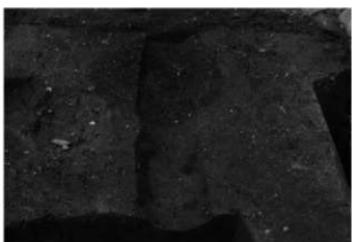
4. SD10 完成（東から）



5. SD16 断面（南から）



6. SD16 完成（南から）

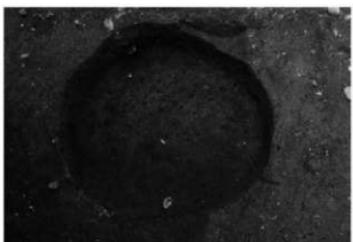


7. SK6 断面（南から）



7. SK6 完成（南から）

図版4 龜岡トンネル進入路部V層上面遺構（2）



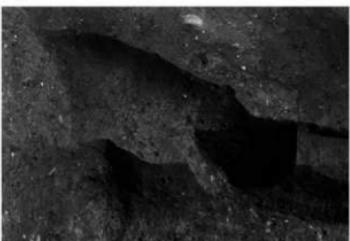
1. SK6 完掘（南から）



2. SK7 完掘（南から）



3. SX6 完掘（南から）



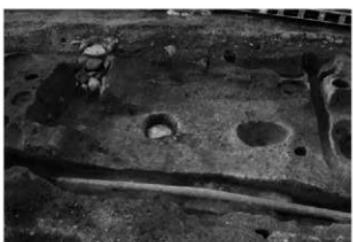
4. SX9 完掘（西から）



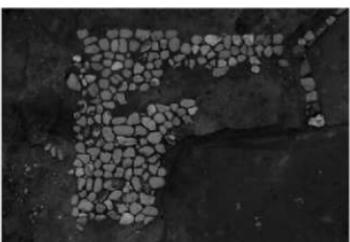
5. SX10 完掘（北から）



6. SX11 断面



7. SX11 完掘（南から）



8. 1号石敷遺構横断状況

図版5 龜岡トンネル進入路部V層上面遺構（3）

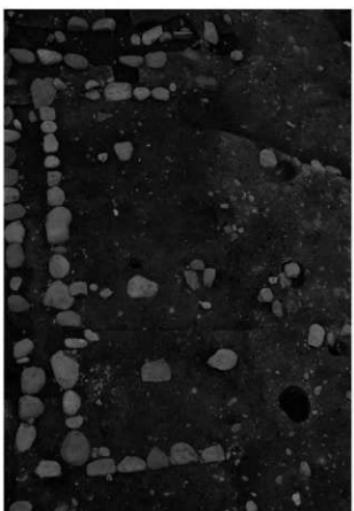
検出遺構写真



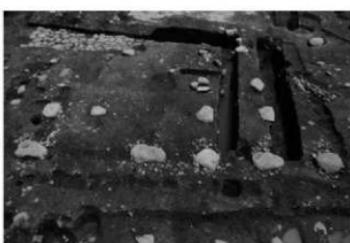
1.1号橋状遺構検出状況（南から）



2.1号橋状遺構完掘（南から）



3.5B1 検出状況（南から）

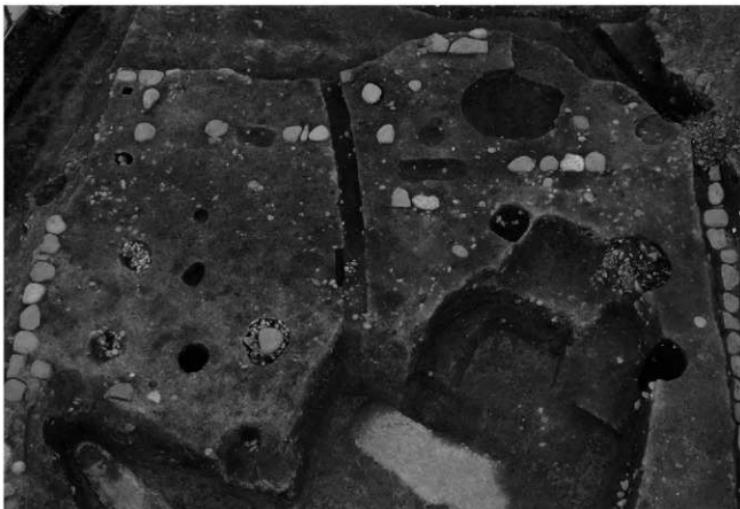


4.SB1 検出状況（西から）

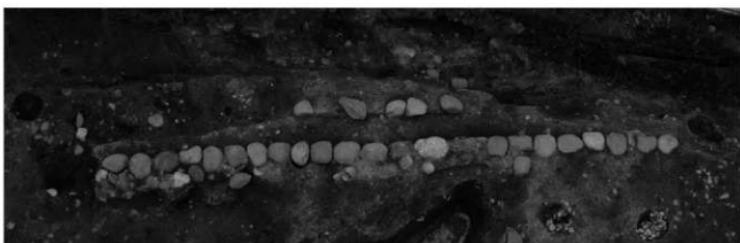


5.SB2 P20 検出状況

図版 6 龜岡トンネル進入路部V層上面遺構（4）・IV層上面遺構（1）



1. SB2 棲出状況（西から）



2. SD1 棲出状況（南から）



3. SD1 断面（西から）



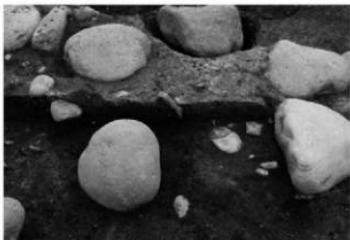
4. SD2 東側検出状況（西から）

図版7 龜岡トンネル進入路部IV層上面遺構（2）

検出遺構写真



1. SD2 断面（西から）



2. SD2 断面（西から）



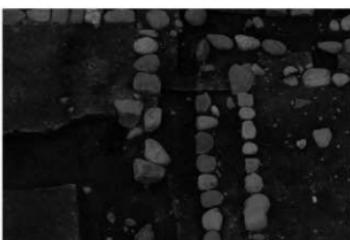
3. SD2 東側発掘（南から）



4. SD2 西側発掘（東から）



5. SD3 断面（南から）

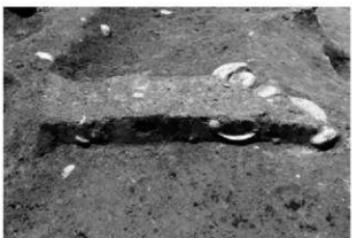


7. SD3 発掘（南から）



6. SD3 遺物出土状況

図版8 龜岡トンネル進入路部IV層上面遺構（3）



1. SD4 断面（西から）



2. SD4 完掘（北から）



3. SDS 断面（西から）



4. SDS 完掘（東から）



5. SD7 完掘（西から）



6. SD9 柱材模出状況



7. SD9 完掘（南から）

図版9 龜岡トンネル進入路部Ⅳ層上面遺構（4）

検出遺構写真



1. SD11 断面（南から）



2. SD11 完掘（東から）



3. SD12 断面（西から）



4. SD12 断面（南から）



5. SD12 完掘（北から）



6. SD14 断面（南から）



7. SD14 完掘（南から）

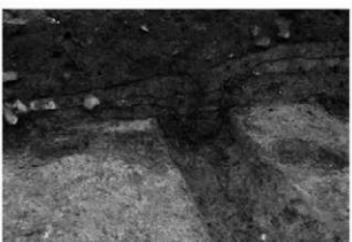
図版 10 龜岡トンネル進入路部IV層上面遺構（5）



1. SD15 断面（南から）



2. SD15 完掘（北から）



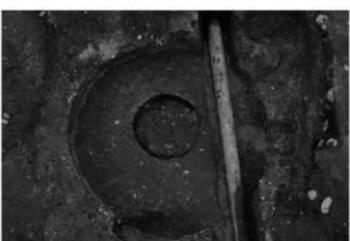
3. SD19 断面（南から）



4. SD19 完掘（南から）



5. SE2 断面（南から）



6. SE2 完掘（西から）



7. SK2 断面（南から）



8. SK2 遺物出土状況

図版 11 亀岡トンネル進入路部IV層上面遺構（6）

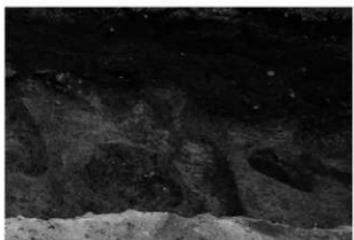
検出遺構写真



1. SK11 断面（南から）



2. SK16 断面（西から）



3. SK14・16 完掘（南から）



4. SX1 緊出状況（南から）



5. SX4 緊出状況（東から）



6. SX4 断面（北から）



7. SK5 緊出状況（南から）



8. SX7 断面（南から）

図版 12 龜岡トンネル進入路部IV層上面遺構（7）



1. SX7 完掘（西から）



2. SX8 断面（西から）



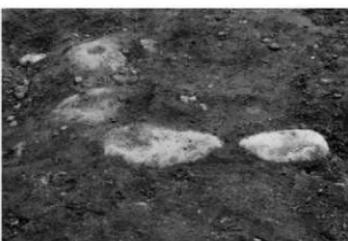
3. SX8 完掘（西から）



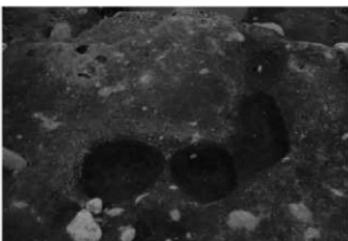
4. SX13 断面（北から）



5. 2号・4号石列検出状況（南から）



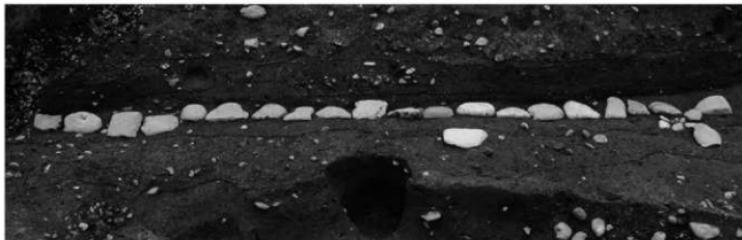
6. 3号石列検出状況（北から）



7. 3号石列完掘（南から）

図版 13 亀岡トンネル進入路部IV層上面遺構（8）・III層上面遺構（1）

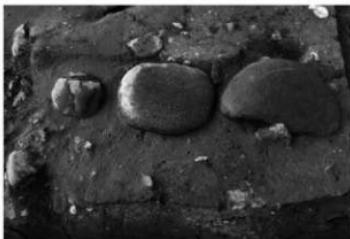
検出遺構写真



1.5号石列検出状況（北から）



2.6号石列検出状況（北から）



3.7号石列検出状況（南から）



4.SD13断面（南から）



6.SD17検出状況（北から）



5.SD13検出状況（南から）

図版 14 龜岡トンネル進入路部Ⅲ層上面遺構（2）



1. SD18 棟出状況（北から）



2. SD20 棟出状況（南から）



3. SD20 断面（南から）



4. SD21 棟出状況（南から）



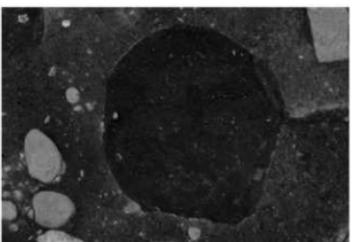
5. SE1 側板検出状況（南から）

図版 15 龜岡トンネル進入路部Ⅲ層上面遺構（3）

検出遺構写真



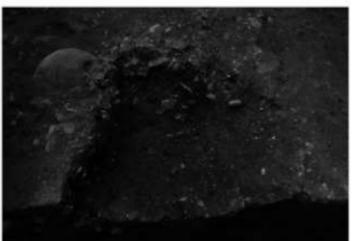
1. SK1 断面（南から）



2. SK1 完掘（南から）



3. SK3 完掘（東から）



4. SK4 完掘（南から）



5. SK5 断面（南から）



6. SK8 断面（西から）

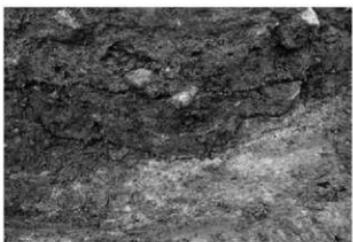


7. SK8 完掘（南から）



8. SK9 断面（西から）

図版 16 龜岡トンネル進入路部Ⅲ層上面遺構 (4)



1. SK12 断面（南から）



2. SK13 断面（南から）



3. SK15 完掘（南から）



4. SK2 断面（東から）



5. SK2 断面（南から）



6. SK2 遺物出土状況



7. SK2 完掘（南から）

図版 17 亀岡トンネル進入路部Ⅲ層上面遺構 (5)

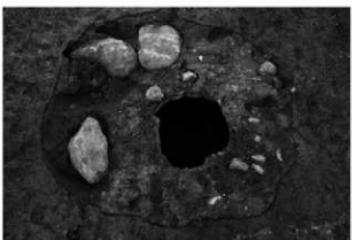
検出遺構写真



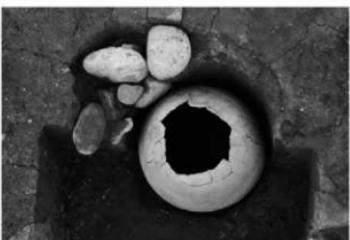
1.5X12 遺物出土状況（東から）



2.5X12 完掘（南から）



3.1号埋甕遺構横様出状況（南から）



4.1号埋甕遺構方様出状況（南から）



5.1号埋甕遺構断面（南から）



6.1号竹桶断面（西から）



7.1号竹桶完掘（西から）

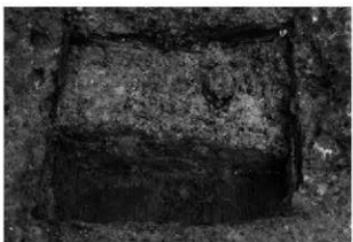
図版 18 亀岡トンネル進入路部Ⅲ層上面遺構（6）



1.1号木積断面（南から）



2.1号木積断面（西から）



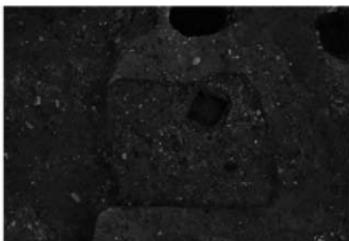
4.1号木箱埋設構造断面（西から）



3.1号木積完掘（南から）



5.1号木箱埋設構造木製品模出状況（西から）



6.1号木箱埋設構造完掘（西から）

図版 19 龜岡トンネル進入路部Ⅲ層上面遺構（7）

出土遺物写真

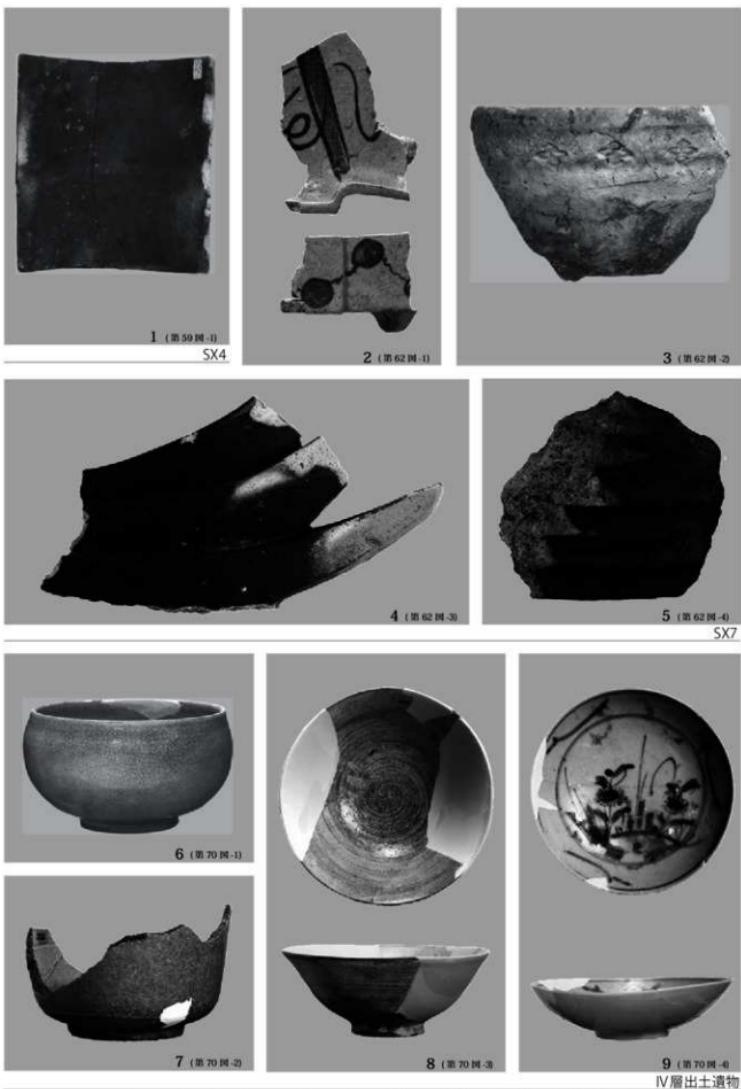


図版 20 龜岡トンネル進入路部V層上面遺構出土遺物

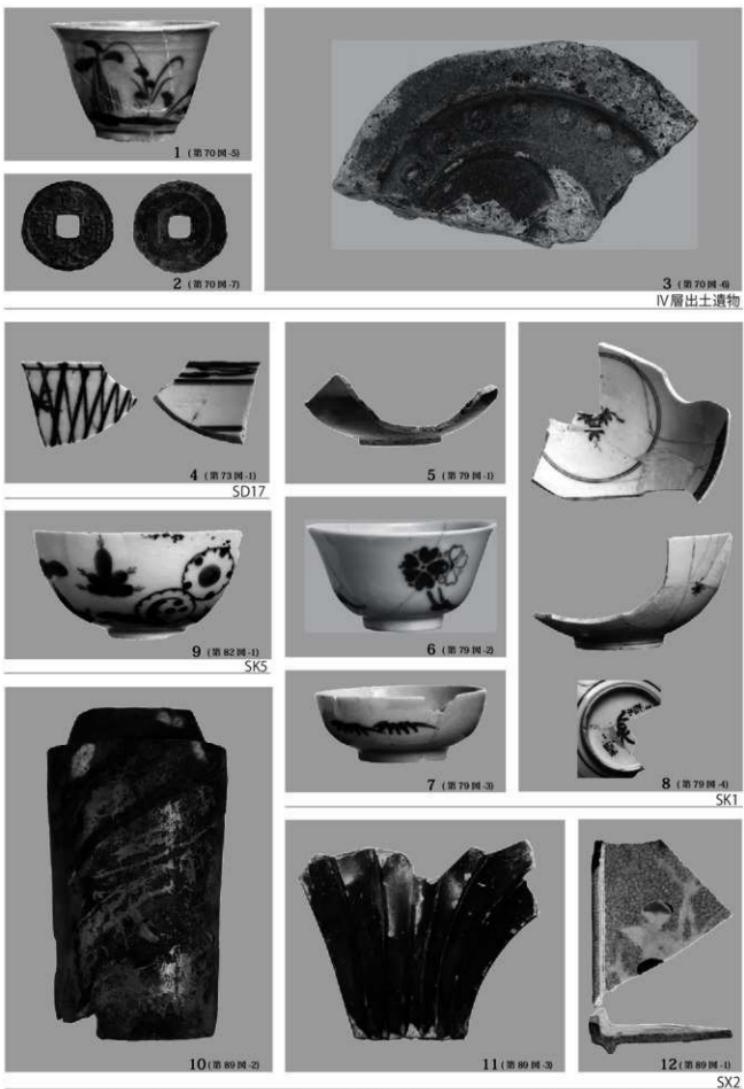


図版 21 亀岡トンネル進入路部IV層上面遺構出土遺物(1)

出土遺物写真



図版 22 亀岡トンネル進入路部IV層上面造構出土遺物(2)・造構外出土遺物(1)



図版 23 龜岡トンネル進入路部IV層遺構外出土遺物(2)・III層上面遺構出土遺物(1)

出土遺物写真



1 (第90図-1)
SX12



3 (第92図-1)
1号竹桶



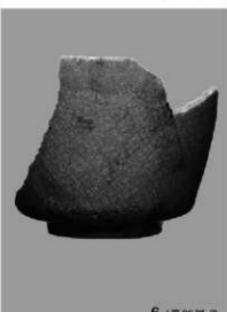
2 (第91図-1)
1号埋甕遺構



4 (第96図-1)



5 (第96図-2)



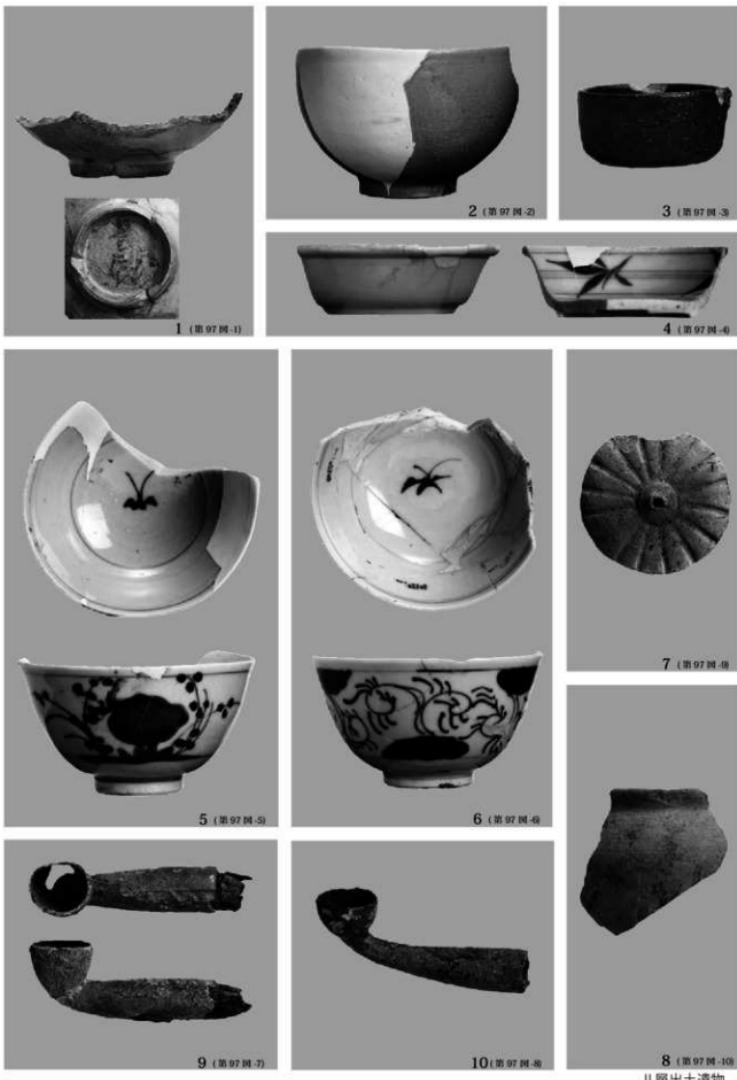
6 (第96図-3)
III層出土遺物

図版 24 龜岡トンネル進入部Ⅲ層上面遺構出土遺物 (2)・遺構外出土遺物 (1)

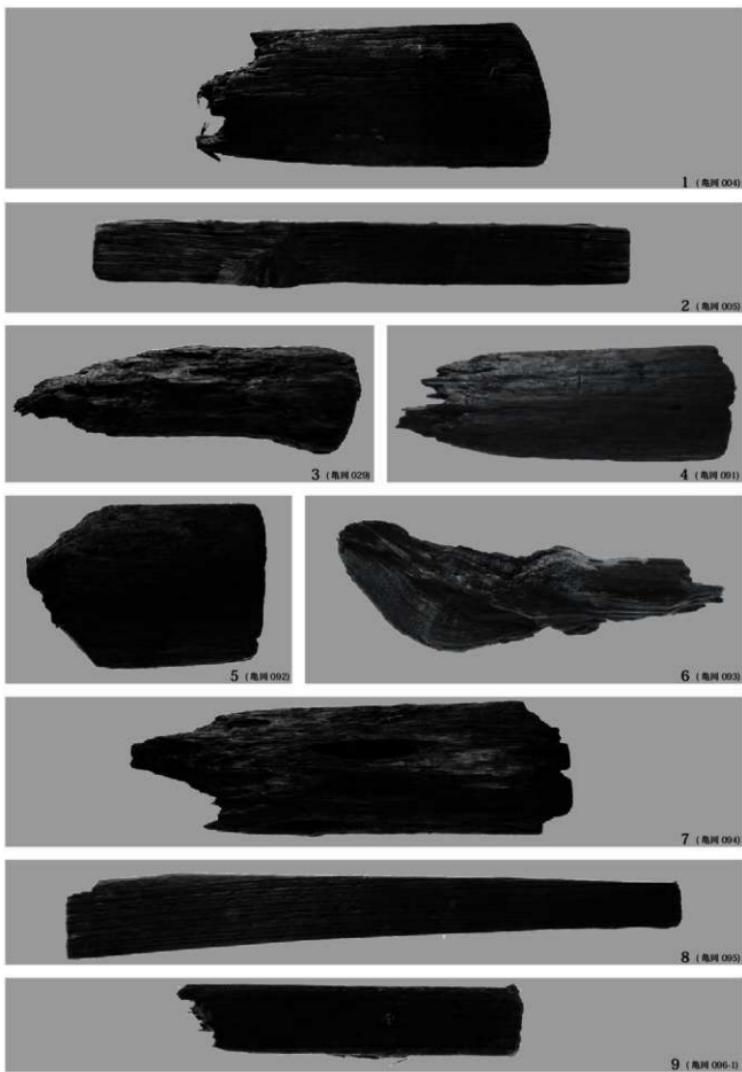


図版 25 龜岡トンネル進入路部Ⅲ層遺構外出土遺物(2)

出土遺物写真

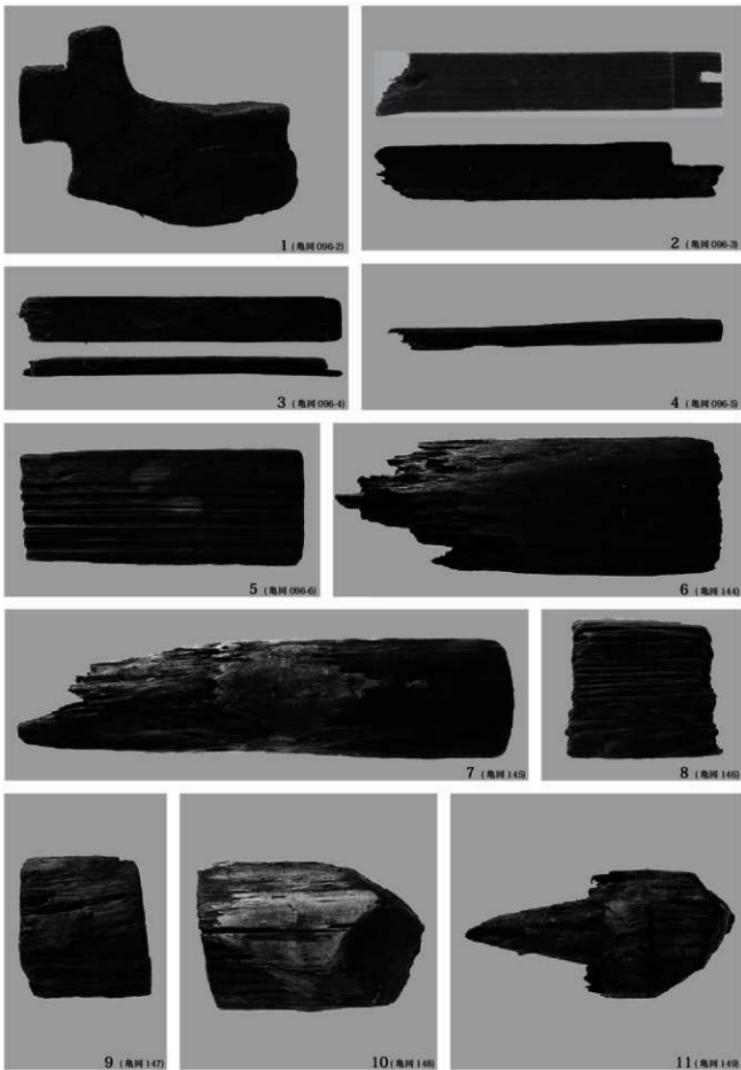


図版26 亀岡トンネル進入路部 II層出土遺物

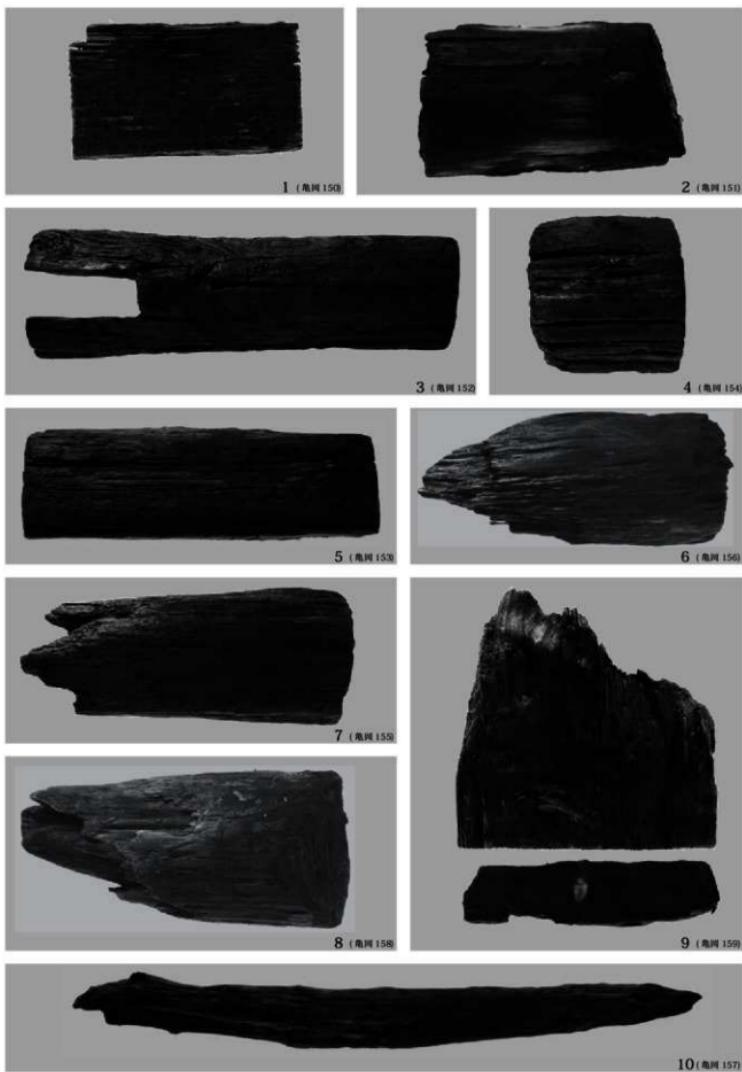


図版 27 亀岡トンネル進入路部出土木製品（1）

出土遺物写真



図版 28 龜岡トンネル進入路部出土木製品 (2)



図版 29 亀岡トンネル進入路部出土木製品 (3)

検出遺構写真



1. ベルト1壁面（北から）



2. トレンチ1壁面（北から）



3. トレンチ2壁面（北から）



4. 扇坂トンネル部2区南壁1（北東から）



5. 扇坂トンネル部2区南壁2（東から）

図版 30 扇坂トンネル部2区壁面（1）



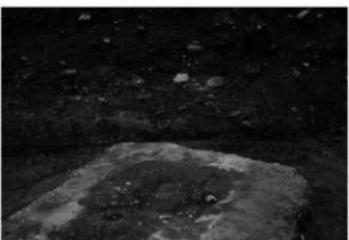
1. 扇坂トンネル部 2 区南壁 3 (東から)



2. 扇坂トンネル部 2 区南壁 4 (東から)



3. 扇坂トンネル部 2 区南壁 5 (東から)



4. 扇坂トンネル部 2 区南壁 6 (東から)



5. 扇坂トンネル部 2 区南壁 7 (東から)



6. 扇坂トンネル部 2 区南壁 8 (北から)



7. 扇坂トンネル部 2 区南壁 9 (北から)

図版 31 扇坂トンネル部 2 区壁面 (2)

検出遺構写真



1. 扇坂トンネル部1区南壁全景1（北西から）



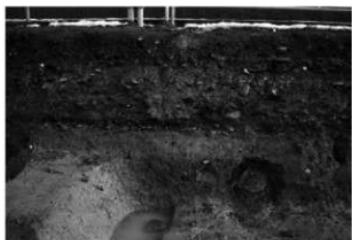
2. 扇坂トンネル部1区南壁全景2（北東から）



3. 扇坂トンネル部1区南壁1（北から）



4. 扇坂トンネル部1区南壁2（北から）



5. 扇坂トンネル部1区南壁3（北から）



6. 扇坂トンネル部1区南壁4（北から）

図版32 扇坂トンネル部1区壁面（3）



1. 扇坂トンネル部1区南壁 5（北から）



2. 扇坂トンネル部1区南壁 6（北から）



3. 扇坂トンネル部1区南壁 7（北から）



4. 扇坂トンネル部1区南壁 8（北から）



5. 扇坂トンネル部1区南壁 9（北から）



6. 扇坂トンネル部1区南壁 10（北から）



7. 扇坂トンネル部1区南壁 11（北から）



8. 扇坂トンネル部1区南壁 12（北から）

図版 33 扇坂トンネル部1区壁面 (4)

検出構造写真



1. 扇坂トンネル部1区南壁 13（北から）



2. 扇坂トンネル部1区南壁 14（北から）



3. 扇坂トンネル部1区南壁 15（北から）



4. 扇坂トンネル部1区南壁 16（北から）



5. 扇坂トンネル部1区南壁 17（北から）



6. 扇坂トンネル部1区南壁 18（北から）



7. 扇坂トンネル部1区南壁 19（北から）

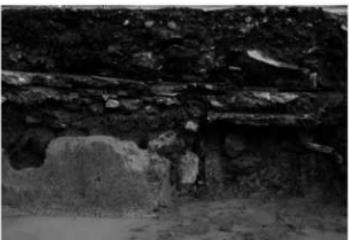


8. 扇坂トンネル部1区南壁 20（北から）

図版 34 扇坂トンネル部1区壁面（5）



1. 扇坂トンネル部1区南壁 21（北から）



2. 扇坂トンネル部1区南壁 22（北から）



3. 扇坂トンネル部1区南壁 23（北から）



4. 扇坂トンネル部1区南壁 24（北から）



5. 扇坂トンネル部1区南壁 25（北から）



6. 扇坂トンネル部1区南壁 26（北から）



7. 扇坂トンネル部1区南壁 27（北から）



8. 扇坂トンネル部1区南壁 28（北から）

図版 35 扇坂トンネル部1区壁面（6）

検出遺構写真



1. 扇坂トンネル部1区南壁 29（北から）



2. 扇坂トンネル部1区南壁 30（北から）



3. 扇坂トンネル部1区南壁 31（北から）



4. 扇坂トンネル部1区南壁 32（北から）



5. 扇坂トンネル部1区南壁 33（北から）



6. 扇坂トンネル部1区南壁 34（北から）



7. 扇坂トンネル部1区南壁 35（北から）



8. 扇坂トンネル部1区南壁 36（北から）

図版 36 扇坂トンネル部1区壁面（7）



1. 扇坂トンネル部1区南壁 37（北から）



2. 扇坂トンネル部1区南壁 38（北から）



3. 扇坂トンネル部1区南壁 39（北から）



4. 扇坂トンネル部1区南壁 40（北から）



5. 扇坂トンネル部1区南壁 41（北から）



6. 扇坂トンネル部1区南壁 42（北から）



7. 扇坂トンネル部1区南壁 43（北から）



8. 扇坂トンネル部1区南壁 44（北から）

図版 37 扇坂トンネル部1区壁面 (8)

検出遺構写真



1. 扇坂トンネル部1区南壁 45（北から）



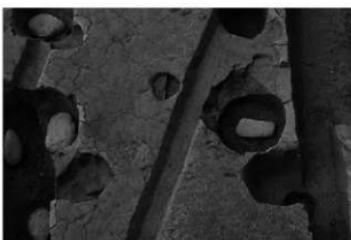
2. 扇坂トンネル部1区南壁 46（北から）



3. 扇坂トンネル部1区南壁 47（北から）



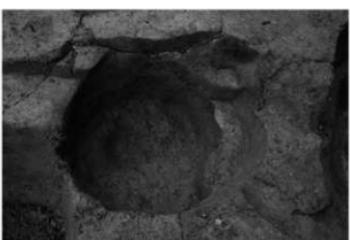
4. 扇坂トンネル部1区南壁 48（北から）



5. SA4 完掘（南から）



6. P38 断面（南から）

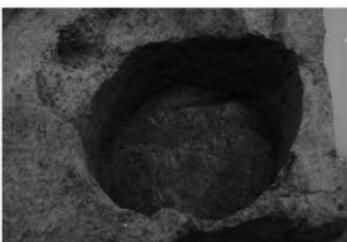


7. P38 完掘（西から）

図版 38 扇坂トンネル部1区壁面（9） 扇坂トンネル部V層上面遺構（1）



1. P66 断面（南から）



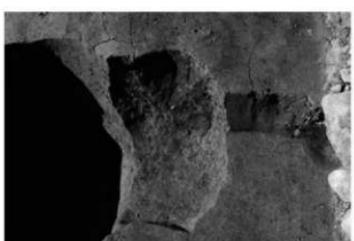
2. P66 完掘（南から）



3. P75 完掘（西から）



4. P77 断面（南から）



5. P77 完掘（南から）



6. SD3 断面（南から）



7. SD3 完掘（南から）



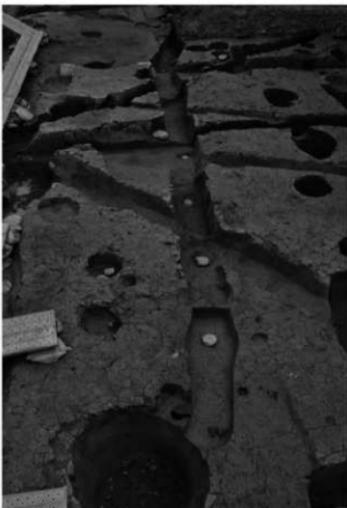
8. SD6A 断面（西から）

図版 39 扇坂トンネル部V層上面遺構（2）

検出遺構写真



1. SD6B 断面（西から）



2. SD6 完成（西から）



4. SD7C 断面（南西から）



5. SD7 完成（西から）



6. SD11 断面（東から）



7. SD11 完成（南から）

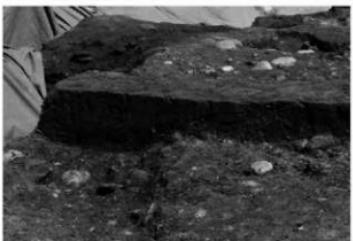
図版 40 扇坂トンネル部V層上面遺構（3）



1. SD14 断面（南から）



2. SD14 完掘（北東から）



3. SD16A 断面（西から）



5. SD16 完掘（西から）



4. SD16B 断面（西から）



7. SD17B 断面（東から）

図版 41 扇坂トンネル部V層上面遺構（4）

検出遺構写真



1.SD17 完掘（東から）



2.SE1 断面（北から）



3.SE1 完掘（北から）



4.SK1 完掘（南から）



5.SK2A 断面（西から）



6.SK2B 断面（西から）



7.SK2C 断面（南から）

図版 42 扇坂トンネル部V層上面遺構（5）



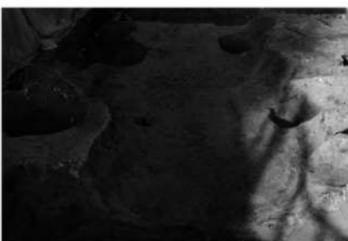
1. SK2C 断面（南西から）



2. SK2 遺物出土状況（東から）



3. SK2 完掘（東から）



4. SK2 完掘（西から）



5. SK5 断面（南から）



6. SK5 完掘（西から）



7. SK6 遺物出土状況（南から）



8. SK6 断面（南から）

図版 43 扇坂トンネル部V層上面遺構 (6)

検出遺構写真



1. SK10A 断面（南側）（東から）



2. SK10 断面（南側）



3. SK10A 断面（北側）（東から）



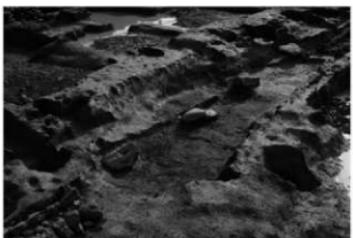
4. SK10B 断面（北側）（東から）



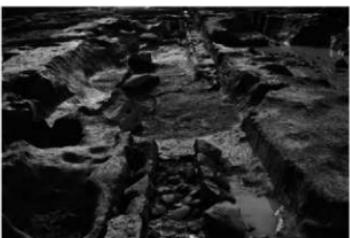
5. SK10A・B 断面（南側）（東から）



6. SK10C 断面（北側）



7. SK10 完掘（北東から）



8. 3. SK10 完掘（東から）

図版 44 扇坂トンネル部V層上面遺構 (7)



1.SK12 断面（東から）



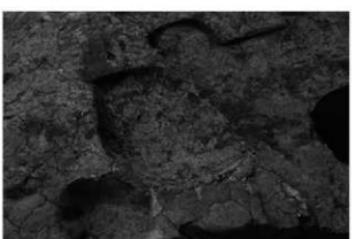
2.SK12 完掘（東から）



3.SK14 断面（西から）



4.SK15 断面（南から）



5.SK15 完掘（西から）



6.SK16A 断面（東から）



7.SK16B 断面（西側）（南から）



8.SK16B 断面（中央）（南から）

図版 45 扇坂トンネル部V層上面遺構（8）

検出遺構写真



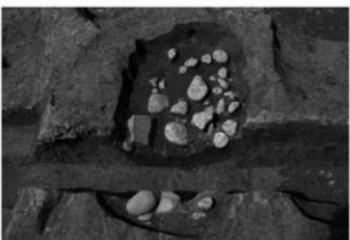
1. SK16C 断面（東側）（南から）



2. SK16 完掘（東南から）



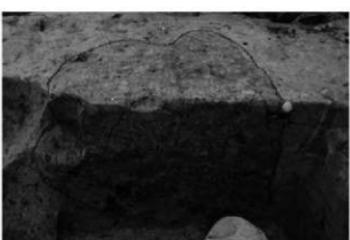
3. SK19 断面（西から）



4. SK19 碓検出状況（南から）



5. SK19 完掘（南から）



6. SK20 断面（西から）

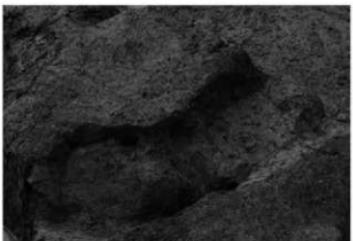


7. SK20 完掘（南西から）

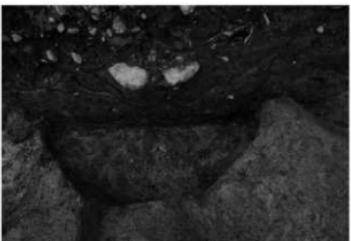


8. SK26 断面（西から）

図版 46 扇坂トンネル部V層上面遺構（9）



1.SK26 完掘（南東から）



2.SK28 断面（北から）



3.SK28 完掘（西から）



4.SK33 完掘（北から）



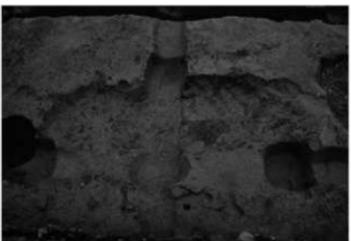
5.SK35 確検出状況（東から）



6.SK35 確検出状況（北から）



7.SK35 断面（南から）



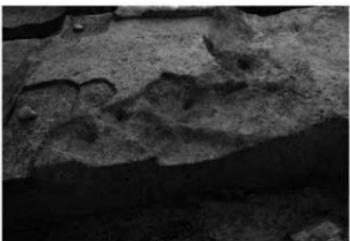
8.SK35 完掘（北から）

図版 47 扇坂トンネル部V層上面遺構（10）

検出遺構写真



1. SK39 断面（東から）



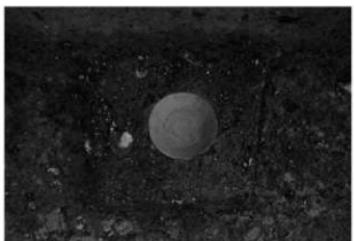
2. SK39 完掘（西から）



3. SK40B 断面（東から）



4. SK40A 断面（南東から）



5. SK40 遺物出土状況



6. SK40 完掘（南から）

図版 48 扇坂トンネル部V層上面遺構（11）



1. SK45 断面（西側）（南から）



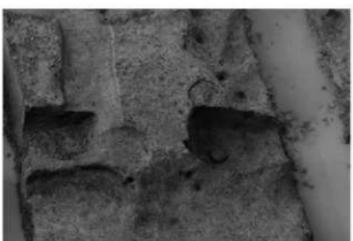
2. SK45 断面（東側）（南から）



3. SK45 完掘（南から）



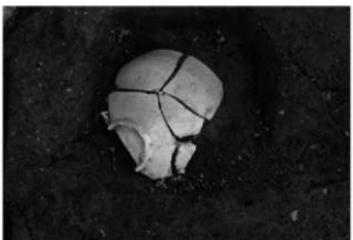
4. SK46 断面（南から）



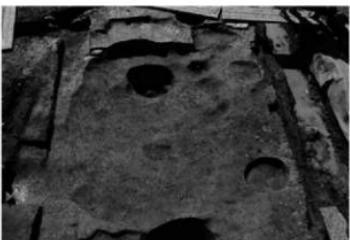
5. SK46 完掘（南から）



6. SX4 断面（南から）



7. SX4 遺物出土状況（北から）



8. SX4 完掘（東から）

図版 49 扇坂トンネル部V層上面遺構（12）

検出遺構写真



1. SX5 断面（南から）



2. SX5 完掘（南から）



3. SX6 断面（西から）



4. SX8 断面（東から）



5. SX9 断面（南から）



6. SX9 完掘（北から）



7. SX10 断面（西から）



8. SX10 完掘（南から）

図版 50 扇坂トンネル部 V 層上面遺構 (13)



1. SX11 断面（東から）



2. SX11 完整（東から）



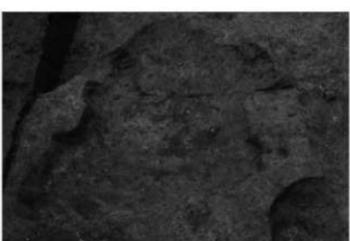
3. SX18 棲出状況（東から）



4. SX18 断面（西から）



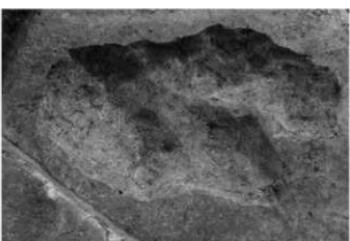
5. SX21 断面（西から）



6. SX21 完整（西から）



7. SX25 断面（東から）



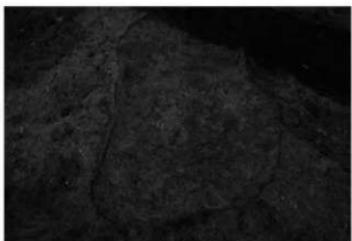
8. SX25 完整（東から）

図版 51 扇坂トンネル部V層上面遺構 (14)

検出遺構写真



1. SX26 断面（東から）



2. SX26 完掘（北東から）



3. SX27A 断面（西から）



4. SX27B 断面（南から）



5. SX27C 断面（南から）



6. SX27 完掘（南から）



7. SX28 断面（北から）

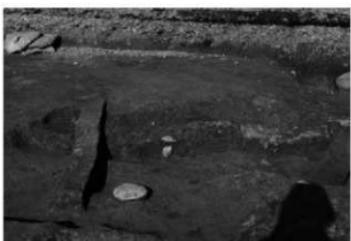


8. SX28 断面（西から）

図版 52 扇坂トンネル部V層上面遺構（15）



1. SX28 完掘（南から）



2. SX29 断面（西から）



3. SX30 完掘（南から）



4. SX32 断面（西から）



5. SX32 遺物出土状況（南から）

図版 53 扇坂トンネル部 V 層上面遺構 (16)

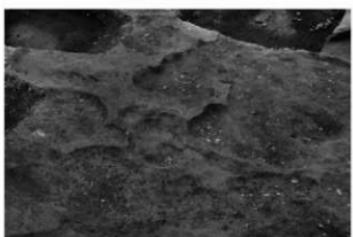
検出遺構写真



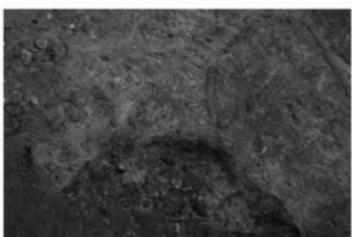
1. SX32 完掘（南から）



2. SX35 完掘（西から）



3. SX35 完掘（南西から）



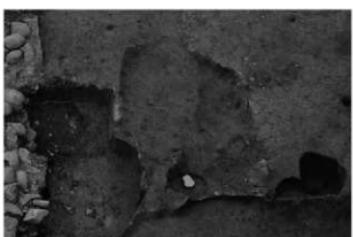
4. SX36 完掘（西から）



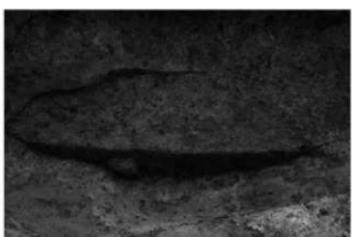
5. SX37 完掘（南西から）



6. SX38 断面（西から）



7. SX38 完掘（西から）



8. SX43 断面（東から）

図版 54 扇坂トンネル部V層上面遺構 (17)



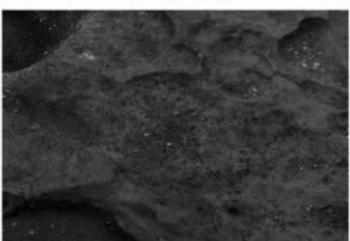
1.SX43 完掘（南西から）



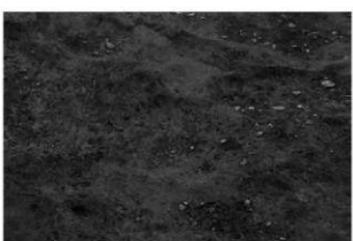
2.SX44 新面（南から）



3.SX44 完掘（南西から）



4.SX45 完掘（南西から）



5.SX46 完掘（南西から）



6.SX47 完掘（南西から）



7.SX48 完掘（南西から）



8.SX52 完掘（南西から）

図版 55 扇坂トンネル部V層上面遺構 (18)

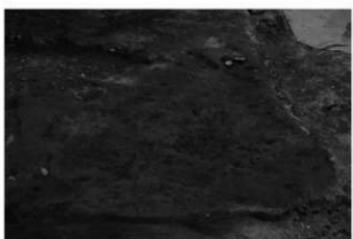
検出遺構写真



1. SX53A 断面（西から）



2. SX53B 断面（北から）



3. SX53 完掘（南から）



4. SX58 断面（南から）



5. SX59 断面（北から）



6. SX59 完掘（北から）



7. SA1 完掘（南から）

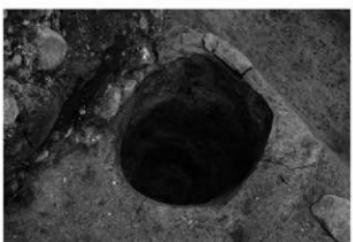
図版 56 扇坂トンネル部V層上面遺構 (19) IV層上面遺構 (1)



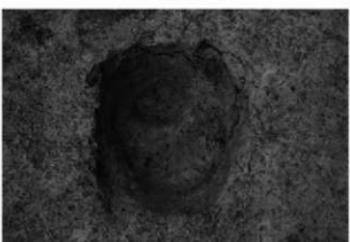
1. P147 完掘 2 (東から)



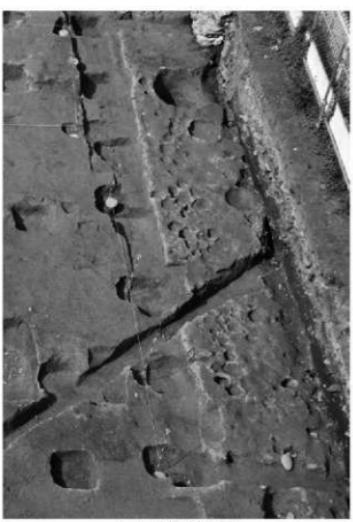
2. P36 完掘 (東から)



3. P44 完掘 (北東から)



4. P46 完掘 (西から)



5. SB2 完掘 (東から)



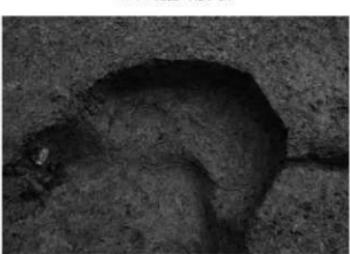
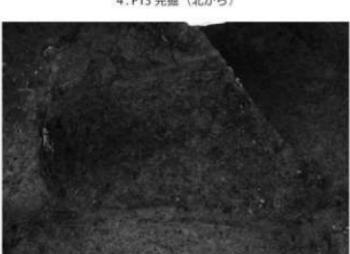
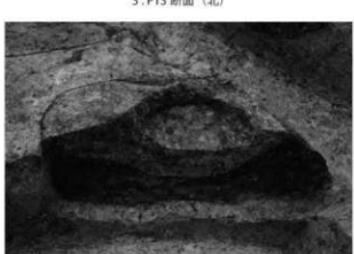
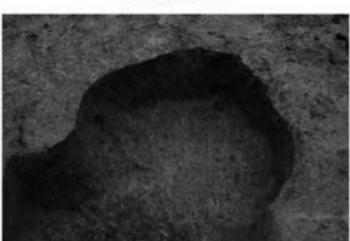
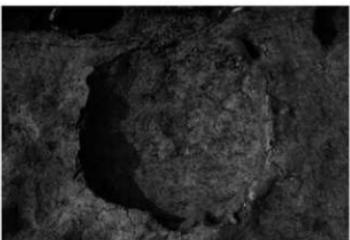
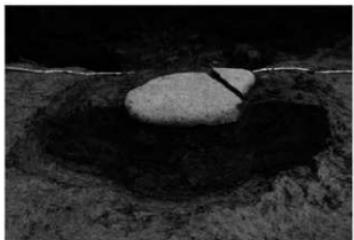
6. PS 断面 (東から)



7. PS 完掘 (東から)

図版 57 扇坂トンネル部IV層上面遺構 (2)

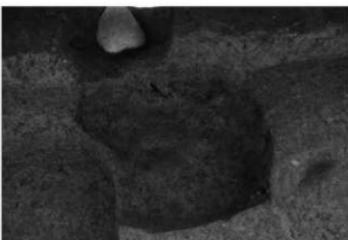
検出遺構写真



図版 58 扇坂トンネル部IV層上面遺構（3）



1.P18 磁板石検出（北から）



2.P19 完壁（北から）



3.SD2A 断面（東から）



4.SD2B 断面（西から）



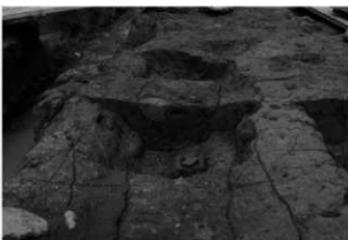
5.SD2 断面（西から）



6.SD2 完壁（西から）



7.SD2 断面（西から）



7.SD4 断面（南西から）

図版 59 扇坂トンネル部IV層上面遺構（4）

検出遺構写真



1. SD4 完掘（東から）



2. SD10 完掘（西から）



3. SD13A 断面（北から）



4. SD13B 断面（東から）

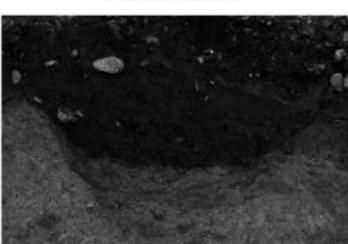


5. SD13 完掘（北から）



6. SD15 断面（北から）

図版 60 扇坂トンネル部IV層上面遺構（5）



図版 61 扇坂トンネル部IV層上面遺構（6）

検出遺構写真



1. SE2 確認状況（西から）



2. SE2 完掘（西から）



3. SE6 断面（北から）



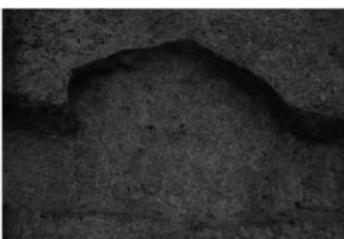
4. SE6 遺物出土状況（南東から）



5. SE6 完掘（東から）



6. SK3 断面（西から）



7. SK3 完掘（西から）

図版 62 扇坂トンネル部IV層上面遺構 (7)



1. SK4A 断面（東から）



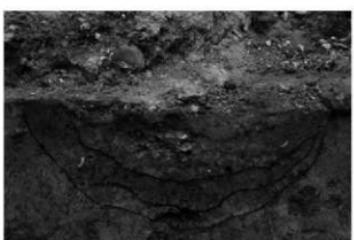
2. SK4B 断面（北から）



3. SK4 遺物出土状況



4. SK4 完掘（東から）



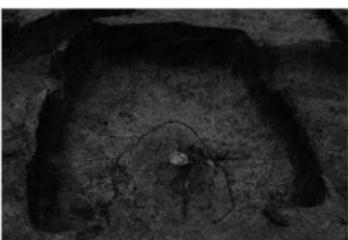
5. SK7 断面（東から）



6. SK7 完掘（西から）



7. SK8 断面（南から）



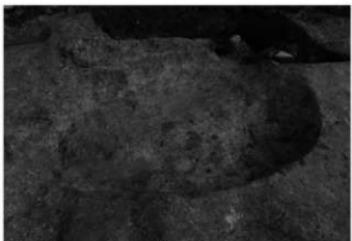
8. SK8 完掘（西から）

図版 63 扇坂トンネル部IV層上面遺構（8）

検出遺構写真



1.SK9 断面（北から）



2.SK9 完掘（西から）



3.SK11 断面（北から）



4.SK11 完掘（南から）



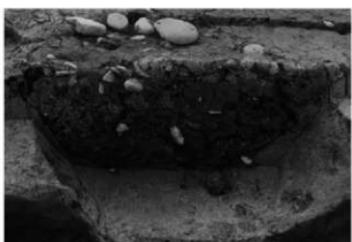
5.SK13 完掘（南から）



6.SK17 断面（北西から）

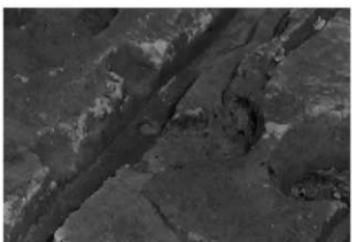


7.SK17 完掘（東南から）



8.SK18 断面（北から）

図版 64 扇坂トンネル部IV層上面遺構 (9)



1. SK18 完掘（南西から）



2. SK21 断面（東から）



3. SK21 完掘（西から）



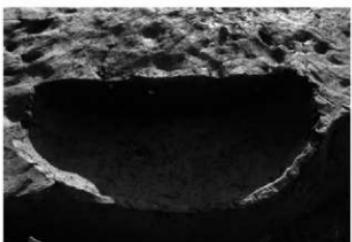
4. SK22 完掘（南から）



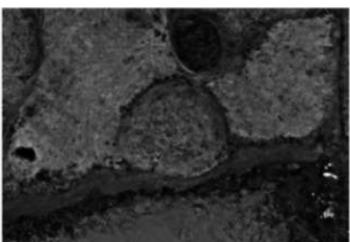
5. SK23 断面（南から）



6. SK23 完掘（西から）



7. SK24 断面（東から）



8. SK24 完掘（西から）

図版 65 扇坂トンネル部IV層上面遺構（10）

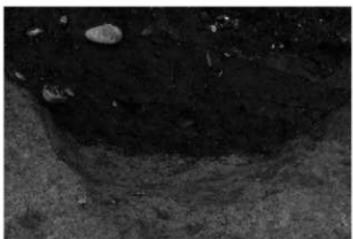
検出遺構写真



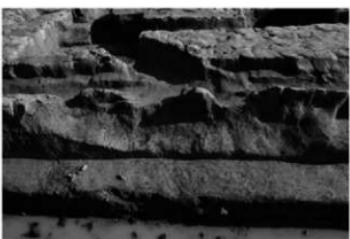
1. SK27 断面（南から）



2. SK27 完掘（南から）



3. SK29 完掘（北から）



4. SK30 完掘（南から）



5. SK31 断面（南から）



6. SK31 完掘（西から）

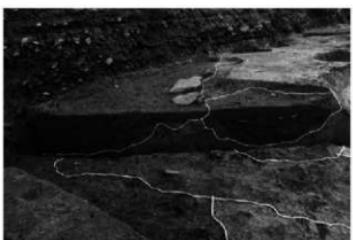


7. SK32 断面（南から）

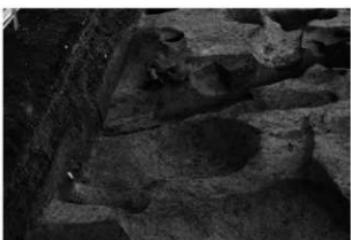


8. SK32 完掘（東から）

図版 66 扇坂トンネル部IV層上面遺構 (11)



1. SK38 断面（東から）



2. SK38 完掘（東から）



3. SK41 断面（東から）



4. SK41 完掘（東から）



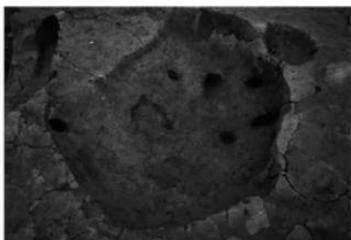
5. SK41 完掘（南から）



6. SK42 完掘（西から）



7. SK43 断面（北から）



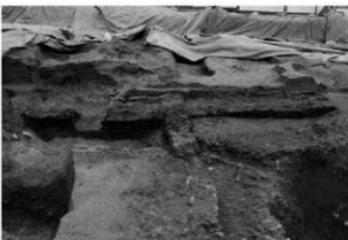
8. SK43 完掘（南から）

図版 67 扇坂トンネル部IV層上面遺構（12）

検出遺構写真



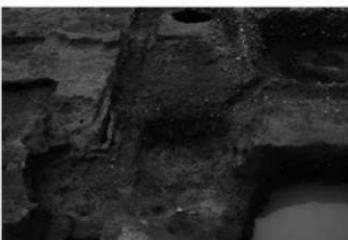
1. SX1 断面（東から）



2. SX1 断面（南から）



3. SX1 遺物出土状況



4. SX1 完掘（西から）



5. SX7 断面（南から）



6. SX7 完掘（南西から）



7. SX12 完掘（南西から）



8. SX19 完掘（北から）

図版 68 扇坂トンネル部IV層上面遺構 (13)



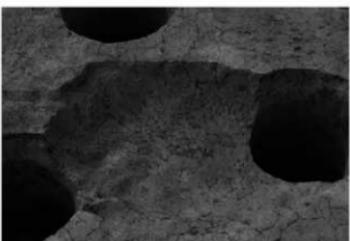
1. SX19・20 断面（東から）



2. SX20 完掘（北から）



3. SX22 断面（東から）



4. SX22 完掘（東から）



5. SX23 断面（西から）



6. SX23 完掘（西から）



7. SX31 断面（南から）



8. SX31 完掘（西から）

図版 69 扇坂トンネル部IV層上面遺構（14）

検出遺構写真



1. SX33 断面（北から）



2. SX33 完掘（南から）



3. SX34 完掘（西から）



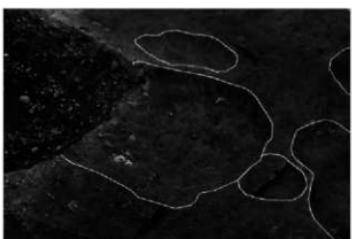
4. SX39 検出状況（南から）



5. SX39 完掘（南から）



6. SX41 断面（西から）



7. SX42 完掘（南西から）



8. SX49 検出（北から）

図版 70 扇坂トンネル部IV層上面遺構 (15)



1. SX49 断面（北東から）



2. SX49 完成（北から）



3. SX50 断面（東から）



4. SX50 完成（西から）



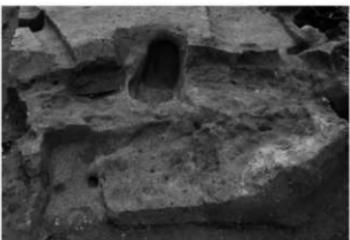
5. SX50 遺物出土状況（西から）

図版 71 扇坂トンネル部IV層上面遺構（16）

検出遺構写真



1. SX51 断面（東から）



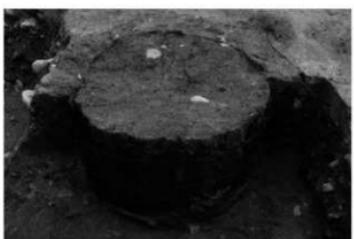
2. SX51 完掘（東から）



3. SX54 断面（北から）



4. SX54 完掘（南西から）



5. SX55 接出状況（東から）



6. SX55 断面（南から）



7. SX55 桶検出状況（南から）



8. SX55 罂り方完掘（南から）

図版 72 扇坂トンネル部IV層上面遺構（17）



1. SX56 断面（西から）



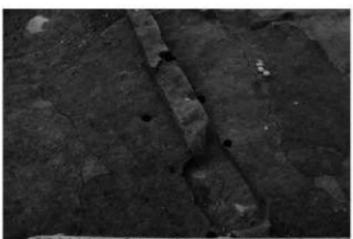
2. SX56 完掘（南から）



3. SX57 断面（南から）



4. SX57 完掘（南から）



5. SA2 完堀（西から）



7. SB3 棲出状況（西から）



6. SB1 完掘（南から）

図版 73 扇坂トンネル部IV層上面遺構 (18)・III層上面遺構 (1)

検出遺構写真



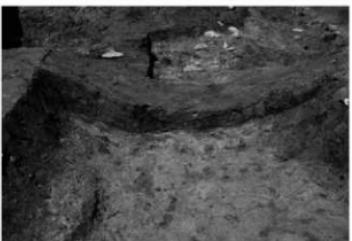
1. SD1 棟出状況（西から）



2. SD1 断面（北から）



3. SD1 完掘（南から）



4. SD5 断面（北から）



5. SD5 完掘（南から）

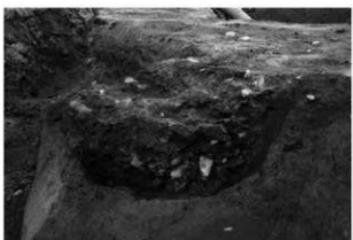


6. SD8 断面（東から）



7. SD8 完掘（北から）

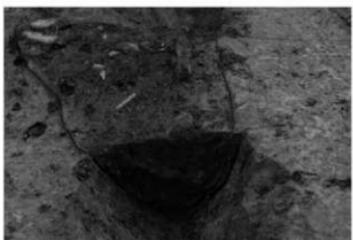
図版 74 扇坂トンネル部Ⅲ層上面遺構（2）



1. SD9 断面（東から）



2. SD9 完壁（東から）



3. SD12 断面（北から）



4. SD12 完壁（東から）



5. SD19 検出状況（南から）



6. SD19 検出状況（南から）

図版 75 扇坂トンネル部Ⅲ層上面遺構（3）

検出遺構写真



1. SE3 断面（南から）



2. SE3 完掘（南から）



3. SE4 断面（東から）



4. SE4 完掘（東から）



5. SES 断面（南から）



6. SES 遺物出土状況（南から）



7. SES 完掘（南から）

図版 76 扇坂トンネル部Ⅲ層上面遺構（4）



1. SK34 断面（南から）



2. SK34 完掘（南から）



3. SK36 断面（北から）



4. SK36 完掘（北から）



5. SK37 断面（北から）



6. SK37 遺物出土状況（北から）



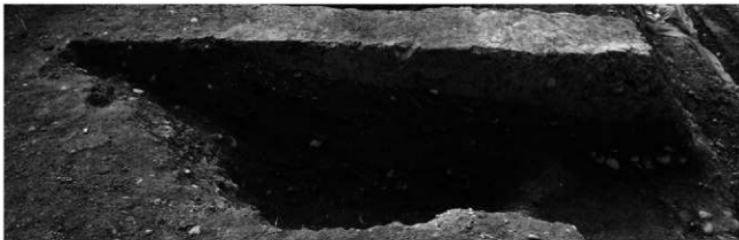
7. SK44 断面（北から）



8. SK44 完掘（北から）

図版 77 扇坂トンネル部Ⅲ層上面遺構（5）

検出遺構写真



1. SX2 断面 (南から)



2. SX2 完掘 (南から)



3. SX2 遺物出土状況



4. SX2 遺物出土状況

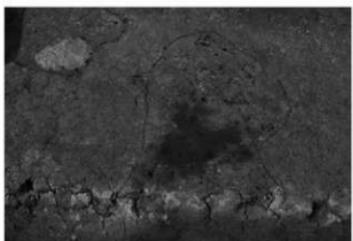
図版 78 扇坂トンネル部Ⅲ層上面遺構 (6)



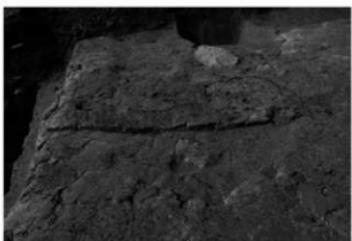
1. SX3 断面（南から）



2. SX3 完掘（北から）



3. SX13 棟出（南から）



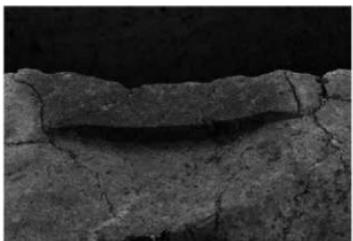
4. SX13 断面（東から）



5. SX13 完掘（東から）



6. SX14 焙土面検出（西から）



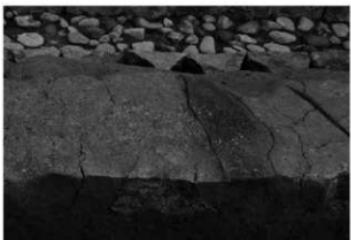
7. SX14 断面（東から）



8. SX14 完掘（西から）

図版 79 扇坂トンネル部Ⅲ層上面遺構（7）

検出遺構写真



1. SX15 検出（西から）



2. SX15 断面（北から）



3. SX15 完壁（北から）



4. SX16 検出（東から）



5. SX16 断面（東から）



6. SX16 完壁（西から）



7. SX17 断面（東から）



8. SX17 完壁（東から）

図版 80 扇坂トンネル部Ⅲ層上面遺構（8）



1.1号石垣全景（南東から）



2.1号石垣全景（北東から）



3.1号石垣断面（南東から）



4.1号石垣北端（北東から）

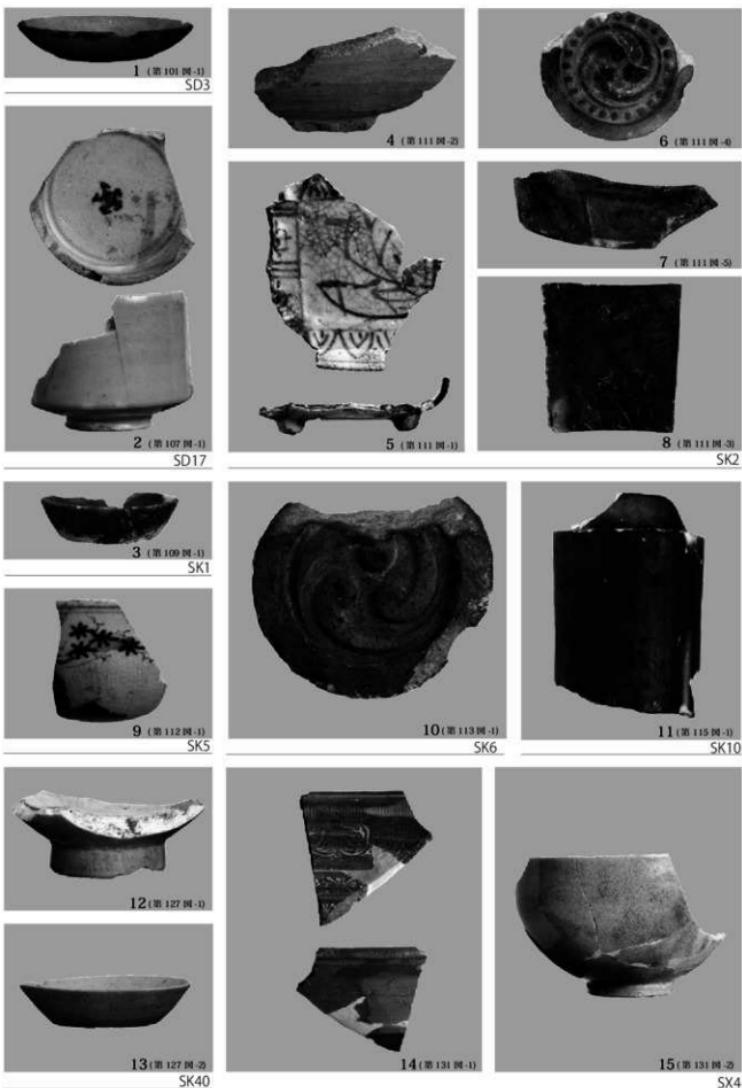


5.1号石垣北側（南東から）

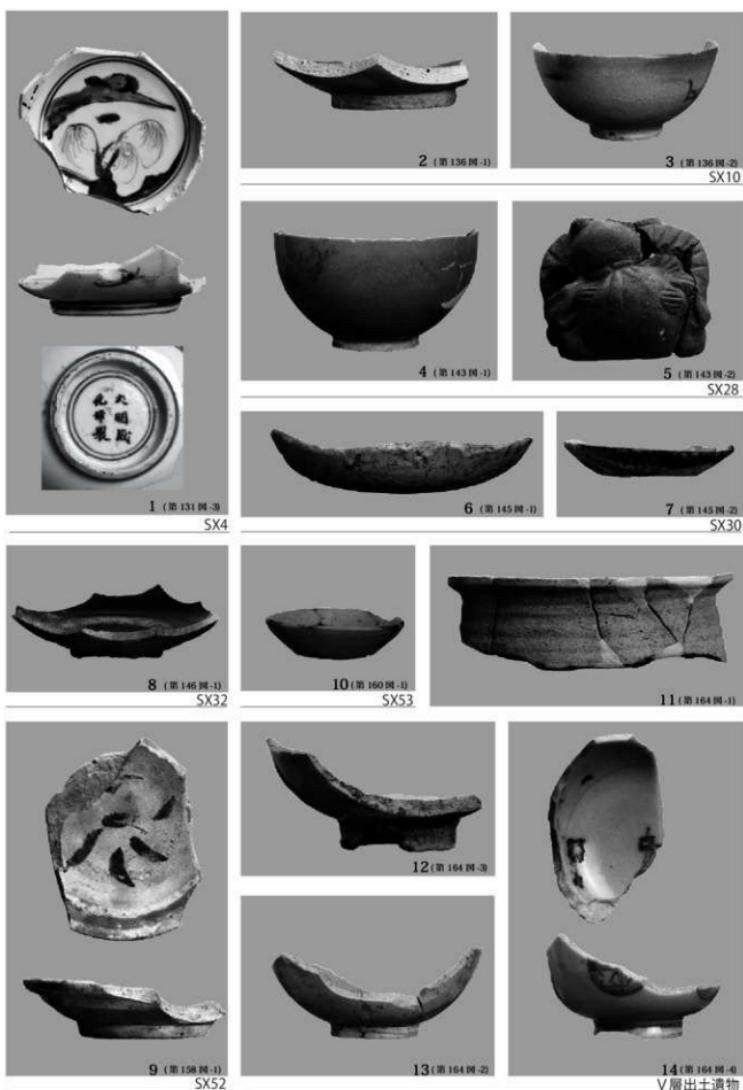


6.1号石垣南側（北から）

出土遺物写真

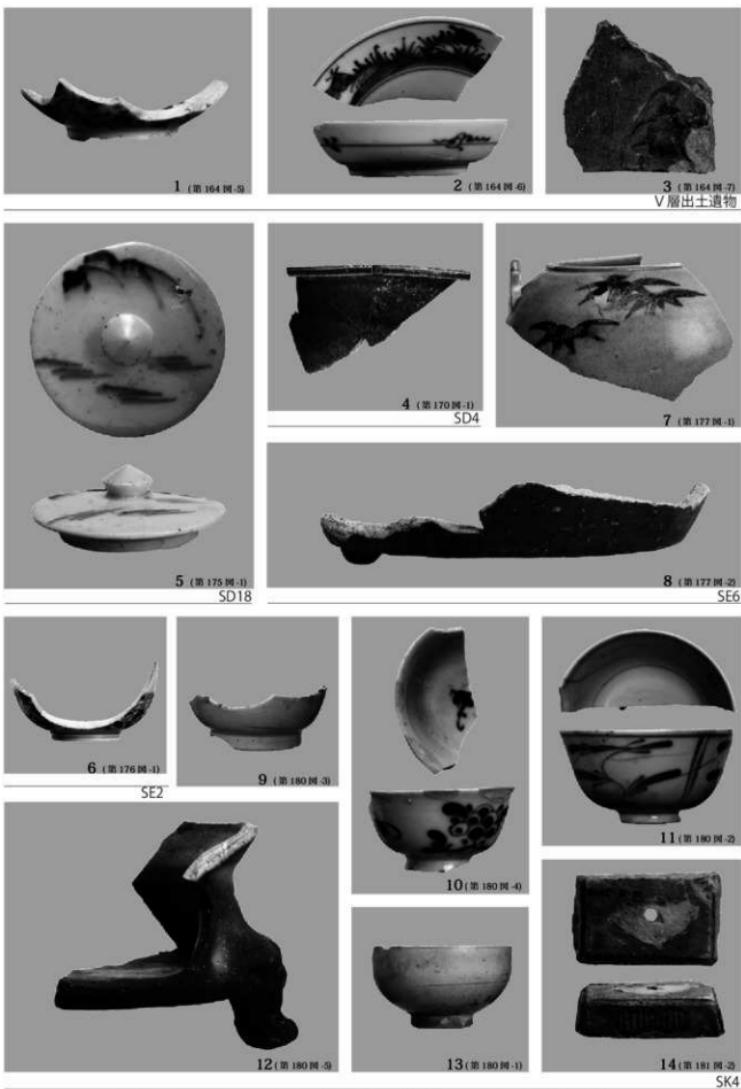


図版 82 扇坂トンネル部V層上面遺構出土遺物(1)

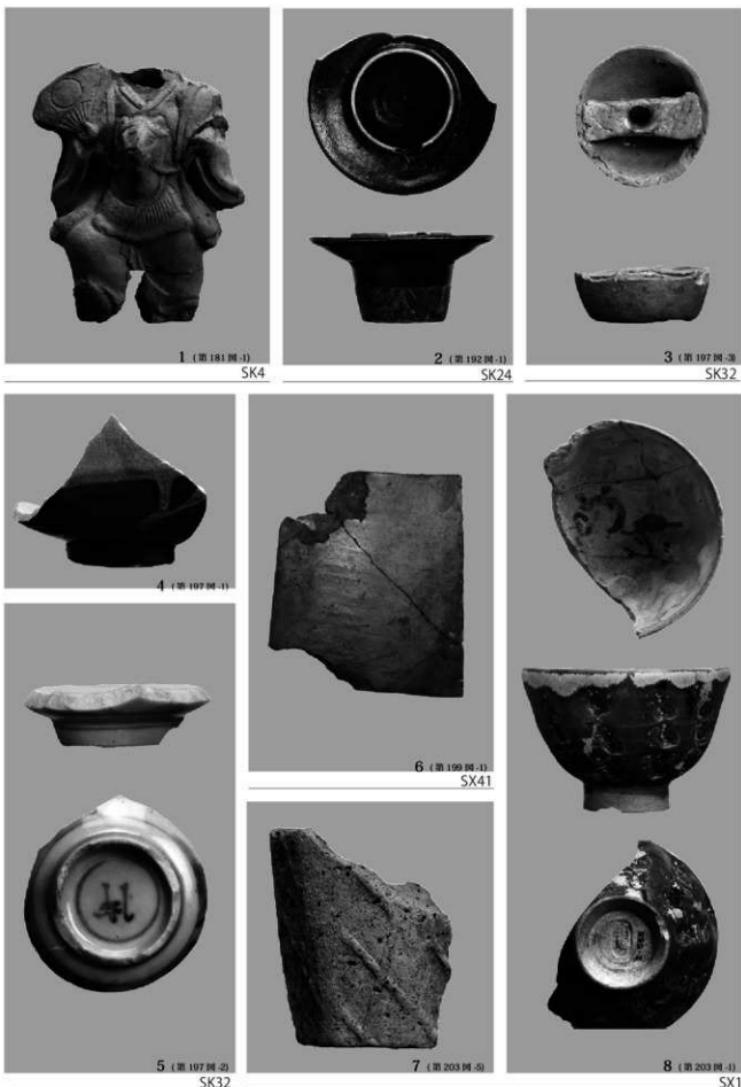


図版 83 扇坂トンネル部 V 層上面遺構出土遺物 (2)・遺構外出土遺物 (1)

出土遺物写真



図版 84 扇坂トンネル部 V 層遺構外出土遺物 (2) • IV 層上面遺構出土遺物 (1)

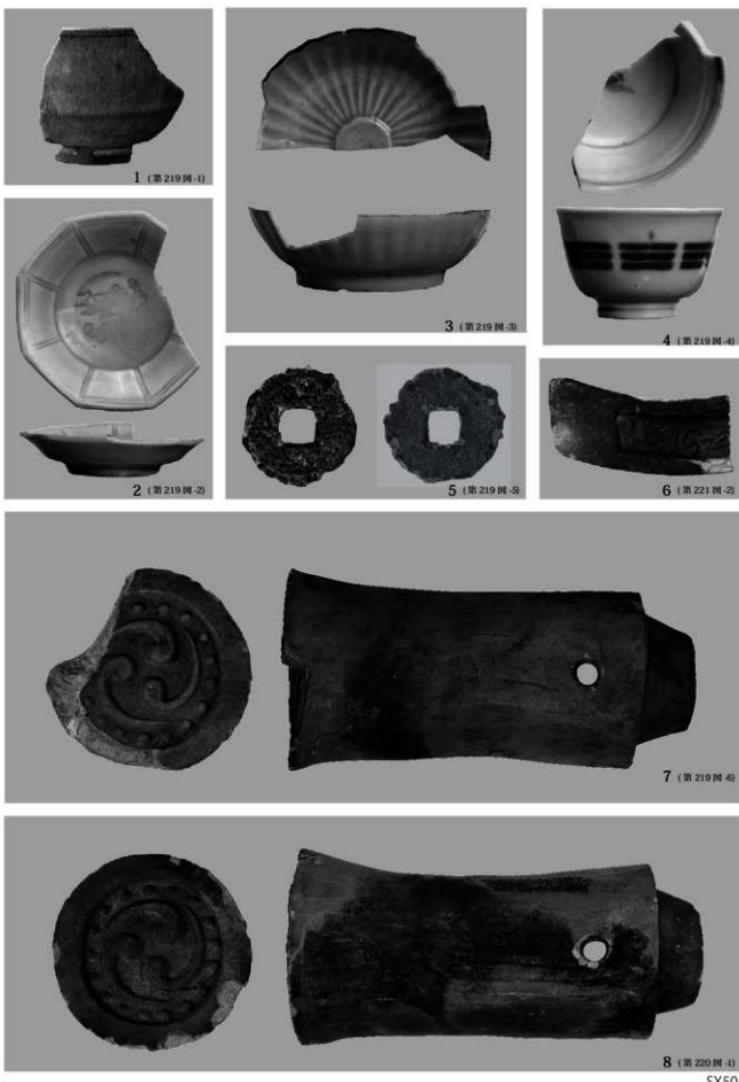


図版 85 扇板トンネル部IV層上面遺構出土遺物(2)

出土遺物写真



図版 86 扇坂トンネル部IV層上面遺構出土遺物 (3)



図版 87 扇坂トンネル部IV層上面遺構出土遺物(4)

出土遺物写真



1 (第220図-2)



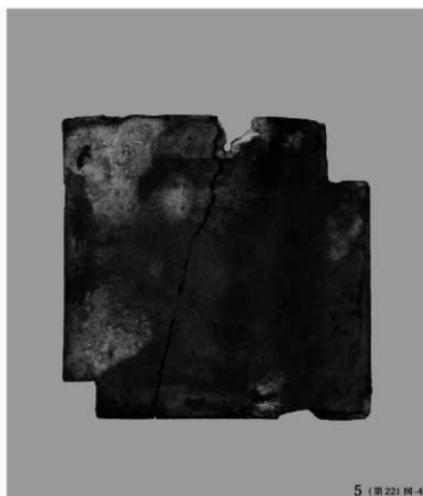
2 (第220図-3)



3 (第221図-1)



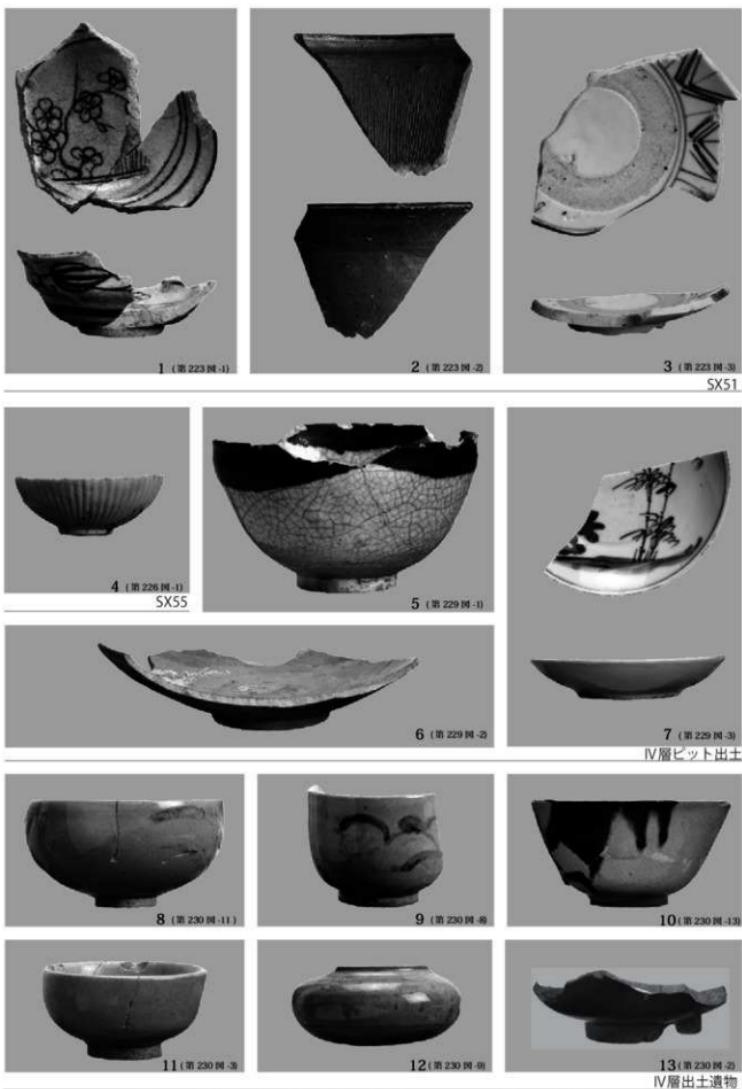
4 (第221図-3)



5 (第221図-4)

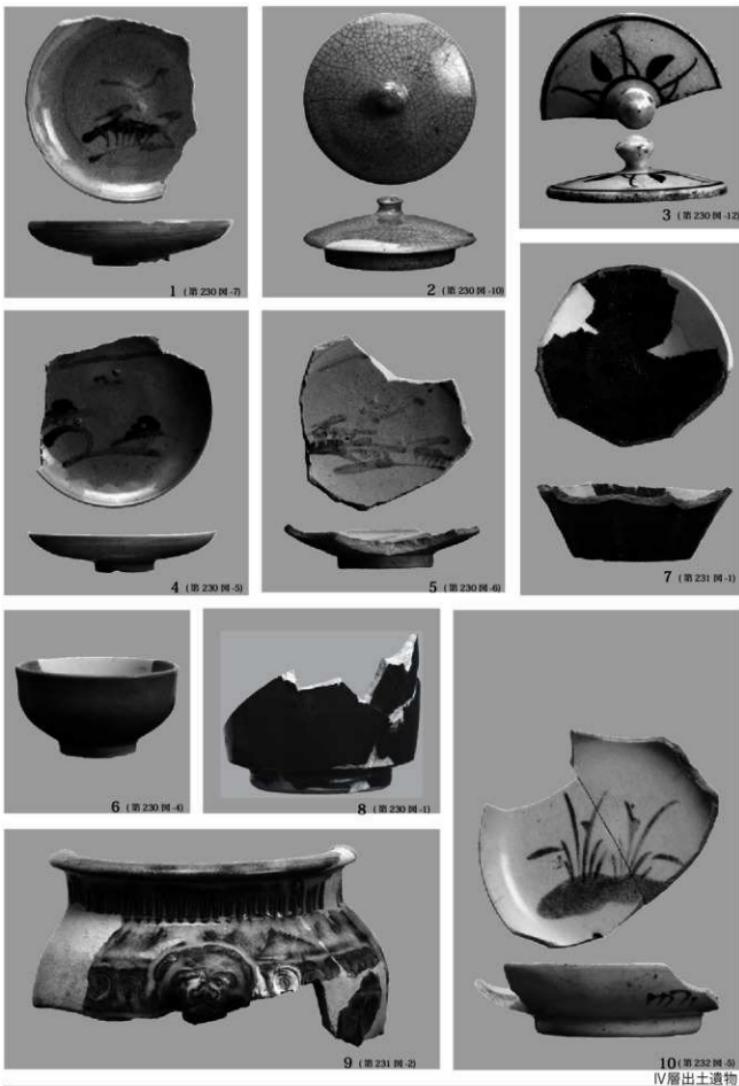
SX50

図版 88 扇坂トンネル部IV層上面遺構出土遺物 (5)



図版 89 扇坂トンネル部IV層上面遺構出土遺物(6)・遺構外出土遺物(1)

出土遺物写真

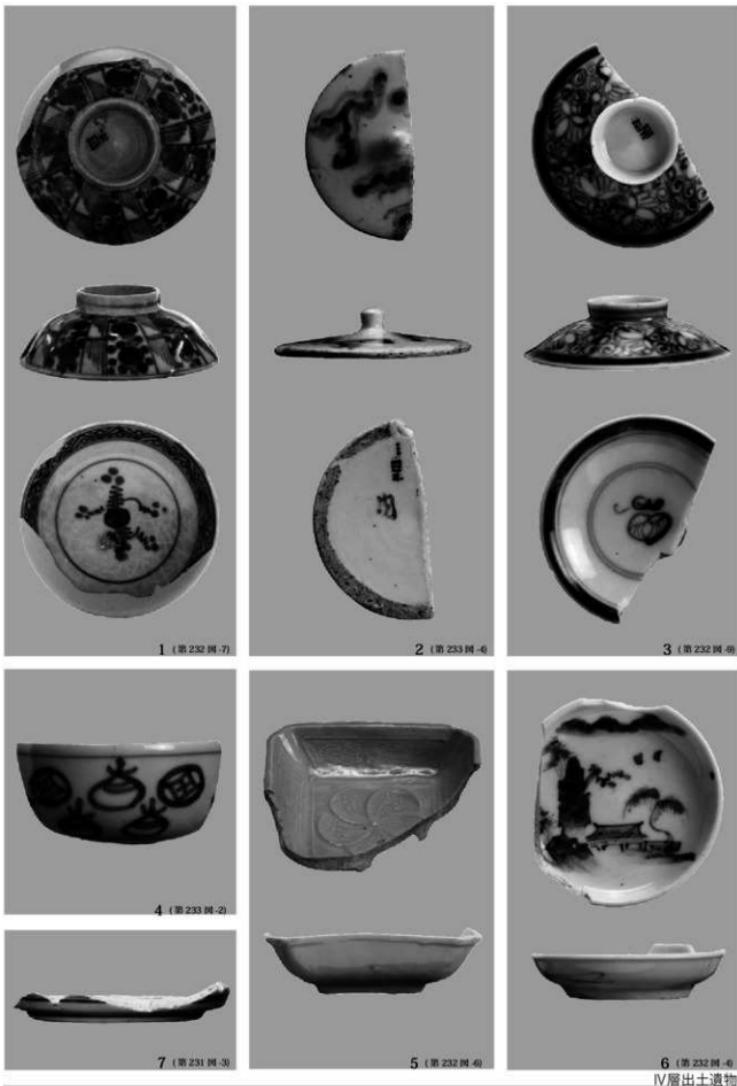


図版 90 扇坂トンネル部IV層遺構外出土遺物(2)



図版 91 扇坂トンネル部IV層構外出土遺物(3)

出土遺物写真



図版 92 扇坂トンネル部IV層遺構外出土遺物(4)



図版 93 扇坂トンネル部IV層遺構外出土遺物(5)・III層上面遺構出土遺物(1)

出土遺物写真



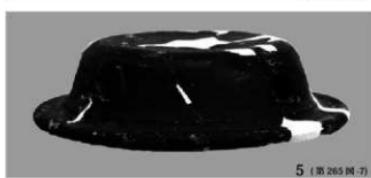
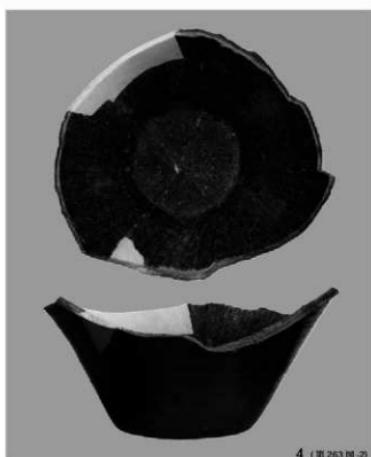
図版 94 扇坂トンネル部Ⅲ層上面遺構出土遺物(2)



図版 95 扇坂トンネル部Ⅲ層上面遺構出土遺物(3)

SX2

出土遺物写真



図版 96 扇坂トンネル部Ⅲ層上面遺構出土遺物 (4)



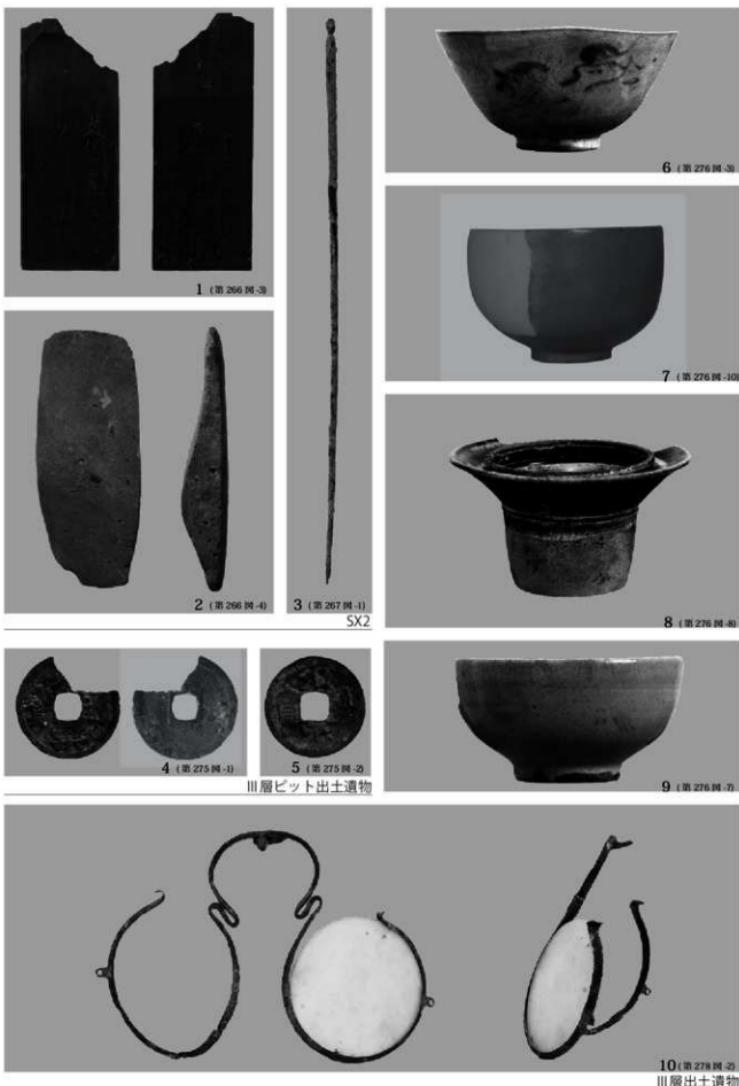
図版 97 扇坂トンネル部Ⅲ層上面遺構出土遺物 (5)

SX2

出土遺物写真

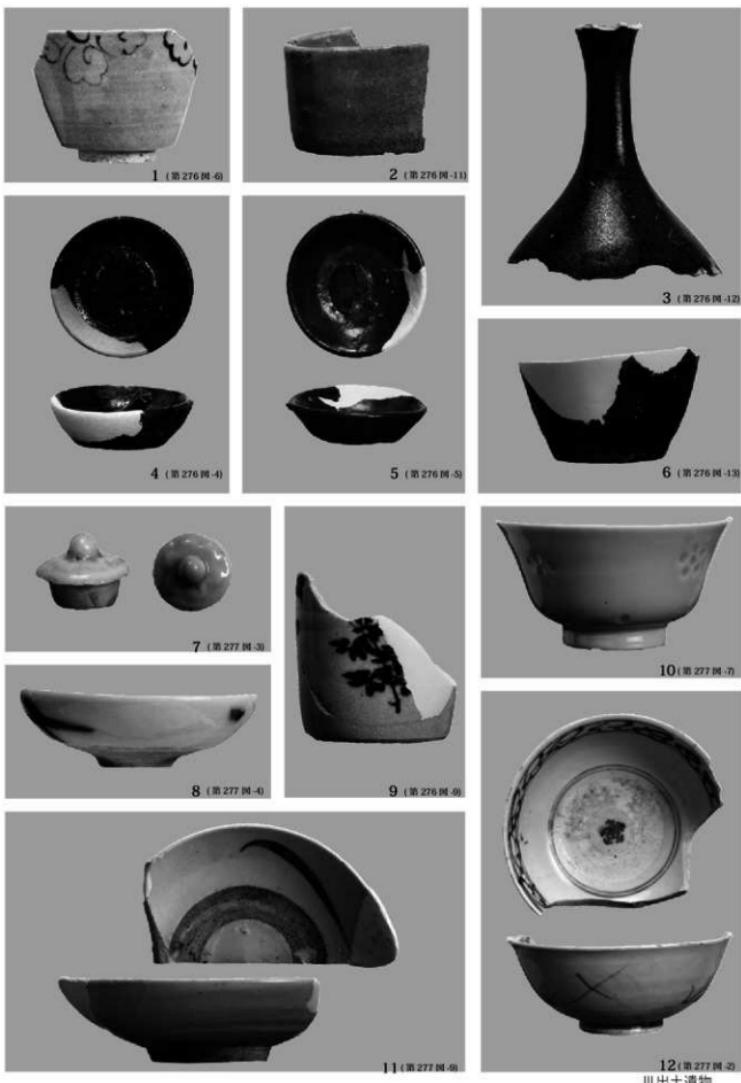


図版 98 扇坂トンネル部Ⅲ層上面遺構出土遺物 (6)

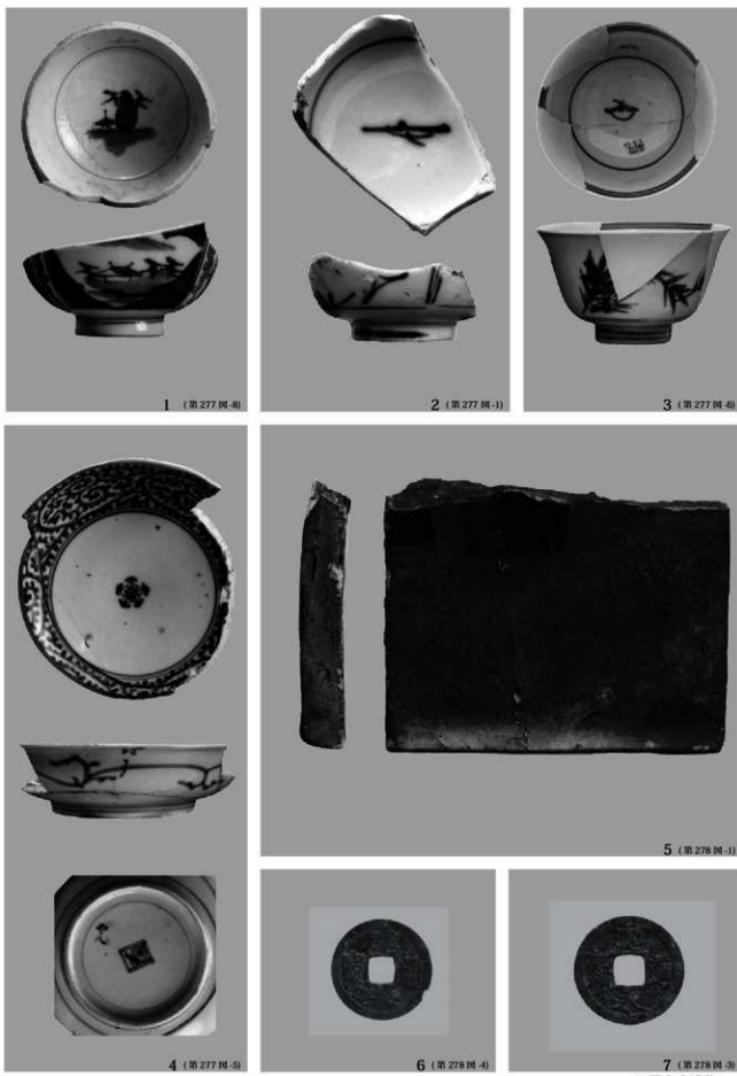


図版 99 扇坂トンネル部Ⅲ層上面遺構出土遺物 (7)・遺構外出土遺物 (1)

出土遺物写真

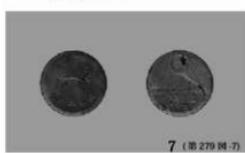
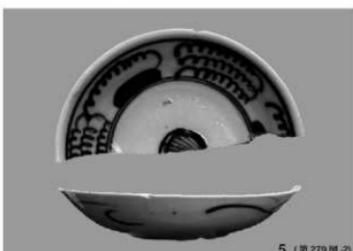
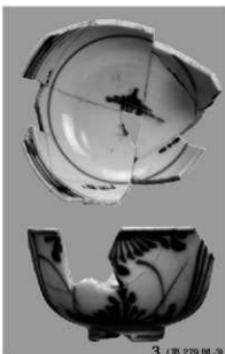
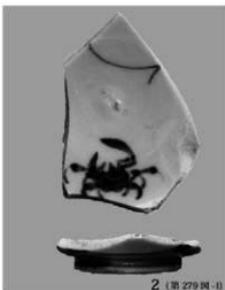


図版 100 扇坂トンネル部Ⅲ層遺構外出土遺物 (2)



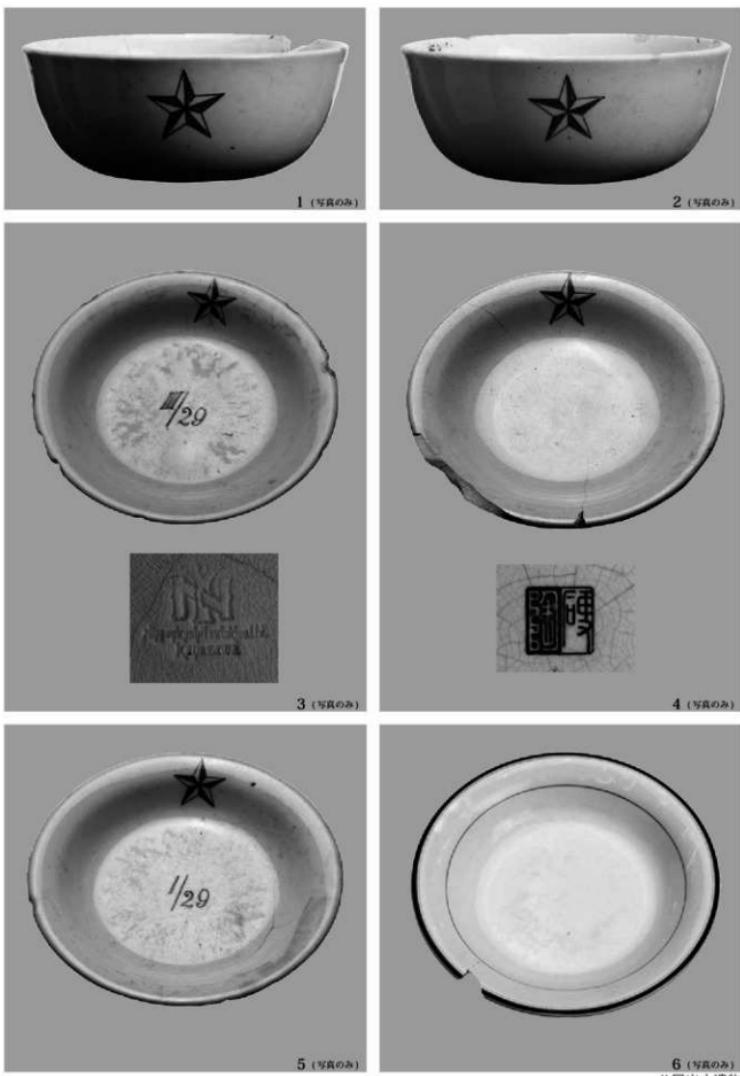
図版 101 扇坂トンネル部Ⅲ層遺構外出土遺物(3)

出土遺物写真



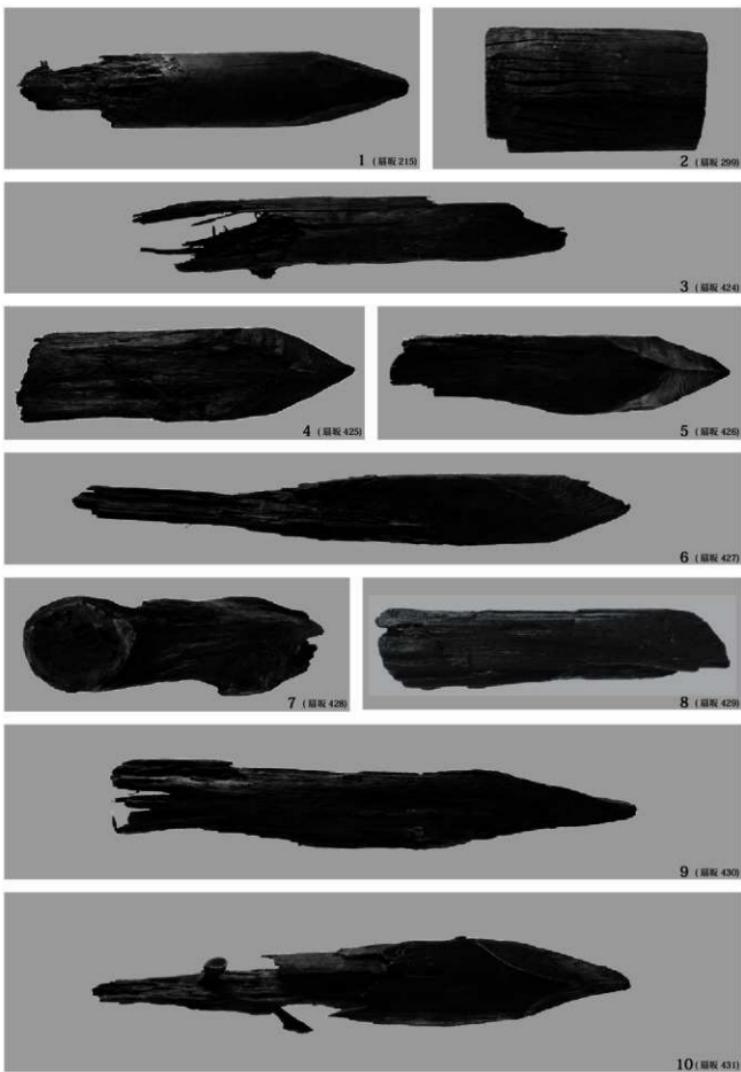
II層出土遺物

図版 102 肩坂トンネル部 II 層出土遺物 (1)

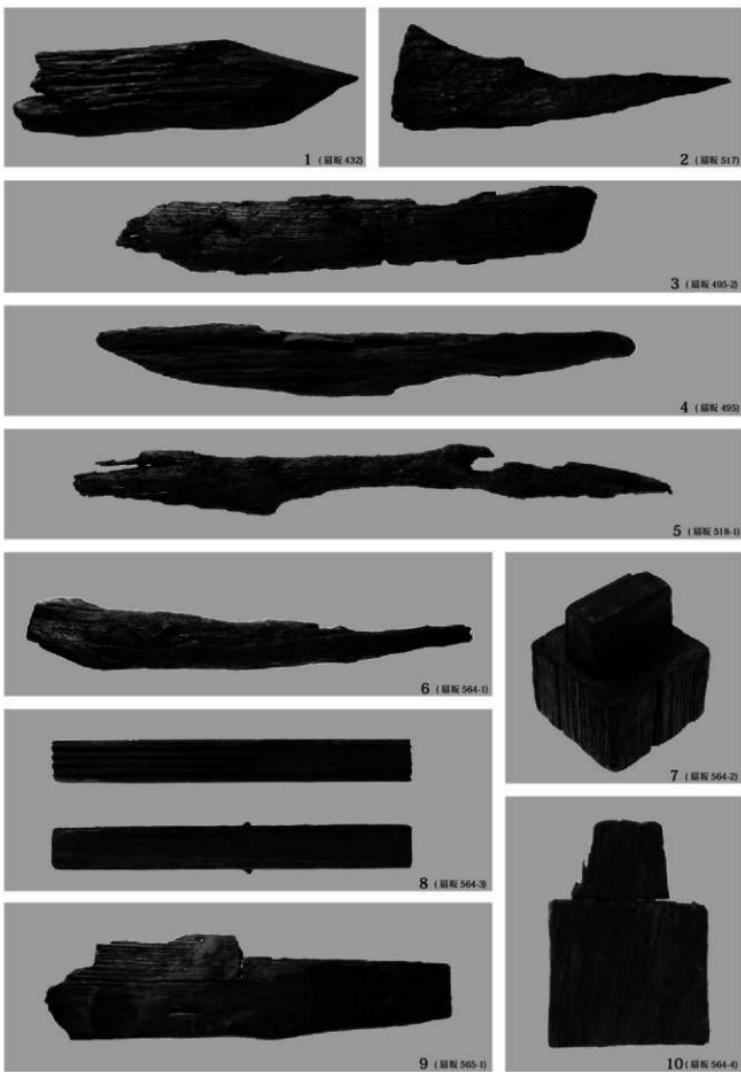


図版 103 肩坂トンネル部II層出土遺物 (2)

出土遺物写真

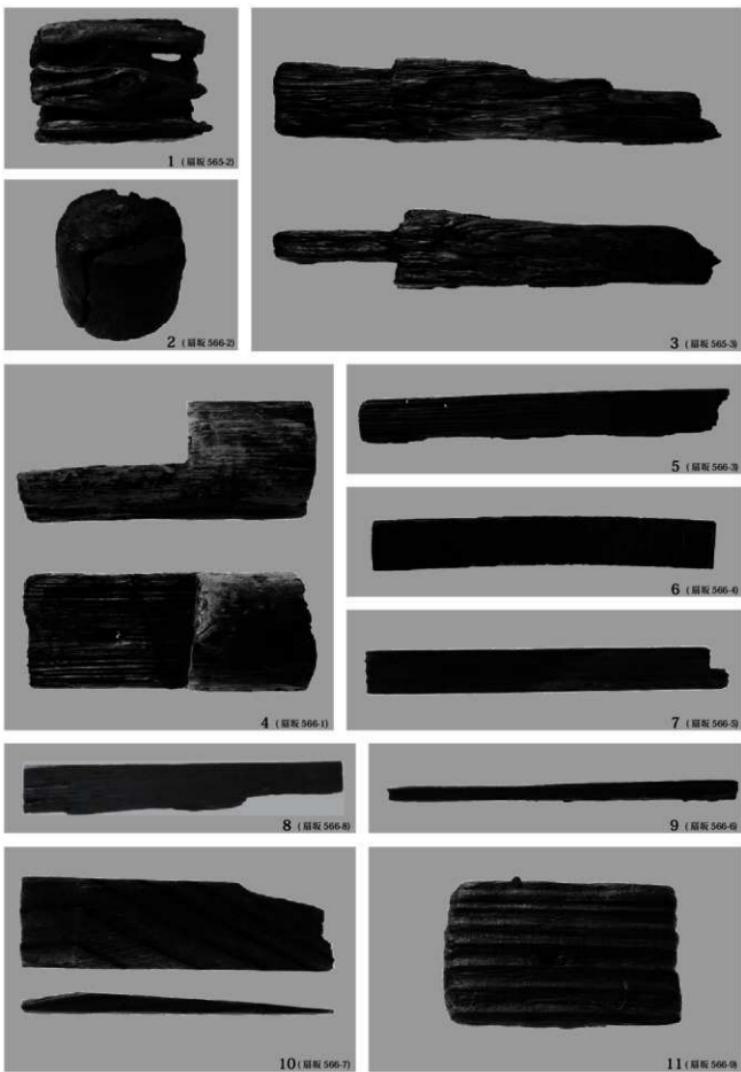


図版 104 扇板トンネル部出土木製品（1）

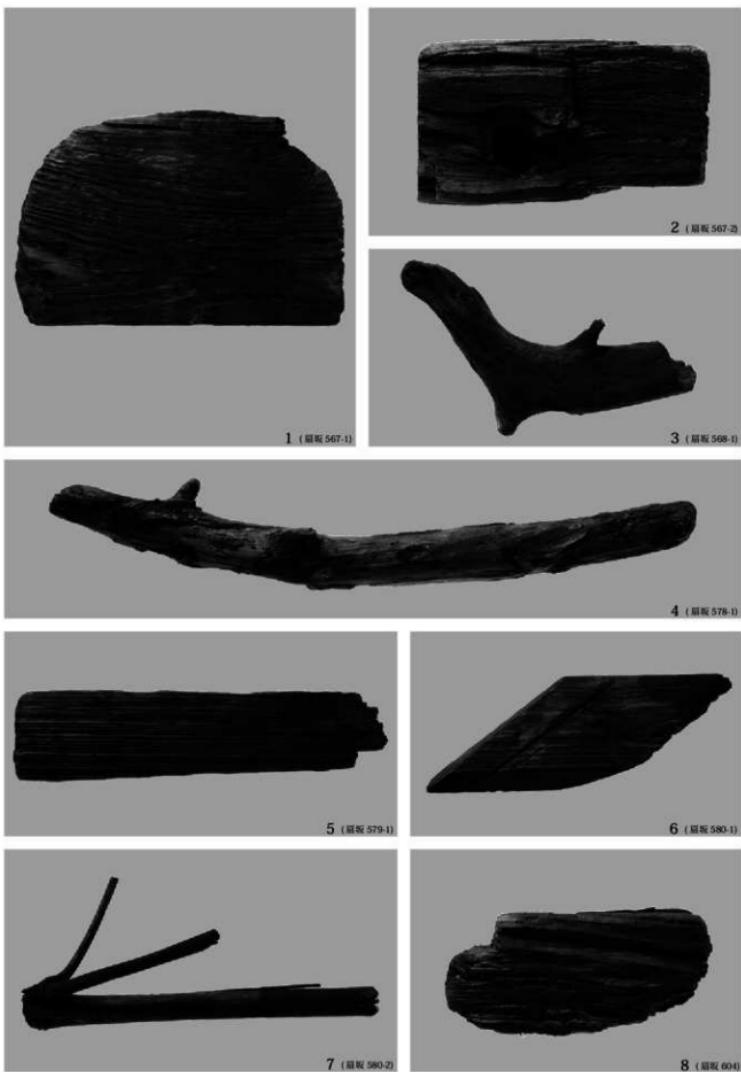


図版 105 厚板トンネル部出土木製品 (2)

出土遺物写真



図版 106 扇板トンネル部出土木製品 (3)



図版 107 厚板トンネル部出土木製品 (4)

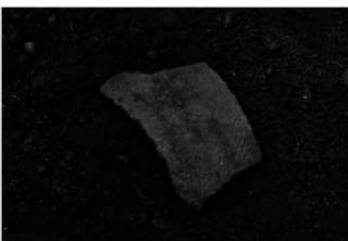
検出遺構写真



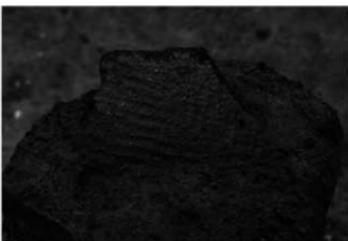
1. SR1(沢跡) 検出状況(北西から)



2. SR1(沢跡) 検出状況(北から)

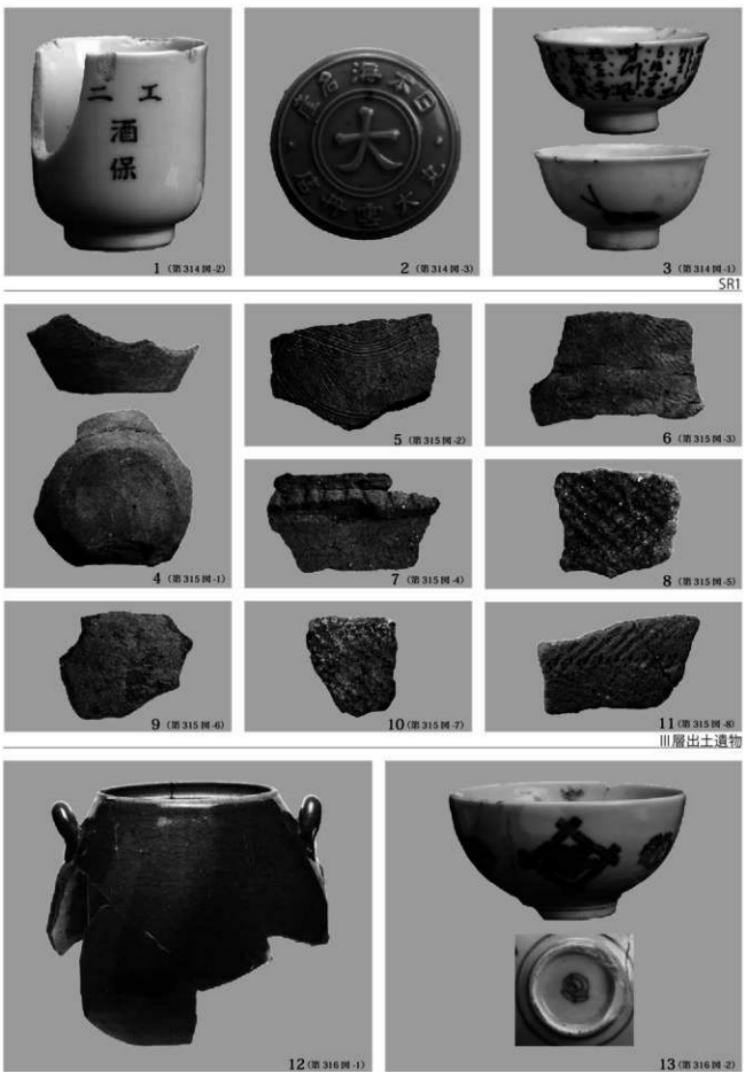


3. 遺物出土状況



4. 遺物出土状況

図版 108 桜の小径沢跡・遺物出土状況



図版 109 桜の小径出土遺物 (1)

出土遺物写真



1 (第316図-3)
II層出土遺物



2 (写真のみ)



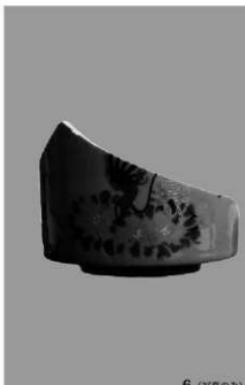
3 (写真のみ)



4 (写真のみ)



5 (写真のみ)



6 (写真のみ)



7 (写真のみ)
参考掲載

図版 110 桜の小径出土遺物 (2)



図版 111 桜の小径出土遺物 (3)

6 (写真のみ)
参考掲載

報告書抄録

報告書抄録							
ふりがな	せんだいじょうあとほかーせんだいしうそくてつどううございせんかんけいいせきははくつちょうさほうこくしょはー						
書名	仙台城跡ほか 一仙台市高速鉄道東西線関係遺跡発掘調査報告書Ⅷ—						
シリーズ名	仙台市文化財調査報告書						
シリーズ番	第 402 集						
編著者名	渡部紀 工藤信一郎 水野一夫 水上匡彦 横井奏						
編集機関	仙台市教育委員会						
所在地	〒 980-8671 宮城県仙台市青葉区二日町 1 番 1 号 TEL 022 (214) 8839						
発行年月日	2012 年 3 月 9 日						
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	北緯 遺跡番号	東経	調査期間	調査面積 原因	
せんだいじょうあと 仙台城跡	みやぎけんせんだいし 宮城県仙台市 あおばく 青葉区 かわうちちない 川内地内	4100	01033	38° 15' 37"	140° 50' 55"	平成 20 年 6 月 10 日～ 平成 22 年 3 月 15 日 5152m ²	仙台市高速鉄道東西線建設事業に伴う発掘調査
かわうちA～E 川内 A 遺跡	みやぎけんせんだいし 宮城県仙台市 あおばく 青葉区 あねばくまちない 川内山地内	4100	01558	38° 15' 37"	140° 51' 24"	平成 20 年 11 月 10 日～ 平成 20 年 11 月 18 日 平成 21 年 8 月 20 日～ 平成 21 年 9 月 17 日 536m ²	仙台市高速鉄道東西線建設事業に伴う発掘調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物	特記事項	
仙台城跡	武家屋敷	江戸時代	柱列跡 建物跡 溝跡 井戸跡 土坑 性格不明遺構 枠状遺構 石敷遺構		陶器 磁器 瓦 金属製品 土製品 木製品 石製品	幕末～明治初頭の眼鏡が出土。	
川内 A 遺跡	散布地 武家屋敷	縄文時代 江戸時代 明治時代	沢跡		縄文土器 陶器 磁器 ガラス製品 金属製品		
要約	仙台城跡は、仙台市街西側に広がる広瀬川によって形成された河岸段丘上に立地する遺跡である。平成 20・21 年度の 2 カ年にわたって 5152m ² の調査を行なった結果、17 世紀～19 世紀の武家屋敷を区画する柱列や溝跡、武家屋敷に伴う池や石敷遺構等とともに、陶磁器を中心とした大量の遺物が出土した。 川内 A 遺跡は、広瀬川によって形成された河岸段丘上に立地する遺跡である。平成 20・21 年度の 2 カ年にわたって調査を行なった結果、縄文土器、近世・近代陶磁器等が出土した。整地層や遺構は検出されなかったが、平成 21 年度の調査では沢跡を検出した。						

仙台市文化財調査報告書 第402集

仙台城跡ほか 仙台市高速鉄道東西線関係遺跡発掘調査報告書VII

2012年3月

発行 仙台市教育委員会
宮城県仙台市青葉区二日町1番1号
文化財課022(214)8839

印刷 今野印刷株式会社
宮城県仙台市若林区六丁の目西町2-10
022(288)6123